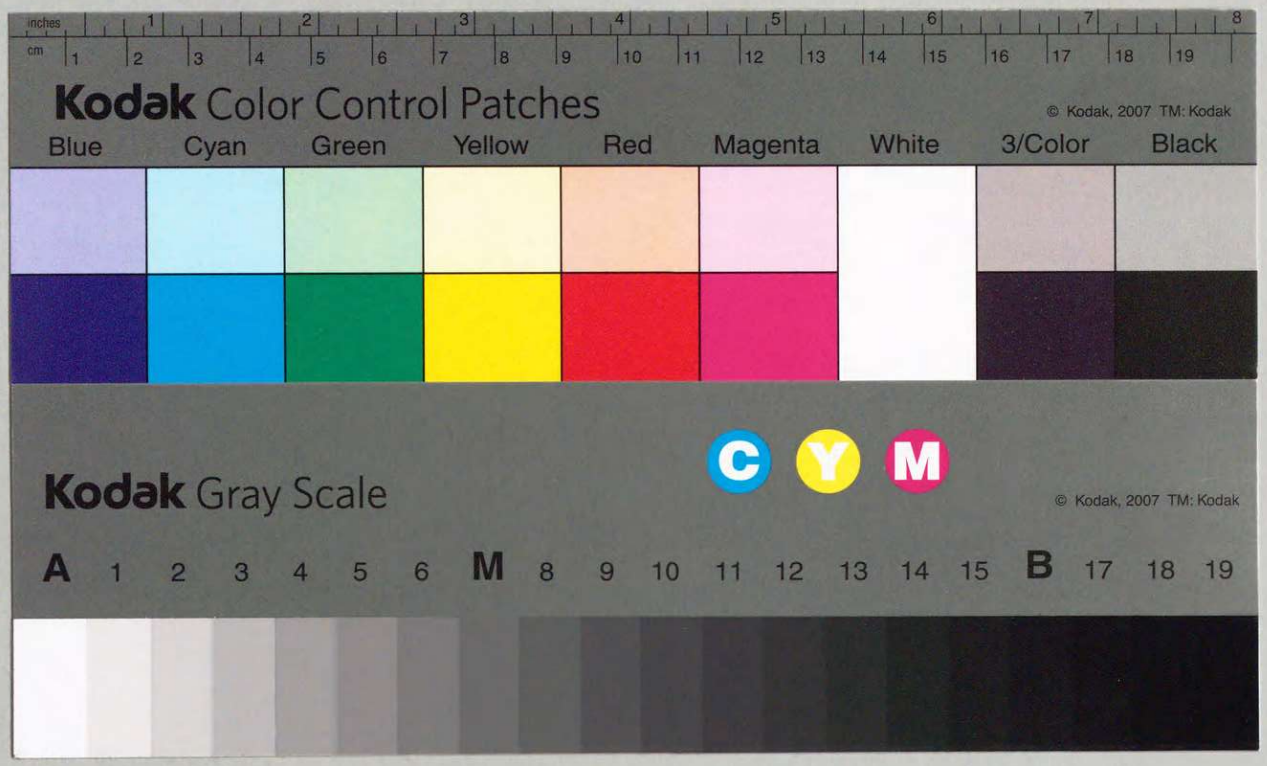
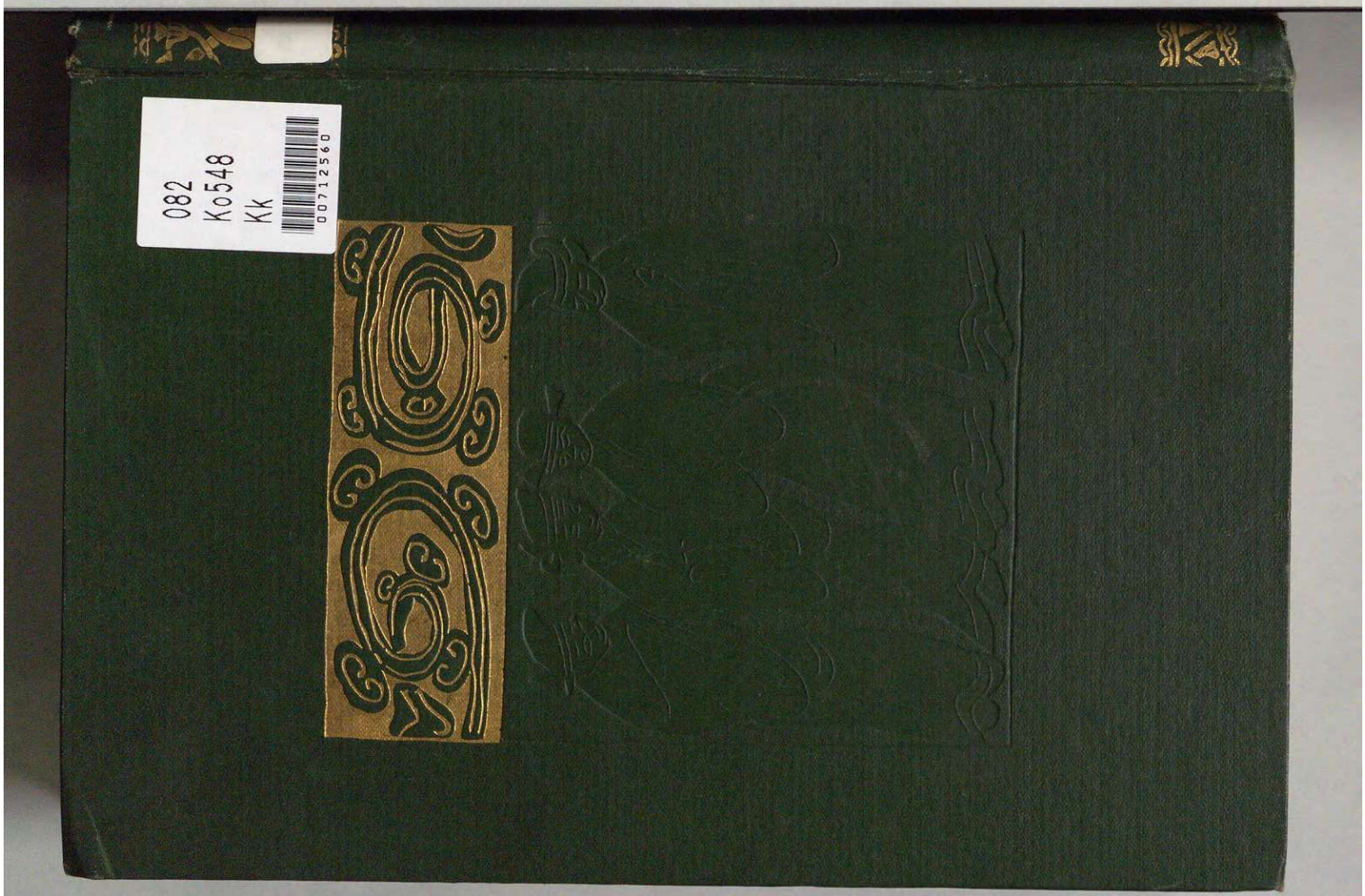
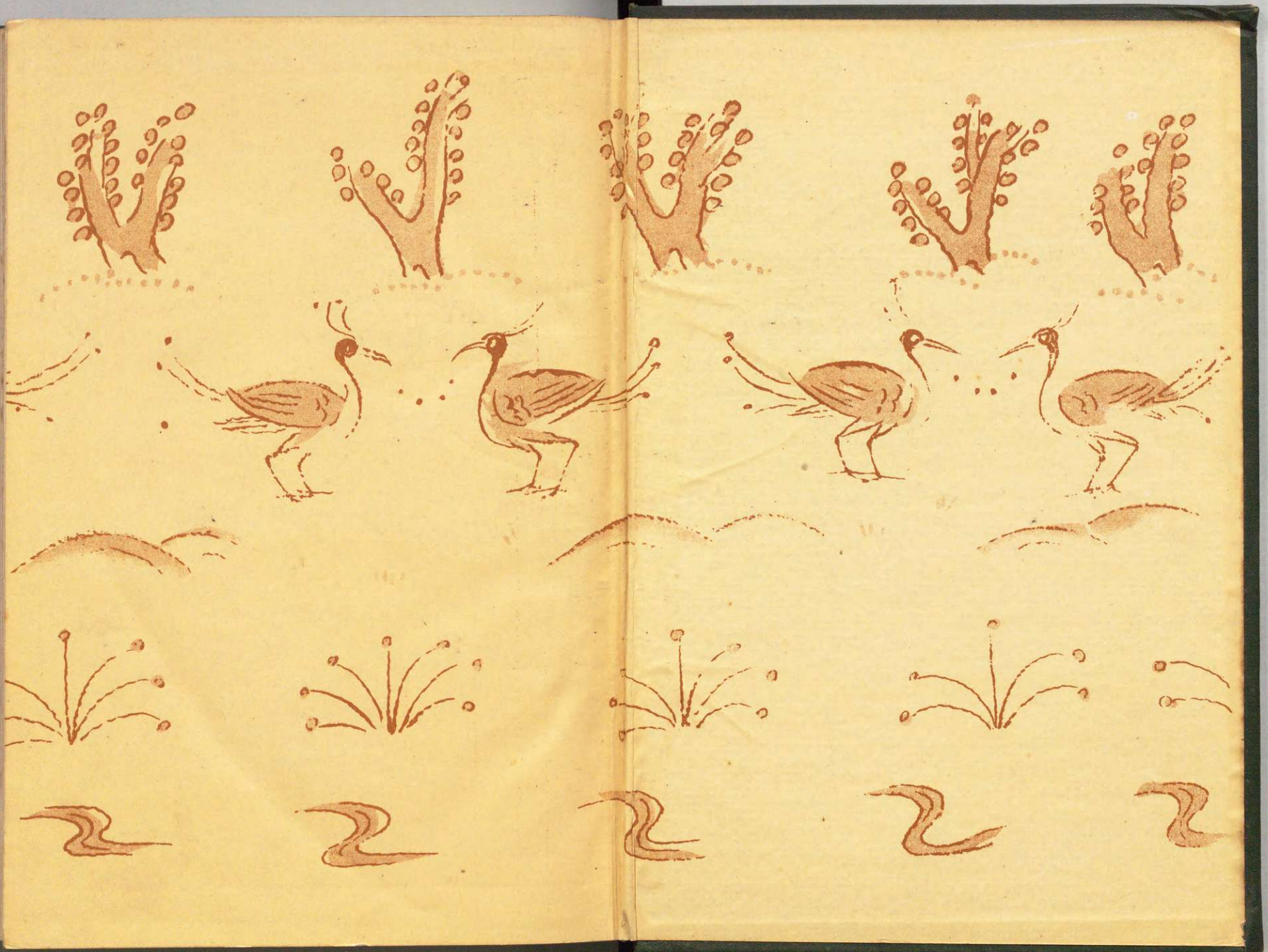

inches
cm
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
Kodak Gray Scale
C
Y
M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19


082
Ko548
Kk
00712560



國譯漢文大成

文學部
第六卷

三體詩

國譯漢文大成

文學部
第六卷

三體詩

082
K0548
Kk

國立國會
41.11.28
圖書館藏書

712560

例言

一三體詩は宋の周弼の選に係る、而して元に至り釋天隱之を注し、更に元の裴庾之を增注し以て四方に流行せしものなり、我が邦に傳來せしは確乎たる時代を知る能はざるも五山の禪人が入元の際攜へ歸りしものならんと想像するなり、或は云ふ妙喜庵の中巖和尙が將來なりと、

一周弼字は伯弜、汝陽(湖北省荊門州遠安縣)の人、嘉定の進士、墨竹を善くし、其の詩端平集十二卷ありと云ふ、

一原本、裴庾季昌と方回の序文あり、其の詩を論ずる共に肉眼の見にして未だ天眼を開かず、矧や法眼、矧や慧眼をや、此に錄して以て論ぜざる所以なり、

一此の選、人に於て百六十七人、詩に於て七絕百七十四首、七律百十首、五律二百九首、通計四百九十三首とす、所謂唐に興りて唐以前に無き所の法、冠らすに唐賢を以てする所以なり、

一詩人唐に於て初盛中晚の區別を立つ、禪を以て詩を論ずる者は曰く盛唐の詩は第一義諦なり、中唐の詩は第二義諦なり、晚唐の詩は則ち聲聞辟支果なり、善哉是の論や、彼に於て馮鈍吟、我

に於て孝經樓、盛んに反駁を加ふるも、加ふるもの本來辟支なり聲聞なり、何ぞ第一義諦を知るを得ん、然らば周朔は如何、是の人元第一義諦を知る、知ると雖も、中晩唐以下を多く選んで齊唐を取ること寥寥たり、是れ猶ほ佛陀の頓圓の機類を後にして、鈍根の機類を先きに度せしと一般なり、是の故に此の三體詩を讀む人は、之に熟參して、更に開元天寶に遡らざるべからず、然らずして終生此の境に止まらば唯周朔の罪人なるのみならず、亦斯道の闡提たるなり、

國譯三體詩目次

國譯三體詩原序……一——五
至天隱註周伯弜三體詩序……六——一五
求名公校正咨目……一五——一九
國譯三體詩……一——七四

卷の一

序言……一
七言絶句……五——二四〇

實接……五　虛接……一四五
用事……一九四　前對……二一
後對……二七　拗體……二三五
側體……二三三

巻の二

七言律……二四一―四五八

四　實……二四一　四　虛……二九一

前虛後虛……三三　前實後虛……三九三

結　句……四五六　詠物體……四四五

巻の三

五言律……四五九―七四

四　實……四九　四　虛……五六〇

前虛後實……五七七　前實後虛……七〇三

一　意……七四八　起　句……七七七

結　句……七七五　詠　物……七七一

國譯三體詩原序

詩自三百篇以還。至唐而聲律大備。今人作詩以唐爲法。唐詩蓋數百家。雖不盡預四庫之目。先賢猶慮其繁。欲便後學。乃選爲三體四體。極玄又玄。衆妙二妙。英靈間氣等集。然其用事源委多有未達。因博採簡册所載。參以平昔見聞。訓釋成編。諗諸同志。咸俾入梓以助啓蒙。余尚懼疎舛。或曰朱文公註楚辭未免闕疑。李侍讀注文選。亦或祖述之謬。況其餘者乎。博洽君子庶幾補而正之云。時至大二年重陽日。裴庾季昌書。

詩は三百篇より以還、唐に至つて、聲律大に備れり、今人詩を作るに唐を以て法と爲す、唐詩蓋數百家盡く四庫の目に預からずと雖も、先賢猶其の繁を慮ばかりて、後學に便せんと欲し、乃ち選んで三體此の本四體一卷極

玄一卷 又玄三卷 衆妙三卷 二妙三卷 英靈一卷 間氣三卷等の集を爲す、然れども其の事を用ふること、源委多くは未だ達せざるあり、因て博く簡册の載る所を採つて、參するに平昔の見聞を以てし、訓釋して編を成す、諸を同志に諗げて、咸な梓に入れて以て啓蒙を助けしむ、余尚疎舛ならんことを懼る、或ひと曰く、朱文公の楚辭を註するも、未だ疑を闕くことを免かれず、李侍讀が文選を注せしも、亦祖述の謬りあり、況や其の餘の者乎、博洽の君子庶幾くは補うて之を正せと云ふ、時、至大二年重陽の日裴庾季昌書す、

是れ始めて此の『三體詩』を上梓して天下に流布せしめし、元の季昌の序文とす、是より先き（僅僅五年前なれど高安に住する沙門圓至天隱あり、始めて此の三體詩を注釋す、伯弜が此の集を選してより六十年後とす、而かも此の天隱の注釋たる極めて簡略にして、殆んど無きに均しきもの、是に於て季昌が起ち、是れが增注を著はす、此の增注たる五十步百步の類、到底兒輩をして解せ

しむるの力を有せず、力を有せずと雖も、此の書に於ける忠臣たるの功は沒すべからず、是の時に當り、日本は漢土と往來し、五山の傑僧等爭うて渡海す、其の渡海せし一師が始めて此の書を日本に傳來し、五山の精舍として此の書を藏せざるは無きに至る、紫陽に素隱なる高僧あり、家醜を忘れて此の俗釋を著はす、筆を執つて著せしにはあらず、口授せしものを門人等が筆記して以て一部と爲し、之を諸寺に頒ち、雛鳥をして誦讀せしむ、其の解釋たる詩に就て論ずる所全く無しと雖も、當面の句釋は全く遺憾なしと謂ふ可し、熊谷立閒の『三體詩備考大成』と共に雛鳥には二大恩書と稱して可なり、此の後種種なる注解出で二十有餘部の多きに至る、一一名を茲に擧げず、今隱師が此の季昌の序に就て注する所のものを俗譯して以て其の功を益す顯はさんと欲す、

『唐書藝文志』に云ふ、漢より以來、史官其の姓氏を列して、次第を編す、以て六藝、九種、七略と爲せり、唐の開元中玄宗に至り、始めて四類に分ち經史子集と曰ふ、其の著錄は五萬八千四百六十九篇なり、嗚乎盛んなりと謂ふ可し、註に曰く玄宗兩京（長安と洛陽）に各の書を聚むること四部、甲乙丙丁を以て次と爲し、經史子集の四庫を列せり、其の本正あり副あり、軸帶帙籤、皆色を異にして以て之を分つ、天寶十四載玄宗より祿山の亂あり、書簡全く藏せず、代宗の時

に至り、鄭覃（珣瑜が子宰相となり祭酒を領ず司空を授けらる）進めて曰く、經籍未だ備はらず、祕書閣に詔して搜訪せしむ、是に於て四庫の書復全し、又『景龍文館記』に曰く、馬懷素（字は惟白丹徒の學者）經庫の知たり、沈佺期（字は雲卿、相州内黄の人）は史庫に知たり、武平一（載德の子）は子庫に知たり、薛稷（字は嗣通）は集庫に知たり、通じて四庫の書と曰ふ、私に云く唐に至りて聲律大に備はるとは、『才子傳』（西域の劉氏が著）の一に魏の建安より江左に迄んで、詩律屢ば變ず、沈約、鮑照、庾信、徐陵に至つて音韵を以て相婉に屬對を附すること精微なり、沈佺期、宋之問に及んで又靡麗を加へ、聲病を忌み、句を約にし、篇を準にす、格律を定めて遂に近體を成せり、（五言絶、七言絶、五言律、七言律、此を近體と云ふ）錦繡の文を爲せるが如し、學者宗として尚ぶ、『語』に云く、蘇李前に在り、沈宋肩を比ぶ、所謂唐詩の變體なり、二公（沈と宋となり）より始まる、猶ほ蘇武李陵より始まるが如し、私に云ふ音韵とは音は平仄を謂ふ、韻は韵脚を謂ふ、聲病とは四聲相ひ調はざるを謂ふ、近體とは近代の詩の體裁を謂ふの義なり、即ち唐詩の體を謂ふ、沈約以下は皆盛唐（高祖の武德より玄宗の天寶に至る大凡そ百四五十年間を云ふ）の時の詩人なり、數百家は、盛唐、中唐晚唐の間詩人千家なりと雖も、（肅宗より以後大凡百年間を中唐とし、懿宗より以後大凡百年間を晚唐とす、宋の初めに至るまでを云ふ）世に昭顯する者、凡そ五百家なり、然して『唐才子傳』載する所は凡そ三百餘人なり、故に其の大數を擧げて數百家と曰ふ、盡く四庫の目に預からずとは、四庫の名目中に入らざる者を謂ふ、帙籤色を異にすと

は、『藝文志』に甲部の經は紅牙籤、乙部の史は綠牙籤、丙部の子は碧牙籤、丁部の集は白牙籤なり、『三體詩』は周弼（宋人なり）が選する所、『四體集』『極玄集』各の一卷、三十三家の詩を集む、姚合（唐人なり）が選する所、『又玄集』三卷詩三百首、韋莊（唐人なり）が選する所、『衆妙集』『二妙集』『英靈集』殷璠（唐人なり）が選する所、『英靈集』は盛唐の詩なり、五言を詳にし、七言を略す、律絶に至つては僅かに一二を存するのみ、『間氣集』二卷は高適（唐人なり）が選する所、此れ等の集に就て用事の源委、即ち事の始末、多く達せず、余が訓釋も或は疎舛即ち差錯相ひ背くあらん、朱文公字は元晦、晚年に紫陽山に隱れて雲谷老人と號す、謚して文公と曰ふ、此の朱文公が楚辭に就て注を著はす、猶ほ疑問の點あり、李善が如き『文選』の注に一生の心血を灑ぎし人も、亦謬誤あるを免れず、余が寡陋完全を期せずとなり、至大二年は武宗の世、以上季昌の序丈に就ての略解なり、只恠しむ天隱の序文を未だ見ざることを、次ぎに方回の序文を擧げ以て此の書の由來する所を知らしめん、

至天隱註周伯弜三體詩序

子曰、詩三百、一言以蔽之、曰思無邪、此詩之體也、又曰、小子何莫學夫詩、可以興、可以觀、可以羣、可以怨、邇之事父、遠之事君、多識於鳥獸草木之名、此詩之用也、聖人之論詩如此、後世之論詩不容易矣、後世之學詩者、捨此而他求、可乎、近世、永嘉葉正則水心、倡爲晩唐體之說、於是四靈詩、江湖宗之、而宋亦晩矣、聖人之論詩不暇講矣、而漢、魏、晉以來、河梁、栢梁、曹、劉、陶、謝俱廢矣、又有所謂汶陽周伯弜三體法者、專爲四韻、五七言小律詩設、而古之所謂詩、益付之鴻荒艸昧之外矣、其說以爲有一詩之法、有一句之法、有一字之法、止於此三法、而江湖無詩人矣、唐詩、前以李杜、後以韓柳爲最、姚合而下、君子不取焉、宋詩、則歐、梅、黃、陳爲第一、渡

江以後、放翁、石湖諸賢詩、皆當深玩熟觀體認變化、雖然、以吾朱文公之學而較之、則又有向上工夫、而文公詩未易可窺測者也、近高安沙門至天隱、乃大魁姚公勉之猶子、聰達博贍禪熟、文熟詩熟、又從而注伯弜所集之詩、一山魁上人、回之方外交也、將磧砂南峯表公之命俾回爲序以弁其端云、紫陽山虛叟方回序。

子の曰く詩は三百、一言以て之を蔽へば曰く思無邪と、此れ詩の體なり、又曰く小子何ぞ夫の詩を學ぶこと莫きや、以て興しつ可し、以て觀つ可し、以て羣しつ可し、以て怨みつ可し、邇くは父に事へ、遠くは君に事ふ、多く鳥獸艸木の名を識る、此れ詩の用なり、聖人の詩を論ずること此の如し、後世の詩を論ずること容易ならず、後世の詩を學ぶ者、此れを捨てて他に求めて可ならんや、近世永嘉の葉正則水心、倡なつて晩唐體の說を爲す、是に於て四靈の詩、江湖之を宗とし、宋も亦晩なり、聖人の詩を論ずるこ

と講ずるに暇あらず、而して漢魏晉より以來、河梁、柏梁、曹、劉、陶、謝、俱に廢しぬ、又所謂汶陽の周伯弼が三體法と云ふものあり、專ら四韻五七言小律詩の爲めにして設けたり、而して所謂詩は益す之を鴻荒艸昧の外に付す、其の說に以爲らく、一詩の法あり、一句の法あり、一字の法あり、此の三法に止まる、而して江湖に詩人無し、唐の詩、前に李杜を以てし、後に韓柳を以て最と爲す、姚合より下、君子は取らず、宋の詩は則ち歐、梅、黃、陳を第一と爲す、渡江以後、放翁、石湖諸賢の詩は皆當に深く玩び熟ら觀て變化を體認すべし、然りと雖も、吾が朱文公の學を以て之に較ぶれば、則ち又向上の工夫あり、而して文公の詩は未だ易く窺ひ測るべからず、近ごろ高安の沙門至天隱は乃ち大魁姚公勉が猶子なり、聰達博贍にして禪熟し文熟し詩熟せり、又從つて伯弼が所集の詩を注す、一山魁上人は回が方外の交なり、積砂南峯の表公が命を將て、回をして序を爲り

以て其の端に弁むらしむ、紫陽山の虛叟方回序す、

孔子の曰く詩は三百篇、其の三百の篇に就て之を評すれば、思無邪の一言に盡きたるなり、孔子は今日傳はる『詩經』に於て此の語を發したる者なるが、後世に於て發達したる詩、所謂詩と名の付くべきものは、思無邪の義を離るる能はざるなり、詩を以て邪を去そけ、正に歸せしむ、詩を以て政治を爲すなり、詩を以て教化と爲すなり、人の邪と爲り、正と爲り、曲と爲り、直と爲り、皆性情に本づかざるは無し、其の性情をして之を柔し、之を優せしむれば、人は邪と爲らず、又曲と爲らず、性情の優柔を失するが故に邪曲の道に入り、小にしては一身、大にしては國家を誤るに至る、孔子は能く之を知る、是を以て詩の教を說て以て人を正道に歸せしめんとす、故を以て詩を學ぶ者は必ず『詩經』三百五篇を窺はざるべからず、小子何ぞ夫の詩を學ぶ莫きや、夫の詩卽ち『詩經』の詩を學ばずして、下降せし詩を學ぶ者多きは何ぞ、虛叟の嘆息を發する所以なり、以て興し、以て觀、以て羣、以て怨、悉く詩經に本義を於きて言ふ、興は譬喩を以て人を正道に導くなり、觀は諸國の風俗の高下を觀て以て感憤すべきなり、羣は人と人と正に羣するなり、鳥獸の羣は眞の羣の意義なきもの、人の羣を以て始めて以て羣の意義を爲す、怨は邪政を怨刺するなり、怨刺するに之を言ふ者罪なく、聞く者以て戒しむるに足

る、邇きは父に事ふる道、遠きは君に事ふるの道、說て悉く詩經に在り、蓼莪凱風の詩、是れ親に事ふる道を歌ひしものなり、大小の雅、周頌魯頌は是れ君臣の道を歌ひしものなり、關雎鵲巢、晨風鷺羽、是れ鳥の名を知るなり、麟趾匪狐、虺隤豺虎、是れ獸の名を知るなり、有臺白華、萇楚芄蘭是れ艸の名を知るなり、有梅常棣、其檉其灌、是れ木の名を知るなり、詩に於て此の體と此の用との功德は頗る偉大とす、詩經を學ばずして後世の詩を學ぶは抑も淺しと爲す、詩を說く者必ず聖人に依らざるべからず、後世の詩を論ずること容易ならず、後世とは素隱解す暗に元代の詩家を指すと、然り、此を捨てて他に求めて可ならんやを解して此とは唐の詩法を指すと、唐にはあらす、詩經を捨てて可ならんやと云ふに在り、素隱誤つて方囘が唐詩法を捨てて、他の法度を求めば何の可かあらんと云ふ、雛鳥を迷はしむるの罪大なり、近世永嘉の葉水心は字は正則、達道の人、倡は卽ち本心にあらずして、晩唐の詩を可なりと唱ふ、一智者之を唱へて、衆愚忽ち之に和す、是に於て四靈たる者、水心の後塵を拜して起ち、以て『毛詩』は論勿し、盛中唐に至るまでも廢して、徒らに輕薄俗陋を極めたる晩唐を喜ぶに至る、江湖卽ち天下の愚人、多く之を宗とするを見る、四靈とは何ぞ、永嘉の徐照、字は靈暉、永嘉の徐璣字は靈瑞、永嘉の翁卷字は靈舒、淸苑の越秀字は靈芝是れなり、而して宋も亦晩れぬ、宋

の起るや汴に都す、是れを北宋と言ふ、高宗に至り江を渡つて浙に都す、是れを南宋と言ふ、寧宗理宗の世に至り國將に傾むかんとし、詩も亦墮落するに至る、晩唐と晩宋は共に是れ夕陽の光輝あるは力强からざるが如し、而して此の晩唐、此の晩宋の詩たる、唯陋俗の言を輕率に之を出し、毫も世敎に補ひ無し、世敎に補ひ無き詩を以て本領と心得る者、何ぞ聖人の詩卽ち三百の遺篇を講ぜんや、暇無きに非ざるなり、講ずるを欲せざるなり、僅に朱文公一人ありて以て正道を擎げるのみ、而して漢、而して魏、而して晉、詩經と共に之を捨てて顧みず、漢には李陵の如きあり、蘇武の如きあり、是れ河梁武帝の如きあり、是れ栢梁魏には曹操の如きあり、曹子建の如きあり、劉公幹の如きあり、而して晉には、陶淵明の如きあり、謝靈運の如きあり、或は雄渾、或は高雅、或は閒遠、或は沈痛、或は冲澹、或は豪放、或は淸奇、或は曠達、或は委曲、或は自然、漢より晉に至るの間は所謂天を動かし、鬼を感じ、邪を去て、正に就くの詩は在在拾ふべし、然るに捨てて顧みず、宋の愈よ末に至り、周伯弱出で、三體の詩法を設けて、戶誦し家讀し、是に於てか古の所謂詩は、之を鴻荒草昧の外に付す、虛叟の慨する所以何ぞや、『揚子湯問篇』に鴻荒の世は聖人之を惡めり、何故に惡むと言へば、其の禽獸と別なきを以てなり、草昧とは何ぞ、『易經屯の卦の彖に曰く天の造すこと草昧、侯を建るに宜し寧からず、

屯とは天地始を造るの時、造物の始めなり、冥昧に始まる、之を要するに虛叟の意、今の詩を學ぶ者、古の詩を以て全く之を度外視すると言ふに在り、素隱虛叟の意を測りて曰ふ古の詩の近朴にして鄙野なるを以て、古人の詩を抑へて唐詩の體を揚げるなりと、隱公の蒙昧か何ぞ誤謬の甚しきや、唐詩を揚げたるにはあらず、古詩を讀まざる者を抑へたるなり、全く顚倒して此の序を注するは人を誤らすの罪尤も大なり、周の說に一句の法五言なり七言なりあり、一詩の法あり 一律なり絕なり 一字の法あり、自と用ふべき處へ空しくと用ふ 此の三法の外唐人は作らずと爲す、前は唯李太白と杜子美、後は唯韓昌黎と柳子厚とのみ、姚合なり下は君子の取らざる所、虛叟の此の言にても唐詩を揚げしにあらざる事明白なり、姚合は元和の進士にて大中間に沒したる人なれば、中唐に屬して、猶晩唐ならず、而かも晩唐の部に屬して取らずと貶す、而して宋の詩は歐陽永叔と梅堯臣と黃山谷と陳后山との四家を以て第一と爲す、其の餘の東坡ですら取らず、況んや四靈輩をや、伯弜は四靈を信ずる者なり、虛叟は之を排する者なり、其の間逕庭あること知るべし、渡江以後とは何ぞ、宋の孝宗が胡人に逐はれ汴より江を渡り南來して杭に居る、之を渡江と云ふ、又南渡と云ふ、其の南渡後に出でし詩人、少からずと雖も、大家と稱すべきは陸放翁と范石湖となり、陸游字は夢觀、放翁と號す、晚年に渭南伯に封ぜらる、故

に陸渭南と敬稱する、又劍南と云ふ、其の詩文集は二十五卷あり、詩萬首を超ふ、紀行に『入蜀記』あり、紀行文の最も佳なるもの、范成大、字は至能、石湖居士と號す、詩文共に淸逸贍麗自ら一家を成す、石湖居士集百六十卷あり、虛叟は以上の歐梅黃陳陸范の六家を稱して諸賢と言ひ、而して此の六家の詩は兒輩をして熟讀玩味せしめよと云ふ、而して朱文公を加ふるに向上の工夫ありと云ふ、窺ひ測るべからずと云ふ、朱文公は道を以て自任し、他の詩人とは同日に見るべからずと爲すに在り、蓋し其の詩も他六家の下には置かざるなり、而して最後に正しく此の集に關係深き天隱の事を叙す、天隱圓至禪師は薬山に住す、仰山雪巖欽禪師の法嗣とす、姚公勉は雪坡と號す、瑞陽の人、胡中文、劉元高、黃夢炎と錦江の四俊と稱せらる、天隱は其の弟の子なり、此の僧禪文共に熟して、凡僧の及ぶ所にあらず、虛叟が方外の友に一山魁上人あり、磧沙の遠公の命を以て、虛叟に此の集の序を請ひ、以て上梓せしもの、此の序を作る意大畧上の如し、素隱の如く解する者は全く虛叟の知己にあらず、元末明初に瞿宗吉出づ、瞿は『咏物詩』を著はし名を馳せたる人、其の著はす所の『歸田詩話』三卷讀むべきもの多し、上卷の一に此の序文を載せ左の論あり、

按ずるに此の序議論甚だ正、識見甚だ廣し、而かも周伯弜集むる所の三體詩に於て、深く不

滿の意を寓す、書坊刻する所、皆載せず、獨裴季昌の序を取る、近ごろ唐孟高が補寫せる三體詩一帙を見る、此の序を卷首に書す、故に此に全錄して、吟事に篤き者と共に詳かに之に參せん、

明の李賓之は『麓堂詩話』に於て左の言を爲す、

詩を選する誠に難し、必ず識以て諸家を兼るに足る者、乃ち能く諸家を選ぶ、識以て一代を兼るに足る者、乃ち能く一代を選ぶ、一代數人ならず、一人數篇ならず、而して一人を以て之を選ばんと欲す、亦難からずや、唐詩を選ぶ者、唯楊士宏が『唐音』庶幾し、次は則ち周伯弜が三體、但其の分體細碎に過ぎ而して二書皆必ず選ばざるものあり、趙章泉が絕句、少と雖も精『鼓吹』の若きは、多く晩唐卑陋を以てする者を格に入ると爲す、吾は取る無し、鼓吹を罵り、此の三體詩を罵らず、而かも此を軒げて、彼を輕したるにはあらず、一を擧ぐれば、一は自ら倒れんが爲めのみ、周弼を軒げたりと云ふ論者は昧なり、又明の都穆の『南濠詩話』に左の語あり、

長洲陳湖の磧砂寺、元初に僧魁天紀なる者あり之に居る魁高安の僧圓至と友とし善、至嘗て周伯弜選する所の『三體詩』を注す、魁其の資を割き、刻して寺中に寘く、方萬里特に序を

爲る、是に由て『三體詩』盛んに人間に傳ふ、吳人磧砂詩と稱するもの是れなり、此れ等の文を以て畧〻此の書の大體を知るべし、選ぶ所の周弼人品が卑きにあらず、其の識の高からざるに由るのみ、周弼が詩を端平集と云ふ、十二卷あるも日本へは傳來せず、其の詩の如何は評する能はざるも、晩唐に於て特に許丁卯を推賞したりと言へば、其の亦丁卯に似たるものあらん、又此の書が釋氏に依て傳來せし事は不思議と言はざるを得ず、釋氏注を書し、釋氏資を助け、而して日本へは釋氏傳來す、余今釋氏として此の國譯を爲す、佛陀が所謂因緣會遇なるものなるべし、次ぎに季昌が名公に校正を求むる文、闕如する能はず、以て原文と國譯とを載せ其の志を見ん、

求名公校正咨目

庚竊謂文藪昭代之英華昌符國運理探先賢之隱祕學本家傳是固儒者之當究心誠體　聖主之所加意蓋美刺形於歌咏政化有關然訓釋泝其淵源刑法無禁自幼至老之所素願雖愚不肖之可與知念唐年幾三百之多仙李玆謝仰詩宗垂諸什之富

汗竹尙香。引レ物連レ類之難レ究。積レ日成レ歲之易レ久。深虞二坐レ井之見一。謾興二測レ海之謀一。臺卿七篇之解甚明。尙慮二遺闕一。以需二改正一。晦翁四書之注已備。猶設二或問一。以辨二疑訛一。予復何能敢自爲レ是。迂二重貢於他境一。併力堪レ扶。示二宿恙於通衢一。良方乃得。用求二王公大人之警欵一。寧惜二耆舊老成之樞趨一。倘臭味式契二於芝蘭一。庶采掇不レ遺二於葑菲一。如レ曰胥蟠二國子監一。可レ讀二工部集一。茲惟難哉。就使眼空二天下書一。始答韓公策。蓋亦寡矣。顧二責恕輕重之角立一。致二毀譽榮辱之畦分一。覆瓿誣二陸之譏一。洛陽愈增二於高價一。凌雲託二九重之薦一。司馬爰慊二於超遷一。幸二大道之唯公一。喜二微言之不レ泯。行吟向レ曙。思レ獻二天子之尊一。佇俟觀レ風。願陳二民俗之厚一。拳拳尺素。耿耿丹心。

庚竊かに謂ふ、文は昭代の英華を藹す、昌は國運に符ふ、理は先賢の隱祕を探る、學は家傳に本づく、是れ固に儒者の當に心を究むべく、誠に體す

聖主の意を加ふる所、蓋し美刺は歌詠に形る、政化關するあり、然して訓釋は其の淵源に泝のぼる、刑法に禁なし、幼より老に至るまで素より願ふ所、愚不肖と雖も與に知る可し、唐の年三百の多きに幾きを念ふ、仙李茲に謝す、詩宗の諸什の富を垂るるを仰ぐ、汗竹尙香ばし、物を引て類を連ぬるの究め難き、日を積み歲を成すの久しかり易し、深く井に坐するの見を虞れ、謾に海を測るの謀を興す、臺卿七篇の解甚だ明なり、尙遺闕を慮んばかり、以て改正を需む、晦翁四書の注已に備はる、猶或問を設け、以て疑訛を辨ず、予復何ぞ能く、敢て自から是と爲ん、重貢を他境に迂す、力を併せて扶くるに堪へたり、宿恙を通衢に示す、良方乃ち得たり、用て王公大人の警欵を求む、寧ろ耆舊老成の樞趨を惜まんや、倘し臭味式て芝蘭に契はば、庶くは采掇するに葑菲を遺さじ、胥に國子監を蟠にして、工部集を讀む可しと曰ふが如きは、茲れ惟れ難き哉、就使眼に天下の書を空し

くし、始めて韓公策に答へば、蓋し亦寡なし、責恕輕重の角立を顧み、毀譽榮辱の畦分を致す、覆瓿二陸の譏りを誣ふ、洛陽は愈よ高價を增す、凌雲九重の薦に託す、司馬奚ぞ超遷を慊はん、大道の唯公ならんことを幸とし、微言の泯びざるを喜ぶ、行吟曝に向ひ、天子の尊に獻ぜんと思ふ、佇俟風を觀て、民俗の厚きを陳べんと願ふ、拳拳たる尺素、耿耿たる丹心、

季昌三體詩を注し了り、此の咨目を以て名公大人に校正を乞ひしものなり、咨は問、目は條目、今の世は良とに文明にて儒者は儒者として完全に道を修むべき時なり、而して其の文化を助くるは最も詩に在りと爲し、不佞は幼より詩に志しを抱く、而かも仙李唐は李氏老子の後と云ふ仙李は卽ち唐室なり も謝亡なし詩宗も已に去ると雖も、尙其の集あり以て學ぶ可し、而かも不佞は臺卿の才なく、晦翁の學なし、之に加ふるに生來多病、健人の如くならず、是を以て名公の門下に趨拜する能はず、幸に名公は芝蘭の如き臭味を已に具し玉ふ、我が葑菲の如き惡艸も捨て玉はずして高見を垂れよ、晉の陸機陸雲の二兄弟は『三都賦』を作る、人の之を譏るあり、而かも洛陽の紙價は益す高し、覆瓿は覆醬なり『三都賦』を指す 司馬相如は『大人賦』を作りて、等を超えて遷りし事あり、我二陸相如にあらず

と雖も、亦此の類のもの無しとせず、米を賣る人、米を水に濕ほし、晴日に向うて之を曝らし、以て巨利を占む、我は行吟、乃ち辛苦推敲にあらず途上に於て注したる此の拙著も、天子に獻せんと思ふなり、尺素を捧持し、寸丹を表して毫も誣むく所なし、諸公幸に是正に容なる勿れとの意、

國譯三體詩

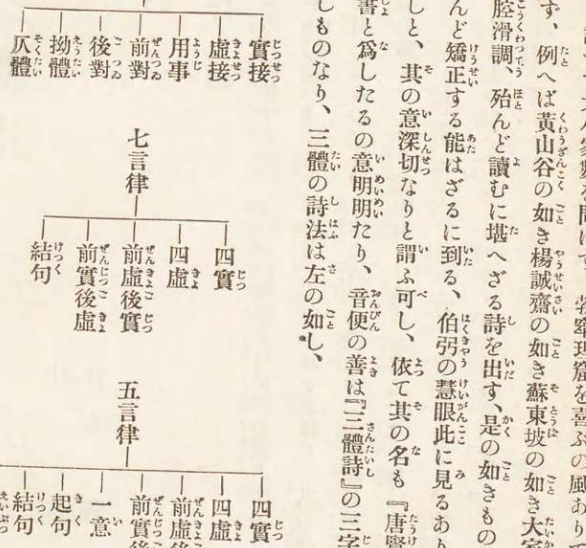
宋　周弼伯弜著
日本　釋清潭譯並講

卷の一

序言

此の三體詩は宋の淳祐十年日本後深草天皇建長二年に周弼字は伯弜の選ぶ所のもの、是より後六十年を經て元の至大二年日本花園天皇延慶二年に高安の釋圓至天隱が注を著はし、其の友東嘉の裴庾季昌が增注を著はし以て世に出ししものなり、日本の傳來は建仁寺の中巖圓月が入元して携へ還りしより、禪家宿老の提唱と爲り、熊谷立閒の如きは備考大成二十卷を著はし南禪和尙は和語俗談十二卷を著はすに至る、是の故に釋家に於て盛んに之を用ひたるなり、物徂徠は李于鱗の唐詩選を盛行させしが爲め特に此の本を貶して伯弜は一無名子書賈の輩と詐稱するに至る、此の如き所より儒流は多く唐詩選、縮流は多く三體詩を講じたるなり、三體とは何ぞ、五言律と七言律と七言絕となり、伯弜が宋の世に生れて、宋詩を選ばずして唐詩を選ぶは深く考ふる所あるに由る、宋

の世は南北を論ぜず大小家數を問はず、勃窣理窟を喜ぶの風ありて、詩の本義たる溫藉典雅は全く認め得ず、例へば黃山谷の如き楊誠齋の如き蘇東坡の如き大家を以てしても、動もすれば俗語俚語油腔滑調、殆んど讀むに堪へざる詩を出す、是の如きものを以て法とせんか、其の弊の及ぶ所、殆んど矯正する能はざるに到る、伯弱の慧眼此に見るあり、此の弊を救ふには唐詩に及く者は無しと、其の意深切なりと謂ふ可し、依て其の名も『唐賢三體詩家法』と稱す、人家子弟の教科書と爲したるの意明明たり、音便の善は『三體詩』の三字にあるを以て普通此の略稱が行なはれしものなり、三體の詩法は左の如し、



此の如くに分體したるは卽ち周弼の發明にして、前人の未だ曾て言はざる所、明の李東陽は其の分類の細碎に過ぐると云うて之を誹る、然りと雖も此の如き法と合致すとなれば何ぞ亦誹るに及ばん、蓋し唐賢が詩を賦する際に及んで、一一此の細目を土臺にして以て一篇を構成せしやと言はば、決して此の如きことはあらざるなり、後人が唐賢の詩を讀めば自然に此の法に成て居ると見れば可なり、詩の本義、元來行雲流水、向ふ所變化自在、或は屈し或は伸び、有法の極、無法に歸すが詩でも畫でも一致する所なり、其の變化自在なる所を以て、一代の作手と稱し、千古の正宗と爲すなり、小兒學語は小兒に在ては必要なり、大人に在ては、豈に必要あらんや、畢竟此の選は小兒學語の爲めにして、大人の爲にあらざるなり、是を以て唐賢三體家法とは言へ、盛唐諸公は取らずして、中唐晚唐の人のみを取れり、唐二十代、二百九十年間、詩人として名を成したる者屈指に遑まあらず、然るに文宗卽ち十四代の天子の開成年中より哀帝卽ち二十代の天子の天祐年間に至る詩人は大家の稱を受る者幾人も無く、詩品の墮落と共に人品の墮落も亦爭はれざる事實とす、今、宋の嚴羽が唐三百年間を四唐に分つ順序を見るに、

初唐　高祖の武德年中より玄宗の開元年中に至る大凡百二十年間
盛唐　玄宗の開元より代宗の大曆中に至る大凡三十年間

中唐　代宗の大曆中より敬宗の寶曆中に至る大凡五十年間
晩唐　文宗の開成より哀帝の天祐即ち五季に至る大凡九十年間

此の中初盛を一とし、盛中晩の三唐と稱する事もあり、詩の氣格風調に異なりある所より區別せし名稱なれば、詩の歷史上此の名あり、普通の歷史に於ては三唐の區別は用ゐざるなり、嚴羽は其の時代即ち宋の世、詩風の墮落せるを救はんと欲して、此の三唐の名目の下に論壇を築きし者、是の故に嚴羽に讚する者と否とする者との二派を生ずるに至る、明の胡元瑞、清の王漁洋、沈歸愚は贊者の一人なり、明末の錢牧齋、清初の馮定遠は反對者の一人なり、我邦にも贊否兩派あり、徂徠派の人人は贊にて、近時山本北山の一派は否とするなり、余を以て之を視れば、贊者の論は頗る明白にして、否者の說は頗る愚昧なるものなり、論よりも證據として其の時代の詩を把て之を讀めば直ちに了解すべきなり、了解する力無くして喃喃する狂者にあらずんば鈍徒なり、是の如く余の立場として、此の「三體唐詩」に對すれば、周弼も眼孔甚だ明かなる人なり、而かも此の選盛唐を主とせず中晩唐を主としたる所以は全く大人先生の爲ならず、幼童をして其の詩法の正を失はざらしめんが爲めなり、讀者亦此の意して可なり。

七言絕句

實接

伯弼曰く絕句の法は大抵第三句を以て主と爲す、首尾率直にして婉曲なきものは此れ異時（宋元と唐に及ばざる所以なり、其の法は唯久しく其の傳を失するのみならず、人も亦能く之を知ると鮮し、實事を以て意を寓して接するときは轉換力あり斷ゆるが若くにして接ぐ、外振起して、內平妥に失せず前後相應ず、四句に止まると雖も而かも不盡の意を涵蓄す、此れ其の略のみ、詳らかにして之を求め玩味すること久うして自から當に得る所あるべし。

實接とは第三句即ち轉句を云ふ、所謂一篇の主體となるものなり、有形なる者、有解なる者總て之を實と云ふ、無形なる者、無解なる者總て之を虛と云ふ、故に詩法の上に實を景と稱し、虛を情と稱す、其の景情を具備して、口に誦し易きものを以て詩の根本義とす、此の二者の運用を工にする者を以て大家と呼び作家と稱す、其の微細なる所に至りては詩其のものの條下に於て辨ずべし、反覆する者は自然に神解するに難からず、茲に一言叙して此の書を讀む者の心得と爲すとなり、祇南海曰く「三體詩の一書は全く境の實と趣の虛とをつり合せ

て作る法を示したる書なり、人此の書の主意をばそこそこにして、詩の意を穿鑿し半夜の鐘にばかりも多説紛紛たるは甚だしき心得ちがひなり、本書唯、前虚後實、前實後虚等の法を立る爲め其の格に合たる詩をのみ載せたり、故に七言の内にはことの外宜しからざる詩もあり」初學の爲め大に益ある言とす、記して以て參考に資する所以、

華清宮　　杜常

行盡江南數十程　曉風殘月入二華清一
朝元閣上西風急　都入二長楊一作二雨聲一

行き盡す江南數十程、曉風殘月華清に入る、朝元閣上西風急なり、都て長楊に入て雨聲を作す、

【略傳】杜常は新舊の『二唐書』『唐詩紀事』『唐才子傳』悉く傳無し、『談圃』『西清詩話』『詩藪』『升庵詩話』『洪景盧隨筆』『居易錄』悉く宋人とす、『居易錄』に杜常は北宋の人、華清宮詩、今唐詩多く誤りて之を收む、周弼の誤收すること疑ふべからず、

【句釋】華清宮は唐の太宗第二の建つる所、もと溫泉宮と名く、玄宗唐の第六主が華清宮と改め、年

年冬季に及ぶと楊太眞と共に避寒したる處、陝西省西安府の驪山に在り、行盡江南數十程此の句は傳來に種種あり『焦氏家乘』に一別家山十六程とある、『鐵網珊瑚』に東望家鄉十六程とある、余の見としては今の句が第一なり、然れども事實としては東望が可なり、華清と江南とは相隔たる實に數百程、それを數十程と云うては事實に合ぬ、裴季昌の注に「江南ハ蜀江ノ南ヲ指ス、蜀ヨリ長安ヲ望メバ北ト爲ス蜀ハ南爲リ」とあるが、畢竟江南の字を無理に辯護したるに過ぎず、岑嘉州の詩に行盡江南數千里の句あり、千里を十程と改めしものならん、曉風殘月の句も『楊升庵詩話』には曉星殘月に作る、瞿宗吉の『歸田詩話』には曉乘殘月に作る、二家共に風字を除く、三句の西風を胃すを以ての故ならん、蓋し同字を除く意味の上からとすれば入の字も二字あり、是も一方除かざるべからず、入の字を除かずとすれば、風の字亦除く必要を認めず、依然として曉風殘月の四字動かす可らず、入華清杜が華清の舊址を見んが爲め、曉風殘月に乘じて此に入る、亦側面の解には行盡の七字は玄宗が蜀へ出奔せる事で、曉風の七字は安祿山の兵士が華清に亂入せる事ともある、朝元閣は華清宮裏の一閣、老君が天寶七年に此の閣に降下したと云ふより降聖閣と改めた、唐は李氏なるを以て殊に老子を尊崇し、玄宗は尙更仙術を好んで長生せんと欲したり、而かも其の長生を欲したる人は已に死して今唯閣のみな

り、寂寞荒涼の狀を言ふ、上●●風急上の○字も後人の改めしもの、原作は下○の字なり、西風は秋風、急は急遽、西風の驀進する貌を云ふ、是も正面の解は杜が今日朝元閣下にて西風の急なるを見し實況であるが、側面の解は安祿山や史思明が大軍を進めしに比したものと見る、●都は悉で今見し所の狀態は都てなり、●●入長楊此の長楊宮は秦の始皇が建て、漢の武帝が修理して巡幸の用に備へしもの華清とは地理に於て隔絕するが、長楊は咸陽に在りしなり今玄宗の事を咏ずるに秦皇漢武と並べて共に不死の法を求めしも、共に畫餅と爲りし、然らば此の華清もヤガテは長楊宮の如く跡形も無くなり、所謂作雨聲●●唯雨聲のみ激しく起る寂寞を語るもの但雨聲のみなり、長楊は宮名なれど又楊を多く植ゑたるを以てなり、雨聲の字、是に於て活躍すること知るべし、サテ此に論ずべき事は此の長楊は宮とは關係なく全く楊柳の事と見る、西風が如何に迅速にせよ數百里を隔つる咸陽の朝楊まで行く道理は無く、且宮名を二處に用ふるの愚も名家の爲さざる所、是の故に謂ふ、西風か長楊を吹けば、聞く者は風聲と聞かずして雨聲を聞く如くに覺ゆるを云ふ、從來の訓【雨聲ト作ル○】に作る、今は「雨聲ヲ作ス」と作る、

【評論】此の篇、同字多きを以て古今云云する所なるが、明の都穆の『鐵網珊瑚』の辨頗る要を得たり、曰く歲癸酉に在り、余使事を以て、陝道に至り臨潼を經、驪山の溫泉に浴し石刻を

見る、中に此の詩あり乃ち秦鳳等路提點刑獄公事太常丞杜常云ふ、東望家鄉十六程曉來和月到華淸、朝元閣下西風急、都入長楊作雨聲、若し此の石刻を以て原作とせば是を正とせざるべからず、淸の沈歸愚曰く末二句荒涼の狀を寫す、甚しく解するを求めず、甚しく解するを求むる者は竟に詩を知るものにあらず、

宮詞

王建

金殿當頭紫閣重　仙人掌上玉芙蓉
太平天子朝元日　五色雲車駕六龍

金殿當頭紫閣重なる、仙人掌上玉芙蓉、太平の天子朝元の日、五色の雲車六龍に駕す、

【略傳】王建字は仲初、潁川の人、大曆十年の進士、工に樂府歌行を作る。

【句釋】宮詞は宮禁中の事を詠ず、本集に百首あり、皆以て後人の奉じて奎梁と爲す所なり、●●金殿は天子の坐所、當頭●●は眞正面と云ふ意味、●●紫閣重金殿の周圍に紫彩を以て色どる閣が幾重ぞ、仙人掌の名は漢の武帝より起る、武帝は承露盤を作りて其の盤上に仙人掌を置き、此の仙

人掌に墜し露を取り玉屑に和して之を飲み、長生を求めたるなり、上玉芙蓉玉の盃を稱して玉芙蓉と言ふ、形芙蓉の花なればなり、太平天子は玄宗を云ふ、武后が嚮きに豫言して玄宗を太平天子と云ふ、朝元日は元日を云ふ、『尚書』に元旦を歲朝、月朝、日朝、之を三朝とも三始とも云ふ、紫閣に於て天子が羣臣の拜賀を受るなり、朝元閣は老子を祀る堂、五色雲車五色の雲を以て彩色する所の車、卽ち仙人の乘る車、人間の乘る車にあらず、然るに漢武や玄宗は仙人が不老長生であると云ふ點より之を喜び、宮中の模樣も、衣服の工合も、皆仙人の用ふる所の物に象どりしなり、鴛六龍馬を假りに龍と稱したるなり、仙人は馬より龍の方が適切である所より、今天子の車を是に譬へて出したるものとす、

【評論】此の篇、釋天隱は評して曰く、「玄宗を諷する爲め作る、王者は王者の禮がある、奇器は宮中に入れず、君は奇車に乘らず、況や非禮の器を作り、服食を爲し以て、不死を求め、鬼神の車服に御して以て淫祀するをや」此の說頗る可、野口寧齋は「太平天子の好文字を用て、一番の譏刺を試みたるのみ、明皇の事は建の意中にあらず、」此の說は不可なり、驕奢の天子を諷刺したとあれば、玄宗を諷するより外は無し、漢武の如き過去の天子を諷するなりと云ふ鈍劣の事は曾てあらず、仔細に讀むべし、

吳姬　　薛能

自是三千第一名　內家叢裏獨分明
芙蓉殿上中元日　水拍銀盤弄化生

自から是れ三千第一の名、內家叢裏獨分明、芙蓉殿上中元の日、水銀盤を拍て化生を弄す、

【略傳】薛能字は大拙、汾州の人、會昌六年進士に登る、咸通中嘉州刺史と爲り、又許州に徙る、後工部尙書と爲る、後自屠す。

【句釋】●吳姬は美人の代名詞とす。●吳は國名、周の太伯が始めて住せし地、●姬は周の姓なり、此の吳國の婦人は他國の婦人より美なるを以て、後世、美人を稱するに皆吳姬の名を以てす、廣義に見れば上の如し、蓋し此の詩は狹義の吳姬卽ち宮女を詠じたるなり、自●是「モトヨリコレ」と和訓する、三千●は多數を云ふ、孔門弟子三千、威儀三千、皆大數を意味す、今宮女の多きを云ふ、第一●名●姬なり、今日用ふる一名とは違ふ、內家●は妓女の宣春院に入る者を內人と謂ひ、其の家は敎坊に在る、之を內家人と謂ふ一說內家は天子の宮中を禁內と爲す二說今の內

家は宮中の內人と見るなり、叢裏は多數の中の意義、獨分明第一の名姬であるが故に分明なり、芙蓉殿上は曲江池陝西省四安府の東に在る、西に在るは杏園、北は梨園、共に游宴の處とす、隋の文帝より芙蓉園の名を用ふ、唐の天子も此に據る、中元日七月十五日なり、上元正月十五日 中元七月十五日 下元十月十五日の三元は道敎より出づ、三元共に此の夜を以て太乙星を祀り、燈を點じ明に達す、然るに七月の望は佛敎の盂蘭盆と同時なるが故に混交したままで今日に傳はる、漢土は七月望に道敎は無祀會を修す、佛敎は盂蘭盆會を修す、日本には無祀會は無し、道敎は日本に弘まらざりし爲めなり、劉煦の『舊唐書』に依れは「代宗天子內道場に於て盂蘭盆を修し、飾るに金翠を以てし、費す所、百萬」とあり、水拍銀盤銀製の盤に清水を滿滿と入る、勢ひ拍つこととなる、弄化生蠟を以て嬰兒の形を作り、水中に浮て游戲となす、婦人子に宜しき祥事とする、之を化生と稱す、西域傳來の說とあるが、出典は明白ならず、胎生と濕生と卵生と化生とを佛敎で四生と云ふ、今の化生は佛敎の化生にはあらず、但其の名を假りしのみ、寧齋は「化生は西域の器」と云ふが未詳、

【評論】此の篇、薛能は初め文官に希望ありしも、事志しと違ひ、却て武官と爲りしが故に其の鬱悶を遣る考へにて此の題の詩八首を賦したるもの、例へば女子が少しく姿色あれば、卽ち

君寵を蒙むり、榮華を專らにするを得、然るに我は才に於て拔羣、猶ほ吳姬の三千人中第一なるが如し、而かも我は甚だ榮達せず、自から憫むに堪へたり、其の不平を訴ふるに此の婉曲の言を以てす、到底我邦人の及ぶ所にあらざるなり、以上三首第三句が主意と爲す、句法字法皆相似たる作法を示せるなり、

歸雁

錢起

瀟湘何事等閒回　水碧沙明兩岸苔
二十五絃彈夜月　不勝清怨却飛來

瀟湘より何事ぞ等閒に回る、水碧沙明兩岸の苔、二十五絃夜月に彈ぜば、清怨に勝へずして却て飛來らん、

【略傳】錢起、吳興の人、天寶中進士に擧げらる、考功郎中に終ふ、郎士元と名を齊うす。

【句釋】歸雁此の鳥、性寒地を好む、秋に來りて春歸る、來賓、征禽、客鳥、陽鳥の異名がある、一種の哀音を以て古今の詩人に詠せらる、瀟湘廣東省より出る瀟水と、廣西省より出る湘水が北流して合する所、洞庭湖と爲る、此の合する所から瀟湘と一意に稱したるなり、良とに

雁の棲處に佳き處、然るに何事と雁に向て質問する、等閒回等閒は不用心又は徒らなりと注して平氣に回り去るや、水碧沙明兩岸苔七字瀟湘卽ち洞庭の風景、雁の棲處に宜しきを形容して示す語、二十五絃は卽ち琴なり、『爾雅注疏』に庖犧氏初め五十絃を作り、黃帝素女をして瑟を鼓せしめ、哀み自ら勝へず、之を破りて二十五絃と爲すと、彈は琴を引くなり、夜月は彈琴にも可、雁の往來にも可、不勝清怨は湘君の靈が古の素女の如く、此の二十五絃を彈せば其の音哀切清怨、之を聞くの雁も其の情に勝へずして回らんとはしながらも、却飛來で雁も北方へ飛去を止めて復湘の南、卽ち水碧沙明の處へ來るであらうと、作者が意想を遣る、

【評論】此の篇、盛唐の氣格、整然として千秋の名篇たるに背かず、瀟湘と云ふ巨景を眼前に髣髴せしむるの力、中晩唐諸家に無き所なり、初學宜しく三復すべし、

逢賈島　張籍

僧房逢著款冬花　出寺吟行日已斜
十二街中春雪遍　馬蹄今去入誰家

僧房に逢著す款冬花、寺を出て吟行すれば日已に斜なり、十二の街中春雪遍し、馬蹄今去て誰が家に入ん、

【略傳】張籍字は文昌、和州烏江の人、國子博士と爲る、國子司業に終ふ。

【句釋】●●島此の人は初め無本と云ふ僧なり、韓退之に勸められ歸俗して賈島字は浪仙と稱し、進士、長江主簿、普州司倉參軍、司戶等の官を經、六十五の時牛肉の中毒で死去す、張が途中で之に逢ひ此の詩を作りしなり、僧房は寺のこと、逢著は逢値である、著は麗なり、黏なり、著は要するに逢の字の助語、僧房に寓在する意味、款冬花は款凍、顆冬、鑽凍、菟奚等の異名あり、和名「フキ」形狀良とに寒寂なる所より之を賈島に譬へしもの、出●は島が寺を出て吟行路上且吟じ且行く、日已斜殘日に垂んとす、十二●●中の字頭に作る本あり、京城卽ち長安の街衢の區劃が十二條なり、春雪遍俗人輩や小人共を春雪に譬ふ、長安百萬家此の徒輩が遍きなり、馬●は島の乘る馬、今去入誰家牡丹とか芙蓉とかなれば誰の家へでも入れるだらうが、寒寂なる款冬花なぞ俗人輩の目には映せざるなり、

【評論】此の篇、比體を以て之を出し、其の意は詩人と俗人と相容れざる事を咏じたるもの、人口に膾炙して名篇と爲す所以なり、

江南春　　杜牧

千里鶯啼綠映紅　　水邨山郭酒旗風
南朝四百八十寺　　多少樓臺煙雨中

【略傳】杜牧字は牧之、太和の末、侍御史と爲り、司勳員外郎、中書舍人と爲り、年五十にして卒す、杜甫に別つ爲め小杜と號す、又狂杜醉杜と稱す、樊川の人なるを以て其の集を杜樊川集と云ふ、

【句釋】江南春は杜牧の本集には「江南道中春望」とあり、三字を減じて今の題と爲す、管絃に合する曲名と爲したる故なり、支那で單に「江」と言へば楊子江に限る、水源は同じく青海なるが北帶は黃河に屬し、南帶は楊子江に屬す、宣州へ赴く途中、江南を過ぎて作りしもの、千里は遠方の意味にあらず、處處の意味なり、江南と云ふ茫漠たる題目なるが故に千里と廣大に出す、鶯啼春色を貼するには此の鳥に限る、綠映紅綠は下句の水村に對し、紅は下句の山郭に

對す、「綠水紅花に映ず」と見て可なり、水村山郭は人の地位、前句の景の地位を起す、酒旗風和煦の光景を現出す、春日の道中、人意に可なるを云ふ、南朝は東晉の後、宋、齊、梁、陳の四朝は皆建康に都を定む卽ち今日の江蘇省江寧府なり東晉も南洛陽卽ち今の河南省河南府に據て覇を稱したる魏や周は之を北朝と云ふ、四百八十寺四朝の中、梁陳は最も佛敎に厚くして、梁武の如きは寺を無數に建て、特に同泰寺に幸して衰龍の服を釋て法衣を服し、清淨の生活を爲し八十六を以て崩じた偉天子なり、陳の高祖、文帝、宣帝、後主、皆奉佛の人なるを以て寺も無數に建て、四百八十に止まらず、季昌の說には七百餘寺ありしも侯景の亂後四百八十と爲りしなりとあり、余謂ふ杜牧の意は寺の數を寺籍簿的に擧げたるにはあらず、南朝の二字が二十一畫より出來、四百八十寺の五字が亦二十一畫より成る、依て四百八十寺で南朝の寺と爲るなり、後世作者が工夫せる所を知らず、依樣葫蘆で牧之が苦辛を察する者を見ず、洵とに惜む可し、此の如く解釋して以て第一句の千里も活躍するなり、多少は幾許と同義、樓臺は寺樓梵臺卽ち寺を云ふ、煙雨中俗語の「春ガスミ」の中に在るとなり、

【評論】此の篇、人口に膾炙して、黃口小兒も知る、隨て種種の議論あり、明の楊升菴曰く千里は十里の誤寫なり、千里鶯啼誰人か聽き得ん、千里綠紅に映す、誰人か見るを得ん、若十里

に作らば、鶯啼綠紅の景、村郭樓臺僧寺酒旗皆其の中に在りと、愚說も極まる、漢土の十里は日本の二里未滿なり、題目已に江南と云ふ、彼の大陸的人間が僅かに二里位のものを大袈裟に江南と題する理由なし、千里を處處と意義を解せざるの致す所、終に此の愚說を吐くに至る、亦一說に此の詩は隔句對にて起句と轉句は南朝の盛事を云ひ、承句と結句は牧之が眼前の景を叙すと、是も愚說なり、試みに見よ南朝の盛事には鶯啼き紅は綠に映するも、今日の春は鶯も啼かず、綠は紅に映せずとするか、題目の江南の春に少しも合せず、要するに此の詩は卽景卽目を賦したるのみにて、他意毫髮もあらず、十の字の音、長安語の諶「シン」と訓む、白樂天の紅欄三百九十橋と一樣なり、四百八十寺を南朝と字畫の數より解したるは余の獨斷なるが、此の析字法は古來より有る、來の字が八十八と爲り、來の字が四十八と爲り、分解と結合とは、文字使用上一種の游戲なり、使用法の巧拙に依て雅とも爲り、俗とも爲る、

別李浦之京　　王昌齡

故園今在灞陵西」　江畔逢」君醉不」迷
小弟鄰莊尙漁獵　一封書寄」數行啼」

故園今灞陵の西に在り、江畔君に逢うて醉て迷はず、小弟鄰莊に尙漁獵すらん、一封の書は數行の啼を寄す、

【略傳】王昌齡は京兆の人、字は少伯、龍標の尉と爲るに依て王龍標と云ふ、江寧の丞と爲るに依て、其の集を江寧集と曰ふ、玄宗の開元十五年の進士、祕書郎、汜水尉、江寧丞、龍標尉等の諸官を經て卒す、詩名は高適、王渙之と並稱せらる、

【句釋】李浦は王の友人なり、京は長安、故園王の故園は異說あり、鹽冶の人とも曰ひ、太原の人とも、瑯琊の人とも、江寧の人とも曰ふ、此の詩に依て判ずれば長安の人と定める、而かも證據は外に無し、今在灞陵西灞陵は漢の文帝陵廟の地、陝西省西安府咸寧縣東に在る、王が家は文帝陵の西方に當るものと斷定して可なり、江畔は楊子江畔を言ふ、逢君醉不迷李浦に逢うて其の京に赴く話を聞く、日日忘れざる故園の事なるを以て、醉ふとも迷ふ樣なことは無し東か西か分明に知て居る、小弟は王が自身の弟を云ふ、鄰莊は地名としては湖南省に在るが、其の地名にはあらず、鄰村と見て可なり、尙漁獵無益の事を娛しく思ひ、魚を釣り、兎を獵り、放逸の習に任すこと、小人や愚人の所業を云ふ、弟等は志青雲にあらずして、ツマラヌ事を

爲して居るならん、一封書寄數行啼李浦に托して小弟等に寄する一封書は彼等を誡しむる爲め吾が數行の啼涙が之に入てある、之に包まれてある、

【評論】此の篇、李浦に就ては何の言ふ所無く、唯封書を依頼するのみ、而かも小弟に就ての情は言ふ可らざるものあり、『全唐詩』に王の詩を評して綿密思清と、此の四字では王詩を評し得たりと言はず頗る不足の感あり、蓋し其の不足は古今諸家が補うて餘り有るゆゑ恨むに足らず、七絕に於ての絕倫超群、李太白と盛唐に肩を摩すべし、中唐の李益聊か之に追隨すべし、他は及ぶ者無し、

題崔處士林亭

綠樹重陰蓋四鄰　青苔日厚自無塵
科頭箕踞長松下　白眼看他世上人

綠樹重陰四鄰を蓋ふ、青苔日に厚うして自ら塵無し、科頭箕踞す長松の下、白眼にして看他す世上の人、

【略傳】王維字は摩詰、世に王右丞と稱す、太原山西省太原府の人、開元年、年十九にして進士に登る

種種の官を經て、尚書右丞に進む、詩と畫に於て聖域に入る、人物亦一代の師表たり、王維集十卷あり、

【句釋】●崔は姓名は輿宗、處士は仕官せざる在野の人の稱、未婚の女を處女と云ふが如し、林●亭は小なる家構を云ふ、綠●●鬱密なる林陰、●は覆蓋傘となる、四鄰鄰字は俗人多く隣字に作る、阝が左に居る、邑即ち四井、鄰は「オホザト」に從はざるべからず、俗本多く隣と爲す、厭ふべし、青苔日厚自無塵綠樹上にあり地は青苔を日に厚密にす、夏日林亭の清淨なる狀、科●頭は崔の頭を指す、結髪なり、處士の頭、官吏の頭とは異なる、科は蝌蚪、即ち蛙子を云ふ、其の髪の形、科斗の如くなるを以てなり、箕踞は『史記張耳傳』に、「高祖箕踞●罵」とあるが出典なり、其の狀は兩脚を伸し手を以て膝を按す、箕の貌の如くなるを以てなり、磊落の態度を云ふ、科と箕と頭と踞と對を爲す、長松下は字の如し、白眼音の隱士阮籍が祖先なり、俗徒に對すれば白眼にて之を迎へ、友人に對すれば青眼にて之を迎ふ、處士も亦之を學ぶ、看他世上人從來多く「他ノ世上ノ人ヲ看ル」と訓む、今は「看他ス世上ノ人」と訓む、大典禪師や東條琴臺などの讀方は正しきなり、崔處士其の人を全く阮籍に比したるにはあらざるが、其の人、志を高尚にして俗人等と交はらざるを以て此の

事を用ひしなり、

【評論】 此の篇、清の沈歸愚は評して粗派と云ふ、王右丞としては品格高からざるも、他人に在ては上乘の作なり、維の長は七律に在りて、七絕にあらず、此を以て右丞悉くせりと云ふ者は謬まりなり、

楓橋夜泊

張繼

月落烏啼霜滿天　江楓漁火對愁眠
姑蘇城外寒山寺　夜半鐘聲到客船

月落烏啼て霜天に滿つ、江楓の漁火愁眠に對す、姑蘇城外の寒山寺、夜半の鐘聲客船に到る、

【略傳】 張繼字は懿孫、襄州の人、天寶の進士、官は檢校祠部員外郎、又鎭戎軍軫轄と爲る、

【句釋】 此の詩は字字句句の解釋は何等の興味も無し、全首を一括して提唱するを可とす、此の詩は何人も知る如く種種議論のある詩、容易に解決せず、初學の士は、往往迷はさるる所、宋の歐陽修が夜半は鐘を打つ時にあらずと、宋人一流の議論を吐きしより、東西南北に是と非

との説が湧き來る、宋人が詩の旨趣を沒却して徒らに皮相に拘泥するは慨むべきもので、歐が此の詩を評したるも亦其の一端なり、「詩は情致を重んじ、事實を重んせず」の意は何人にも解し易きが、是れを解せざるが宋人の慨むべき所なり、抑も此の詩は字面の如く正直に解して以て其の旨趣を味ふことを得、一二の起承は、卽ち曉景にて、三四の轉結は卽ち昨夜の景なり、宋人の如く議論するならば、夜半の結句を第一句に移し、月落の起句を第四句に移して見よ、何の支障も無く通ずるなり、其の言ふべきことを前後したるを以て沒分曉漢が彼れ此れと論ずるなり、作者の本意は客と爲て偶ま楓橋に泊したり、而かも一夜熟眠する能はず、ウツラウツラと所謂愁眠して江楓の漁火卽ち漁村の燈火に對しつつ終に月落烏啼の曉天に及んだり、其の熟眠せざる證據には姑蘇城外の寺より響き出したる夜半の鐘聲も聞て知り居ると云ふが大體なり、文字の使用法も亦甚だ分明なり、月字あるを以て夜字あり、對愁眠に對して到客船がある江楓漁に對して姑蘇城が出る、唐賢用意の周到なる察知するに難からず、淸の余紗山なる者云ふ「鐘聲が寒山寺より來る、天已に曉けんとす、張繼猛然として醒む、猶疑うて夜半と爲す」と、不當の説も甚だしい、若し此の説の如くならば、對愁眠の三字は死字と爲る、愚説一顧の價値も有せず、全唐詩を讀む張繼が「再泊楓橋」の詩より、「白髮重ねて來る一夢の中、靑山改めず舊

時の容、烏啼月落江村の寺、枕を欹て猶聽く半夜の鐘」と此の詩を證據として半夜鐘は鐘の名で、撞くのは曉天なりと云ふ論者が出づ、沒分曉漢の一人なり、曾て愁眠中に夜半の鐘を聞きしが、再泊の時も彷彿と之を聽く、依て「猶聽」の二字を下す、唐賢が詩に於る、疎略の如くにして而かも緻密なる驚くべきものあり、宋人や清初の人は細を細に求めて畢竟草間の小蟲が鳴聲のみ、

贈殷亮

戴叔倫

日日河邊見水流　傷春未已復悲秋
山中舊宅無人住　來往風塵共白頭

日日河邊に水流を見る、春を傷むこと未だ已まず復秋を悲しむ、山中の舊宅人の住する無く、風塵に來往して共に白頭、

【略傳】戴叔倫字は幼公潤州金壇の人、建中年德宗に杭州の刺史と爲る、五十八にして卒す、三體詩には蕭穎士に師事して門人の冠と爲ると記載あり、全唐詩には此の事記しあらず。

【句釋】贈殷亮殷亮は陳都の人、刺史の官に到りし人、日日河邊見水流孔夫子が水の流を見て

逝者如斯と嘆息して以來、詩人も文人も皆哀愁を遣る道具の第一と爲したるものなり、傷春未已復悲秋水の流は晝夜を捨てず、晝夜を捨てずに奔下するが故に九春も九秋も亦速かに過ぎ去る、以上二語の要は歲華の迅速なるを嘆じたるなり、山中舊宅戴叔倫の舊宅は饒州の薦福寺と云ふ寺なり、無人住今日は其の寺を守る人も無きを言ふ、叔倫自身の還らざるは勿論なり、來往風塵共白頭君も僕も官吏生活の爲め、山中清淨の生活は一向に能はず、共に老人と化し去ると嘆息するの意なり、風塵の義頗る廣し、兵亂(一)人寰(二)宦途(三)俗吏の職(四)妓坊(五)要するに汚れたる意は共通と爲す、今の詩宦途と見ても、世間の事と見ても何等の害なし、

湘南卽事

盧橘華開楓葉衰　出門何處望京師
沅湘日夜東流去　不爲愁人住少時

盧橘華開きて楓葉衰ふ、門を出で何れの處にか京師を望まん、沅湘日夜東流し去る、愁人の爲め住まること少時もせず、

【句釋】湘南は湖南の長沙郡を言ふ、旅寓中の作とす、盧橘は一名、金橘、一名金柑、一名山

橘、一名給客橙、『廣州記』に盧橘皮厚うして黃色なり、大さ柑の如く酢し夏熟す、土人呼で壺橘と爲す、俗に「花タチバナ」なり、枇杷の異名との説もある是れは謬まりならん、此の華が開きて楓葉衰ふる時、卽ち晩秋なり、出門寄寓所の門を出づ、何處望京師帝王所居の地を京師と爲す、京は大なり師は衆なり、群民の輻湊する所なればなり、長安は望むも見るを得ざるなり、沅湘沅水も湘水も日夜滔滔として止まず、東流去長安の方卽ち東方に向て奔流し去る、不爲愁人愁人は戴自身を云ふ、流水も愁人の情を察して呉れれば住まること少時位は爲ても可なり、如何せん無情の物、片時も住まらずに衰衰と流れ去ると嘆息するなり、

【評論】 此の篇、其の眞情流露して一誦三嘆の價値がある、戴は禪宗口調を以て評して見ると所謂水より悟入したる人にして『全唐詩』に收むる二卷の集、水を借て詩に入るもの頗る多し、水字を離れて詩無しと云うて可なり、宋人は許丁卯の詩を評して許渾千首濕と嘲笑せるが、許渾の詩も事實水字が多い、然れども戴の水字多きには到底及ばず、從て其の名篇も少なからず、余は「京口懷古」の詩を愛誦する「大江は萬里に横たはり、古渡千秋渺たり、誥誥波聲險に、蒼蒼天色愁ふ、三方漢鼎に歸し、一水吳州を限る、覇國今何くに在る、清泉長く自から流る、」

送齊山人

韓翃

舊事仙人白兎公　掉頭歸去又乘風
柴門流水依然在　一路寒山萬木中

【略傳】 韓翃字は君平、南陽の人、天寶十三年の進士、幕府從事、駕部郎中知制誥、中書舍人等の官を經て卒す、

【句釋】 送齊山人、山人の山へ歸るを送る、山人は齊に對する稱號、舊事と言へば面前の人の如くであるが、但是れ仙法を學んだと云ふに過ぎず、仙人白兎公は漢代の人、常に白兎に乘て來往したるより此の名あり、其の門人に赤松子があり、其の師に彭祖あり、『抱朴子』掉頭は決意を示す形なり、人間に住まらぬを云ふ、歸去世間と別れて山中に歸る、又乘風其の歸去は得意の歸去にて、失意の歸去にあらず、故に微塵も人間に戀戀せず、迅速に歸り去る、列子に御風とある此の意も半面に含む、柴門流水依然在山中の物物は人間の盛衰とは異なる、柴門も流水も山人が仙法を學んで白兎公に師事したる舊時と同じからん、一路寒山萬木中是れ山人の歸

住する所、寒山萬木の文字は柴門流水を承けて殊に味多し、

【評論】此の篇、閒淡清淨、一塵氣を住めず、韓翃は大曆十才子の一人、絕句の巧妙李益に次ぐと稱せらる、李將なる人あり其の愛する妓、柳氏を韓に與へ、韓は柳氏の持參金よりして貧人忽ち富者と爲りし歷史を有する人なり、孟啓の『本事詩』に詳悉なり、

送二元史君自一楚移越　劉商

露冕行春向二若耶一　野人懷レ惠欲レ移レ家

東風二月淮陰郡　唯見二棠梨一樹華

露冕春に行て若耶に向ふ、野人惠を懷うて家を移さんと欲す、東風二月淮陰郡、唯見る棠梨一樹の華、

【略傳】劉商は彭城の人、檢校禮部郎中、觀察判官、比部郎中の官を經て終る、山水を畫くに工、詩も亦工なり、

【句釋】●は姓史君は官名、自楚移越楚は郢都今の湖北省荊州府、越は會稽、今の浙江省紹興府、楚の太守たりし元が越の太守と爲り其の行を送る、●●露冕は冕を露はして行く、冕は冠のこと板にて之を作る、天子より以下諸公皆之を用ふ、周冕、又は漢冕、種種形狀が違ふ、後漢の郭賀が荊州の刺史と爲る、百姓歌うて曰く、厥の德仁明郭喬卿と、帝三公の服を賜ふ、且行くと禮を去ぞけ、冕を露はさしむ、今其の故事を用ゐて賢太守を送る、行春卽ち二月、●●●●向若耶此の若耶は溪の名、越州に存在する名勝、日本にて禪宗の人が若耶の名を永平寺に用ゐし詩がある、永平寺は越前に在るが故なり、●●野人は農民の事を云ふ、懷惠今日まで楚を治めし恩惠を懷ふなり、欲移家農民が史君と別るるに忍びず、乃ち共に越へ家を移さんとまで其の德を慕ふなり、東風二月淮陰郡此の淮陰郡は楚地なり、今日まで元が治めし處、唯見棠梨一樹花は『詩經』召公の故事なり、召公が民の訟を棠樹の下に聞く、民其の德を慕ひ、其の棠を伐らず詩を歌うて曰く、蔽芾たる甘棠、剪ること勿れ伐ること勿れ、召伯の茇りし所、蔽芾たる甘棠、剪ること勿れ敗こと勿れ、召伯の憩し所、蔽芾たる甘棠、剪ること勿れ拜むること勿れ、召伯の說りし所とある是れなり、

【評論】此の篇、別に奇巧を弄せず、單に其の人を賞するのみにして其の人の面目高風自から現はる、

竹枝詞

李渉

十二峯頭月欲低　空零灘上子規啼
孤舟一夜東歸客　泣向東風憶建溪

【略傳】李渉は洛陽の人、初め弟の李渤と共に廬山に讀書す、憲宗の朝、出て太子通事舍人と爲る、後、峽州司倉參軍に謫せられ、文宗の太和中に大學博士と爲り、復康州に流さる、其の途中、船賊が詩を請ふに依て賦して與へし事『雲溪友議』に出づ、

【句釋】竹枝詞此の題目は李渉より聊か前なる劉禹錫が始めて作りしもの、俗に流行歌と云ふものを美化して出したるもの卽ち竹枝の本領とす、竹節を以て柳枝又は柘枝なぞもある、是れは歌ふなり ハヤリ歌にはあらず、李渉が峽州より故郷の洛陽へ歸る時、作りしものとす、十二峯頭は夔州巫山縣に在り、卽ち蜀地に屬す、月欲低曉天に近づきし時を云ふ、空零灘は三峽に在りとすれば十二峯と遠からざるなり、灘は瀨と同じ、山際の河なり、我邦人は洋と同義に見る、漢人に

は通せず、子規啼不如歸と啼くが故に此の鳥を出す、孤舟一夜東歸客峽中よりすれば洛陽は東に當る、子規は歸るに如かずと啼くが、而かも我は十年歸り得ず、偶ま今日初めて東歸の客と爲ることを得た、十年も歲月を經たることなれば自分の情は其の土地を離るるに忍びず、泣向春風泣の一字に詩人無量の味が含まる、憶建溪「啼キノ涙デ故郷ヲ出タガ今デヤ故郷ノ水モ厭ヤ」歸らんとする路すがら其の謫地を憶ふの情切なり、建溪は武陵の建寧府卽ち蜀地、

【評論】此の篇、賈浪仙の「渡桑乾」と其の情想を同うす、野口寧齋は『三體詩評釋』に於て「渉の詩卓犖不羣長篇事を叙して行雲流水の牽制すべき無きが如しと云ふ」と辨ずるが渉が長篇は本集に十五六篇のみ、特に稱讃する程のものはあらず、其の長所は七絶に在り、清の王漁洋も取る所は七絶に在りと、其の極めて平易なる文字を以て之を出すに警拔なる才力、樂天の凡俗に比すれば遙かに上乘にある、

香山館聽子規

竇常

楚塞餘春聽漸稀　斷猿今夕讓沾衣
雲埋老樹空山裏　彷彿千聲一度飛

楚塞餘春には聽くこと漸く稀なり、斷猿今夕衣を沾すことを讓る、雲は老樹を埋む空山の裏、千聲に彷彿として一度飛

【略傳】竇常字は中行、扶風平陵の人、大曆中に進士と爲りしが、柳楊に隱居して著述に從事し、二十年出ず、後、湖南判官、侍御史、水部員外郎、朗州刺史、國子祭酒等の官を經て卒す●●●●牟羣庠羣の四弟皆詩を能す、天下稀なる所とす、

【句釋】●●●香山館は香山の旅館ならん、詩中楚塞の字より推して之を見れば湘中ならん、裴庾の增注は深く信するに足らず、何故なれば、『湘中別記』を引いて曰く「香山は縣、郭西に在り、其水甚だ香ばし」と、然るに竇常が本集を讀む杏山館とあり。杏山是なりや香山非なるや判然せず、要するに杏山でも香山でも詩に於て害なし、コンナ事を彼此論ずるは村夫子の所爲と知るべし、楚塞は南地の意味で見て可なり、楚國全體が南方に屬す、南方は北方に比較すれば暖が非常に早し、是の故に十二月頃より子規が啼く、●●徐春は晩春初夏の候を云ふ、聽漸稀三月より四月に至る間に啼き止むなり、斷●猿は斷腸の猿を云ふ、今夕は正しく啼聲を聞く時を云ふ、讓●●沾衣聽くこと稀なる時に於て之を聽く、詩人の情泣かざるを得んや、實は杏山館では猿を聞て衣を沾すが普通なり、峽中の名物は猿公なり、恆公が斷腸猿を見たのも峽中なり、然るに今夕は

子規の啼聲を聽て以て吾か衣を沾す、卽ち斷猿が子規に其の特權を讓りて人を泣かしめしもの●●と解釋するが、此の句の正解とす、石川鴻齋は斷猿に讓ると見るに依て「實は作者が子規を聽きしにはあらず、猿聲を聽きしなり、猿聲を鵑聲となして作れる所に味がある」と辨ずるが、是れは作者の意を得ず、題目、明白に「聽子規」とある、子規にあらずして何ぞや、唐人は謎の如き詩は決して作らず、日本の俳人と唐の詩人と混合すべからず、雲埋老樹暗雲が茫茫としたるを云ふ、空山裏人も無き空山の裏、彷●●●●佛は髣髴と同義、恰似と同樣に用ひ場處に依て異なる、「サモニタリ」と和讀して差支無し、千聲一度飛其の一聲を聞く時、寂寂たる空山、物の障礙するなければ、一聲の啼も、千聲の響も、少しも異ならずと云ふに在り、

【評論】此の篇、其の思想少しく奇警に涉るを以て種種議論を生ずるが、蓋し想は奇なるも文字悋にあらず、且小細工所謂纖巧を弄せざる所、正しく唐賢の面目を具備して宋人と列を同うせず、宋人をして此の調を學ばしむれば實に讀むに堪へざるなり、

長慶春　　徐凝

山頭水色薄籠煙　遠客新愁長慶年

身上五勞仍病酒　天桃窗下背花眠

山頭の水色薄く煙を籠む、遠客新たに愁ふ長慶の年、身上の五勞仍酒を病む、天桃窗下花に背て眠る、

【略傳】徐凝は睦州の人、詳傳は世に傳はらず、韓退之、白樂天、施肩吾と往來したる事は明白なり、廬山瀑布の詩を作り東坡の爲め罵倒せられて有名になりしことは三尺童も知る所、然れども坡が罵しる如く全集悉く劣なるにはあらざるなり、

【句釋】●●春は唐の十二主（則天を除く）穆宗の年號、年號を以て直ちに題と爲す、類例は少なし、此の詩は徐凝が始めて京師へ來て非常に感じたことありて以て作りしなり、山頭水色薄籠煙薄煙の色、水の如きを謂ふ、「山頭ノ薄煙ハ水色ノ如シ」と見るなり、卽目卽景、然るに山頭水色は山上水有るの象、卽ち周易の蹇の卦を以て取ると曲解する者あり、此の一句のみソンナ理窟を以て作る理由無し、昔時五山の詩僧が誤て此の如く見たるならん、信ずるに足らず、●●遠客作者自身なり、睦州から京師へ來たるに依て遠客なり、新愁愁は憂と異なりて些細なるウレヘを愁と云ふ、今作者が游ばんと思へども意の如くならざれば自分の身上を愁ふるなり、長慶●●年は憲

宗の元和より穆宗の紀元に移りし時、所謂長慶第一年の新春なり、此の詩は年號を以て題と爲す如き奇詩なるが故に詩も深く國家を憂へて作りしものならんと疑うた注家もある、其の疑の起りし理由は、穆宗と父の憲宗との二天子は非常の迷信家にて、方士卽ち道士の言を聞くを喜び、故に病氣にあらざるに平生、變な藥を服用して居りしなり、處士張皐なる者上疏して之を諫む、其の文中に「藥以て疾を攻む、疾無きに餌すべからず、昔孫思邈言ふあり、藥勢偏助する所あり、人をして臟氣平ならざらしむ、疾あらば藥を用ゐしむ、猶愼重なるべし、況や疾無きか、鹿人尙爾り、況や天子をや、先帝方士の妄言を信じ、藥を餌し疾を致す、豈更に其の覆轍に循ふを得ん」と、穆宗は其の言を善とし、而かも其の言を用ひず、疾あらざるに服用して遂に死に至る、此の如き事ありしを以て徐凝も自分の事を咏じたるにはあらず、天子の事を想うて作りしならんと想像が生じたるなり、下句の意も、張皐の上疏文を以て之を解して見れば、上の如くにも見える、然りと雖も、愁の字、酒の字、皆自身に屬して他に屬せず、他の詩は要するに自家の思を叙したるに過ぎず、身上五勞、五勞は卽ち五臟なり、愁を忘れん爲め酒を飲む、酒を飲むに依て、病は一層重くなると見た人ある、余の考は違ふ、病の爲め酒を飲むとを禁ぜられて居ることなり、仍●●酒は愁を忘れん爲め飮酒せんと思へども、身上の五勞は仍酒を引き受

る能はず、是に於て酒は飲むを得ず、『史記』信陵君傳の多近ご婦女一竟病レ酒卒とは違ふこととす、夭桃は少女を譬ふ、窗下背花眠色を禁じて身を愼しみ以て自ら病を養ふ。

【評論】此の篇、率易に自家の身上を叙する所に味を見る、此の人は廬山に登り、「虚空泉を落し千仞直く、雷奔江に入て暫らくも息まず、今古長く白練の飛ぶ如く、一條界破す青山の色、」の詩を作る、宋の東坡詩を作りて曰く「帝は銀河一派を垂れ遣む、古來唯謫仙が詞あり、飛流濺沫知ぬ多少、徐凝が爲めに惡詩を洗はず」と、前に西施あり、後に無鹽を置くべからず、隨園は却て東坡を罵る、隨園の輕薄は論ずるに足らざるなり、

宮詞

王建

金吾除夜進儺名　畫袴朱衣四隊行
院院燒燈如白日　沉香火底坐吹笙

金吾除夜儺名を進むれば、畫袴朱衣四隊行く、院院の燒燈白日の如く、沉香火底に坐して笙を吹く、

【句釋】王建の傳と宮詞の解は前已に辨じ置けり、金吾は此の詩にては官人を言ふなるが、二

說あり、一は金銅を以て爲る物、卽ち金棒、漢の執金吾は是れなりと、一は鳥の名にて不祥を避けるを主とする說、執金吾と稱する官は漢代に置き、所謂金棒を以て禁中の周圍を巡行する者なれば、我邦今日の警視と云ふ官に當る、我邦中古に左衞門とか右衞門とか云ふもの是に當るとの說もあり、除夜は節分の夜を指す、進は奏進、申し述るなり、儺名は鬼拂を行ふ人名簿を天子へ奏進する、隋の煬帝始めて之を行うて唐代に及びしもの、我邦では文武天皇の時、行基菩薩が奏して之を宮中に行ひ、近年に至るまで儀式の一と爲て居りしなり、印度の佛教で鬼に對する種種の觀念がありしことは經典中非常に多くある、此の思想が移りしものと条は斷定する、畫袴朱衣鬼拂を爲す役人の裝束を示す、奇麗な袴と朱の衣を著用する、四隊行二百四十人の者が鬼に扮して逐はれる者もある、之を逐ふ者もある、東西南北の四門に向ふから四隊と爲る、天子は此の時殿に御して之を見る、院院は禁中内の宮人宮女の居室を云ふ、燒燈如白日此の時代の燈は油燈と蠟燭となり、沈香火沈香を燒く火、底は下と大差無し、坐吹笙吹く者は誰ぞ、是は樂人なり、『續世說』に太宗が除夜に此の狀態を隋の煬帝の后蕭氏に見せしめて問ふ、隋主は何如と、曰く除夜毎に殿前に火山數十を設け、一山毎に沈香數車を燒き、香は數十里に聞ゆと。太宗曰には其の奢を刺れども心には其の盛んに服すと、圓至の注に載てあり、可否

は信じ難きも、太宗は明天子で蝗を食うて民の苦を救はんと欲した天子なり、然るに前朝の皇后たる蕭氏を宮中に入れて、此の狀態を示したと云ふは、信じ難し、然れども「帝範」の中に女戒を加へないと云うて後世より批難を受る失體あれば婦女に對する道は亦格別なりしならんか、『月令』に方相氏と云ふ者、十二神の名を唱へて以て惡鬼を驅逐し而して吹笙の者、之を扶くとある、此の十二神は、佛敎の十二天か、道敎の十二支の神か分明ならず、

二

銀燭秋光冷二畫屏一　輕羅小扇撲二流螢一
玉階夜色涼如レ水　臥看牽牛織女星

銀燭秋光畫屏冷やか、輕羅の小扇流螢を撲つ、玉階の夜色涼水の如く、臥して看る牽牛織女星、

【句釋】銀燭は美麗なるもの、秋光は凄涼なるもの、畫屏も亦美麗なるもの、冷の一字、唯其の秋光の感を深うする、輕羅小扇絹製の團扇、貴家の女の手にする物、宮女の持つ物、貧家の物にあらず、撲流螢宮女が怨意を遣るに所無きを以て、飜然として飛び來りし螢を撲つ、玉階

玉のきざはし、夜色涼如水秋色の凄涼と宮女自身の凄涼とを含んで居る、玉階は起句の銀燭と字を對し、夜色は秋光を承け、涼は冷を承け、如水は畫屏を承けて居る、巧妙の作驚くべし、臥看は仰臥して看る、牽牛は男星、織女は女星、七月七日には此の二星相會すと云ふ、宮女が失寵して後、之を看る、其の怨意の生ずる亦人情の自然ならん、

【評論】前首は王建の作たるに相違なきも、後首は杜牧の作たる疑ふ所無し、『全唐詩』にも『杜樊川集』にも載せあり、周少隱が誤て王建の詩として此の選に入れしなり、前首は盛觀、後首は凄觀、互に情味あり、余は前首を捨て、後首を取る、

城西訪二友人別墅一　雍陶

澧水橋西小路斜　日高猶未レ到二君家一
村園門巷多相似　處處春風枳殼華

澧水橋の西小路斜なり、日高きまで猶未だ君が家に到らず、村園門巷多くは相似たり、處處の春風枳殼の華、

【略傳】雍陶字は國鈞、太中八年宣宗年號に國子毛詩博士と爲り、後、簡州の刺史と爲りて卒す、

晩唐の人、

【句釋】●●澧水は季昌云ふ澧州澧陽縣の南より出づ、卽ち今日の湖南省岳州府を流るる川なり、雍陶は南方人なること判然たり、橋西小路斜一路と言はずして小路と言ふ、味此に在り、日●高日高うして、と讀ますして日高きまで、と讀む、猶未到君家曉天より訪問したとすれば、亭午まで猶到らずと見て、村園門巷多相似始めて訪問するが故に、一度位其の友から路程を敎へられしとて、實際に行て見て、容易に分らず、郊落の狀態、何處も同じ、處處春風枳殼花甲の村、乙の園、丙の門、丁の巷、大底一樣、皆枳殼の垣で恰かも春風、花は開きて居るが一向に其の家は分らない、己の家へ來る時は枳殼を見て尋ねよと言うたが、來て見れば處處カラタチバラの花ばかりなり、

【評論】此の篇、晩唐の佳絕として、頗る情致に富む、賴山陽が南禪寺に游ぶ詩は此の詩を粉本と爲したるもの、

貴池縣亭子

勢比凌歊宋武臺　　杜牧

分明百里遠帆開

蜀江雪浪西江滿　　強半春寒去却來

勢は凌歊宋武の臺に比す、分明に百里遠帆開く、蜀江の雪浪西江に滿つ、強半春寒去て却て來る、

【句釋】●●●貴池縣池州の望江亭は貴池縣の南齊山に在り、一名貴池亭、望江亭は俗呼なり、大江を見、淮南を望み、九華諸峰を見ればなり、梁の昭明太子、其の魚の美なるを以て貴池に封せらる、子の字は助字、勢比凌歊宋武臺『太平寰宇記』に太平州當塗縣黃山は縣●西北五里に在り、上に宋の凌歊臺あり、週廻五里、一百步、高さ四十丈と、『入蜀記』に黃山に游び、凌歊臺に登る、臺は正に鳳凰雨華臺等の如し、特に山顚に因て之に名く、宋の高祖、營む所、面勢虛曠、高く氛埃の表に出づ、南に靑龍山九井諸峯を望む、几席に在るが如し、分明百里遠帆開亭子が高處に在ること、此の句にて知るべし、『祖沖之傳』に千里の船を新亭江に造る、之を試みる日行くこと百餘里、●●江峽州夷陵に蜀江あり、雪浪西江滿『岳陽志』に荊江五六月の間、其の水暴漲、則ち洞庭瀟湘に逆泛す、淸流之が爲め色を改む、南至靑草旬日乃ち復亦之を西水と謂ふ、其の水極冷、皆云ふ岷峨雪消するの致す所と、岳人之を翻流水と謂ふ、雪が融けて

西江も蜀江も水が滿滿と一と爲るを謂ふ、強半算數家は有餘を以て強と言ふ、春中を指す、春寒は一月なり、然るに春中に此の寒を覺ゆるは、水滿滿の景色を見ればなり、去卻來は去て復來ると同意なり、

【評論】此の篇、七絕の粉本として童蒙に示すに極めて善、起承轉合の整正して見易き此の首の如きは希なり、承句の百里、起句の凌敵を承け、而して轉句の蜀江西江の文字、承句の遠帆を承け、而して結句は前三句を結束して高處の意味を十分に出す、句法の分明、且一氣呵成、他人の及ばざる所、思ふに筆を把て直ちに寫狀したるものならん、豪邁の氣象、言外に表はる、

送隱者

無媒逕路艸蕭蕭　自古雲林遠市朝
公道世間唯白髮　貴人頭上不曾饒

無媒の逕路艸蕭蕭、古より雲林市朝に遠ざかる、世間に公道唯白髮、貴人頭上曾て饒さず、

【句釋】送隱者『宋書隱逸傳序』に身隱るる故に隱者と稱す、道隱るる故に賢人と曰ふ、是れ普通の解釋とす、道を修め、俗士と遠ざかる人を總て隱者と稱す、惠遠法師の如き、寒山子の如き、皆隱と稱せらる、無媒は女無媒にして嫁する者、君子行なはず、士は中道に相見ず、卽ち生れて知己に遇はざるの意なり、高人を雲林に埋めて之を要路に登すべき媒介者が無なり、逕路は「小ミチ」なり、『晉書』『阮籍傳』に獨駕徑路に由らずとあり、草蕭蕭隱者は人間に意を待ず、其の向ふ所、草蕭蕭の逕路なり、自古來から、雲林は隱者の棲處、遠市朝俗士の棲處を志朝と言ふ、人と人と對すれば、俗念が起る、人と山水と對すれば道念が生ず、以上の二句は隱者の歸臥する所を云ふ、公道世間世の中に公平なる道はなり、雲林の隱者も、市朝の俗人も其の住處は異にするも、獨異ならざる物がある、それは唯白髮隱者の白髮は惜しむに足らず、俗人が如何に白髮を嫌へばとて到底免る能はざるもの、公道なる所以、貴人の名は『史記秦始皇紀』に先帝の大臣皆天下累世の名貴人なり、とあるが根本なり、頭上不曾饒人生れて隱者と爲る莫れなどと悲しむ莫れ、亦貴人と爲るも樂しむに足らず、歲月匆匆、電光石火、彼も此も同一に白髮と爲る、饒は「アマサ」と訓むも、「ユルサ」と訓むも自由なり、

【評論】此の篇、許渾の名を書する本あり、大に誤る、杜牧の作を以て正とす、趣旨は隱者に

同情して、貴人を冷罵したるもの、杜牧が一種奇警な想を持し尋常詩人の及ばざること、此等の詩にて明白なり、葉茵が此の詩を翻案して、「半世竿を持す笠澤の濱、鬢邊留め得たり幾莖の春、近來白髮公道無く、暗に黑頭を把て貴人を饒す、」意は到るも杜詩には及ばざるなり、余は「世間に公道唯一死貴人身上も曾て饒さず」理路に涉りて興趣無し、到底杜詩には敵せず、

送宋處士歸山　賣藥修琴歸去遲　　許渾

世間甲子須臾事　逢著仙人莫看碁

藥を賣り琴を修め歸り去ること遲し、山風吹き盡す桂華の枝、世間の甲子須臾の事、仙人に逢著して碁を看ること莫れ、

【略傳】許渾字は用晦、圃師の後裔、潤州京口に居、太中三年、監察御史に在り、疾を以て乞て歸る、陸郢二州の刺史に終る、

【句釋】送宋處士歸山宋は姓、處士は前に辨せり、賣藥普通の賣藥にはあらず、人間の精を增す藥なり、修琴は卽ち彈琴、處士の活計とする職業は此の藥と琴とにある、歸去遲城中へ行て賣

藥修琴して山へ歸ること遂に遲れたるなり、山風吹盡桂華枝早早に山中へ歸去せねば、秋も盡き桂花も散ずることならん、世間甲子須臾事光陰は甚だ迅速、歲月は人を待す、處士は「歸去遲」で悠悠として甲子を過す樣子であるが、甲子の須臾なるを知らば、早く歸去するが可、逢者は「ブヂャク」と訓む、仙人莫看碁『逸異記』に晉の王質木を伐て信安郡の石室に至る、數童子の碁を圍むを見る、質に一物を與ふ、棗核の如し、之を含んで飢ず、局未だ終らざるに斧柯爛れ盡く、旣に歸りて復時の人無し、

【評論】此の篇、歸去遲が一篇の主意にして他は其の注脚なり、

秋思

琪樹西風枕簟秋　楚雲湘水憶同游

高歌一曲掩明鏡　昨日少年今白頭

琪樹西風枕簟の秋、楚雲湘水同游を憶ふ、高歌一曲明鏡を掩ふ、昨日は少年今は白頭、

【句釋】此の詩一本杜牧に作る、杜集を檢するに此の詩無し、許渾の詩たる疑ひ無し、秋思秋

に逢うて思を叙す、琪樹は卽ち玉樹、人間の物にあらず、美麗なるを言はんが爲めに云ふ、西風枕簟秋琪樹も西風に晒されて色衰へ、枕簟も夏を過ぎ秋に逢うては用を爲さず、楚雲湘水憶同游少年の時神女楚雲や湘妃湘水の女神の如き美人と豪游を爲したることを憶起する、高歌一曲胸中の感慨は訴ふるに所無く、高歌一曲せざるを得ず、掩明鏡秋風に扇を捨て、白頭に鏡を掩ふ、千古萬古同一なり、昨日少年今白頭何十年の歳月も過ぎ去れば昨日なり、豈前日のみの謂ならん、

【評論】此の篇、白頭の二字を一篇の骨子と爲す、宋の陳后山、明の楊升庵は、共に許渾を重んぜず、后山云ふ「近世高學無く、擧俗許渾を愛す」と、升庵云ふ「唐詩中最も淺陋なる者」と、共に酷に過ぎる感はあるが、大體に於て當る、此の詩の如きも、太白の「秋浦歌」と張九齡の「照鏡見白髪」の二絶を粉本として成りしもの、特に清新を見す、要するに渾は晩唐に於る小家數にして大家にはあらず、

黄陵廟

李遠

黄陵廟前莎艸春　黄陵女兒茜裙新

輕舟短棹唱歌去　水遠山長愁殺人

黄陵廟前莎艸の春、黄陵の女兒茜裙新たなり、輕舟短棹唱歌し去、水遠く山長うして人を愁殺す、

【略傳】李遠字は求古、蜀の人、太中年に建州の刺史と爲る、『唐語林』に丞相、令狐綯が李遠を杭州の刺史と爲さんとして上書したり、宣宗曰く遠が詩「青山厭はず三杯の酒、長日唯消す一局の碁」安んぞ人を理めんや、『御史中丞集』一卷あり、

【句釋】黄陵廟は舜の妃、卽ち娥皇と女英を祀る、漢人の理想に適合したる女神なり、湘南の岳州府に其の廟あり、韓愈の碑文を樹つ、莎草春二妃が死んだ處へ生じたる草を莎と言ふ、春風に此の草が生長する、女兒は娥皇と女英との二神の塑像なりと解する説(一)李が今現在此の廟前にて游戲する女兒を指す説(二)の二説あるが、余は後説を取りて游戲する女兒と見る、茜は「アカネ」あかねの裙を著けて游戲する女兒、女兒なるが故に女神に適す、輕舟短棹唱歌去、是れ李が唱歌すると解する説、女兒が唱歌すると解する説との二ある、輕の字、短の字女兒に屬すること知るべし、女兒にあらざれば詩想無し、水遠山長は輕舟短棹の四字を承ける、愁殺人

女兒の唱歌を聞き、且二妃を思ふ、詩人たる者、豈愁殺せられざるあらんや、

【評論】 此の篇、拗體を以て成り、絕句として神品に入る、王漁洋が稱して神韻宗と唱ふる所此等の詩に本原する、後世の竹枝は亦此等の詩が粉本なり、情景を高尚に出したるか、情景を俗に出したるかの相違を見れば、愈よ此の詩の名篇たるを知る、白樂天は俗なりと東坡の罵るは情景を流俗に適合せしめたるに由る、近時太宰春臺が白樂天の詩は唐詩の極惡道なりと、白氏文集が我國に行はれて菅丞相甚これを好み玉ひけるとかや、夫より公家の人人皆樂天が詩を面白きことと思ひて其の風調を和歌に移す」と『獨語』にあるは樂天の爲めには寃ならんが、學詩者の爲めには金針なり、

贈彈箏人

溫庭筠

天寶年中事玉皇　曾將新曲敎寧王
鈿蟬金雁皆零落　一曲伊州淚萬行

天寶年中玉皇に事へ、曾て新曲を將て寧王に敎ふ、鈿蟬金雁皆零落す、一曲の伊州淚萬行、

【略傳】 溫庭筠字は飛卿、晩唐に於る一名家とす、李商隱と並稱して溫李と呼ばる、詩才超脫八叉手して八韻の詩成るが故に、時に溫八叉と稱す、詩多く溫柔鄉の事を言ふ、道學先生より輕薄詩人と見らるるが、淫艷猥褻のものは無い、香奩に比較すれば上品なること論勿し、但柔詞曼調の多きことは事實、從て俗人に好まるることとなる、

【句釋】 ●●●箏人箏は瑟の一種、五絃築身なり、此の箏を彈ずる人は婦人なり、●●●天寶年中玄宗の年號、十四年間繼續せしなり、此の婦人が宮中に入り、彈箏を以て事●●皇玄宗に事へて居りしなり、曾將新曲自家の發明せる新曲なり、敎寧王寧王は玄宗の兄なり、音律を好む所より、此の人を宮に入れ學びし者、鈿蟬は箏の飾具、金雁は箏の柱、皆零落玄宗は天寶十四年に蜀に出奔し、安祿山は城下を荒し廻る、此の宮人も亦宮を出、箏と共に零落したるものならん、一曲伊州「伊州曲」と云ふ曲名なり、伊州は隴西の地名、北地の哀音を傳ふる曲なり、今零落したるに依て、自家の境遇上、此の哀音を唱ふ、淚萬行自ら彈じ自ら泣く、伊州は燉煌郡大磧の外に在り、漢の明帝の時、始めて伊吾盧の地を取て未だ郡縣と爲さず、貞觀の初、內附して乃ち州を置く、『開元傳信記』に西涼州の俗、音樂を好む、新曲を製して涼州と曰ふ、開元中、列士獻す、玄宗諸王を召して便殿に同じく觀せしむ、曲終て諸王賀す、舞蹈善と稱す、獨寧王拜せ

す、玄宗之を問ふ、曰く此の曲嘉と雖も臣聞くことあり、夫音は宮に始まり商に散じ角徵羽に成る、宮商に根柢せざること無し、斯曲や、宮離れ微を少く、商亂れて暴を加ふ、臣聞く宮は君なり、商は臣なり、宮勝ざるときは君勢卑し、商餘りありときは臣僭を事とす、卑きときは下に逼り、僭するときは上を犯す、忽微に發して、音聲に形る、臣恐く播遷の禍、悖逼の患斯の曲に兆ん、玄宗默然たり、祿山が亂に及んで、乃ち寧王、音を審にするの妙を見る、

【評論】此の篇、溫一代を通じて七絕の代表作と見て可なり、新曲と一曲と同字聊か病を爲すも此の如き作法は妨げざるものの如し、

韋曲　唐彦謙

欲ㇾ寫ニ愁腸一愧ニ不才一　多情練漉已低摧
窮郊二月初離別　獨倚ニ寒村一覩ニ野梅一

愁腸を寫さんと欲して不才を愧づ、多情練漉已に低摧、窮郊二月初めて離別、獨寒村に倚て野梅を覩ぐ、

【略傳】唐彦謙字は茂業、懿宗の咸通年中より僖宗の中和年中に涉りて種種の官を歷て卒す、

自ら鹿門先生と稱す、所謂晩唐に屬する人、

【句釋】韋曲は杜曲と同じく長安に在る、韋姓の人が自分の游地と爲したるもの、唐時の人に此の題目頗る多し、作者も此に游び己が懷抱を叙す、欲寫愁腸乾符の末年僖宗の暗愚に乘じて、盜賊四方に起る、黃巢なる者、衝天大將軍と稱し頻りに戰亂を釀す、是の時、漢南に王重榮あり彥謙が其の國に來ると聞て之を己が參佐、所謂參謀として用ふ、後王重榮は賊徒の爲に殺さる、自分の恩人が死して、己も亦亂世に徬徨ふ、愁腸を寫さんと欲する意の起るは是が爲めなり、愧不才巧妙の詩、成らざるは不才の致す所、多情は自分を思ふのみならず、死せし王を思ふ情も切なり、練漉は竭くすの意味、練は「ネル」漉は「コス」情を十分に竭くしたと云ふ意味、張璪が「秋河賦」の映ニ東吳一而寫練より著想し來るなり、已低摧は俗語で言へば近來腦が馬鹿に成て居ると云ふ意味、一字一字に泥んでは解し得ず、十分に情を言はんと欲するも、腦が馬鹿に成て居るが故に巧妙の詩は出來ぬと云ふなり、窮郊は荒涼たる野外と云ふ意、窮の一字、國に對する窮と、身に對する窮と二意を含む、韋曲卽ち窮郊なり、二月作者が韋曲へ游びし時初離別王重榮が事を思ひ出せば殆んど今日離別したかの感があり、獨倚寒村覩野梅獨の字王重榮が今亡きを言ふ、且王重榮と晉の王羲之とは同姓なるが故に羲之の故事を用ひしもの、羲之

が晉世亂るるに當り、終日華を撚て香を襲ぎ人と語らず、羲之も愁腸を花に依て慰めて居りしものなり、

【評論】此の篇、王重榮を以て王羲之に譬し所、頗る才力を發揮す、此の詩は愁人と共に讀むべし、金殿玉樓に住する人と讀むべからず、

曲江春望

杏艷桃嬌奪晩霞　樂游無廟漢有年華
漢朝冠蓋皆陵墓　十里宜春下苑花

杏艷桃嬌晩霞を奪ふ、樂游廟無うして年華あり、漢朝の冠蓋皆陵墓、十里の宜春下苑の花、

【句釋】曲江春望『西京雜記』に京城の龍華寺の南、流水屈曲せるあり之を曲江と謂ふ、秦の時、宜春苑と爲し、漢に樂游苑と爲す、唐の開元中、玄宗池を鑿り水を引て華木を植る、勝賞の地と爲す、『長安志』に城の東南昇道坊に在り、『三輔黃圖』に宜春下苑と名くと、杏艷桃嬌杏の艷色、桃の嬌態、奪晩霞杏も桃も霞より美麗であると云ふ意味で奪ふの一字に於て工夫を凝

し、凡調を去て警調と爲す、樂游無廟漢代の樂游廟卽ち宣帝を祀りし廟は已に亡びて今や亡し、有年華人間界の事は變じ易く、自然界の事は變せず、漢朝冠蓋此の冠蓋は獨天子のみならず、大臣宰相皆此の中に在る、皆陵墓曲江に陵墓が多しと云ふ意味か、通漫に漢代の人間は皆死して墓と化してあると云ふ意味か分明ならざるが、皆死して無きものと見れば可、十里宜春下苑花春色は古往今來變せず年年二月は宜春下苑十里悉く花なり、

【評論】此の篇、漢代の事に托して、其の當時を諷するなり、古人唐彥謙の詩を評して、絕句用事隱僻、諷諭悠遠、李義山に似たりと、李も亦一步を讓る所あり、此の篇の如きは初學宜しく精讀すべし、

鄴宮　陸龜蒙

華飛蝶駭不愁人　水殿雲廊別置春
曉日靚粧千騎女　白櫻桃下紫綸巾

華飛び蝶駭て人を愁しめず、水殿雲廊別に春を置く、曉日靚粧す千騎の女、白櫻桃下の紫綸巾、

【略傳】陸龜蒙字は魯望、又字は鴻漸、江湖散人、又天隨子と號す、松江甫里に居して、藏書萬卷、出ては釣魚、入ては煎茶、世推して高潔の人と爲す、盧同と併稱して茶神に祀らる、又皮日休と友とし善、費袞の『梁谿漫志』に「陸鴻漸茶の爲めに累せらる」と題して人は偏に好む所あるべからずと論す、鴻漸茶の爲めに累せられ人其の文人達士たるを知らず、著書『君臣契』三卷、『源解』三十卷『江表四姓譜』十卷『南北人物志』十卷『吳興歷官記』三卷『潮州刺史記』一卷『古夢』三卷『茶經』三卷、今傳ふる所茶經のみ、他は皆傳はらず、嗜好の弊此に至る惜むべしと、

【句釋】鄴宮鄴都に建てたるが故に宮名とす、魏武の創設にて後趙の石勒や燕王や北齊の高洋など皆此に居りしなり、今の直隸省順德府邢臺縣に當る、此の詩は石勒の從弟季龍の事を詠じたるもの、石氏は羯族即ち蒙古人種、王としての存續年間僅かに三十三年なり華飛蝶駭不愁人人世の濁慾に沈沒せる季龍などの輩は自然界の變化など微塵も感愁せず、駭の字特に妙、水殿雲廊水と雲とは殿廊を飾る彩色の畫を云ふ、別置春前の華飛蝶駭は無語の春、此の水殿雲廊には解語の春を置く、無語の春過ぐるも、解語の春猶ほ在り、愁へざる所以なり、曉日靚粧靚は「アキラカ」粉白黛黑を謂ふ、美人の盛裝を云ふ、千騎女『鄴中記』に石季龍常に女騎千人を

以て鹵簿と爲すと、白櫻桃下紫綸巾季龍の嬖人を鄭櫻桃と云ふ、鄭の字は味無きを以て白の字を下したるなり、櫻桃は「ユスラ」白色にして肥たるものを上とす、紫綸巾紫色の手巾にて頭を裹み、女騎千人が游ぶ狀態を言ふ、

【評論】此の篇、石季龍の驕奢を叙して諷諭したるもの、從兄石勒は磊磊落落の語を發して快男兒と稱せらるるが從弟季龍は漢人一流の華奢を極めて其の劣想を遂げしもの、本集に二題あり、一は曹操を咏じたるもの、此の詩に比すれば遜色あり、

閿鄉卜居

吳融

六載抽ㇾ毫侍ニ禁闈一　可ㇾ堪ニ衰病決然歸
五陵年少如相問　阿對泉頭一布衣

六載毫を抽で禁闈に侍す、衰病に堪ふ可んや決然として歸る、五陵の年少如し相問はば、阿對泉頭の一布衣、

【略傳】吳融字は子華、越州山陰の人、昭宗龍紀の年に進士と爲り、侍御史、左輔闕、禮部郎中、翰林學士、中書舍人、翰林承旨等の官を歷て卒す、方外に禪月大師、廣利大師、譽光上

人、知方上人等の友を得て來往す、其の人亦俗塵に染著せざる人、其の詩は晩唐の衰弱を免れざるも、佳麗と稱する事は公論なり、

【句釋】閿鄉ト居本集に此の題十首あり此の詩は「阿對泉」と題して其の一首なり、閿音「ブン」或は閺に作る作者が極めて晩年挂冠後寓居せし地、吳は本傳に越州山陰の人、今日の浙江省紹興府山陰縣に當る、而して閿鄉縣は古鼎湖の地にて周に至り閿と稱す、明末清初まで河南省に屬したるも雍正二年直隸省に屬したり、然らば吳の故鄉にあらざること明白なり、野口寧齋は閿鄉に歸隱すと、歸隱にはあらず、卜居なり、六載抽毫侍禁闈吳が翰林承旨と爲て宮裏に出入すること六載間も無く哀帝の世と爲り、天祐の年號も、天祐を得ずして竟に亡ぶに至る、可堪の可を一本不に作る、不を以て可とす、衰病決然歸官吏が官を辭す病と稱するは古往今來定まり文句、歸は罷る退くの意味に見よ、必ずしも故鄉へ歸ると云ふにあらざるなり、五陵は園至和尙の如く漢の五陵と見るは愚も亦極まる、長安の意味に見なくてはならぬ、年少如相問年少と云うても普通の年少にはあらず、少壯の官吏を云ふ、少年の官吏共が余が退官後の事を問ふ者あらば、阿對泉は吳が自注にて能く知れる、阿對泉は晉の楊伯起の童子が蔬菜に水を灌ぎ入れる爲に作りし泉なり、彼の盜泉と異なり、高潔なる泉なるを以て之を出す、一布衣一平

民と爲て阿對泉頭に靜養すると答へるなり、

【評論】此の篇、齋藤拙堂の評に「氣格渾厚晩唐詩所希」と良とに確當の評言とす、序でに詩法を辨じて置かん、不堪衰病平平仄仄の法を用ふ、若し不堪老病仄平仄仄と作らば法にあらず、我邦の先輩は多く此の法を知らず、古人を學んで正法を守るべきなり、

尤溪道中

韓偓

水自潺湲日自斜　盡無雞犬有鳴鴉
千村萬落如寒食　不見人煙空見華

水自から潺湲日自から斜なり、盡く雞犬無く鳴鴉あり、千村萬落寒食の如く、人煙を見ず空しく華を見る、

【略傳】韓偓字は致堯、一字は致光、京兆の人、進士なり、河中幕府、左拾遺、左諫議大夫、翰林學士、中書舍人、濮州司馬、鄧州司馬の諸官を經て後、王審知なる者の家に卒す、詩集を『香奩集』と名く、後人艷詩を作る者の祖と爲す、

【句釋】尤溪は南劍州と圓至の注に在り、今日の地理を詳しくせず、水自潺湲日自斜自然の景

色は如何に戰亂を經るも其の狀態は變化せず、水聲も日影も荒涼寂寞たり、盡無雞犬雞犬の無きは卽ち人家の無きことなり、有鳴鴉日斜に及んで鴉が冬の樹林に歸宿する、千村萬落は甲地も乙地もと云ふ意味、人の住する千村萬落にはあらず、如寒食火を斷ち冷食するを寒食と云ふ、介子推が仕を欲せず逃げ去る、晉文公山を焚き之を求む、子推焚死す、文公之が爲め寒食すと云ふ傳說の外に、冬至後一百五日疾風あり故に火を焚すとの二說あり、共に明白ならず、唯火を禁するのみは事實なり、不見人煙空見華見の字二字重用して起句の自の二字に對す、是亦詩の一格とす、雞犬無ければ人煙も亦無き所以、

【評論】 此の篇、韓致堯の作として淸調に近きものなり、世に韓を『香奩集』の祖として傳ふるものなるが、香奩は讀で字の如く、重きを兒女の嬌態に置き、柔艷の詞を爲る、然れども仔細に其の集を檢するに決して柔艷の詩のみ作りし人にあらざるを知る、晩唐亂離の時に生れたるを以て頗る悲哀凄調のものもある、世の韓を云云するもの大底目論耳食の徒のみ、論ずるに足らず、余韓の爲め之を惜む、

已上二十四首共に第三句を以て主とし四句を喚び出すと爲すもの蓋し伯弱は何の說をも立てず單に第三句主意なりと云ふ、圓至は云ふ觀者を自得せしめんと欲すと、眞に然り天下功の多き

もの自得に過ぎたるは無きなり、

丹陽送韋參軍

嚴維

丹陽郭裏送行舟　一別心知兩地秋
日晩江南望江北　寒鴉飛盡水悠悠

【略傳】 嚴維字は正文、越州山陰の人、至德二年の進士、河南尉、校書郎の官を經て卒す、詩家の所謂中唐の人、韓致堯などよりは餘程以前の人に屬す、

【句釋】 丹陽は西漢の初めに置く、今の江蘇省鎭江府丹陽縣是れなり、韋は姓參軍は所謂參謀官のことなり、丹陽郭裏送行舟丹陽は楊子江に沿うてある地なるが故に此處より直ちに乘舟して長沙でも、零陵でも、武陵でも、廣陵でも自由に行ける、極めて便宜の地とす、一別心知兩地秋此の兩地は一方の丹陽は言はずとも判然たるが、嚴の行地は判然せず、兎に角南方に向て九江へ發するならん、心知は「心デ知ル」にはあらず、隔心の無き知友を指すなり、交情密な

る知友が南北、地を異にして居らなければならぬ意味なり、日晩江南望江北江の南北、何處を見ても、唯是れ夕陽の影寒鴉飛盡は日晩なるが故なり、水悠悠は送二行舟一なるが故なり、

【評論】　此の篇、神味悠然、言盡きて意盡きざる概あり、余特に此種の詩を喜ぶ、

寒食　　韓翃

春城無處不二飛花一　寒食東風御柳斜
日暮漢宮傳二蠟燭一　青煙散入二五侯家一

春城處として飛花ならざるは無し、寒食東風御柳斜なり、日暮漢宮蠟燭を傳へ、青煙は散じて五侯の家に入る、

【句釋】　韓翃の傳は已に出せり、寒食も已に辨せり、春城無處不飛花長安城中清明の時節、卽ち今西曆の三月未に當る、梅櫻桃李皆飛散する期、寒食東風御柳斜此の句中へ東風の文字を挾入して以て前句の飛花と此の句の御柳斜の雙方を活動する、頗る巧妙の手段を弄す、御柳は御溝の柳、日暮漢宮傳蠟燭漢宮は宮廷の事を云ふ通例語と爲てあるなり、唐宮も宋宮も字に響きが無い、且漢の世に永續して種種の故事がある、種種の歷史がある、城中に火種が盡ると宮廷

より賜はる、青煙蠟燭の青煙は先づ近臣の所よりする、散入五侯家五侯は後漢桓帝の代新豐侯（單超）と武原侯（徐璜）と東武陽侯（貝瑗）と上蔡侯（左悺）と汝陽侯（唐衡）との五人を同日に封じて侯と爲す、世に五侯と云ふもの是れなり、悉く同日に封じたるもの、

【評論】　此の篇、五侯の徒が君寵に狎て、萬事自由にすることを刺りしものなり、德宗が嘗て詩人韓翃を召致す、有司奏して二人の韓翃ありと言ふ、德宗曰く青煙散入五侯家の韓翃なりと、作者は遂に知制誥の官を得、寒食の絕句此の篇の如きは古今見ること罕なる作とす、諷刺して作りしこと明白なるも、語露骨ならざる所、天下一品の觀あり、近時石川鴻齋は曰く「季昌の注に德宗の時となし、德宗を譏る詩となせども、翃は玄宗の天寶十三載の進士にして德宗とは少しく時代異なり、」是れは孟啓の『本事詩』を讀まざる說なり、孟啓は翃より、少しく後の人にて翃が此の詩を評して『本事詩』に辨じたる所、信を置くべし、況んや天寶十三載より德宗の代に至る二十六年間、翃が二十歲で進士及第とすれば、德宗の世に四十六歲の人なり、時代異なると辨ずるは非常な誤謬とす、

上陽宮　　竇庠

愁雲漠漠草離離　太掖勾陳處處疑

薄暮毀垣春雨裏　殘華猶發萬年枝

愁雲漠漠草離離たり、太掖勾陳處處疑ふ、薄暮毀垣春雨の裏、殘華猶發す萬年の枝、

【略傳】竇庠字は胄卿、婺州刺史と爲り、竇常、竇牟、竇羣の三兄、竇鞏の一弟と共に詞章を工にす、五兄弟の合集を『聯珠集』と名け時に行はれしと云ふ、

【句釋】上陽宮は季昌の說に東都禁苑の東に在り、上元中に置く、高宗の末に常に居て以て政を聽く、高宗調露元年に東都に幸す、司農卿、韋弘機、上陽宮を作る、洛水に臨み、長廊を爲る、一里に亙る、宮成て上移りて之に御す、御史狄仁傑劾奏して弘機、上を導き奢泰を爲すと、官を免す、神龍の初、武后位を失し、亦徙て焉に居る、則天が唐の宗室を殺し盡くして自から天冊金輪皇帝と稱し住居したるも此の宮なり、詩人好題目の一とす、愁雲の愁は、闇又は黑を意味する、氣が陰なるを以て愁の字を以てする、漠漠は雲の散せずして四邊の黑きを云ふ、草離離は艸が得意に發生する、上陽の宮址、此の七字にて先づ道破する、太掖は池の名、上の草離離と線を通ず、勾陳は星の名、上の愁雲漠漠と線を通ず、太掖池の清潔も勾陳閣の高層も處

處疑で一目瞭然、此の處でありしと言ふこと出來ず、探索せなければ判然せず、血を見ることを畏れざる漢人種の性質として、直ぐ鬪爭、昨日は帝政、今は民政、命を奉せぬ徒は斬られて、家は燒かれる、弱肉强食、彼の理想なり、漢土で一番貴き者は學者と詩人のみ、其の他は獸類と異ならず、薄暮は陽と陰と交代する時、凄愴の氣を增す、毀垣春雨裏春雨は前の雲と草とに線を通じ、以て下の殘華を引き出す、殘華は古の殘華と云ふにあらず、暮春なれば殘華なり、猶發萬年枝此の萬年枝は一名冬青樹、和名「ヒメツバキ」「イヌツバメ」「マサキ」と云ふ、晩春初夏に花發く、野口寧齋曰く「花卉に萬年の名ありて滄桑已に幾變す嗟すべきの至りなり」と頗る當る、五山の僧や石川鴻齋は「唐代の血脈連續して萬年に至らんと云ふを祝して初は上陽宮の衰態を云ひ後には唐の萬世に傳はらんことを以て結べるなり」とは滑稽の極とす、

【評論】此の篇、盛唐の面目存し、雄渾の體を備ふ、一誦三嘆の妙あり、

贈楊錬師　鮑溶

紫煙衣上繡春雲　清隱山書小篆文
明月在天將鳳管　夜深吹向玉晨君

紫煙衣上春雲を繡ふ、清隱山書小篆の文、明月天に在り鳳管を將て、夜深て吹て向ふ玉晨君、

【略傳】 鮑溶字は德源、元和四年の進士、韓退之、孟郊の友人なり、

【句釋】 楊は姓、鍊師は道士に對する尊稱語なり、佛敎にて禪師又は律師と稱するが如し、紫煙衣上繡春雲道士が服する衣を形容する語、唐の代宗の時、李泌が官を罷め道士と爲る、代宗之に紫衣を賜ふ、僧の紫衣は是より先き則天武后が法朗が『大雲經』を譯した功を勤し紫衣を賜ひしなり、煙や雲は繡うてある模樣を云ふ、清隱は道家、山書は道書、小篆文は字體を云ふ、佛敎にて梵文を貴ぶが如し、道士と云ふ人間は俗人と僧の混合兒にて、漢土の特有、其の經文など多くは佛敎を拔き取り以て製したるものなり、小篆は秦の李斯が造作せしもの、老子は李姓なるが故に之を用ふ、明月在天は明月が天に在るの夜、將は持なり、鳳管律曆志に黃帝卽ち道敎の開祖、竹を解谷に取て吹て以て鳳鳴を聞く、雄鳴が六、雌鳴が亦六なり、夜深吹向玉晨君此の句意は佛敎に供養如來と云ふことあり、一華も一香も、一鼓を叩つも、一笛を吹くも、悉く如來に供養せんが爲めなり、自身の耳目を娛しむ爲にはあらず、今鍊師が鳳管を吹くも、是れ自身の慰みにあらず、是を以て太上大道玉晨君、卽ち天の神に之を捧ぐる爲めなり、『黃庭

經』と云ふ道士の經典に玉晨君の事出づ、

【評論】 此の篇、紫煙、春雲、清隱、明月、鳳管、玉晨君、壯麗の文字を以て全篇を構成す、唐人にあらざるより、斷じて此の詩あるべからず、

和孫明府懷舊山

雍陶

五柳先生本在山　偶然爲客落人間
秋來見月多歸思　自起開籠放白鷴

五柳先生本山に在り、偶然客と爲て人間に落つ、秋來月を見て歸思多し、自から起て籠を開て白鷴を放つ、

【句釋】 雍陶の傳は前に出せり、孫は姓、明府は縣令、又は知事を尊稱して云ふ、舊山は必ずしも山と見るにはあらず、故園又は故鄉の類、五柳先生は晉の陶淵明が自稱せし號、借て以て孫に譬ふ、淵明も彭澤の令尹、孫と同等の官、而して人物も甚だ高き所、相似たるを以て之に譬ふ、本在山此の山も深山や高山にはあらず、唯故園の塵なき事を云ふ、偶然爲客此の四字頗る味多し、客なればこそ歸る、主なれば歸らず、縣令と爲るに意なくして、偶然縣令と爲りしなり、

獵官などとは大に異なる、落人間普通人間、凡俗等と相手になつて居りし事を云ふ、本在山と一線を通ずること詩法として見るべし、在山は清淨、人間は汚濁を意味する、秋來見月元來は塵中の物にあらざれば、清澄なる月を見るに當りては、何ぞ勝ふる所ならん、多歸思濁界にて月を見る、猶清涼、況んや山中に於て之を見る益す清涼ならんと思へば、官を罷め歸思を催す所以、五柳先生に「歸去來賦」あり、自起開籠放白鷳此の事は唯文字の上で言うたるのみか、又事實を叙べたるのか、分明ならざるが、詩の本義たる溫柔淳厚の旨は露れて居る、詩人の眞情も亦此に在る、白鷳も亦縱横飛翔するもの、然るに籠と云ふ小さき物の中へ入れられて禁獄せらるるは、憫むべきなり、放たざるべからず、と自ら起て籠を開く、人情の美、比するに物無し、白鷳は和名「シラサギ」衆禽に交るを嫌ふ性を有すと云ふ、

【評論】此の篇、唐の蕭穎士が「白鷳賦」に依て作りしもの、「白鷳は羽族の奇、雕籠に處して、致に馴騎を以てす、將に長楊に集まり、太掖に游ばんとす、予東陽に旅として、適僧に傳舍に至る、感じて之を賦す、其の畧に曰く越水清うして鏡色あり、吳山遠くして天碧なり、心賞と喫き違く、歸飛を念ふ、其れ何の極まらん、圓至和尙云ふ、穎士は物に因て己れを感ず、此の詩己を推して以て物に及ぶ異にして同じ、

贈日東鑒禪師　　鄭谷

故國無心渡海潮　老禪方丈倚中條
夜深雨絶松堂靜　一點山螢照寂寥

故國無心にして海潮を渡る、老禪の方丈中條に倚る、夜深け雨絶て松堂靜なり、一點の山螢寂寥を照す、

【略傳】鄭谷字は守愚、袁州の人、官、左拾遺と爲り、後、都官郎中と爲り以て卒す、後世、尊稱して鄭都官と云ふ、宋の歐陽修云ふ鄭谷の詩は小兒に讀しむるに適すとて、一時の教科書に爲せしものなりと、鄭谷の名が高くなりしは、是れが原因なりと、

【句釋】日東は日本、鑒禪師は未詳、『元亨釋書』にも其人の傳を缺く、兎に角、入唐せし人たるは疑ひ無し、故國は日本、無心は何の求むるもの無うして漢土へ渡る、渡海潮浙江の寧波に著せしものならん、老禪は猶ほ老僧と言ふが如し、方丈は僧房を云ふ、唐の顯慶中、王玄策、西域印度を使し毘耶城維摩の室に至る、手板を以て縱横量りて十笏を得、故に方丈と名く、倚中條山を中條と云ふ、禪師が寓院を指す、夜深雨絶雨が深夜に至りて歇む、松堂靜方丈中の別

堂ならん、一點山螢照寂寥雨が歇んだ後へ、山螢飛來僅かに一點なるが是れが堂の寂寥を照して姿致限り無し、

【評論】此の篇、山房の夜趣を寫して、清絶幽絶窮まり無し、谷が方外の友人に白蓮大師齊己あり、九華上人に贈る詩、一法傳聞す老能に繼ぐと、九華に開臥す最高峯、秋鐘盡る後殘陽暗し、門は掩ふ松邊雨夜の燈、此の詩と幷稱すべきものなり、

旅懷　　杜荀鶴

月華星彩坐來收　嶽色江聲暗結愁
半夜燈前十年事　一時和雨到心頭

月華星彩坐來收まる、嶽色江聲暗に愁を結ぶ、半夜燈前十年の事、一時雨に和して心頭に到る、

【略傳】杜荀鶴字は彦之、杜牧之が妾の生む所のもの、翰林學士、主客員外郎と爲り知制誥と爲り、天祐の初、卒す、州に九華山あり、故に自から九華山人と稱す、

【句釋】旅懷は旅中に懷を叙るなり、月華は雲色より形容したる月を稱す、星彩は羣列する星

を形容して稱す、坐來收動作を用ひずして致すを坐來の義とす、卽ち自然に收まる、收は收藏、見えなくなるを云ふ、嶽色江聲暗結愁嶽色は蒼茫と爲り、江聲は喧豗す、暗然と客愁を結ぶ所以半夜燈前十年事愁を結ぶが故に眠る能はず、眠る能はざるが故に種種の感想が浮んで來る、十年は一昔、此の一昔の事が湧き出る、一時和雨到心頭雨と云ふ外物が霏霏として降り來り、以て我が十年來の感想を敲き出す、雨の一字、一篇の骨子とす、

【評論】此の篇、杜集に在て、佳絶の中に收むべきものなり、明の楊升菴は杜荀鶴の詩を評して晩唐の最下と云ふ、學力無く、唯詩才のみあればなり、我邦文化年間新潟の館柳灣は『晩唐十二家絶句』を選して杜を一家に入る、徂徠派の僞唐に反對せんが爲めなり、杜が「夏日悟空上人の院に題す」の詩「三伏門を閉て一衲を披す、兼て松竹の房廊を蔭する無し、安禪必ずしも山水を須ゐず。心中を滅し得ば火も自から涼し」と日本甲州の快川和尙は此の詩を朗吟して以て火中に投じたりと云ふ、杜も亦瞑す可きなり、

已上共に七首天象や時節や明月や秋來や夜深等の類同じきを選みし意、

寄別朱拾遺　　劉長卿

天書遠召滄浪客　幾度臨岐病未能

江海茫茫春欲遍　行人一騎發金陵

天書遠く召す滄浪の客、幾度か岐に臨んで病で未だ能はず、江海茫茫春遍からんと欲す、行人一騎金陵を發す、

【略傳】劉長卿字は文房、至德監察御史、檢校祠部員外郎、轉運使判官と爲る、吳仲孺の爲め誣告せられ、潘州南邑の尉に貶せらる、隨州の刺史に終ふ、詩家の所謂、中唐の人に屬す、

【句釋】寄別は送別と同義、朱は姓、拾遺は官名、天書は詔書を云ふ、遠召は朱の遠方に居りしを召す、滄浪客は天竺浪人を指す、滄浪は靈均が漁父に遇うた所、汚水卽ち漢水なり、幾度臨岐朱も劉も共に天竺浪人なるが、天子の召さるるに因て都へ幾度か赴むかんと欲したるも、病未能劉は病臥して劇かに發する能はず、江海茫茫滄浪は潺湲たるが、之に異なりて江海は茫茫たり、一は小、一は大を言ふ、春欲遍天地の春も遍からんとする時節、亦我等二人も一身の春來らんとす、行人一騎二人召されたるに一人行く、此の一人は朱か劉かの說がある、寧齋は劉が行くなりと言ふ、余は朱が行くなりと定むる、病は劉で朱にあらざればなり、行人一騎の四字は幾度臨岐と線脈を通じて居る、發金陵江蘇省の江寧府が古の金陵なり、朱が此を發して

洛陽に向ふなり、

【評論】此の篇、他人に在ては名篇なるも劉に在ては名篇と稱するに足らず、中唐猶ほ渾厚の氣、晩唐人の及ばざる所を知らば可なり、

題張道士山居　秦系

盤石垂蘿只是家　回頭猶看五枝華
松間寂寂無煙火　應服朝來一片霞

盤石垂蘿只是れ家、頭を回らして猶ほ看る五枝華、松間寂寂として煙火無く、應に服すべし朝來一片の霞、

【略傳】秦系字は光緒、會稽の人、天寶年間に兵亂を避けて、剡溪に居、自から東海釣客と稱す、天子種種の官を以て之を招けども皆就かず、年八十を以て死す、穴居して老子を注す、其の人、仙風道骨ありしこと知るべし、系を一本至に作る誤りならん、

【句釋】張道士山居仙道を修習する張姓の人の山居に此の詩を題す、盤石は巨石、垂蘿は老樹に挂るもの、只是家別に堂堂たる邸宅は無し、只此の石と蘿とが我が家なり、道士は沙門と同

じく、身を清淨に處して、人慾を去ることに勤む、無用の長物は家に置くを許さぬ、盤石垂蘿は佛道の樹下石上と同一なり、回頭は凡人の如く種種慾想の爲め頭を回らさずと雖も、猶看五枝華仙家に限り生ずる五枝華のみは看る、『山海經』に「王室山に木あり、其の華五衢」と是れなり、松間寂寂道士が修道する適當なる處は松間の寂寂たる所に限る、人間は修道の處にあらず、無煙火人間は煙火あり、松間は煙火なし煙火食の者は慾念起る、煙火食せざる者は慾念起らず、應服朝來一片霞仙人でも道士でも釋士でも何か食物を取らなくては身を保つ能はず、然れども人間の煙火食は法の禁ずる所、是に於て「アサノカスミ」を食うて僅かに身を持つ、が此の霞も蟬の食ふ「カスミ」にはあらず、一種の藥なり、此の藥を製し、自から食ひ、亦人に賣與するのが道士の職業とす、此の事を知らずして仙を論ずる者は、仙の爲めに翻弄せらるる事あるべし、

【評論】此の篇、秦が道士の山居を訪問したるも不在なるを以て此の詩を壁に題して去りしもの、山中深く入て處を知らざるを歌ふ、

寄李渤

五渡溪頭躑躅紅　　張籍

嵩陽寺裏講時鐘

春山處處行應好　一月看花到幾峯

五渡溪頭躑躅紅なり、嵩陽寺裏講時の鐘、春山處處行て應に好かるべし、一月花を看て幾峯に到る、

【句釋】傳は前に在り、李渤は李涉の弟とす、嵩山の少室山に隱居して自から少室山人と稱す、朝廷之を用ひんと欲し召せども至らず、處士を以て終ふ、五渡溪は嵩山に在る溪の名、躑躅紅此の花は和名「ツツヂ」植物なるに足扁の字に從ふは、動物殊に羊が此の葉を食へば非常に惱むと云ふ說を以て「テキチョク」を名としたりと云ふ、人間の行かんと欲して行く能はざる形容を元來「テキチョク」と云ふなり、轉化したるものと知るべし、一名、山石榴、春晩夏初に花開く、嵩陽寺は嵩山に在る、一寺なり、講時鐘此の寺の大和尙が經を講ずる時の鐘なり、春山處處行應好五渡溪頭も好、嵩陽寺裏も好、處處皆好からん、張が李渤の住する嵩山に對し、想像する、春山は前に花あり、春の字出さざるべからず、一月は日本語の一ケ月三十日の間にと云ふ氣味、看花到幾峯此の嵩山は五嶽の一、一に崧山と書す、河南省河南府に在り、山東を大室と曰ひ、山西を少室と曰ふ、相去る十七里、嵩は其の總名なり、漢の武帝親しく嵩に登り、高く萬歲を

呼ぶもの三たびなるを聞く、祠官をして山下に戸三百を加増せしむ、此の中に少林寺あり、達磨面壁の跡なりと云ふ、三十六峯各の異觀を呈すと云ふ、

【評論】此の篇、別に大奇無しと雖も、情致藹然掬すべきものあり、『全唐詩』の評に「詩樂府に長じ警句多し」と「築城詞」「猛虎行」「傷歌行」「吳宮怨」「北邙行」「關山月」「隴頭行」「塞下曲」「少年行」「烏夜啼」の如き太白も亦讓るべし、同門の孟郊、賈島は皆其の膝下に在り、

南莊春晚

李羣玉

草暖沙長望去舟　微茫煙浪向巴丘
沅湘寂寂春歸盡　水綠蘋香人自愁

草暖に沙長うして去舟を望めば、微茫たる煙浪巴丘に向ふ、沅湘寂寂として春歸り盡く、水綠に蘋香うして人自ら愁ふ、

【略傳】李羣玉字は文山澧州の人、太中中に宰相崔鎧其の詩を進む、處士を以て弘文館校書郎に除す、又一說に裴休、湖南に觀察して厚く之を延致す、相に入て詩を以て朝に薦む、遂に校書郎を授くと、

【句釋】南莊春望は『全唐詩』には澧浦春曉とあり、澧浦に李が別莊を云ふなれば「南莊春晚」も亦通ず、草暖は春日の狀を言ふ、沙長は江邊に水無きを言ふ、望去舟何人の舟と限るにはあらず、去舟が巴丘方面へ向て行く、微茫は「カスカ」の貌を言ふ、煙浪は舟に隨て行く浪を言ふ、向巴丘巴丘は巴陵縣なり、沅湘は今の湖南省岳州府なり、澧州と接近する處、寂寂は「サビシ」沅湘の景色を言ふ、春歸盡舟は去、春は歸る、主觀も客觀も共に寂寂寥寥たり、水綠蘋香蘋は水草、夏日香を發するもの、人自愁水綠も自然蘋香も自然、得意の人、之を見れば何の愁かあらん、失意の人、亦感慨の人之を見れば、豈愁へざるを得ん、起句の草暖沙長の四字は舟に屬し、結句の水綠蘋香は人に屬す、

【評論】此の詩は深意ありて作りしものと先輩評するが、余は卽景卽目を叙したるものと爲す、『三體集』中名篇の部へ收めて可なり、

長溪秋思

唐彦謙

柳短莎長溪水流　雨微煙暝立溪頭
寒鴉閃閃前山去　杜曲黃昏獨自愁

柳短く渉長うして溪水流る、雨微に煙暝うして溪頭に立、寒鴉閃閃として
前山に去る、杜曲黃昏獨自ら愁ふ、

【略傳】唐彥謙字は茂陵、咸通中に進士と爲り、後、判官、禮部尚書を經て卒す、鹿門先生の別號あり、

【句釋】●●長溪は長安に杜曲と云ふ游園あり、其の游園の一部を長溪と云ふ、秋思は秋に感ずる思を叙す、柳短は柳の衰へたるなり、渉長は渉「ミクサ」の盛んなるなり、溪水長渉は水艸、卽ち水頭の景を叙す、雨微は細雨なり、煙暝は深煙なり、立溪頭秋思に堪へずして來り溪頭に立ち秋色を撫す、前の溪水流は光陰の迅速なるを云ふ、柳短は自ら比し、渉長は他人に比す、雨は天恩に比し、暝は恩澤を蒙むる薄き人に比す、寒鴉閃閃鴉の閃閃は「ヒラメク」忽ち有、忽ち無を閃閃と云ふ、前山去夕照に影を閃かして前山に向て去る、杜曲に立て黃昏は落日、獨自愁他人の伴ふ無し、寂寞として愁へざるを得ず、

【評論】此の篇、卽景卽目を叙したるなりと言はば然りと答へんが、又比體を以て出したりと見れば、自から比體の妙ある、劉長卿より此に至る五首、江海茫茫、松間寂寂、春山處處、沉湘寂寂、寒鴉閃閃、等の疊字法を同うしたる作法を知るべし、

隋宮　　鮑溶

柳塘煙起日西斜　竹浦風回雁弄沙
煬帝春游古城在　壞宮芳艸滿ニ人家一

柳塘煙起りて日西に斜なり、竹浦風回りて雁沙を弄す、煬帝の春游古城あり、壞宮芳艸人家に滿つ、

【略傳】鮑溶字は德元、元和四年の進士、孟郊と友とし善、

【句釋】●●隋宮は隋の文帝、煬帝の宮址を見て作る、隋の都は今日の江蘇省江寧府卽ち金陵なり、●●●

【評論】此の篇、隋宮に對して懷古の情を發せしもの、語語平穩、亦唐人の面目を失なはず、

綺岫宮　　王建

玉樓傾側粉牆空　重疊青山遶故宮
武帝去來紅袖盡　野華黃蝶領春風

玉樓傾側して粉牆空し、重疊たる青山故宮を繞る、武帝去て來た紅袖盡、野華黃蝶春風を領ず、

【句釋】綺岫宮は天隱の注に「東都永寧縣の西五里に在り、顯慶三年置」と、季昌の說に「綺岫は唐の後宮なり、一に云ふ驪山に在り、漢の武帝立つ、玄宗嘗て行幸す、山光園繞す、因て綺岫と名く、」後說是ならん、玉樓傾側は傾「カタフク」傾は側なり、共に倒れたるなり、粉牆空樓已に傾ぶく、粉牆空は勿論なり、十扉を粉牆と云ふ、重疊青山遶故宮西安府の地たる、四面皆山、是の故に溫湯湧き、四時游に適す、宮を置き娛樂する所以、武帝は漢武にあらず、玄宗を指す、華蓼樓又は華淸宮、玄宗が楊太眞と共に游樂したる所とす、去來去てより以來を云ふ紅袖盡は美人盡る意味なり、東洋婦女の病氣として紅色を好む、少女や少婦は紅にあらざれば

美とするに足らず、紅裙、紅袖、以て女の代名詞と爲す所以なり、玄宗が多勢の後宮、特に太眞なぞ今日は已に見えざるなり、野華は古の宮華に反對、黃蝶は古の紅袖に反對、領春風依然たる春風を領ずる者は今日唯野華と黃蝶のみ、

【評論】王建の宮詞に於る唐三百年間第一の評ある、は古今皆許す所なり、此の篇は、最上乘にあらざるも、亦懈の擊つべき所無し、後人以て準據と爲すに足る、綺と岫との二字を等閒にせず、句中巧妙に之を用ふ、用意の周到、察するに餘あり、曰く玉樓、曰く粉牆、曰く黃蝶、曰く紅袖、皆綺字に反映し、岫を云ふに重疊青山の四字を以てして足る、良とに名手の名に背かざるを知る、

送三藏歸西域　　李洞

十萬里程多少難　沙中彈舌授降龍
五天到日應頭白　月落長安半夜鐘

十萬里程多少の難、沙中彈舌して降龍に授く、五天到ん日應に頭白かるべし、月は落つ長安半夜の鐘、

【略傳】 李洞字は才江雍州の人、朱泚の亂を避け蜀に入て普州の大雲山に於て石を鑿て洞を爲り、易を其の中に讀む、賈島に師事し、其の詩を慕ふ、『北夢瑣言』に洞賈島が像を鑄、頂戴して常に賈島佛と念ずと、

【句釋】 送三藏歸西域單に三藏では何人なるやを知らず、僧の三藏卽ち經、律、論の三に通ずる人に對する敬語、羅什三藏、玄奘三藏等の如し、三藏法師と四字の敬語は恰かも「仁兄大人」又は「師父大人」と稱すると同樣、敬語を層用するなり、然るに今「三藏」の題は「僧」の意味で見るべし、印度僧の歸るを送るならん、今日では印度と西域とは全く別なれども、唐代の詩人は印度をも西域の中へ收む、玄奘三藏の『大唐西域記』なぞも亦然り、其の意を以て此の詩を讀むべし、十萬里程『漢書地理志』の上に西域としては「大宛」一萬二千五百五十里を最とし、「月氏」の一萬一千六百里之に次ぐ、然るに今十萬里と出だす、大宛も月氏も安息も通過して其より遠からざるを得ず、多少難は水路も陸路も容易ならざるを云ふ、天山南北の二路共に困難なり、沙中は流沙を云ふ、彈舌は三藏が口に佛敎の咒文を唱へる事を云ふ、授降龍此の龍と稱する者も、沙漠中に棲息して居る蠻族の酋長を云ふ、玄奘が沙漠にて龍に食はれんとして深沙大王に救はれたと稱することも、此の酋長に救はれたるなり、今此の僧も沙中に於て此の酋長や此の

蠻族に佛敎を授け其の猛性を矯めるものなり、五天は印度を東西南北中の五つに分て云ふ、今一僧が歸るにあれば、西天とか南天とか改めるを可とす、一僧が五天に歸る事は出來ざるなり、到日應頭白玄奘は七生して以て始めて五天に周游するを經たりと云ふ、一生の中に到るにも多少難を經、頭の白を催す固より其の所なり、月落長安半夜鐘は三藏を送る時を云ふ、送別の爲め淨齋を設け、夜半に及びしものならん、依て、五天を西天と改むれば、此の月落の字に反映する、中天と改むれば此の半夜の字に反映する、古人と雖も、注意の足らざる所、亦字の誤寫もあるなり、半夜に鐘を擊つ、寒山寺も然り、長安の寺も亦然り、然るに半夜に鐘は擊つ擊たぬと議論する者がある、詩を知らず唯字を知るが故なり、重野成齋と云ふ人が日蓮上人時代に僧を斬る刑法が無いと論じて龍口法難は虛語なりと斷じたるは、半夜鐘を議する者と其の愚を同うするものなり、日蓮の法力は無い刑法を設けさする、大詩人は規則の無い鐘を擊せると自由自在なり、智者より見れば尋常茶飯事、驚く可きものにあらず、亦議すべきものにあらざるなり、

【評論】 此の篇、西天へ歸る法師を送るとして大奇無しと雖も、亦大拙にもあらず、平平なるものとす、二冬の韻は百有餘字あり、起句、十四寒の難字を假らざるも別に作法ありしならん惜むべし、飽容より此に至る三首は第三句、卽ち煬帝春游、武帝去來、五天到日、と其の句法

を同うし以て結句を生ずるなり、

長信秋詞

王昌齡

奉」帚平明金殿開　且將團扇共徘徊
玉顏不」及寒鴉色　猶帶昭陽日影來

帚を奉じて平明金殿開く、且く團扇を將て共に徘徊す、玉顏は寒鴉の色、猶ほ昭陽の日影を帶び來るに及かず、

【略傳】王昌齡字は少伯、江寧の人、詩を工にす、時に王江寧と謂ふ、開元の間に進士に第す、祕書郎に補し、又博學宏詞に中らる、汜水の尉に遷る、細行を謹らず、龍標の尉に貶せらる、世亂を以て鄉里に還る、刺史閭丘曉が爲に殺さる、

【句釋】長信は宮名、漢の成帝の皇太后の住所、班婕妤成帝に幸せられ、後寵を趙飛燕に奪はれ、其の上、飛燕の譖言に逢ひ、自から求めて太后に長信に供養せんとし、此に來り、秋詞、即ち其の思を後世の詩人代て之を叙す、奉帚帝は「ハハキ」即ち婦の夫に事へる道、今は太后の爲め班婕妤が洒掃を爲す、平明は早曉なり、金殿開長信宮を云ふ、且將團扇公事の洒掃が已に終

りたるを以て今度は私事の爲め團扇を將て、共徘徊太后の徘徊に婕妤も侍するゆゑ共の字が通ず、婕妤が作る團扇の歌に曰く「常に恐る秋節の至て、涼飈炎熱を奪はんことを、篋笥の中に棄捐せられて、恩情中道に絕つ、」玉顏は美顏を云ふ、婕妤の美を云ふ、不及寒鴉色寒鴉は黑顏にて玉顏にはあらず、然るに婕妤の玉顏は寒鴉の黑顏に及ばず、及ばざる所以は、猶帶昭陽日影來寒鴉は君王の行幸する趙飛燕の昭陽宮の日影を帶て來る、婕妤は長信に在て、昭陽の日影を帶て來ること能はず、玉顏も黑顏に及かざる所以なり、

【評論】此の篇、明の胡元瑞が評に優柔艷麗、意味無窮、風骨內含、精芒外隱、如二清廟朱絃一一唱三嘆とあり、實に絕句三昧、唐以前此の詩無く、唐以後、亦此の詩無し、

吳城覽古

陳羽

吳王舊國水煙空　香徑無人蘭葉紅
春色似憐歌舞地　年年先發館娃宮

吳王の舊國水煙空し、香徑人無して蘭葉紅なり、春色は歌舞の地を憐むに似たり、年年先發く館娃宮、

【略傳】 陳羽は貞元八年に韓退之、王涯と共に及第したる進士、詳傳は逸す、

【句釋】 吳城覽古吳王の城址を弔して作る、江蘇省江寧府、是れ即ち古の吳城なり、周の太伯より夫差に至る二十五世にして亡ぶ、吳王は夫差、舊國水煙空夫差が西施と共に淫樂せし姑蘇臺も水の如く煙の如く消滅して空しきなり、香徑は採香徑の略なり、吳王が西施と稱する亡國蟲の爲め採香徑を作り、香木や香花を種ゑ游樂したる處、無人蘭葉紅當年の人は已に無く、唯蘭葉のみ衰殺してある、蘭葉は青を以て生く、紅は已に死なり、春色似憐歌舞地無情の春色も當時歌舞の地を特別に憐むが如く我は感ず、其の感ずる所以は、年年先發此の先の字は余は花の誤寫ならんと思ふ、千年來疑ふ者無きが、前句の春色の文字より見て花の字ならざるべからず、先の字、何等の姿致を有せず、館娃宮は西施亡國蟲の居住したる所、此の處を憐むに依て他處より先きに花が發くなりと解して居る者多きが、花の字無くして先の字のみにては妥當ならず、館娃宮も唐時代は靈巖寺と云ふ法師の住坊と化す、亡國蟲の菩提を弔する爲めならん、

【評論】 此の篇、吳國の衰亡を憐んで作る、極言せずして其の憐を春色に托す、唐賢の面目を保つと謂ふ可し、

江南意

于鵠

開向江邊採白蘋　還隨女伴賽江神
衆中不敢分明語　暗擲金錢卜遠人

【略傳】 于鵠は大歷貞元の間に詩名を揚げし人、諸府の從事と爲て卒す、

【句釋】 江南意此の題は樂府題なり、兒女が各自の癡情を叙べ、己が夫なり或は情人などが遠征して未だ還らず、其の間、春なり秋なり時節に應じて意を寫出するものなり、開向江邊採白蘋題に江南とあり、句には江邊とあり、題は泛なり句は切なり、蘋は水草、其の大なるを蘋、小なるを萍と謂ふ、而して白蘋は水中に生じ、青蘋は陸地に生ず、春晩に始めて開く、是を採るは單に游戲の爲にはあらず、祭祀の供物にする爲めなり、「毛詩」に于以采レ蘋と、周の文王の化を蒙むつて大夫の妻が愼んで祭祀する狀を云うたもの、女子の禮を能くする事を言ふ、采蘋は女兒に限ることと知る可し、還隨女伴賽江神家祭が了れば他の神へ往賽する、順序整然と

して句句分明なり、衆中不敢分明語意中の人の事は顯露に人に話す事能はず、自分の念頭は唯神へのみ言ふ、他人は何を念願するや判然せぬ、此の判然せぬ處に女兒の妙味がある、暗擲金錢卜遠人賽錢を神祠へ擲ち意中の人が何日還るやと卜するなり、支那では寺門の前に賣卜者が多く居るを以て此の句も卜人に問ふと考ふる者もあらん、通せざるにもあらざるが、此の句には適切ならず、

【評論】此の篇、中唐の詩として頗る情趣あり、閒字と還字と暗字が作者工夫の存する所とす巧妙の機關は此の三字に在り、近時野口寧齋は王漁洋の閨中若問二金錢卜一、秋雨秋風過二覇橋一の句は此の詩を學んで神韻更に超と辨じて居るが、秋雨とか、秋風とかの文字を使用すれば神韻と心得て居るは大誤謬なり、漁洋は神韻を主張する結果、句に於て力の強弱を忘却して居る癖あり、未沸湯の水を飲むが如き感あり、神韻宗の本尊たる、王江寧や李廉子の詩は力の強處に此の神韻を認む、漁洋の神韻は力頗る弱し、作詩者は知らざるべからず、

閒情　　孟遲

山上有山歸不得　湘江暮雨鷓鴣飛

蘼蕪亦是王孫草　莫送春香入客衣

山上山あり歸るを得ず、湘江の暮雨鷓鴣飛、蘼蕪も亦是れ王孫草ならば、春香を送て客衣に入ること莫れ、

【略傳】孟遲字は遲之、會昌五年の進士、

【句釋】閒情は細君が外君の不在中、外君を懷うて情を叙す、山上有山は出の字を云ふ、山と山と結合して出となる、外君が嘗て家を出しなり、而して其の正面は山上に山あれば路が困難なる意味を持す、歸不得「家を出づれば歸るを忘る」「山上又山であれば歸るに容易ならず」此の二意あり、湘江暮雨は寂寞たる景色を出して、以て前句の山上に對するなり、鷓鴣飛此の鷓鴣と云ふ鳥は其の啼聲を行不得と云ふ、細君が如何に外君を思ふも山上又山を行くこと到底能はざるの意味を此の句に持つ、且南に向うて北には向はざる鳥なればなり、蘼蕪は一名を芎藭「ヲンナグサ」又當歸草と云ふ、亦是王孫草此の王孫草は一名、白功草、又黃昏草、又海孫と云ふ、其れを古詩に「王孫去不歸」とあるに依て、不歸草の名を帶せたるなり、當に歸る草も若し不歸草の如くならば、莫送春香入客衣當歸草の春香が外君卽ち客の衣に入れば、外君は速か

に歸國するならんが、不歸草の香が入りては到底歸る能はず、

【評論】此の篇、隱語を以て之を出し、出と行不得と當歸と不歸との文字に細心工夫して成るもの、西域の劉氏は此の詩を評して「詩に宮商金石の聲あり」と、中唐の佳境、晩唐人の及ばざる所、一唱三嘆すべし、

曲江春草　　鄭谷

花落江隄簇暖煙　雨餘草色遠相連
香輪莫輾青青破　留與游人一醉眠

花落て江隄暖煙簇がらず、雨餘の草色遠く相連なる、香輪青青を輾り破ること莫れ、游人に留與して一醉眠らしめよ、

【句釋】曲江は長安に在る、衆人の游園地なり、此に游びて春草を咏せしもの、華落江隄簇暖煙春晩の卽目を叙す、東都の向島又荒川堤、又利根沿岸を知る者は此の句直ちに了すべし、雨餘草色遠相連華落ちて之に代るものは卽ち草色なり、香輪は貴族共の馬車を云ふ、莫輾青青破折角青青と生て來る草色も車輪で輾られては如何ともすべからず、請ふ輾破する莫れ、留與游

人一醉眠青青たる草上に眠る、此の愉快は譬ふるに物なし、

【評論】此の篇、鄭谷が七歲の時作りしとの說あり、七歲已に此の詩を作るとせば、實に天授と言はざるべからず、淸の洪北江は「纖巧且俗」と評し、王漁洋は「未レ免二陋俗一」と此の二家の評極めて當れり、野口寧齋は「草色遙看近却無」韓退之と並行して可なりと、年五十の學者の詩と七歲童子の詩と並行して可なりとは韓昌黎先生地下に之を何と謂ふや、日本の詩人の眼孔無きこと多くは此の如し、歐陽修の『詩話』に戶戶鄭谷の集を置き以て小兒に讀しめたりと、宋人は鄭谷の俗なる處を喜びしもの、我黨の士は知らざるべからず、

山路見レ花　　崔魯

曉紅輕拆露香新　獨立二空山一冷二笑春一
春意自知レ無二主惜一　恣風吹逐二馬蹄塵一

曉紅輕く拆て露香新なり、獨空山に立て春を冷笑す、春意は自から主の惜む無きことを知て、恣風吹て馬蹄の塵を逐ふ、

【略傳】崔魯は宣宗の大中年の進士、

【句釋】山路見レ花は一本、在華山作に作る、孰れにても可なり、曉紅は卽ち曉花、輕拆は「カロクヒラク」と古訓にあり、單瓣の花が拆くと見るを可とす、露香新曉花なれば猶露を帶ぶ、獨立は崔魯自身なり、空山は靜寂なる山の形容、冷笑春山路に發く花は如何に美なりと雖も觀賞する人無し、而かも開く、冷笑せらるる所以なり、春意自知無主惜知らざるを知と爲す、詩趣茲に存す、冷笑する所以なり、恣風は「勝手ニ吹ク風」吹逐馬蹄塵主人の在るならば、何ぞ馬蹄に之を委んや、花も人も世に合はずんば空しく生じ、空しく死す、感慨窮まり無し、

【評論】此の篇、前の鄭谷の詩と伯仲の間に在り、冷笑の二字工夫の存する所とす、王より此に至る六首、玉顏不レ及、春色似レ憐、衆中不レ敢、蘼蕪亦是、香輪莫レ輾、春意自知、虛字斡旋の格を見るべきなり、

逢二入京使一　岑參

故園東望路漫漫　雙袖龍鍾淚不レ乾
馬上相逢無二紙筆一　憑レ君傳語報二平安一

故園東に望めば路漫漫、雙袖龍鍾として淚乾かず、馬上に相逢て紙筆無し、君に憑て傳語す平安を報ぜよ、

【略傳】岑參は南陽の人、天寶中に進士と爲る、安西節度判官、祠部二外郎、庫部二正郎、嘉州刺史、副元帥、侍御史、等の官を經て蜀に卒す、其の詩を岑嘉州集と云ふ、所謂盛唐の大家なり、

【句釋】逢二入京使一岑參が安西州の節度使と爲り赴く時、途中にて長安卽ち京に入る使者に逢て作りしものなり、故園は岑參の故園卽ち南陽を指して云ふ、東望路漫漫南陽は東方に當る幾百里隔つか漫漫、遠くして見る能はず、雙袖は字の如し、龍鍾は種種の字義あり、淚の垂るる形容、行不レ進の貌、俗語で之を言へば「ヨワッタ」に當る、淚不乾丈夫も亦淚の乾くあらず、馬上相逢無紙筆途中で使者に逢ひ、何の用意もあらざりしゆゑ、紙も筆も持たず、憑君使者に賴む、傳語報平安書簡を托すること能はず、幸に君が岑參は無事なりしと傳語して呉れよとなり、

【評論】此の篇、語語自然、毫も精工を弄せず、淸風竹を吹く、何の巧を爲すにあらず、而かも韻致人に可なり、此の詩を讀む者。宜しく是の觀を爲すべし、

送客之二上黨一　韓翃

官柳靑靑匹馬嘶　回風暮雨入二銅鞮一

佳期別在春山裏　應是人參五葉齊

官柳青青として匹馬嘶く、回風暮雨銅鞮に入る、佳期別に春山の裏に在り應に是れ人參五葉齊しかるべし、

【句釋】送客之上黨上黨は郡、今の山西省潞安府長子縣西是れなり、官柳晉の陶侃が傳に都尉西門の官柳を盜む、官柳の名此に始まる、官にて種たる柳なり、青青春半なればなり、匹馬嘶一騎征途に就く、回風暮雨は疾風迅雨と意味を同うすと見よ、入銅鞮上黨郡に銅鞮縣あり、起承二句客の迅速に上黨に入るを云ふ、佳期別在春山裏世上に花已に散じたるも春山には猶別に吾が快心のもの在る、其れは何ぞや、應是人參五葉齊春山我が心を引くものは卽ち此の人參なり上黨郡は人參の名所にて、之を含んで走る者は噛がずと稱す、『本草』に人參は潞州の太行山上に生ず、初め生じて小なる者、一莖兩葉、深く四椏を生ず、各の五葉なり、狀人に類せり、兩莖土に入て脚の如く、兩の小莖は下に垂れて手の如く、中に一身あり、首に五葉あり、人の髮あるに象たり、高麗人の詩に三椏五葉、背レ陽向レ陰と服する者陽氣を增すが其の効なり、

【評論】此の篇、尋常の平語、而かも送別の意は了了たり、

病中遣妓　司空曙

萬事傷心在目前　一身憔悴對レ花眠
黃金用盡敎二歌舞一　留二與他人一樂二少年一

萬事傷心目前に在り、一身憔悴して花に對して眠る、黃金用ひ盡くして歌舞を敎へ、他人に留與して少年を樂しめん、

【略傳】司空曙字は文明、一の字は文初、廣平の人、進士の第に上る、韋皐に劍南に從ふ、貞元中に水部郎中たり、虞部郎中に終る、大曆十才子の一人とす、

【句釋】病中遣妓、人、仙人王江に問ふ房中の事如何と、王江答へず、強て問ふ、房中の事、猶強兵術の如し、長壽を欲する者は、百戰百勝、戰はざるに若かず、病中に妓を去らしむ、已に遲し、遲しと雖も、去らざるに及かず、妓は卽ち愛妾なり、萬事傷心在目前傷心する所以は一身憔悴せるが爲めなり、一身憔悴せる所以は萬事傷心せるが爲めなり、對花眠花は妓を言ふ、別に際し情を遣る、黃金用盡敎歌舞我が愛妾なるが故に惜むべき黃金を惜ますして、之に歌舞音曲を習はしむ、如何せん而かも主人其の人は年老、一方は年弱、互に滿足する所以のも

の無し、留與他人樂少年女も亦老年を嫌うて少年を求む、是れ自然の愛なり、我か如き老人に侍せんより、及かず他人に與て其の情を滿足せしめんには、詩人の本旨此に在り、

【評論】季昌の説に『漁隱叢話』に云ふ、富貴の人に於る、造物の靳む所、人、晩景に至りて富貴を得、宅第を置き、妓妾を舍て以て平生の不足を償ふことを免れず、白樂天が「多少の朱門空宅を鎖し、主人老に到りて曾て歸らず」司空曙が「黃金用ひ盡くして歌舞を教へ、他人に留與して少年を樂しましめん」人をして愴然たらしむ、

華清宮　　王建

酒幔高樓一百家　宮前楊柳寺前華
內園分得溫湯水　二月中旬已進瓜

酒幔高樓一百家、宮前の楊柳寺前の華、內園溫湯の水を分ち得て、二月中旬已に瓜を進む、

【句釋】華清宮は驪山に在り、陝西省西安府酒幔酒宴を開く時、四方を覆ふ幔なり、高樓一百家一百人の家と言ふにあらず、高樓の數を言ふ、宮前楊柳寺前華宮は知り易し、寺は何ぞ、曰く太常寺、曰く太僕寺、曰く光祿寺、日本今日の文部省、內務省の省に當るなり、各の大臣ありて祭祀の儀を掌る、天寶四年、百司を湯所に置く故に寺あり、柳と花と宮寺を覆ふ、內園は屋內の溫泉と見れば可、分得溫湯水湯の湧出する元は一なれども各の之を引て分ち浴便に供す、溫泉の實況を知る者は説明の要なきなり、二月中旬已進瓜瓜は夏日の物にして、春日の物にあらず、然るに華清には二月に之を進む、溫湯の爲めなり、玄宗の時に違うて口體奇巧の奉を求めて以て婦人を悦ばしむと譏る意なりと、此の詩を解する者もあり、蓋し玄宗の驕奢は他に種種あり、何ぞ之れのみならん、此の詩は唯暖地を言ふと解して可ならん、

【評論】此の篇、王建の傑作にして千秋傳ふべきもの、余は此の詩を以て神品と稱す、

宣州開元寺　　杜牧

松寺曾同一鶴棲　夜深臺殿月高低
何人爲倚東樓柱　正是千山雪漲溪

松寺曾て一鶴と同じく棲む、夜深て臺殿月高低、何人か爲に東樓の柱に倚ん、正に是れ千山雪溪に漲る、

【句釋】宣州は江南道、宣城郡、開元寺は東晉の時は景德寺と稱し、西晉には永安寺、唐に開元寺と改む、此の開元寺は、玄宗が諸郡に立し寺、日本の國分寺の如きものなり、而して宣州の開元寺を以て總本山と爲したるなり、杜牧は度度此の寺に游び、五古八十字の詩が別にあり、松寺は開元寺に松多きを以て杜が名けしなり、曾同一鶴棲此の一鶴を杜の愛人なりと解したる者もあり、鑿に過ぐ、字の如く鶴と見て置くべし、夜深臺殿月高低月の高低は臺殿の高低に由てなり、何人杜自身は曾て月夜に一鶴と同じく棲で月の高低を見たるが、今日は何人かと疑問を發するなり、爲倚東樓柱杜が五古に「廊は環る四百柱」の句あり、大坊たること知るべし、誰が今日は寺の柱に倚て居るや、正是千山雪漲溪開元寺の月夜の景も可なるが、雪景も亦可なり、然るに今日自分は他に在て寺の狀を知らず、知らず雪の溪に漲るを見る者は何人ぞや、

【評論】此の篇、諸家の注大抵は誤る、石川鴻齋の如きは、「今夜再ビ來テ宿ス、時ニ千山雪解テ溪ニ漲ル、スサマジキ景ノミ、何人カ東樓ノ柱ニヨラン」何人の意を得ざるなり、『本集』に宣州の上に「寄題」の二字あり、他に在て曾棲の事を憶ひ起し、此の詩を作る、故に今日は何人かと謂ひしなり、自分が再游せしにはあらず、野口寧齋なぞも「今日再游鶴已にあらず」と說く、悉く三體詩編輯人の爲め誤まらる、嗚呼詩を說く難い哉、

山行

遠上寒山石徑斜　白雲生處有人家

停車坐愛楓林晚　霜葉紅於二月花

【句釋】山行は字の如く山行なり、呂居仁曰く此の詩三四、曾て約する所の小女二雛ありと雖も猶容色新なるの心を謂ふ、杜の一言一句、悉く女子を以て解す笑ふべき事なり、杜知るあらば大笑を發すべし、遠上寒山石徑斜遠の字は寒山の高きを言ふ、白雲生處有人家白雲生は山の高ければなり、人家の有るに依て、我の車を停むる所以なり、正に是晁嶺中禪寺に登る景なり、坐愛楓林晚坐を古來「ソゾロニ」と訓す、何の意なるを知らずと雖も、緩の意味に解したるならん、亦妨げず、霜葉紅於二月花夕陽に照映するが故に一層の紅を現す、

【評論】此の篇、天隱も季昌も一言一句の注を加へず、注の無用を知ればなり、元の瞿宗吉の『歸田詩話』に紅葉を見る毎に、此の寫景の妙を思ふと、

寄山僧

張喬

大道本來無所染　白雲那得有心期
遠公獨刻蓮華漏　猶向山中禮六時

【略傳】張喬は、池州の人、咸通中に京兆府の解試首薦たり、黃巢の亂に遭うて伍喬が徒と九華山に隱る、

【句釋】寄山僧山中の僧に寄呈せしもの、大道は釋迦説く所の道、孔子の道にはあらず、本來は「モトヨリ」なり、無所染佛教は染を淨の反對とす、故に惡は染、善は淨とす、故に言ふ道は本來清淨なりと、白雲那得有心期大道は本來白雲の如し、東するの西するの、南又北などと心期は無し、遠公は惠遠、東晉の世、廬山に蓮社を設け道を修せし高僧、獨刻蓮華漏遠公は持律堅固なれば中を過ぎ食はず、然るに時刻が分明ならざれば、或は中を過ぎて食ひ破戒を免れず、依て弟子の惠要に命じて、十二瓣の蓮を作り、一時を經れば一瓣落る、其の暑景差ふ無ければ

中を過ぎて食ふの患ひ無し、又行道看經も是に由て正す、猶向山中禮六時佛教にて初時と中時と後時、此の三時を以て晝と夜に分つ、卽ち六時なり、漏なぞを刻むは畢竟本來の大道を知らざる者と嘲りたるなり、

【評論】此の篇、佛教の大本より見て、區區たる時刻なぞに執著する僧は、白雲の無心なるに及ばずと嘲笑したるもの、實に達見と謂ふ可し、蓋し山僧を罵倒し、遠公を嘲笑したるにはあらず、唯道は更に大、要するに白雲無心なるが如きを貴しと爲すに在り、佛學者か、或は禪を了解したる人にあらずんば、此の詩を得ず、又此の詩を解せざるなり、我邦人の注脚、盡く妄斷妄解、張喬其の人に笑はるるを知らず、

寄人

張偓

酷憐風月爲多情　還到春時別恨生
倚杜尋思倍惆悵　一場春夢不分明

酷だ憐む風月の爲めに多情なることを、還て春時に到りて別恨生ず、杜に倚て尋思して倍す惆悵す、一場の春夢分明ならず、

【句釋】張侹は唐書に傳を闕く、寄人は自分の妻に與へしならん、酷憐は非常に憐むなり、風月爲多情風月は多情にあらず、我が多情よりして風月も亦多情なり、卽ち主觀的に之を言ふ、還到春時別恨生還は「カヘル」の義を持つ字なれば、前に一度、別恨を生じ、今や春時に到りてマタ別恨生ずることとなる、二度も三度も別恨の生ずるは風月が多情なるに由る、倚杜尋思別時の事をドウしたカウしたと思ひ出すを尋思と云ふ、倍惆悵モダエル事を惆悵と云ふ、一場春夢不分明一場は少間又暫時と同じ、愚にも付かぬ事を兎や角思ふが故に夢中に感情が起れども前も後も無く、眞も幻も無く、要するに分明ならざるなり、

【評論】此の篇、夫の婦に對する至情發露して酷だしく淫語ならずと雖も、蓋し溫柔鄕の語、深く論ずるに足らず、春二字あり、亦疵と謂可し、岑參より此に至る八首皆、起句に大要を叙し、第三句直ちに其の事を指し、以て四句を引き出すの格、聊か議論ありと雖も、伯弱の定むる意は上の如きなり、

過南鄰花園　　雍陶

莫怪頻過有酒家　多情長是惜年華
春風堪賞還堪恨　纔見開花又落花

怪む莫かれ頻りに酒ある家に過るを、多情長く是れ年華を惜む、春風は賞するに堪へ還恨むに堪たり、纔かに開花を見れば又落花、

【句釋】過南鄰花園句中に酒家とある、南鄰の花園卽ち是れなり、莫怪頻過有酒家吾が頻頻と酒家に入るを變に思ふことを休よとなり、其の酒家に入る意は酒にあらずして、多情長是惜年華花を見んが爲め酒家に入る、多情の文字は我邦俗の考ふる意味とは違ふ、熱情の事なり、俗語の「浮氣」にはあらず、時時刻刻青春の去るを惜む、春風堪賞還堪恨開花は賞するに堪ふるが落花は恨むに堪へたり、昨賞し今恨む、多情なる所以なり、纔見開花又落花開落共に心に關す、多情年華を惜む所此に在り、

【評論】此の篇、晩唐の佳作、宋人の法門、多く此等に出づ、

宮詞　　杜牧

監宮引出暫開門　隨例須朝不是恩
銀鑰卻收金鎖合　月明華落又黃昏

監宮より引て出暫らく門を開く、例に隨て須らく朝すべし是れ恩にあらず、

銀鑰卻て收めて金鎖合す、月明華落て又黃昏、

【句釋】宮詞は前に辨せり、監宮は宮の阿監、妃嬪の老たる者、所謂女官長なり、引出暫開門女官の出入を監督して門を開く、隨例は毎日の例、出も入も同じ、須朝不是恩千も二千も宮女輩が朝勤するが、君寵を蒙むる者は一人、餘は夜幸を得ずして退朝す、恩ならざる所以なり、銀鑰は銀の鍵なり、卻收金鎖合鎖は錠なり、宮女輩が一一己が室へ歸れば宛かも囚人同樣、其の室は錠を以て出入するを得ざらしむ、月明華落又黃昏此の七字を種種に曲解する者あるが、要するに恩を蒙むらずして去年今年又來年と過ぎ去ると云ふの意なり、此の意を月と花と黃昏の字を以て美麗に爲したるのみ、

【評論】此の篇、宮詞として晩唐の最上乘に屬するもの、小杜にあらざるより此の詩を得ざるなり、

漢江

溶溶漾漾白鷗飛　綠淨春深好染衣
南去北來人自老　夕陽長送二釣船歸一

溶溶漾漾として白鷗飛、綠淨く春深うして好し衣を染むるに、南去北來人自から老、夕陽は長く釣船の歸るを送る、

【句釋】漢江秦州の天水縣に出るを西漢水と謂ひ、大安郡三泉縣に出るを東漢水と謂ふ、今日の湖北武昌は漢江の中間とす、溶溶は水の盛貌、漾漾は水の動貌、白鷗飛此の時を得意とす爲は此の白鷗なり、綠淨水綠の如く淨し、春深好染衣衣が水色に映じて染る如きなり、南去北來名を求め利を求め、南北に去來忙がしうして、人自老奔走中に紅顏は白頭に化す、夕陽長送釣船歸此の江の有らん限り夕陽は長く所謂永久に釣船の歸るを送る、此の景は長く人は短きなり、

【評論】此の篇、小杜の至るものにあらざるも、其の外面に表はれざる所に其の悲惋の存する所あり、亦以て誦すべし、

寄二維揚故人一

張　喬

離別河邊綰二柳條一　千山萬水玉人遙
月明記得相尋處　城鎖二東風一十五橋

離別河邊に柳條を綰ぬ、千山萬水玉人遙かなり、月明にして記得す相尋ぬる處、城は東風を鎖す十五橋、

【句釋】維揚は所謂揚州なり、故人は許棠なり、離別河は河の名ならん「河邊に離別」にはあらず、綰げ枝を環の形にワガネるなり、環は還なり、早く還られよとの意を寓す、柳條條は條枝「エダ」なり、千山萬水は故人の遠游を云ふ、玉人遙張は池州に在り、許は揚州に在り、東西相遙かなり、『南史』に謝晦、謝混、風流、江左第一と爲す、宋の武曰く一時頓に兩玉人有りと、其の人高潔玉の如くなればなり、月明記得曾て離別せし時月明に會ふ、然るに今夜又月明に會うてフト曾游の事を憶ひ起すなり、相尋處曾て相尋ねし處なり、城鎖東風十五橋揚州は昔十五橋あり、後、二十四橋となる、東風を鎖すとは城中に東風が滿ることなり、「別後十五橋邊定めて戸を春風に鎖し」と解したる古人の說は大なる誤なり、揚州は繁華の地、女子美麗多く而して擧止婉慧、諸州無き所、何ぞ戸を春風に鎖すが如き寂寥の時あらん、

【評論】此の篇、揚州なるが故に、特に其の人を玉人と稱して而して結句に十五橋を出す、巧妙の手段を隱約の中に表はす、好絕句と謂つ可し、

逢友人之上都

僧法振

玉帛徵賢楚客稀　猿啼相送武陵歸
潮頭望入桃花去　一片春帆帶雨飛

【句釋】法振は姚合同時の人、傳は未詳逢友人之上都友人が京兆へ赴くに逢うて作る、玉帛は玉帛賢を徵して楚客稀なり、猿啼相送りて武陵より歸る、潮頭の望は桃花に入り去る、一片の春帆雨を帶て飛、

【句釋】法振は姚合同時の人、傳は未詳逢友人之上都友人が京兆へ赴くに逢うて作る、玉帛は朝廷より人を徵す所の招狀なり、「ツカヒ物」にはあらず、徵賢野に遺賢なきは上に明天子あればなり、楚客稀暗愚の天子懷王は賢を用ひず、卽ち屈原が楚客と爲て流離し、遂に身を投するに至る、今日は此の如き事なし、野に楚客稀なる所以なり、猿啼は友人を送る時聞く、相送武陵歸湖南の武陵より陝西の京兆へ歸る、題の之とは卽ち歸るなり、路として二百里程なり、潮頭望楊子江頭に立て其の歸影を望む、入桃花去其の人の影は冉冉桃花の影に藏る、必ず桃花ならず、武陵の文字前にあればなり、一片春帆帶雨飛其の迅速に帆を揚げ去るを言ふ、喜心の甚しき意味を含む、

【評論】此の篇、釋氏の詩として穩にして妥、平にして澹、澹にして腴、筆墨の修羅たらず、大乘の法門に適ふものなり、此に至る五首、第二句を以て第三句を出し、第三句一呼すれば、第四句之に應ず、一呼一應の格と古來云ふ、伯弱の意如何を知らず、

山中　　顧況

野人自愛山中宿　況是葛洪丹井西
庭前有箇長松樹　夜半子規來上啼

野人自から愛す山中の宿、況や是れ葛洪が丹井の西、庭前箇の長松樹あり、夜半子規上に來て啼く、

【略傳】顧況字は逋翁、姑蘇の人、至德の進士、性恢諧にして柳渾、李泌と友たり、德宗の時渾、政を輔けて秘書郎を以て召す、泌が相と爲るに及んで自から謂ふ當に達官を得べしと、久うして著作郎に遷る、詩語調謔に坐して饒州の司戶に貶せらる、茅山に居し壽を以て卒す、

【句釋】山中は越の山中、卽ち耶溪の雲門寺、野人自愛山中宿讀で字の如し、況是葛洪丹井西耶溪の雲門寺は天下の名藍として名高し、晉の葛洪が仙丹を練て其の用に供せし水も此の山中

に在り、庭前有箇長松樹仙人の長壽なるが故に特に松を言ふにはあらず、雲門寺實に此の長松多きなり、夜半子規來上啼是れ顧況が宿泊せし夜の實事ならん、鴻齋老人の說に元の時、日本を攻めん爲め天下の良材を斫て船を造らんとす、既に雲門寺の松を斫んとす、僧斷江、詩を作て曰く斧斤若到耶溪上留箇長松聽子規と終に斧斤の厄を免るるを得と、

【評論】此の篇、山中の實況、目前に宛然たり、晃嶽に住する者は、大抵此の實狀を知る、沈歸愚の『別裁』に顧況の「宿昭應詩」を載す、武帝祈靈太乙壇、新豐樹色繞千官那知今夜長生殿、獨閉空山月影寒山中の詩の及ばざる所とす、

酬曹侍御過象縣見寄　　柳宗元

破額山前碧玉流　騷人遙駐木蘭舟
春風無限瀟湘意　欲採蘋華不自由

破額山前碧玉流る、騷人遙に駐む木蘭の舟、春風限り無き瀟湘の意、蘋華を採んと欲するに自由ならず、

【略傳】柳宗元字は子厚、河東の人、博學宏詞科に擧げられ、貞元間に王叔文、政を得て內禁

に引て與に事を計る、俄かにして叔文敗す、坐して永州の司馬に貶せらる、元和十年柳州の刺史に徙る、十四年卒す、年四十七、文章韓愈と二大家と稱す、詩は王、孟、韋、柳、の四大家と稱せらる、

【句釋】酬は和なり、曹は姓、侍御は官名、象縣は柳州縣の名、曹が湘南に移さるる時、象縣を過ぎ其の消息を柳に傳ふ、柳依て之に酬ゆるなり、破額山は五祖禪師が寺を立し處にて柳州に在るとの說なり、余は未だ其の證を見ず、蓋し子厚の言ふ所、誤なけん、碧玉流は水を形容して言ふ、騷人は曹侍御、遙駐木蘭舟江中に舟を駐むる所以は、破額山を前面に仰ぎ瞻ればなり、木蘭樹を以て造る舟は沈溺の患なしと信ぜらる、春風無限瀟湘意瀟湘の地は曹が此に住して暫らく象縣を過ぐ、此の間に於て何か微意を表せんと欲すれども自分は流寓の身にて如何ともすべからず、春風に對して種種限り無き意の起る所以、欲採蘋華不自由瀟湘と云ふ水を前句に出すを以て此に蘋華の字を以て之を起す、蘋華を採らんと欲するは曹に獻せんが爲めなるも、如何せん流寓の罪ある身、自由ならざる所以なり、『左傳』隱公三年に蘋蘩薀藻の菜、鬼神に薦むべく、王侯に羞むべしと、

【評論】此の篇、流寓して其の不平を彼の屈原に比する意あり、離騷の意を以て構成したるこ

と明白なり、沈歸愚曰く詞特微婉と、良とに然り、

宿武關

李涉

遠別秦城萬里游　亂山高下入商州
關門不鎖寒溪水　一夜潺湲送客愁

遠く秦城を別れて萬里に游ぶ、亂山高下商州に入る、關門鎖さず寒溪の水、一夜潺湲として客愁を送る、

【略傳】李涉は李渤が兄なり、初め廬山に隱る、憲宗の時、太子通事舍人と爲る、太和中に大學博士と爲る、自から清溪子と號す、

【句釋】武關は今日の陝西省商州、楚の懷王の會合したる有名の地、遠別秦城此の秦城は長安なり、萬里游秦城と商州正確の里程としては萬里は大に過ぐと雖も、亂山高下の難を超ゆるとせば萬里と稱するも不可無し、入商州商州は嘗て商鞅食邑の地なり、四面皆山、所謂七盤十一繞の險あるなり、關門不鎖春秋の世、秦の昭王詐りて一將軍をして秦王と爲し、楚の懷王を此の關に招致し、以て關門を鎖し出る能はざらしむ、今日は太平にして之を鎖さずとなり、

寒溪水商州は山國なり、水亦從て多し、一夜宿するは以て夜の字に切なり、潺湲は水聲を形容す、羇客愁旅愁も懷王の當時を憂へたることも此の客愁の中に含む、

【評論】此の篇、實に絶句の上乘として、千古名篇の中に數ふ、精練の極、流暢となる、李渉より少し後輩の范據の『雲溪友議』に曰く李博士嘗て九江を過ぎ皖の西に至る、忽ち大盜の其の征帆に鼓するに逢ふ、數十人皆、兵仗を持して闌入す、從者曰く李博士の船なり、其の中豪首曰く若し是れ李博士ならば、吾輩金帛を須ひず、但一詩を乞ふ、李乃ち一絶を贈る、豪首餞路且厚く、李亦敢て却ぞけずと、詩に云ふ「春雨蕭蕭江上の村、綠林の豪客夜知聞す、相逢て用ひず相廻避するを、世上如今半は是れ君、」

題開聖寺

宿雨初收草木濃　羣鴉飛散下堂鐘
長廊無事僧歸院　盡日門前獨看松

宿雨初めて收まり草木濃なり、羣鴉飛び散ず下堂の鐘、長廊無事僧院に歸る、盡日門前獨松を看る、

【句釋】開聖寺は未詳、宿雨初收連日の雨を宿雨と云ふ、今日は漸く晴天と爲る、草木濃綠滴らんとするの景、羣鴉飛散下堂鐘上堂の鐘は、齋前の報、下堂の鐘は齋後の報、此の鐘聲に驚て群鴉が四散する、長廊無事齋後は亦日課なければ無事なり、僧歸院各の其の房に歸る、盡日門前獨看松松を看る者は誰ぞや、卽ち作者李渉なり、余昔し僧が無事にして松を看ると解したり、今其の誤を知る、

【評論】此の篇、清絶淡絶、以て後世、寺觀詩の法と爲すべし、李渉博士は寺に游ぶ詩、集中頗る多し、鶴林寺の「竹院を過ぎ僧に逢て話するに因て、又得たり浮生半日の閒」は特に有名とす、

宿虛白堂

秋月斜明虛白堂　寒蛩唧唧樹蒼蒼
江風徹曉不得寐　二十五聲秋點長

秋月斜明なり虛白堂、寒蛩唧唧として樹蒼蒼、江風曉に徹して寐るを得ず、二十五聲秋點長し。

李郢

【略傳】李郢字は楚望、長安の人、大中の進士、藩鎮從事と爲り、侍御史に終ふ、

【句釋】虛白堂は浙江の杭州に在り、虛白亭とも稱す、唐時建つ、錢氏後に都會堂と改たむ、唐の諸家皆詩あり、秋月斜明は正に曉ならんとする時、虛白堂此の三字秋月斜明を承けて、頗る適確なり、寒蛩の啼聲は唧唧たり、林樹の曉色は蒼蒼たり、江風徹曉堂は飛來峯下に在りて以て西湖に對す、湖風卽ち江風なり、不得寐景色の爲め、詩情の爲め寐るを得ざるなり、二十五聲は時計の數なり、秋點は秋漏卽ち時計、長は長夜なり、到當一夜寐られずして曉天に及ぶ、

【評論】此の篇『唐詩語林』に其の清思月を帶び、其の高調雲に入ると、二色三聲詩の語あり、月色と樹色、蛩聲と風聲と漏聲となり、『湖山便覽』に樂天と羅隱の詩を出し、此の詩を出さざるは杜撰なり、

晴景

王駕

雨前初見華間葉　雨後兼無二葉底花一
蛺蝶飛來過二墻去一　應二疑春色在二鄰家一

雨前には初めて見る華間の葉、雨後には兼て葉底の花無し、蛺蝶飛び來て

墻を過き去る、應に疑ふべし春色の鄰家に在るかと、

【句釋】王駕字は大用、蒲中の人、自から守素先生と號す、官、尙書禮部員外郎に至る、司空圖、鄭谷と相友とし善、詩家の所謂晩唐に屬す、晴景は晩春の晴景、雨前初見華間葉穀雨の前卽ち淸明後十六日には初めて華間の葉を見る、此の句は葉を主として言ふ、雨後兼無葉底花穀雨後には兼葉の裏に華を見る無し、此の句は華を主として言ふ、蛺蝶飛來過墻去蛺蝶も香を求めて飛で來るも香已に無きを以て我家の墻を過ぎ去る、應疑は應に思ふなるべきの意、蝶の疑ふにて、人が疑ふにはあらず、春色在鄰家飛去て鄰家に向ふも、何ぞ知らん、鄰家も亦春色は已に無きなり、

【評論】此の篇、格は高からざるも、韻は甚だ佳、晩唐の正調として、其の面目を見る、王半山は初を不と、兼を全と、飛來を紛紛と、應を却と改たむ、半山の人品遺憾なく發揮すと謂ふ可し、王駕の意は得ざるなり、

社日

鵝湖山下稻粱肥　豚栅雞塒半掩扉

桑柘影斜秋社散　家家扶得醉人歸

鵝湖山下稻粱肥たり、豚窄雞塒半扉を掩ふ、桑柘影斜にして秋社散ず、家家醉人を扶け得て歸る、

【句釋】社日は土地神を祭る日なり、二十五家ある地、必ず一社あり、立春後第五の戊日を春社と稱す、立秋後第五の戊日を秋社と稱す、共に五穀成熟を祈るが爲めとす、漢以前よりの習慣なり、鵝湖山下信州鉛山縣の西南十五里に鵝湖山あり、昔、龔氏山下に住し多く鵝を養ふ故に此の名あり、稻粱肥晩秋の豐熟を言ふ、豚窄豚は多く窄卽ち坑に養ふ、雞塒雞は塒卽ち垣を作りて養ふ、半掩扉全家不在の證據を言ふ、桑柘桑「クハ」柘も「クハ」なり、村舍の景、稻粱も肥、桑柘も盛、豐年たる景象宛然たり、影斜日影が桑柘を照して斜なり、秋社散祭罷んで各自に退散す、家家扶得醉人歸近時我邦の六如上人が、醉人醉人を扶け得て歸るは、此の家家の二字を醉人と改め以て我句と爲す、是も亦實況なり、

【評論】此の篇、『孟子』の意を用ひて一篇を構成し、聊かも頭巾氣無く、晩唐の佳境此に超ゆるは無し、歸愚の『別裁』に此の詩あり、而して「晴景」は採らず、

自河西歸山　　司空圖

水闊風驚去路危　孤舟欲上更遲遲

鶴羣長遶三珠樹　不借閒人一隻騎

水闊く風驚て去路危ふし、孤舟上らんと欲して更に遲遲、鶴羣は長く遶る三珠樹、閒人に一隻を借して騎らしめず、

【略傳】司空圖字は表聖、河中虞鄉の人、或は云ふ洞州の人、咸通の末、進士に擢んでらる、王疑牓して幕府に置く、召して殿中侍御史と爲る、勁せられて三遷す、後、禮部員外郎と爲り郎中に遷る、僖宗の朝、知制誥より中書舍人に遷る、諫議大夫に拜す、昭宗の朝、兵部侍郎と爲る、足疾を以て辭して中條山に歸る、先人の故居なり、哀帝弑せらると聞て食はずして卒す、年七十二、

【句釋】河西は今日の甘肅省涼州、歸山山は卽ち中條山なり、水闊は大水、風驚は大風、去路危李茂貞が叛亂の爲め、哀帝は朱全忠に弑せらる、國家の危亂此より甚だしき時無し、孤舟欲上中條山は山西省の蒲州府、涼州より蒲州に至る、山間の江を舟にて下る、更遲遲氣は盛ん

なるも身は盛んならざるを言ふ、足疾を憂ふる意、國家を憂ふる意もある、鶴羣長遶三珠樹蓬萊の仙境には鶴多く羣を爲し以て三珠樹を遶る、三珠樹は理想の木にて、實在の樹にあらず、赤水の上に此の樹あり、葉皆珠を爲すと、而して此の鶴は仙人を乘て四方へ飛ぶが其の用と爲ず、不借閒人一雙騎閒人は司空圖自身を言ふ、羣鶴の中で一隻だも借りて我が歸る用に供せば必ず早早歸れるならんが、其れは能はずと嘆息するなり、

【評論】此の篇、司空表聖が極めて意義のある詩、尤も稱せらるる所以なり、詩は其の人の高格と共に傳ふべし、

野塘　　韓偓

侵曉乘涼偶獨來　不因魚躍見萍開
捲荷忽被微風觸　瀉下清香露一盃

曉を侵し涼に乘じて偶獨來、魚の躍るに因らざれども萍の開くを見る、捲荷忽ち微風に觸れられ、瀉下す清香露一盃、

【句釋】野塘の曉景を詠ず、侵曉乘涼偶獨來夏日游歩すべきは曉天に在り、曉天は涼氣尚ほ在

ればなり、不因魚躍見萍開萍は「ウキグサ」なり、自然に生氣あれば開く、魚の生氣を借り始めて開くにあらず、捲荷は「マキハチス」忽被微風觸自から生氣あるもの、況や微風の之を吹くあり、露を落さざるを得ず、瀉下清香露一盃微風の爲め荷より瀉下する露は清香が一盃なるの意なり、

【評論】此の篇、李義山を學んで其の髓を得たるものなり、顧況の山中より此に至る九首、三四の句に力强くして以て一二の句を破る法なり、破るとは卽ち應ずることなり、

歲初喜皇甫侍御至　　嚴維

湖上新正逢故人　情深應不笑家貧
明朝別後門還掩　修竹千竿一老身

湖上の新正故人に逢ふ、情深うして應に家貧を笑はざるべし、明朝別後門還て掩ふ、修竹千竿一老身、

【略傳】嚴維字は正文、越州の人、越の諸暨及び河南尉と爲る、又河南嚴中丞が幕府に充らる校書郎に終ふ、

【句釋】歳初は正月、皇甫は皇甫曾字は常冉、侍御は官名、湖上は西湖、嚴が餘姚の令尹たりし時、新正逢故人題に喜ぶとあり、一句先づ喜意を言ふ、情深故人の友情深きなり、應不笑家貧故人の爲め厚く饗應せんと欲するも、家貧にして意の如くならず、一汁一菜、而かも故人は竟に笑はざるなり「衣を曝して多く笑ふ阮家の貧」の句あり、晉の阮籍の貧を人が笑ふ事より出づ、鴻齋は南史の劉伯龍の鬼笑を引く、斷じて此の詩意にあらず、明朝別後門還掩故人去て後、復他に故人なければ門掩はざるべからず、修竹千竿一老身故人去て後の故人は卽ち修竹千竿なり、且是れ貧家としての富なり、我が一老身を此の修竹千竿中に養ふなり、

【評論】此の篇、清絶俗塵に染まず、嚴維其の人の高尚知るべきなり、

送二魏十六一　皇甫冉

清夜沈沈此送君　陰蛩切切不レ堪レ聞
歸舟明日毘陵道　回レ首姑蘇是白雲

清夜沈沈として此に君を送る、陰蛩切切として聞くに堪へず、歸舟明日毘陵の道、首を回せば姑蘇是れ白雲ならん、

【略傳】皇甫冉字は茂政、潤州丹陽の人、弟の曾と同しく進士と爲り、無錫尉を授けらる、難を避て陽羨に居る、後左金吾衞兵曹參軍左補闕と爲る、十歳文を爲り、張九齡稱して清才と曰ふ、

【句釋】送魏十六魏氏、十六は其の排行、清夜沈沈は情の盡きざるなり、此送君此處に於て君を送る、陰蛩切切は思の限り無きなり、不堪聞人を送る、蛩も亦哀聲あり、聞くに堪へざるなり、歸舟明日毘陵道今日の江蘇省常州府武進縣は卽ち毘陵なり、回身姑蘇是白雲姑蘇は蘇州府毘陵の鄕地とす、白雲は天上の白雲を言うて以て是れ慈親が家と爲す、狄仁傑は孝心の厚き人なり、曾て云ふ、白雲の孤飛を見て曰く吾が親其の下に舍せりと、

【評論】此の篇、張が評して清才と曰ふの面目を見るに足る、唐人の詩の妙處は多く小細工を弄せざる所に在り、

送二王永一　劉商

君去春山誰共游　鳥啼花落水空流
如今送レ別臨二溪水一　他日相思來二水頭一

君去らば春山誰と共に游ばん、鳥啼き花落ち水空しく流る、如今別を送つて溪水に臨む、他日相思はば水頭に來れ、

【句釋】王永は傳未詳、君去春山誰共游春山好しと雖も、良友去る、以後は誰と共に游賞せんや、鳥啼花落水空流春鳥も春花も春水も遂に皆空しく賞するの心無し、如今は只今と同義、送別臨溪水溪水の邊まで其の行を送るなり、他日は如今と對應す、相思來水頭君も相思はば水頭に來れ、我も亦水頭に來らんとなり、

【評論】此の篇、水字を運用して、語自然に出で毫も不自然の態なし、聞く劉商其の人仙を好み、金丹を練ると、詩仙味ある固より其の所なり、

酧楊八副使赴湖南見寄　劉禹錫

知逐征南冠楚材　遠勞書信到陽臺
明朝若上君山望　一道巴江自此來

知ぬ征南を逐て楚材に冠たることを、遠く書信を勞して陽臺に到る、明朝若君山に上りて望まば、一道の巴江此より來らん、

【略傳】劉禹錫字は夢得、漢の景帝の子、勝中山王の子孫、其の七世の祖亮洛陽に遷る、比部と爲る、都昌の人、進士に第し、博學宏詞科に登る、貞元間、王叔文と交はる、叔文敗るに及んで朗州司馬に貶せらる、會昌の初、禮部尚書を以て卒す年七十二、戶部尚書を贈す、

【句釋】酧は酬なり、楊八副使太宗、招討使の官を設く、副使は次官なり、湖南は卽ち今日の湖南省なり、知逐征南此の征南は招討使を指す、征南將軍の名は晉の杜預に始まる、逐は副使が征討使の行を逐ふなり、冠楚材楚國は才人多し、故に俊才を稱して楚材と云ふ、遠勞書信湖南より楊が信を劉に傳ふ、到陽臺劉は此の時、朗州に在り、陽臺は朗州の尤も名高き地、明朝若上君山望君山に上りて劉の陽臺邊を望めばなり、故に上る者は楊にて、劉にはあらず、寧齋は「行て君山に上るは楊の行を思ふなり」と非常に誤まる、朗州には君山なる山無し、湖南の岳州府に湘山あり、一名を君山と云ふ、一道巴江自此來巴江は陝中より朗州を經て岳州に至る、江道通ずるに依て我が思が君の方に流れ至る必定なり、鯉魚の書を含んで至らんとなり、書信は山には鴻信、水には鯉信と云ふ、

【評論】此の篇、他人に在ては可なり、劉に在ては光采奕奕ならず、

逢鄭三游山　　盧仝

相逢之處草茸茸　峭壁攢峯千萬重
他日期君何處好　寒流石上一株松

相逢の處草茸茸、峭壁攢峯千萬重、他日君を期す何れの處か好、寒流石上一株の松、

【略傳】盧仝は玉泉子と號す、東都に居す、韓愈其の詩を愛し、厚く之を禮す、嘗て月蝕詩長短句の古詩を作り以て元和の逆黨を譏る、愈其の工を稱す、甘露中、宦者の爲め殺さる、

【句釋】逢鄭三游山此の山は少室山なりとの說あり、相逢之處草茸茸草の發生して盛んなるを茸茸と云ふ、峭壁は峭しき壁、攢峯は集まる峯、盧仝の住宅は河南省河南府城内にて、其の別墅は韓愈と同じく河南省懷慶府に在り、少室山を隔つる遠からず、千萬重非常に山が重なる、他日期君今は途中にて相逢ふ、而して他日の再會を約す、何處好、三塗山、達磨洞、天壺、佳景隨處に在る、而かも好處は何處ぞ、曰く寒流石上一株松一株の老松、寒流に傍ふ、此の處を期して他日再會せんとなり、

【評論】此の篇、風塵外に超越して、千載の下、其の人の高潔なるを思はしむ、盧仝の茶に於る、陸家の神と亦共に傳ふべきなり、

重贈商玲瓏兼寄樂天　　元稹

休遣玲瓏唱我詞　我詞多是寄君詩
明朝又向江頭別　月落潮平是去時

玲瓏をして我が詞を唱へ遣むるを休よ、我が詞多くは是れ君に寄する詩、明朝又江頭に向て別るれば、月落ち潮平ならん是れ去時、

【略傳】元稹字は微之、河南の人、建中元年に生る、十五、明經に擢んでらる、元和の初、制科對策第一に擧げらる、左拾遺と爲る、長慶の初、祠部郎中知制誥に擢んでらる、俄かに中書舍人翰林承旨學士に遷る、太和に尚書左丞、武昌節度使と爲て卒す、年五十三、尚書右僕射を贈す、樂天より少きこと五歲なり、

【句釋】重贈は二度、商玲瓏は餘杭の歌妓、元稹、越州に在りし時、邀へて家に留め、作る所の歌詩を皆傳習して歌はしめたるなり、今詩を作り、之に與へ兼て樂天に寄す、休遣玲瓏唱我

詞玲瓏が歸るに際し、樂天の家に行かん、家に行くとも我が詞詩もを唱へしめては不可、若し唱へしむれば、復罪を得る虞あり、我詞多是寄君詩我と君と二人の間に於て歌ふべきもの、他人へ傳唱すべきものにあらず、明朝又向江頭別玲瓏と元稹と別るるなり、月落潮平是去時別るる時の早晨なるを云ふ、故に月落と云ふ、玲瓏此の詩を以て樂天に示し且云ふ、三句に明朝あり四句に月落あり、音律に適はずと、樂天此の事を微之に報ず、微之改めて「却て江頭に向て回棹を整へ」とす、樂天絕倒したりと、

【評論】此の篇、先輩評して宛轉格と云ふ、所謂玲瓏宛轉、玉を盤上に轉ずる如くなればなり、

採松華

姚合

擬服松華無處學　嵩陽道士忽相敎
今朝試上高枝採　不覺傾翻仙鶴巢

松華を服せんと擬し處學なし、嵩陽の道士忽ち相敎ふ、今朝試に高枝に上りて採れば、覺えず傾翻す仙鶴の巢、

【略傳】姚合は開元の宰相、崇が曾孫なり、元和中に進士と爲り、武功主簿、富平萬年尉、監察御史、戶部員外郎、荊州杭州二刺史、秘書少監諫議大夫等の官を經て卒す、其の選に『極玄集』あり、

【句釋】擬服松華松華を服する表面は仙ならんと欲するに在る、其の實此の松華は人の陽勢を強からしむる効あればなり、無處學其の法を知らざるなり、嵩陽は嵩山なり、道士嵩山には道士多く住し此の松華を服する法に精し、忽相敎普通敎は仄用なるが、今は平用とす、今朝試上高枝採道士の敎示に依て喬松の上に上りて華を採らんとす、不覺傾翻仙鶴巢鶴は松頂に巢ふ鳥、餘りに忽卒として其の巢を傾翻せしむ、

【評論】此の篇、松華に托して、其の仙の無功なるを言ふ、松華を以て製したる丹は、効の顯著なる反對に、毒も亦顯著なり、歷代の天子が、此の陽勢を强烈ならしめんが爲め、多く之を服す、憲宗の如きは忽ち中毒して死せり、良とに一笑を發すべし、

哀孟寂

張籍

曲江院裏題名處　十九人中最少年

今日風光君不」見　杏花零落寺門前

曲江院裏名を題する處、十九人中最も少年、今日風光君見えず、杏花零落す寺門の前、

【句釋】哀は哭なり、孟寂の傳は未詳、曲江院裏題名處長安曲江の慈恩寺に雁塔あり、唐の韋肇、及第して名を此に題す、之に倣うて遂に例となる、孟寂も亦題名せしなり、十九人中最少年及第者十九人中の孟は最少年なり、進士十七人、博學宏詞二人故に十九人と爲る、今日風光君不見最少年の及第は賀すべきが、才子短命是れ哀しむべし、杏花零落寺門前唐の及第進士宴を杏園に賜ふ、以て孟を杏花に譬へ、其の零落死を痛む、

【評論】此の篇、聊かも奇を弄せず、巧を用ひず、而かも其の哀情言外に在り、

患」眼

三年患眼今年較　免與風光」便隔生

昨日韓家後園裏　看華猶自未分明」

三年眼を患て今年較ゆ、風光と便ち生を隔つることを免がる、昨日韓家後園の裏、華を看て猶自から分明ならず、

【句釋】三年患眼今年較較は「ヤヤ」なり全愈にはあらず、然れども「イユ」と訓讀す、免與風光便隔生若し盲となれば、風光と隔生する、昨日韓家後園裏張は韓門の弟子なれば、常に退之が家に出入す、看華猶自不分明較の字と不分明の字と相響く、

感」春

遠客悠悠任病身」　誰家池上又逢」春

明年各自東西去　　此地看花是別人

遠客悠悠として病身に任す、誰が家の池上か又春に逢ん、明年各自に東西し去る、此地に花を看る是れ別人ならん、

【句釋】感春は春日感慨を叙す、遠客悠悠任病身張は目疾あるのみならず、身疾も有りしが如し、誰家池上又逢春春に逢うて春を賞す病身なれば誰が家と定むる能はざるを言ふ、明年各自東西去我も彼もなれば各自と言ふ、此地看花是別人風光は別ならざるも賞する人は我にあらずして他に在らんと、

【評論】　此の篇、張戒の評せる籍が詩は思深くして語精なりとの確當なるを覺ゆ、雍陶の「勸二行樂一」に老去風光不レ屬レ身黃金莫レ惜買二青春一白頭縱作二花園主一醉折二花枝一是別人は宋人の如く全く次韻にして其の作法も類す、唐人の次韻は他に亦之れ有る無し、

西歸出斜谷　　雍陶

行過險棧出褒斜　出盡平川似到家
無限客愁今日散　馬頭初見米囊花

【句釋】　西歸出斜谷は「西ニ歸リテ斜谷ヲ出ヅ」なり、雍は蜀人、大中に出でて簡州の刺史と爲る、故に西歸と曰ふ、行過險棧棧は「カケハシ」成都の枌里を出で簡州に赴く途中、此の棧道を過ぐ、出褒斜褒谷は南口、斜谷は北口、孔明が郿を攻むる時、此の斜谷より出づ、斜谷より鳳州の界に至る百五十里、棧閣二千九百八十九間、板閣二千八百九十三間、出盡平川似到家險棧を過ぎ盡して平川を出づれば、我が鄉に近づく乃ち家に到るかとの喜心生ずるなり、無限客愁今日散、俗に「ヤレヤレ」と云ふ、安心を生じ、不安の心漸く滅す、馬頭初見米囊花當時蜀に此の米囊花ありて他國には曾て無し、此の花の異名曰く御米花、曰く米穀花、曰く不移花、曰く瞿粟、俗に「ケシノハナ」と云ふ、

【評論】　此の篇、旅中の辛苦と、故鄉の歡喜と兩意共に見るべし、晚唐と稱するも、此の如き詩は捨つべからず、

宿嘉陵驛

離思茫茫正値秋　每因風景卻生愁
今宵難作刀州夢　月色江聲共一樓

【句釋】　宿嘉陵驛嘉陵は今の四川省保寧府、元來江の名、陝西の鳳縣に源を發して東南、南部の界に入る、漾水是れなり、離思亂離の憂思、茫茫際限なき離思、正値秋秋は尋常人にも哀しき況や離人をや、每因風景下の月色江聲是れ風景なり、卻生愁離人なれば愁を生ず、故に卻と云ふ、今日散、俗に「ヤレヤレ」と云ふ、安心を生じ、不安の心漸く滅す、馬頭初見米囊花當時蜀に此の米囊花ありて他國には曾て無し、此の花の異名曰く御米花、曰く米穀花、曰く不移花、曰く瞿粟、俗に「ケシノハナ」と云ふ、

【評論】　此の篇、旅中の辛苦と、故鄉の歡喜と兩意共に見るべし、晚唐と稱するも、此の如き詩は捨つべからず、

ふ、今宵難作刀州夢晉の王濬夢む三刀を屋梁に縣く、須臾にして又一刀を益す、意甚だ之を惡む、李毅賀して曰く三刀は州の字たり、又一刀を益すは、明府王たび指す其れ益州に臨むなり、果して益州に遷ると、雍は夢にだも、此の如き善夢は見ずとの意、月色江聲共一樓月色も江聲も共に我が宿樓に入りて滿ち目は明、耳は聰、一宵寐る能はず、何ぞ夢を結ぶの遑あらんや、

【評論】此の篇、余は出斜谷の詩に比すれば優るあるも劣るあらずと信ず、嘉陵驛に宿する詩亦此の右に出るものなし、

醉後題僧院

杜牧

舡船一掉百分空　十歲青春不負公
今日鬢絲禪榻畔　茶煙輕颺落花風

舡船一掉百分空し、十歲青春公に負かず、今日鬢絲禪榻の畔、茶煙輕く颺る落花の風、

【句釋】醉後題僧院昨日は迷ひ、今日は悟る、僧院に題して、其の事を言ふ、舡船は盃を言ふ角で酒器を爲る、七升を受るなり、一掉百分空は一たび掉うて餘瀝を餘さず、十歲青春十歲は

一掉と對を取る、必ずしも、十年ならず、要するに少年時代にはの意、不負公公は自身を言ふ、「ワレ」なり、春花秋月、血氣に任せて意のままならざるは無し、煩惱を盛んに發揮したる事を言ふ、今日鬢絲鬢が絲の如きは青春を過ぎて白頭と化せしなり、禪榻畔僧の坐禪する榻畔に依る、乃ち平生の煩惱を懺悔する、茶煙は酒の濃に反對、淡なり、酒の醉ふに反對、醒なり、輕颺落花風落花を見て無常を悟る、是れ佛家の理なればなり、

【評論】此の篇、此の三體詩のみならず、諸の選本皆「醉後題僧院」の五字の題とす、然るに馮集梧の『樊川集』には此の詩は「題禪院」の三字の題「醉後題僧院」の詩は左の如し、「離心忽忽復悽悽、雨晦く瓶を傾ぶけ醉泥を取る、羨む可し高僧心と語り、一如攜稚東西に往く」如何にも醉後の狀あり、此の詩醉後の狀に乏し、余は本集に從て改めんと欲す、

經汾陽舊宅

趙嘏

門前不改舊山河　破虜曾輕馬伏波
今日獨經歌舞地　古槐疎冷夕陽多

門前改めず舊山河、虜を破り曾て輕しとす馬伏波、今日獨歌舞の地を經れ

ば、古槐疎冷にして夕陽多し、

【略傳】趙嘏字は承祐嘗て浙西に家す、會昌二年進士第に擢んず、渭南尉に卒す、

【句釋】●●●●●●經汾陽舊宅汾陽は郭子儀の事なり、張巡、許遠、顔眞卿、李光弼と共に肅宗を扶けたる名臣とす、其の宅、親仁里に在り、其の里の四分の一に居す、八子七壻皆顯官に登る、門前●●●●●●不改舊山河國の功臣は、其の子孫に至るまで、國亦其の子孫を護せざる可らず、漢、功臣を封ずる誓に、黄河をして帶の如く太山をして砥の如くならしめ、國以て永く存し、延て苗裔に及ばんと、今山河は依然、而も此の誓は空しきを言ふ、●●●●●●破虜曾輕馬伏波伏波將軍馬援は光武を扶けて漢の爲め大功を樹つ、汾陽が肅宗を扶けて忠思明の亂を平らげし功は伏波以上に重しとなり、●●●●●●今日猶經歌舞地歌舞地は卽ち汾陽の舊宅、此の歌舞は妓女の歌舞にあらずして兒孫輩の歌舞を言ふ、汾陽の宅が寺と爲ると張籍が詩に在り、此れは人の信を措かざる所、然れども、朝廷顧みざるが、子孫守らざるか、愼むべき狀態にありしは事實なるが如し、●●●●●●古槐疎冷夕陽多槐樹の陰、疎冷にして夕陽之に映ず、人をして覺えず感慨を深からしむ、

【評論】此の篇、唐の功臣を遇する薄きを慨して作る、汾陽に托して、以て意義は廣泛に渡る、前二句は汾陽の功、後二句は今日の所見を言ふ、感慨其の中に在り、

十日菊

鄭谷

節去蜂愁蝶不知　曉庭還繞折殘枝
自緣今日人心別　未必秋香一夜衰

節去り蜂愁ふるも蝶知らず、曉庭還て繞る折殘枝、自から今日人心別なるに緣る、未だ必ずしも秋香は一夜に衰へず、

【句釋】●●十日菊九月九日、菊を賞するの節とす、一日後れて十日に之を詠ず、節去一日でも過ぎ去ては節にあらず、蜂愁蜂は愁ふ、愁ふる蜂は多智なればなり、●●蝶不知知らざるの蝶は無智なれば殘肉を爭ふ、蝶にして無智、殘枝を繞つて之に戲むる、●●●●●●自緣今日人心別今日と昨日と人心別なるに緣る、客觀的にあらずして、主觀的なるに在り、●●●●●●未必秋香一夜衰造物は歡を永うする意を言ふ、人情は節と云ふ事に重きを措て、其の他を知らず、節と云ふ觀念を去らば、十日も十一日も亦之を賞すべきなり、文宗の太和九年には十九日を重陽と定め、開成元年には十三日に改ためし事あり、

【評論】此の篇、宋の曾子固の評に、語盡きて意餘り有りと、此の五字以て悉くせり、

老圃堂　　薛能

邵平瓜地接吾廬　穀雨乾時偶自鋤
昨日春風欺不在　就床吹落讀殘書

邵平が瓜地吾廬に接す、穀雨乾時偶ま自から鋤く、昨日春風不在を欺て、床に就て吹落す讀殘の書、

【句釋】老圃堂薛能官を罷て退居、長安門外に堂を構ふ、名けて老圃堂と云ふ、『語』の吾老圃に如かずを取る、邵平瓜地接吾廬秦の東陵侯、邵平秦破るる後、布衣と爲り、瓜を城東門外に種ゑ以て沽る、瓜甚だ美、人、東陵瓜と謂ふ、今吾も東陵侯を學んとなり、穀雨乾時は三月の下句を言ふ、偶自鋤此の三字非常に力あり、以て題目に適ふ、以て邵平が故事を追ふべし、昨日春風欺不在圃に出て鋤き睹やす、春風は其の不在を欺むくなり、就床吹落讀殘書床上に讀了せざる本を置きしに歸來之を見れば、風の爲めに吹き落され、散亂せるを言ふ、

【評論】此の篇、作者薛能は一種の思想家にして尋常一樣の詩人にあらず、是を以て其の詩も奇思多し、此の篇の如き全く宋人の喜ぶものにして、大雅の取る所のものにあらず、楊誠齋の

一代の心髓は此の結二句より出たるものなり。

偶興　　羅隱

逐隊隨行二十春　曲江池畔避車塵
如今贏得將衰老　閒看人間得意人

隊を逐ひ行に隨ふ二十春、曲江池畔に車塵を避く、如今贏ち得たり衰老を將て、閒に看る人間得意の人、

【略傳】羅隱字は昭諫、餘杭の人、池の梅根浦に隱れて、自から江東生と號す、廣明中に池の守、賓湎、墅を營なみ、之に居らしむ、光啓中に錢鏐辟て從事節度判官副使と爲す、梁祖、諫議を以て召ども行かず、開平中、羅紹威推て叔父と爲て表して給事中を授く、年八十餘にして餘杭に終ふ、子あり塞翁と曰ふ、

【句釋】偶興興生じて偶作す、逐隊隨行進士及第を欲する俊才と列を爲す、二十春此の二十年間羅は及第せざるなり、曲江池畔及第したる者は曲江の杏園にて宴を賜ふ、避車塵及第せざる羅は意氣揚揚たる人間の車塵を避けて之を望む、如今贏得功名の念有るときは落第を殘念に思

ひしが、今日功名の念無き時より見れば、却て及第せざるを以て我が贏と爲るを喜ぶ、將衰老無事に衰老と爲るは是れ幸福ならずや、閒看嘲つて看るなり、人間得意人及第して意氣揚揚たりし人は如何、朱溫が哀帝を弑して唐室を簒ふに至りて天下の名士を取て之を白馬津に殺す、曰く此の輩自から謂ふ淸流と、之を濁流に投ずべしと、

【評論】此の篇、全く自家の實事を叙して心情流露し、人をして覺えず拍手せしむ、一女子あり、常に羅詩を誦す、意其の人を私慕す、一日羅、其の女子の親を訪ふ、女戶隙より之を窺ふ、羅頗る形無し、此れより女子、復羅詩を誦せず、羅は此の女子に於ても及第せざるなり、然れども雲英なる妓、羅の爲めに他に嫁せずと言ふに至りては、亦贏得たるもの、一得一失を妙に收め得たるは羅給事なるかな、

悼亡妓

朱褒

魂歸溟漠魄歸泉　只住人間十五年
昨日施僧裙帶上　斷腸猶繫琵琶絃

魂は溟漠に歸し魄は泉に歸す、只人間に住す十五年、昨日僧に施す裙帶の

上、斷腸は猶ほ繫ぐ琵琶の絃、

【句釋】朱褒は傳未詳、悼亡妓亡の字は無用に屬す、悼妓の二字にて可なり、誤入ならん、魂歸溟漠陽の魂は溟漠卽ち天に歸る、魄歸泉陰の魄は卽ち地に歸る、『禮記』の說なり、只住人間十五年十五年にして死せりとせば、極めて雛妓なり、昨日施僧唐代の風習、死者一七日を經て平生其の愛好せる物を以て僧に供養す、裙帶上裙帶を以て寺に送る、其の裙帶を日本にて水引と稱する物ありて之を縛る、斷腸猶繫琵琶絃帶を縛るに平生彈奏したる所の琵琶の絃を以て其の上を縛る、之を見て覺えず斷腸すと言ふなり、

【評論】此の篇、特に奇巧を弄するにあらず、唯一片の悼情を表するのみ、而かも之を讀む、淚痕の猶ほ新なるを覺ゆ、想ふに千載前にも此の泣あり、千載後にも此の泣あらん、嚴維の詩より此に至る十八首、第三句に於て明朝、明日、如今、他日、今日、昨日、明年、今宵、等の字の使用法を示したるものとす、

送元二使安西

王維

渭城朝雨浥輕塵　客舍靑靑柳色新

勸」君更盡二一盃酒一　西出陽關無二故人一

渭城の朝雨輕塵を浥す、客舍青青として柳色新なり、君に勸む更に一盃の酒を盡せ、西の方陽關を出れば故人無ん。

【句釋】●●●●安西は西域龜玆なり、武后の世、此に安西保護府を置く、三萬の兵を以て鎭すと云ふ、渭城●●漢の高祖の新城、武帝改めて渭城と爲す、渭水の西北、●●雨が浥す故に塵が揚がらざるなり、正しく出發する處、客舍青青柳色新●●も揚がらず、故に柳色も青青として春日の風光を見る、勸君更盡一盃酒今日は十二分に歡を盡くし玉へとの意なり、西●●●●●●故人陽關は甘肅の燉煌郡にして長安を去る二千五百里、此の關門を出れば、復故人無し、幸に今日は十二分に交歡せん、

【評論】此の篇、送別の詩として古今獨歩、前に古人無く、後に來者無し、世、奉じて陽關三疊曲と稱す、歌ふ者一篇を一度誦し、而して再度三度誦するに客舍の第二句よりして第一句は再誦せず、是を以て三疊曲と云ふ、後世種種異論あるも、此の法を以て正確と爲す、

三月晦日贈二劉評事一　賈島

三月正當三十日　風光別我苦吟身
共」君今夜不」須」睡　未」到二曉鐘猶是春一

三月正當三十日、風光別る我が苦吟の身、君と共に今夜睡るを須ゐず、未だ曉鐘に到らず猶是れ春、

【句釋】劉は姓評事は官名、裁判評定官の類なり、三月正當三十日●●●●●●は春の終りとす、故に風●●光別我と云ふ、苦吟身多くの和訓「吟身ヲ苦シマシム」と點す、島の一代苦吟身なり、風光に別るる時のみ吟身を苦しましむるにあらず、共君今夜不須睡晝より夜に至り十分に春の思を爲さんとなり、未到曉鐘猶是春曉鐘を聞かざる中は猶ほ春にて夏にはあらず、無本上人十二時後は翌日なるに頓著せざるなり、曉鐘の二字、一本五更に作る、曉鐘を以て佳とす、

【評論】此の篇、浪仙絶句中の名篇とす、此の詩を賞せざる者は浪仙の知音にあらざるなり、

武昌阻風　方澤

江上春風留二客舟一　無窮歸思滿二東流一
與レ君盡日閒臨レ水　貪看飛花忘二却愁一

江上の春風客舟を留む、無窮の歸思東流に滿つ、君と盡日閒に水に臨み、飛花を貪看して愁を忘却せん、

【略傳】方澤字は公悅、宋の神宗の朝、鄂州に太守たり、伯弱誤て唐人と爲す、

【句釋】武昌阻風方が洛陽の召に赴かんとして武昌に到るも、風に阻られて纜を解く能はず、此の詩を作る、江上春風留客舟題意先づ此の七字にて道破す、無窮歸思滿東流東流の水は袞袞と急奔するも、我が歸思を如何ともするなし、水を羨まざるを得ず、與君何人か風の爲め同じく留まる人ありしならん、盡日閒臨水舟中より水に臨む、貪看飛花忘却愁此の愁の字、日本語の「コマツタ」とか「心配」とか位に當る意味なり、阻せられて強て飛花を看て僅かに愁を忘る、

【評論】此の篇、宋人の氣味無く全く唐人の風あり、伯弱の誤て編入する、所以なきにあらず、

己亥歲

曹松

澤國江山入戰圖　生民何計樂樵蘇
憑君莫話封侯事　一將功成萬骨枯

澤國の江山戰圖に入る、生民何の計か樵蘇を樂まん、君に憑て話する莫か

れ封侯の事、一將功成て萬骨枯、

【畧傳】曹松字は夢徵、衡陽の人、詩を賈司倉に學ぶ、天復の初、年七十にして及第す、校書郎を授かる、

【句釋】己亥歲は僖宗の乾符六年、是の歲冬、黃巢自から衝天大將軍と稱して嶺南に在り、十一月に襄陽に趨る、劉巨容、曹全晸と兵を合せて拒ぎ破る、勝に乘じて江陵に至る、或人巨容に勸む窮追して賊盡すべしと、巨容曰く國家は人を負むことを喜ぶ、急あるときは則ち將士を存撫して官賞を愛ます、事寧きときは人を棄つ、或は更に罪を得ん、若かず賊を留めて以て富貴の資と爲んには、衆乃ち止む、是に由て賊勢復振ふ、明年東京を陷れて、遂に長安に入る、車駕蜀に幸すと、澤國は江南一帶の地を稱す、江山入戰圖是の歲に饒州、信州、池州、宣州、歙州、杭州、渾て十五州を掠せらる、生民何計樂樵蘇樵は薪を取るなり、蘇は草を取るなり、生民が活路を求むるに由なし、憑君莫話封侯事日本の秀吉が「天下惑亂」を祈りたる、巨容が賊を留めて富貴の資と爲さんとの類、自己の爲めにして生民の爲にはあらず、一將功成萬骨枯一公爵が出來る反面には、一萬二萬の士卒が血を流す、其の血を見ざれば一公爵は出來ざるなり、

【評論】　此の篇、軍閥主義者を憤慨して作るものなり、千載の前、千載の後も、此の如し、慨せざるべからず、王維の詩より此に至る四首、第三句勸君、共君、與君、憑君、等の字を用ふる格を示す、

虛接

周弼曰く第三の句、虛語を以て前句を接するなり、亦語、實なりと雖も、意、虛なるものあり、承接の間に於て略、轉換を加へて、反と正と相依り、順と逆と相應じ、一呼一喚、宮商自から諧ひ、千鈞の力を用ふるが如くにして形迹を見す、繹て之を尋ぬれば餘味あり、

伏翼西洞送人　　陳羽

洞裏春情華正開　看華出洞幾時回
慇懃好去武陵客　莫引世人相逐來

洞裏の春情華正に開く、華を看洞を出幾時か回らん、慇懃に好し去れ武陵の客　世人を引て相逐ひ來らしむる莫れ、

【句釋】　陳羽は韓愈同時の及第、詳傳は無し、伏翼西洞は潼川府路の長寧郡の冷水溪に在り、小桃源と稱す、洞裏春情華正開郡の守張公民桃李を此に種ゑ、春日花盛んなり、看花出洞幾時回　曾て漁人は洞源へ赴き十年も經て回る、君は幾時か回るぞや、慇懃は丁寧、好去は無事に行

けとの意、武陵客武陵の桃源とは異なれども借りに武陵の名を用ふ、莫引世人相逐來仙境を俗了せしむる憂があるゆゑに世人を引て來るは不可なり、寧齋は此の詩に全圈を施す、何の所以なるを知らず、

題明慧上人房

秦系

簷前朝暮雨添華　八十吳僧飯熟麻

入定幾時還出定　不知巢燕汚袈裟

簷前朝暮雨華を添ふ、八十の吳僧熟麻を飯す、定に入て幾時か還て定を出ん、知らず巢燕の袈裟を汚すを、

【句釋】明慧上人房上人は高僧に對する敬稱語、簷前「ノキ」の前、朝暮雨添華、經典に天雨華の語あり、暗に此の意味を用ふ、八十吳僧吳國に生れし人ならざるも、女を吳姬と言ふが如く吳は佛寺多ければ吳僧と言ふ、飯熟麻胡麻飯を食ふ、胡麻、一名は巨勝、之を服すれば身を輕くし老いず、入定は坐禪すること、端坐冥目、息を數へて思惟するを入定又は坐禪と言ふ、幾時還出定入定は自行の爲め出定は化他の爲めなり、不知巢燕汚袈裟定に入て鵲が頭上に巢ふ、

故に若し早く出定せば、鵲が兒を育つる能はざるを知て、又定に入り去りし人あり、今其の事を借りて上人の定心堅固、燕の汚すに依て其の心の動せざるを云ふ、

【評論】此の篇、上人の無我境界を詠じて眞に絕妙の好辭とす、伏翼西洞の詩の及ばざる所なり、

寄許鍊師

戎昱

掃石焚香禮碧空　露華偏濕藥珠宮

如今說得天壇上　萬里無雲月正中

石を掃ひ香を焚て碧空を禮す、露華偏に濕ふ藥珠宮、如何ぞ說き得ん天壇の上、萬里雲無く月正に中、

【略傳】戎昱は荊南の人、進士に第せず、乃ち名都に放游して終ふ、

【句釋】許は姓、鍊師は道士の德高き者に對する敬語、佛敎の上人と言ふが如し、掃石焚香禮碧空太乙星を祀り以て道を修するが道士の法、而して淸淨梵行、汚るるを嫌ふ、藥珠宮は天上に在る殿閣、『黃庭經』に出づ、露華の爲め此の宮が濕ふとなり、如何說得道を修せざる門外漢

は如何ぞ天壇上の事を說き得んや、戎自分を云ふ、萬里無雲月正中我が見る所は、唯一輪の月が皎皎として天に中するあるのみ、其の他は我が測知する所にあらず、

【評論】此の篇、格は甚だ高からざるも淸淑の氣はあり、眞に道士に贈るに適す、

秋思　張籍

洛陽城裏見秋風　欲作家書意萬重
復恐怱怱說不盡　行人臨發又開封

洛陽城裏秋風を見る、家書を作らんと欲して意萬重、復恐る怱怱說き盡さざることを、行人發するに臨んで又封を開く、

【句釋】秋思秋に逢うて思を叙ぶ、「秋思」の題は廣し、今は家を思ふ狹義なり、洛陽城裏は張が客寓中なり、見秋風古への張翰は秋風起るに依て故郷の鱸魚を憶ふ、今秋風の字面を用ふるも鱸魚の爲めにはあらず、欲作家書意萬重情の起るときは前後孰れとも定め難し、意萬重、孰れを前に書き、孰れを後に書きて可なるや迷ふ、復恐怱怱「ソカウカ」として若しや大切な事を除きはせぬかと說不盡用も爲さざる如きことあるを恐る、行人臨發又開封張が故郷へ歸る人へ

信を托す、其の人の發せんとするとき、又開封して意の足るや足らざるやを見る、

【評論】此の篇、岑參の馬上相逢の詩と共に鄉情溢るる如し、百年千年不朽の詩と謂ふ可し『雲溪友議』に郭奇、書を細君に遣り誤て白紙を封す、妻詩を賦して曰く、碧紗窗下啓二緘封一、盡紙從レ頭徹レ尾空、應二是仙郎懷一別恨一、懷レ人全在二不言中一

懷二吳中馮秀才一　杜牧

長洲苑外草蕭蕭　却算游程二歲月遙
唯有二別時一今不レ忘　暮煙秋雨過二楓橋一

長洲苑外草蕭蕭、却て游程を算ふれば歲月遙かなり、唯別時のみ有て今忘れず、暮煙秋雨に楓橋を過しことを、

【句釋】吳中は江蘇を云ふ、長洲苑は蘇州に在り、吳の長洲苑、江水の洲を以て苑と爲す、却算游程歲月遙此の苑に昔時、杜は馮と共に游ぶ、而かも歲月は遙かにして隔世の如し、唯有別時今不忘今日記憶するは其の別時の狀、暮煙秋雨過楓橋此の狀のみ記憶して忘れず、

【評論】此の篇、地名を起結兩句に用ひ、委致限り無し、淸の王漁洋の奉じて神韻と爲す所、

此れ等の詩に在り、

念二昔游一

李白題二詩水西寺一　古木囘巖樓閣風

半醒半醉游三日　紅白花開煙雨中

李白詩を題す水西の寺、古木囘巖樓閣の風、半醒半醉游ぶこと三日、紅白花開く煙雨の中、

【句釋】李白題詩水西寺宣州に水西山あり、林窓深邃、李白詩を題して曰く「天宮水西寺、雲脚照二東郭一、清湍鳴二囘溪一、綠水繞二飛閣一、寺門、後に「李白題詩寺」の五字の額を掲ぐと云ふ、古木囘巖樓閣風『西京雜記』に樓閣臺榭、轉た相連注すと、半醒半醉游三日半醒半醉は杜自身を云ふ、白の事にあらず、紅白花開煙雨中白は醒に屬し、紅は醉に屬す、

【評論】此の篇、昔水西寺に游んで興懷を遣し事を念うて作る、本集に三首あり、「江南寺樓」と「雲門寺」と「水西寺」とあり、詩一氣呵成、其の面目躍如せり、

寄二友

李羣玉

野水晴山雪後時　獨行二村路一更相思

無レ因一向二溪橋一醉　處處寒梅映二酒旗一

野水晴山雪後の時、獨村路に行て更に相思ふ、一たび溪橋に向て醉ふに因無し、處處の寒梅酒旗に映ず、

【句釋】寄友字の如し、起句、承句亦字の如し、無因友無ければ折角の看梅も賞するに因無しとなり、溪橋醉酔を溪橋に求めんと欲するも同心の友なし、寒梅映酒旗酒家も寒梅も人を待つものの如きも、如何せん良友の伴ふ無し、遂に此の詩を寄示する所以、

經二賈島墓一

鄭谷

水繞二荒墳一縣路斜　啡人訝我久咨嗟

重來兼恐無二尋處一　落日風吹鼓子花

水は荒墳を繞て縣路斜なり、啡人訝かる我久しく咨嗟するを、重來兼て恐る尋處無きを、落日風は吹く鼓子花、

【句釋】賈島墓は四川省潼川府、安岳縣南に在り、有名なる兜率寺に鄰る、島は普州卽ち安岳縣の司戶參軍と爲て卒す、故に此に葬る、水繞荒墳縣路斜安岳縣路が斜に通ず、畊人は墓邊の圃を畊やす人、訝は變に思ふこと、我は鄭谷、久咨嗟墓を弔して嘆息する久し、重來は此の次ぎに來るとき、兼恐無尋處墓を保護する者無く、遂に崩壞せらるるや再弔する能はずと恐る、落日風吹鼓子花此の花は和名「ヒルガホ」一名旋花、又旋葍、又筋根、又美艸、又天劍草又纏枝牡丹、等の多名あり、彼の牽牛花に似たるものなり、

【評論】此の篇、賈島が墓の荒涼たるを見て嗟嘆したるなり、然れども天は此の詩人を捨てず今日猶其の墓ありと云ふ、縦ひ墓無きも李洞の如き銅像を鑄て之を祭る、天は才人を捨てざるなり、

修史亭　　司空圖

烏紗巾上是青天　　檢束酬知四十年
誰料平生臂鷹手　　挑燈自送佛前錢

烏紗巾上是れ青天、檢束知に酬ゆ四十年、誰か料らん平生鷹を臂にせし手、

燈を挑げて自から佛前の錢を送らんとは、

【句釋】修史亭は司空圖が自から讀書堂を云ふ、卽ち山西の蒲州府中條山の王官谷に在り、此の亭に觀自在菩薩の像を置き以て老を送る、武宗の時、多く佛像を燒き、寺を毀つ、是の時、表聖は大悲像を我有と爲ししなり、烏紗巾は自分の頭を指す、其の頭上に青天あるは、君恩を長記して忘れずとの意、檢束は此の身を檢束する、酬知四十年宰相盧公は我が知己、其の知己に酬いんが爲め良政を計る四十年なりしなり、誰料平生臂鷹手必ずしも獵狩の事とせず、世の荒き事を料理せし手と見て可なり、挑燈自送佛前錢當時豪俠の念、遂に施す所無く、灰心以て方外香火の事を修せんとは、

【評論】此の篇、表聖が其境界を叙して毫髪も詐らざるもの、以て人品を概すべし、菅茶山、鞘繪を咏じて佛前今日拈ル香手、馬上當年斬ル將人は此の詩より脫化し來るものなり、

答韋丹　　僧靈徹

年老心閒無外事　　麻衣草坐亦容身
相逢盡道休官去　　林下何曾見一人

年老心閒にして外事無し、麻衣草坐亦身を容る、相逢て盡道ふ官を休め去ると、林下何ぞ曾て一人を見ん、

【略傳】靈徹姓は陽氏、字は澄源、越州の人、雲門寺に居す、劉長卿、嚴維、皇甫曾、皆友たり、皎然、僧標と名を齊しうす、宣州の開元寺に遷化す、門人塔を山陰の天柱峯に建つ、韋丹字は文明、京兆萬年の人、蚤く孤、外祖顏眞卿に從て學ぶ、明經に擢んでられ、安遠令に調せらる、江南西道觀察御史に至りて卒す、年五十八、

【句釋】年老心閒無外事徹自身の事を寂して以て答ふ、麻衣草坐亦容身三衣一鉢、樹下石上、麻衣草坐、佛弟子の守る所此に在り、此外に餘長を容るるを許さず、相逢徹と逢ふ人は、盡道は人人道ふなり、休官去官を休め、以て方外の游に隨はんと皆道ふが、林下何曾見一人未だ曾て吾に隨て林下に游ぶ者は一人も無し、韋丹が徹に寄せたる詩に曰く、王事紛紛無二暇日一、浮生冉冉只如レ雲、已爲二平子歸休計一、五老巖前必與レ君と、而して丹遂に歸休の計を爲さず、罪を得て憂死す、此の詩意を重んじ退隱を計れば、此の憂死は無かりしなり、

【評論】此の篇、丹の爲めに發して而して千古官吏たる者の爲めに益あり、功成身退の戒と同一なり、陳羽より此に至る十一首は、第一句題に歸し、而して第一句に第四句を起し、三句に

二句を承るの格なり、

九日懷二山東兄弟一

王維

獨在二異鄉一爲二異客一　每レ逢二佳節一倍思レ親
遙知兄弟登レ高處　遍插二茱萸一少二一人一

獨異鄉に在て異客と爲る、佳節に逢ふ毎に倍す親を思ふ、遙かに知る兄弟高きに登る處、遍く茱萸を挿んで一人を少くらん、

【句釋】九日は九月重陽、山東は一本に山中に作る、東を以て可とす、獨在異鄉爲異客山東太原の人が、官に就て長安に客寓す、異鄉異客たる所以、每逢佳節倍思親維が一門悉く孝悌にして母に事て至孝なり、弟の縉才名あり、蜀の刺史と爲る、遙知兄弟登高處九月九日高きに登るは費長房が桓景に災を避けしめしに起る、今王が兄弟は太原にて高きに登るならん、遍插茱萸少一人是の日茱萸を盛て臂上に係て、以て菊花酒を飲む、王家亦其の例を爲すならんか、一人異鄉に在るを以て同うするを得ず、少は「カク」と訓讀す、

【評論】此の篇、王が十七歲の時の作とす、語語微塵も塗澤なく、實に平平に之を言出して而

して其の至情、言外に溢る、嗚呼千古の大宗なる哉、

葉道士山房　　顧況

水邊楊柳赤欄橋　洞裏神仙碧玉簫
近得麻姑書信否　潯陽江上不ㇾ通ㇾ潮

水邊の楊柳赤欄の橋、洞裏の神仙碧玉の簫、近ごろ麻姑が書信を得るや否や、潯陽江上潮を通ぜず、

【句釋】葉は音「セッ」入聲に讀む、水邊楊柳赤欄橋道士が山房の景を言ふ、洞裏神仙碧玉簫前句の外景に對して、此句は内景を言ふ、道士の吹て以て自から樂しむ碧玉簫と赤欄橋と字の對を取る、近得麻姑書信否顏魯公が『麻姑壇記』に王方平、蔡經が家に過る、人をして麻姑と相聞せしむ、壇人あり夾で曰く麻姑再拜してより見ざること已に五百年、俄かに麻姑至る、是の年十八九許りの好女子なり、顧が葉に戲れ問ふ、潯陽江上不通潮潯陽より近來潮が通ぜざる故に察する所、麻姑の信は無からん、が試に問ふ如何となり、麻姑は潯陽に限らざるも、水邊と第一句に用ひたるが爲め結句亦潯陽江を出すなり、前半は葉を揚げ後半は葉を抑へる、

【評論】此の篇、暗に葉の女子に對して何事か有りしを諷せしものの如し、潯陽江上は美人の多く住して歌舞する所、此の間に於て何等かの消息なかるべからず、然れども千古の疑問今遽かに解決すべからず、

宿ㇾ昭應」

武帝祈ㇾ靈太乙壇　新豐樹色遶ㇾ千官」
那知今夜長生殿　獨閉ㇾ空山月影寒」

武帝靈を祈る太乙壇、新豐の樹色千官を遶る、那ぞ知ん今夜長生殿、獨空山月影の寒きに閉んとは、

【句釋】宿昭應唐の關内道京兆府昭應縣、今日の陝西省なり、武帝祈靈太乙壇武帝は名を借るのみ、玄宗が事、華清宮も此に在りて、玄宗が不老不死を祈る、太乙壇は仙人を祭る壇、新豐樹色驪山は古の驪戎國、秦に驪邑と曰ふ、漢の高祖里民を徙して命じて新豐と曰ふ、玄宗分て會昌縣を置く、尋で會昌を改め昭應と爲す、遶千官千官の居を擁す、那知今夜長生殿長生殿上人長生せず、太乙壇に不老不死を祈りし人は殿も長生の名を以てしたるも憐むべし今夜の狀は何

ぞ、獨閉空山月影寒長生殿を弔する者は唯月影のみ、

【評論】此の篇、祈の無益なるを嘲けつて作る、武帝を咏じて玄宗に及び、詩人本旨の存する所此の外有るべからず、千古の絕調、一唱三嘆、

江村卽事　　司空曙

罷釣歸來不繫船　江村月落正堪眠
縱然一夜風吹去　只在蘆花淺水邊

釣を罷て歸來船を繫がず、江村月落て正に眠るに堪たり、縱然一夜風吹去るも、只蘆花淺水の邊に在ん、

【句釋】江村卽事耳目に觸れし景情を直寫するを卽事と云ふ、長沙に流寓せし時の作、罷釣歸來不繫船船を繫がざる所に妙味あり、『莊子』に汎として不繫の船の如しとある、江村月落正堪眠月落は時節に依り夜半もあり曉天もあり、一概ならず、今は二更頃と定めて可し、縱然は「タトヒ」一夜風吹去風の字を出さざれば不繫船の三字を活かさず、只在蘆花淺水邊蘆花淺水の邊を離れざるを知るが故に船を繫がざる所以なり、

【評論】此の篇、不繫船の三字を主として而して月や風や水を賓として斡旋す一讀の下、淸氣人に逼る、

宮人斜　　雍裕之

幾多紅粉委黃泥　野鳥如歌又似啼
應有春魂化爲燕　年年飛入未央棲

【裴傳】雍裕之は蜀の人、貞元後、進士に擧げ第せず、四方に流寓して終ふ、

【句釋】宮人斜は宮人を葬むる墓地の名なり、長安城外三里に在り、後宮嬪妃の叢家を斜と曰ふ、幾多は多少と同義、紅粉は美人の代名詞、委黃泥地は黃色故に黃泥と云ふ、野鳥如歌又似啼俗人聞けば歌ふ如く、詩人聞けば啼に似たり、應有春魂化爲燕魂の不滅は佛敎のみならず詩家も亦認むる所、必ずしも魂は溟漠に歸せざるなり、燕と爲る所以は宮廷を慕ふの念去らざるが爲めなり、年年飛入未央棲未央宮は漢の高祖の七年に蕭何が造る所、

【評論】此の篇、一種の清婉、情致相表はるるものあり、

過二春秋峽一　劉言史

峭壁蒼蒼苔色新　無風情景自勝春
不レ知何樹幽崖裏　臘月開レ華似二北人一

峭壁蒼蒼として苔色新なり、無風の情景自から春に勝る、知らず何の樹ぞ幽崖の裏、臘月華を開きて北人に似す、

【略傳】劉言史は郷里を詳にせず、李賀、孟郊と同時、詔して棗強の令を授くるも受けず、世之を重んず、

【句釋】春秋峽は江蘇省徐州府彭城郡に在り、汴水と泗水交流を以て因て峽と名く、峭壁蒼蒼苔色新四時蒼蒼の色を變せず春も秋も無きを以て此の名あり、無風情景自勝春「風無くして」の訓と無風の訓とあり、「何の風情も無きが」と見るか、又風が無しと見るか、雙方共に通ずと雖も風無しと見る方可なり、峽中は風の少なきもの、我甲斐の山水にても知る、不知何樹幽崖裏崖は山の高處、臘月は十二月嚴冬の候、開華何の樹か名は知らざるが華を開く、似は示なり、北

●北方人は南方の事情を知らず、南方人は北方の事情を知らず、劉の北人なるを知て崖上の花が其の艶異を似すとなり、

【評論】此の篇、春秋峽の春秋峽たる特色を叙して全く遺恨なし、無風、臘月、北人が主にして他は其の注脚なり、

初入諫司二喜家室至一　竇羣

一旦悲歡見二孟光一　十年辛苦伴二滄浪一
不レ知筆硯緣二封事一　猶問傭書日幾行

一旦の悲歡孟光を見る、十年辛苦して滄浪に伴ふ、知らず筆硯の封事に緣るを、猶問ふ傭書日に幾行ぞ、

【略傳】竇羣字は丹列、京兆金城の人、兄の常、弟の牟、庠、鞏の五人皆郎と爲る、人稱して竇家の五星と云ふ、羣、種種の官を經、開州の刺史と爲て卒す、年五十五、

【句釋】初入諫司徳宗の朝、左拾遺と爲て諫院に入る、喜家室至官吏と爲て其の細君が郷里より來るを喜んで作るなり、一旦悲歡見孟光後漢の孟光、其の容姿醜にして黑、力石臼を擧ぐ、

德行甚だ高し、鄰里之を求む、肯んぜず、對を擇んで三十に至る、父母其の故を問ふ、曰く賢なること梁伯鸞の如き者を得ば可なり、梁聞て之を娶る、十年辛苦伴滄浪今日諫司に入るも、昨日までは滄浪なり、山林滄浪は悲にして、諫司は歡、孟光の如き我が妻、我と十年辛苦を共にす、不知妻が知らざるなり、筆硯緣封事今諫司に於て夫が艸する文章は封事、卽ち天子へ上る疏なり、其の封事なるものを知らずして、猶問傭書日幾行人の爲めに筆畊して僅かの日給を取る、それは昔の事なり、然るに日に原藁紙幾枚書くやと妻が問ふ、以前貧なる時を依然たるものと思ふなり、後魏の蔡亮家貧うして傭書して自給す、今其の事を用ひて以て我が事と爲す、

【評論】此の篇、圓至和尙の注に羣處士にして窮通を以て悲歡し僅かに一拾遺を得て則ち妻に對して誇喜す、情辭に見はる豈眞の隱者ならんやと、和尙は人情を解せず、亦詩を解せず、惜哉、

寄襄陽章孝標

雍陶

青油幕下白雲邊　日日空山夜夜泉
聞說小齋多野意　枳華陰裏麝香眠

青油幕下白雲の邊、日日空山夜夜の泉、聞說く小齋野意多し、枳華陰裏麝香眠る、

【句釋】寄襄陽裏水の陽なれば襄陽と云ふ、日本の如く、陽も陰も頓著せず、相陽又武陽と云ふ如きにあらず、章孝標字は道正、錢唐の人、襄陽府の從事たり、青油幕下は將軍幕下なり、青油の縫を以て幕を作る、藩鎭僚屬とす、白雲邊襄陽は高地にて、鹿門山、荊山に傍て白雲常に飛ぶ、日日空山夜夜泉章の高尙なる心は日に山に在り、夜に泉に在り、聞說は雍が章の狀を聞くなり、小齋多野意章の住する小齋は全く俗氣なく、野意が滿つとなり、野意とは何ぞ、枳華陰裏麝香眠枳華は李「スモモ」麝香は一名射父、又香麋「カホリジカ」「クジカ」此の如き獸類が眠る處、其の幽靜察すべきなり、麝は以て章其の人にも比す、

【評論】此の篇、一讀の下、章の人品を察するを得、甚だしい哉、詩の人を移すや、

劉得仁

舊宮人

白髮宮娃不解悲　滿頭猶自插華枝
曾緣玉貌君王寵　準擬人看似舊時

白髪の宮娃悲を解せず、滿頭猶自から華枝を挿む、曾て玉貌君王の寵せしに緣りて、人の看て舊時に似んことを準擬す、

【略傳】劉得仁は貴王の子、開成より大中に至る、三朝、昆弟皆貴仕を歷て、而して得仁詩に苦しむ、擧場に出入すること三十年、卒に成る無して卒す、

【句釋】舊宮人は先朝に仕へし宮女、白髪宮娃は美「ウルハシ」なり、不解悲眞の人生を解せざるもの、滿頭猶自插華枝華枝は字の如く華の枝にはあらず、「カンザシ」なり、鴻齋は「少女ハ戲レニ花ヲ弄ニス」と注す、非常に誤る、少女の華枝を插むは普通なり、老女此の粧を作す、色狂と言はざるを得ず、曾緣玉貌君王寵昔は天子色を好み、此の老女も一度は少女たりし事あり、以て天子の寵を蒙むる、準擬は自定也と注して自から「アテガフ」意、人看似舊時自身で老を知らざるにはあらず、而かも宮禁に棲し時の粧を人に示し、昔と變らぬと稱美を求むるなり、

【評論】此の篇、冷齋和尙の評に水流れ花開く、工力を假らず、之を天趣と曰ふ、是れ癡情眞に逼るを稱するなり、東坡居士の詩、人老て花を簪し自から羞す、花應に老年の頭に上るを羞づべし、以て一笑を發するに足る、

小樓

儲嗣宗

松杉風外亂山青　曲几焚レ香對二石屛一
記得去年春雨後　燕泥時汚二太玄經一

松杉風外亂山青し、曲几香を焚て石屛に對す、記得す去年春雨の後、燕泥時に太玄經を汚すことを、

【略傳】儲嗣宗は宣宗の大中十三年の進士、詩名あり、集一卷今傳ふ、

【句釋】小樓は儲の住宅を云ふ、松杉風外亂山青小樓前の景色、曲几焚香對石屛小樓中の動作、石屛は石崖が屛風の如きなり、記得去年春雨後去年の事を記得せるは印象の極めて強ければなり、燕泥時汚太玄經後漢の揚雄太玄經を著はす、時人曰く玄尙白しと、雄、解嘲文を作りて、時人の嘲を解く、作者が思ふ去年春雨の後、燕が泥を啣んで來り、几上の太玄經へ落し書を汚したり、今年も其期節なりと思うて此の詩が成りしもの、燕を小人に譬へ、太玄を出して以て自身を雄に譬ふ、

【評論】此の篇、情景錯綜して、其の狀、宛然目に在り、一幅の畫圖と爲す亦可ならずや、

宮詞　　王建

樹頭樹底覓殘紅　一片西飛一片東
自是桃花貪結子　錯教人恨五更風

樹頭樹底殘紅を覓むれば、一片は西に飛び一片は東、自から是れ桃花子を結ぶことを貪ぼつて、錯て人をして五更の風を恨ましむ、

【句釋】宮詞は晩春宮中の事を叙す、樹頭樹底覓殘紅宮中に殘留する美人を求むればなり、一片西飛一片東三千の宮人皆放逐せらるるなり、自是桃花貪結子宮に入る當初吾獨、專房せんと貪るなり、錯教人恨五更風吾獨、專房せんと欲したる一人も遂に寵を失するなり、又曰く殘紅は色の衰へしなり、東西片飛は天子と己れと背くなり、五更風は君心の飄忽定まらざるなり、種種の解あるが取るに足らず、貪結子は花が早く散らざればなり、五更風強ければ花散て子を結ばず、風を恨むる所以、

【評論】此の篇、比にして興、宮女を諷して其の妙、神に入る、一人は一人の解あり、十人は十人の解あり、王建の意を得る者古今幾人ぞ、王半山曰く此の詩、意味深遠にして悠長、

祇役遇風謝湘中春色　　熊孺登

水生風熟布帆新　只見公程不見春
應被百花撩亂笑　比來天地一閒人

水生じ風熟して布帆新なり、只公程を見て春を見ず、應に百花の撩亂たるに笑はるべし、比來天地の一閒人、

【略傳】熊孺登は鍾陵の人、進士第に登り、藩鎭從事に終ふ、白樂天、劉賓客と善、

【句釋】祇役は役に出で、公事を敬しむなり、遇風謝湘中春色春色に謝す、猶人に謝する如くす、水生風熟風の熟するは順風なり、布帆新は舟を發する新なるを云ふ、舟の帆が新なりと見る勿れ、只見公程不見春公私を混交せざるなり、春を見るは私なり、役を祇しむは公なり、應被百花撩亂笑折角に此の好春に逢ふも、公程を見るの人、春風に開く花などを見ず、是の故に花の爲めには笑はるるならん、撩亂は爛漫と意味同じ、比來は從來又由來「モトヨリ」と同じ、天地一閒人此の一の字、『讀書樂趣』に少に作る、少は缺なり、天地少閒人にて意味始めて通ず、一閒人なれば、春を賞する道理なり、少にして始めて不見春の意を現はすものとす、

【評論】此の篇、結句寧齋解して曰く、「從來自ら開人を以て居る、而して今日公程相促がす、春に笑はるるも亦以て言の答ふべきなきなり」と、一は少の誤なるを知らざればなり、然れども其の解、通せざるにはあらず、通せざるにあらざるも少の妥當なるに及ばず、

過勤政樓　杜牧

千秋佳節名空在　承露絲囊世已無
唯有紫苔偏稱意　年年因雨上金鋪

千秋の佳節名空しく在り、承露の絲囊世已に無し、唯紫苔のみ有て偏に意に稱ふ、年年雨に因て金鋪に上る、

【句釋】勤政樓は玄宗、宮西に於て樓を置く、其の西を華萼相輝之樓と曰ふ、其の南を勤政務本之樓と曰ふ、祿山亂後、頽廢して修せず、千秋佳節は玄宗の生日、卽ち八月十五日、百僚を華萼樓に宴す、名空在實已に無く、名のみ在り、承露絲囊是の日、三公以下鏡及び承露囊を獻じて祝意を表するなり、世已無佳節廢して修せず、之に伴ふ百事皆無きは當然なり、唯有紫苔「ムラサキノコケ」偏稱意十分に發生、卽ち「コケ」のみ得意なり、年年因雨上金鋪コケが得意に

雨の力を借りて金鋪卽ち樓上の「蝶ツガヒ」に生ず、扉の上に金華あり、華中に獸及び龍蛇を作る、鋪は以て環を銜めり、張九齡『千秋金鏡錄』を獻ず、前後興廢の事を言ふ、宣宗主十六令狐綯に之を讀しめ、「亂は未だ嘗て不肖に任せずんばあらず、治は未だ嘗て忠賢に任せずんばあらず」に至り、之を止めて曰く凡そ太平を致さんと求めば、當に此の言を以て首と爲すべしと、

【評論】此の篇、牧之平生の放態全く表はれず、國を思ふの至情出づ、後世君主をして二讀三讀せしむべし、

送客　李羣玉

沅水羅紋海燕回　柳條牽恨到荆臺
定知行路春愁裏　故郢城邊見落梅

沅水羅紋海燕回る、柳條恨を牽て荆臺に到る、定んで知る行路春愁の裏、故郢城邊落梅を見る、

【句釋】送客客の江陵へ赴くを送る、沅水は現今湖南省常德府辰州より流れて東南洞庭に入る、羅紋は水の小浪俗に「サザナミ」なり、海燕回烏衣國より彼岸の節に回る、柳條牽恨客の爲めに

柳を環にして送る、恨ならずや、到●●荊●●湖南の鄰國を湖北とす、此の湖北荊州府に荊臺あり、『孔子家語』に楚王荊臺に遊ぶ、司馬子祺之を諫むと、客は湖南より湖北へ赴くこと知るべし、●定知決定して知る、行路春愁裏其の途中に於る客の情懷、故郢城邊見落梅江陵は楚の郢地、秦に江陵縣、現今の荊州府を置く、縣界に故郢城あり、落梅は梅實にて梅花にあらず、國の存亡をも懷古すべく、又時の速なるをも感慨すべしとなり、

【評論】此の篇、沅水、荊臺、故郢城、柳條、落梅、等の文字注意して讀むべきなり、

靈巖寺

趙嘏

館娃宮畔千年寺　水闊雲多客到稀
聞說春來倍惆悵　百花深處一僧歸

館娃宮畔千年の寺、水闊く雲多くして客到る稀なり、聞く說く春來倍す惆悵すと、百花深き處一僧歸る。

【句釋】靈●巖寺は吳縣の西南三十里に在り、舊秀峯寺と名く、梁の天監中に吳の館娃宮の地を以て靈巖寺と爲す、館娃宮畔千年寺吳王は館娃宮を築き、車騎路を夾んで盛んなりしも、梁王

は寺を造りて、法鼓林に響かしむ、千年は梁以後を云ふ、蓋し大數なり、水闊●●雲多客●●●稀街頭の寺と異なり、香火の女兒輩は山なるが故多く到らざるなり、聞●●●●●說春來倍惆悵惆悵の二字何人の惆悵か判然せず、寺僧が惆悵すと見ては佳ならず、一般の人に係て見るが可ならん、百●●深處●●●一僧歸一僧は起句の千年に應對す、百花に一僧の字が切なりと見る者は暗し、

【評論】此の篇、寧齋の解に結句百花深處は館娃宮に緊接し、一僧歸は客到稀に緊接すと、此の解や甚だ善、詩の一氣貫成、口に上り易きこと言を待ず、

柳枝

薛能

和風煙雨九重城　夾路春陰十萬營
惟向邊頭「不」堪「望　一株憔悴少人行」

和風煙雨九重の城、夾路春陰十萬の營、惟邊頭に向て望むに堪へず、一株憔悴人行少なり、

【句釋】柳●●枝は薛が本集に「折楊柳」とある、十篇あり、今其の一篇を取る、自序に曰く乾符五年、許州刺史と爲る、幕中の賓客と酣宴す、因て部妓小女をして楊柳枝を作りて歌はしむ、楊

柳枝新聲と名くる者此れなり、和風は春日の風、「風ヲ和スル」と訓ずるは今從はず、煙雨九重城宮城を遶る楊柳を言ふ、夾路これは路を夾むと訓む、春陰十萬營軍營を遶る楊柳を言ふ、周亞夫が營中に柳を種し事、惟向邊頭宮城と軍營との外、邊鄙の地、不堪望柳あるも望見に忍びざるなり、一株憔悴少人行一株の柳が邊地に在ると言ふは一人の小官吏が邊地へ行くと言ふの意なり、九重に遠く、近衛師團に遠く、良とに憐むべきなりと自ら柳に比して悲しむ、少は一の誤寫ならんと想像す、一人行は作者一人が邊地の官に赴むけばなり、

【評論】此の篇、楊柳に托して自家の身分を言ふ、其の意、人を動かすに足る、

自遣

陸龜蒙

數尺游絲墮碧空　年年長是惹春風
爭知天上無人住　亦有春愁鶴髮翁

數尺の游絲碧空より墮つ、年年長く是れ春風に惹る、爭でか知らん天上人の住すること無きを、亦春愁鶴髮の翁有らん、

【句釋】自遣は陸の自注に曰く、震澤の別業に在て作る、病未だ平かならず、田舍に臥し、農夫耒耜を以て相聒し夜分眠らず、百端懷を興して、思益す緒なし、因て四句の詩、三十絕を累ぬ、陸は多く田を有す、平田にて雨の爲め江と通ずるとあり辛苦せしと言ふ、數尺游絲空中にチラチラと目に輝き絲の如くに見ゆるものを游絲と云ふ、墜碧空地より湧くとは言へず、故に空より墜つと言ふ、年年長是惹春風四時皆此の游絲を見る、春殊に多し、爭知は何ぞ知んと略同じ、天上無人住人住せざると思ひしは謬りにて實は人の住するを知るとの意、亦有春愁鶴髮翁年年春風に此の游絲の白きを墜すを見れば、天上にも亦春愁を抱く白頭の翁住するなるべし、游絲を白髮と見做すなり、

【評論】此の篇、奇警頗る凡想を脫す、陸其の人尋常詩人にあらざるを知るべし、苕溪曰く此の詩、思清く語奇にして前人の窠臼に落ちずと、

華陽巾

蓮華峯下得住名　雲褐相兼上鶴翎
須是古壇秋霽後　靜焚香炷禮寒星

蓮華峯下住名を得たり、雲褐相兼て鶴翎に上る、須く是れ古壇秋霽の後、

靜に香炷を焚て寒星を禮すべし、

【句釋】華陽巾梁の陶弘景、句容縣勾曲山に隱る、金壇華陽天と名く、山中、館を立て華陽眞逸と號し、又華陽の陶隱居と云ふ、弘景發明する頭巾を華陽巾と名く、蓮華峯は華山の陽に在り、此の巾、形を蓮華峯に法とる、得佳名好き名であると云ふ、雲褐は仙人の衣服、相兼上鶴氅仙人の服と仙人の頭巾とを相兼著け以て鶴の翮に上り東西に飛翔する、須是古壇秋露後寒星を禮する、秋露の夜を以て最とす、靜焚香炷禮寒星此の星を祭るは印度婆羅門教徒より延て支那の道士に及びしなり、佛教徒の之を祭るは惡僧が婆羅門の所作を學ぶなり、地藏菩薩など云ふ佛教の愛敬者は實は星の神なり、

【評論】此の篇、華陽巾を咏じて其の内容は陶弘景を咏せしもの、弘景も佛と仙とを合一したる宗教家にて勝力菩薩の異名なり、

秋色

吳融

染不レ成乾畫未レ消　霏霏拂拂又迢迢
曾從二建業城邊一過　蔓草寒煙鎖二六朝一

染て乾くことを成さず畫て未だ消せず、霏靡拂拂又迢迢、曾て建業城邊より過ぎ、蔓草寒煙六朝を鎖す、

【句釋】秋色は秋の景色なり、他に意味なし、染不成乾楓樹などを染め出して其の色の乾かざるなり、畫未消渾て物を紅色とするを畫に譬ふ、霏霏は雲の起る貌、拂拂は浮塵の起る貌、迢迢は何處までもの意、曾從建業城邊過今日の江蘇省江寧府是れ卽ち建業城なり、蔓草寒煙鎖六朝六朝は又南北朝と云ふ、吳と東晉と宋と齊と梁と陳との六朝は悉く建康、建業を都としたるなり、今日は古の繁華なく蔓草寒煙寂寞なりと云ふ、

【評論】此の篇、古都の秋色を叙し感慨を言はずして限り無き感慨を寓す、韋莊、六朝詩に及ばざるも亦以て誦すべきなり、王維の九日より此に至る十九首は第三句に遙知、近得、那知、縱然、應レ有、自是等の虛字を用ひて而して結句之に應ずる格、

酧二李穆一

劉長卿

孤舟相訪至二天涯一　萬轉雲山路更賒
欲レ拂二柴門一迎二遠客一　青苔黃葉滿二貧家一

孤舟相訪て天涯に至る、萬轉の雲山路更に賒なり、柴門を拂うて遠客を迎へんと欲すれば、青苔黃葉貧家に滿つ、

【句釋】酧は酬なり、李穆は劉の女婿、李は浙西に在り劉を訪んと欲し先づ詩を寄す、乃ち是の詩を作り之を迎ふ、孤舟相訪至天涯李が浙西の桐盧を發し、舅の劉を歙州に訪んと欲す、涯は五佳の韵、四支、五歌、六麻、共通す、萬轉雲山路更賒三百里も隔つる遠路を言ふ、欲拂柴門迎遠客遠來の客を迎へんと欲して家を掃除する、青苔黃葉滿貧家門の內外青苔や紅葉滿ち何等の饗應も爲す能はずとなり、

【評論】此の篇、氣味深厚にして溫情溢るる如し、中唐絕句、此の篇を以て上乘と爲す、

休日訪人不遇　　韋應物

九日驅馳一日閒　尋君不遇又空還
怪來詩思清人骨　門對寒流雪滿山

九日驅馳して一日閒なり、君を尋て遇はず又空しく還る、怪しみ來る詩思の人骨に清きを、門は寒流に對し雪は山に滿つ、

【略傳】韋應物は周の逍遙公夐の後、侍價令儀を生む、令儀、鑾を生む、鑾應物を生む、天寶の時游幸に扈從す、永泰中洛陽丞京兆府戶曹に任ず、大曆十四年鄠縣の令より、制、櫟陽の令に除せられ、建中二年、前資に由て比部員外に除せらる、出て除州江州の刺史と爲る、闕に赴くに及んで左司郎中に改む、貞元の初、又蘇州に刺たり、後人、其の集を韋蘇州集と曰ふ、

【句釋】休日訪人不遇蘇州集に訪王侍御不遇に作る、侍御は王建なり、休日は漢制に五日一たび下りて休浴す、又暇日を休日と曰ふ、九日驅馳生計の爲め奔走する之を驅馳と曰ふ、今其の官事に奔走を曰ふ、一日閒十日間の中、一日僅かに私の身と爲る、尋君不遇又空還空の一字遇はざるを表はす、怪來詩思清人骨平素王建の詩を讀む良とに人の骨へ透るかと怪む程、清秀なり、何に因て然るやと每に怪しむ、今日之を訪うて始めて其の理あるを知る、門對寒流雪滿山清思の清きは畢竟其の居の清きが爲であることを今日始めて平素の疑を散ぜしなり、

【評論】此の篇、雪の詩として古今に傑出せるもの、蓋し清士と道ふべし、俗人と言ふべからず、

湘江夜汎　　熊孺登

江流如箭月如弓　行盡三湘數夜中

無奈子規知向蜀　一聲聲似怨春風

江流箭の如く月は弓の如し、行き盡す三湘數夜の中、奈んともする無し子規蜀に向ふことを知り、一聲聲春風を怨むに似たり、

【句釋】湘江夜汎汎は泛なり、舟にて湘中を過る、江流如箭流の速きこと箭を射る如きなり、月如弓初三の月、弓と箭と相應ず、行盡箭の如く速ければ忽ち行き盡す、三湘は湘潭と湘鄉と湘源となり、數夜中速きこと箭の如きも三四夜は經過する、岳陽より蜀江に到る、無奈は無○那と同じ、俗語の「ドウシヤウモナイ」の意味、子規知向蜀我が蜀に向ふを子規が知て頻むが如きも、其れは奈んともする無し、昔、蜀の望帝が鼈靈の爲め弑せられ、其の魂化して子規と爲り、今に到るまで怨恨を抱くとの傳說に依る、一聲聲は一聲一聲と云ふが如し、似怨春風春風の便を得て今我が速かに蜀に到るを得るは、卽ち子規が我に便なる春風の順なるを恨むに似たるなり、子規は元來夏日に鳴くものなるが、燕と異なり、他國へ歸る鳥ならず、故に春晚、又秋風にも鳴く時あり、

【評論】此の篇、子規は蜀へ行不得、客は蜀へ迅速に行き得、何ぞ怨まざるを得ん、鳥に托して望帝を言ふ、巧妙の作と謂つ可し、

贈俟山人

一見清容愜素聞　有人傳是紫陽君

來時玉女裁春服　剪破湘山幾片雲

清容を一見して素聞に愜ふ、人有り傳ふ是れ紫陽君と、來時玉女春服を裁す、湘山幾片の雲をか剪破する、

【句釋】俟山人は傳不詳、一見清容愜素聞平素其の名を聞て、其の人を見んことを願ひしに今日相見て平素慕ふ所に違はざるなり、有人傳是紫陽君紫陽君は紫陽眞人、卽ち古の仙人、俟山人は今日の紫陽眞人なりと人が傳語する、來時山を出で人間に來る時、玉女裁春服眞人に侍する玉女が裁縫したる春服を著せるならん、剪破湘山幾片雲湘山の雲を剪て裁したるや、尋常人間の絹布の類にあらず、湘山は泉州に在る仙人の住所と傳說するなり、

【評論】此の篇、素と清と紫と玉と雲との文字使用法を後世の學詩者は知るべきなり、

寫情

李　益

水紋珍簟思悠悠　千里佳期一夕休
從」此無」心」愛」良夜」　任他明月下二西樓一

水紋珍簟思悠悠、千里の佳期一夕に休す、此より良夜を愛するに心無く、任他はあれ明月の西樓に下ることを、

【略傳】●●李益字は君虞、涼州武夷郡姑臧の人、大歷四年登第す、心疾ありて用ひられず、後、幽州の劉濟營田が副使と爲て詩を獻ず、「恩を感じて地あるを知る、望京樓に上らず」の句あり、憲宗召して秘書少監と爲す、才を負うて諫官を凌轢し、幽州に暴す、時に怨望の語、秩を降る、俄かに復官し太子賓客に遷る、散騎常侍に轉じ、後、禮部尚書と爲り、致仕して卒す、

【句釋】●●寫情は婦と死別せしに就て其の情思を寫せしなり、益が婦を霍小玉と云ふ、水紋は水の模樣、珍簟は「タカムシロ」此の珍簟に坐して思悠悠死婦を思うて其の思ひ際限なきを悠悠と云ふ、千里佳期●●●●休益は他方に官游して千里の遠きに在り、然るに佳期に於て一夕悠悠と懇話せんと樂しみしに何ぞ料らん、一夕に幽冥路を異にせんとは、萬事休する所以、●●●●愛良夜樂しまんと思ひし良夜は良婦逝て二人して愛賞する能はず、殘りし余一人何ぞ良夜を愛

するに心あらん、任他は俗語の「勝手ニシロ」と云ふ意味、●●●●●●月下西樓月の西樓に下るは人に賞せられん爲めならんも、余は之に關せず、月は來去自由にせよとなり、益は三度娶る二度は盧氏、其の次は營十一が娘なり、又益は妬癡の疾あり、灰を散じて戸を扃し、以て妻妾を防ぐの說あるも、此の詩は此の意にあらず、

【評論】此の篇、哀情を寫して神に入る、中唐の絶句、實に李庶子を以て第一と爲すは古今の定論、此の篇の如きは宋人の百鍛千錬するも能はざる所のものなり、

竹枝

劉禹錫

日出三竿春霧消　江頭蜀客繫二蘭橈一
欲」寄二狂夫書一紙一　家住成都萬里橋

日出て三竿春霧消す、江頭の蜀客蘭橈を繫ぐ、狂夫に書一紙を寄んと欲すれば、家は住す成都の萬里橋、

【句釋】●●竹枝は舊注に憲宗王叔文の事を以て、禹錫を貶し朗州の司馬と爲す、朗州は夜郎に接す、諸夷の風俗陋甚し、家家巫鬼を喜び、毎祠、竹枝を歌うて鼓吹裴回す、其聲傖傺たり、禹錫

謂く屈原が沅湘の間に居る、九歌を作り楚人をして以て神を迎送せしむ、乃ち其の聲に倚て竹枝詞十餘篇を作る、是に於て武陵の夷俚、悉く之を歌ふ、日出三竿天文志に日出三竿其の色、黄赤暈と、三竿は旭日出て竿を三つ續くる程、高く昇りたる意、春霧消日出るが故に春霧消し春霧消するが故に日出るなり、婦が夫を思うて夜眠らず曉天に達するを云ふ、江頭蜀客繫蘭橈婦が曉日に樓を出で見れば江頭には蜀より來る商客が蘭橈「アラヲギノカヂ」を岸に繫ぎて居るを見る、欲寄狂夫書一紙婦が思ふ此の商客に寄托して一信を傳へ早歸を促がさんと、妬心より發する言なるが故に良人などと言はずして狂夫と言ふ、家住成都萬里橋夫の家即ち寓居の地は蜀の成都府萬里橋に在る、萬里橋は浣華溪の東に在り、孔明が吳使を送り此に至りて曰く萬里の行此れより始まると、因て名を得、狂夫が此の成都に妾が外に花を看て樂んで居るならん、

【評論】此の篇、主として情語に在り、賓として風土に在り、竹枝詞の祖として禹錫の本領は此に在り、要するに此の題目は時代の俗謠を美化して出し以て其の土に適せるを貴ぶ、語俗にして亦致を失なはず、利人鈍人も容易に感じ易きに在り、宋元明清の諸家、竹枝を咏する者、禹錫を祖述して、以て一家の旗を樹つるなり、

聽舊宮人穆氏歌

曾隨織女渡天河　記得雲間第一歌
休唱貞元供奉曲　當時朝士已無多

曾て織女に隨て天河を渡る、記得す雲間第一の歌、唱ふるを休よ貞元供奉の曲、當時の朝士已に多きこと無し、

【句釋】舊宮人は順宗の父帝、德宗朝に仕へし宮女、卽ち穆氏なり、此の宮人の歌を聽て作る曾隨織女渡天河織女は天上の星の名、今穆氏に譬へて言ふ、天河を渡る者は劉禹錫なり、鴻齋は穆氏が織女に隨て天河を渡ると解す非常に誤る、劉が穆氏に隨て宮中に謁するなり、記得は劉が記得なり、穆氏が記得にはあらず、雲間は宮中なり、宮中を天河と爲したるゆゑ、雲間の字を用ふ、第一歌多數宮女中第一の歌者なることを今尙記憶する、休唱貞元供奉曲貞元は德宗の年號、其の時歌うた供奉卽ち天子の爲めに奏する曲を再唱するを休よ、當時は德宗の時、朝士已無多德宗に仕て貞元年間奉公せし者は我の外に多くは死してあらず、故に若し供奉曲を聞く時は我は涙を流さざるを得ず、禹錫は貞元年間は大に得意なりしが、讒處に在ること二十四年

にして歸る、穆氏も年老て宮を退きしが、當時の事を知る者は穆氏なり、故に歌ふを休よ、貞元は二十年の久しき種種の事ありて之を聞けば感想も種種起る、故に供奉曲を奏するな、

【評論】 此の篇、宮人に托して以て我が感想を叙す、後世學詩者は、織女、天河、雲間、貞元、朝士、等の組織法を知らざるべからず、劉夢得が一世の才人なりしことも亦窺ふに足る、

訪隱者不遇　竇鞏

籬外涓涓澗水流　槿華半照夕陽收

欲題名字知相訪　又恐芭蕉不耐秋

籬外涓涓として澗水流る、槿華半照して夕陽收る、名字を題して相訪ふことを知らしめんと欲すれども、又恐る芭蕉の秋に耐へざらんことを、

【略傳】 竇鞏は竇常の弟なり、字は友封、世に嘯傲翁と號す、人と言ふ、口より出ざる若くなるを以てなり、祕書少監兼御史中丞と爲り、節度副史に終ふ、

【句釋】 訪隱者不遇隱者は隱君子なり、日本で言へば學あり德あり而かも官に仕へず幽處に棲む人なり、籬外涓涓水の「ソロソロ」流を涓涓と云ふ、槿華は木槿「ムクゲ」牽牛花の如く朝開き夕に萎む、半照夕陽收夕陽が恰かも沒せんとする時、欲題名字知相訪家僮も居らざれば則ち來訪を知さしむる由無し、故に名字を題せんと欲するなり、又恐芭蕉不耐秋芭蕉の葉は風に弱くして縱ひ名を題するも、秋風に吹き破らるるを恐る、唐の懷素は芭蕉の葉及び柿の葉に字を書せしもの、古人多く此の事あり、

【評論】 此の篇、秋日なるが故に槿花と芭蕉を以て全篇の趣向を取る、幽趣閒澹、亦以て人に可なり、

重過文上人院　李渉

南隨越鳥北燕鴻　松月三年別遠公

無限心中不平事　一宵清話又成空

南は越鳥に隨ひ北は燕鴻、松月三年遠公に別る、限り無き心中不平の事、一宵清話又空と成る、

【句釋】 重過文上人院文上人は廬山に住す、三年以前に李渉此の院を過ぐ、今復過ぐ故に重と云ふ、南隨越鳥越は國名、南方ゆゑ暖氣なり、是を以て鷓鴣卽ち一名越鳥が多く棲む、北燕鴻燕

は「ツバメ」にあらず國名、古の幽燕は卽ち北方ゆゑ鴻雁が多く棲む、寒地なればなり、李始め廬山に在り、後、終南山に入る、其の後、峽中、吳越、瀟湘、洛下を流寓して、遂に少室山に隱る、詩は南北を言ふも、其の實東西も亦經過の地ならざるはなし、松月三年別遠公三年間上人と遇はず、故を以て松風蘿月を共賞する緣に背く、上人を以て遠公に比す、廬山なれば特に適切とす、無限心中不平事風塵に來往する者は誰か不平無からん、相遇ふ人も塵中の人にて塵外の人にあらざればなり、一宵清話又成空上人に遇うて僅かに一宵佛敎の玄談を聞く、是に於て心中の不平悉く空と成る、所謂塵念滅して道念生ずるなり、

【評論】　此の篇、唐人が寺觀に於る詩中、尤も淸佳なるものに屬す、李涉博士は尋常一樣の凡博士にあらざるなり、

題鶴林寺

終日昏昏醉夢間　忽聞春盡强登山
因過竹院逢僧話　又得浮生半日閒

終日昏昏醉夢の間、忽ち春の盡ると聞て强て山に登る、竹院に過ぎ僧に逢

て話するに因て、又浮生半日の閒を得たり、

【句釋】　鶴林寺は潤州の黃鶴山に在り、舊名は竹林寺、宋六朝の高祖、常に此の寺に遊ぶ、黃鶴あり飛ぶ、因て以て名く、終日昏昏醉夢間淸淨なる道念の明明ならざるを言ふ、昏昏は明明の反對、醉夢は醒覺の反對、塵事に奔走するが故に然り、忽聞春盡强登山强は俗語に「無理ニ」に當る、三月下句なり、因過竹院竹林寺の舊名を知ればなり、逢僧話僧は必ず玄理を談じて、俗事を談せず、其の話や卽ち淸話なり、又得浮生半日閒浮生は人間なり、今日の語の人生なり、浮雲の如き身なれば浮生と云ふ、

【評論】　此の篇、寺觀の詩として甚だ有名とす、東坡の如きは倣うて曰く殷勤昨夜三更雨、又得浮生半日涼と、到底此の原作の妙には及ばず、『竹坡詩話』に數貴人あり休日に遇うて歌舞を備へ、一僧院に燕し、酒間此の詩を吟じて得得たり、僧之を聞て笑て曰く尊官半日の閒を得て、老僧は却て三日を忙了す、此れ一日は供帳、一日は讌集、一日は洒掃するを言ふ、李涉知るあらば此の輩に三十棒を喫せしむべし、

宮詞

李商隱

君恩如二水向一東流一　得レ寵憂レ移失レ寵愁
莫向尊前奏花落　涼風只在二殿西頭一

君恩は水の東に向て流るるが如し、寵を得ては移らんことを憂へ寵を失しては愁ふ、尊前に向て花落を奏する莫れ、涼風は只殿の西頭に在り、

【句釋】宮詞は前に辨せり、君恩如水向東流君恩は流水と同じ、往ては還らざるなり、得寵憂移失寵愁得失俱に憂愁、得れば愛の移らんことを心配し、失すれば愁ふるは勿論なり、憂は勞苦、愁は愁歎、莫向尊前尊は「タル」酒尊なり、奏花落梅花落は笛の曲名、古樂府に「念ふ爾が零落して風飈を逐ふことを、徒らに霜華のみありて霜實なし」此の曲を聞けば自然感情が強くなるに由て奏するなりと言ふ、涼風只在殿西頭涼風は秋風なり、涼風は字の如く冷、熱の反對、故に寵の衰へたるに譬ふ、君王の寵も未だ全く衰へたりと言はざるが、早や已に近づきたる模樣なり、殿西頭は近くして至り易きを言ふ、

【評論】此の篇、宮女の情想を叙して全く遺憾なし、句としては一、三、四の三句を靈妙と爲すが意としては第二句尤も能く情想を穿つ、東西の字照應の妙、亦言ふべからず、向二字を押

す、古人と雖も此れは是れ失なり、意味の轉換なく同字使用法は全く法にあらず、

將赴二吳興一登二樂游原一　杜牧

清時有レ味是無能　閒愛二孤雲一靜愛レ僧
欲レ把二一麾一江海去　樂游原上望二昭陵一

清時味あるは是れ無能、閒は孤雲を愛し靜は僧を愛す、一麾を把て江海に去らんと欲す、樂游原上昭陵を望む、

【句釋】吳興は今日の浙江省湖州府烏程縣治、樂游原は今日の陝西省西安府、古の京兆なり、清時は太平の世、有味是無能無能の人間卽ち余の如き者が太平の世には味があると言ふ、強て發するの言なり、側面は慷慨す、閒愛孤雲閒に無心の雲を愛す、靜愛僧靜は無心の僧を愛す、共に人間に希望を絶つの人、陶淵明の詩、孤雲獨無レ依と、依る無きが杜の意の存する所、欲レ把一麾江海去この句に就て異論あり、『野客叢書』に今人守郡之を建麾と謂ふ、蓋し顏延年の詩、屢薦不レ入レ官、一麾乃出守、の事を用ふ此れ誤なり、延年謂ふ一麾は乃ち麾の麾を指す、旌麾の麾にあらざるなり、杜牧の欲下把二一麾一江海去上の句有てより、始めて謬用、一麾此れより遂に

故事と爲る、馮集梧曰く、沈存中の所言此の如し、僕攷ふ唐人詩、杜子美、柳子厚、許用晦、獨孤及、劉夢得、陸龜蒙、皆一麾の事を用ふ、獨牧之、一麾を把て爲めに圭角を露はすと謂ふ、延年の意を失するに似たり云云、要するに牧之が一官を得て江海に去ると見れば、愚論千百悉く無用に屬す、●●●●●●昭陵は太宗を葬むる所、牧之の意、太宗の英主を慕ふに在り、●●●●●●游原は陝西の西安府、漢の宣帝の神爵三年に樂游苑を起す、亦樂游原と曰ふ、『西京雜記』に唐の太平公主、原上に於て亭を置き、游賞す、其の地四望寬敞、上巳重陽毎に士女此に就て祓禊す、車馬塡塞すと、以て其の游勝地たること知るべし、

【評論】此の篇、牧自ら才を負ひ、兄の悰、時に隆盛なり、而して牧下位に居て心常に樂しまず、望昭陵は志を時に得ずして明君の世を思ふ、蓋し怨めるなり、首に淸時と言は反辭なり、

鄭瓘協律

廣文遺韻留樗散　雞犬圖書共一船
自說江湖不歸事　阻風中酒過二年年一

廣文の遺韻樗散を留め、雞犬圖書共に一船、自から說く江湖不歸の事、風

に阻せられ酒に中られて年年を過ぐ、

【句釋】●●は氏名なり虔が孫、●●は協律郎卽ち官名、漢代協律都尉を置く、晉に協律校尉と改む、後魏に協律郎、唐に協律郎、二人なり、六律六呂を和し、以て四時の氣、八風五音の節を辨ずることを掌る、廣文は瓘が乃祖、鄭虔なり、虔、廣文館博士と爲る、●●●●●●杜甫が鄭虔に贈りし詩に、鄭公樗散鬢如レ絲の句あり、牧之此の句に依る、樗散は樗櫟、散木と續く字にて無用の大木なり、繩墨にも中らず、規矩にも中らず、匠者顧みず、虔は詩書畫三絶、希世の偉人なるも儕かに協律の官に居る日本現今の高等官六七等に當る杜甫之を惜みて、此の贈言あり、牧之が瓘に贈るに、猶ほ甫が虔に贈る意を以て之を惜む、●●●●●●雞犬圖書共一船家財として有するもの、一船に收むるに足る、支那の官吏は古代より日本の豪商の如き者にて家財は十や二十の船には收まらざる也、然るに瓘は一船、其の人淸廉知るべし、自說江湖不歸事協律の官を辭し、以て江湖卽ち流浪の身と爲て再び官に歸らず、と自から說く、阻風世間の風波も、江水の風波も雙方に通ずる、種種と障りに遇ふことを阻風と云ふ、●●●●●●中酒過年年中は所謂中毒なり、氣隨氣儘にして年年を過ごさんとなり、

【評論】此の篇、鄭を言うて、其の實自身の不平を漏すもの、瓘が微官を嫌うて江湖不歸の事

を說きしは實際ならんも、それは璀の述懷にして牧之に關する事にあらず、直ちに其の言を以て詩と爲し之に贈るは、要するに自家の不平を漏ししのみ。

贈魏三十七　李羣玉

名珪似玉淨無瑕　美譽芳聲有數車
莫放燄光高二丈　來年燒殺杏園華

名珪玉に似て淨うして瑕無し、美譽芳聲數車あり、燄光を放ちて高きこと二丈ならしむる莫れ、來年杏園の華を燒殺せん、

【句釋】魏三十七其の人未詳、名珪珪は玉なり、然るに似玉と言ふ、玉は總名にて、珪は別名なればなり、古、諸侯を封ずる時賜ふ、是の故に玉に從ひ土を重ぬるに從ふ、魏の名を珪と云ふと古注本にあり、名を詩中に入るは日本人の事にて漢人には曾て無し、故に名にはあらず、淨無瑕玉の病を瑕と云ふ、此の玉病なし、魏の人品を玉に比す、美譽芳聲有數車財產家にて數事を有すと言ふにはあらず、車に積載する程の名聲が天下に高しとなり、莫放燄光高二丈『唐遺史』に江淮の間に術士あり姓は吳、宏詞に赴く試驗に赴く者あり之に謁す、術士曰く公の頭上燄光高さ二丈、必ず高第に登らん、今魏の才も燄光を放つは必定ならんが、他人に嫉視せらるる憂あり、依て其の才鋒を露はすなと訓戒する、來年燒殺杏園華及第者は曲江の杏園にて燕を賜ふが例なり、然るに魏が頭光を二丈餘も放つては遂に杏園を燒殺すべし、是の故に放つ莫れと云ふ、其の裏面は他人を凌轢する勿れの意味なり、

【評論】此の篇、諧謔一番、人をして噬然たらしむるものあり、

湘妃廟

少將風月怨平湖　見盡扶桑水到枯
相約杏華壇上去　畫欄紅紫鬬棲蒲

少らく風月を將て平湖を怨む、見盡さんとす扶桑水枯るに到るを、杏華壇上に相約し去て、畫欄の紅紫棲蒲を鬬はしめん、

【句釋】湘妃は卽ち舜の妃、娥皇の廟、卽ち黃陵廟なり、少將風月怨平湖娥皇、女英の二女舜に從て及ばず湘に沈んで死す故に平湖風月を怨むと云ふ、見盡扶桑水到枯此の句の意は縱令扶桑の海水は枯るる時あるも、我が怨は萬劫盡ること無しとなり、舜を逐ふも及ばず、此の

湘水に投じて死す、故に怨恨の情盡きざるなり、蓋し舜を怨むにはあらず、相約は李羣玉が二妃に戯れて舜が事を慕うて萬劫怨むより我と約束し玉へと云ふ、杏華壇上去約束して游ぶ所は杏華壇卽ち割烹店に上り去らんと、畫欄は雙六の盤上、縱橫の筋線を云ふ、筋線が色分したるを紅紫と云ふ、鬪博蒲骰子卽ち「サイコロ」を鬪はし游戯を爲んとなり、

【評論】 此の篇、湘妃廟に題するに此の游戯を以てす、李が人品の卑下なると見るべし、范攄が『雲溪友議』に曰く李羣玉、湘妃廟に題す時に二女郎あり見て曰く兒は是れ娥皇女英なり、二年の後、當に郎君と雲夢の游を爲すべし、李乃ち其の陳する所を志す、俄かに影滅す、遂に其の神像を禮して去る、重て湖嶺を涉り、潯陽に至る、太守段成式素李と詩酒の友たり、具さに此の事を述ぶ、段因て之に戯れて曰く知らず足下は是れ虞舜の辟陽侯なるを、果して二年を經て、李は洪州に於て死す、段詩を賦して曰く「曾て黃粱の事を話す、今白日に催せらる、老て兒女の累無くんば、誰か哭して泉臺に到らん、」劉潛夫曰く古人奇遇の事を叙す、猶ほ之を他人に託す、元稹が鶯鶯夢妓の如き之を張生に託す、李は直ちに己れに歸す、名敎地を掃ふと、案ずるに此の詩に就て李が批議を招くは自業自得、聊も辯護の餘地無し、然れども別に七律と七絶二首は千古の絶調、漁洋の嘆じて其の餘唾を嘗むるを辭せざるもの、且李が「飯僧」の詩に「好

んで天竺の書を讀み、爲めに無生の理を尋ぬ」の言もあり、孰れを是とし、孰れを非とも容易に定め難し、余は李の事、研究の餘地あるものと思ふ、劉長卿が酬李穆の詩より此に至る十五首は一句が二句に應じ、而して三句に開き、四句に合するの格とす、

用事

周弼が曰く詩中、事を用ふ既に窒塞し易し、況や二十八字の間に於てや、尤も堆疊し難し、若し融化せずして事を以て意と爲し更に加ふること輕卒を以てするときは里謠巷歌の竹を擊て歌ふに鄰し、凡そ此れ皆用事の妙なるものなり、

秋日過員太祝林園

李渉

望水尋山二里餘　竹林斜到地僊居
秋光何處堪消日　玄晏先生滿架書

水を望み山を尋ぬ二里餘、竹林斜めに到る地僊の居、秋光何れの處か日を消するに堪へたる、玄晏先生滿架の書、

【句釋】秋日過員員は姓、太祝神を祭る事を掌る官名、漢代太祝六人神主を出納すと、林園は員が住居、望水臨の「ノゾム」は高きより下瞰す、望の「ノゾム」は下きより高處に向ふ、故に臨水は普通なり、望水は山を流るる川と見るべし、尋山二里餘我邦の十二三丁に當る、竹林斜到

地僊居晉の稽康、七賢と竹林に游ぶ、今の懷州修武縣の東北五十里、崇明寺是れ其の地なり、顧愷之曰く、鮑靚は靈に通ずる士なり、徐寧之を師とす、夜琴を聞て怪て之を問ふ、靚が曰く叔夜なり、寧が曰く稽、命を東邛に留む、何ぞ此に在るを得ん、靚が曰く叔夜、迹りは身なは終りを示して實は尸解す、故に此の詩之を地僊と謂ふ、乃ち稽中散を以て員太祝に比す、是れ天隱の說なり、尸解とは身體の分解を云ふなれば、普通の死に當る『抱朴子』に中士は名山に游ぶ之を地仙と云ふ、秋光何處堪消日太祝が秋日を消光するに何の方法を以てするや、玄晏先生滿架書晉の皇甫謐字は士安、幼名靜安、玄晏先生と號す、平生讀書を好む、人之を書淫と謂ふ、太祝を以て更に玄晏に比す、

【評論】此の篇、李渉の筆としては平凡たるを免れず、他晩唐諸家に在りては亦傑出せるものと謂ふ可し、

長安作

宵分獨坐到天明　又策羸驂信脚行
毎日除書雖滿紙　不曾聞有介推名

宵分より獨坐して天明に到る、又羸驂に策て脚に信せて行く、毎日除書紙に滿つと雖も、曾て介推が名あることを聞かず、

【句釋】長安作旅行中の作、宵分は夜と晝との中間、卽ち夜半なり、獨坐到天明旅寓に在り、思懷動き睡る能はず、又策策は鞭なり、羸驂は毎日騎るが故に疲勞したる馬、信脚行里數なぞ定めず、行けるまで行く、毎日は旅行中毎日なり、除書は官より出る辭令書を云ふ、今日本の「官報」なるもの是れなり、雖滿紙百ページ二百ページの巨冊となるも、不曾聞有介推名自分に對する任官の辭令が載てあるかと思うて之を讀むが一向に自分の名は無きなり、以て介推に自身を譬ふ、介子推は晉の文公に事ふ、文公の艱難中、志を變せず、文公晉に歸るに及んで、賞賜介子推に及ばず、故意にはあらず、疎漏なり、終に山中に隱れて死す、子推は自分の股を割き文公に啖はしめ、以て飢を防ぎし大忠臣なり、李涉以て自から比す、其の志達せざるを哀しむ、人品を卑うすと言ふ者は、深く李涉を知らざる人の議論なり、

【評論】此の篇、李涉の如き人を以て其の言此の如し、如何に唐代の人が、官吏希望を終身の目的としたる事知るべきなり、

奉誠園聞笛

竇牟

曾絕朱纓吐錦茵　欲披荒草訪遺塵
秋風忽灑西園淚　滿目山陽笛裏人

曾て朱纓を絕て錦茵を吐く、荒草を披きて遺塵を訪んと欲す、秋風忽ち灑ぐ西園の淚、滿目山陽笛裏の人、

【略傳】竇牟字は貽宗、貞元間の進士、長慶中、國子司業と爲て卒す、竇羣の弟とす、

【句釋】奉誠園北平郡王馬燧が子の暢、第中の大杏を以て竇文場に餉る、文場以て德宗に進む德宗未だ嘗て見ず之を怪しむ、中使をして杏樹を封せしむ、暢懼て宅を進めて奉誠園と爲す、此の園に於て聞笛感慨を生じ作る、曾絕朱纓吐錦茵竇が馬燧に從て居し時、其の失策多かりしも燧は知らぬ態を爲して咎めず、之に感じて此の句あり、『韓非子』に楚の莊王、羣臣と燕す、火滅して客に莊王の愛する美人の衣を牽く者あり、美人其の纓冠のヒボを絕ち、王に告て曰く火を取て纓を絕ちし者を視んと、王の曰く今已に飮む、纓を絕ざる者は懽びずと、羣臣皆纓を絕つ、然して後、燈を點す、莊王、晉と戰ふ時、一人鋒に當て大に晉軍を破る、王怪んで之を問

へば、嚮に纓を絕し者なり、漢の丙吉が御史醉て車上に嘔く、曹吏白して之を斥ぞく、丙吉が曰く、第之を忍べ、丞相の車茵を汚すに過ぎずと、竇が今此の二人を借て以て馬燧に感恩を叙す、欲披荒草訪遺塵奉誠園の荒涼として昔に異なるを哀しむ、艸茫茫の處に馬燧が遺跡を想ふ、莊王馬燧に比すの仁恕に比し德宗の不仁を嘆す、秋風忽灑西園淚『魏志』に陳思王曹植西園を鄴國名に置て諸の才子と夜游詩を賦す、故に劉禎王の死後、詩を作りて曰く「步して北寺の門を出、遙かに西苑の園を望む、人に乘て感動し易し、涕下りて衿と連なる」西園の荒涼たるを哀しむ、滿目山陽笛裏人園の荒涼たるを見るのみにて感慨深し、其の上笛を聞く、感や一層深し、晉の向秀が「思舊賦」序に余嵇康、呂安と居止接近し、後、各の事を以て法と見られ、余西邁其の舊廬を經、鄰人笛を吹く者あり、曩昔宴游の好を追思して音に感じて嘆す、山陽は、天隱は懷州修武縣、卽ち今日の河南省衞輝府とす、今之に從ふ、蓋し山陽の名は二處も三處も有ること知らざるべからず、

【評論】此の篇、唐絕として上乘なるもの、知己に感じたる故事は絕纓者と劉禎を以てし、笛に就ては向秀を以てし、奉誠園聞笛の五字遺憾なく發露す、此の如き題、此の如き詩、我が邦人の留意して學ぶべき所なり、

冬夜寓懷寄王翰林　　竇庠

滿地霜蕪葉下枝　幾回吟斷四愁詩
漢家若欲論封禪　須及相如未病時

滿地の霜蕪して葉枝を下る、幾回か吟斷す四愁の詩、漢家若封禪を論ぜんと欲すれば、須らく相如が未だ病ざる時に及ぶべし、

【句釋】冬夜寓懷旅中にて懷を叙し、以て寄王翰林王は姓、名は源中、翰林院學士、唐以前は翰林學士無し、季昌は唐承平時と言ふ、唐に承平の年號なし、承平は北魏南安王の年號とす、今案ず、唐書四十『百官志』玄宗初置二翰林待詔一以二張說陸堅張九齡一爲二之掌一と、見るべし承平にあらざることを、開元の初めなり、滿地霜蕪霜の多く隕る景色を蕪と云ふ、俗に霜枯と云ふ、葉下枝落葉紛紛たり、幾回は「タビタビ」なり、吟斷は吟じ了る、四愁詩は晉の張衡が作、竇が今張衡が四愁詩を讀んで王を以て假りに賢者と爲す、張衡は賢なるも之を用ふる者なきを慨して作る詩なればなり、翰林は天下の集賢なり、漢家若欲論封禪封禪は祭祀の名、土を築くを封、地を除くを禪と云ふ、帝王は巡狩して、四嶽に至り泰山を封し天を祭り、小山を禪して山川を

祭る、漢家卽ち天家にて此の事を議せんと欲する心意あれば、須及相如未病時『史記』及び『漢書』に天子元帝曰く相如病甚し、往て悉く其の書を取るべし、若之に後る、所忠をして往かしむ、而して相如已に死す、家に遺書無し、其の妻に問ふ、對て曰く、長卿相如の宇未だ嘗て書有らず、時時書を著はすも、人亦取り去る、長卿未だ死せざる時、一卷の書を爲りて曰く、使天子の使あり來りて書を求めば之を奏せよ、其の遺札書して封禪の事を言ふ、所忠奏す、天子之を異とす、天子其の辭を讀み沛然感動の意容を改め曰く愈乎朕其れ試ん哉と、張衡と相如に全然自から比するにはあらざるも、王に我が志を述て以て其の推薦を求むるが此の作の意なり、病氣に爲りては用を爲さず、故に未だ病ざる時と云ふ、

【評論】此の篇、張衡四愁詩と、相如封禪書を作る才は僕自から持す、願くば翰林之を朝廷へ奏せよとの意、其の自負や大なり、然れども天隱和尙の如く庠が如きは何ぞ議せんやは酷に過ぐ、和尙元來人情を解せざるなり、

焚書坑　　章碣

竹帛煙消帝業虛　關河空鎖祖龍居

坑灰未冷山東亂　劉項元來不讀書

竹帛煙消して帝業虛し、關河空しく鎖す祖龍の居、坑灰未だ冷やかならず山東亂る、劉項元來書を讀まず、

【略傳】章碣は孝標が子、乾符の進士第に登る、

【句釋】焚書坑焚は音「フン」なり、「ハン」にあらず、陝西省の驪山に在り、始皇が書を焚き儒を坑する處、始皇が李斯の上書に依て四百六十人の學者を坑にす、此の愚王愚臣は秦の學者の爲めに亡びず、無學者の爲めに亡ぼされたるを知らざるなり、竹帛は書なり、漢前は紙なし、皆竹帛に書す、煙消書物を焚燒して煙は已に消す、帝業虛帝業を邪魔する者は書物なりと思うて之を焚きしが、其の焚きし始皇の業も僅僅三世、數十年を經ずして亡ぶ、關河空鎖祖龍居『史記始皇本紀』に始皇の使者關東より華陰に至る、素車白馬にして璧を持し使者に與ふる者あり曰く鎬池君に遺れ、明年祖龍死せんと、祖は始、龍は君の象、皇と爲る、秦が要害の山河と思ひし地も、空しく關河、秦の爲めに何の用も爲さず、坑灰未冷儒者を坑し、書を焚きて後、僅一二年にして、山東亂陳勝なる者あり、第一番に秦を破る旗を揚ぐ、卽ち山東省の一角より

起る、劉は劉邦、漢の高祖、項は項羽、元來不讀書劉邦は曰く馬上安んぞ詩書を事とせん、項羽は曰く書は姓名を記するに足る、二人共書を讀まざる無學者なり、無學者の爲に亡ぼされ、學者の爲めに亡ぼされたるにあらざることを慨す、

【評論】此の篇、明の胡元瑞は俚俗なりと評し、清の沈歸愚は蠶派と評す、明の謝茂秦は咏史として此の如きものを善とす、斷案明白なればなり、元瑞、歸愚の二家は詩本來の主旨たる溫厚の處を缺けばなり、之を要するに露骨の處に得と失とを兼たるもの、後生は以て法と爲すべからず、

赤壁

杜牧

折戟沈沙鐵半銷　自將磨洗認前朝
東風不與周郎便　銅雀春深鎖二喬

折戟沙に沈んで鐵半ば銷す、自から磨洗を將て前朝を認む、東風は周郎が與に便せずんば、銅雀春深うして二喬を鎖さん、

【句釋】●●赤壁は種種に異說あるが、鄂州蒲折縣の西北百二十里即ち今日の湖北省の武昌を以て

正しとす、東坡の賦に東夏口を望み、西武昌を望む、是れ眞なり、吳の周瑜が曹操を水船にて破りし處、折戟折れたる戟、沈沙中に沈沒す、鐵半銷時代經過して鐵も消滅す、自將磨洗折戟を發掘して自から其の「サビ」を磨き洗うて、認前朝即ち後漢の建安十二年を認知する、東風孔明が當時、風の吹くを知て、以て周瑜に戰を勸めしなり、不與周郎便此の風が起らざるときは吳は魏の爲めに敗北する、東風起りしに依て周郎は大功を奏せしなり、風が戰の便宜を與へ吳れたるなり、周瑜は年二十四、吳中呼で周郎と爲す、銅雀は曹操が建し臺、春深鎖二喬曹操は吳を破りて求めんと欲する者は國にあらず、土地にあらず、唯此の二喬にあり、孫策が皖を攻めて喬玄が二女を得皆國色なり、孫策は大喬即ち姉を妻とし、周瑜は小喬即ち妹を妻とす、其の美人の名高きを以て曹操が垂涎したるものなり、

【評論】此の篇、杜が集中に在て傑製の一とす、許彦周が曰く孫氏が覇業此の一戰に爵る、社稷の存亡、生靈の塗炭、都て問はず、只二喬を捉了せんことを恐る、見つ可し措大、好惡を知らざるとを、此の老、詩を說くに理窟を以てし、情致を以てせず、笑ふべきなり、曹操の意のある所、二喬に在るを以て、特に大小喬を拈出するなり、杜一人ならず、薛能も胡曾も、大抵意のある所同じ、詩人の情想と史論家の情想と混同するものは、到底此の詩を味ふ能はず、

秦淮

煙籠寒水月籠沙　夜泊秦淮近酒家
商女不知亡國恨　隔江猶唱後庭華

煙は寒水を籠め月は沙を籠む、夜秦淮に泊して酒家に近し、商女は知らず亡國の恨み、江を隔て猶唱ふ後庭華、

【句釋】秦淮は建康、今日の江蘇省揚州に在り、江東の秦淮と云ふ、煙籠寒水水上に煙有るなり、月籠沙沙上に月有るなり、夜泊秦淮近酒家近の字、一本賣に作る、近を以て可とす、酒家は我邦の料理屋なり、杜の宿寓が料理屋に接近して居る、商女は妓女と見て可なり、酒家より起る聲、不知亡國恨國を亡ぼすの歌多くは、俗惡淫思なり、其の俗惡淫思を商女は知らず、隔江猶唱後庭華此の秦淮に昔都せし陳の後主は「玉樹後庭華」の詞曲を作る、多くの女をして歌はしめ、遂に隋の爲めに滅ぼさる、憐むべきは商女なり、歌ふも聞くも、厭ふべく、恥べきなるに知らざるが故に之を唱ふ、後主は自から無愁天子と號して遂に有愁天子と爲て終る、

【評論】此の篇、晩唐の絶句として最上乘に屬す、季昌は此の詩を桑間濮上の音に類すと評

したるも、是れ亦、詩と理窟を混同したる說、取るに足らざるなり、詩は情に訴て理に訴へざることを知らば此の愚論は爲さず、詩を以て一概に敎化の具と爲す者は、道樂者の事にして詩人の事にはあらざるなり、

漢宮

李商隱

青雀西飛竟未回　君王長在集靈臺
侍臣最有相如渴　不賜金莖露一杯

青雀西に飛で竟に未だ回らず、君王は長く集靈臺に在り、侍臣最も相如が渴あり、金莖の露一杯を賜はらず、

【句釋】漢宮名を漢宮に借りて其の實は唐宮を詠ず、青雀西飛竟未回「漢武故事」に七月七日、上承華殿に於て癒す、忽青鳥あり西方より來る、上東方朔に問ふ、朔が曰く此れ西王母來らんと欲す、須く有て王母至る、去るに及んで帝三年の後を以て復來るを許す、後竟に來らず、君王長在集靈臺集靈宮の通天臺は華隱縣の界、今日の陝西省同州府に在り、卽ち武帝の造る所、君王は武帝を正面にして裏面は玄宗なり、侍臣最有相如渴司馬相如は口吃して消渴の病を有す

不賜金莖露一抔「西都賦」に仙掌銅盤を杭て以て露を承け、雙立の金莖を擢んじ、武帝此れを取て玉屑を服して以て不死を求む、詩意は方士妄言す、君王惑うて悟らず、若露を食うて果して死せずんば、相如最も渇す、何ぞ此れを以て之を試みざるやと、武帝を玄宗に比し、相如を自身に比す、

【評論】此の篇、羅大經宋人の評に、委蛇曲折、不盡の意を含むと、君王長在の句、大に武帝を嘲笑して太だ骨を露さず、來らざるものを待や久しきは眞に笑ふべきなり、仙を求むる者皆是れ死す、死は人間の公道なり、其の公道を知らずして不死を求む、愚此れより甚だしきは無し、唐絶として其の力を認む、此の篇の如きは多くあらず、

賈生

宣室求賢訪逐臣　賈生才調更無倫
可憐夜半虛前席　不問蒼生問鬼神

宣室賢を求めて逐臣を訪ふ、賈生が才調更に倫無し、憐む可し夜半に虛しく席を前め、蒼生を問はず鬼神を問ふ、

【句釋】賈生は前漢の賈誼なり、洛陽の人、年十八、能く詩を誦し、文を屬す、文帝召して博士と爲す、時に年二十、死する年三十三、宣室は未央前殿の正室、求賢求むる者は文帝なり、訪逐臣賈生は初め文帝に用ひられ、後疎んぜられ貶して長沙王太傅と爲る、自から楚の屈原に比し「懷沙賦」を作る、其の文絶世なり、文帝此の賦を讀んで復召還す、才調更無倫傳に云ふ諸老先生未だ言ふ能はざるに誼盡く之れが爲めに對ふと、可憐夜半虛前席長沙より誼を召還して上方の宣室に見ゆ、因て鬼神の事を感じて之を問ふ、誼具さに所以を道ふ、半夜に至りて文帝席を前む、一所懸命に聞くなり、不問蒼生問鬼神君は民を心頭に掛けて所謂民情を聞くが君の君たる務めとす、然るに蒼生の事を問はずして鬼神の事を問ふ、其の謬や憐む可しとなり、賈生が奏する治安三策は天下を治むる正道とす、

【評論】此の篇、義山自身を賈生に比し、宣宗を漢文帝に比す、清秀高格唐絶の壓卷、清の隨園が詩に、不レ問二蒼生一問二鬼神一、玉溪生笑漢文君、請看宣室無二才子一、巫蠱紛紛死二萬人一

集靈臺

張祐

虢國夫人承二主恩一　平明騎レ馬入二金門一

却嫌脂粉汚顔色　淡掃蛾眉朝至尊

虢國夫人主恩を承く、平明馬に騎て金門に入る、却て嫌ふ脂粉の顔色を汚すを、淡く蛾眉を掃うて至尊に朝す、

【略傳】張祐字は承吉、處士を以て蘇州に居る、

【句釋】集靈臺は玄宗の作る所、漢の集靈宮にはあらず、虢國夫人楊太眞貴妃に三姨あり、韓國、虢國、秦國の三夫人なり、天子の妻を后と曰ひ諸侯は夫人と曰ふ、今后にあらずして妃なり、夫人と稱する所以、承主恩玄宗に寵せらるるなり、平明は曉天、騎馬入金門金馬門は宮禁に入る第一關門とす、却嫌脂粉汚顔色「楊妃外傳」に虢國夫人、朱粉を施さず自から美艶なり、常に素面天に朝す、淡掃娥眉俗に薄化妝と云ふものなり、朝至尊天子に謁するに禮を缺く事を諷す、

【評論】此の篇天子が色に惑溺して女謁が寵を恃み其の禮を失へることを諷諭せるなり、詩人溫厚の旨、是に於てか在り、

游嘉陵後溪　　薛能

山屐經過滿徑蹤　隔溪遙見夕陽春

當時諸葛成何事　只合終身作臥龍

山屐經過す滿徑の蹤、溪を隔て遙かに見る夕陽の春づくを、當時の諸葛何事をか成す、只合に終身臥龍と作るべきに、

【句釋】嘉陵は溪の名、陝西の鳳縣と甘肅の階州との二說あり、孔明が出師屯する所、前說を以て可とす、古の西蜀なり、山屐は木屐、日本の下駄に齒の有るもの、宋の謝靈運が游山毎に著しなり、經過滿徑蹤齒痕が處處に印す、隔溪遙見夕陽春日の沒せんとする形容是を春と云ふ、溪を隔て之を見る、蜀の王業が振はざりしを諷す、當時諸葛成何事痛罵一番此に至る、薛能は蜀の從事と爲て、常に武侯が王佐の才に非ざることを薄んず、只合終身作臥龍孔明廬に在りし時、徐庶之を臥龍と謂ふ、薛能の意、孔明が草廬を出しは謬りなり、臥龍岡に一生を送るべきが可なりと、

【評論】此の篇武侯を罵て此の露骨の言を爲す、薛能が傲誕の性知るべし、清の廖舟も曰く武侯は變計を知らず、識あるも膽無しと、羅大經は薛能を非として曰く能が論到らず、孔明が

出ること中原を掃清する能はずと雖も、火德の灰を吹て、然して討賊の義を伸ぶ、託孤の責を盡くし、以て萬世の人臣たる者に教ふ、安んぞ之を成何事と謂ふを得んやと、清潭孔明を咏じて、軍中莫ニ敢異一ニ隆中一、羽扇綸巾不レ飾レ躬、可レ笑會昌薛從事、隔レ溪遙見臥龍風、李渉の秋日過の詩より此に至る十一首は、各の結句の三字、介推名、笛裏人、未病時、不讀書、鎖二喬、後庭華、問鬼神、朝至尊、作臥龍等の作法作意を同うするものの格なり、」

前對

周弼が曰く接句第三虚實兩體を兼備す、但前の句對を作して其の接亦微し異なるなり、相去ること僅かに一間、特に稍停の間に在るのみ、

山店　　盧綸

登登山路何時盡　　決決溪泉到處聞
風動二葉聲一山犬吠　　一家松火隔二秋雲一

登登たり山路何れの時か盡ん、決決たる溪泉到處に聞く、風は葉聲を動かして山犬吠ゆ、一家の松火秋雲を隔つ、

【句釋】山店店は肆、貨を置き物を鬻ぐ處、山頭の茶屋に憩て作る、登登は用力なりと注して山に登る辛勞を言ふ、山路何時盡山路の長きに勞すは、易易たらざればなり、決決は行流なりと注す、是れ水聲の形容、溪泉到處聞脚前脚後水流ならざるは無し、風動葉聲山犬吠山犬が風樹に當る聲に吠ゆ、一家松火松は油氣多し以て火を取るべし、遙かに此の松火を燒く家を認む、

隔秋雲非常に遠方に在る、晝間にも夜間にも通ずべし、一概に夜と見るは暗昧なり、

【評論】此の篇、山中の景を寫して幽絶清絶、以て描き圖と爲すべし、此の如き詩、眞に多讀を厭はず、

韋處士郊居　　雍陶

滿庭詩景飄紅葉　繞砌琴聲滴暗泉
門外晩晴秋色老　蕭條寒玉一溪煙

滿庭の詩景紅葉飄る、砌を繞る琴聲暗泉滴たる、門外の晩晴秋色老ゆ、蕭條たる寒玉一溪の煙、

【句釋】韋は姓、處士は仕へざる人の稱、官吏とならざる人、暗泉は目に見えざるも其の琮琮として琴聲の如く耳に聞くを云ふ、暗處にあるとのみ解すべからず、寒玉は竹なり、秋晩に寒竹のみ青青として一溪の煙を帶ぶるを見る、竹を以て處士の人品に比す、

江南　　陸龜蒙

村邊紫豆花垂次　岸上紅梨葉戰初

村邊の紫豆花垂る次で、岸上の紅梨葉戰ぐ初め、惆しむこと莫れ煙中に重て首を回らすを、酒旗の靑紵一行の書、

【句釋】江南は楊子江南單に江と言へば楊子江に限るなり、紫豆は豆花は紫色を以て開く、次は豆の次第にはあらず、其の時分と云ふ義、秋七月なり、紅梨梨花は白し葉は紅なり、戰は風に因てザワザワする音を云ふ、初も其の時分を言ふ、莫怪ヲカシク思ふな、煙中秋煙中に、重回首氣に掛るものあればなり、酒旗酒家の招牌、靑紵紵は麻の類、靑色を以て染む、一行書字の如く一行酒家の名を記す、是れ我が目に映ずるなり、

旅夕　　高蟾

風散古陂驚宿雁　月臨荒戍起啼鴉
不堪吟斷無人見　時復寒燈落一華

風古陂に散じて宿雁を驚かし、月荒戍に臨んで啼鴉起つ、吟斷に堪へず人

の見る無し、時に復寒燈一華を落す、

【略傳】高蟾其の人詳かならず、乾符三年登第し御史中丞に至る、

【句釋】旅夕旅行中に夕日の景を寫す、風散古陂陂は「ツツミ」風遮る物なく縱橫に吹き散らす、驚宿雁低處の景、月臨荒戍番兵が昔居し所、起啼鴉高處の景、不堪吟斷吟ずる中は氣強し、吟後は氣弱し、蕭條寂寞言外に在り、無人見堪へざる以所、時復寒燈落一華燈花結んで吉事生ず、日本の丁字頭と云ふものが、燈華なり、

【評論】此の篇、結句に至り客舍に在るを知る、前三句は全く外景、唐人に此の詩法ある恠しむべし、

金陵晚眺

曾伴浮雲歸晚色　猶陪落日泛秋聲
世間無限丹靑手　一段傷心畫不成

曾て浮雲の晚色に歸するに伴ふ、猶ほ落日の秋聲を泛ぶるに陪す、世間限り無き丹靑の手、一段の傷心畫けども成らず、

【句釋】曾伴浮雲歸晚色夕陽に浮雲と共に我が家に歸る、猶陪陪は隨ふなり、落日泛秋聲泛は起る意味、秋聲は秋風なり、今猶ほ落日秋風を起すに隨陪する、我が一身の榮達せざるを慨す、世間無限丹靑手世上に畫師多からんも、一段傷心畫不成有形物は畫く可し、無形物は畫くべからず、

【評論】此の篇、晚眺に托して我が悲慨を叙す、古都なれば、更に感を深うす、元遺山は此の詩を愛し、擬して曰く、十年舊隱拋二何處一、一片傷心畫不レ成と、片も段も一義なり、

春

明月斷魂淸靄靄　平蕪歸路綠迢迢
人生莫レ遣二頭如雪一　縱得春風亦不レ消

明月斷魂淸うして靄靄、平蕪歸路綠迢迢、人生頭をして雪の如くなら遣る莫れ、縱ひ春風を得るも亦消せず、

【句釋】明月は秋月なり、斷魂秋夜は人をして自から斷魂せしむ、淸靄靄淸の字を春とすれば

解し易し、靄靄は春月なり、和氣なれば、斷魂の懷なし、平蕪は平郊、歸路蕭條の感に打たるるも綠迢迢春になれば綠色人に可なり、人生莫遣頭如雪莫遣の二字は禁止の辭、白髮と成るは休めよとなり、縱得春風亦不消地上の白雪は、春風には消滅すれども、頭上の白雪は縱ひ春風を得るとも消滅せず、

【評論】 此の篇、春の和氣を咏じて以て人生の衰老を嘆ず、近時余が同門の先輩植村蘆洲、「白鬚祠」に題して、祠神也似二人生老一、縱得二春風一尙白鬚と、此の詩を善學せりと謂ふべし、山店より此に至る六首は一二の句、對法を以て成る、

後對

周弼曰く此の體唐人之を用ふること亦少なり、必ず末句を對すと雖も、而かも詞足り意盡さしむ、末だ嘗て對せざる若くす、然らざるときは長律を半截する如し、皚皚齊整して略結合なし、此れ荊公が徐師川に誚らるる所以なり、

過二鄭山人所居一　劉長卿

寂寂孤鶯啼二杏園一　寥寥一犬吠二桃源一
落花芳艸無二尋處一　萬壑千峯獨閉レ門

寂寂たる孤鶯杏園に啼き、寥寥たる一犬桃源に吠ゆ、落花芳艸尋る處無く、萬壑千峯獨門を閉づ、

【句釋】 鄭山人は不詳、寂寂孤鶯啼杏園吳の董奉は名醫なり、山居して田を種ゑず、人の爲に病を治し、錢を取らず、唯杏五株を栽ゑしむ、人杏を買んと欲す、穀一器を以て杏一器を取る、寥寥一犬吠桃源武陵桃源を以て用ひたるは春にして神仙の棲隱に托寄すればなり、落花芳艸無

尋處落花と芳卿にて滿地埋まる如何なる處に向て山人の居所を尋ねんや、萬壑千峯獨閉門非常な深き壑や、非常な高き峯、其の間に一軒の家あり而かも門を閉づ、人を尋ぬる處なき所以、

【評論】此の篇、前對の格へ收むべきを、後對の格と爲したるは甚だ惜しむべし、三四は對と言へば、對せざるにはあらざるも一二の句に比較すれば、極めて疎對とす、必ず以て前對の部へ收むべし、第一句高處、第二句低處、三句も亦低處、四句は高低合一して重きは高處の千峯に在り、邦人評するに曾て高低の事を言はず、唐賢の用意多く此に在り、此の篇の如き一讀の下、氷心雪意、塵外に游ぶの感あり、上乘の作と爲す、

寒食汜上　王維

廣武城邊逢暮春　汶陽歸客淚沾巾
落花寂寂啼山鳥　楊柳青青渡水人

廣武城邊暮春に逢ひ、汶陽の歸客淚巾を沾ほす、落花寂寂山に啼くの鳥、楊柳青青水を渡るの人、

【句釋】寒食は前に辨せり、汜上は河南省開封府汜水縣西北、王が旅行中の作とす、廣武城は鄭州の滎澤縣、廣武山に在り、卽ち楚と漢と相拒ぐの處、鄭州も亦開封府に屬す、逢暮春所謂落花の時節感は自から深し、汶陽は山東省兗州府の汶上縣、王は卽ち歸客と爲て汶陽に歸らんと欲して途、汜上を過ぎるなり、淚沾巾何故に感ずと言はば、此の時王は賊の爲に擒にせられ幸に命を全うして此に歸るを得たり、落花寂寂啼山鳥も亦暮春に啼く、其の啼や傷むが如し、楊柳青青渡水人江上の楊柳、水を渡る人に映じて青青たり、

【評論】此の篇、卽景卽目、出すに清愜を以てす、右丞にあらざれば斷じて此の作なし、東坡此の詩を評して詩中に畫あり、畫中に詩ありと、神品に入るものと謂つ可し、

與從弟同下第出關　盧綸

出關愁暮一沾裳　滿野蓬生古戰場
孤邨樹色昏殘雨　遠寺鐘聲帶夕陽

關を出て暮を愁て一び裳を沾す、滿野蓬生ず古戰場、孤邨の樹色殘雨昏く、遠寺の鐘聲夕陽を帶ぶ、

【句釋】與從弟「イトコ」名は璞、同下第は進士及第せずして出關長安城の關門を出るなり、

一●●裳裳は「モ」なり、蓬●●●古の字百年も千年も前を指すにあらず、天寶の亂卽ち安祿山の時を言ふ、此の時長安も洛陽も共も灰燼と爲る、國を憂ふる情もあり、身を想ふ情もあり、孤邨樹色昏殘雨妙は孤と殘の字にあり、遠寺鐘聲帶夕陽鐘は耳邊には可ならず、妙は其の遠にあり、

【評論】此の篇、國も身も感慨に滿ち充ちて而かも出すに此の蘊雅の語を以てす、誦すべし、

宿二石邑山中一　韓翃

浮雲不レ共二此山一齊　山靄蒼蒼望轉迷
曉月暫飛千樹裏　秋河隔在二數峯西一

浮雲此の山と共に齊しからず、山靄蒼蒼望轉た迷ふ、曉月暫らく飛ぶ千樹の裏、秋河は隔てて數峯の西に在り、

【句釋】石邑山は漢の江邑縣、今日の直隷省眞定府獲鹿縣に在り、浮雲不共此山齊雲は高低ありて山と齊しく高からずとの意、蒼蒼は靄を形容して言ふ、望轉迷行路分明ならざるなり、曉月暫飛千樹裏自からの行に隨て樹間に隱見する月は恰かも飛ぶが如くなり、秋河隔在數峯

●秋河は銀河なり、已に五更の景色とす、

【評論】此の篇、奇警を以て尋常の圈外に超絕するもの、一句奇、三句奇、四句奇、二句獨正當の如きも、望轉迷は他の諸句を吐き出す根本なれば、是亦凡にはあらず、明人の評に高華明秀、梁陳の妙語を唐調に變化させしなりと、洵とに然り、洵とに然り、

贈二張千牛一　上路新回白鼻騮

蓬萊闕下是天家　急管晝催平樂酒　春衣夜宿杜陵華
蓬萊闕下是れ天家、上路新たに回る白鼻騮、急管晝催す平樂の酒、春衣夜宿す杜陵の華、

【句釋】張は姓、千牛は官名、千牛は名刀の名、唐代に千牛衞の職を置く、宮禁守護の役とす、●●●●●●●●蓬萊闕下是天家仙人の居處、蓬萊を以て宮名と爲す、敎坊の側に在り、敎坊とは妓館を言ふ、上路は上苑の通路、天子通行の路、新回白鼻騮馬に騎て回り來る、白鼻騮は淺黃色の名馬なり、回る者は誰ぞ千牛なり、急管晝催●●●●平樂酒平樂は今日の俱樂部なり、千牛の回る時、此の平樂館

に於て酒燕を催し、管絃の曲、急なるなり、春衣夜宿杜陵華杜陵は我邦東京の柳橋の如き處、千牛は此處に夜遊して歡を恣にする、

【評論】此の篇、千牛の贅澤を叙する以外何等の味も無し、風敎に害あり、刪除すべし、過二鄭山人一詩より此に至る五首後對の格、蓋し鄭の詩は誤編なれば四首と云ふを正しとす、

拗體

周弼曰く此の體必ず奇句を得て時に出して之を用ふ、姑らく之を存じ、以て一體に備ふ、

旅望　　李頎

百華原頭望二京師一　黄河水流無二盡時一
秋天曠野行人絶　馬首西來知是誰

百華原頭京師を望めば、黄河水流れて盡る時無し、秋天曠野行人絶え、馬首西來知ぬ是れ誰ぞ、

【略傳】李頎は東川の人、開元の進士、王維と交游す、

【句釋】●●旅望は「出塞行」と題して王昌齡の作と爲す本あり、然るに『全唐詩』の王集と李集とを檢す、二家の集共に此の詩無し果して何人の詩なるを知らず、東陽は『絶句類選』に王昌齡とす、拙堂亦王として少伯絶句多入二逸品一と評す、要するに盛唐人にあらざれば斷じて言ふ能はざる詩、王李二家にあらずとするも、岑か王右丞にあらざれば能はず、百●華を百艸に作る本あり、

花に勝る、原頭望京師隴西の地より都城長安を回望する、黄河水流無盡時黄河は東流し去て長安に向ふが如し、人、水を羨まざるを得ず、秋天曠野行人絶寂寞たる原頭往來の人影無し、馬首西來知是誰人の往來無き處、一人馬首を西に向け來る、是れ果して何人なるや、水の東流と反對なるは是れ怪しむべし、

【評論】此の篇、西域の地に在て、漢土を思ふの情を叙べ實に天來の神品なり、作者の誰たるを問はず、詩にして此に至る以て千古に不朽なるべし、王鳳洲の如きは麤豪を以て之を見る、隻眼を有せずと謂つ可し、『絶句類選』東來に作る誤謬なり、

滁州西澗　　韋應物

獨憐幽草澗邊生　上有黄鸝深樹鳴
春潮帶雨晩來急　野渡無人舟自横

獨憐れむ幽草の澗邊に生ずるを、上に黄鸝の深樹に鳴くあり、春潮雨を帶て晩來急なり、野渡人無く舟自から横はる、

【句釋】滁州西澗は季昌の注に本呉楚の地秦漢の九江郡なりとあり、然らば今日の江西省九江

郡に屬す、滁州は隋以來の名、宋の歐陽修曰く滁州城の西は乃ち是れ豐山、所謂西澗なるもの無し、城北に一澗水あるも、水淺うして舟に勝へず、我邦の原田溫夫は『詩學新論』に歐公を破して蘇州豈自から欺き人を欺むかんや、世代邈たり、陵谷變遷するのみと、深き考證は無しと雖も、溫夫の説可なり、獨憐は俗に云ふ「イヂラシイ」に當る、幽草澗邊生直ちに西澗に至り卽目する景は此に在り、上有黄鸝深樹鳴黄鸝は日本の「ウグヒス」とは異なるも節に應じて鳴くより當てがつたものとす、俯して瞰れば澗幽草あり、仰で聞けば樹に黄鸝あり、憐の一字此の二句十四字に掛る、春潮帶雨晩來急驟雨滂沛澗に灑ぎ春水は雨を帶て其の流の袞袞と瀰漫するを言ふ、野渡無人舟自横乃ち走り渡を求めんと欲するも、野航横はるのみにて篙夫なし、以て西澗近傍の閒寂なるを言ふ、

【評論】此の篇、卽景卽目、一幅驟雨の圖を見るが如し、朱文公の韋蘇州が詩を評して氣象道に近く、王維よりも高しと、王維より高きは聊か言に過ぐ、而かも王維の下にはあらず、王、孟、韋、柳の四家の順序、決して誤らざるなり、

酬張繼　　皇甫冉

悵望南徐登北固　迢遙西塞限東關

落日臨川問音信　寒潮唯帶夕陽還

南徐を悵望して北固に登る、迢遙たる西塞東關を限る、落日川に臨んで音信を問へば、寒潮は唯夕陽を帶て還る、

【句釋】酬張繼皇が自注に懿孫は余が舊好たり、役に武昌に抵り、六言を以て懷はる、余七言を以て裁答す、悵望は悵然として遙望す、南徐は浙江省の鎭江府、登北固樓あり北固と名く、江に臨んで在り、此の樓に登り、張繼の居所の天を望む、迢遙は「ハルカ」なり、西塞は山の名、限東關西塞山が東關を限界する、遂に先方は見えざるを言ふ、東關は歷陽の西南二百里、吳の諸葛恪か居住せし處、落日臨川問音信鯉魚の音信を問はんが爲め川に臨む、古詩に客自二遠方一來、遺二我雙鯉魚一、呼レ童烹二鯉魚一、中有二尺素書一、寒潮唯帶夕陽還張が音信は無し、只看る所は錢唐江の寒潮が夕陽の光を帶て還るのみ、

【評論】此の篇、南北東西の字を運用して甚だ奇巧を極む、結句七字に至りては百回千回讀むを厭はざるなり、

河邊枯木　　長孫佐輔

野火燒枝水洗根　數圍枯朽半心存

應是無機承二雨露一　却將二春色一寄二苔痕一

野火枝を燒き水根を洗ふ、數圍枯朽して半心存す、應に是れ機の雨露を承る無かるべし、却て春色を將て苔痕に寄す、

【略傳】長孫佐輔は德宗の時の人、隱居して志を養ふ、弟の公輔吉州の刺史と爲る、佐輔之に依る、

【句釋】河邊枯木題の如く枯木を詠じたるもの、野火燒枝水洗根水火の二害、枝根を合す、木たるもの枯ざるを得ず、數圍枯朽半心存皮肉盡く去て骨身僅かに存す、應是無機承雨露眞に是れ無機物、雨露晨昏下るも何等の詮無し、雨露は遂に水火に及ばさるなり、却將春色寄苔痕春色は公道一樣に來れども枯木暖氣なし、著くに處なし、是に於てか、僅かに苔痕に寄せて以て其の公道を示す、

【評論】此の篇、題目已に奇、想も亦奇ならざるべからず、全體是れ枯木、而かも半心存の三字よりして春色の字を貼し來る、工夫の至り、人察せざるを得ず、

柳州二月　　柳宗元

宦情羈思共悽悽　春半如秋意轉迷
山城過雨百花盡　榕葉滿庭鶯亂啼

宦情羈思共に悽悽、春半秋の如く意轉た迷ふ、山城の過雨百花盡き、榕葉滿庭鶯亂啼す、

【句釋】柳州二月子厚が貶せられ柳州客寓の時の作、今の廣西省柳州府、宦情宦吏たる者の情、羈思羈人たる者の思、共悽悽宦と爲て貶せられ、謫せられて邊境に來る情思共に悽悽、乃ち樂まざるの謂なり、春半二月は春の中なり、如秋意轉迷眼界は春なれども我が情思は秋の如く凄然たるを如何せん、山城過雨百花盡春の字前に在り、花の字無るべからず、句脈の斷えざること見るべし、蓋し花の飛び盡しし後、榕葉滿庭鶯亂啼榕は和名「ヒヒラギ」なりとの說と「ヒヒラギ」にはあらずとの二說あり、今斷定し難し、葉は庭に滿ち、鶯は亂れ啼く、詩人の情、如何か之を處せんや、

【評論】此の篇、凄惻の情を隱約の中に見る、子厚の人品概すべし、其の友劉禹錫の播州に徙

されんとするや、其の母老たるを以て柳州を以て彼に與へ、而して自から播州へ往かんと欲す、朝議禹錫をして連州に易へしめたる如き、子厚の友情、千古人をして嘆服せしむ、身柳州に貶せらるるも、『唐書』傳ふる所に依れば江嶺の間、進士たる者、數千里を遠しとせず、皆宗元に隨て師法とす、凡そ其の間を經る者必ず名士と爲る、柳柳州の名、千古に滅せず、元和十四年十月五日卒す、時四十七、才人文士は是の日を以て其の靈を祭らざるべからず、

贈楊練師　　鮑溶

道士夜誦藥珠經　白鶴下遶香煙聽
夜深經盡人上鶴　天風吹入秋冥冥

道士夜誦す藥珠經、白鶴下りて香煙を遶つて聽く、夜深け經盡き人鶴に上る、天風吹き入る秋冥冥、

【句釋】楊練師は前に辨せり、道士は佛敎の梵士と言ふが如し、漢土にて發達したるもの、夜誦藥珠經黃帝の說く所と稱する黃庭經是れ卽ち藥珠經なり、白鶴夜深の二句解し易し、天風吹入秋冥冥道士は塵間に長く游ばず、天風と鶴に駕して秋夜冥冥たるに上天し去る、

【評論】此の篇、秋宵月下に於て一朗吟する時は、凡身も亦仙身に化する思ひあり、

題二齊安城樓一　　杜牧

嗚軋江樓角一聲　微陽瀲灩落寒汀
不レ用レ憑レ欄苦回レ首　故郷七十五長亭

嗚軋たり江樓の角一聲、微陽瀲灩として寒汀に落つ、用ひず欄に憑て苦に首を回らすを、故郷七十五長亭、

【句釋】●●●●齊安城樓は今日の湖北省黄州府、春秋の黄國、南齊に郡司州、北魏に郡南司州なり、●軋●は角より出る聲嗚咽と殆んど同じ、角は軍中に用ふる笛、微陽は夕陽と同じ、瀲灩は浪の日に映じギラギラする形容、●●●●落寒汀日影が寒汀に落ち入る、不用憑欄此に欄の字あるは、第一句に樓の字あればなり、邦人の詩動もすれば、欄あり干あり而して樓字無し、此の篇法を見よ、苦●は丁寧なり、慇懃なり、回●首首を回らすも功無ければ用ひずと言ふ、故郷七十五長亭短亭は五里、長亭は十里、亭は我が邦の驛なり、

【評論】此の篇、牧之が詩として平穩に屬する者、牧之の詩、數字を用ふるもの多し、南朝四

百八十寺の如き尤も名高し、亦是れ算博士の類なり、李頎の旅望より此に至る七首を拗體とす、平起にして仄を以て結を取り、仄起にして平を以て結を取り、或は仄を連用、或は平を連用、要法古詩に類して、意は今體に取るもの拗は折也と注するに依て、一句一句互に拉折するなり、

側體

周弼が曰く其の說拗體と相類す、然れども興を發し辭を措くこと則ち奇健なり、今謂く仄體は仄韻の體と言ふことなり、今體の如く平仄法甚だ嚴ならず、孤平孤仄曾て深く咎めず、是も亦古詩の一變法なればなり、

營州歌

高適

營州少年愛原野　狐裘蒙茸獵城下
虜酒千鍾不醉人　胡兒十歲能騎馬

營州の少年原野を愛し、狐裘蒙茸城下に獵す、虜酒千鍾だも人を醉しめず、胡兒十歲にして能く馬に騎る、

【略傳】高適字は達夫、滄州勃海の人、有道科に擧げられ、封丘縣を調す、祿山反す、哥舒翰が西河の從事と爲り、左拾遺由り侍御史に遷る、諫議大夫に擢んでらる、崔光遠に代り、西川節度使、蜀の彭州刺史と爲る、後勃海侯に封せらる、年五十、始めて詩を爲る卽ち工、一篇を

吟ずる每に好事の者輒ち傳布す、永泰の初卒す、

【句釋】營州歌今日の直隸省永平府盧龍縣の東、是れ古の營州、漢人の所謂中國にあらずして北邊の蠻境と爲す處なり、少年は字の如く壯士を言ふ、愛原野北境原野多し、獵に便なる所以、狐裘蒙茸の四字は『詩經』に出づ、狐の皮の外套を狐裘と言ふ、其の外套の亂るる形容を蒙茸と言ふ、獵城下鳥も罰も共に獵の中に入る、虜酒營州は蠻地ゆゑ其の處で釀造する酒は虜酒なり、千鍾强烈の酒ならんも少年の豪興百杯千杯も飮む、而かも不醉人曾て醉はざるなり、胡兒十歲能騎馬少年の豪は惟しむに足らず、十歲の兒已に能く馬に騎る、

【評論】此の篇、七言短古と稱しても妨げず、三四の二句は對を成し、達夫の面目亦此の詩に露はると謂つ可し、

山家

長孫佐輔

獨訪山家歇還涉　茅屋斜連隔松葉
主人聞語未開門　遶籬野菜飛黃蝶

獨山家を訪て歇て還涉る、茅屋斜めに連なりて松葉を隔つ、主人語を聞て

未だ門を開かず、籬を遶る野菜黃蝶飛ぶ、

【句釋】山家は山村の隱家なり、歇は休息なり、涉は登るなり、隔松葉は松樹を隔て茅屋が連なると見てよし、三四の二句、一一注釋に及ばず、我聲を聞て主人は未だ門を開かざるが、門前に開門を待て佇立して黃蝶の籬下に野菜を遶りて飛ぶを見る、

【評論】此の篇、甚だ佳作なりとの說と、一氣貫ぬかずとの二說あり、佳作と爲す者は、眼前の景色を出して以て自然なりと。一氣貫ぬかずと爲す者は起句、承句は山村の景狀にて、轉句結句は田園の景狀なりと、余は前說を取て後說を取らず、如何となれば山中にも野菜は作る、日光山でも余は住したるとき野菜畝を自から作れり、春なれば黃蝶も飛來す、黃鸝も鳴く、故に此の句が田園にも通ずるが亦山中にも通ずるなり、余が言を安と爲す者は試みに山中の隱者に問へ、

夏晝偶作　　柳宗元

南州溽暑醉如酒　隱几熟眠開北牖
日午獨覺無餘聲　山童隔竹敲茶臼

南州の溽暑醉て酒の如し、几に隱て熟眠北牖を開く、日午獨覺て餘聲なし、山童竹を隔てて茶臼を敲く、

【句釋】夏晝は夏日に同じ、偶作偶爾成るなり、南州は柳州、溽暑は極熱を言ふ、醉如酒人が極暑に向へば身體泥の如くなる、醉を出す故に酒の如しと言ふ、妙語なり奇語なり、隱几は几に依るなり、熟眠開北牖北の牖を開き乍ら熟眠する、日午今日の十二時、獨覺は自然に眠が覺むなり、無餘聲四邊閒寂何等の聲も聞かず、而して耳に入るものは何ぞ、山童隔竹敲茶臼童が竹林を隔でて茶臼を敲く音のみを聞く、此の時代、製茶の法は茶葉を細末して餅と爲す、臼に投じ杵を以て舂く、石臼も木臼も共に在りしなり、

【評論】此の篇、酒に起りて茶に止む、酒に眠りて、茶に覺む、其の風韻の窮まり無きこと比を見ず、所謂動中に靜あり、靜中に動あり、柳柳州にあらざるより此の作はあるべからず、

步虛詞　　高駢

淸溪道士人不識　上天下天鶴一隻
洞門深鎖碧窗寒　滴露研朱點周易

清溪の道士人識らず、天に上り天を下り鶴一隻、洞門深く鎖して碧窗寒し、
滴露朱を研りて周易を點ず、

【略傳】高駢字は千里、南平郡王、高崇文が孫、家世禁衞たり、劍南西川節度、荆南鎭海節度と爲る、晩年に神仙を好む、

【句釋】●●詞古注に『異苑』を引て曰く陳思王、魚山に游ぶ、忽ち空中に梵唄の聲清遠寥寥たるを聞く、音を解する者をして之を寫さしむ、神仙の聲と爲す、道士之に効うて「步虛詞」を作る、此れ步虛の始なり、或は云ふ此の作玄宗にして高駢にあらずと、清溪は山の名、臨淮縣に在り、山東に道士の舍あり、葉法善なる道士此の時代此の山に在りて道を修むと云ふ、人●●●

側に泊し、酒を命じ笛を吹く、一父老忽ち舟を挐して來り、袖中より笛三管を出す、一は合拱の如く一は常人の蓄ふる物の如く、一は絕小にして細華管の如し、筠卿、父老に向て一吹を乞ふ、父老曰く其大なる者は諸天の樂發すべからず、其の次は諸仙の合樂に對して吹く、其の小なるものは老人朋友と樂しむもの、誠に子が爲めに之を吹かん、乃ち笛を把り吹くこと三聲にして湘上風動き、波濤滉瀁として魚龍跳噴す、五聲六聲、君山上の烏獸叫噪して月色昏昧なり、舟人大に恐る、乃ち此の詩を吟じて去る、『齊諧記』中の事に類し取るに足らざる說なれども、君山父老なる者に關するを以て之を錄す、國清寺に寒山子ありて樹下黃老を讀み、忘却す來時の道は此の詩と相類す、其の時の前後を知らず、

繡嶺宮

李洞

春草萋萋春水綠　野棠開盡飄香玉
繡嶺宮前鶴髮翁　猶唱開元太平曲

春草萋萋春水綠なり、野棠開き盡て香玉を飄がへす、繡嶺宮前鶴髮の翁、猶唱ふ開元太平の曲、

【句釋】●●●繡嶺宮は古注に曰く河南道陝州陝石縣に在りと、陝西は今日の河南省に屬す、古蹟として神雀臺、軒游宮硤石關、鷄鳴臺、望思臺、閼亭等あり、繡嶺宮は今判然せず、第一句は解し易し、野棠は一本海棠に作る、甘棠說と海棠と一物なりとの二說あり、詳知する能はず、猶●唱●開●元●太平曲開元年に玄宗が此の宮に幸して天下太平曲を唱ふ。

【評論】此の篇、李洞の作にあらず、鬼神の作なりとの說あり、鬼神の詩にして此の如きは遂に人間に若かざるなり、贊州歌より此に至る側韵の詩法略察すべし。

卷の二

七言律

四實

周弼曰く其の說五言に在り、但句を造ること差長く、微し分別あり、七字當に一串と爲すべし、五言を以て泛に兩字を加ふべからず、最も飽滿し難し、疎弱なり易し、而かも前後多くは相應せず、唐の太中より此に工なる者亦數あり、其の難を見つ可し、」今謂く實字とは何ぞ事理の解すべき者あるを實字と曰ふ、卽ち物體に名くる者なれば名詞是れ實字なり、解無くして唯以て實字の狀態を助くる者を虛字と曰ふ、動詞是れ虛字なり、此の名詞と動詞と相助け相和して始めて一篇の詩と爲る、徹頭徹尾、實字のみの詩はあらず、又徹頭徹尾虛字のみの詩はあらず、然れども周弼の意は其の主として虛實孰れに重きを置きたるやを檢して以て此の名を造りしものならん、事物は名詞なり、理體は動詞なり、此の名詞動詞を斡旋して始めて一篇の詩成る、絕句と律體との區別なく此の法は一なり、而かも七律は七律にして五律に但二

字多く爲したるものは七律にあらず、周弼の泛に兩字を加ふべからずとの言は實に然り、切ならざるを得ず泛なるべからず、切は必要なり、泛は蛇足なり、初學宜しく此の切と泛との事を判へざるべからず、太中より此に工なる者少なしと、宣宗の年を太中とす、詩家の所謂晩唐に屬す、盛唐中唐已に幾人も無し、況んや晩唐に於てをや、此の選多く晩唐を取る、周が說に合する詩多ければなり、

同題「仙游觀」　韓翃

仙臺初見五城樓　風物凄凄宿雨收　山色遙連秦樹晩
砧聲近報漢宮秋　疎松影落空壇淨　細草香閒小洞幽
何用別尋方外去　人間亦自有丹丘

仙臺初めて見る五城樓、風物凄凄として宿雨收まる、山色遙かに連なる秦樹の晩、砧聲近く報ず漢宮の秋、疎松影落て空壇淨く、細草香閒にして小洞幽なり、何ぞ用ひん別に方外を尋ね去ることを、人間にも亦自から丹丘あり、

【句釋】仙游觀は前漢の武帝作る所、長安の西山に在り、觀は佛に寺と云ふが如し、或る本に「寺は多く山中の高處に築く故に觀と云」は滑稽なり、寺と觀とは別物なり、寺は寺、觀は觀、別物とす、漢士の書物に「寺觀」とあるは寺及び觀の事なり、道宮謂二之觀一『左傳』の說見るべし、仙臺は仙游觀なり、五城樓は崑崙山に在る仙の住樓、今仙游觀に譬ふ、風物は春の景色、凄凄は「スサマジ」なり、宿雨收は前夜の雨歇む、山色遙連秦樹晩雨歇むに依て連山の翠色が、秦地の樹に連なるを見る、砧聲近報漢宮秋漢宮は仙游觀を指す、漢武帝の建し物なるを以て漢宮と云ふ、人家に接近するが故に砧聲を聞く、疎松影落空壇淨仙觀に沿て有る疎松の影は仙觀の空壇に落て淨し、細艸香閒小洞幽小洞に沿て生ずる細艸の香は衣袖を襲うて閒なり、香閒を一本春閒に作る、香閒を可とす、共に寂寞の狀態を言ふ、何用は俗語の「イラヌコト」別尋方外去儒敎の人倫を說くを方內とし、人倫外に敎を說くを方外とす、佛と道とは方外なり、今此は仙游觀外の方外を指す、人間亦自有丹丘丹丘は道士が說く理想の山、方外の處は卽ち是れ、丹丘など別に尋ぬるには及ばず、人間此の地に丹丘ありとの意なり、

【評論】此の篇、隱約の中に仙を求むるの癡を笑ひ其の無益なる意を寓す、中唐七律此を以て上乘とす、明の焦弱侯曰く香閒を春香に作るは俗本なり、然るに寧齋之を嫌ふは何ぞ、

和樂天早春見寄　　元稹

雨香雲淡覺微和　誰送春聲入棹歌　萱近北堂穿土早
柳偏東面受風多　湖添水色消殘雪　江送潮頭湧漫波
同受新年不同賞　無由縮地欲如何

雨香雲淡微和を覺ゆ、誰か春聲を送りて棹歌に入る、萱は北堂に近うして土を穿つこと早く、柳は東面に偏にして風を受ること多し、湖は水色を添て殘雪を消し、江は潮頭を送りて漫波を湧す、同じく新年を受て同じく賞せず、地を縮むるに由無し如何せんと欲する、

【句釋】和は意を和し字を和せず、和は猶古味を存す、次に至りては古味を損す、而かも樂天と元稹は次韻の元祖なり、樂天居易早春見寄樂天が今の浙江杭州の太守たりし時、元稹が浙東の觀察使に貶せらるる時贈りしなり、雨香雲淡春の雨、春の雲、香と淡とを以てす、春以外には用ひず、覺微和舊一月の候を微和と云ふ、誰送春聲樂天が送らるる詩は春聲を作す、我の謂和する詩は入棹歌卽ち舟子の棹さし歌ふに類す、聲を一本深に作る、深では微和に適せず、寧

齋知らざるは何ぞや、萱は忘憂艸、宜男艸、鹿蔥、鹿劍、妓女、丹棘等の別名あり、濕艸科に屬す、近北堂『詩經』に之を背に樹んと、背は『疏』に北堂とあり、北堂は婦の守る所、乃ち母に用ふる所以、今は單に北堂なり、穿土早春に會うて萱が芽を生ずる早きが如く、君樂天の憂も忘るる必ず近からんとなり、柳偏東面受風多元稹は李賞が謗の爲め同州より浙東に移さる、故に北萱は樂天に喩へ、東柳は自から喩ふ、小人の侮りを受ること多きを風に喩ふ、湖添水色消殘雪杭州には西湖あり、樂天の居、江送潮頭湧漫波浙東には錢塘江あり、元稹が居、彼は讒言雪の如く消え、此は讒言波の如く湧き、君は憂も滅せん、我は益す愁ふとの意、同受新年不同賞錢塘と杭州とは日本里程にして五六十里隔つ、新年を同賞しがたき所以、無由縮地『神仙傳』に依れば費長房は能く縮地術を施すと、人間は其の術なし、欲如何煩悶も功無きなり、

【評論】此の篇、第一句時節、二句は彼と此、三句は彼、四句は己、五句は彼、六句は己、七八二句は彼此雙方を言ふ、

和趙相公登鸛雀樓　　殷堯藩

危樓高架沆寥天　上相閒登立綵旃　樹色到京三百里

河流歸漢幾千年　晴峯聳日當周道」秋穀垂華滿舜田」

雲路何人見高志」最看西面赤欄前

危樓高く架す汾寥の天、上相閒登して綵旆を立つ、樹色京に到る三百里、河流漢に歸す幾千年、晴峯日に聳えて周道に當り、秋穀華を垂て舜田に滿つ、雲路何人か高志を見る、最も看る西面赤欄の前、

【略傳】殷堯藩は元和九年の進士、永樂令と爲り、後、侍御を以て江南に官たり、

【句釋】和趙相公登鸛雀樓趙が示さるる詩に和韻する、次韻にあらざると知らざるべからず、鸛雀は冠雀又鸛爵に作る、鶴に似て水を好む、和名「オホトリ」此の樓は前は中條を瞻、下は大河を瞰る、今日の山西省蒲州府、危樓樓閣の高處に在る、皆危の字を以て形容す、高架汾寥天屈原の『楚辭』に汾寥は曠濶なり「ムナシキ」意味、邪魔する物なし、上相は相公、閒登立彩旆旆は「ハタ」なり、『周禮』の通帛は『說文』の旆なり、高位高官の者は、是を以て其の居所を表す、彩は旆に文章の飾あるなり、樹色到京三百里唐の京都は長安、卽ち陝西の西安府、今日の路程としても、三百里支那里程餘なり、河流歸漢幾千年黃河は甘肅より內蒙古を經、又南流、山西陝西の

境を經て以て渤海に入る、蠻地より中國に入る故に漢に歸すと云ふ、晴峯聳日當周道此の周道も次句の舜田も共に中國の意味に見よ、西安府卽ち長安は周王畿地と曰ふ、此の方へ當て峯峯皆晴色を表す、秋穀垂華滿舜田舜は父の爲め自から歷山に畊やす、舜の都とせし地、卽ち山西の平陽府蒲州に當る、一名を中條山と云ふ雲路は樓上、何人は相公、見高志堯は舜の高志を見て其の位を遜れり、相公は果して何人かの高志を見るならん、最看西面樓の所在地より京は西に當る、赤欄前西面は長安の天子に背かざるの意、

【評論】此の篇、第一句は正しく樓を叙し、二句は登る人、三句は樓上所見の高景、四句は樓上所見の低景、五句は高景、六句は低景、七八は相公の人格に歸す、七律の正法眼此に在り、季昌が河流の事を疑ふは一理あり、山西より陝西に向ふは逆流にて實際は陝西より山西に入る而して渤海なるが、今は天子へ朝宗する意にて歸漢と四句にありしなり、詩と地理書と混同する勿れ、

凌歊臺

宋祖凌歊樂未回　三千歌舞宿層臺　湘潭雲盡暮山出

許渾

巴蜀雪消春水來　行殿有」基荒薺合　寢園無」主野棠開

百年便作萬年計　岩畔古碑空綠苔

宋祖凌敵に藥んで未だ囘らず、三千の歌舞層臺に宿す、湘潭雲盡て暮山出で、巴蜀雪消して春水來る、行殿基有て荒薺合し、寢園主無して野棠開く、百年便ち萬年の計を作す、岩畔の古碑空しく綠苔、

【句釋】凌敵臺は太平州の北、黃山に在り、敵は暑氣を云ふ、暑氣を凌ぐ爲め築きしもの、宋祖は宋の武帝劉裕なり、東晉を亡ぼして八世六十四年を保ちしもの、都は金陵なれども南游、此の山に凌敵を築く、樂未囘劣慾を恣にして宮に囘り政治を覽ることを忘る、三千歌舞宿層臺天子も宿するに依て三千の美人も亦宿す、風紀紊亂知るべきのみ、湘潭は三湘の一、雲盡暮山出岳州の邊、雲散ずるが故に暮山の出るを見る、巴蜀雪消春水來此の地に春水の流るるを見て、巴蜀に雪の消したるを知る、行殿は行宮と同じ、離宮を云ふ、有基は基礎のみ殘る、荒薺合荒た「ナヅナ」が葉を合す、寢園は天子の墓の異名なり、無主陵墓の司無し、野棠開棠は梨、百年は人の一生、便作萬年計命の須臾なるを知らずして千年も萬年も不朽ならしめんとして此の如き物を建て民力を勞す、然るに岩畔古碑空綠苔人をして讀ましめん爲め功を勒したる碑も何人も讀まず、空しく綠苔に鎖す所以、

【評論】此の篇、晩唐の七律として正宗に屬するもの、日本の絕海が學ぶ所、多く此等の詩にあり、一二の句は昔年、三四五六は今の所見、山は高處、水は低處、行殿は高處、寢園は低處、七八は前六句を收結して我に歸宿す、

洛陽城

禾黍離離半野蒿　昔人城此豈知」勞　水聲東去市朝變

山勢北來宮殿高　鴉噪暮雲歸二故堞一　雁迷二寒雨一下二空濠一

可」憐緜嶺登仙子　猶自吹」笙醉碧桃」

禾黍離離として半野蒿、昔人此に城て豈勞を知んや、水聲東に去て市朝變じ、山勢北より來て宮殿高し、鴉は暮雲に噪で故堞に歸し、雁は寒雨に迷うて空濠に下る、憐むべし緜嶺の登仙子、猶自から笙を吹て碧桃に醉ふ、

【句釋】洛陽城は今日の河南省河南府、周に東都と云ふ、東漢此に都す、唐の武后神都と改む、

都城前は伊闕に直り、後は邙山に據る、瀍を左にし澗を右にす、洛水其の中を貫ぬく、以て河漢に象どる、東西五千六百三十步、南北五千四百七十步、周り二十萬五千五十步、其の崇さ丈八尺、禾黍離離は『詩經』の語を用ふ、離離は禾黍の茂生する形容、●●●

華盡く、唯青山のみ有て洛中に似たり、

【句釋】金陵は前に辨せり、玉樹歌は陳の後主の作、王氣終吳と東晉と南朝の宋齊梁陳の六朝は皆此に都す、而して今や都は長安にあらず、王氣終る所以、景陽兵合戍樓空景陽樓は宋の元嘉二十二年築く、孝武の大明中に紫雲、景陽樓より出づ、因て以て名く、『六朝紀勝』に今の玄賓寺の西南に遺地猶存せり、蓋し陳の後主、張妃と擒に景陽井に就く、當時の戍樓、今日は空し、楸梧は楸と梧なれども合して一と爲す、琴材と爲る「キリ」なり、遠近千宮塚塚上此の楸梧多く植う、禾黍禾と黍とは大小の相異のみ、今一物と爲す、高低六代宮宮址に禾黍が茫茫と荒生する、吳、東晉、宋、齊、梁、陳、の六代なり、吳の太初宮、晉の建康宮、宋の未央宮、梁の金華宮、陳の景陽宮、齊の宮は明白ならず、石燕は「イハツバメ」雨に遇へば則ち飛ぶ、拂雲晴亦雨晴雨定まらざる時、江豚は猪に似て水中に居する動物、鼻より聲を發し舟人之を聞て大風雨を知ると、吹浪夜還風其の暴るる勢を云ふ、英雄は天子を主とし、臣を賓とす、一去豪華盡王氣終る、豪華も盡る所以、唯有青山似洛中洛陽なりと知る事を得るは依然たる青山四面を圍めばなり、是の故に古の洛中に似たりと見る可きなり、

【評論】此の篇、元の方虛谷曰く禾黍の一句好し、楸梧を松楸に作りて曰く非なり、大抵亡國

の餘、烏んぞ松楸千官の塚を蔽ふものあらん、五六は江上の景に切なり、清の紀曉嵐曰く松楸の句、本意林莽蔽翳を指して言ふ、舊日の松楸ありと言ふにあらず、語意不明の故に虛谷の摘む所と爲る、明の謝茂秦は前後截て二絕句と爲すべしと、三家の評、紀を以て善とす、虛谷茂秦共に詩を知らず、唯此の詩の失を言はば、八句悉く今を言うて古を言はざるに在り、變化の才に乏し、盛唐人に及ばざる所以、寧齋は「神致悠揚」と、正論にはあらず、

咸陽城東樓

一上高城萬里愁　蒹葭楊柳似汀洲　溪雲初起日沈閣
山雨欲來風滿樓　鳥下綠蕪秦苑夕　蟬鳴黃葉漢宮秋
行人莫問當年事　故國東來渭水流

一たび高城に上れば萬里の愁あり、蒹葭楊柳汀洲に似たり、溪雲初て起て日閣に沈み、山雨來らんと欲して風樓に滿つ、鳥は綠蕪に下る秦苑の夕、蟬は黃葉に鳴く漢宮の秋、行人問莫れ當年の事、故國より東來渭水流る、

【句釋】咸陽城東樓は卽ち陝西西安府、古の長安の西北四十里に在り、秦の都と漢の都とせし

地は名は同じきも、地理少しく異なる、渭水の西北、其の異なる所以と、一上高城萬里愁咸陽
城上に登れば種種と感慨生ず、萬里の風物皆愁と爲る、蒹葭は水中に生ずるが本性なり、今
楊柳と共に陸上に生ず、故に云ふ似汀洲陸地も濕うて汀洲に似たるなり、溪雲初起日沈閣雲は溪
より起り日は閣に沈むが如く、山雨欲來風滿樓雨の來らんと欲する前には風先づ至る、風物の
凄凄たらんとする景色、鳥下綠蕪秦苑夕大名が小人と綠蕪は艸の生茂せるもの、秦の古苑としたる地、蟬鳴黃葉漢宮秋小人が大名と爲りしが如し、行人莫問當年事當年を一本、前朝に作る、
故國東來渭水流此の句は一本、渭水寒光晝夜流に作る、渭水は隴西より流れ來る、秦祖は隴西
卽ち甘肅より出づ、天下を一統したるも漢の爲め亡ぼされ、秦の天下は僅僅三世、數十年、漢
の天下は前後合して二十四世、四百年を保てり、其の四百を保ちし天下も今日は亡滅して唯渭
水のみ流るるを見る、變遷の止む無きを嘆ずるなり、

【評論】此の篇、方虛谷の評に尾句十四字を佳と爲す、中の四句前聯前詩讀山と一同皆裝景のみ、後聯の詩
紀曉嵐曰く起句と三句とを摘まば原自から惡しからずと、後世、此の第四句を嘆じて走卒も亦
知る、余も亦何等の所以を知らず、三四は無情の物を以て對し、五六は有情の物を以て對す、
而して七八我が情に歸宿す、盛唐大家の法にあらざるも、周弼取る所多く此に在り、

晩自東郭留一二游侶

鄉心迢遞宦情微　吏散尋幽竟落暉　林下草腥巢鷺宿
洞前雲濕雨龍歸　鐘隨野艇回孤棹　鼓絕山城掩半扉
今夜西齋好風月　一瓢春酒莫相違

【句釋】晩自東郭留一二游侶友人と東郭に游び、晩に至りて別を惜み、一二の友人を自宅へ宿
泊せしめしなり、鄉心迢遞は迢は遙なり、遞は遠なり、許渾は『唐書』に傳なし、今『全唐詩』に
依て見る、字は用晦、丹陽の人と、丹陽は今日の安徽省寧國府宣城縣治、東郭は陝西省なれば、
湖北を經るか、或は河南を經るか、此の二國を經ざれば行く能はず、迢遞たる所以なり、支那
里程としては三百有餘里あるべし、宦情微は宦僚の氣は乏し、所謂平民的なりと云ふにあり、
吏散は官吏にして閒散と云ふ意味なり、許渾は潤洲の司馬、監察御史、虞州員外郎、睦郢二州

の刺史の官、日本今日の官制にて言へば高等官なり、判任にはあらず、而かも自から吏散と云ふ、尋幽竟落暉石川鴻齋は「一方ノキキ役者ト云フ官ニアラズ」と云ふ、知事や縣令がきき役者にあらずとは何事ぞ、鴻翁は『全唐詩』を讀まざるなり、幽處の趣致を尋ねて落暉に至るなり、林下草腥巢鷺宿林下には巢を結ぶ鷺などあり魚を取て食ふ氣が腥きなり、洞前雲濕雨龍歸鷺は林下に宿す事實ならんも、龍は人眼の見るべきにあらず、然れども詩人の眼は此の如く見るなり、鐘隨野艇回孤棹鐘は不時の鐘もあれど大底は時刻を報ずる爲め撃つ、午後の六時頃の鐘なるを知らば艇即ち小舟も回らざるを得ず、鼓絶山城掩半扉城樓の鼓已に城門の閉づるを報ず、城外に游ぶ者は城中に歸らざるを得ず、今夜西齋好風月東郭の游已に佳游なり、我が家の西齋も何ぞ好風月にあらざらんや、一瓢春酒莫相違我が意に反對せず共に一瓢の酒を飲んかなと勸む、

【評論】此の篇、一二三四は正しく東郭の游を叙し、五六は東郭より歸來を叙し、七八は游侶を留むる我が家の事を叙す、

題飛泉觀宿龍池

西巖泉落水容寬　靈物蜿蜒黑處蟠　松葉正秋琴韻響

菱華初曉鏡光寒　雲收星月浮山殿　雨過風雷遶石壇

仙客不歸龍亦去　稻畦長滿此池乾

西巖泉落て水容寬なり、靈物蜿蜒として黑處に蟠る、松葉正に秋にして琴韻響き、菱華初て曉て鏡光寒し、雲收まりて星月山殿に浮び、雨過て風雷石壇を遶る、仙客歸らず龍も亦去る、稻畦長く滿て此の池乾く、

【句釋】飛泉觀は梁道士が故居、宿龍池なる池が此の「觀」中に在る、池を主として叙す、泉落は瀑布を云ふ、水容寬非常に大なるなり、靈物は龍を云ふ、佛教も儒教も共に靈と爲す、蜿蜒は蟠まりたる形容、黑處蟠水深の處を黑處と云ふ、松葉正秋琴韻響秋風の爲め松聲が琴韻の響くかと疑ふ、菱華は「ヒシ」の花瓣の曹操が菱華鏡を畜へし故事もある、初曉鏡光寒池の光と鏡と合して、今池が鏡の如く澄むを云ふ、雲收星月浮山殿雲收まるが爲に星月が山殿卽ち道祖を祀る本殿上に浮ぶ、雨過風雷遶石壇雷聲の石壇を遶るは以て其の石壇の高きを知る、仙客不歸梁道士も去て歸らず、龍亦去眞龍も去て來らず、稻畦長滿此池乾稻田は水滿つも此の宿龍池は水が乾涸すとなり、

【評論】　此の篇、仔細に之を讀む、支離滅裂の感あり、第一句泉落の語あり、第二句靈物蟠の語あり、而して三四五六、共に其の今日所見を言ふものの如し、然るに七句に龍亦去と叙し八句此池乾と叙す、詩は一一理に合するの要無しと雖も、此れは亦甚だしく理に合せず、寧齋の『評釋』に「上六句は全く前游を追想して、後二句を以て現在に說下す」此の如くに助けて解釋せば、何の詩か解釋の能はざるものあらん、然れども何に由て作者は是に於て前游の意味を六句に表はしたりと思へるや、『本集』に「重游飛泉觀題故梁道士宿龍池」とあるも、題目を失する場合は全く人をして大に疑はしむ、重游の二字、詩に於て全く表はれず、余は斷言す、此の作は到底失敗の詩たるを免れず、

咸陽懷古

劉滄

經過此地無窮事　一望凄然感廢興　渭水故都秦二世
咸陽秋草漢諸陵　天空絶塞聞邊雁　葉盡孤村見夜燈
風景蒼蒼多少恨　寒山半出白雲層

此の地を經過すれば無窮の事あり、一望凄然として廢興を感ず、渭水の故

都は秦の二世、咸陽の秋草は漢の諸陵、天空うして絶塞邊雁を聞き、葉盡きて孤村夜燈を見る、風景蒼蒼たり多少の恨、寒山半出づ白雲層、

【略傳】　劉滄字は蘊靈、太中の進士、魯の人、後世、懷古詩を以て許渾と幷稱せらる、

【句釋】　咸陽は前に辨せり、經過此地此の咸陽の故地を經過するときは、無窮事感慨の窮まり無きなり、一望凄然感廢興秦に興るも漢に破れ、漢に興るも晉に破ると云ふ、其の事を懷へば凄然たり、渭水故都秦二世渭水は隴西首陽縣の渭谷亭南の鳥鼠山より出て以て陝西を貫流す、渭水の北に咸陽の故都あり、始皇と其の子、胡亥の二世にして亡ぶ、咸陽秋草漢諸陵秦の舊都を以て復都とす、渭水と龍首山皆其の南に在るを以て故に咸陽と曰ふ、高陵、安陵、茂陵あるも今日は秋草に埋められる、天空は蒼天を云ふ、絶塞は絶域の塞なり、長城を指す、聞邊雁北邊より來る雁聲を聞く、葉盡秋日に遇うて群木落葉す、孤村見夜燈故都の跡、孤村寂寞として唯一點の燈火を認む、風景蒼蒼多少恨多少は若干と同じ、蒼蒼は老樹の鬱蒼と生ずるを言ふ、寒山半出白雲層白雲の層を破りて山骨上に聳ゆるを言ふ、

【評論】　此の篇、周弼は誤て作者を許渾とす、諸家の注する者も亦然り、許渾の本集を檢する

に此の詩無し、劉滄の集に此の詩を載す、『瀛奎律髓』亦劉滄とす、清の紀曉嵐曰く前四句氣魄甚だ大、此の種の如きは便ち俗ならず、其の故は思ふべくして口舌を以て爭ふ能はず、惜むらくは後半稍弱、層の字亦押し得て穩ならず、寧齋は紀評を然りとす、余案するに此の篇は三四五六の四句頗る佳にして、一二七八の首尾甚だ佳ならずと、紀が起句を評して氣魄甚大と、余は言ふ起句は兒童語に過ぎず、拙も亦極まれり、殆んど大人の口吻にあらず、紀老耄の至す所誰か之を信せんや、寧齋は晰文が此の詩を劉滄の作と爲したるを惜しむが、本集に無き所を見れば聊かも惜しむに足らず、

黃陵廟　　李羣玉

小孤洲北浦雲邊　二女明妝共儼然　野廟向ㇾ江春寂寂
古碑無ㇾ字草芊芊　東風近ㇾ墓吹ニ芳芷一　落日深山哭ニ杜鵑一
猶似ㇾ含ㇾ嚬望ニ巡狩一　九疑如ㇾ黛隔ニ湘川一

小孤洲の北浦雲の邊、二女明妝共に儼然、野廟江に向て春寂寂、古碑字無して草芊芊、東風墓に近うして芳芷を吹き、落日深山杜鵑哭す、猶嚬を含んで巡狩を望むに似たり、九疑黛の如く湘川を隔つ、

【句釋】黃陵廟は湖南の岳州府湘陰縣の北八十里瀟湘の尾、洞庭の口に在り、舜の二妃、蛾皇と女英を祀る、小孤洲は一本、小哀洲に作る、湘陰縣の西三十里と、北浦雲邊浦雲が搖曳する邊二女明妝共儼然二女の偶像が明妝を凝らして共に儼然たり、野廟向江春寂寂廟の方向を示す、江に面して人の謁する者少春も寂寂たり、古碑無字草芊芊韓退之が廟碑に庭に古碑あり、斷裂して地に在り、其の文剝缺せり、其の碑は晉の太康九年に立つ、芊芊は草の「シゲレル」なり、東風近墓零陵に葬る舜の墓なり、吹芳芷蘭の一種を芷と云ふ、ヨロヒ草、落日深山哭杜鵑杜鵑は昔蜀帝の魂が化して成りしと云ふ說あるに依て今此の二妃の魂も杜鵑を聞くに付け、其の亡魂にあらずやと想像する、深山は湘山を云ふ猶似含嚬望巡狩含嚬は額を蹙めて愁ふるの形容詞、其の像に對して云ふ、舜の巡狩を望見するが如きなり、舜は南狩して蒼梧の野に死せしなり、二妃之を逐うて竟に生前に逢ふ能はざりしなり、九疑は山の名、舜を葬むりし山、如黛樹木が鬱として黛卽ち「マユズミ」の色の如し、隔湘川此の湘川と九疑の間、僅僅數里に過ぎざるなり、

【評論】此の篇、周朔は許渾と爲し、日本の先輩大抵然り、然るに許渾の『本集』に此の詩無し、却て李羣玉の集に載す、『律髓』も亦李羣玉の作とす、從ふべきに似たり、寧齋は李に非ずと辨

す、要するに何の證據無し、方虛谷も紀曉嵐も此の詩に就ては敬念を表せず、虛谷云ふ第六句好と、紀は云ふ總是陳套と、寧齋の如きは匠心の筆なりと、此を匠心と謂ふ、何れの詩か匠心ならざらん、寧齋は畢竟王漁洋に欺むかれたるなり、

晩歇湘源縣

張泌

煙郭遙聞向晩雞　水平舟靜浪聲齊　高林帶雨楊梅熟
曲岸籠雲謝豹啼　二女廟荒宮樹老　九疑山碧楚天低
湘南自古多離怨　莫動哀吟易慘凄

煙郭遙かに聞く晩に向なんとする雞、水平に舟靜にして浪聲齊し、高林雨を帶て楊梅熟し、曲岸雲を籠めて謝豹啼く、二女廟荒て宮樹老い、九疑山碧にして楚天低る、湘南古より離怨多し、哀吟を動かして慘凄し易からしむる莫かれ、

【略傳】張泌は江南の人、南唐の內史舍人の官と爲る、

【句釋】●●歇歇は息なり宿なり、湘源縣は永州零陵郡と古注にあり、永州は今日湖南省に屬す、然るに李兆洛は唐江南道永州、今は廣西省桂林府全州西七里と、然らば今日の永州は古の永州と異なるものの如し、煙郭遙聞向晩雞湘源縣に歇うて先づ暮雞の聲を聞く、水平舟靜浪聲齊湖南と廣西の間には大川あらず、然れども此の詩事實とすれば、舟行浪平穩なりしなり、高林帶雨楊梅熟楊梅は「ヤマモモ」なり、曲岸籠雲謝豹啼杜鵑を蜀人稱して謝豹と云ふ、二女廟は黃陵廟なり、荒宮樹老荒涼たる廟邊の樹木唯老たる在り、九疑山碧楚天低今日の地理上、桂林府より如何に神通力あるも、岳州府の九疑山を望める道理なし、此の間數百里を隔つ、但楚天に重きを置き、九疑は眞に認めたるにはあらず、湘南自古多離怨蛾皇女英の如き、楚の屈平の如き、悉く此の湘中に怨のあらざる者無し、莫動哀吟易慘凄我も他人も問はず、哀吟するときは歷史的感慨が浮び人をして慘凄の情を增しむ、故に哀吟する莫れと云ふ、

【評論】此の篇、晩歇湘源縣と題するに依て古注、江南道永州零陵郡なりと云ふ、其の零陵は今日の廣西の桂林府にして湘南にあらず、而して篇中、湘南自古と云ふ、『漢書』に湘南は長沙に屬すと、長沙府と桂林府とは支那里三百里を隔つ、疑ふべき點多きも、古今疑ふ者一人も無し、抑も詩は地理志にあらざるを以ての故か、深く地理を調べざる故か、或は題目を誤まりし

故か、余は題目の誤を主張する者なり、

廢宅

吳融

風飄碧瓦雨摧垣　却有鄰人爲鎖門　幾樹好華閒白晝
滿庭荒草易黃昏　放魚池涸蛙爭聚　棲燕梁空雀自喧
不獨凄涼眼前事　咸陽一火便成原

風は碧瓦を飄し雨は垣を摧く、却て鄰人有て爲めに門を鎖す、幾樹の好華か白晝に閒なる、滿庭の荒草黃昏なり易し、放魚池涸て蛙爭ひ聚まり、棲燕梁空しくして雀自から喧し、獨凄涼たる眼前の事のみならず、咸陽も一火に便ち原と成る、

【句釋】廢宅は唐末兵亂後の所見を賦す、風飄碧瓦雨摧垣風雨縱橫に一任す瓦は落ち垣は傾むく、却有鄰人爲鎖門鄰家の人は廢宅人無き故に來りて門を鎖す、卽目の景ならん、幾樹好花閒白晝白晝閒にして好花自から開く、滿庭荒草易黃昏人が住せざる故、自然と陰鬱の氣が滿つ、其の

上、荒艸茫茫、早く黃昏と爲る所以、放魚池涸蛙爭聚魚は人が養はずんばあらず、蛙は惡水に自然と生ず、棲燕梁空雀自喧燕は人の梁にあらずんば棲まず、雀は廢宅にも啾啾たり、不獨凄涼眼前事今卽目する所は僅かに民家一宅のみ、此の小景以外更に大なるものがある、咸陽一火便成原劉邦と項羽と聯合して秦を亡ぼし繁盛を極めたる咸陽城も但一火に付し去る、火の消せざること三日と、

【評論】此の篇、廢宅を賦して其の廢宅の意義自から整正す、巨景より細景に入り、而して巨景を以て結ぶ、寧齋は雄闊と評し去るが、決して雄闊の句にはあらず、紀曉嵐云ふ第三句は廢宅に似ずと、巖宅にも好花あるは事實なり、似ずとは何ぞや、晩唐として上乘の部に屬す、

龍泉寺絕頂

方干

未明先見海底日　良久遠雞方報晨　古樹含風常帶雨
寒巖四月始知春　中天氣爽星河近　下界時豐雷雨均
前後登臨思無盡　年年改換往來人

未だ明けざるに先づ海底の日を見る、良久しうして遠雞方に晨を報ず、古

樹風を含んで常に雨を帶び、寒巖四月始めて春を知る、中天氣爽にして星河近く、下界時豐にして雷雨均、前後登臨して思ひ盡ること無し、年年改め換ふ往來の人、

【略傳】方干字は雄飛、新定の人、人缺脣先生と稱す、有司干が脣の缺たるを以て科名を與ふるを許さず、咸通中、鑑湖に隱居す、一に云ふ桐廬の人、姿態山野、時に方處士と號す、嘗て廉倅に謁す、誤て三拜す、人、方三拜と稱す、將に朝に薦めんとす、卒す、門人玄英先生と謚す、韋莊奏して及第を賜ふ、一に云ふ宰臣張文蔚、中書舍人として封舜卿、名儒にして不遇なる者十五人を奏し各の一官を賜られて以て其の魂を慰さむ、干は其の一人なり、

【句釋】龍泉寺は餘姚、卽ち浙江省紹興府餘姚縣治に在り、絕頂山頂に在る寺なり、未明先見海底日天未だ明ならざるに海底已に明なり、良久俗に「シバラク」なり、遠雞方報晨山麓の民家より雞聲が起るを聞く、古樹含風常帶雨地幽なるが故なり、寒巖四月始知春山深きが故なり、中天氣爽星河近寺高處に在るが故なり、下界時豐雷雨均龍の下界に澤するが故なり、前後は度度なり、登臨思無盡幾回登りても、興の盡ること無し、年年改換往來人住僧が時時代ると云ふ說

あるが、全く其の意ならん、一僧往て一僧來り、僧家の諸行無常を此の中に言ふ、

【評論】此の篇、山寺の境を寫して全く平凡、聊かも奇無し、殊に此等の人、唯詩語を知て、佛語を運用する力無く、紀曉嵐を待て始めて此の詩を論ずるの要を認めず、韓翃の「同題仙游觀」より此に至る十四首、四實の中、又類の同じきを集む、二句より中間の實に入り或は六句より虛に入る蟻の九曲を穿つが如く曲折するなりと、

和賈至早朝大明宮　王維

絳幘雞人送曉籌　尙衣方進翠雲裘　九天閶闔開宮殿
萬國衣冠拜冕旒　日色乍臨仙掌動　香煙欲傍袞龍浮
朝罷須裁五色詔　珮聲歸向鳳池頭

絳幘の雞人曉籌を送り、尙衣方に進む翠雲裘、九天閶闔宮殿を開き、萬國の衣冠冕旒を拜す、日色乍ち仙掌に臨んで動き、香煙は袞龍に傍て飛んと欲す、朝罷て須らく五色の詔を裁すべし、珮聲は歸りて鳳池頭に向ふ、

【句釋】和其の意を和す、賈至字は幼鄰、賈曾が子洛陽の人、明經の第に擢んでられ、褐を單

父の尉に解けり、玄宗拜して中書舍人と爲す、早朝大明宮大明宮は正しく天子出御政治を聞くの處、絳幘雞人曉を司る役人を雞人と云ふ、雞に象どる朱冠、卽ち赤色の布にて髮を包むもの送曉籌籌は「ハカル」卽ち時計なり、報を宮禁内に報じ巡る、日本の皇宮警手位の官なり、尙衣は役名、衣を取扱ふ役人なり、方進翠雲裘天子の服を翠雲裘と云ふ、是を以て天子に進む、朝御の服裝に取換る、九天は九重の天、閶闔は天門の名、天上の紫微宮の門を閶闔と云ふ、以て今人間の九重門開くに譬ふ、天門も實際に開くなり、萬國衣冠は中外の臣僚を云ふ、拜冕旒天子の冠を冕と云ふ、冕の四隅に十二の旒を垂る、諸侯が來りて皆天子に拜謁する、日色乍臨仙掌動曉日が所謂金掌の仙人掌上に動く、香煙欲傍袞龍浮天子の坐邊に香を薰するが故に其の煙が御衣に傍て飛んと欲する狀、袞龍は衣に描く模樣、天子は勿論、大臣の服にも袞龍を描くを許す、朝罷宮中を退出する、須裁五色詔詔書は必ず五色の紙に書す、裁は書なり、珮聲は賈至が大禮服の玉の佩ものの聲、歸向鳳池頭中書省は鳳凰池の側に在り、宮廷を退出して自身が職を執る役所に歸る、

【評論】此の篇、賈至が詩に和して作る四名篇の一なり、明の顧華玉が曰く右丞此の篇直ちに老杜と頡頏す、後唯岑參之に及ぶ他は皆及ばず、蓋氣象闊大、音律雄渾句法典重用字新清備は

らざる所無き故なり、未だ全く美ならざるは衣服の字を用ふること太だ多きを以てのみ、今謂く賈至が大明宮の詩に和する者は、右丞と岑參と杜甫なり、顧の他は皆及ばずと稱するは、岑と原唱の賈至を言ふならん、然れども此の四家の詩は決して其の優劣分判すべからず、强て優劣を分つは、其の好尙の異なるに依るのみ、顧の好む所、右丞と老杜の二家にある、其の衣服多きを嫌ふは、善を知り亦惡を知る者、絳幘、尙衣、翠雲裘、衣冠、袞龍、悉く衣服に屬す、此の如く衣服に關する字の多きは他三家に無し、然れども是に由て此の詩の名篇たるを害する能はざるなり、

又　岑參

雞鳴紫陌曙光寒　鶯囀皇州春色闌　金闕曉鐘開萬戶
玉階仙仗擁千官　華迎劍佩星初落　柳拂旌旗露未乾
獨有鳳凰池上客　陽春一曲和皆難

雞は紫陌に鳴て曙光寒し、鶯は皇州に囀じて春色闌なり、金闕の曉鐘萬戶を開き、玉階の仙仗千官を擁す、華は劍佩を迎へて星初めて落、柳は旌旗

を拂うて露未だ乾かず、獨鳳凰池上の客のみ有て、陽春の一曲和すること皆難し、

【句釋】雞鳴紫陌宮陌を紫陌と曰ふ、又綉陌と曰ふ、紫微宮又は紫宸殿、多く紫字を皇城に用ふ、天上に此の紫字を多く用ふればなり、曙光寒旭日の氣猶寒きなり、鶯囀皇州春色闌皇州は皇城を曰ふ、闌は十分を過ぎたるを云ふ、然らば是れ晩春なり、金闕も宮中なり、曉鐘開萬戸宮城内の千門萬戸曉鐘を聞て開くなり、我邦人の千門萬戸は皆誤用なること見るべし、玉階は宮階なり、仙仗は朝會の仗、三衙番の士、分て五仗と爲す、擁千官擁は守護、武士が羣臣を擁護する、花迎劍佩劍の武官を花は迎ふるが如し、星初落花が見えるは星の落し曉天なり、柳拂旌旗宮門に樹つ旌旗は柳枝の爲めに拂はる、露未乾露の乾く時、旭日三竿、乾かざるは、旭漸く登る時なり、獨有鳳凰池上客此の客は賈至舍人を指す、陽春一曲和皆難千官羣臣朝する中に賈至舍人のみ早朝の名篇を作る、之を和することは至難、作るも舍人には及ばずとなり、楚の宋玉曰く楚に善歌ふ者あり、始めは下俚の巴人と曰ふ、國中唱て之を和する者數百人、既にして陽春白雪、朝日魚離と曰ふ、國人和する者數人に過ぎず、其の唱彌よ高く其の和彌よ寡なし、

【評論】此の篇、一句より六句に至る、皆曉景を叙し、七八の二句其の和意を云ふ、鍾伯敬曰く乾元二年肅宗初めて京に還る（鳳翔府時參は補闕たり、甫は拾遺たり維は右丞たり、至は舍人たり、同時の唱和、其の詩並に選唐詩に入る、岑王矯矯として相下らず、舍人は雁行す、少陵は當に退舍すべし、蓋し尺も短とする所あり、寸も長しとする所あり、一詩を以て優劣を議すべからず、劉正卿曰く杜一、王二、岑三、賈四と、謝茂秦曰く賈一、岑二、王三、杜四と、古今の評一定せざること此の如し、強て判定するは愚ならずや、

酬暢當嵩山尋麻道士見寄　盧綸

聞逐樵夫問看棊　忽逢人世是秦時　開雲種玉嫌山淺
渡海傳書怪鶴遲　陰洞石幢微有字　古壇松樹半無枝
煩君遠示青囊錄　願得相從一問師

聞く樵夫を逐て問に棊を看る、忽ち人世に逢ふ是れ秦時、雲を開き玉を種て山の淺きを嫌ひ、海を渡り書を傳へて鶴の遲きを怪しむ、陰洞の石幢微にして字あり、古壇の松樹半枝無し、君を煩はして遠く示す青囊錄、願く

は相從ふことを得て一に師を問ん、

【句釋】暢當は河東の人、貞元の初、太常博士と爲る、麻道士は傳を缺く、嵩山は五岳の一、河南省河南府に在り、山東を太室、山西を少室と云ふ、嵩は總名なり、少林寺に達磨洞あり、僧と道士と住する者なり、開逐樵夫閒看基暢當が此の事を言ふを盧綸が聞く、晉の王質、山中に往て仙人の棊を圍むを見て斧の柄の腐爛したるに驚き歸れば年已に百年、其の故事を云ふ、忽逢人世是秦時淵明の武陵源記の事を用ふ、秦の亂を避けて隱るる人に漁父が逢ふ、開雲種玉は麻道士が業を云ふ、『搜神記』に王雍伯、義漿を致して行者に遺る、一人あり、飲訖りて懷中より石子一升を出し之に與て謂て曰く此を種れば好玉を生み、後雙璧を得んと、嫌山淺壽常の山は嫌ふ、嵩山の如きは深きなり、渡海傳書東海を渡り蓬萊方丈に游び、仙人の間に書を傳達する、怪鶴遲鶴の遲きを怪しむ故に鶴は遲からざるなり、反面の意、山は深く、鶴は早きなり、陰洞石幢微有字道士が住する陰洞の前に石幢卽ち石にて作る幢あり、何事か之に記し文字微しく見ゆ、佛家は此の石幢に陀羅尼を記す、仙家は黃庭經など記してあらん、古壇松樹半無枝石壇を繞れる松の老樹ならざるは無し、煩君遠示青囊錄隱公曰く郭公青囊中の書九卷を以て璞に與ふ、後に門人囊を竊む、未だ讀むに及ばず火焚す、今暢當が寄せらるる詩を假りに青囊錄と云

ふ、道士を尋ねし詩なればなり、願得相從一問師暢當に從がつて一度は麻道士を訪問せんと願ふなり、

【評論】此の篇、句句仙ならざるは無く、語語亦甚だ重し、逸品なるべし、

吳中別嚴士元　劉長卿

春風倚棹閶門城　水國春寒陰復晴　細雨濕衣看不見
閒花落地聽無聲　日斜江上孤帆影　草綠湖南萬里情
東道若逢相識問　青袍今已誤儒生

【句釋】吳中は今の江蘇、別は一本送に作る、嚴士元は一本、郎士元に作る、且此の詩、此の本には盧綸とある、然るに劉長卿の集に在て盧綸の集に此の詩あらず、今以て從ふ所以、素隱和尙云ふ盧綸が吳中に天寶の亂を避て嚴士元に別るる時の作と、臆斷にて何の證據も無き說な

り、春風倚棹閭閶城吳王の名を閭閶と云ふ夫差の父なり、此の城下より春風に棹し去る、水國春寒陰復晴水國の春は寒く、陰晴も亦定め難し、春寒を一本猶寒に作る、又春深に作る、寒を可と思ふ、細雨濕衣看不見『大學』に視而不見の語あり、看は此の方よりみる、然るに見ず、細なればなり、閒花落地聽無聲『大學』に聽而不聞の語あり、雨の爲め閒花が濕うて落つ、風にあらざれば聲無き所以、日斜江上孤帆影夕陽に帆を揚げて去る、去る者は士元なり、草綠湖南萬里情草には不歸草と名くるあり、我君を逐んと欲するも能はず、萬里の遠き但情を引くのみ、東道若逢相識問士元の歸る道、東なれば云ふ、東道主人の東道にはあらず、舊相識が君に向て我が事を問はば、君は答へ玉へ、青袍今已誤儒生盧綸は今猶青袍を着けて一儒生として放浪し、官吏たるの聲譽は荷はずと、儒生の著帽を青袍とす、

【評論】此の篇、一二五六七八の六句は全く送別の詩なり、三四の二句、閒適の意、人を送る詩ならず、然れども句としての妙は此の二句にあり、

送王李二少府貶潭峽

盧　綸

嗟君此別意何如　駐馬銜盃問謫居　巫峽啼猿數行淚
衡陽歸雁幾封書　青楓江上秋天遠　白帝城邊古木疎

聖代祇今多雨露　暫時分手莫躊躇

嗟す君が此の別意何如、馬を駐め盃を銜んで謫居を問ふ、巫峽の啼猿數行の淚、衡陽の歸雁幾封の書、青楓江上秋天遠し、白帝城邊古木疎なり、聖代祇今雨露多し、暫時手を分て躊躇すること莫れ、

【句釋】王は長沙の潭州に、李は峽中に貶せらる、縣尉を少府と曰ふ、文吏なり、今出て武役と爲る、嗟君此別意何如貶せらるる人の胸中を察し作者が嗟くなり、駐馬銜盃問謫居貶せられて居る處を謫居と云ふ、馬を駐めて旗亭に入り盃を銜む、馬上にはあらず、巫峽啼猿數行淚『荊州記』に古歌に曰く巴東の三峽巫峽長し、猿鳴きて三聲淚裳を沾ほす、李の方に屬す、衡陽は潭州に近き地、回雁峯あり王の赴く地　青楓江は長沙の潭州に在り、王の赴く地、白帝城は峽中に在り、公孫述が築く所、李の赴く地、一方は江なれば秋天遠なり、一方は山なれば古木疎なり、聖代祇今多雨露『詩經』に雨露は天の萬物を潤す所、以て天子の恩澤に喩ふ、暫時分手莫躊躇手を分つは暫時の間なり、必ず遠からず故官に復し京へ歸ることを得べし、故に躊躇所謂後髪引かるる樣な氣を出さず、速かに行き玉へと言ふ、

【評論】此の篇、巫峽、衡陽、青楓江、白帝城の四地名を挾入、太巧の作と謂つ可し、

西塞山　劉禹錫

王濬樓船下益州　金陵王氣漠然收　千尋鐵鎖沈江底
一片降旗出石頭　人世幾回傷往事　山形依舊枕寒流
今逢四海爲家日　故壘蕭蕭蘆荻秋

王濬樓船益州より下る、金陵の王氣漠然として收る、千尋の鐵鎖江底に沈め、一片の降旗石頭に出づ、人世幾回か往事を傷む、山形舊に依て寒流に枕す、今四海家と爲る日に逢ふ、故壘蕭蕭蘆荻の秋、

【句釋】西塞山は一本「金陵懷古」に作る、今の湖北省武昌府武昌縣に屬す、吳の孫策が黃祖を擊ち、周瑜が曹操を破り、劉裕が桓元を攻め、唐曹王皐淮西を復す皆此に於てす、赤壁と相距る數里の地、元微之と劉夢得禹錫の字と韋楚客と三人同じく白樂天の居に會し、各の金陵懷古の詩を賦す、夢得其の才を騁せ、略遜意無し、滿引一揮して成る、白公詩を覽て曰く四子驪龍を探り、吾子先珠を得たり、其の餘の鱗甲は將何をか爲ん、三公是に於て吟を罷む、王濬は一本

○○に作る、晉の將軍なり、樓船下益州晉の武帝吳を伐んとし、王濬をして大艦長一百三十步二千人を受るを作らしめ、木を以て城を爲る、樓櫓を其の上に起て、流に順うて下る、吳は江磧要害の處に於て鐵鎖を以て橫に之を截て以て船を拒ぐ、濬大炬を作りて燒融す、金陵王氣漠然收斂陵は元來王氣ありて天下の都たる處、然るに孫皓が此の一戰に降伏したるを以て漠然として音も無く收まる、千尋鐵鎖沈江底吳は江中に鐵條網を設け、樓船を拒んと欲したるも燒融せられ、功を爲さず、一片降旗出石頭石頭城は孫皓の住城、吳主孫皓は遂に勝ざるを知て面縛して王濬に降る、人世幾回傷往事王濬が孫皓を破りし一事のみならず、金陵は古今戰爭の多かりし處、往事を省れば、幾回か傷まざるを得ず、周瑜は前に曹操を破りたるも、其の主孫權英雄なればなり、孫皓の不肖、竟に此の亡滅を招く、山形依舊枕寒流西塞山の山形は依然舊の如く寒流に臨んで靑靑たり、山河依然、人事變遷、感慨限り無し、今逢四海爲家日天子は四海を以て一家と爲す、唐の聖代、攻る者も無く、破る者も無し、故壘蕭蕭蘆荻秋當時の干戈に代ふるに今日は蕭蕭として唯蘆荻の秋を顯はすのみ、

【評論】此の篇、懷古詩として古今に傑出せるもの、淸の紀曉嵐曰く第四句但吳を說得し、第五句七字六朝を括過す、是を簡練と爲す、第六一筆折て西塞山に到る、是を圓熟と爲す、紀の

言盡きたり、石川鴻齋云ふ鐵鎖と降旗對せず、傷往事と枕寒流對せず、兒童對のみが對にはあらず、是を許渾の金陵懷古に比すれば彼は聲聞辟支果にして此は大乘佛菩薩果なり、和賈至早朝より此に至る六首、篇章首尾句法字法相似たるものとす、

早春五門西望

王　建

百官朝下五門西　塵起春風滿御堤　黃帕蓋鞍呈了馬
紅羅纏項鬬回雞　館松枝重墻頭出　渠柳條長水面齊
唯有敎坊南草色　古城陰處冷凄凄

百官朝より下る五門の西、塵は春風に起つて御堤に滿つ、黃帕鞍を蓋ふ呈し了る馬、紅羅項を纏ふ鬬うて回る雞、館松枝重くして墻頭より出で、渠柳條長くして水面に齊し、唯敎坊南草の色のみ有つて、古城の陰處冷にして凄凄、

【句釋】早春五門西望皐門、庫門、雉門、應門、路門、是を天子の五門と曰ふ、長安城の西望するなり、百官官人の數を一と百と千とを以てす、十官萬官の語は無し、宮女は三千有つて四

千無きが如し、朝下退朝を云ふ、塵起春風滿御堤車馬盛んなる處、塵亦盛んに起る、御溝の堤上、春風正に滿つ、黃帕帕は繒、黃色の帕、蓋鞍呈了馬、玄宗の時代馬を獻ずるに附庸の君は黃色の鞍覆を掛けて呈上する、紅羅纏項鬬回雞玄宗は酉の年に生れたと云ふに依て鬬雞を好む、賈昌と云ふ年十三の兒童を五百人の小兒の長とし、雞坊を置て其の兒等を軍士の如くにし之を司さどらしむ、勝し雞には紅色の羅を賜うて項に纏はしむ、今宮中より回る、當時の童謠に「生時用ひず文字を識るを、雞を鬬はし馬を走らし讀書に勝れり」、館松枝重墻頭出正しく西望せし物を言ふ、館を覆ふ松枝が墻を超えて出づ、渠は溝なり、柳條長水面齊柳の枝條が殆んど水に著かんとす、唯有敎坊南草色玄宗は蓬萊宮の側に敎坊を設けたり、其の敎坊邊の草色は徒らに青青として、鬬雞時代の繁華には似ず、天寶の亂後を云ふ、古城陰處冷凄凄長安の古城下は草色のみ青青、草の青青たるは其の氣凄凄たらざらんや、

【評論】此の篇一句より六句に至るまで、前代玄宗の繁華なる時を叙し、七八の二句、其の今日の衰狀を云ふ、盛唐の氣格尚在り、推して大家の作と爲す、

錦瑟

李商隱

錦瑟無端五十絃　一絃一柱思二華年一　莊生曉夢迷二蝴蝶一

望帝春心託杜鵑　滄海月明珠有淚　藍田日暖玉生煙
此情可待成追憶　只是當時已惘然

錦瑟端無く五十絃、一絃一柱華年を思ふ、莊生の曉夢蝴蝶に迷ひ、望帝の春心杜鵑に託す、滄海月明らかにして珠に淚あり、藍田日暖にして玉煙を生ず、此情追憶を成すを待つ可んや、只是れ當時已に惘然、

【句釋】●●は瑟は琴なり、「周禮樂器圖」に飾るに寶玉を以てするを錦瑟と曰ふ、李商隱が少年の時、令狐楚が家に寓す、令狐楚が侍人に能く琴を鼓し適怨清和の四曲を調す、依て錦瑟の名あり、令狐楚は此の女を以て商隱に妻はす、商隱業成り、令が家を辭する同時に此の錦瑟とも離別せり、後、其の事を思うて此の詩を賦す、無端は「アヂキナシ」との意、五十絃『爾雅注疏』に依て見ると古は長八尺一寸、廣一尺八寸、二十七絃と、庖犧氏五十絃を作る、黃帝素女をして瑟を鼓せしむ、哀自から勝へず、乃ち破つて二十五絃を作る、一絃一柱適怨清和の曲調を發して聞く者をして喜ばしめ、亦怨まましむ、思華年●●●

江亭春霽　　李郢

江蘺漠漠荇田田　江上雲亭霽景鮮　蜀客帆檣背歸燕
楚山花木怨啼鵑　春風掩映千門柳　晩色凄涼萬井煙

金磬泠泠水南寺　上方臺殿翠微連

江蘺漠漠たり荇田田、江上の雲亭霽景鮮なり、蜀客の帆檣歸燕に背き、楚山の花木啼鵑を怨む、春風掩映す千門の柳、晩色凄涼たり萬井の煙、金磬泠泠たり水南の寺、上方の臺殿翠微連る、

【句釋】江亭春霽は郢が浙江の杭州に在て作る、此の亭は郢が所有なり、江蘺は香草に屬す、和名「ヲンナグサ」芎藭の苗なり、晉の郭璞云ふ水薺に似たり、漠漠は茂生する貌、荇は和名「アサザ」『ウキクサ』『詩經』に參差荇菜とあり、田田に連なり生ずる、第二句は字の如し、蜀客帆檣背歸燕高處より見る所の景、杭州を去て蜀へ歸る客は、全く春晩に燕が杭州へ來ると反對を云ふ、楚山花木怨啼鵑楚山の花木は人をして喜ばしむるが當然、然るに鵑聲を著け却て人を怨ましむ、郢の友、淸塞は還俗して他處へ行き、賈浪仙は死して後、我亦友無しとの意を此の

二句にて云ふとの說もあり、萬井は猶ほ萬戶と云ふが如し、金磬は字の如く金磬なり、鴻翁云ふ泉聲なりと誤る、泠泠金磬の聲の形容、水南寺杭州には寺殊に多し、夕陽其の磬聲を泉聲の如くに聞く、上方は寺の高處、臺殿佛を安じ菩薩を置く寺の臺殿なり、翠微連山中に臺殿が連なるなり、

【評論】此の篇、徹頭徹尾、其の望景を叙す、但、漠漠、田田、泠泠の疊字を三處に用ふ、少しく詩格を損す、

送人之嶺南

關山迢遞古交州　歲晏憐君走馬游　謝氏海邊逢姹女
越王潭上見青牛　嵩臺月照啼猿樹　石室煙涵古桂秋
回望長安五千里　刺桐花下莫淹留

關山迢遞たり古交州、歲晏れて憐む君が馬を走らして游ぶことを、謝氏海邊姹女に逢ひ、越王潭上青牛を見る、嵩臺の月は啼猿の樹を照し、石室の煙は古桂の秋を涵す、長安を回望すれば五千里、刺桐花下淹留する莫れ、

【句釋】 送人之嶺南大庾、始安、臨賀、桂陽、揭陽、是を五嶺と曰ふ、此の五嶺より南なり、關山迢遞遠くして且遙かなるを迢遞と云ふ、古交州、卽ち今日の廣東省廣州府、春秋時代、南越の地と稱す、秦は南海郡を置く、一府十四縣を領ず、歲晏晏は暮なり、憐君走馬游游は行の意味、憐むと云ふに依て知る、得意の游にあらざるとを、謝氏海邊逢姥女『唐詩鼓吹』の注に謝端は福州省廣東候富の人、少にして父母を喪なひ、鄰人之を養ふ、恭謹自ら守る、一日海邊に於て一螺を得、三升壺の如し、甕中に貯ふ、耕作して還る毎に、飯飮湯火、人の爲る所の如し、之を疑うて早に出て籬外より之を窺ふ、一少女の甕中より出るを見る、入て之を問ふ、女倉卒にして甕に入んと欲す、得ず、答て曰く我は大漢中の白水素女なり、天帝卿が孤愼を哀んで我をして炊烹せしむ、君婦を得ば我自ら當に去るべし、端娶りて後、天忽にして風雨翁然として去る端が此の素女を娶素も姥も意義殆んど同じ、水銀の精を云ふ、君も端の如く南海にて此の如き天の素女に逢ふべしとなり、越王潭上見青牛『南越志』に綏安縣今日此の縣名なしの東に連山あり、昔越王建德、木を伐て舡を爲る、童男女三千を以て之を牽しむ、旣にして人と舡と俱に潭に墮つ、時に聞く督進と唱へ喚ぶの聲あるを、往往に青牛あり馳回して舡と俱にす、蓋し神靈の至り、君も亦此の神靈を見んと云ふ、嵩臺は一名、定山、一名石室山、峭立高二百餘丈

之を嵩臺と云ふ、石室南北に二門あり、狀人工の若し、肇慶府、高要縣の北、此に啼猿を月が照す夜聞かん、石室は嵩臺の石室なり、此に古桂の香ふ秋を見ん、回望長安五千里南方より北方の長安を望む、他日長安の故鄕へ回るを云ふ、刺桐花下此の刺桐花は南海より福州に至る殊に多しと、此の花下の游びに狎れて長安に回るを忘るる莫れ、第二の故鄕と心得る樣になりては不可なり、

【評論】 此の篇、故事を運用して筆路明白、毫も澁滯せず、海より山に及ぶの對句を以てす、兒童輩此の句法を學ぶべし、

九日登仙臺呈劉明府　　崔曙

漢文皇帝有高臺　此日登臨曙色開　三晉雲山皆北向
二陵風雨自東來　關門令尹誰能識　河上仙翁去不回
且欲近尋彭澤宰　陶然一醉菊花盃
漢文皇帝高臺あり、此の日登臨曙色開く、三晉の雲山皆北向、二陵の風雨自から東來、關門の令尹誰か能く識らん、河上の仙翁去て回らず、且近ご

ろ彭澤の宰を尋ねて、陶然として一たび菊花の盃に醉んと欲す、

【略傳】崔曙は宋州の人、開元十六年の進士、

【句釋】九日は九月、仙臺は今の河南省河南府に在り、古の洛陽、漢の文帝之を建つ、劉は未詳、明府は知事なり、漢文皇帝有高臺文帝名は恒、高祖の中子なり、河上公、文帝に『老子』を授けて去り、所在を失す、文帝西山に於て臺を築き、之を望む、此日は九月九日、登臨曙色開曙色開くに依て眼界遮るもの無し、三晉晉の文公の後、十六世を韓魏趙と爲す、共に侯に封ず、是を三晉と曰ふ、河南省の一部を占む、今陝州府に三晉岡あり雲山皆北向山勢は悉く北方に赴く、二陵は南陵と北陵となり、北陵は文王の風雨を避し處と、崤山に在り、東崤と西崤相去る三十五里、路極めて險と、南陵は夏后皐の墓、風雨自東來「東より來る」との古訓は今用ひず、自ら東來と訓むべし、關門令尹は周の令尹喜を云ふ、老子が函谷關を出る時、强て留めて長生の術を授かりし人、誰能識今人道德經をも知らず、又令尹喜をも知らざるなり、河上仙翁去不回文帝に老子を授けし仙翁は廬を河濱に結び居りしより河上公と云ふ、此の仙人も去て再び回らず、且欲近尋彭澤宰我は仙翁も令尹も慕ふ心はある、然れども今の世到底其の人には逢ふべからず、せめては彭澤令の陶淵明にでも逢うて此の濁世の氣を清淨ならしめんと思ふ、以て劉が彭澤令

たること知るべし、陶然一醉菊花盃今日の陶淵明は明府なるが故に君を訪問して九日古の淵明が人の送りし酒を飲んで東籬に菊を賞せし事に倣はんとなり、

【評論】此の篇、九日の意味と、仙臺の意味とを極めて能く發揮せるものなり、仙に就ては文帝と令尹と河上公を以てし、九日に就ては淵明を以てし、而して仙は吾及ばず、唯一の淵明は是れ期すべし、古人の此の詩を評して情意悲壯なりと云ふは良とに當れり、第二句、曙色開の三字なり以下悉く曙色に就ての景色、明の顧華玉は曰く句律典重にして情景分明、一意直下、固より法と爲すに足る、

叢臺

李遠

有客新從趙地回　自言曾上古叢臺　雲遮襄國天邊去
樹遶漳河地裏來　紘管變成山鳥哢　綺羅留作野華開
金輿玉輦無消息　風雨唯知長綠苔

【客あり新たに趙地より回る、自ら言ふ曾て古叢臺に上ると、雲は襄國を遮ぎりて天邊に去り、樹は漳河を遶つて地裏より來る、紘管は變じて山鳥の

哢を成し、綺羅留めて野華の開くを作す、金輿玉輦消息無し、風雨唯知る綠苔長ずるを、

【略傳】李遠字は求古、太中に建州の刺史たり、後、丞相、令狐綯、杭州刺史たらしめんとす、宣宗曰く遠が詩に云ふ、長日唯消一局碁と、安んぞ能く人を理めんや、綯曰く此れ詩人興を託するのみ、未だ必ずしも然らず、宣宗遂に往かしむ、

【句釋】叢臺は趙の武靈王が建つ、今日の直隸省廣平府、邯鄲縣に在り、有客新從趙地回一客が趙地を漫游して回り李遠に其の事を談ず、自言曾上古叢臺此の古叢臺の上より望見せし狀を以下の句に言ふ、雲遮襄國春秋の時の邢、秦に襄國郡と爲す、今日の順德府邢臺縣なり、天邊去遙かに見る意味を云ふ、本集に去を盡に作る、盡を以て可とす、樹遠漳河漳河は源、山西の路安府長子縣より出て以て邢州任縣に至る、地裏來雲は天、樹は地、絃管昔時の景、變成山鳥哢今日の景、絃管は盛時、山鳥は衰時、綺羅は女兒の服美を云ふ、昔時の景、留作野花開今日見る所は花の綺羅有るも人の綺羅はあらず、金輿玉輦趙も後趙も北齊も都は皆此の地、其の王等の輿輦も今日は無消息一向に跡方も無し、風雨唯知長綠苔來往の人も無ければ風雨は綠苔をして得意に發生せしむ、

【評論】此の篇、客の言を借りて以て我が詩と爲す、巧妙比無し、巨景二句細景五六句出すに雄闊の文字を以てす、毫も閒然する所なし、地裏を本集に掌上に作る、地裏は趙地と二字重なる、掌上は曾上と二字害あり、蓋し白璧の微瑕、言ふに足らず、方虛谷の評して近奪と云ふは余信せず、

寒食　來鵬

獨把一盃山館中　每驚三時節恨飄蓬　侵堦草色連朝雨
滿地梨花昨夜風　蜀魄啼來春寂寞　楚魂吟後月朦朧
分明記得還家夢　徐孺宅前湖水東

獨一盃を把る山館の中、時節に驚く毎に飄蓬を恨む、侵堦の草色連朝の雨、滿地の梨花昨夜の風、蜀魄啼き來つて春寂寞、楚魂吟じて後月朦朧、分明に記得す家に還るの夢、徐孺が宅前湖水の東、

【略傳】來鵬は昭宗の時の人、詩思清麗なり、福建の韋尙書岫、其の才を愛し女を以て之に妻はさんと欲す、果さず、後蜀に游んで卒す、

【句釋】 寒食は前に辨ず、山館中山村の旅館に在て酒を飲む、時節の變化毎に恨飄蓬蓬の如く飄へる身の定めなきを嗟す、侵堦古訓多く「堦を侵す」と爲す、今用ひず、草色連朝雨山館中の景色、雨の恩澤は無名の草に及んで青青たり、滿地梨花昨夜風惡風は昨夜來つて庭中の梨花を散亂す、蜀魄は杜鵑なり、啼來春寂寞花は散じ草のみ茂し、寂寞たる所以、楚魂は一名亡魂鳥の名、楚の懷王、秦の昭王の爲め欺むかれて武關に赴き、秦の囚ふる所と爲て歸り得ず、秦に卒す、後、寒食の月夜、人、楚に於て吟聲を聞くと、此の鳥の吟聲を聞き出て見んと欲すれば、中庭唯月朦朧たるのみ、分明記得還家夢此の夜故鄉に還りし夢を見る、覺後、分明にして忘れず、徐孺は名は穉東漢の人、宅は洪州東湖の上に在り、來鵬の家も其の東湖の東に在るならん、徐穉字は孺子、豫章南昌の人、今日は江西省南昌府なり家貧常に自ら畊稼し、其の力にあらずんば食はず、恭儉義讓、人皆服す、陳蕃が郡の吏となる、人に接せず、獨徐の爲めに一榻を設く、終身仕へず、七十二を以て卒す、世に南州高士徐孺子と稱す、

【評論】 此の篇、客旅中の感を叙して凄意限り無し、作者來鵬は徐孺子を以て居る者の如し、其の人敬すべし、早春五門の詩より此に至る七首、一聯は輕婉、二聯は重大、三聯は輕く銖に至り、四聯は輕婉其の一聯と同じきなり、

四 虛

周弼曰く其の說五言に在り然も五言に比すれば終に是れ稍實に近し而かも全虛ならず、蓋し句長うして全く虛なる則は恐く柔弱に流れん、要す須らく景物の中に於て情思通貫すべし、斯を得たりと爲す、

隋宮　李商隱

紫泉宮殿鎖煙霞　欲取蕪城作帝家　玉璽不緣歸日角　錦帆應是到天涯　于今腐草無螢火　終古垂楊有暮鴉　地下若逢陳後主　豈宜重問後庭華

紫泉の宮殿煙霞を鎖す、蕪城を取て帝家を作んと欲す、玉璽日角に歸するに緣らずんば、錦帆應に是れ天涯に到るなるべし、今に腐草螢火無く、終古垂楊暮鴉あり、地下若陳の後主に逢ば、豈宜しく重ねて後庭華を問ふべけんや、

【句釋】 隋宮は隋の煬帝の行宮を詠す、隋は大業元年に長安より江都に至る南宮四十餘所を置く、紫泉宮殿鎖煙霞上林苑の水を紫泉と云ふ、丹水は南で、紫泉は北なり、隋の都城は卽ち關中今日の陝西西安府長安なり、然るに煬帝は其の都を棄て南游す、空しく煙霞を鎖す所以、欲取蕪城作帝家蕪城は名詞にあらず、荒蕪せる城の意味、乃ち吳王濞が都する所、煬帝は長安を捨て此の廣陵を以て江都と爲し、陝西より江都に至る一千三百有餘里の間に四十餘所、宮を建つ、今日の江蘇省揚州府江都縣是れなり、玉璽は天子の印、日角は唐の太宗の相貌を云ふ、額の肉中の骨、左方に角の如く有るを日角と云ふ、右方にあらば月角と云ふ、漢の光武は此の相を具し、太宗も亦此の相を具す、隋が德を失なはずして太宗が若し起らざる場合はとの意、錦帆應是到天涯煬帝は非常に水を好みし天子、自身は龍舟に御し、蕭妃は鳳舸に乘る、錦帆は一括して云ふ、唐の天子に天下が歸せざる時は煬帝が勢、但江都に至るのみならず、天涯萬里、水の便ある所、悉く向ふべしとなり、于今腐草無螢火『禮記』に螢火は腐草の化する所と、煬帝盛んなる日、景華宮に於て螢火數斛を求め、夜出て山に游び之を放つ、其の光、山谷に遍ねし、今日は腐草あるも、亦螢火無しと、終古は俗語の「イツマデモ」に當る、垂楊有暮鴉大業元年邪溝を開きて山陽より江に至る廣數十步、其の間千三百里、楊柳を植て隋堤と名く、其の

殘する楊には暮鴉のみ啼く、地下若逢陳後主陳の後主は贅澤を極めて隋の爲め亡ぼさる、然るに其の隋も亦陳の如く亡ぶに至る、豈宜重問後庭華陳の後主は玉樹後庭華の艷詩を作りて天下を亡ぼすに至る、此の二天子が地下にて面會せば同じく共に亡國の事を話すべきやと云ふ意なり、『洛陽伽藍記』に煬帝嘗て吳公臺下に行く、恍惚として陳の後主に遇ふ、帝、張麗華を請うて、玉樹後庭華を舞はしむ、後主の曰く每に張妃と臨春閣に憑り璧月詞を作りしことを憶ふ未だ終らざるに韓擒虎が萬騎を領して直ちに來て撞入するを見る、便ち今日に至て始めて謂ふ殿下の治、堯舜の上に在りと、今日還て此に逸游す曩の日何ぞ罪せらるるの深きや、帝之を叱す見えず、此に地下と言ふは蓋煬帝弑せられて吳公臺下に葬むればなり、天隱の說は必ずしも作者の意ならず、『伽藍記』の說は奇とすべし、

【評論】 此の篇、隋宮を咏じて極力模寫し煬帝の事を叙す、餘す所無からんと欲するが如し、剪綵に過ぐる感あるも、流麗の一宗を建立したる大筆力認めざるべからず、淸の紀曉嵐云ふ、中の四句步步逆挽、句句跳脫、結句佻甚だし、盛唐人決して此の如くならず、佻とは厚の反對、輕薄を言ふ、國家の亡滅を憐んで其の事を詠ず、決して輕薄なるべからず、其の證として盛唐諸公は重厚の意はあり、輕佻の意あらず、義山は一大宗と雖も、晩唐の氣運に際す、時代思潮

の罪此に至る、獨義山を責むる能はざるなり、

馬嵬

海外徒聞更九州　他生未卜此生休　空聞虎旅鳴宵柝
無復鷄人報曉籌　此日六軍同駐馬　當時七夕笑牽牛
如何四紀爲天子　不及盧家有莫愁

海外徒らに聞く更に九州ありと、他生は未だ卜せず此の生休す、空しく聞く虎旅の宵柝を鳴すことを、復鷄人の曉籌を報ずる無し、此の日六軍同じく馬を駐む、當時七夕牽牛を笑ふ、如何ぞ四紀天子と爲て、盧家莫愁あるに及かず、

【句釋】馬嵬は陝西省西安府興平縣の西、長安城を去る數里の地、玄宗一日、其の兄壽王の妃楊氏の美、絶世なるを見て、壽王に他の姬人を與へ、自ら楊氏を奪ふ、天寶四年に冊して貴妃と爲す、時の宰相李林甫、安祿山を重用す、祿山、貴妃が養兒と爲て宮廷に出入す、貴妃の父楊國忠も寵用せらる、祿山は天下の取るべきを知て遂に史思明と共に謀反す、玄宗貴妃と共に

蜀に出奔せんとし、馬嵬に至る、將士飢疲れて皆憤怒、其の罪一に楊氏一家に在りと爲し、楊國忠を誅す、貴妃尙ほ在り、將士之も殺さんと欲す、玄宗許さず、强て請ふに及んで遂に之を祠堂下に縊る、紫茵を以て尸を裹み道旁に瘞む、時に年三十八、天寶十五年六月なり、此より後五年、肅宗の上元二年に玄宗も死す、年七十八、海外徒聞更九州義山の自注に鄒衍が云ふ九州の外に更に九州ありと、他生未卜此生休玄宗が貴妃と死別して後、楊什伍なる者、海外の九州に貴妃は在りと奏するを聞て、今生中一度相見んかなと思ふ、而かも他生の事は未だ卜せず、會ふも會はざるも分らざるが、今生は亦如何とも爲す能はず故に此の生休すと云ふ、空聞虎旅鳴宵柝虎旅は宮門の衞士なり、夜警の爲め柝を鳴らして巡邏す、玄宗は蜀の行宮に在て獨空しく聞く、無復雞人報曉籌雞人とは絳幘を著けし役人、行宮は長安の宮廷と異なり、曉を報する役吏はあらず、此日六軍同駐馬玄宗が長安を出奔して蜀へ赴く中途、六軍皆進まざるや、皆貴妃を玄宗が携帶すればなり、貴妃一人の爲め國が亂れ、蜀の如き險道へ來るは我等の悲しむ所、皆馬を駐め貴妃を殺さんと欲する所以、當時七夕笑牽牛曾て長生殿に在て七夕の夜貴妃と共に夜半に天を望み、牽牛織女が夫婦の事を我等二人の濃やかに及かずと言うて笑うた事なり、如何四紀爲天子一紀は十二年、四紀なれば四十八年、玄宗が天子の位を踏む四十

八年間なり、不及盧家有莫愁●●●●●洛陽の女兒名は莫愁、莫愁十三にして能く綺を織る、十四にして桑を南陌の頭に採る、十五にして嫁して盧家の婦と爲る、是れ梁の武帝の歌なり、賤なりと雖も、家庭を暖たかにして以て圓滿に一生を送りし莫愁に及ばずとなり、

【評論】此の篇、此の題に在ては溫庭筠の七律と千古雙美を爲すもの義山の面目遺憾なく發揮せり、第二句七字の如きは前古人無く、後來者無し、九六七四の數字、虎、雞、馬、牛の動物徒聞空聞他生此生等の同字、他人をして此の如くならしめば、實に讀むに堪へず、然るに此の詩は何等の害なく之を讀むを得、詩にして神に入らすんば能はず、蓋し莫愁を以て天子に比す、不倫なりとの論あり、是れ或は然らば唐に在て隋を咏じ陳を賦す尙ほ恕す可し、唐に在て唐を賦す、擬人不倫の罪と云ふは必らずしも道學先生の論にはあらず、詩家も亦此の論を發すべきなり、嗚乎難い哉完作や、

籌筆驛

魚鳥猶疑畏簡書　風雲長爲護儲胥　徒令上將揮神筆
終見降王走傳車　管樂有才終不忝　關張無命欲何如

他年錦里經祠廟　梁甫吟成恨有餘

魚鳥も猶疑ふ簡書を畏るるかと、風雲長く爲に儲胥を護す、徒に上將をして神筆を揮はしめ、終に降王の傳車を走らしむるを見る、管樂才あり終に忝しめず、關張命無し何如せんと欲する、他年錦里祠廟を經、梁甫吟成つて恨餘あり、

【句釋】●●●籌筆驛は利州の綿谷縣、今日の四川省保寧府廣元縣の北、諸葛武侯嘗て軍を駐め、此に於て籌畫す、此の詩は蜀の亡びしを慨し、兼て武侯を稱す、魚鳥猶疑畏簡書●●●●●軍中の法規を簡書と云ふ、武侯が出す軍中の法規は人畏るるのみならず、魚鳥も亦畏るるが如し、風雲長爲護儲胥●儲は待なり、胥は須なり、軍營の桓を指す、蜀の桓と爲りし者は武侯なり、武侯の誠忠は風雲も知るが故に、千年後も風も破る能はず、雲も深く覆うて此の籌筆驛を護す、日本にて言へば櫻井驛の如きものなり、徒令上將揮神筆●●●●●上將は武侯なり、武侯にあらざれば蜀に神筆を揮ふもの無し、一も二も皆武侯を勞せしなり、而かも徒令なり、終見降王走傳車●●●●●降王は後主劉禪なり、傳車は驛の車、四馬高足なるを置傳とし、四馬の中足を馳傳と爲し、下足を上傳、急を要

するは一乘傳に乘る、後主は此の車に乘り、魏に降る、益す以て武侯の死を悲しむ、管樂管仲と樂毅は武侯平生自ら比する者、有才終不忝管樂の才を有する武侯なれば終生身を忝かしめず關張は關羽と張飛なり、無命欲何如此の二人、勇あり義あるも智に乏しきを以て部下の者に殺さる、亦天命なれば何如ともする無し、武侯と關張の三人を蜀の爲め惜む、他年は前年なり、錦里は城の名、錦官城とも云ふ、四川の成都府、華陽縣の南、經祠廟武侯の祠廟を嘗て弔せしなり、梁甫吟成恨有餘、武侯は未だ隴畝を出ざるとき、臥龍岡に在て梁甫の吟を爲る、梁甫は山の名、今我は此に來りて詩を作り以て武侯の梁甫吟に比す、而して之を誦す、當時の事を思うて遺恨限り無きなり、

【評論】此の篇、隋宮の詩に比すれば遙かに勝れ、老杜の壘に近づかんと欲す、紀曉嵐曰く起の二句斗然として抬起す、三四の句斗然として抹倒す、然る後、五句を以て首聯を解し、六句を以て次聯を解す、此れ眞に殺活手に在るの本領、筆筆龍跳り虎臥すの勢あり、紀又曰く他年は當年の謂なり、言ふこころは他時其の祠廟を經て恨尙餘り有り、況や今日親しく行兵の地を見るをや、亦一倍を加ふるの法、通篇一鈍置の語無し、紀をして此の嘆を發せしむ、餘子安んぞ議する者あらん、有の二字、白璧の微瑕と爲すのみ、

聞歌

斂笑凝眸意欲歌　高雲不動碧嵯峨　銅臺罷望歸何處
玉輦忘還事幾多　青塚路邊南雁盡　細腰宮裏北人過
此聲腸斷非今日　香灺燈光奈爾何

笑を斂め眸を凝らして意歌はんと欲す、高雲動かず碧嵯峨、銅臺望を罷め何れの處に歸る、玉輦還るを忘る事幾多ぞ、青塚路邊南雁盡き、細腰宮裏北人過ぐ、此の聲腸斷今日に非ず、香灺燈光爾を奈何せん、

【句釋】聞歌は自注に婦の夫を喪うて歌ふを聞く、因て此の歌を作る、斂笑は笑を發せず、凝眸は眸を定む、意欲歌夫の死に因て歌はんと欲するは、尋常の婦にあらず、素隱和尙は狂女ならんと、或は然らん、高雲不動碧嵯峨『列子』に秦青悲歌す、聲、林木に振ひ、響き行雲を遏むと、今此の女が夫を戀ふの情に感じて雲も動せず宛かも山の嵯峨たる如きなり、銅臺罷望歸何處魏の曹操死せんとする前に令を遺して曰く我に事へたる妓人等は銅雀臺に於て月の朔望に帷に向て妓樂を作すべし、時時又臺上に登て我が西陵の墓田を望めと、魏も遂に晉に亡ぼされ、

妓人も散亂し、銅雀臺も跡を滅し、何の處に歸するやを知らず、玉輦忘還事幾多周の穆王、黃金碧玉の輩に御し、西王母と瑤池の上に宴す、歌謳して還るを忘る、諸侯遂に叛く、青塚路邊漢の王昭君、匈奴に嫁して胡中に恨死す、胡人之を葬むる、胡地草白し、昭君の塚草獨青し、故に青塚と云ふ、石崇が昭君詞に曰く願くは飛鴻の翼を假て、之に乘じて以て還征せん、飛鴻我を顧みずんば、佇立して以て屛營せんと、細腰宮裏北人過楚王細腰の婦人を好む、宮女皆腰の細くならんことを思うて食を禁じて瘦せ、終に餓死したる者多し、北人は北方有二佳人一の詩意より美人の代名詞とす、過は今日已に無き意なり、雁は南歸して信なし、女は世を過ぎて宮室も亦無し、此聲腸斷非今日此の女が聲を高くして歌ひたる故に腸斷て死することもあらんかと疑ふ、其の例は前年にもあり、今日のみにあらず、唐の武宗疾ひ篤し、孟才人歌を以て寵を得、請て一曲河漏子を歌はしむ、氣亟て立ころに死す、天子醫をして之を診せしむ、脈尙溫にして腸已に斷つ、香燭燭は盡るなり、燭の「モエノコリ」燈光奈爾何燈火滅せんとする時は光を發す、今や此の女も自分の命の斷んとするを知らずして、猶此の哀歌を爲す、爾を奈何せんとするや、

【評論】 此の篇、此の歌女に托して、曹操と穆王と昭君と楚王とを一括して憫笑を爲す、史に

傳ふ商隱の一詩を作る、多く書冊を檢閱し、左右に鱗次す、故實多く材料に飽く、人之を病と、蓋し其の短なる所、亦其の長なる所、以て義山の詩を談ずべし、

茂陵

漢家天馬出二蒲梢一　昔若榴華遍二近郊一　內苑只知銜二鳳觜一
屬車無復揷二雞翹一　玉桃偸得憐二方朔一　金屋粧成貯二阿嬌一
誰料蘇卿老歸二國　茂陵松柏雨蕭蕭

漢家の天馬蒲梢より出づ、昔若榴華近郊に遍し、內苑只知る鳳觜を銜むことを、屬車復雞翹を揷む無し、玉桃偸み得て方朔を憐み、金屋粧成つて阿嬌を貯ふ、誰か料らん蘇卿が老て國に歸り、茂陵の松柏雨蕭蕭たらんとは、

【句釋】 ●●茂陵は漢の武帝を葬むる所、漢は縣右扶風郡、今日の陝西省西安府興平縣東北、漢家●●天馬出蒲梢●●漢の武帝が大宛を伐つは、其の意國にあらずして但其の馬に在り、初め丁寧に之を請ふも大宛聽さず、是に於て李廣利をして之を破り、其の馬を取て歸る、張騫傳に帝初め烏孫の馬を得て天馬と名け、大宛の馬を得るに及んで更めて烏孫を名けて西極馬と曰ふ、大宛の馬

を天馬と曰ふ、蒲梢は大宛の地名ならんか、未詳、古注に蒲梢は龍文魚目汗血之馬と、西極馬と天馬と汗血馬と三種あるものの如し、苜蓿は草の名、大宛の馬の嗜む所と、一に光風と名く、闕賓國に生ず、中土の種にあらずして西域の種なり、榴花は石榴、塗林より出づ、遍近郊長安近邊の野外に遍く滿つ、武帝の遠略無益の事を諷す、內苑只知衙鳳背鳳背とは鳳凰の背を裘て作りし膠なり、此の膠を付ければ斷絃を連ぬることを得、武帝は獵を好んで常に內苑に狩を爲し弓の絃が斷れば、鳳背の膠を銜み暖ためて絃を續ぐことのみ好まる、今之を誘るなり、屬車無復揷雞翹天子の出る鸞旗前に在り、屬車後に在り、此の鸞旗を雞翹とも云ふ、武帝微行卽ち祕密の游を好む、故に雞翹を屬車に揷むこと無し、正車には揷み、屬車に揷まずと見れば可し、玉桃偷得憐方朔『漢武故事』に西王母降る桃七枚を出して曰く此の桃三千年に一たび華きて三千年に子を結ぶ、方朔を指して曰く此の兒已に三たひ吾桃を竊めり、此の句は蓋し武帝の仙を好むを譏る、金屋粧成貯阿嬌『漢武故事』に帝の年五歲、長公主抱て問て曰く兒婦を得んと欲するや否や、曰く得んことを欲す、女の阿嬌を指して曰く阿嬌好か否や、帝曰く若し阿嬌を得ば、當に金屋を作りて之を貯ふべし、此の句は帝の好色を譏る、誰料蘇卿老歸國蘇武字は子卿、武帝の大漢元年匈奴に使して昭帝の始元六年に歸る、此の間十九年を經、乃ち大宇を

奉じて武帝の園廟に謁す、武帝仙を好んで而かも死し、蘇武は生を欲せずして而かも生く、誰か料らん所以、茂陵松柏雨蕭蕭武帝の少子昭帝の世に成りて蘇武は歸り、卻て自分を匈奴へ遣はせし武帝は已に歿して其の墓門は松柏已に森森雨も亦蕭蕭、金屋と茂陵と玉桃と松柏と其の變化を異にしたるを笑ふなり、

【評論】此の篇、武帝を弔して全力を傾倒せるもの、書卷の氣滿紙、義山の厭ふべき所、此に在り、隋宮より此に至る五首多く故事を用ふるの格、又多少は譏諷を含む意もあらん、

早秋京口旅泊　　李嘉祐

移家避寇逐行舟　厭見南徐江水流　吳地征徭非舊日
秣陵凋弊不宜秋　千家閉戶無砧杵　七夕何人望斗牛

唯有同時驄馬客　偏題尺牘問窮愁

家を移し寇を避けて行舟を逐ふ、厭ひ見る南徐江水の流るるを、吳地の征徭舊日にあらず、秣陵の凋弊秋に宜しからず、千家戶を閉て砧杵無く、七夕何人か斗牛を望ん、唯同時驄馬の客のみ有て、偏に尺牘に題して窮愁を

問ふ、

【略傳】 李嘉祐字は從一、袁州の人、初め江陰の令と爲り、上元中台州の刺史、大曆中袁州の刺史、中臺の郎と爲る、其の詩を臺閣集と曰ふ、

【句釋】 早秋京口旅泊江蘇省鎭江府丹徒縣を京口と稱す、移家避寇逐行舟嘉祐が潤州に在りし時、揚州の刺史、劉展反して兵を起し、潤州を陷る、嘉祐此の亂を避けんと欲して京口に宿泊中、蔣侍御が其の安否を問ふ、此の詩之に答ふるなり、厭見日日舟中に在て水を見るに厭たるなり、南徐江水流晉の元帝の時、京口に南徐州を置く、隋の文帝の時に潤州を置く、吳地京口は古吳の都なり、卽ち潤州、征徭は征稅と徭役となり、何事を爲すにも稅、而して事あらば役を命ぜらる、非舊日舊日は是にして今日は非なり、輕きもの重くなり、小なるもの大となる、秣陵は金陵なり、吳地なり、凋弊不宜秋古の金陵の如く繁昌ならず萬事凋落疲弊して秋殊に其の甚だしきを覺ゆ、千家閉戸無砧杵人家に砧聲聞えざるは、民營業に安せず、其の亂を避て他方に逃るるなり、七夕七月七日、何人望斗牛此の夕は牽牛織女の二星を祭る時に會ふ、而かも亂後曾て此の事無し、斗を女に作るを可とす、祇有同時驄馬客蔣侍御を指して驄馬客と云ふ、桓典御史となり驄馬に騎る、以て侍御に譬ふ、偏題尺牘廣武君曰く咫尺の書を奉ず、注に曰く

簡牘の長さ咫尺なる者、問窮愁は蔣侍御が李嘉祐の爲め無事なるや否やを問ひ來る、京口旅泊は客中ゆゑ、特に其の狀を說て窮愁と云ふ、

【評論】 此の篇、京口が戰後の衰狀を叙し而して蔣侍御の溫情を喜び、以て我が感慨を寓す、晩唐の詩として薄弱に墮せざるものなり、

晩次鄂州

盧綸

雲開遠見漢陽城　猶是孤帆一日程　估客晝眠知浪靜
舟人夜語覺潮生　三湘愁鬢逢秋色　萬里歸心對月明
舊業已隨征戰盡　更堪江上鼓鼙聲

雲開いて遠く見る漢陽城、猶ほ是れ孤帆一日の程、估客晝眠つて浪の靜なるを知り、舟人夜語つて潮の生ずるを覺ゆ、三湘の愁鬢秋色に逢ひ、萬里の歸心月明に對す、舊業は已に征戰に隨つて盡く、更に江上鼓鼙の聲に堪へんや、

【句釋】 次は宿なり、鄂州は今日湖北の武昌府、卽ち隋唐の鄂なり、雲開遠見漢陽城漢陽府も同じく湖北省、唐代鄂州江夏郡に屬す、鄂州と漢陽との間は四五十里を隔つ、猶是孤帆一日程漢陽の邊は方角は分明なるも而かも一日の程はある、水行なれば孤帆と云ふ、估客は商人なり、論價を估と云ふ、晝眠知浪靜浪が高ければ安眠する能はず、商人共船中無聊にて皆眠るは畢竟浪平らかなるに由る、舟人夜語覺潮生夜に入て篙夫共が高聲に談話するは定んで潮波の生ずる爲ならん、三湘は湘潭と湘鄉と湘源と也、愁鬢逢秋色鬢毛の白くなりたるを秋色に逢ふと云ふ、愁は白髮を生ずる本と爲す、萬里は遠方を指す、必ず里數ならず、歸心對月明月に對する故に愁鬢を見る、愁鬢を知るに依て明月に對するを恥づ、舊業は舊里の別業卽ち別莊なり、已隨征戰盡安祿山の亂後と肅宗が兩度の征戰に逢うて別莊なぞ燒棄せらる、更は「其の上」の意味、堪江上鼓鼙聲永王璘が兵、漢陽邊まで攻略したるを旅中に聞く、鼓鼙卽ち戰鼓の聲を聞くに堪へんや、

【評論】 此の篇、前半四句、鄂州舟中所見の景、五六は己に就ての情、七八は天下に就ての情を叙す、杜甫の風骨を帶び甚だ名篇とす、

赴武陵寒食次松滋渡

竇常

杏華楡莢曉風前　雲際離離上峽船　江轉數程淹驛騎
楚曾三戸少人煙　看春又過淸明節　算老重經癸巳年
幸得杜山當郡舍　在朝長詠卜居篇

【句釋】 武陵寒食共に前に辨せり、松滋渡は江陵府、松滋縣なり、武陵卽ち湖南へ赴むく途中、寒食に逢うて湖北の松滋渡に宿泊せしなり、杏華は「アンズ」の華、楡莢は楡は「ニレ」莢は草の實なり、曉風前杏は開き楡は生ずる時節、曉風の前に松滋渡に至る、雲際は高處を云ふ、離離數船が連續して上峽船峽は漸漸に地理高くなる、上る所以、低處より高處へ遡るなり、江轉數程江路宛轉すること數里、淹驛騎郵便配達夫を淹滯させる、路の險且長きを云ふ、或人「驛路の騎馬が往來するも淹つて見えざるなり」と云ふ非常に誤まる、淹と覆ふとは異なる、楚曾三戸『史記』に楚の南公曰く楚三戸なりと雖も、秦を亡す者は必ず楚ならんと、果して楚の項羽之を

亡ぼせり、今唯其の文字を借り松滋渡の寒食寂莫たるを形容するのみ、亡ぼす亡ぼさざるには關係無し、少人煙人多く住せざるなり、看春又過清明節寒食の前三日を清明節と云ふ、人家皆其の先墓に香火を送り祖靈を祀る、一種の哀愁を感ずるの時なり、算老重經癸巳年憲宗の元和八年卽ち癸巳なり、竇常は玄宗の天寶十二年に生れたり、是の年を癸巳とす、一生の中に二度癸巳を經、重經と云ふ所以、年六十一なること知るべし、幸得杜山當郡舍水部員外郎の官より轉じて今朗州の刺史となる、其の朗州の郡舍の前には杜山なる山あり、以て吟看するに足る、在朝は郡舍に在て政治を執り乍らの意味、長詠卜居篇屈原が昔し卜居詞を作る、余も亦之に倣うて何處へ行くとも此の卜居篇を作り高尚の志を變せずとなり、中央の都に在て政務を執るをのみ在朝と見る者は狹し、

【評論】此の篇、前半景後半情、四句に楚を出し、結句に楚辭の語を用ふ、以て脈路の正しきを見る、

鄂州寓嚴澗宅

元稹

鳳有高梧鶴有松　偶來江外寄行蹤　華枝滿院空啼鳥

塵榻無人憶臥龍　心想夜聞唯足夢　眼看春盡不相逢
何時最是思君處　月入斜窗曉寺鐘

鳳に高梧あり鶴に松あり、偶ま江外に來つて行蹤を寄す、華枝滿院空しく啼鳥、塵榻人の臥龍を憶ふ無し、心に夜の聞なるを想うて唯夢みるに足れり、眼に春の盡るを看て相逢はず、何れの時か最も是れ君を思ふ處、月は斜窗に入る曉寺の鐘、

【句釋】鄂州は前に辨ず、元稹は此の鄂州節度使の官となり、來て嚴澗が宅に寓居する、有と用ひて在と用ひず、梧は鳳の所有、松は鶴の所有、鳳凰が黃帝の東園に止まり、梧桐の上に集まり竹實を食ふこと古來の傳說なり、鶴と松、仙島の傳說、偶來江外楊子江外卽ち武昌、武昌は卽ち鄂州、寄行蹤暫らく嚴が宅に我が行蹤を寄托する、華枝何の華と云ふにあらず單に泛稱す、滿院空啼鳥古今來の注多く「啼鳥空し」と訓ましむ、今謂く然らず「空しく啼鳥」なり、啼鳥も空しと謂ふにはあらず、語る友無く、唯空しく啼鳥のみあるを謂ふ、華枝は滿院なるが啼鳥は空しと見るは意義通せず、塵榻は嚴澗が生前用ひし榻も今は塵に委ねてある、無人憶臥龍蜀

漢の諸葛武侯を以て嚴澗に比するなり、何人も嚴澗の偉人たりしを憶ひ出る者今日は無し、心想夜閒唯足夢我獨嚴澗の偉なりし事を記す、夜閒なれば雜想は生せず、定んで嚴澗を見る夢あるならん、眼看春盡不相逢春此の如く好し、而かも嚴澗には逢ふを得ず、何時最是思君處平常思はざるにはあらず、而かも最も强く思ふ處は月入斜窗曉寺鐘月落ち西窗夢醒む五更の頃、山寺の鐘聲聞ゆ、是れ最も我が君を思ふ情を刺激する時なり、

【評論】　此の篇、鳳と鶴とを以て暗に自比し、臥龍を以て嚴の人物を比す、野口寧齋は「孔明の事前後に關係無きなり」と『蜀志』を讀まざるか、伏龍鳳雛の語は有名なる者ならずや、龐士元は鳳雛ならずや、古人は全く關係なき一句孤立の語は作らざるなり、此の篇は景情合致して分離すべからざるものとす、

九日齊山登高　　杜牧

江涵秋影雁初飛　與客携壺上翠微　塵世難逢開口笑
菊花須挿滿頭歸　但將酩酊酬佳節　不用登臨怨落暉
古往今來只如此　牛山何必獨沾衣

江は秋影を涵して雁初めて飛ぶ、客と壺を携へて翠微に上る、塵世逢ひ難し口を開いて笑ふに、菊花須らく滿頭に挿して歸るべし、但酩酊を將て佳節に酬いん、用ひず登臨して落暉を怨むことを、古往今來只此の如し、牛山何ぞ必ず獨衣を沾さん、

【句釋】　齊山は池州の貴池縣南五里に在り、杜牧か此の池州太守たりし時の詩、登高は前に辨せり、江涵秋影雁初飛秋の氣を知るは江水と雁聲とを以て最とす、黃州の南、大江に至る一百步、攜壺は菊花酒を携帶して山に登る、塵世は本集に人世に作る、難逢開口笑『莊子』に盜跖曰く上壽は百歲、中壽は八十、下壽は六十、病瘦死喪憂患を除き、其の中、口を開いて笑ふ者一月の中、四五日に過ぎざるのみ、菊花須挿滿頭歸『續神仙傳』に許碏、花を滿頭に挿み、花を把て舞を作し、酒家の樓に上りて醉歌すと、今宜しく此の許碏を學ぶべしとなり、但將酩酊、酩酔、沈酔、酔極を酩酊と云ふ、十二分に酔ふなり、酬佳節此の九日を懽迎する、不用登臨怨落暉晉の陸機は「大壑落暉を嗟す」と云ふ、今謂ふ落暉を嗟するにも怨むにも及ばず、但沈酔せよと放言す、古往今來只如此此の世のあらん限り、人事は大抵同じ、喜笑憂患を宛轉するに過ぎ

す、牛山何必獨沾衣『元和郡縣志』に青州臨淄縣の牛山、縣南二十五里に在り、齊の景公、牛山の上に游び、北の方、齊を望んで曰く美なる哉國乎、古より死無からしむれば、則ち寡人將に此を去て何くに之んやと。俯して泣き襟を沾す、事『韓詩外傳』に見ゆ、今の詩意、齊の景公のみならず、天下皆然らざるは無しとなり、

【評論】此の篇、牧之の面目彰彰たり、官吏と爲て猶ほ此の放言す、牧之の牧之たる所以、齊山に登るを以て景公の事を叙す、筆力扛鼎と謂つ可し、

贈王尊師　　姚合

先生自說瀛洲路　多在青松白石間　海岸夜中常見日
仙宮深處却無山　犬隨鶴去游諸洞　龍作人來問大還

今日偶聞塵外事　朝簪未擲復何顏

先生自ら說く瀛洲の路、多くは青松白石の間に在りと、海岸夜中に常に日を見る、仙宮深き處却て山なし、犬は鶴に隨ひ去て諸洞に游び、龍は人と作り來て大還を問ふ、今日偶ま聞く塵外の事、朝簪未だ擲たず復何の顏

ぞ、

【句釋】王は姓、尊師は敬稱、卽ち道士なり、先生王を云ふ、自說瀛州路仙を學ぶ者は、佛の淨土を說く如く必ず瀛州と方丈と蓬萊との三山を說かざるべからず、其の仙人の住する瀛州の路は、多在青松白石間先生が青松白石の間に在て說く、又仙の瀛州の路、青松白石の間に在ると解しても通ずるなり、海岸夜中常見日王が談話此より進む、瀛州は海中に在れば、其の海岸人世未だ曉けざるに日は已に上る、仙宮深處却無山仙島は廣大なる山なるも正しく仙人の住樓は山の看を作さず、平地の看を作す、五步に一樓、十步に一閣、佛敎の極樂淨土の七重羅網、五重樓閣と同じく莊嚴美麗なり、犬隨鶴去游諸洞仙犬や仙鶴は爭ふ所無し、同游同娛す、龍作人來問大還海底の龍王は人身と化し來つて大還丹卽ち仙藥を煉る法を問ふ、佛敎に龍王人と作り來りて佛陀の妙法を說くを聞くと同一なり、今日偶聞塵外事塵中は人間、塵外は仙宮なり、朝簪は官吏、簪は「カンザシ」高官も低官も此の時代簪を以て位階の記章とす、未擲復何顏仙道の好きを聞く毎に、其の道を慕ふの念は生ずるも、人間の慾念を離れて小官を辭する勇氣は尙未だ生ぜず、尊師に對するの面目無しと云ふ意なり、

【評論】此の篇、前六句悉く仙人の事を叙し、七八の二句我が情に歸宿す、起句の借韵に就て

云云する者、強て論を設くるのみ、古人止むを得ずして用ふ、必ずしも巧を求めん爲にはあらず、

贈王山人　　許渾

貰酒攜琴訪我頻　始知城市有閒人　君臣藥在寧憂病
子母錢成豈患貧　年長每勞推甲子　夜寒初共守庚申
近來聞說燒丹處　玉洞桃華萬樹春

酒を貰り琴を攜へて我を訪ふこと頻なり、始めて知る城市に閒人あることを、君臣藥在り寧ぞ病を憂へんや、子母錢成つて豈貧を患へんや、年長じて常に甲子を推すに勞す、夜寒くして初めて共に庚申を守る、近來聞くならく丹を燒く處、玉洞の桃華萬樹の春、

【句釋】王山人大和六年に長安に在て作る、山人來て許渾が家を訪ふ、許未だ山人の家に到らず、其の心結句に看えたり、貰酒貰は音「シヤ」訓は「オギノル」「カル」「オモンバカル」賒なり貸なり恕なり、乃ち酒を王が許に吳れる事なり、攜琴訪我頻酒と琴とを持して許を訪問す、始知

は許が知る、城市有閒人閒人は尋常輕蔑の意味に用ふる者多けれど大なる誤謬なり、餘裕ある人を稱する語、君臣藥は藥の名詞とす、君臣佐使の法あり、山人此の藥法に精通するを稱す、寧憂病病は憂ふるに足らず、山人に治を請へば直ちに病を愈すことを得、子母錢は錢の名詞とす、『搜神記』に靑蛉は蟬に似て稍大、子を草間に生む、蠶の如し、其の子を取れば母飛來る、母の血を以て錢八十一文に塗り、子の血を以て錢八十一文に塗る、物を市ふ毎に先母錢を用ひ或は子錢を用ふれば、皆復飛來る、此の如くして循還して止む無し、是を子母錢と云ふ、山人は此の錢を用ふるならん、豈患貧貧なるを患ふる理は無きなり、年長每勞推甲子此の句は許が自身の事を云ふ、人が許に向つて君は何歲に爲りしやと問ふ場合、其の返答に辛勞するの意、甲子は「トシ」なり、夜寒初共守庚申此の庚申の事は道家より出し法、佛敎徒は道家より此の法を竊みしなり、『西陽雜俎』に曰く凡そ庚申の日、三尸人の過ちを言ふ、七たび庚申を守れば三尸滅す、三たび庚申を守れば三尸伏すとあり、唐以前より起りしものの如し、近來聞說燒丹處聞說の說の字は語助、聞の字を助けるのみ「ナラク」と訓す、卽ち聞くなり、說又は道又は言を以てす、近來丹を燒き居ると云ふとを聞くなり、玉洞は仙人の住する洞、王山人の居を云ふ、桃華萬樹春明の季昌曰く許棲筠、下第して劍閣を出るとき馬より墮つ、太乙の元君素が室に至

る、玉洞に碧桃萬樹あり二女に命じて飲ましむるに玉髓を以てすと、此の事を借りて以て王山人を云ふ、

【評論】此の篇、甲子對を以て尤も佳なるものの一なり、許渾より以前、溫庭筠が詩に風捲二蓬根一屯二戊己一、月移二松影一守二庚申一とあり、此の詩は諸道友と夜坐邊防を聞て寧からず因て同志に示す七律の前聯なり、明の謝四溟は半嶺餐霞延二甲子一孤燈照夜守二庚申一は此の詩の韵に次したるもの、其の巧拙の判斷は人自から知るべきなり、

湘中送二友人一

李　頻

中流欲レ暮見二湘煙一　岸葦無レ窮接二楚田一　去雁遠衝雲夢雪
離人獨上洞庭船　風波盡日依レ山轉　星漢通宵向レ水連
零落梅華過二殘臘一　故園歸去醉二新年一

【略傳】李頻字は德新、睦州壽昌の人、太中八年進士、祕書郎に調せらる、南陵主簿、武功令、侍御史、都官員外郎、工部郎中、建州刺史等の官を經て卒す、

【句釋】湘中は三湘、中流欲暮見湘煙友人を送りて湘中にて直看する景を言ふ、葦は「アシ」接楚田湘は吳なり、其の吳中の葦が盛んに生じて楚國の田に接近する、去雁遠衝雲夢雪湘中より望む、雲夢澤の邊を歸雁が高飛する、離人は友人、獨上洞庭船歸處は分明ならざるが、洞庭湖より船に乘るなり、風波盡日依山轉正に是れ三峽の實況、水路を云ふ、星漢通宵向水連天河は通宵水に連なる如く、水天一色、分ち難きを言ふ、零落梅花江南地暖かなるを以て梅華は已に臘月に落つ、過殘臘は臘と同じ、十二月なり、故園歸去醉新年故園に達せらるる頃は早新年ならん、

【評論】此の篇、徹頭徹尾、友人を送るの情を叙し、自身の事は聊かも言はず、七句に殘臘の文字あり、此の字を以て自身が此の湘中に在て殘臘を過すことを知るべし、李は姚合が女壻、岳父と共に、詩苑の麗才と爲す、

元達上人種藥

皮日休

雨滌煙鋤偃二破籬一　紺芽紅甲兩三畦　藥名却笑桐君少

年紀翻嫌竹祖低　白石淨敲烝朮火　清泉閒洗種華泥

惹來昨日休持鉢　一尺雕胡似掌齊

雨に滌ぎ煙に鋤いて破籬に偃す、紺芽紅甲兩三畦、藥名却て笑ふ桐君の少なきを、年紀翻つて嫌ふ竹祖の低きを、白石淨く敲く朮を烝すの火、清泉閒に洗ふ花を種うるの泥、惹み來る昨日持鉢を休めしことを、一尺の雕胡掌の齊しきに似たり、

【略傳】皮日休字は襲美一の字は逸少、襄陽の人、咸通八年の進士、一に云ふ咸通中、太常博士と爲り亂に逢ひ吳中に歸る、黃巢、江浙に寇す、劫すに從軍を以てし、京に至り僞翰林學士と爲り識を作ると、陸龜蒙と幷稱して皮陸と云ふ、

【句釋】元達上人は僧なること分明、傳は未詳、種藥漢士は僧と道士と共に藥を製するを以て副業とす、雨滌煙鋤偃破籬雨にも煙にも藥苗の畝を畊作する、偃は伏なり、藥畝に起臥する意味、紺芽深青色を紺と云ふ、紅甲甲は芽が甲冑を服たる如く實をかつぎて生ずる狀、紺と紅とは共に草の色、芽と甲とは草の態、兩三畦畦は「ウネ」田五十畝なり、藥名却笑桐君少天隱曰く

桐君山は嚴州に在り、人あり藥を採り、廬を桐木の下に結んで姓と爲す、故に山も名を得たりと、此の桐君より上人の藥艸は多く種う、年紀翻嫌竹祖低「竹譜」に云ふ竹祖は最初種る所の竹、『漢武帝内傳』に封君達は隴西甘肅省の人、青牛師と號す、水銀を服す、百餘年にして鄉里に還る、二十の人の如し、常に青牛に乘る、路上死者あれば便ち竹管の藥を以て之を救ふ、或は針を下せば手に應じて皆活く、人呼んで竹祖と爲す、此の竹祖より上人の方が長壽なりとの意、白石淨敲烝朮火朮は藥名、蒼朮と白朮の二種あり、白石を敲きて火を取り之を烝して製す、清泉閒洗種花泥花を清泉にて洗ひ其の泥の汚れたるを去る、惹來來は助字、惹むの字を助く、昨日休持鉢村里に出て鉢に食を乞ふが僧の本分、然るに上人は昨日村里に食を乞はず、一尺雕胡似掌齊昨日行乞せざる理由が判然したり、其れは他にあらず、『本艸』に菰米臺中黑き者之を茭鳥と謂ふ、實を結ぶときは乃ち雕胡黑米なり、此の雕胡が掌ら大に成りて最早や食ふに足る、故に上人は昨日出ざることを知り得、

【評論】此の篇、僧の僧たる所以を全く言はざるは皮が佛學無き所以、僅かに持鉢の二字のみにて僧たるを表し、餘の文字悉く藥に關す、佛典にも藥艸に關すること多し、桐君や竹祖の故事以外に用ふるものあり、僧に贈るには僧に關する事の切なるを要す、箇は獨皮に於て言ふな

らず、天下詩人に望む所なり、早秋京口より此に至る九首、四虚の中に前聯多く虚實相兼る法なり、例せば去雁遠衡、離人獨上の如き語は實にして意は虚なり、餘皆此の類、

前虚後實

周弼曰く其の說五言に在り、但五言は人多く意を頸聯頷聯の分に留めて或は之を守ること大に過ぐ、七言に至りては則ち自ら其の說を廢す、音節諧婉なるもの甚だ寡なし、故に此を標し以て識者を待つ、

黃鶴樓　　崔顥

昔人已乘白雲去　此地空餘黃鶴樓　黃鶴一去不復返
白雲千載空悠悠　晴川歷歷漢陽樹　芳草萋萋鸚鵡洲
日暮鄉關何處是　煙波江上使人愁

昔人已に白雲に乘じて去る、此地空しく餘す黃鶴樓、黃鶴一たび去つて復返らず、白雲千載空しく悠悠、晴川歷歷たり漢陽の樹、芳草萋萋たり鸚鵡洲、日暮鄉關何れの處か是なる、煙波江上人をして愁へしむ、

【略傳】崔顥は汴州の人、開元の進士、天寶中に司勳員外郎を以て終る、

【句釋】黃鶴樓の起源に就て異說多し、今一說の正と思ふものを取る、江夏郡の辛氏、酒を沽るを業と爲す、一先生魁偉なるあり、縷縷にして座に入り、辛に謂て曰く好酒の吾に飲すべきありや否や、辛飲ますに巨盃を以てす、明日復來る、辛索むるを待すして之を與ふ、此の如くすること半歲、辛倦意無し、一日辛に謂て曰く多く酒債を負ふ、錢の汝に酬ゆる無し、遂に小籃の橘皮を取て、壁に於て鶴を畫て曰く、客來つて酒を飲むとき但手を拍て之を歌はしめば、其の鶴必ず舞ん、此を將て酒債を酬んと、後、客至るとき其の言の如くす、鶴果して翩躚として舞ふ、回旋宛轉として良とに音律に中る、橘皮に畫く所なるが爲め色黃なり、人之を黃鶴と謂ふ、之を異とせざるは莫し、覩んと欲する者千金を費す、十年の間、家巨萬を置く、一日先生至て曰く向に酒を飲しむ、答ふる所薄きや否や、辛謝して曰く先生の畫鶴に賴て今は百倍に至る、如し少らく留まらば當に家を擧て供備洒掃すべし、先生笑て曰く吾豈此を爲さん、笛を取り吹こと數弄、須臾にして白雲空より下り、畫く所の鶴、先生の前に飛ぶ、遂に鶴に跨がつて雲に乘じて去る、辛氏後に飛昇の處に樓を建て黃鶴樓と名く、湖北省武昌府黃鵠磯上に在り、昔人は鶴を畫きたる仙人、乘白雲を一本乘黃鶴に作る、此の方を可とす、此地は武昌の黃鵠磯を云ふ、空餘仙人は已に去て久し、空しく餘す所は黃鶴樓のみ、黃鶴一去不復返樓は有り鶴は無

し、白雲は有り昔人は無し、一去返らざるを惜み、千載悠悠たるを慨す、此の二句十四字全く古詩の體、不復返と空悠悠と仄聲と平聲とを以て意を對し、語を對せず、晴川は漢江の流を云ふ、歷歷は水行の形容詞、又文明なるものの形容詞、漢陽樹漢陽府は武昌府に接近して一江を隔つるのみ、故に此の府城の樹木が歷歷明明見るなり、芳草は春艸なり、萋萋は凄凄に作る本あり、一色普遍なるを云ふ、鸚鵡洲は武昌に屬す、江夏の西、大江中に在り、後漢末に黃祖が禰衡を殺しし處、衡嘗て『鸚鵡賦』を作る、殺されたる一因たり、故に此の名あり、日暮鄉關何處是漢陽も鸚鵡洲も明らかに認むるを得、而して鄉關は認め得ず、何れの方面ぞや、煙波江上使人愁人は崔顥自身を云ふ、愁は鄉關に對するのみならず總じて全體を云ふ、

【評論】此の篇、千古の絕調として、前に古人無く、後に來者無し、詩聖を以て千古の大宗たる李翰林ですら筆を投じて及ぶべからざるを嘆ず、況んや李以下の詩人に於てをや、李之に擬して金陵鳳凰臺の詩を作る、宋の方虛谷は未〻易二甲乙一と評したるが、篇法の正しきは李を以て甲となす、氣力の雄偉なるは崔を以て甲と爲すべし、起句に乘白雲とあるを紀曉嵐の評に「白雲と爲す則は三句の黃鶴根無し」又曰く偶爾に之を得て自から絕調を成す、然れども一無かる可らず、二有る可らず、再一臨摹すれば便ち窠臼と成る、紀評頻る當るを覺ゆ、李白が「鸚鵡

洲」の詩其の窠臼と成ること見るべし、曰く鸚鵡東過す吳江の水、江上洲は傳ふ鸚鵡の名、鸚鵡西のかた隴山に飛で去る、芳洲の樹何ぞ青青たる、煙開いて蘭葉香風暖かに、岸桃花を夾んで錦浪生ず、遷客此の時徒らに目を極むれば、長洲の孤月誰に向つて明かなる、李の大才を以てしても到底、崔が上に出る能はず、崔が此の詩は天與にて人力にはあらずと謂ふべし、

自蘇臺至望亭驛人家盡空　　李嘉祐

南浦菰蒲覆白蘋　東吳黎庶逐黃巾　野棠自發空流水
江燕初歸不見人　遠樹依依如送客　平田渺渺獨傷春
那堪同首長洲苑　烽火年年報虜塵

南浦の菰蒲白蘋を覆ふ、東吳の黎庶黃巾を逐ふ、野棠自ら發いて空しく水に流れ、江燕初めて歸つて人を見ず、遠樹依依として客を送るが如く、平田渺渺として獨春を傷む、那ぞ首を長洲苑に回らすに堪へん、烽火年年虜塵を報ず、

【句釋】蘇臺は蘇州の姑蘇臺、肅宗の時、劉展、張景の二人亂を爲し、大に浙西を擾す、此の

詩、其の時作る、人家盡空一驛燒盡して、人全く住せず、南浦は吳江の南浦、菰蒲は水草、覆白蘋白蘋の佳なるもの菰蒲の惡草に隱覆せらる、東吳は蘇州なり、黎庶は民衆なり、逐黃巾東吳の人が協力して賊徒を逐ひ掃ふ、後漢末の黃巾賊の名を借る、野棠自發空流水人の賞する無し、花空しく水に流れ去る、江燕初歸不見人人の住する無し、燕空しく歸る、遠樹遠く見ゆる樹林、依依は多義あり、茂盛の形容、又丁寧の形容、又愁思の形容、今愁思の形容とす、如送客『毛詩』に昔し我往き矣、楊柳依依と、樹も愁思を以て客を送る、狀態ある如し、平田渺渺田には水のみ渺渺たり、獨傷春田水も春を傷むが如し、長洲苑は姑蘇の南、太湖の北に在り、絕佳の地とす、而かも亂後は首を回らし看るに忍びず、荒涼たればなり、烽火は兵火、年年報虜塵長洲苑に於て烽火を揚げ以て虜の侵入を報ず、

【評論】此の篇、對を以て起し、勁拔比無し、「京口旅泊」と共に傷心の作とす、

與僧話舊　　劉滄

巾烏同時下翠微　舊游因話事多違　南朝古寺幾僧在
西嶺空林唯鳥歸　莎徑晩煙凝竹塢　石池春水染苔衣

此時相見又相別　卽是關河朔雁飛

巾舄時を同うして翠微を下る、舊游話に因て事多くは違ふ、南朝の古寺幾僧か在る、西嶺の空林唯鳥のみ歸る、莎徑の晩煙竹塢に凝り、石池の春水苔衣を染む、此の時相見て又相別る、卽ち是れ關河朔雁飛ぶ、

【略傳】劉滄字は蘊靈、魯の人、太中間の進士、詩家の所謂晩唐の作家、

【句釋】與僧話舊方外の友と再會して事を話す、巾は儒巾、劉滄が頭に戴く物、舄は僧舄、僧が足に穿つ物、同時下翠微二人一所に山を下りて來る、舊游因話事多違詩人も沙門も東西に離散せるもあり、死歿せるもあり、昔と相違する事多し、南朝は金陵、古寺幾僧在金陵に都せし天子は大抵佛敎に歸依し、寺を建るもの多し、然るに會昌年に武宗は寺院を燒き、僧をして還俗せしむ、今日は幾僧か此に住するや、西嶺空林唯鳥歸南朝に對して西嶺と云ふ、日暮ならざれば鳥は歸らず、故に通泛に西嶺と用ひしなり、石川鴻齋は印度を指すと滑稽の極なり、莎徑莎艸の徑路、晩煙凝竹塢竹塢に晩煙が凝結して散せざるなり、石池春水染苔衣苔の形は衣紋を作す、其の苔色を濃に染むるものは春水なり、此時相見又相別偶ま會うて又直ちに別る、佛敎の

會者定離の義を含む、卽是關河朔雁飛相見て相別るる時、其の時節を言へば關河千里、北雁の歸る時なり、

【評論】此の篇、方外に贈る詩として上乘なるものに屬す、中唐の詩境、到底晩唐の詩とは思へず、南朝の十四字は違ふの意を叙し、莎徑の十四字は今の所見、而して愴然の氣、字字句句の間に在り、余は最も此等の詩を愛吟す、

長洲懷古

野燒空原盡荻灰　吳王此地有樓臺　千年事往人何在
半夜月明潮自來　白鳥影從江樹沒　淸猿聲入楚雲哀

停車日晩薦蘋藻　風靜寒塘花正開

野燒空原盡く荻灰、吳王此地に樓臺あり、千年事往て人何くにか在る、半夜月明らかにして潮自ら來る、白鳥の影は江樹に從つて沒し、淸猿の聲は楚雲に入つて哀しむ、車を停めて日晩蘋藻を薦むれば、風靜にして寒塘花正に開く、

【句釋】　長洲は吳王闔閭の游苑、今其の荒狀を叙す、野燒野火が燒き盡す、空原池も無く樹も無し、盡荻灰蘆荻の燒けたる灰のみ存す、有樓臺昔し吳王の樓臺有りしを言ふ、今は亡し、千年大數なり、事往人何在人は主として吳王、客として宮女なぞも含む、粉黛も金冠も灰滅して有ること沒し、半夜月明潮自來楊子江海門の潮が來るを月下に見るのみ、白鳥は白鷗、江樹の影に沒す、是れは晝間なり、淸猿は聲の淸るを云ふ、猿聲は楚地の雲中に入て哀しむ、是れ夜間なり、停車日晩薦蘋藻祖廟や王廟へは禮式として蘋藻を供薦するが漢土古代よりの事、吳王の靈に薦む、風靜寒塘花正開花一枝以て其の靈を弔す、

【評論】　此の篇、第三句と第六句と夜を叙し、其の餘は大抵日暮を叙す、素隱和尙は作者は魯人、吳は姬姓にて、魯と同姓、劉滄の意に吾が故國の同姓じやと思うて吳王の廟に蘋藻を薦めたるぞと、淸の紀曉嵐曰く夫差等の如き、皆祀るべき處無し、此れ直湊の句のみと、薦蘋藻の三字を難ず、沈歸愚も、亦罵しる、余案ずるに劉が意は定めし素隱の解する如くならん、然らずんば、何ぞ此の語を爲さんや、寧齋は冷熱相襯して空原荻灰も亦因りて著落有りと、此の如くにして古人を救はんと欲す、其の心地は可し、詩道よりは不可なり、

煬帝行宮

此地曾經翠輦過　浮雲流水竟如何　香銷南國美人盡
怨入東風芳艸多　殘柳宮前空露葉　夕陽江上浩煙波
行人遙起廣陵思　古渡月明聞棹歌

此地に曾て翠輦の過ぐることを經、浮雲流水竟に如何、香は南國に銷して美人盡き、怨は東風に入つて芳艸多し、殘柳宮前露葉空しく、夕陽江上煙波浩たり、行人遙かに起す廣陵の思、古渡月明にして棹歌を聞く、

【句釋】　煬帝行宮季昌が注に煬帝汴河を開き艦を泛べ江都の游を爲す、頂昇、新宮の圖を進む、帝之を愛して圖に卽て營建すと、長安を去て、江都に游ぶなり、此地は江都、又東都、武后は神都、晉は西京、五代梁は西都、金は中京、今日の河南省河南府なり、曾經翠輦過天子の乘車を翠輦と云ふ、煬帝の盛時を叙す、浮雲流水百年の榮華、唯是れ一夜の夢、竟如何浮雲は神女の故事、流水は娥皇女英を指すと、素隱の說、亦如何ともする無し、香銷は美人の衣帶なぞに付ける麝香の類、南國は江都、江都は古の越國、越は南方なればなり、美人盡越國は美人多く產する有名の地、煬帝が愛したる美人も今日は悉皆亡し、怨は寵を得ざる美人の怨恨、入

東風芳艸多今日青青として生ずる草は皆な是れ美人怨魂の化するものならん、殘柳宮前空露葉煬帝が長安より江都に至る數百里の間に種し楊柳も、空しく露が葉を沾す、葉が已に空しと見るも亦可、夕陽江上浩煙波煙波のみ浩として江上の夕陽に反映するを見る、行人は旅行の人、劉自身なり、遙起廣陵思晉の嵇中散は東市に斬られし時、廣陵秘曲を奏したり、今我隋皇の末路を想へば、豈此の廣陵の思ひを起さざらんや、素隱の廣陵を故郷と解するは非常に誤る、古渡月明聞棹歌煬帝自ら水調歌を作り多くの美人に歌はしむ、今月明の下、兒女等が棹歌を聞く、當年亡國の因由を思うて感慨を發したるなり、

【評論】此の篇、紀曉嵐の評に、亦是れ許渾懷古の流、此の種の詩、風韻に似て、實は則ち俗、醫すべからず、沈歸愚は曰く典雅誦す可しと、紀評の俗は抑に過ぐ、沈評の典雅は揚に過ぐ、懷古詩として尋常一樣の看を作して足る、劉は此の詩に於て此地の字あり、咸陽に於て經過此地あり、長洲に於て吳王此地あり、以て其の變化の才に乏しきを知るべし、許渾は其の才力を論ずれば遙かに劉が上に在り、

經故丁補闕郊居　　許渾

死酬知己道終全　波暖孤冰且自堅　鵬上承塵纔一日　鶴歸華表已千年　風吹藥蔓迷樵徑　水暗蘆花失釣船　四尺孤墳何處是　闔閭城外草連天

【句釋】故は故人、死せし人、丁は姓、補闕は官名、右補闕、左補闕の二人あり、供奉諷諫を掌る、郊居は郊外の居、死酬知己道終全、士は知己の爲めに死すと『史記豫讓傳』にあり、丁は死を以て其の知己の恩に酬いしならん、友道終に全きを得、波暖は多數人間の輕薄を云ふ、孤氷は丁を譬ふ、且自堅氷は結んで解けず、甚だ堅固なり、鵬は「ミミヅク」なり、上承塵『搜神記』に長安の張氏室に居る、鵬有り床に上る、張氏祝して曰く、禍たらば卽ち飛で承塵に上れ福たらば卽ち飛で我が懷に入れと、承塵は壁衣なり、網の如き物、俗に「チリヨケ」なり、纔一日丁は知己の爲め自殺でも爲したるものならん、蓋し其は一日の事なり、鶴歸華表已千年曾て

丁令威が鶴に化して華表即ち日本の鳥居に類するものに歸り止まる、丁の姓同じきを以て之を言ふ、死は一日にして名は千年との意なり、風吹藥蔓迷樵徑生前種置し藥草の蔓が長じ風の爲めに吹かれ其の樵徑すら分ち難し、水暗蘆花失釣船水中は蘆花が得意に茂りて釣船の何處に在るや知り難し、四尺孤墳何處是墳に就て三尺四尺、定法無きが如きも、孔子は其の母墳を封して四尺と爲すと、今丁が四尺の墳は何處ぞや、闔閭城は吳なり、草連天草青青として知るに由無きなり、

【評論】此の篇、前半は正しく丁の事を叙し、後半は今見る所の景を叙す、傷悼の言、自から人を動かすに足る、紀曉嵐と雖も一字も議するもの無し、

贈蕭兵曹

李嘉祐

廣陵堤上昔離居　帆轉瀟湘萬里餘　楚澤病時無鵬鳥
越鄉歸去有鱸魚　潮生水國蒹葭響　雨過山城橘柚疎
聞說攜琴兼載酒　邑人爭識馬相如
廣陵堤上昔し離居す、帆は瀟湘に轉ず萬里の餘、楚澤病時鵬鳥無し、越鄉

歸る處鱸魚あり、潮は水郭に生じて蒹葭響き、雨は山城を過ぎ橘柚疎なり、聞くならく琴を攜へ兼て酒を載すと、邑人爭でか識ん馬相如、

【句釋】蕭は姓、兵曹は官名、州郡に屬隷する役、廣陵は江蘇の揚州府江都なり、堤上昔離居蕭は越の生地を離れて江蘇の江都に來り住したるなり、帆轉瀟湘萬里餘帆を轉じて廣陵より、更に楚國の邊へ居を移されたるなり、楚澤病時無鵬鳥縱令ひ楚澤にて屈原の如き病に罹ることはあるも、賈誼の如く鵬鳥の禍には逢はざるなり、漢の賈誼が長沙に謫せられし時、鵬あり來つて賈が舍中に入て其の承塵に上る、之を占ふに野鳥室に入て主人將に去んとするの卦を得たり、賈誼は年壯にして忽ち死したり、蕭は之れ無し、越鄉歸處有鱸魚越は本揚州なり、晉の張翰が秋風に鱸魚を懷ふの故事を以て蕭に喩ふ、潮生水郭蒹葭響兵曹が歸隱する處の景色は水郭にて潮聲來るときは蒹葭の響が起る、雨過山城橘柚疎山城の邊は雨の過る毎に橘柚が疎となる、聞說攜琴兼載酒兵曹は琴も彈じ酒も飮む風流を解する人なり、邑人爭識馬相如邑人は兵曹が漢の司馬相如の如き人なるを識らず、尋常人を以て遇するを慨するなり、要は知己に遇はざるを惜むなり、司馬相如臨邛の令の處に至る、其の邑の富人卓氏なるもの相如を招て宴を開き饗せ

しことあり、時に相如琴を鼓して、卓氏の女文君を挑む、遂に相如、文君を攜へて爐に當て酒を沽らしむ、今又蕭氏琴を鼓し、又學力も相如に劣らざる者なれど、邑人は竟に相如の如き兵曹を識らずと嘆ず、

【評論】此の篇、一本許渾の作とす、黃鶴樓より此に至る九首、前人解して曰く前虛の二句は體面實を帶びて情思老古なり、後實の二句は景意實を著くると雖も體面流麗なるものなり、

酬張芬赦後見寄　司空曙

紫鳳朝銜五色書　陽春忽布網羅除　已將心變寒灰後
豈料光生腐草餘　建水風煙收客淚　杜陵華竹夢郊居
勞君故有詩人贈　欲報瓊瑤愧不如

紫鳳朝より銜む五色の書、陽春忽ち布いて網羅除かる、已に心の寒灰に變ずる後を將て、豈料らんや光腐草の餘に生ぜんとは、建水の風煙客淚を收め、杜陵の花竹郊居を夢む、君を勞して故らに詩人の贈りものあり、瓊瑤に報ぜんと欲して如かざることを愧づ、

【句釋】酬張芬赦後見寄張芬は傳不詳、司空曙が、時に謫せられ長沙に在り、偶ま大赦に逢うて長安の郊居に歸らんとして途江陵府に來りて泊す、張芬が詩を作り之に寄す、司空曙、和して作りしなり、流寓中志を玄門に寄せ、多く法師と交游す、紫鳳は木にて造れる鳳、朝銜五色書後趙の石虎が罪人赦免に就ての詔書は五色の紙を用ひ木鳳の口に銜ましめて頒布す、今司空曙が赦に遇うて乃ち此の事を用ふ、陽春忽布網羅除人の囚となり、流と爲るは、猶ほ鳥の網羅中に捕へらるるが如し、今赦免に逢ふは鳥の網羅を除かれて山林へ歸るが如し、陽春の字は活き反る意味、已將心變寒灰後流謫せられし當時は已に心が寒灰と爲て再び春に逢ふ如き事無しと思ひたり、然るに豈料は期せざりしを云ふ、光生腐草餘恩光が我が身に及びたるを云ふ、腐草化して螢と爲るの意を以て恩光の極めて微なるを云ふ、建水は江陵府荊門縣、風煙收客淚囚を脫して風景を見る、實に我を慰むるものの如し、客中の淚も收まらざるを得ず、杜陵は長安に在り、曙が郊居は此に在り、華竹夢郊居內面の意は杜陵郊居の華竹を夢に見るなり、身は未だ長安に至らず、心は已に至る、勞君俗語の君に心配をかけたと云ふこと、故は「コトサラニ」と訓む、有詩人贈詩を寄せられたるが故に詩人の贈りなり、欲報瓊瑤愧不如『毛詩』に『我に投ずるに木桃を以てし、之に報ずるに瓊瑤を以てす』と君が贈らるる所の詩は瓊瑤の如きも

のなれども、我は君に報ふるに瓦礫の如きものを以てす、如かざるを愧づと云ふ所以、

【評論】　此の篇、前六句は盡く我が情思を叙し、後二句は張に酬ゆることを叙す、寧齋は此の詩の一二七八を圈破せざるが、前後の關係上、圈せざるを得ざるなり、陽春の文字ありてより腐草の光生じ、紫鳳の字ありてより、瓊瑤の字活き、其の線脈の斷んと欲して斷す、作者工夫の深且大、察せざるべからず、

答賓拾遺臥病見寄　包佶

今春扶病移滄海　幾度承恩對白花
消愁已辦酒中蛇　瓶收枸杞懸泉水　鼎鍊芙蓉伏火砂
誤入塵埃牽吏役　羞將簿領到君家
今春病を扶けて滄海に移る、幾度か恩を承けて白花に對す、客を送つて屢ば聞く簷外の鵲、愁を消して已に辦ず酒中の蛇、瓶には枸杞懸泉の水を收め、鼎には芙蓉伏火の砂を鍊る、誤つて塵埃に入つて吏役に牽かる、羞らくは簿領を將て君が家に到りしことを、

【略傳】　包佶字は幼正、潤州延陵の人、包融が子、諫議大夫、刑部侍郎、秘書監を經て、丹陽公に封ぜらる、歿年未詳、

【句釋】　賓は姓、拾遺は官名、賓客なり、德宗の朝、左拾遺と爲る、扶病移滄海包は風痺の病に罹りて江東に轉地療養したるを云ふ、幾度は一再ならずの義、承恩賓客の爲めに恩を承けたるなり、對白花宮中の殿名を白花と云ふ、此の白花殿にて賓は拾遺の官、包は秘書監として日日相見え、種種と賓の情誼を蒙むりしを云ふ、送客屢聞簷外鵲此の句は滄海に移住せし時の事を云ふ、陸賈が『新語』に烏鵲噪いで行人至ると、病中に見舞人の歸るを送り、其の後復烏鵲の噪ぐを聞けば、又誰人か來りしかと疑ひ喜ぶ、而かも來らざるなり、消愁已辦酒中蛇賓が寄せられし詩を讀みて愁を消したり、之を譬ふるに、樂廣なる人あり、此の樂廣に親しき友あり、而かも久しく來らず、其の來らざる所以を友に問ふ、答て曰く前に酒を賜はることを蒙むる、盃中に蛇影あり、而して疾を得たり、是の時、廣が廳壁に弓あり、廣は謂ふ、友の蛇影と思ひしは、是れ弓影を見誤りしならん、乃ち酒を前處に置て問て曰く、見ること有りや否や、友曰く前の如し、乃ち弓影なることを言ふ、友豁然として頓に愈ゆ、今病の頓に愈ゆるは賓が詩を寄せられたればなり、瓶收枸杞縣泉水枸杞の根の深張して水に入りたるを飲めば壽命が長しと

の傳說あり、『續神仙傳』に朱孺子、溪に汲む、二華犬の枸杞叢中に入るを見る、之を掘れば根の形、二犬の如し、食うて身輕し千峯の上に飛ぶ」と、余も亦此の貴き水を瓶中に蓄ふと云ふ、枸杞は一名を仙人杖、又西王母杖、又地仙、又天精と云ふ、醫の之を用ふるは風疾を除き、精氣を補ふ爲めなりと、包は風疾の爲め此の水を飲む、鼎鍊芙蓉伏火砂光明砂の火の如くなる者を之を芙蓉砂と謂ふ、道家の經曲、大洞煉眞寶經に曰く丹砂を將て伏火を修煉す、後、鼓して白銀と成る一返、白銀を將て化して砂を出す、伏火之を鼓して黃金と爲す二返なり、今仙家の藥方を鍊るは、風疾を醫せんが爲めなり、誤入塵埃牽吏役包の初志は、塵埃外の道士と爲らんと欲したり、然るに事志しと違うて官吏と爲るは、卽ち是れ誤まりなり、羞將簿領到君家諸道鹽鐵の租稅を記錄したるものを簿領と言ふ、領は錄なり、包は鹽鐵使の官たりし時、此の張面を以て竇が家に到りし事あるなり、今日之を回顧すれば實に面目次第も無きとの意、鹽鐵は仙藥に用ふるものなれば、其の羞や一層深きなり、

【評論】此の篇、病中、安心立命の境を叙して全く遺憾無し、前後二聯共に仙家の故事を運用して、字鍊り、句研して、眞に妙處に達す、而かも包は此の風痺の爲め歿したり、憐むべし、風痺は醫書に手足痿痺を以て仁ならずと爲すと、俗に中風と云ふ、手足が自由にならざるを不

仁と云ふ、

寄樂天

元稹

榮辱升沈影與身　世情誰是舊雷陳　唯應鮑叔偏憐我
自保曾參不殺人　山入白樓沙苑暮　潮生滄海野塘春
老逢佳景唯惆悵　兩地各傷無限神

榮辱升沈影と身と、世情誰か是れ舊雷陳、唯應に鮑叔のみ偏に我を憐むべし、自から保つ曾參が人を殺さざることを、山は白樓に入る沙苑の暮、潮は滄海に生ず野塘の春、老て佳景に逢うて唯惆悵す、兩地各の傷む限り無きの神、

【句釋】樂天は杭州に在り、元稹は同州に在り、乃ち賦して贈る。榮辱升沈影與身榮と辱と升と沈との四のもの到底、影の身に從がふ如く、相離るべからず、世情誰是舊雷陳世人の多くは榮と升との際は交際するも、辱と沈との際は昨日の友も今日は路人の如きものと爲る、雷義と陳仲との如き節の固き友は外にはあらず、君と僕とのみなり、唯應鮑叔偏憐我齊の桓公の臣、

管仲と鮑叔とは交游の深きものなり、管仲曰く我を生む者は父母、我を知る者は鮑叔と、管仲貧なりし時、屢しば鮑叔を欺むき金を取る、而かも鮑叔は微塵も其の人を疑はずして却て其の人を信せしなり、今樂天を鮑叔に比し、管仲を自から比す、自保曾參不殺人甘茂秦王に謂て曰く昔し曾參と與に姓名を同うする者あり、人を殺す、人其の母母參が に告ぐ、母の曰く吾が子は人を殺さず、又頃らくありて人來る、頃らくありて又來る、其母杼を投て走る、夫れ曾參が賢を以て其の母之を信ず、然れども三人なれば母惧る、今臣を疑ふ者特に三人のみならず、臣恐らくは大王の杼を投げんことをと、元稹が長慶二年に相たり、時に王延湊、牛元翼を深州に圍む、元稹、天子の非次に己れを拔くを以て功を立て上に振はんと欲す、于方、元稹に謂て曰く、奇士王昭王友朋あり、嘗て燕趙に客たり、賊黨と通ず、反間を以て元翼を出さしめんと、元稹之を然りとす、李賞其の謀を知つて裴度に告て曰く、于方元稹が爲め公を刺んとすと、裴度隱れて發せず、神策中尉が于方の事を奏するに及んで三司に詔し、訊鞫せしめ其の裴度を害する無根なることを知り得たり、然れども元稹は罷められて同州の刺史と爲る、他は殺すと云ふも自からは人を殺さずと信す、山入白樓此の白樓も沙苑も共に同州に在る、暮は夕陽なり、此の句は元自身に屬す、潮生滄海野塘春滄海と野塘とは杭州、卽ち樂天の方に屬す、我は同州の

夕景を看、君は杭州の晩春を看、老逢佳景同州の佳景、杭州の佳景、唯惆悵「カナシミ」「モダエル」を惆悵と云ふ、都の長安に在らざればなり、兩地各傷無限神傷の中に老と貶との二義を含む、

【評論】此の篇、前後聯共に、尤も用力の作、又眞摯の情を見る、世は元稹が雷陳管鮑を說くが如く、後世元白の名は長く流傳して朽ざるものなり、

秋居病中

雍陶

幽居悄悄何人到　落日淸涼滿樹梢　新句有時愁裏得
古方無效病來抛　荒簷數蝶懸蛛網　空屋孤螢入燕巢
獨臥南窗秋色晩　一庭紅葉掩衡茅

幽居悄悄何人か到らん、落日淸涼にして樹梢に滿つ、新句時あつて愁裏に得、古方效なくして病來抛つ、荒簷の數蝶蛛網に懸り、空屋の孤螢燕巢に入る、獨南窗に臥す秋色の晩、一庭の紅葉衡茅を掩ふ、

【略傳】雍陶字は國鈞、蜀の成都の人、太中六年、國子毛詩博士より出て簡州の刺史と爲る、

【句釋】秋居病中病中の秋懷を叙す、幽居は閒居と同じ、悄悄は急也靜也慍也憂也と注して心の慘なきを云ふ、何人到人の訪ふ者無し、在官中ならば、病中と雖も訪ふ者多からん、官を辭して幽居するなれば、輕薄の人情之を訪はず、落日清涼滿樹梢正に傾むかんとする日影が何とも言へぬ氣を帶て樹樹の梢に滿つ、新句有時愁裏得平常習ふ所懷懷に因て偶然新句を得、古方無効病來拋醫書は平常習はざる所、偶ま之に依て藥を調合するも効驗なし故に之を拋擲す、荒簷數蝶懸蛛網、病客が久しき洒掃意の如くならず、蛛網の荒簷に懸るや數蝶憐れに捕へらるるを見る、空屋弧螢入燕巢我が一物も無き屋に燕巢を存するも燕は時已に秋に逢うて去る、其の燕の舊巢へ孤螢が飛んで入る、共に是れ我が病身に比較して甚だ可憐の狀態を云ふ。獨臥南窗秋色晩獨は寂寥を意味す、素隱和尙の如く看病の者も無しと見るは誤まる、一庭紅葉掩衡茅屋内は蛛網、屋外は紅葉にて、萬事荒廢する狀此の如し、衡門茅舍は貧者の家なり、

【評論】此の篇、交股格の作法として最も見易すきもの、交股格とは何ぞ、一二の句と七八の句とにして一の絶句を爲す、三句より六句に至る、前後二聯、亦切て以て一絶句と爲すを得、是を交股格の法とす、此の篇は、晩年廬山に在つての作、

送崔約下第歸揚州

姚合

滿座詩人吟送酒　離城此會亦應稀　春風下第時稱屈
秋卷呈親自束歸　日晩山華當馬落　天陰水鳥傍船飛
江邊道路多苔蘚　塵土無由得上衣

滿座の詩人吟じて酒を送る、離城此の會亦應に稀なるべし、春風に下第して時に屈と稱す、秋卷親に呈せんとして自ら束ねて歸る、日は晩れて山花馬に當つて落、天は陰つて水鳥船に傍うて飛ばん、江邊の道路苔蘚多し、塵土衣に上ることを得るに由なからん、

【句釋】崔約は『唐書』に傳を缺く、下第は役人に及第せざるなり、揚州は今日の廣陵、江蘇揚州なり、一二の句は解し易し、春風進士試驗、春と秋となり、下第有司所謂試驗官に惡弊あり、故に才あるも下第するあり、才無きも及第するあり、崔は才ありて下第する者、故に酒を送り詩人會して離別の燕を盛んにす、同情の多きこと知るべし、時稱劉藁が下第して物總て囂然として屈と稱す、其の故事を用ふ、張りし氣が屈したるなり、秋卷は古注に唐の進士下第して退て業を肄す之を過夏と云ふ、業を執て以て出て之を秋卷と云ふ、今及第せんと欲して作り

し詩文を呈親自束歸故鄉の親に呈示せんと欲して自ら一束にして歸る、友人の送詩も此の中に收めたるは勿論なり、日晩山花當馬落山路落日、馬頭の前に紛紛として落つるものは花なり、天陰水鳥傍船飛江上天陰、其の乘船の前に翻翻として飛ぶものは鳥なり、及第して歸る時なれば天晴なり、日曉なり、下第して歸るは全く反對の景なり、江邊道路多苔蘚都の紅塵萬丈なるは道路が畢竟惡土なればなり、君の歸らんとする揚州は水國ゆゑ苔蘚多くして、塵土無由得上衣君の客衣は都人の衣と異なり決して塵土は汚さずと云ふ、

【評論】此の篇、一二の句は正しく離別の燕を叙し三四以下の句は其の歸るに就ての情懷實景を叙す、句格正に完成なり、寧齋末二句を圈せざるは何ぞや、

旅館書懷　劉滄

忽看庭樹換風煙　兄弟飄零寄二海邊一　客計倦行分陝路
家貧休種汶陽田　雲低二遠塞一鳴二寒雁一　雨歇二空山一噪二暮蟬一
落葉蟲絲滿二窗戸一　秋堂獨坐思悠然
忽ち看る庭樹風煙を換ふることを、兄弟飄零して海邊に寄る、客計行くに

倦む分陝の路、家貧にして種うることを休む汶陽の田、雲低うして遠塞寒雁鳴き、雨歇んで空山暮蟬噪ぐ、落葉蟲絲窗戸に滿つ、秋堂に獨坐して思悠然、

【略傳】劉滄字は蘊靈、魯の人、太中の進士、

【句釋】旅館書懷或る説に大中中に弟劉季と共に下第して北海に之く時の作なりと、又『才子傳』には下第の事記載なく、江海の邊に旅寓したる時の作と、忽看庭樹換風煙族館に寓して見る所の卽目なり、時節の換移を見るは庭樹の色を見るに如く無し、兄弟飄零寄海邊飄零は草木の零る形容詞を人間の發達せざるに移し用ふる語、兄弟二人江海の邊に寄寓するは未だ榮達せざる故なり、客計倦行分陝路意氣を盛んにし、又意氣を衰にし、相往來する分陝の路は已に倦む、倦むは卽ち嫌ふなり、『春秋公羊傳』に陝より東は周公之を主る、陝より西は召公之を主る、家貧休種汶陽田官吏と爲る能はず、然りと雖も故山へ歸りて田を畊やさんと欲するも是も能はず、旅寓中の感慨や深し、齊と魯との境を汶陽とす、雲低遠塞鳴寒雁寓館を出て天際を望めば遠塞は雲が低れ、而かも寒雁が鳴飛する、雨歇空山噪暮蟬已にして空山は雨歇み、但

暮蟬の嘒嘒と鳴くあるのみ、歴も蟬も共に哀聲は一樣とす、蓼葉蟲絲滿窗戸此の句は雍陶の「秋居病中」詩と意義を同うす、掃除も滿足にせざる旅館とすれば極めて下等の旅館なり、秋堂獨坐思悠然悠然の字義は樂觀的にも、悲觀的にも用ふ、今は秋堂に坐して種種思ひに耽ることなれば悲觀的の方に屬す、序を以て一例を出せば、淵明の「悠然として南山を見る」は樂觀なり、

【評論】此の篇、一句一句榮達者の言にあらざること知り易し、景あり情あり、失意の者之を讀まば、必ず共鳴する所あるべきなり、劉滄は懷古詩を以て許渾と雙稱せらる、

潁州客舍　　姚　揆

素琴孤劍尙閒游　誰共芳樽話唱酬　鄉夢有時生枕上
客情終日在眉頭　雲拖雨脚連天去　樹夾河聲遶郡流
回首帝京歸未得　不堪吟倚夕陽樓

素琴孤劍尙閒游す、誰と共にか芳樽話して唱酬せん、鄉夢時あつて枕上に生じ、客情終日眉頭に在り、雲は雨脚を拖いて天に連つて去り、樹は河聲を夾んで郡を遶つて流る、首を帝京に回らせども歸ること未だ得ず、堪へず吟じて夕陽の樓に倚るに、

【句釋】姚揆は『唐書』に傳を缺く、潁州は河南省汝陰郡、旅寓中の作とす、素琴琴に飾りの無きもの、孤劍尙閒游閒游するにも劍と琴とを持す、士人の風を失なはず、誰共芳樽話唱酬他鄉に在つては酒を應酬し、又詩を唱和する者無し、鄉夢有時生枕上故鄉の事を思うて止まず竟に夢む、客情終日在眉頭人愁の有るときは眉頭に必ず皺を寄す、旅人種種氣を用ふ、此の狀ある所以、雲拖雨脚連天去外面の景色を見れば、一方より出る雲が雨脚を拖くかと見る中に忽ち天上一面暗黑と爲り來る、樹夾河聲遶郡流樹が夾むとあれば、河の兩岸に樹があるなり、流るるは樹にあらずして河水なり、霖雨を經て河流の激するを云ふ、回首帝京歸未得到底及ばざることを知り乍らせめてもと其の方を望む、是れ客情の可憐なる所なり、姚は長安の人ならん、不堪吟倚夕陽樓夕陽とあるからには久雨も霽たるものならん、然れども故鄉の帝京にはあらず、吟じて以て夕陽を賞するの勇氣はあらずとなり、

【評論】此の篇、旅寓中の情景、歷歷目に在り、寧齋は「閒游」の二字に著眼して精細に五十有六字を看破し了らんことを要すと、評して居るが、總て七律の作法は第二句の話唱酬の三字の處に重きを置く、此の三字よりして下の諸句を生ずること初盛中晩の諸家皆然らざるは無し、

一二の句、對を以て起らざる以上は一句に重味なく、第二句の五六七の三字に重味を持たり、此の處、若し字が切ならずして泛なるは七律の至る者にあらず、留意すべき所其れ此に在り、

春日長安卽事　　崔魯

一百五日又欲來　梨花梅花參差開　行人自笑不歸去
瘦馬獨吟眞可哀　杏酪漸香鄰舍粥　榆煙將變舊爐灰
玉樓春暖笙歌夜　肯信愁腸日九回

一百五日又來らんと欲す、梨花梅花參差として開く、行人自ら笑ふ歸去せざることを、瘦馬獨吟して眞に哀むべし、杏酪漸く香し鄰舍の粥、榆煙將に變ぜんとす舊爐の灰、玉樓春暖なり笙歌の夜、肯て信ぜんや愁腸の日に九回することを、

【句釋】崔魯は『唐書』に傳を缺く、廣明間の進士なりと云ふことを傳ふるのみ、一百五日は寒食の日を云ふ、冬至を去て一百五日目なり、略して百五節と云ふ、又欲來古曆の二月、今曆の三月なり、梨花梅花參差開梨花の舊二月に開くは尋常なり、梅花の二月は遲し、是れ氣候が

寒なればなり、參差は互ひ違ひと云ふ意義、行人自笑不歸去旅行中の人故郷へ歸りて掃墳でも爲すべきに余は然らず、自ら笑ふ所以、瘦馬獨吟眞可哀鴻齋は「瘦馬ハ嘶イテ空シク馬部屋ニ繫イデオクモ哀ムベシ」と解す誤謬なり、「瘦馬ニ騎テ獨吟スル」なり、長安の客中に在て、故郷へは歸らず、路上に行吟するも眞に哀むべきにあらずやの意味なり、馬が吟するにはあらず杏酪漸香鄰舍粥崔魯が寓居の鄰舍にて寒食の日に供する爲め杏仁をすりて作りし酪、卽ち乳漿の香氣が麥粥を烹る香と共に起る、榆煙は榆柳の火を取る煙、將變舊爐灰舊爐灰を驗して正に新火を燒かんとす、乃ち榆柳を求め火を鑽つて試みつつある煙を見るなり、宮廷にては榆柳の火を取て近臣に賜ふが例なり、玉樓春暖笙歌夜宮中の玉樓は笙歌管絃の樂ありて、人間は春寒なるも、玉樓は春暖ならん、肯信愁腸日九回玉樓春暖に笙歌する人は、肯て我等愁人の腸が一日に九回するなどの事は恐くは信ぜざらん、一日腸九回は太史公の語を用ふ、

【評論】此の篇、一二の十四字拗體を以て出し、而かも聲律諧調す、第一句仄聲六字、第二句平聲七字、仄平互に用ふ、寧齋曰く三四の二句更に第五字不と眞との字を拗するものは實に此上兩句の變格を收めて正格に入らしむるの關鎖なりと」臆斷の說、槐南と其の妄を同うするものなり、不の仄を救ふに眞の平を以てしたるにはあらず、獨の仄に對して眞の平を用ひたるのみ、若し

此に他の上去二聲の仄字を用ひんか、孤平と爲る、詩法に無き所、是の故に獨の字を孤と改むる場合は眞の字、他の字に換へたりしやも知るべからず、後世詩を學ぶ者、槐南寧齋の糟粕を嘗むべからず、

江際　鄭谷

杳杳漁舟破溟煙　疎疎蘆葦舊江天　那堪流落逢搖落
可ㇾ得潛然是偶然　萬頃白波迷宿鷺　一林黃葉送秋蟬
兵車未ㇾ息年華促　早晩閒吟向滻川

杳杳たる漁舟溟煙を破る、疎疎たる蘆葦舊江の天、那ぞ流落して搖落に逢ふに堪へん、潛然は是れ偶然なることを得べけんや、萬頃の白波宿鷺を迷はし、一林の黃葉秋蟬を送る、兵車未だ息まず年華促る、早晩閒吟して滻川に向はん、

【句釋】江際は江蘇の揚州、鄭谷は僖宗の時、黃巢の亂を避けて此に寓し、以て作るもの、杳杳は遙遙と同じ、遠方を云ふ、漁舟破溟煙溟は滄溟卽ち海上の煙を破つて漁舟が見ゆる、又「クラキ」

煙と見ても可　疎疎は密密の反對、卽ち「マバラ」なり、蘆葦舊江天曾て熟知の舊江の天は蘆や葦は依然たる狀態なり、那堪は何堪と殆んど同義、流落逢搖落人間は亂に逢うて流落し、葉は秋に逢うて搖落す、可得潛然是偶然潛然は流涙の貌、偶然は期せずして逢ふこと、人は潛然たることを欲せず而かも潛然となるは是れ偶然の事亦得べからざるなり、萬頃白波迷宿鷺鷺も白く波も白し鷺の宿所に迷ふ所以、一林黃葉送秋蟬一林を以て上の萬頃に對す、巨と細との別知るべし、秋蟬は黃葉を抱きて鳴く、是れ以て鄭自身に比する者の如し、兵車未息年華促黃巢及び朱全忠等の兵亂尙ほ未だ息まず、是れ僖宗の乾符六年の暮なり、故に年華促と云ふ、早晩は「イツカ」なり、閒吟向滻川此の滻川は長安を流るる川、何れの日か長安に向ふを得るやと云ふ意、

【評論】此の篇、流落と搖落との二意を錯綜して一篇を構成するもの、宋の歐陽修は鄭谷の詩を評して其の調高からず、人家多く小兒に讀ましむと、縱令ひ小兒に讀ましむる調の低きものとなすも、尙ほ宋人の詩に勝ることを知らざるべからず、

中年

漠漠秦雲澹澹天　新年景象入ㇾ中年　情多最恨花無ㇾ語
愁破方知酒有ㇾ權　苔色滿ㇾ墻思故第　雨聲入ㇾ夜憶ㇾ春田

衰遲自喜添詩學　更把前題改數聯

漠漠たる秦雲澹澹たる天、新年の景象中年に入る、情多くして最も恨む花に語なきを、愁破れて方に知る酒に權あることを、苔色墻に滿ちて故第を思ひ、雨聲夜に入つて春田を憶ふ、衰遲自ら喜ぶ詩學を添ふることを、更に前題を把つて數聯を改む、

【句釋】中年は中春の事なり、又五十歲の事なりと二說あり、第七句に依て見れば、鄭谷が五十歲の時の作と定むる方可なり、人生を百年と定む、五十は其の中間なれば如何にも此の題あるべきなり、漠漠は雲の寸隙なく連なる形容詞、秦雲は素隱和尙は奇麗なる雲を云ふと、奇麗なる雲は慶雲にて秦雲とは異なる、司空圖の詩に「秦雲楚雨暗相和」の句ありて、秦塞の雲を云ふなり、澹澹天天の色水の澹澹たる如きなり、新年氣象入中年五十歲の新年を迎へたりと解して可、別に深く鑿するの要なし、情多最恨花無語少情の人なれば花に語なきも恨みず、語の無きが花の天分なるに而かも其の無語を恨む、多情なる所以、愁破方知酒有權酒は已に掃愁帚又は忘憂草の異名あり、之を飮む、愁を破ると實際に權威あるなり、苔色滿墻思故第客館の

墻に雨中苔色の長ずるを見る、豈故山の第宅の苔色を思はざるを得んや、雨聲入夜憶春田客館に夜雨を聞く、豈故園の春田水漲るを憶はざるを得んや、衰遲自喜添詩學衰遲は自ら憐むべきも、添詩學は自ら喜ぶべきもの、其の憐むべきは姑らく置き、今喜ぶべきを喜ぶなり、更把前題改數聯老杜が「老去て漸やく詩律に於て細やか」又新詩改ため罷んで且長吟」の意なり、

【評論】此の篇、前の「江際」と同じく同字を多く用ひて鄭谷が心手の存する所を發揮す、晩唐の名家たるに背かず、司空曙の酬張芬赦後見寄の詩より此に至る十首は前半四句多くは情想、後半四句多くは感興なるものなり、

秋日東郊作

皇甫冉

閒看秋水心無事　臥對寒松手自栽　廬岳高僧留偈別
茅山道士寄書來　燕知社日辭巢去　菊爲重陽冒雨開
淺薄將何稱獻納　臨岐終日自徘徊
閒に秋水を看て心無事、臥して寒松に對す手自ら栽るしに、廬岳の高僧偈を留めて別れ、茅山の道士書を寄せて來る、燕は社日を知つて巢を辭して

去り、菊は重陽の爲めに雨を冒して開く、淺薄何を將てか歳納と稱せられん、岐に臨んで終日自ら徘徊す、

【句釋】秋日東郊作 皇甫冉は仕へて拾遺左補闕の官に至るも、世道の艱虞なるを以て心を江外に遂んとす、故に飄薄の歎多しと『才子傳』に記する所、事實に近からんか、此の詩長安の東郊に在て作る、開看秋水心無事秋水は清澄之を看れば心亦清澄と爲る、無事は心が外事に馳せざるを言ふ、臥對寒松手自栽時ありては秋水を看、時ありては寒松に對して其の手栽せしものが長せしを思ふ、廬岳は一名を天子鄣と云ふ、晉代惠遠が住せし東林寺あり、高僧留偈別佛家の詩を偈と云ふ、茅山は句容縣南五十里に在り、道士寄書來佛教と儒教との中間に道を修する者を道士と云ふ、尋常世間と離るる境界は僧と同じ、儒と同じからず、此の二流と交はるなり、燕知社日春社と秋社とあり、秋社は立秋の後、第五日を以て社日と爲す、是の日五土の神を祀るなり、辭巢去燕は有情の者、能く時節を知て歸り去る、菊爲重陽菊は燕と異なり非情なれども重陽に開くは卽ち重陽を知るが故ならん、冒雨開人に看せんが爲め特に雨を冒して開くかと疑ふ、淺薄は自身の才の淺薄を云ふ。將何將の字「モテ」と訓して意味は進なり奉なり、何を進めてなり、稱獻納使和蕃事の役を獻納使と稱す、蕃の音鬼と同じきを以て玄宗之を獻納使

と改めしなりと古注に見ゆ、我等如き不才の者は獻納使の名を汚すに過ぎずと謙遜するなり、臨岐は『釋名』に物雨を岐と爲すとありて「フタマタ」と訓す、西せんか東せんか、定める時に臨むなり、終日自徘徊役を辭して隱居せんか如何せんと徘徊卽ち「サマヨフ」なり、

【評論】此の篇、皇甫冉が人品の清きこと一讀して知り易し、余をして議論せしむれば「高僧」と「道士」の對極めて疎對なり、何ぞや高僧は敬稱にして、道士は普通名詞なり、故に沙門又は緇人又は僧伽と爲さざるべからず、別と來とは可なりとするも、去と開とに至りては頗る苦心の痕跡を存す、寧齋は知と爲字と神彩自ら生ずと讃するが紀曉嵐に笑はるるを知らざるなり、

過乘如禪師蕭居士嵩丘蘭若　王維

無著天親弟與兄　嵩丘蘭若一峯晴　食隨鳴磬巢鳥下
行踏空林落葉聲　迸水定侵香案濕　雨華應共石床平
深洞長松何所有　儼然天竺古先生

此の詩は國譯唐詩選に就て見るべし、但し蘭若の意義を畧叙せざるべからず、「レンニヤ」は梵語、譯して「無諍聲」「意樂處」「開靜」又は塚間牛鳴の及ばざる處、之を假りに「寺」と云ふ、寺は

元來支那の役所、然るに僧伽が住する所となりてより、蘭若の意味を寺に用ひたるものなり、精舍も殆んど意義を同うす、鴻齋は「勅額の有るを寺と云ひ、無を蘭若と云ふ」と何の據る所なき說なり、寧齋は蘭若は梵語にして寺觀の謂なりと、何等の臆斷ぞや、寺は僧に就くも、觀は道士に就く、僧は觀には住せず、道士は寺に住せざるなり、詩人が佛典を解せずして往往無稽の事を言ふ、戒愼すべきことなり、

送友人游江南　　耿湋

遠別悠悠白髮新　江潭何處是通津　潮聲偏懼初來客
海味唯甘久住人　漠漠煙光漁浦晚　青青草色定山春
汀洲更有南回雁　亂起聯翩北向秦

【句釋】送友人游江南楊子江南卽ち浙江江蘇一帶の地を總て江南と云ふ、遠別悠悠白髮新路の遠きと別を惜しむとの二に依て白髮が新たに生ず、江は浙江、潭は潭州、何處是通津此の何處の文字が前句の遠別の字を活かす、何處か定まらず、竟に白髮を添新する所以、潮聲偏懼初來客長安は元來山國なり、潮聲の大なるを聞くあらず、然るに此の道中浙江に到りて始めて潮聲を聞き大に懼るるものあらん、海味唯甘久住人初來の客は懼るるが、久住の人と爲らば慣れて竟に其の海邊の趣味を愛する意とならん、漠漠煙光漁浦晚是れ道中を云ふ、漁浦を過ぎる時は漁燈の光浦汀の煙の漠漠と連なるを見玉はん、青青草色定山春青青は茂盛の形容詞、定山は浙江の杭州に在り、汀洲更有南回雁南方より北方へ回るの雁、君が江南へ著する時分、雁は却て北へ回るの時ならん、亂起聯翩北向秦君が江南へ著したら其の道中無異なりと雁に信を托し玉へとの意を寓す、秦の都は咸陽、咸陽は卽ち長安なり、

【評論】此の篇、才子の才子たる面目は表はれざるも、句句、水に關する字を用ひたる所、工夫の存する所ならん、曰く江潭二句曰く潮聲三句曰く海味四句曰く漁浦五句曰く汀洲七句僅かに起句と結句、情懷を叙す、以て人を送るの眞を見る、亂起の二字、何の故に亂の字を特に用ひたるやは疑はし、

【略傳】耿湋は寶應の進士、左拾遺と爲る、大曆十才子の一人、

送別友人　　姚合

獨向山中覓紫芝　山人勾引住多時　摘花浸酒春愁盡
燒竹煎茶夜臥遲　泉落林梢多碎滴　松生石底足旁枝
明朝却欲歸城市　問我來期總不知

獨山中に向つて紫芝を覓む、山人に勾引せられ住まること多時、花を摘み酒に浸して春愁盡き、竹を燒き茶を煎じて夜臥遲し、泉は林梢より落ちて碎滴多く、松は石底に生じて旁枝足る、明朝却て城市に歸らんと欲す、我に來期を問へども總て知らず、

【句釋】送別友人『全唐詩』の姚合集に留別山中友人に作る、此の方可なり、獨向山中覓紫芝　藥艸の紫芝を覓めんが爲め山中に入る、他意あるにあらず、然るに山人は勾引卽ち「ヒキトドメテ」我も遂に住多時住は「トゞマル」暫時と多時と意義を同うす、摘花浸酒春愁盡花を酒に浸して我に飲ましむ、我豈春に對する愁の盡きざるあらんや、燒竹煎茶夜臥遲枯竹を薪と爲し茶を煎て以て玄談を試む夜臥の遲き所以、泉落林梢多碎滴泉は瀑布、崖より落下する瀑布が林の

梢にかかる、其の飛沫の多きを云ふ、松生石底足旁枝石底に生ずる松は自由に天に向つて聳ゆる能はず、是の故に枝が非常に多く生じたるなり、明朝却欲歸城市勾引せられて一宿したるが明朝は城市の人と爲らざるべからず、問我我とは姚合なり、問ふ者は山人なり、總不知姚合が山人に向うて再訪の期は豫かじめ知らずと答ふ、

【評論】此の篇、山中の狀態、山人の優待、我の意志、叙し得て分明、晩唐の律詩として佳なるもの、多二字あるは疵とす、山の二字は妨げず、

嶺南道中　　李德裕

嶺水爭分路轉迷　桄榔椰葉暗蠻溪　愁衝毒霧逢蛇草
畏落沙蟲避燕泥　五月畬田收火米　三更津吏報潮雞
不堪腸斷思鄉處　紅槿華中越鳥啼

嶺水爭ひ分れて路轉た迷ふ、桄榔椰葉蠻溪に暗し、毒霧に衝かれんことを愁へて蛇草に逢ひ、沙蟲に落ちんことを畏れて燕泥を避く、五月畬田火米を收め、三更津吏潮雞を報ず、腸斷るに堪へず鄉を思ふ處、紅槿華中越鳥

啼く、

【句釋】 嶺●●南は今日の廣東省地方一帶を云ふ、古の閩越、蠻夷の部と爲すを以て禹貢九州の域外に屬す、李德裕が宣宗の大中二年崖州の司戸參軍に貶せられて來る其の道中作る所の詩、嶺●水爭分南北に分れて水の奔流するを云ふ、路轉迷轉●●●●を和訓「ウタタ」と爲すが、運の義なれば、山なぞをグルグルめぐるの義を的切とす、桄榔は日本に無き植物、樧櫚に似て、枝條無く、其の巓に葉を生ず、俗に「タガヤサン」と云ふ樹 椰葉は椰子、熱帶地方に多く產す、其の椰子の葉が茂盛す、此の二植物の實は共に食ふべきなり、暗蠻溪暗●●●●なるが故に路迷ふ、愁衡毒霧逢蛇草●●●●●●『後漢書』の馬援傳に馬援交趾を討て曰く下潦上霧毒氣蒸薰たり、永州の異蛇草を齧んで盡く死す、人來りて其の草に觸れれば指を墮し、腕を擧ますと、畏落沙蟲避燕泥毒蛇の鱗の中に沙蟲と云ふ蟲ありて常に蛇を苦しむ、蛇則ち身を急流水に樹つ、或は沙中に臥して儞る、蟲沙に入ると、人之に中るときは三日にして死すと、此の二句十四字の意味は要するに毒霧だけは折角逃れたるが、蛇草と云ふ嫌ふべき草には逢うた、沙蟲と云ふ毒蟲に逢はんことを畏れて一種の恐怖病に罹り燕泥なぞは畏るべきものにあらざるが、此の燕泥までも毒にあらずやと疑ひ畏るる氣に爲つたと云ふなり、五月畬田新開の田を畬田と云ふ、收火米五月に米を收むるは一年に兩度收穫あれ

ばなり、水耨にあらすして火畊、卽ち草を燒いて田を種うるなり、三更今日の時間で言はば、午前零時頃なり、津吏●●は湊を守る官吏、報潮雞已に●●船が出帆する事を諸人に告ぐ、不堪腸斷●●●●思鄉處●●此の如き蠻地へ貶せられたるの因果を思へば腸は方に斷んとす、我が鄉土の好きを思はざるを得ん、紅槿華●●中●此の春夏盛んに開き、秋冬は差や少なしと『嶺南異物志』に出づ、兎に角朝開き暮に落つる短命の花なり、越鳥は鷓鴣なり、

【評論】 此の篇、動物の名多きを以て三尺童子も記憶する所のもの、曰く蛇曰く蟲曰く燕曰く鷄曰く鳥、何に於て何の妨げ無きものの如くなれど、詩の病と言はざるを得ず、德裕の人品、古今の批評は寧齋の『三體詩評釋』に詳し、就て看るべし、

病氣　來鵬

春初一臥到秋深　不見紅芳與綠陰　窗下展書難久讀
池邊扶杖欲閒吟　藕穿平地生荷葉　筍過東家作竹林
在舍渾如遠鄉客　詩僧酒伴鎭相尋
春初に一たび臥して秋の深くるに到る、見ず紅芳と綠陰とを、窗下書を展

いて久しく讀み難し、池邊杖に扶けられて閒吟せんと欲す、藕は平地を穿つて荷葉を生じ、笋は東家に過ぎて竹林と作る、舍に在つて渾て遠鄉の客の如し、詩僧酒伴鎭に相尋ぬ、

【略傳】●●來鵬は昭宗の時の人、詩思清麗なり、福建の韋尙書岫、其の才を愛して女を以て之に妻はせんと欲す、果さず、後蜀に游んで夏課の卷中に詩あり、一把綠荷風剪破す、嫌ふ他の秋雨珠を成さず、識者以て不祥と爲す、是の歲卒す、又『才子傳』に鵬詩に工、蓄銳既に久し、自ら年長ずるまで家貧にして不達なるを傷み、頗る亦忿忿たり、故に多くは意を寓して譏訕すると、

【句釋】●●春初一臥發病の時節は一月なり、●●到秋深八月に至りて漸く起つ、●●不見紅芳與綠陰紅芳の春、綠陰の夏、空しく光陰を消したるなり、●●●●窗下展書難久讀是れ屋內に在つての事、池邊扶●杖欲閒吟是れ屋外に在つての事、共に病後の身體、意の如くならざるを云ふ、●●藕穿平地生荷葉是れは池畔に住する者の直ちに首肯する實況なり、●●●●花は平地に生せざるが、葉は道を穿ちて生ずるもの、●●●●笋過東家作竹林竹の性、多く東南を愛すと、此の二句見る所の實況なり、●●●●在舍渾如

●●●遠鄉客我は主人たるの思を爲さず、却て遠方より來れる客の思を爲す、其の故は詩會酒伴鎭相●尋我より訪問をせず、彼より問ひ來る、鎭の字は按也重也壓也と注して常恒にとの意なり、

【評論】此の篇、五六の二句を除く外、句句病と關せざるは無く、言言切實、毫も浮泛ならず、第五句特に名句と爲すべし、秋日東郊より此に至る六首、前虛は老蒼にして後實は清新なる者、素隱の說は前聯は專ら情思を盡くし、後聯は景物を略敘し、結句にて情思を逃べたるものと、

送李錄事赴饒州

皇甫冉

北人南去雪紛紛　雁過汀洲不可聞　積水長天隨逐客
荒城極浦足寒雲　山從建業千峯出　江到潯陽九派分
借問督郵纔弱冠　府中年少不如君

北人南に去つて雪紛紛、雁は汀洲を過ぎて聞くべからず、積水長天逐客に隨ひ、荒城極浦寒雲足る、山は建業より千峯出で、江は潯陽に至つて九派分る、督郵を借問すれば纔に弱冠、府中の年少君に如かず、

【句釋】●●●●送李錄事此の人詳らかならず、饒州は吳地に屬す、●●北人は李を云ふ、長安は北方に屬

す、南去饒州は長安より南方に當る、今日の江西省南昌府鄱陽湖の傍、雁過汀洲不可聞長安の汀洲を今過ぎ去る、當分は其の消息を聞くに由なきなり、積水は大江を指す、元來海の異名を積水と云ふ、素隱は海を涉りて行く如くに注すと雖も、長安より饒州への道中、何れの處に海あらんや、以て楊子江を云ふと知るべし、長天江の長きを云ふ、隨逐客秦に逐客令を出したるあり、今の行榮轉にはあらず、左遷なれば逐客と同樣なり、荒城必ず定まりし城あるにあらず、極浦は極まり無き浦汀なり、足寒雲寒雲と云ふ寂莫たるもの有るは反對に行人に溫暖の氣無きなり、俗語で言はば萬事不自由なり、山從建業今の江蘇省蘇州を建業と云ふ、卽ち金陵、建康なり、千峯出金陵邊は山益す多くなるを云ふ、其の實地理としては南方山少なきなり、江至潯陽今の江西省九江府德化縣治を潯陽と爲す、九派分鳥白江と蚌江と烏江と嘉靡江と畝江と源江と廩江と提江と菌江と各の分流する、借問の字義は試みに問ふなり、督郵は郡吏、卽ち郡長の部下に屬する官人、陶淵明が彭澤縣の令と爲りし時、此の督郵を衣冠束帶して見ゆるを嫌ひ官を辭せしこと「歸去來辭注」に見ゆ、日本と全く反對に郡は縣の上に在り、今其の饒州の督郵と爲る君は年二十歲なれば纔弱冠と云ふ、素隱和尙及び鴻齋老人は督郵は李錄事外の人なりと辨ずるが非常に誤まりなり、府中年少不如君素隱の如きは此の句を解して府中の年少は君の年

長には及ばずと、全く反對なり、府中に在つて第一の年少は君なりと云ふに在り、君に及ばずとの意にあらず、君の如き年少は無しとの意、

【評論】此の篇、寧齋は非常なる名篇の如く評すと雖も、拙にもあらず、又名篇にもあらざるなり、隨逐客の語の如き其の速かに行くを形容するにあるか、或は李の事を云ふなるや、分明を缺く所あり、此の篇を讀む者は宜しく紀曉嵐の眼孔無かるべからず、

清明日與友人游玉塘莊　　來鵬

幾宿春山共陸郎　清明時節好風光　細穿綠荇船頭滑
碎踏殘華屐齒香　風急嶺雲飄迥野　雨餘田水落芳塘
不堪吟罷東回首　滿耳蛙聲正夕陽

幾たびか春山に宿して陸郎と共にす、清明の時節好風光、綠荇を細穿して船頭滑に、殘華を碎踏して屐齒香し、風急にして嶺雲迥野に飄り、雨餘つて田水芳塘より落つ、吟じ罷むに堪へず東に首を回らせば、滿耳の蛙聲正に夕陽、

【句釋】 清明日は三月の節、冬至を去る一百五日を寒食と云ふ、其の寒食の三日後を清明節と云ふ、宮廷より楡柳の火を近臣に賜ふ正に是れ此の時、玉塘莊は蜀中に在り、幾宿春山共陸郎今友人を晉の陸機に比譬する、陸機に春游の詩あればなり、清明時節好風光暖にあらず寒にあらず、一年の好風光、實に此の時に在り、細穿綠苔苔は「ウキクサ」此の苔が綠色を呈して江に在る、此の江中を細かに穿ちて船頭滑船に苔が當るゆゑ船の頭が滑らかになる、是れ水游、碎踏殘華屐齒香庭中の落花を踏み碎くが故に屐齒が自然と香ばし、是れ陸游、風急篇雲飜迴野嶺頭の雲が風の急吹に依て其の散亂して迴野に遍ねきなり、是れ高處の景、雨餘田水落芳塘田田に水の衰衰たるは雨後なるに由る、芳草池塘を略して芳塘と稱す、不堪吟罷東回首東より首を西に回らすなり、東の京を望むなぞと解するは鑿に過ぐ、滿耳蛙聲正夕陽種種の景色を見、且吟じ且行く、而かも首を回らす時は、蛙聲閣閣と耳に滿ち日影は西に沈まんとす、情是に於てか堪へざる所以、

【評論】 此の篇、第二句の「好風光」の三字を以て以下の句を悉く出生する、高處、低處水游、陸游、皆好風光ならざるは無し、此の好風光を賞すること久しからず、終に感慨に結歸する所以、以前二首三四句情中に景有るもの、

宿淮浦寄司空曙

李端

愁心一倍長離憂　夜思千重戀舊游　秦地故人成遠夢
楚天多雨在孤舟　諸溪近海潮皆應　獨樹邊淮葉盡流
別恨轉深何處寫　前程唯有一登樓

【略傳】 李端は趙州の人、大曆五年に秘書省校書郎を授けらる、後官を辭し、終南山の草堂寺に居す、後、杭州司馬と爲る、後、衡山に隱れ、自ら衡嶽幽人と號す、

【句釋】 宿淮浦河南道の徐州、司空曙字は文明、廣平の人、是の時、長沙に謫せられて在り、司空曙は方外の人僧と交はり、其の詩亦清秀一家を爲す、愁心一倍長離憂今李端が浙江杭州の司馬と爲て赴むく途次此の淮浦に宿し、客路、種種の想を生じ、離憂が一倍增すことを云ふ、長は「ナガキ」の平聲にあらず、增長の仄聲とす、夜思千重戀舊游終南山に在て山林の游びを樂

しみし者が今復官游の身と爲る、其の境遇から見て今夜舊游即ち司空曙が事を戀ふ念を生じたるなり、秦地は長安を指す、故人成遠夢長安に於て手を攜へて游びし故人は死すもあり、去るもあり、遠夢の如く感ず、楚天は今宿する滁浦の地を指す、多雨在孤舟蓬窗を打つ雨聲、何ぞ聞くに堪んや、諸溪近海潮皆應今日の江蘇省滁安府が即ち滁浦なれば黄海に臨んで、我邦横濱の如き處、素隱は峽中にて山多き處と云ふ、此の邊の山は極めて淺く、北方の如き高山は曾て無し、獨樹邊滁葉盡流滁に邊うて種る獨樹は落葉が他へは飛ばず盡く水に入て流れ去る、暗に自身の獨杭州に向ふを云ふなり、滁浦と杭州と相去る最早支那里、百里餘、別恨轉深何處窩窩すと云ふは我が長安を去て此に來る恨みを何處の物を目當として咏寫せんやとなり、前程唯有一登樓魏の王粲は憂を寫さんと欲して樓に登り「登樓賦」を作る、我も亦別恨を寫すには王粲に倣うて登樓の一法あるのみ、一は司空曙の方を望み、一は長安を望み、一は我が懷を寫さんとなり、

【評論】此の篇、第二句の戀舊游の三字より他の五十三字を運轉すること自由自在の法を見るべし、起句も對句なることも知らざるべからず、一の字二字有るは病とす、在と有とは妨げざるも巧とは言ひ難し、李と曙との交游の深き、白と元との如き其の集に就て見るべし、

尋郭道士不遇　白居易

郡中乞暇來尋訪　洞裏朝元去不逢　看院只留雙白鶴
入門唯見一青松　藥爐有火丹應伏　雲碓無人水自春
欲問參同契中事　未知何日得相從

郡中に暇を乞うて來つて尋訪す、洞裏元に朝して去つて逢はず、看院只留む雙白鶴、入門唯見る一青松、藥爐火あり丹應に伏すべし、雲碓人なくして水自ら春く、參同契中の事を問はんと欲す、未だ知らず何れの日か相從ふことを得ん、

【略傳】白居易字は樂天、其の先は太原の人、華州の下邽に徙る、貞元十六年進士及第し、元和對策して翰林學士と爲る、事に因て江州の司馬に貶す、左拾遺に遷る、忠州の刺史に徙る、入つて司門員外郎と爲る、主客郎中を以て知制誥たり、長慶中に中書舍人より杭州の刺史と爲る、會昌の初、刑部尚書たり、致仕し六年にして卒す、年七十五、尚書右僕射と贈す、

【句釋】郭●●は仙道を修習する者、傳は未詳、郡中は郡衙、樂天が江州司馬の時、乞暇官の

休暇を乞ふ、而して道士を尋訪す、然るに洞裏は道士の住觀、僧なれば寺なり、朝元は道士の祖たる玄元李老君の處に去られしなり、去不逢遇と逢とは大抵字義同じ、看院は俗語の留守居役を云ふ、仙院を看護するゆゑ看院なり、只留雙白鶴道士の留守を司どるは只雙白鶴のみ、入門唯見一青松鶴あれば松あり、松あれば鶴あり、藥爐有火丹應伏爐中を見れば活火あり、定めし丹砂を燒く火ならん、雲碓は雲母を搗く碓なり、雲母は石藥、無人水自春「キララ」を搗く水車の機械は人を勞せず自ら春づく、欲問參同契中事「參同契」は魏伯陽が著はす所の書名、素隱の注に曰く、魏伯陽古文の龍虎二經を得て盡く妙旨を得、因て其の象を約して參同契上中下三卷を著はす、宋の寶祐二年儲泳、序を作つて曰く、魏先生龍虎を祖として周易參同契を作る、實は河圖に出たるものなり、坎離の九一を以て藥物と爲し、卦氣の分至を以て火符と爲す、私に云ふ分至とは春分秋分夏至冬至の類、九一とは九は陽數の極、一は陽位の初を云ふ、龍虎の二經は道家に於て易家の河圖洛書の樣なるものと見ゆ、樂天は此の書中の事を道士に問んと欲するなり、未知何日得相從今日相訪うて相遇はず、又何れの日にか相從うて其の理を聞くを得んや、

【評論】此の篇、一二は之を尋ぬる所以を敘し、三四五六は道士不在中の所見を敘し、七八は

我が情に歸宿す、舊注に一意の格と云ふ、

早秋寄題天竺靈隱寺

賈島

峯前峯後寺新秋　絶頂高窗見沃州　人在定中聞蟋蟀
鶴曾棲處掛獼猴　山鐘夜度空江月　汀月寒生古石樓
心憶懸帆身未遂　謝公此地昔曾游

【句釋】早秋は七月、寄題は遠方に在つて詩を作りて寄題する、來游にはあらず、天竺寺と靈隱寺との二寺、浙江の杭州府、西湖を隔つ數里の地に在り、上天竺寺と中天竺寺と、下天竺寺との三寺あり、靈隱寺は一寺、勝景は靈隱を以て第一とす、晉の咸和元年、西天の僧惠理歎じて曰く此は是れ天竺靈鷲山の小嶺なり、知らず何れの年にか飛來する、佛釋迦在世多く仙靈の爲に隱せらる、今此も復爾り、因て錫を靈隱寺に挂けて飛來峯と號す、峯前峯後寺新秋舊注に峯

前は天竺寺、峯後は靈隱寺と、大に誤る、天竺の峯前峯後も、靈隱の峯前峯後もの意なり、絕頂高窗見沃州此の飛來峯頂の高窗卽ち寺の窗より沃州の羣山が見ゆる、越州の新昌縣の東に當りて此の山有り、人在定中聞蟋蟀人とは寺僧を云ふ、僧は坐禪の房に在つて瞑目端坐す、特に蟋蟀を聞く爲にはあらず心息を觀ずるが爲めなれども、靜寂なるを以て蟋蟀の聲が特に響くなり、鶴曾棲處挂獼猴鶴の昔棲息せし高樹今日は獼猴が挂る卽ち遊び居るなり、山鐘夜度空江月江を度り來る鐘の響き特に人の心耳を澄ましむ、空江の空は靜の意味、空江と云ふ名詞にあらず、汀月寒生古石樓石崖上の梵樓に影を移す所の月は、汀卽ちナギサより生ずるものなり、江も汀も共に西湖と見て可、心憶縣帆は心中に此に一遊せんと憶ふなり、舟江の期望を云ふ、身未遂此の三字にて「寄題」の題意を表はす、謝公は晉の謝安、此地昔曾游謝安常に臨安の山中に在つて石室に坐して瀑谷に臨んで悠然として歎じて曰く此れ亦伯夷と何ぞ違からん、東山に靈隱寺が西湖の靈隱寺と同名なりしを以て用ひしものならん、杭州の靈隱寺は謝公の游びし事なし、

【評論】 此の篇、天竺靈隱二寺の勝を叙し悉くして全く餘蘊なし、遠景近景、之に加ふるに情思を以てす、暗に自身を謝公に比する者の如きは浪仙の抱負を窺ふに足るなり、曾二字あるは

亦小疵とす、

題宣州開元寺水閣 杜牧

六朝文物草連空 天淡雲閒今古同 鳥去鳥來山色裏
人歌人哭水聲中 深秋簾幕千家雨 落日樓臺一笛風
惆悵無因見范蠡 參差煙樹五湖東

六朝の文物草空に連る、天淡く雲閒にして今古同じ、鳥去り鳥來る山色の裏、人歌ひ人哭す水聲の中、深秋簾幕千家の雨、落日樓臺一笛の風、惆悵す范蠡を見るに因なきことを、參差たる煙樹五湖の東

【句釋】 宣州開元寺の事は前卷絕句の下に於て已に辨せり、六朝も已に辨せり、文物は文華風物を云ふ、六朝時代の文華風物の盛んなるは今見るべからず、今見る所は草連空草が一面と云ふ意味、草が生長して居ると見るも亦可、天淡は天の色を云ふ、雲閒は一本雲開に作る、閒の誤字ならんと思ふ、開では淡に切ならず、今古同自然界の事は今も古も同じ、鳥去鳥來山色裏一鳥去るも一鳥來る、山色を喜ぶ者の如し、人歌人哭水聲中『列子』に衆人且歌ひ衆人且哭す

とある、『拾遺記』に水、石に激する聲、人の歌ふに似たり、今の句水聲を形容し、且實際人が今を歌ひ古を哭する事を形容す、●●秋は八月、簾幕千家雨水閣の上より下方を瞰れば雨の爲め千家悉く簾を下し幕を垂れる、落日は夕暮を云ふ、必ず晴天のみ用ふる語にあらず、樓臺一●●笛風何處の樓臺なるを知らず、笛聲を送り來る、雨は見る所、笛は聞く所、惆悵無因見范蠡宣州は吳の宣城郡、范蠡が越王を助けて吳を亡ぼし、功成り名遂げて身退く、今日は其の范蠡を見ること能はざるを惆悵す、卽ち自身を傷む意も含む、參差は高低と略同意、煙樹五湖東『吳越春秋』に蠡扁舟に乘じて三江を出で五湖に入る、人其の適く所を知ること莫し、太湖に五湖あり曰く滆湖曰く洮湖曰く射湖曰く貴湖及び太湖、太湖の小支太湖に連なる故に總じて太湖と云ひ又五湖と云ふ、范蠡が西施を引き具し、其の湖中へ沈めしとの說もあり、杜牧は美人を好む性より、范蠡が西子を具して五湖に隱れしを羨むと素隱和尙辨ず、牧が意必ず然るにあらざるなり、

【評論】此の篇、本集の題に「題二宣州開元寺水閣一閣下宛溪夾レ溪居レ人」とあり、宛溪は源嶧山より出、流れて城東を繞る、其の溪を夾んで人を居らしむ、溪の西岸に人家が在るなり、寺に游んで明鏡心燈の事を言はず、千家の簾幕、一笛の樓臺を言ふ、杜が佛典を讀まず、又禪理に通

せざること見るべし、王右丞をして此の題を作らしめば、其の品格の高き幾等なるを知らざるものあらん、謝茂秦は此の詩を評して韵短調促、抑揚の妙無しと、

長安秋夕　趙嘏

雲物凄涼拂曙流　漢家宮闕動高秋
長笛一聲人倚樓　紫艷半開籬菊淨　紅衣落盡渚蓮愁
鱸魚正美不歸去　空戴南冠學楚囚

雲物凄涼として曙を拂つて流る、漢家の宮闕高秋を動かす、殘星數點雁塞に橫はり、長笛一聲人樓に倚る、紫艷半ば開いて籬菊淨く、紅衣落ち盡して渚蓮愁ふ、鱸魚正に美なれども歸り去らず、空しく南冠を戴いて楚囚を學ぶ、

【句釋】●●●長安秋夕趙嘏は浙江の人なるが、長安に寓し、未だ進士第に上らざる時の作、秋は早中、晩の三秋あり、是れ早秋とす、雲物は『左傳』に分至啓閉、必ず雲物を書すと、天地山川の氣象を云ふ、凄涼●はサビシキ形容語、拂曙流●は朝來より晴景なるを言ふ、漢●家宮闕●は長安城、

動高秋高秋に動くもの唯宮闕にあらざるも題意に切ならしめん爲め宮闕を出す、高天の秋景○城中に滿たざるは無し、殘星數點の中に雁橫塞塞上に雁の橫はるは秋高ければなり、長笛一聲の中に人倚樓樓上に人の倚るは笛を吹けばなり、一聲を聞く者は趙嘏なり、紫艷は菊花の紫色麗艷を言ふ、半開雛菊淨中秋や晩秋なれば菊は全開、半開とあるに依て知る早秋なることを、是れ陸上の景、紅衣落盡紅色の蓮花は已に落盡す、蓮は夏日の物にして秋日の物にあらず、渚蓮愁落と雛とにて水陸を分つ、是れ水上の景、鱸魚正美不歸去張翰は秋風の起るを見て、鱸魚の美と蓴羹の味を思ひ、遽かに故鄉に歸る、然るに我は鱸魚の美を思はざるにあらず如何せん未だ衣錦ならざる者、遂に歸去する能はず、空戴南冠學楚囚昔し晉侯鍾儀を見て問て曰く南冠にして繫がれたる者は誰ぞ、有司が曰く鄭人獻ずる所の楚囚なり、今我も南方卽ち吳中の風俗をして北方の長安に居寓するは鄭人獻ずる所の楚囚の如き者に類すとなり、

【評論】此の篇、題目の秋夕、早秋と晩秋と秋望との三異本あり、素隱は曰く雲物の凄涼たるを見、秋懷を起し、終日止まず夜に入るまで感慨多し、終夜一睡もせず、今夜も早や明方になり衆星皆西に流れ、今は唯數點を餘すのみ、此の師秋夕の題意を悟しまず、夕に作りて曉に達したるものと定むる如し、今時寧齋曰く起句に「拂曙」の二字あり、題して「秋夕」といふ全

く相矛盾す、『本集』に長安早秋○『才調集』『唐詩鼓吹』に長安晩秋○と云ふ、皆夕字を題せず、傳寫の誤ならんと辨じ、而かも早秋か秋望か晩秋かを言はざるは何ぞや、今、半開と鱸魚とを以て考ふれば早秋なる如く、紅衣落盡の語を重く見れば、晩秋なるが如く、甚だ以て明瞭ならず、余をして言はしむれば、「秋望」と爲すを以て第一とす、必ず早晩を定むるの要なし、何ぞや時節に依りて花の開落遲速あればなり、『才子傳』に曰く嘏曾て浙西に家す、家に愛姬あり、嘏の出る、留めて母に侍せしむ、會ま中元に鶴林寺に游ぶ、浙の師、長官なり寵ひ見て之を悅び奪うて歸る、明年嘏及第す、然るに此の事あり、詩を賦して曰く寂寞たる堂前日又曛す、陽臺は去て不歸の雲と作る、當時聞く說らく沙吒利と、今日靑娥使君に屬す、師之を聞て殊に慘慘、介を遣はし姬を送りて長安に入る、時に嘏方に關を出で汴橫水驛に次す、馬上に於て相逢ふ、姬因て嘏を抱て痛哭す、信宿にして卒す、遂に橫水の陽に葬むる、嘏思慕已まず、臨終に目に見る所ありと、時方に四十、幾ばくも無く嘏亦卒すと、薄命の才人、亦憐まざるべけんや、杜牧長笛一聲の句を嘆じて「趙倚樓」と稱するに至りては嘏知己無きの恨は無きなり、實に第四句は千秋不朽の名句とす、

宿山寺　項斯

栗葉重重覆翠微　黃昏溪上語人稀　月明古寺客初到
風度閒門僧未歸　山菓經霜多自落　水螢穿竹不停飛
中宵能得幾時睡　又被鐘聲催著衣

栗葉重重翠微を覆ふ、黃昏溪上語人稀なり、月明かにして古寺客初めて到る、風度つて閒門僧未だ歸らず、山菓霜を經て多くは自ら落ち、水螢竹を穿つて飛ぶことを停めず、中宵能く幾時か睡ることを得んや、又鐘聲に著衣を催さる、

【略傳】項斯字は子遷、江東の人、會昌四年の進士、潤州丹徒縣の尉と爲る、尙書楊敬之、雅其の詩を愛す、至る所之を稱して嘗て詩を贈りて云ふ、平生不レ解レ藏二人善一、到處逢レ人說二項斯一、名此を以て益顯る、

【句釋】宿山寺潤州の寺ならん、未詳、栗葉重重覆翠微栗の葉が盛んに茂りて山に滿つ、黃昏溪上語人稀上る者は上り、下る者は下り、黃昏ならんとして溪上には人已に稀、月明古寺客初

到客とは項自身を云ふ、風度閒門僧未歸月は嶺上に在り、風は林間を度る、而かも門猶ほ閉さざるは山僧下山して未だ歸らざる故なり、山菓經霜多自落暗に山僧の慾念無きを云ふ、山僧に慾念有る時は菓物の自ら落ちるを待んや、水螢穿竹不停飛暗に山僧が慈念あるを云ふ、山僧に慈念なければ秋晩に至るまで螢豈飛んや、中宵能得幾時睡山中の幽味、偶ま來り掬す、夜睡る能はず、又被鐘聲催著衣熟眠する能はざる間、已に曉鐘を聞て起て衣を著るを促さるるに至る、

【評論】此の篇、山寺の靜趣を描寫して太だ巧妙と爲す、客初到の仄平仄に對し、僧未歸の平仄平を以て承け、幾時睡の仄平仄に對し、催著衣の平仄平を以てす、律詩の正法眼藏として傳へざるべからず、其の句句實況なることは山中に住したる者は自ら首肯すべし、何ぞ贅言を要せん、

題永城驛　薛能

秋賦春還計盡違　自知身是拙求知　惟思曠海無休日
却喜孤舟似去時　連浦一程兼汴宋　夾堤千柳雜唐隋
從來此恨皆前達　敢負吾君作楚詞

秋賦春還つて計盡く違ふ、自ら知る身は是れ知を求むるに拙きことを、惟思ふ曠海休日なからんや、却つて喜ぶ孤舟の去時に似ることを、浦に連るの一程汴宋を兼ね、堤を夾むの千柳唐隋を雜ふ、從來此の恨皆前達、敢て吾君に負いて楚詞を作らんや、

【句釋】●●永城驛は河南省歸德府永城縣治なり、●●秋賦とは鄉貢なり、縣とか郡とかにて選出せられ京城に向つて考試に及第せしむるを云ふ、●●春還京に在て冬を過ぎ春に向つて鄉へ還る、落第して還るが故に計●●違と云ふ事志と違うたるなり、●●自知身是拙●●求知試驗官に知己もあらば、落第せざりしも計られず、己は知己無きを以て遂に落第せり、然らば、我が拙なる反對に巧なる者が一方に在ると勿論なり、時代の狀態を發揮すと謂ふべし、惟思曠海●●無休日道行はれずんば桴に乘じて海に浮ばん、海は常に滔滔として休日無し、却●●喜孤舟似去時●●●夷門卽ち大梁城より舟に乘じ鄉に歸らんとして此の永城驛に至る、孤舟は自身乘る舟、去時は桴に乘じて去る時、道の行はれざる時は去ると云ふ孔子の意を以て此の句に寄す、膽亦大なりと謂ふべし、連浦一●●●程兼汴宋汴州と宋州とは河南に在り、永城驛に鄰接す、浦上の一路、此の二州に通ずとなり、

●●●夾堤千柳●●●雜唐隋長安より江都へ向ふ路次の堤上植うる所の柳隋柳と唐柳とを混ず、●●●從來此恨皆●●●前達余が及第せざる恨みは余一人ならず古來の達人も大抵は然りと云ふ意、●●●敢負吾君作楚詞屈原は君に負いて身を水に投じ楚辭と云うて君を恨む言辭を千秋に餘したるが余は身不遇なりとも屈原の如く君を恨む如きことは爲さずとなり、君は卽ち天子を指す、

【評論】此の篇、極めて其の本能を發揮して藏す所なきもの、薛能は誇大狂にして其の人物固より論ずるに足らざるもの、此の詩に就て彼此評するの愚なるを信ず、此の詩は要するに此の選本より除去すべきものなり、

慈恩偶題

鄭谷

往事悠悠成浩歎　浮生擾擾意何能　故山歲晩不歸去
高塔晴來獨自登　林下聽經秋苑鹿　溪邊掃葉夕陽僧
吟餘却起雙峯念　曾看菴西瀑布冰
往事悠悠浩歎を成す、浮生擾擾竟に何ぞ能くせん、故山歲晩るれども歸り去らず、高塔晴れ來りて獨自ら登る、林下に經を聽く秋苑の鹿、溪邊に葉

を掃ふ夕陽の僧、吟餘却つて起す雙峯の念、曾て看る菴西瀑布の氷、

【句釋】慈恩は寺なり長安に在り、●●は偶然來つて題したるなり、及第の人は此の寺に來つて其の名を雁塔に題すること唐時の習慣と爲す、往事●●●●●●作者が今此の寺に來り、雁塔の題名を見るに就きても種種の感想生じ浩浩たる嘆息を發せざる能はず、往事は自身の事も前代の事も過去に屬する事總て此の中に籠る、浮生●●●●●●我は第一に及第したり、我は高官に上りたりと紛紛擾擾として聞く所なるが、世は到底浮生なり、五十年百年榮も達も富も貧も竟に同一穴、何事をか果して能くせんや、故山は作者の故郷卽ち袁州の山、●●●●●●故山に迎へずして他鄉に歲を送るは、游子の尤も嘆息する所なり、高堂●●●●●●は六級にして高さ三百尺、貞觀二年玄奘が印度より梵本を攜へ歸り之を藏せんが爲め建しものなり、鄉に歸らず却て他鄉の塔に登る、林下●●●●●●やを知らず、佛敎の愛護の理を言ふと見ても可なり、經を聽くの鹿は亦佛性を具有する意、●●●●●●邊掃葉夕陽僧夕陽に當り落葉を掃ふ僧は卽ち釋迦牟尼佛が自ら竹林精舍の庭を掃はれし故事を用ふ、但寂寥なる景を詠するにはあらず、深理を含めるものなり、吟餘●●●●●●詔州府曲江縣に曹溪あり、此の曹溪に雙峯寺あり、晉の代曹●●●●●●叔良が私宅を寺と爲ししもの禪

法を弘通する道場とす、鄭谷が今慈恩寺に登りて吟哦し却て昔雙峯寺に游びし事を憶起する、●●●●●●曾看庵西瀑布氷雙峯寺に於て曾て瀑布の氷を看し事あり、玲瓏一塵も著けざる底の佛法を知る慈恩の俗寺に比すれば淸淨なりと裏面に其の意を云ふ、表面に現はれざるを以て評家多く此の事を知らず、余の特筆する所以、

【評論】此の篇、寺に題する詩として頗る理を得たるもの、慈恩の敎寺に題するに曹溪の禪寺を賞す、作者乃ち禪法に於て悟入する所あるか、是の故に句として圈破すれば其の重きと結二句に在り、齋齋起句より六句に至る盡く圈し七八の二句圈せず批せず、何等の意たるを知らず、」李端の宿淮浦より此に至る九首、前虛の處に、景物を用ひて情思を叙し、後實の處に直に景物を言ひ、結句に至り情思を叙ぶるの作法を示したるなり、

都城蕭員外寄二海棠花一　羊士諤

珠履行臺擁二附蟬一　外郎高步似二神仙一　陳詞今見唐風盛
從事遙瞻魏國賢　擲地好辭凌二綵筆一　浣花春水膩二魚牋一
東山芳意須同賞　子着囊盛幾日傳

珠履の行臺附蟬を擁す、外郎の高步神仙に似たり、陳詞今見る唐風の盛なるを、從事遙る瞻る魏國の賢、擲地の好辭綵筆を凌ぎ、浣花の春水魚牋に膩つく、東山の芳意須らく同じく賞すべし、子を著け囊に盛て幾日か傳へん、

【略傳】羊士諤は知を李吉甫に受く、又最も呂溫と善、薦めて御史と爲す、又嘗て資州刺史と爲る、後、汀州寧化縣の尉と爲る、其の性頗險、公事を以て京に至る、時に王叔文事を用ひ、其の非を公言す、叔文之を聞て怒り、詔を下して之を斬んと欲す、韋執誼不可と爲す、遂に貶せらる、

【句釋】蕭員外●●が海棠花と云ふ詞曲を羊に寄贈せらる、此の詩以て謝を言ふなり、珠履●●は「タマノクツ」楚の春申君、食客三千人、悉く珠履を穿たしむ、今以て蕭に比喩する、行臺●●は官名、蕭に附隨して參內する人を言ふ、擁附蟬●●冠の飾を附蟬と云ふ、脚下は珠履、頭上は附蟬、盛裝の狀見るべし、外郎高步似神仙蕭は多數の隨員を隨がへて步する態、堂堂として神仙かと疑はしむ、陳詞は蕭が詩を指す、陳は「ツラネル」なり、今見唐風盛蕭は晩唐に近き人なるが、詩

は盛唐時代の風が有ると嘆ずるなり、從事は隨行する役人、遙瞻魏國賢外郎は隨行する人は恰かも魏の曹子建卽ち陳思王に隨つて游ぶ王粲や陳琳の如き賢者なり、遙の字は唐より魏は世已に遙遠なり、擲地好辭凌彩筆晉の孫綽が賦を作りて范榮期に示して曰く卿が賦は地に擲てば當に金聲を作すべし、後漢の蔡邕が曹娥が碑に題して云ふ、絕妙好辭と、梁の江淹が郭璞を夢む、五色の筆を取り去る、後に詩を爲る、絕て美句無し、郭璞に美句無きは江淹が綵筆を奪ひ去ればなり、今此の三故典を運用して以て蕭が文彩を讃嘆す、浣華は蜀中の溪の名、春水膩魚牋浣華にて製する紙を魚牋と名く、又金花魚子と名く、春時に製するを以て膩ぎると云ふ、奇麗なるを云ふ、東山芳意復同賞謝安が妓を攜へて東山に游びし事あり、今我と君と妓を攜へて同じく賞す、子著囊盛幾日傳晉の王羲之が「來禽帖」に云ふ日給の藤子、皆囊に盛るを佳と爲す、函封すれば多くは生ぜず、與に子を致すべし、當に之を種うべし、詩の意は、蕭が詞曲を寄せられたるは例せば謝安の妓が曲を奏する如く、同じく我も賞すべし、依て願くば花のみならず其の子をも寄贈し玉へとなり、我邦に多くある海棠は子無きもの然るに眞の海棠は秋子を結んで食ふべきものなり、

【評論】此の篇、多く故事を用ひて故事の爲めに使役せられざる所、正に其の技倆を見る、詩

流麗極まり無し、

陳琳墓　　溫庭筠

曾於青史見遺文　今日飄零過古墳　詞客有靈應識我
覇才無主始憐君　石麟埋沒藏春草　銅雀凄涼起暮雲
莫悵臨風倍惆悵　欲將書劍學從軍

曾て青史に於て遺文を見る、今日飄零して古墳を過ぐ、詞客靈あらば應に我を識るなるべし、覇才主無くして始めて君を憐む、石麟埋沒して春草に藏し、銅雀凄涼として暮雲起る、悵しむこと莫れ風に臨んで倍す惆悵することを、書劍を將て從軍を學ばんと欲す、

【句釋】●●琳字は孔璋、廣陵の人、曹操其の才を愛して以て司空と爲し記を管せしむ、軍國の書檄多くは琳が作る所、嘗て草して操に呈す、操先きに頭風に苦しむ、琳が作を讀み翕然として起て曰く此れ我が疾を愈すと、數ば厚賜を加ふ、●●●

を指すなれば、對句として此れは作者に屬すとの考へならんや、一人の事を二句へ拆き用ふる例多し、獨此の篇のみならず、

鸚鵡洲眺望　　崔　塗

悵望春襟鬱未開　重臨鸚鵡益堪哀　曹瞞尙不能容物　黃祖何曾解愛才　幽島暖聞燕雁去　曉江晴覺蜀波來　誰人正得風濤便　一點征帆萬里回

悵望すれば春襟鬱として未だ開けず、重ねて鸚鵡に臨んで益す哀しむに堪へたり、曹瞞尙ほ物を容るること能はず、黃祖何ぞ曾て才を愛することを解せん、幽島暖にして燕雁の去るを聞き、曉江晴て蜀波の來るを覺ゆ、誰人か正に風濤の便を得て、一點の征帆萬里より回る、

【略傳】崔塗字は禮仙、光啓四年の進士、壯歲にして巴蜀に游び、老大にして隴山に游ぶ、家を江南に寄す、每に離怨の作多し、

【句釋】鸚鵡洲は三國の時、黃祖が禰衡を殺して埋めし處、鄂州の江中に在り、悵望春襟鬱未

開禰衡が才を抱きながら非命に死したることを思へば我が春襟は鬱として開く能はず、重臨鸚鵡再游したるゆゑ重なり、益堪哀我も禰衡の如き運命なるかと考ふれば哀しまざるを得んや、曹瞞曹操の字を阿瞞と云ふ、尙不能容物禰衡は英主に事へんと欲して曹瞞の處へ行く、曹瞞は小器禰衡の才を抱きて兀傲なるを忌み、之を放逐して、江夏へ遣る、黃祖は江夏の太守、何曾解愛才黃祖は無智妄昧の徒、何ぞ禰衡を用ふるの量あらんや、遂に才を愛せず才を忌み之を殺して此に埋む、幽島は此の洲を云ふ、暖聞燕雁去燕は鳥にはあらず國の燕なり、燕國の天に向つて雁が去る聲を聞く、燕は國名、平用、鳥名仄用は小兒も知る所、曉江は浙江を指すものの如し、晴覺蜀波來浙江に水の滔滔たるは是れ巴蜀の氷が融じて流れ來るが爲めなりと知る、誰人正得風濤便眺望する所、誰人かは知らず、風濤の穩かなるに利便を得て、一點征帆萬里回回る者は得意、望む者は失意、羨むの意窮まり無し、

【評論】此の篇、禰衡を揚ぐる爲め、曹瞞と黃祖を抑へ、一は物を容るるの量なく、一は才を愛するの機なきを罵しる、後世の詠史家、宜しく此の篇を熟讀すべし、

繡嶺宮

古殿春殘綠野陰　上皇曾此去泥金　三城帳屬昇平夢

一曲鈴關悵望心　苑路暗迷香輦絕　繚垣秋斷草煙深
前朝舊物東流在　猶爲年年下翠岑

古殿春殘る綠野の陰、上皇曾て此に泥金を去つ、三城の帳は昇平の夢に屬し、一曲の鈴は悵望の心に關す、苑路暗に迷うて香輦絕え、繚垣秋斷えて草煙深し、前朝の舊物東流在り、猶ほ爲に年年翠岑より下る、

【句釋】●●繚嶺宮は陝州の峽石縣に在り、唐の高宗顯慶三年に置く、玄宗も開元十三年に封禪の祭を此の宮に爲す、古殿春殘綠野陰晩春初夏の候、崔湜が來りし時節、●●上皇は玄宗なり、曾●●此去泥金玄宗が封禪の時、此に於いて金櫃を以て玉璽金檢を承け、之を纏ふに金繩を以てし、之を封するに金泥を以てし、印するに受命の璽を以てす、禮を行うて妃を立て風を九州に省し、金を五岳に泥る、故に云ふ去泥金と、去は捨と同義、金泥の如き貴きものを惜しまず用ひたるを言ふ、●●去は金を用ひざるの說は今取らず三城帳尙書が行幸に供奉して三部の帳を設け、其の外蔽は以て城を排す、●●●屬昇平夢其の事が今日より見れば天下昇平の時の一夢に屬するのみ、一●●曲鈴楊太眞が馬嵬驛にて殺されし後、玄宗が都に歸り情に堪へずして自ら作りし曲を「雨霖鈴曲」と云ふ、太眞と共

に蜀へ出奔せし時、霖雨旬に涉り、道に鈴聲を聞きし事を忘れ難き爲めなり、●●●

前實後虛

周弼曰く其の說は五言に在り、然れども句既に長きときは飽滿に易し、景物情思互に相揉拌して痕跡無く、唯才餘り有る者之を能くす、」前聯は景を叙し、後聯は情を叙す、實は景なり、虛は情なり、其の虛實を留與して景中に情あり情中に景あり、彼は虛、此は實と斧鑿の痕あるは未だ至らざるものとす、乃ち張南史の春山道中を以て初入の法門と爲す、

春山道中寄孟侍御　　張南史

春來游子傷歸路」時有白雲邀獨行」水流亂赴石潭響
花發不知山樹名　誰家魚網求鮮食」何處人煙事火畊」
昨日已嘗村酒熟」一盃思與孟嘉傾」

春來游子歸路を傷む、時に白雲の獨行を邀ふるあり、水流亂れ赴いて石潭響く、花發いて知らず山樹の名、誰が家の魚網か鮮食を求むる、何れの處の人煙ぞ火畊を事とする、昨日已に村酒の熟せるを嘗む、一盃孟嘉と傾け

んことを思ふ、

【略傳】張南史字は李直、幽州の人、試參軍を以て亂を避け揚州に居る、再び召す、未だ赴かずして卒す、

【句釋】孟は姓、侍御は官名、其の人未詳、游子は張南史自ら云ふ、傷歸路亂を避け揚州へ歸る、種種と傷懷多し、時有白雲邀獨行白雲は青雲の反對、青雲は榮達なり、白雲は隱淪なり、況んや獨行を邀ふ、寂寥の氣限り無し、水流亂赴石潭響道中見る所、溪流の狀、花發不知山樹名道中見る所、山花の態、誰家魚網求鮮食『尚書』に「庶を奏して鮮食せしむ」とある、水上の景、何處人煙事火畊『漢書』に曰く草を燒て水を下し稻を種る、草稻と並び生ず、交り去て水を下せば草死れて稻活す、是を火畊と云ふ、陸上の景、此の二句十四字、共に兵亂を知らずして生活して居る人の狀を云ふ、昨日已嘗村酒熟新酒を昨日獨飮したるに味太だ宜し、一盃思與孟嘉傾獨飮は興味少なし、故に孟嘉と共に飮まんと思ふなり、晉の孟嘉は桓溫が幕府參軍と爲る、九日龍山に游んで同僚と酒を飮む、風吹て嘉が帽を落す、嘉知らず、桓溫問て曰く酒何の好きこと有つて卿之を嗜むや、曰く明公但酒中の趣を得ざるのみ、侍御の姓、孟なり、以て喩ふ、徒らに古人を出したるにはあらず、

【評論】此の篇、一種の拗體作法なり、全首自らの事を詠じ結句僅かに寄する所以を叙す、邀獨行の三字より意義の生ずること亦律體の正法、

早春歸鹽厓[寄耿湋李端]　盧綸

野日初晴麥隴分　竹園村巷鹿成羣　萬家廢井生新草
一樹繁華對古墳　引水忽驚氷滿澗　向田空見石和雲
可憐荒歲青山下　唯有松枝好寄君

野日初めて晴れて麥隴分る、竹園村巷鹿羣を成す、萬家の廢井新草を生じ、一樹の繁華古墳に對す、水を引かんとして忽ち氷の澗に滿つるに驚き、田に向つて空しく石の雲に和することを見る、憐むべし荒歲青山の下、唯松枝のみありて好し君に寄するに、

【句釋】鹽厓は縣の名、陝西省鳳翔府、今の詩は鹽厓縣の鹽厓山なり、耿湋と李端二人なり、野日初晴野村の日が初めて晴る、麥隴分晴天なるが故に麥隴が分明となる、竹園村巷鹿成羣鹿を以て兵に比す、安祿山の亂後、村里までも荒廢に及び昔日昇平の時と異なるを云ふ、鹿を眞

の鹿と解するは滑稽なり、萬家廢井生新草鹽厓は廢井多く、早春は新草多し、一樹繁華對古墳一樹の繁華は萬家の廢井に及ばず、古墳は新草に及ばず、其の憐むべき狀は共に同じ、引水忽驚氷滿澗水を引て田に灌がんと欲したるも水更に流れず、流れざるは氷が澗に滿つればなり、向田空見石和雲石より雲を生じて、雲と石と相和するなり、賊と民と和し、氷の如く人心未だ融解せず、可憐荒歲青山下鹽厓山の下、亂後にて一物も君に呈すべき物無し、唯有松枝好寄君呈すべき物は唯松枝のみ、松枝を實際に送りしにはあらず、自身の節の固きに比す、

【評論】此の篇、亂後の狀態を詠ずるに蘊藉の言を以てし、句句悉く憐む可きの景、而して題目、早春の二字全く離れず、鹽厓の荒涼たる、彷彿として眼に在り、千古不朽の佳篇とす、

松滋渡望峽中　劉禹錫

渡頭輕雨灑寒梅　雲際溶溶雪水來　夢渚草長迷楚望
夷陵土黑有秦灰　巴人淚應猿聲落　蜀客船從鳥道回
十二碧峯何處所　永安宮外是荒臺

渡頭の輕雨寒梅に灑ぐ、雲際溶溶として雪水來る、夢渚草長うして楚望を

迷はし、夷陵土黑うして秦灰あり、巴人の淚は猿聲に應じて落ち、蜀客の船は鳥道より回る、十二の碧峯何の處の所ぞ、永安宮外是れ荒臺、

【句釋】●●●松滋渡は江陵に屬す、●●●望峽中此の松滋渡を超ゆれば峽州と爲る、禹錫峽州へ謫せらるる時の作、●●●渡頭輕雨灑寒梅渡頭に於て先づ目に觸れし景、●●●雲際溶溶峽中の地、漸漸として高し、故に雲際と云ふ、溶溶は水の盛なる貌を云ふ、●●●雪水來雨の爲め雪が融じて天外より來る、夢渚は雲夢澤」地名を云ふ、●●●●●草長迷楚望峽中は卽ち古の楚國、今渡頭より之を望むに草の長き爲め何處とも判然せず、是の故に迷ふなり、楚の昭王曰く江漢睢漳楚の望なり、顏延年が詩に「江漢楚壃を分つ、」夷陵は峽州なり、毛遂楚王に說て曰く白起は一豎子のみ、一たび戰うて鄢郢を擧げ、再たび戰うて夷陵を燒く、●●●●●土黑有秦灰今に至るまで戰國の時、白起が燒きし灰有るに由て土色は黑し、●●●●●巴人淚應猿聲落峽中は猿多し、巴國の人は此の猿聲を聞き斷腸の思に耐へざる也、●●●●●蜀客船從鳥道回鳥道は小さな道、其の小さな道より蜀客は回る、蜀道の高處を通過し來ると云ふ意味、●●●十二碧峯巫山の十二峯は峽中に在り、四時色碧、頂に神女廟あり、●●何處所「イヅクゾ」と三字で訓む、今水夫に問ふなり、●●●●永安宮外是荒臺夔州の奉節縣に永安宮あり、劉備の崩

ずる所、先主を慕ふ意ありと素隱評す、慕ふ意は全く無きなり、句法として言及したるのみ、

【評論】此の篇、題目の望字を注して一篇を成すもの、一一望中の景ならざるは無し、世、禹錫を推して詩豪と爲す、眞に詩豪の名に背かず、

春日閒坐

官曹崇重難頻入　第宅淸閒且獨行　堦蟻相逢如偶語
園蜂速去恐違程　人於紅藥偏憐色　鶯到垂楊不惜聲
東洛池臺怨抛擲　移文非久會應成
官曹崇重にして頻りに入り難し、第宅淸閒にして且獨り行く、堦蟻相逢うて偶語する如く、園蜂速に去て程に違はんことを恐る、人は紅藥に於て偏に色を憐み、鶯は垂楊に到つて聲を惜まず、東洛の池臺怨むらくは抛擲せしことを、移文久しきに非ず會ま應に成るべし、

【句釋】●●●●春日閒坐は春風に對して閒居無事を詠ず、●●官曹は役人輩なり、●●崇重は威嚴を示すを云ふ、難頻入再三の訪問は能はずとなり、己れは朗州の司馬なるが、其の上役の所へは度度行き

がたし、其の故は嚴格に過ぎて面白くなきなり、第宅は我が邸を云ふ、淸閒且獨行題目に獨坐とあるに支障する如くなるが決して支障せず、庭園など散歩する意味を獨行と云ふ、友も客も來らざるなり、堦蟻堦下に往來する羣蟻、相逢如偶語偶は對なり、對向して談話するが如き狀を云ふ、園蜂速去恐違程園中に飛來飛去する蜂は來りしと見る間に速かに去る、去るかと見る中に又來る、殆んど時刻に遲背するを恐るる如き狀を云ふ、世人の偶語、役人の奔走、此の二句に比するものの如し、人於紅藥偏憐色我は芍藥の紅麗を見て偏に其の色を可憐に思ふが、鶯到垂楊不惜聲鶯は我と異なり、垂楊の陰に入て聲を惜まず鳴く、君王色を好み、讒人君子を傷つくるを諷す、東洛は東方の洛陽、池臺洛陽に禹錫の本宅あり、然るに朗州の司馬と爲りては身如何ともするなし、怨拋擲留守にして置く事を怨むなり、移文『齊書』に曰く周彦倫は鍾山に隱る、後詔に應じて令と爲る、却て此の山を過ぎんと欲す、孔稚圭が北山移文を作りて之を譏る、非久會應成禹錫の意、我は東洛の人なるに長安に移り、更に朗州の司馬と爲る、然るに風聞する所、久しからずして長安に召還せらると、依て東洛へも入らんかと思ふ、されど孔稚圭如き人ありて北山移文を作りて我を譏る者あるを恐るとなり、

【評論】 此の篇、本集の題は「和二僕射牛相公春日閒坐見一懷」とあり、此の中で八字を除き去る、牛相國とは牛僧孺なり、官等は相國と司馬、大に異なるが、詩としては僧孺贊を禹錫に執りしなり、禹錫一代に於て不平なるは朗州司馬たりし時を以て甚だしと爲す、托諷の詩、大抵此の時代に成る、方外の高僧に知己多きは畢竟是れが爲めのみ、此の篇以て其の一斑を見るべし、

晏安寺　　李紳

寺深二松桂一無二塵事一　地接二荒郊一帶二夕陽一　啼鳥歇時山寂寂
野花殘處月蒼蒼　碧紗凝艷開二金像一　淸梵銷聲閉二竹房一
丘隴漸平連二茂草一　九原何處不二心傷一

寺は松桂に深うして塵事なし、地は荒郊に接して夕陽を帶ぶ、啼鳥歇む時山寂寂、野花殘る處月蒼蒼、碧紗艷を凝らして金像を開き、淸梵聲を銷して竹房を閉づ、丘隴漸く平にして茂草を連ぬ、九原何れの處か心傷せざらん、

【略傳】 李紳字は公垂、中書令敬玄が曾孫なり、人と爲り短少、時に短李と號す、憲宗の元和

中、進士と爲る、穆宗召して拾遺翰林學士と爲す、敬宗滁壽二州の刺史に遷す、文宗の開成、河南の尹と爲り、武宗の時、淮南節度使と爲り卒す、李德裕、元稹と三俊と號せらる、

【句釋】 ●●●晏安寺は亳州に在り、亳は絳州と同じ、今日の山西省絳州絳縣東南、卽ち李紳が鄉里の寺、或は謂ふ檀越寺ならん、●●●寺深松桂松林と桂樹の陰深くして寺は閒寂なり、無塵事一塵も到らず、寺の淸淨なる知るべし、寧齋は荒廢せる寺と云ふ、荒廢の理由詩に於て分明ならず、●●●北接荒郊寺の接する所、荒郊であるが、寺も荒廢せりと言ふにあらず、帶夕陽夕陽の意は曉日と異なる、寺の荒廢せる意味は此の三字より判じたるならん、啼鳥歇時山寂寂鳥聲以外に聲なければ、鳥聲歇めば山は自ら寂寂たり、●●●●野花殘處月蒼蒼人の賞する者なき野花憐れに殘る月之を照す、月影も亦蒼蒼たり、碧紗は佛堂に挂けたるもの、●●●凝艷開金像碧紗の莊嚴具ある中に金銅の佛體開く、開くは寶龕の扉が開きあるなり、●●●●●清梵銷聲閉竹房寺僧が誦經の聲消滅して後、其の竹房は閉づ、丘隴漸平連茂草●●●●●●隴上の少しく平坦なる處靑靑たる草が茂る、隴は冢なり、九●●●●●●原何處不心傷九原は元來、地下の事なるが、今地下と見るは淺し、墓原と見るを以て正しとす、丘隴の東西南北何處を見ても心を傷ましめざるもの無しとの意なり、唐以前の百官の墓地皆此の地にあればなり、

【評論】 此の篇、寧齋は評して非常に名篇なる如く言ふが、李としては至るものにあらず、前に啼鳥を出し後に梵聲を出し、同一聲に屬するものを前後二聯に出す、斷じて巧なるものにあらず、李紳は憫農の詩あり、禾を鋤いて日午に當る、汗は滴たる禾下の土、誰か知らん盤中の飧、粒粒皆辛苦、

館娃宮

皮日休

艷骨已成二蘭麝土一　宮墻依舊壓二層岾一　弩臺雨壞逢二金鏃一
香徑泥銷露二玉釵一　硯沼秖留二山鳥浴一　屧廊空信二野花埋一
姑蘇麋鹿眞閒事　須レ爲二當時一一愴懷

艷骨已に蘭麝の土と成り、宮墻舊に依て層岾を壓す、弩臺雨に壞れて金鏃に逢ひ、香徑泥銷して玉釵を露はす、硯沼は秖だ山鳥の浴を留め、屧廊は空しく野花の埋むるに信す、姑蘇の麋鹿眞に閒事、須らく當時の爲に一たび懷を愴ましむべし、

【句釋】 ●●●館娃宮は江蘇省蘇州の硯石山に在り、吳王の西施を置きし宮、吳の俗、美人を娃と云

ふ、故に美人を館する所の宮の義、艷骨已成蘭麝土一代美人を代表して天下羨望の種と爲りし西施の骨も已に土中に埋沒して見るべきなし、艷骨を埋めし土、犬骨や馬骨を埋めし土とは異なる、猶ほ蘭麝の香氣を留む、麝と云ふ獸は雲南に產するもの、宮墻依舊壓層蛾美人は已に死したるも、空墻は依然として層蛾を壓する如く聳ゆ、琴臺は美人等をして弓琴を習はしたるもの、雨壞金鍼琴臺の舊跡が雨の度毎に壞れて往往金鍼を發掘する、香徑は探香徑、美人等と共に吳王が香花香草を種ゑし徑泥銷露玉釵雨の爲め土中が壞れて往往玉釵卽ち玉の「カンザシ」が露はる、硯沼は硯石山の硯池を云ふ、秖留山鳥浴人の舟游するなければ、山鳥が得意に游浴の池と爲す、屧廊は響屧廊楩楠卽ち「クスノキ」を以て製す、西施が步行する毎に屧の音が響く、吳王は其の音を聞て一種の快意を感せしなり、空信野花埋其の廊下も今日は往來する人無く、野花空しく之を埋むるのみ、姑蘇は臺名、吳王闔閭が築きしもの、此の臺にて日夜西施と游ぶ、麋鹿眞閒事『史記』に吳王が子胥に死を賜ふ時、子胥天を仰ぎ歎じて曰く嗟乎讒臣嚭亂を爲す、王乃ち我を誅すと、他の書には子胥、吳王を諫めて曰く臣恐らくは久しからずして、麋鹿姑蘇の上に游ばんと、其の子胥の諫を用ひざるに由て遂に其の事「ムダ」になる、閒事は「ムダ」の意義なり、須爲當時一愴懷當時は吳王の時、館娃宮に游ぶ者は其の興る所以、其の亡ぶ

る所以を想うて我も彼も驕奢女色は戒しめざるべからずとなり、懷を愴ましむる者は詩人なり、俗人の知る所にあらず、

【評論】此の篇、徹頭徹尾、吳王の荒淫を諷し兼て人主の訓戒と爲す、皮日休は賊徒黃巢の爲め殺さるるに臨み、神色自若たりと、其の詩人としての人格も高しと謂ふべし、詩庸流を拔く固より其の所なり、

方干隱居　　李山甫

咬咬嘎嘎水禽聲　露洗松陰滿院淸　溪畔印沙多鶴跡
檻前題竹有僧名　問人遠岫千重意　對客閒雲一片情
早晩塵埃得休去　且將書劍事先生

咬咬嘎嘎たり水禽の聲、露は松陰を洗つて滿院淸し、溪畔沙に印して鶴跡多し、檻前竹に題して僧名あり、人に問ふ遠岫千重の意、客に對す閒雲一片の情、早晩か塵埃休し去ることを得て、且書劍を將て先生に事へん、

【略傳】李山甫は咸通間の人、『唐書』の王鐸傳に載するを按ずるに數ば進士に擧すれども黜け

らる、魏の幕内樂が禍に依て且中期の大臣を怨み樂彥禎が子の從を導き訓ふるに詭謀を以てし兵を高雞泊に伏せ劫かさしむ、王鐸が家屬吏佐三百餘人皆害に遇ふ、卽ち其の人なり、

【句釋】方干は桐盧の人、幼にして清才あり、世の營務に拙く、鏡中に隱居す、湖北に茅齋あり湖西に松島あり、家貧なるも古琴を蓄へて、行吟醉臥以て自ら娛しむ、隱居は卽ち鏡湖上なり咬咬嘐嘐は水禽の啼聲を形容す、字義は未だ詳ならず、露洗松陰滿院淸湖には水禽鳴き庭には松あり露氣之に滴たり院中皆な淸し、溪畔印沙多鶴跡溪沙に跡あるは卽ち鶴の遊びしを知る、檻前題竹有僧名竹に題したる詩は卽ち是れ山僧なるを知る、問人主人方干に問ふ、遠岫千重意山に岩穴あるを岫と云ふ、此の岫が千萬重なるを見て感興は日日起るならんと問ふ、對客甫自ら客と云ふ、閒雲一片情悠悠として何等求むる所無き雲を閒と云ふ、早晩塵埃得休去方干が自適の事を聞いて我も羨望の念起らざるを得ず、世間の塵事を休し去らんことを希ふが、それは早晩ぞや、且將書劍事先生書と劍とは諸生の離すべからざる具、是の故に此の具を携帶し來りて方干先生に師事せんと欲するなり、

【評論】此の篇、淸遠閒淡其の隱居の佳なる事想像に餘りあり、李山甫は議すべき所あるも、方干其の人の高きは全く此の詩に露はる」張南史の春山道中より此に至る七首、前實の語輕く

後實の情深きものなり、

酬李端病中見寄　盧綸

野寺昏鐘山正陰　亂藤高竹水聲深　田夫就飡還依草
野雉驚飛不過林　齊沐暫思同靜室　淸羸已覺助禪心
寂寞日長誰問疾　料君唯取古方尋

野寺の昏鐘山正に陰し、亂藤高竹水聲深し、田夫飡に就いて還た草に依り、野雉飛ぶに驚き林を過ぎず、齊沐暫く思ふ靜室を同うせんことを、淸羸已に覺ゆ禪心を助くることを、寂寞として日長く誰か疾を問はん、料る君が唯古方を取つて尋ねんことを、

【句釋】酬李端病中見寄李端が病を養うて野寺に在り詩を得て盧綸に寄す、依て之に酬いたるなり、野寺昏鐘山正陰是れ前日、盧綸が李の病を野寺に問うた時の景を叙す、夕暮ならんとして鐘鳴り山も亦暗くなる、亂藤高竹水聲深寺門の周圍に亂藤や高竹あり、其の間を流るる水聲は澗底に深く聞える、田夫畊田の野夫、就飡午時に當り正に食ふ、還依草草を敷て坐するなり、

野雉驚飛「驚き飛ぶ」と訓むときは、田夫の足音に野雉が驚き飛ぶなり、「飛ぶに驚き」と訓むときは一雉が飛べば衆雉が共に飛ぶなり、今後説を取る、且後説を以て趣致多しとす、不過林遠く奔らざるが野雉の性なり、齊沐は齋戒と沐浴、極めて身を清淨に持すること、暫思同靜室君は野寺の淨室に病を養ふなるが、我も君と同樣に梵行を暫らく修せんと思ふ、清羸は清く瘦せたること、已覺助禪心李端の清羸なる態を見ると言はずして覺る本禪心を助長するが故なるを、寂寞日長誰問疾『維摩經』に問疾品あり、佛陀が諸弟子をして維摩の疾を問はしむ、然るに諸弟子悉く維摩の爲め説破せらる、此の詩其の字面を用ひて意は反對に問ふ人の無きを言ふ、肺病なりし事分明なり、料君唯取古方尋人の問ふ者無ければ、君自ら古の醫方を把て治療法を尋ぬるならんと料り知るなり、

【評論】此の篇、一二は夕暮に訪問の事を叙し、三行以下は翌日の事を叙す、李端は今日所謂肺病の人にて、念の塵世に求むる無く、高僧皎然に依て書を讀み、意況清虚、酷はだ禪侶を慕ふ、端自ら言ふ余少にして神仙を好み、且くも去ること能はず、友人暢當禪門を以て導かる、余が心未だ其の門を得ざるを知る、是に由て之を觀れば、初め仙を學び後佛を學びしが如し、古方の二字、淨名の字に改めなば一層妙ならんと思はるるが、初め仙方を學びし事を忘れざる

爲めならん、問疾は淨名經に出る語なれば、唯其の切なるを思はしむ、

贈道士　　褚戴

簪星曳月下蓬壺　曾見東皐種白榆　六甲威靈藏瑞檢
五龍雷電遶霜都　唯敎鶴探丹丘信　不使人窺太乙爐
聞說葛陂風浪惡　許騎青鹿從行無

星を簪にし月を曳いて蓬壺を下る　曾て見る東皐に白榆を種ゑしことを、六甲の威靈瑞檢に藏め、五龍の雷電霜都を遶る、唯鶴をして丹丘の信を探らしむ、人をして太乙の爐を窺はしめず、聞くならく葛陂風浪惡しと、青鹿に騎つて行に從ふを許さんや無や、

【略傳】褚戴字は厚之、乾寧二年の進士、家貧、梁宋間に客として困すること甚し、襄陽節度使君牙に詩を投す、君牙絹千疋を贈る、後、裴贄貢擧を知し、之を薦むと云ふ、

【句釋】贈道士何人なるや未詳、簪星曳月は星冠月佩、卽ち道士が身の飾具なり、下蓬壺蓬

萊と方壺、日常仙人の住處、今下界へ下るなり、曾見東皐種白榆東皐は東方、白榆は星の名、天地開闢の時、天帝が白榆星を東方に配置せし事を見しならんと云ふ、六甲は甲子、甲寅、甲辰、甲午、甲申、甲戌、老君六甲符に云ふ、丁卯の神は司馬卿、丁丑の神は趙子玉、丁亥の神は張文通、丁酉の神は藏文公、丁未の神は石叔通、丁巳の神は崖巨卿、威靈藏瑞檢瑞は玉、檢は匣、玉匣中に藏する者は六甲六神の威靈なり、五龍雷電遠霜都五方の星を五龍と稱す、此の五方の星が雷電の如き光輝を放つて霜壇を遶るなり、霜の字は潔白を意味し、都の字は壇を意味す、唯敎鶴探丹丘信道士は鶴を使用すること自在にして、仙人の住する丹丘へ遣はし其の信を探索せしむ、不使人窺太乙爐太乙丹を煉る爐火の事は尋常の人間をして決して窺知せしめず、是れは秘法なればなり、聞說葛陂風浪惡『神仙傳』に壺公が費長房に竹一竿を遣り、竹に乘り地を縮めて歸らしむ、後、竹を葛陂に投すれば化して龍と爲ると、風浪の惡しきは龍が棲めばなり、許騎青鹿從行無蘇耽は常に青鹿に騎つて往來したることあり、我も亦蘇耽の如く道士の行步に從がつて行かんと欲す、君之を許すや否やとなり、

【評論】此の篇、道士の事を叙するに、塗澤甚だ過ぐ、素隱は節節生意格の詩體なりとて稱讚すと雖も、其の實稱讚の價無きものなり、余をして評せしむれば俗惡下劣のものなり、

送客之湖南

白居易

年年漸見南方物　事事堪傷北客情　山鬼趫跳唯一足
峽猿哀怨過三聲　帆開青草湖中去　衣濕黃梅雨裏行
別後雙魚定難覓　近來潮不到湓城

【句釋】送客之湖南樂天が杭州に在つて客の湖南の潭州へ行くを送る、年年漸見南方物樂天は太原の人、太原は北地に屬す、其の北地の人が、杭州の刺史と爲つて此に住する久し、南方の事物に看熟し來る、事事堪傷北客情情を傷ましむる所以のものは、事事好む所のものにあらざればなり、山鬼趫跳唯一足嶺南に獨足にして反踵なる者あり之を山魈と云ふ、趫跳は其の態を言ふ、人面にして猴身、峽猿哀怨過三聲峽中を通過して猿聲を聞くときは定んで斷腸し玉はんとなり、帆開青草湖中去一帆を開いて青草湖中に去り玉ふぞ、青草は洞庭の二湖は、半ば潭州

に屬し、半ば岳州に屬し、南を青草湖と曰ふ、衣濕黄梅雨●●裏行梅天の時節、南方を旅行する者衣服の敗黴するを憂ふが常態なり、別後雙魚定難寛雙魚は其の書信を云ふ、近來潮不到●●●

虬鬚憔悴す羽林郎、曾て甘泉に入りて武皇に侍す、鵰は夜雲に沒して御苑を知り、馬は春仗に隨つて天香を識る、五湖歸り去る孤舟の月、六國平げ來る兩鬢の霜、唯桓伊が江上の笛あつて、臥して三弄を吹いて斜陽を送る、

【句釋】江上●分明ならざるが杭州に在ての作ならん、王將軍●●は未詳、虬鬚鬚が蟠虬の如くなるなり、唐太宗曰く虬鬚以て弓を挂けつ可しと、憔悴は老て衰へたるなり、羽林郎は官名、武人に附與する名、文官は關からず、王將軍が曾て此の官なりしなり、曾入甘泉甘泉宮は圓至曰く三あり秦の甘泉は渭南、漢の甘泉は雲陽縣磨石嶺上、隋の甘泉は鄜縣に在り、秦の始皇、太后を迎て咸陽に入り、復甘泉に居る、徐廣曰く表に云ふ咸陽の南宮なり、秦時の咸陽は渭の南北に跨がる、則ち此の宮は渭北の咸陽に在らずして渭南の咸陽に在り、此れ秦の甘泉なり、漢の元封元年に始めて磨盤嶺秦宮の側に卽て甘泉を作る、此れ漢の甘泉なり、元和志に曰く隋宮は鄜縣の南二十里に在り、甘泉谷に對す、此れ唐の甘泉なり、侍武皇玄宗を指す能はず假りに武皇と云ふ、玄宗護衞の侍從武官たりしなり、鵰●は「オホワシ」鷲の大なるもの、沒夜雲知御苑鵰●が夜雲に沒すと雖も我は御苑中の物なりと知るが故に又歸り來るなり、天子夜獵の事、上

代之れ有りしと云ふ、馬隨春仗識天香●●●

莫」言洞府能招」隱　會輾」飈輪見」玉皇」

一片の輕帆夕陽に背き、三峯を望んで七眞堂を拜す、天寒うして夜雲芽の淨きに漱ぐ、雪壞れて晴れて石髮の香しきを梳る、自ら煙霞を拂つて筆格を安んじ、獨封檢を開いて砂床を試む、言ふこと莫れ洞府能く隱を招くと、會ま飈輪を輾つて玉皇に見ゆ、

【句釋】和皮日休酬茅山廣文初め廣文が詩を作り皮に寄す、皮乃ち和して作る、其の皮が詩に更に和したるものが陸なり、一片輕帆背夕陽皮日休が茅山へ至れる時の事西を背にして東に向ふゆゑ背夕陽と云ふ、望三峯茅山は潤州延陵縣に在り、大茅君と中茅君と小茅君の三峯あり、七眞堂は七眞人堂、七眞人の偶像を置く、大茅、中茅、小茅、大許、小許、陽、郭の七眞人、天寒夜漱雲芽淨『上元實經』に云ふ大極眞人は四極の雲芽を服すと、此の雲芽は何物たるを解せざるが茶に雲芽の稱あるより見れば、是れは茶と見て可なり、茶で口を漱ぐなり、漱ぐ者は皮日休なり、雪壞晴梳石髮香苔の異名を石髮と云ふ、雪が融壞したるに依て庭を見れば苔色が奇麗に人の髮を梳けづる如くなり、自拂煙霞安筆格此の煙霞は讀んで字の如くなるや、或は廣

文が文の美なるを形容して言ふなるや、字の如く天の煙霞と見る方可ならん、安筆格安は安置、筆格を安置する、其の筆格を安置する机邊も煙霞が繚遶する、是れ仙家の常なればなり、自ら是を拂ふ、獨開封檢試砂床封檢は大切なる函、卽ち其の大切なる函を開いて砂床を試む、朱砂丹砂にて道士が藥に煉るなり、辰州の丹砂、下に白石あり上に砂あり、其の石、玉の如し、土人之を砂床と謂ふ、共に是れ廣文が所作を言ふ、莫言世人に言うては不可と令する、洞府は赤城に在り、仙人の住處、能招隱隱淪の徒を招尋するなり、會碾碾は輾と同じ、車聲の轟く響き、飈輪は仙人の乘る車を、飈車羽輪と云ふ、此の飈車羽輪を輾らすにあらざれば到る能はず、見玉皇而して天上の玉皇卽ち仙の本尊に相見せんとなり、

【評論】此の篇、一二三四は皮日休を言ふ、五六は廣文を言ふ、七八は皮と廣と幷せて言ふ、日本にて都良香が黛齊れて風は梳る新柳の髮、と歌うて、後句未だ成らざるに羅城門上に鬼あり歌うて曰く氷消して波は洗ふ舊苔の鬚と、此の三四の句を學びしものなり、此の鬼亦眞人の使役する所の鬼ならん、

蒲津河亭　　唐彦謙

宿雨淸秋霽景澄　廣庭高樹更晨興　煙橫博望乘槎水

日上文王避雨陵　孤棹夷猶期獨往」曲欄愁絶毎長凭
思」鄉懷」古多傷」別　此際哀吟幾不」勝

宿雨清秋霽景澄む、廣庭の高槻吏に晨に興く、煙は横はる博望乘槎の水、日は上る文王避雨の陵、孤棹夷猶獨往を期し、曲欄愁絶毎に長く凭る、鄉を思ひ古を懷うて多く別を傷む、此の際哀吟幾んど勝へず、

【句釋】蒲津は關名、山西省蒲州府永濟縣、古代舜の都する所、河亭唐は王重榮が推擧に依て河中從事と爲る、其の後、四方を流寓して此を經過せしものならん、宿雨清秋霽景澄是れは詩として常套語、廣庭は河亭の廣庭なり、高槻水中の臺を槻と云ふ、此に宿して晨早く起きたるなり、煙横博望乘槎水銀河に猶煙が朝來横はるとの意、漢の張騫は西域に往來して博望侯に封ぜらる、槎即ち「イカダ」に乘り天漢に至りて牛女を見しと其の事を云ふ、日上文王避雨陵蒲津の東方に當つて東崤、西崤の二山あり、是れ周の文王が雨を避し處、今此の山に當りて旭日の上るを見る、孤棹は孤舟に棹して、夷猶は『楚詞』に出づ君行かずして夷猶す、猶與と同じ、雨か晴かと「タメラフ」なり、期獨往獨往を定めたるが、曲欄愁絶毎長凭一旦は發足せんかと定めたるも尙不安の念に襲はれ曲欄に凭て兎や角愁思する、思鄉懷古多傷別故鄉の事や、過去の事を懷へば或は恩人の王重榮は害に遇ひ、鄉里の故人は死し、或は別れ、皆な是れ傷むべし、此際哀吟幾不勝幾は「ホトンド」俗語の「ドウシテモ」に當る、

【評論】此の篇、前半は曉景、後半は情思、唐は李義山の詩を慕うて、其の神髓を得たるなり、蓋し結末二句に至りては拙も亦極まれり、「此際」二字の如き言語道斷なり、盧綸の酬二李端病中見レ寄より此に至る七首句句情を說き盡して斷えざること蠶絲の緒を抽くが如き作法を示す、

感　懷　　劉長卿

秋風落葉正堪レ悲　黃菊殘花欲レ待レ誰　水近偏逢二寒氣早一
山深長見二日光遲一　愁中卜レ命看二周易一　夢裏招レ魂誦二楚詞一
自笑不レ如二湘浦雁一　飛來却是北歸時

秋風落葉正に悲むに堪へたり、黃菊殘花誰を待んと欲する、水近うして偏に寒氣の早きに逢ひ、山深うして長く日光の遲きを見る、愁中に命を卜して周易を看、夢裏に魂を招いて楚詞を誦す、自ら笑ふ湘浦の雁にだも如か

ざるを、飛び來つて却て是れ北歸の時、

【句釋】●●懷は秋に逢うて感じたる懷を寫すなり、吳仲孺の誣奏に依て罪にあらずして姑蘇の獄に繫がる、是れ獄中の作とす、秋風落葉正堪悲秋風の颯颯、落葉の蕭蕭、尋常人すら此の聲を聞き悲しまざるは無し、況んや詩人が獄中に於てをや、黃菊殘花欲待誰我が故園の菊花に垂殘の色を餘して畢竟誰を待つや、主人は獄に在つて天日を仰ぎ見る能はず、況んや故園に去て爾を賞するの事あらんや、水近偏逢寒氣早姑蘇は支那第一の水國なり、到處然り、況んや獄牢の如きは國の邊隅に置く、水近うして寒氣を知る早きは當然なり、山深長見日光遲イツマデも日光を見るの遲き意、疑獄を悲しむ意、天恩を拜せざるの意、愁中卜命看周易周の文王が易を作り玉ひし處は獄中なり、我も其の運命を卜せんが爲め愁へ乍ら之れを讀む、夢裏招魂誦楚詞招魂と云ふは人の死する時に、其の實に死したることを知らざる先きに、其の死人の常に著けたる衣を持して屋上に上り、東方に向つて衣を倒にし振つて魂來兮と三度呼ぶ、而して蘇生せざれば、實に死したると知つて、喪具の用意を爲す、屈原の弟子宋玉が、屈原の爲め文を作り以て屈原の魂を招く、而して屈原は未だ死せざるの時なり、二句共に哀愁の極を言ふ、自笑●●不如湘浦雁非常に悲んだ結果、却て自ら笑、悲の極笑に歸す、此の笑亦悲しむべきなり、何

故に悲しむべきや湘浦の雁にだも如かざればなり、●●飛來秋は北地より南來し、春は南地より北地へ飛來するが雁の性なり、而して彼は其の性の儘を行なふ、我は其の儘を行なふ能はず、却●●是北歸時南より北に歸る、時正に春、

【評論】此の篇、一讀過、浩然として彌よ哀し、文房の人と爲り剛直、權貴に屈せず、兩度の遷謫は畢竟自ら取る所なりとの論あり、此の詩悲慨の中、勁健の氣を存し、中唐を代表せる作と謂つ可し、

輞川積雨　　王維

積雨空林煙火遲　蒸藜炊黍餉東菑　漠漠水田飛白鷺
陰陰夏木囀黃鸝　山中習靜觀朝槿　松下淸齋折露葵
野老與人爭席罷　海鷗何事更相疑

積雨空林煙火遲し、藜を蒸し黍を炊ぎて東菑に餉す、漠漠たる水田白鷺飛び、陰陰たる夏木黃鸝囀ず、山中に習靜して朝槿を觀じ、松下に淸齋して露葵を折る、野老人と席を爭ひ罷む、海鷗何事ぞ更に相疑ふ、

【句釋】 輞川は陝西の藍田縣に在り、王晩年に宋之問が藍田の別墅を得たり、輞口に在り、水舍下を周り竹洲花塢あり、道友裴廸と舟を浮べて往來し琴を彈じ、詩を賦す、積雨は霖雨なり、空林は清淨なる林の意味、枯林の如く葉も無き林と混ずる勿れ、煙火遲晨炊の煙火を揚ぐる者遲し、俗市と喧寂を異にするを云ふ、蒸藜野菜を蒸す、炊黍「キビ」を炊ぐ、餉東蕃菜は田なり、東田に畊作する者に餉せしむ、午時の食を與ふるなり、漠漠は暗く連なる貌、水田飛白鷺此の五字は李加祐が句、陰陰は暗く茂りたる貌、夏木囀黃鸝此の五字も李加祐が句なり、漠漠陰陰の四字を添加して以て始めて神采奕奕たるなり、山中習靜坐禪して萬物を靜觀す、觀朝槿必ずしも字の如く槿花を觀ると言ふにあらず、人世の浮幻、朝槿の如きことを觀ずるなり、松下清齋松下に倚て清淨潔齋する、折露葵『顏氏家訓』に蔡朗が父純、葷を以て露葵と爲す、露葵は卽ち葷菜なり水鄕の出す所、松下にて之を羹にして食ふ、折の字を疑うて云云する者は字に泥んで詩を知らざるもの、野老與人爭席罷我は上席なり、彼は下席なりと野老輩が爭ふが、王が席なぞを貪著せざるを見做うて遂に野老も其の爭ひを罷めしなり、海鷗何事更相疑我は彼を取らんと欲する念無きに鷗は何事ぞ我を疑うて飛び去るや、『莊子』に海上の翁、海上に之く毎に則ち羣鷗之に隨がふ、後之を取んと欲す、機心一たび萌す、鷗鳥舞うて下らず、

【評論】 此の篇、王一家の正宗の存する所、起句の積雨より結句の海鷗に至るまで字として精ならざるは無く、句として妙ならざるは無し、曰く空林、曰く東蕃、曰く水田、曰く夏木、曰く山中、曰く松下、曰く白鷺、曰く黃鸝、曰く朝槿、曰く露葵、字として淸ならざるは無く、句として淡ならざるは無し、積雨の二字より他の五十四字出で、而して他の五十四字悉く積雨の二字に歸す、而して畊父の勞を憐れむ意もあり、自然を樂むの意もあり、世外に道を求むるの意もあり、實に他千萬言の勞して功無きものに比して五十六字宇宙を牢籠すと謂ふ可し、古人云ふ詩中に畫あり、畫中に詩ありと、眞に此の詩に於て是を見る、

石門春暮　　錢起

自笑鄙夫多野性　貧居數畝半臨湍　溪雲雜雨來茅屋
山雀將雛傍藥欄　仙籙滿床閒不厭　陰符在篋老羞看
更憐童子宜春服　華裏尋師到杏壇

自ら笑ふ鄙夫野性多きことを、貧居數畝半ば湍に臨む、溪雲雨を雜へて茅屋に來り、山雀雛を將て藥欄に傍ふ、仙籙床に滿ちて閒厭はず、陰符篋に

在り老て看るを羞づ、更に憐む童子春服に宜しく、華裏師を尋ねて杏壇に到ることを、

【句釋】石門は山東省濟南府臨邑縣に在り、錢起の別墅に於て春暮の景を叙す、自笑鄙夫多野性我自身の性質は野性にして搢紳の性にあらずと自ら笑ふ、鄙夫は謙遜して云ふ、貧居數畝半臨湍我家は極めて小なるが景は稍や可なり、湍水に臨んであればなり、湍は急湍俗に云ふ「ハヤセ」急瀬なり、溪雲雜雨來茅屋是れ非情物の景、山雀將雛傍藥欄是れ有情物の景、藥欄は藥草園にして花藥の欄にはあらず、仙籙は仙書、籙は籍なり、滿床閒不厭仙書を多數に藏して床に滿つる程あり、清閒なるを厭はざるは此れを讀めばなり、陰符黃帝陰符經三卷、陰は性の宗、符は命の本、內は以て身を修め、外は以て國家を治む、蘇秦が鬼谷子より授かりしものは太公望が「陰符」なりと云ふ、在篋老羞看蘇秦が一所懸命に陰符を讀みしは畢竟功名の念增長すればなり、我は老て功名の念無し、故に此の書を看るとを羞づ、羞づるは竟に讀まざるなり、仙籙の句は、讀書に志の存ずるを言ふ、陰符の句は功名に念の無きを言ふ、更慚童子宜春服『論語』に春服既に成る冠者五六人、童子六七人、とあり、可憐なる童子が各の春服を著して來る、華裏

尋師到杏壇『莊子』に孔子緇帷の林に游んで杏壇の上に坐し、絃歌して琴を鼓す、杏壇は澤中の高處、一に云ふ壇名と、

【評論】此の篇、閒居自適の情趣を寫して清絶限り無し、仙書と兵書と論語と莊子の四書を運用して而かも頭巾氣無し、正に是れ大家の作、

酬慈恩文郁上人　賈島

袈裟影入禁池清　猶憶鄉山近赤城　籬落罅間寒蟹過
莓苔石上晩蛩行　期登野閣閒應甚　阻宿幽房疾未平
聞說又尋南岳去　無端詩思忽然生

袈裟の影は禁池に入つて清し、猶ほ鄉山の赤城に近きを憶ふ、籬落罅間寒蟹過ぎ、莓苔石上晩蛩行く、野閣に登らんことを期せば閒應に甚しかるべし、阻られて幽房に宿し疾未だ平ならず、聞くならく又南岳に尋ねて去ると、端無く詩思忽然として生ず、

【句釋】慈恩は寺名、文郁は吳の湘東郡の人、來つて長安の大寺慈恩に住したるが、今南岳へ

歸らんとて詩を作り島に寄す、島卽ち此の詩を以て報酬せしなり、袈裟は梵語「キヤラサエ」の略音を寫す、譯すれば、「不正色」となる、不正色とは純なる色、卽ち紫、紅、白、黃等總て純にして雜ならざる色の反對、故に之を又壞色と譯す、義譯して「離染服」「出世服」「無垢衣」「忍辱鎧」「福田衣」「蓮華衣」と云ふ、三種あり僧伽梨、大衣、二十五條 安陀會 中衣五條 是れなり、日本の佛徒は「衣」と「袈裟」と分つが滑稽の極なり、衣の外に袈裟なく、袈裟の外に衣なき也、是の故に木蘭樹の如き色に染めて著するを正とす、影入禁池淸寧齋は禁池は慈恩寺中に在りと云ふ、素隱は禁中の池水なりと云ふ、放魚池と見れば寺中の說可なり、單に禁池と見れば宮禁中の說可なり、慈恩寺は長安の巨刹にして天子も猶幸す、寺主と爲る者は宮禁へ出入自由なれば、上人が參內して其の袈裟の影が禁池に映じて淸しと見るものの如し、其の實上人は塵垢無し淸淨の僧なりと云ふ意、猶憶鄕山近赤城鄕山は故鄕の山、卽ち南岳山、赤城は郡名、唐の台州府なり、卽ち天台山の在る所、參內すること自由なる高僧は天下幾人も無し、尋常の俗僧なれば其の榮達を喜ぶなるに上人は然らず、此の榮達にかかはらず猶ほ南岳や天台の山水を憶うて居らるとの意なり、雛落罅間寒蟹過罅は訓「サクル」裂也とありて、雛の孔罅なり其の間に蟹が往來する、是れ南岳の實況、莓苔は「コケ」石上晩苔行一方には蟹が往來し

一方には苔が往來す、幽趣靜味、慈恩寺に無き所とす、是れも南岳の實況、期登野閣聞應甚素隱は此の野閣を解して云ふ、南岳へ歸られなば再び相見る無けん、依て我等が野閣は幽閒なるほどに上人の機を舒べ玉ふにもよかるべしと、若し素隱の解する如くなれば應期の二字頗る著處なし、期の字は上人と島と二人にかかる、二人して共に野閣に登らんことを約束爲したるも如何せん我は阻宿幽房疾未平病の阻害する所と爲つて幽房に起臥し上人と曾て期したる野閣の閒游行吟は能はずと嘆ずるなり、素隱和尙の解は全く誤まる、寧齋云ふ野閣に登るを言うて其の閒を羨む、閒を羨む所以の者は己れが幽房に疾を養うて未だ平癒せざるが爲なり、此の解は「應」の字を重く見たる結果なり、今取らず、聞說又尋南岳去曾て野閣に登る志を聞て已に其の閒を知る然るに又南岳に去ると、上人は閒愈よ閒なるなり、無端は用處に依て、意義を異にす、『史記』田單傳に太史公曰く兵は正を以て合し、奇を以て勝つ、奇正相生じて環の端無きが如し、『漢書』に天圓かにして端無し、故に觀る可らず、見るに由しなきなり、端の首と始の訓あるを知らば自ら解し易し、「如何とも爲さず」が今の詩意とす、詩思忽然生病中ながら上人の行脚するを聞き久しく消滅したる詩思が今日突然として湧き忽然として成りしとの意、

【評論】 此の篇、題目、慈恩の事は僅か一句に其の意を叙し、而して餘の七句は上人と自身の

事を合叙し、極めて細景を出して極めて幽趣を表はし、浪仙家法の推敲の至るもの、文郁の詩は惜い哉『全唐詩』に逸して傳はらず、

江亭秋霽　　李　郢

碧天涼冷雁來疎　閒看江雲思有餘　秋館池亭荷葉後
野人籬落豆花初　無愁自得仙翁術　多病能忘太史書
聞說故園香稻熟　片帆歸去就鱸魚

碧天涼冷雁の來ること疎なり、閒に江雲を看て思餘りあり、秋館の池亭荷葉の後、野人の籬落豆花の初、愁なきも自ら得たり仙翁の術、多病能く忘る太史が書、聞くならく故園香稻熟すと、片帆歸り去つて鱸魚に就かん、

【略傳】李郢字は楚望、大中十年の進士、初め餘杭に居る、出るときは山水の興あり、入るときは琴書の娯あり、馳競に疏にして、藩鎮從事と爲り、侍御史に終ふ、

【句釋】江亭秋霽江上の小亭、秋日の霽景、碧天涼冷空を仰げば秋天は碧にして秋氣は涼冷なり、雁來疏雁の多數來らんことを望むも恨むらくは疎なり、鄉信の少なるを云ふ、閒看江雲思

有餘江上の雲を看るは卽ち鄉信の至らんことを思ふ、而かも至らず、思の窮まらざる所以、秋館池亭荷葉後時節秋晩に際すれば益す思窮まらず、荷葉後は荷花の散後を云ふ、九月の候なり、野人籬落豆花は秋晩に開き、冬日實を收む、節物を見て光陰の移變に感ずるなり、無愁自得仙翁術我は憂愁の性は持たず、故に仙術なぞを知つて愁を消する如き愚は無用なるが、而かも自然と葛仙翁が鍊丹の祕術は心得して居る、多病能忘太史書多病は記憶の力薄きを云ふ、是れ一種の病なればなり、諸注皆誤る、『史記』百三十卷は漢の司馬遷著はす所、太史公は卽ち司馬遷なり、忘るる所以は功名に念の無きが爲めなり、聞說故園香稻熟人の言ふを聞くに只今は杭州正に香稻熟する時節なりと、片帆歸去就鱸魚稻の熟する時は、秋晩、秋晩は鱸魚の正に美なる時なり、鱸魚の美を思うて故園へ歸らんと欲する者何ぞ獨、張翰のみならんや、

【評論】此の篇、李が未及第の時の作とす、前途希望の光を認むるを以て、鄉を思ふと雖も、失意の態を爲さず、仙翁の術を得たりと稱す、良とに然るを知る、

漢南春望　　薛　能

獨尋春色上高臺　三月皇州駕未回　幾處松筠燒後死
誰家桃李亂中開　姦邪用法元非法　唱和求才不是才

自」古浮雲蔽二白日一　洗」天風雨幾時來

獨春色を尋ねて高臺に上る、三月皇州駕未だ回らず、幾處の松筠か燒後に死し、誰が家の桃李か亂中に開く、姦邪法を用ふる元法に非ず、唱和才を求むる是れ才ならず、古より浮雲白日を蔽ふ、天を洗ふの風雨幾時か來らん、

【句釋】漢南は本、楚の地、秦、天下を兼て漢より以南を南郡と爲し（荊州）、漢より以北を南陽と爲す（鄧州）、今日湖北省荊州府江陵縣なり、五代の劉巖、國を稱して南漢と云ふ、此れは廣東省廣州府、薛能が許州の忠武城を守りし時の作、獨尋春色上高臺四方の春色を望見せんと欲して高臺に上る、三日皇州駕未回僖宗は廣明元年十二月黃巢が兵亂を避けて蜀に幸し、此より六年を經、光啓元年二月京師に還る、然らば此の詩は廣明二年三月に作りしものなり、皇州は長安を指す、幾處松筠燒後死臺上より望見するに處處の松樹や竹林が兵火の爲め燒かれ皆枯死する、誰家桃李亂中開兵亂に逢うて事事物物悲慘なる處、桃李の開くは是れ誰が家ぞや、姦邪用法元非法姦邪は何人と明示したるにはあらざるも田令孜が侯昌業の上疏を屏ぞけ權を專

らに爲す類の徒を指すと見て可なり、正法にあらずして所謂邪法なり、唱和求才不是才文を賦し詩を作るも根柢の無き徒は是れ眞の才にあらず、彼れ唱へ此れ和す憐れなる輕薄才人を罵しる、自古浮雲蔽白日浮雲は姦邪の臣なり、白日は天子なり、天子の聰明を蔽ひ藏す者は南司北司の愚臣輩なり、洗天風雨幾時來周の武王殷の紂王を伐つ時、大に雨ふる、太公望之を稱して洗兵雨と曰ふ、天下を一洗して清明の世に白日を仰ぐは畢竟幾時ならんとなり、

【評論】此の篇、前半は望見の景を叙し、後半は我が情懷を寫す、薛の人品も高しと言はず、而かも此の詩は氣慨あり誦すべきを覺ゆ、五六の二句二法字、二才字の如きは、全く宋の氣運を開きたるもの、盛唐の人無きにあらざるも亦少なり、薛能も此の廣明二年を以て殺さる、元年說は誤謬なり、

春夕旅懷　　崔塗

水流花謝兩無情　送盡東風過楚城　蝴蝶夢中家萬里
杜鵑枝上月三更　故園書動經年到　華髮春惟兩鬢生
自是不歸歸便得　五湖煙景有誰爭

水流れ花謝して兩つながら情なし、東風を送り盡して楚城を過ぐ、胡蝶の夢中家萬里、杜鵑の枝上月三更、故園の書は動もすれば年を經て到り、華髮の春は惟兩鬢に生ず、自ら是れ歸らず歸らば便ち得ん、五湖の煙月誰あつて爭はん、

【略傳】崔塗字は禮仙、光啓四年の進士、壯歲巴蜀に上り、老大にして隴山に游び、家を江南に寄す、

【句釋】春夕旅懷隴山に游ぶ時の作ならんとの說信に近し、水流花謝兩無情佛語で言へば無情は無常なり、送盡東風前句に花あり、之を承る必ず東風の文字を要す、過楚城隴山は卽ち古への楚なり、胡蝶夢中家萬里蝶の夢を見るにはあらず、莊周が夢に胡蝶と爲りし故事あるより此の二字を假りに用ひて句を形容するのみ、萬里の家山を夢むると云ふ意なり、杜鵑枝上月三更樹枝上に杜鵑が不如歸と叫ぶを聞く起て之を見れば正しく夜半にて月明あるのみ、故園書動經年到家は萬里の遠き、動は俗語の「コトニヨルト」に當る、一年二年を經て其の音信を得、華髮春唯兩鬢生華髮は白髮なり、華字を用ひて白字を用ひざるは春字を下に用ふればなり、兩方の鬢

が第一にシラガと爲る、自是不歸歸便得歸らざるも畢竟は自分の意思にて他人の意思にあらず故に自分で歸ると定めなば、歸ることは容易なりとの意、五湖煙景有誰爭歸りて我が自由に游ぶ處は五湖の煙景なり、五湖は我が土地ゆゑ、其れはナラヌなぞと他人が爭うて言ふことは斷じて出來ずとの意、

【評論】此の篇、晩唐の宗旨を代表して其の秀潔なるものとす、句句春夕ならざるは無く、語語旅懷ならざるは無し、特に三四の句、妙言外に在り、崔、別に詩あり、五千里外三年の客、十二峯前一望の秋、遂に胡蝶の句に及ばず、兩字重なる崔が作、數に失するものは亦其の得あればなり、

長陵　　唐彥謙

長陵高闕此安劉　附葬纍纍盡列侯　豐上舊居無故里
沛中原廟對荒丘　耳聞英主提三尺　眼見愚民盜一抔
千載豎儒騎瘦馬　渭城斜日重回頭

長陵の高闕此に劉を安んず、附葬纍纍盡く列侯、豐上の舊居故里なく、沛

中の原廟荒丘に對す、耳に聞く英主の三尺を提ぐるを、眼に見る愚民の一抔を盜むことを、千載豎儒瘦馬に騎つて、渭城の斜日重ねて頭を回らす。

【句釋】長陵は漢の高祖を葬むる所、渭水の北方、長安を去る三十五里、山の廣さ東西百二十步、高さ十三丈、周り十里八十步、高闕陵上に廟あり廟門を闕と云ふ、此安劉劉氏の一族を葬むる所、高祖、周勃に謂て曰く「劉氏を安んずる者は必ず勃ならん」此の語を用ふ、附葬纍纍盡列侯此の廟の周圍に葬むるものは劉氏に功ある諸侯の墳なり、豐上舊居無故里高祖の生地は豐卽ち今日の江蘇省徐州府豐縣なり、然るに豐の民を後、盡く驪邑、今日の陝西省西安府臨潼縣に徙せしより、此の方を新豐と稱す、徐州には故里無き所以、沛中原廟對荒丘沛は卽ち徐州なり、原廟の原は重なり先に廟あり更に重ねて立つるなり、耳聞英主提三尺英主は高祖なり、白蛇を斬るも三尺の劍、天下を取るも三尺の劍、高祖曰く吾布衣を以て三尺の劍を持て天下を取ると、眼見愚民盜一抔天子も生きて居る中は犯すと能はざるが死後は愚民にだも及ばざるなり、陵上の土一「ツカミ」を盜まるるも知らざるなり、文帝の時、張釋之廷尉警視總監の如き役たり人あり蹕を犯す、釋之罰金に當てんと奏す、帝怒つて之を死に致さんと欲す、後に人あり高祖の玉環

を盜む、釋之、棄市せんと欲す、街頭の死刑帝之を族せんと欲す一族悉く死刑釋之、冠を免じ、謝して曰く法此の如くならば足りなん、今此を盜んで之を族す、假令へば愚民長陵一抔の土を取らば陛下何を以てか法を加へんや、千載豎儒高祖より千載後の豎儒崔自身が今日騎瘦馬にて此の陵下を過ぐ、豎儒とはツマラヌ儒者、自ら稱する語、渭城斜日重回頭英主の墓前なら下馬して通過するが法なり禮なり、其の禮も爲さずに渭城卽ち長安の夕陽方に入らんとする時、斷えず頭を回らして長陵を望むとなり、高祖昔し鄙食其を罵つて曰く豎儒幾んど乃翁が事を敗ると、千年前の豎儒は鄙食其なり、今日の豎儒は唐彥謙なり、高祖知るあらば、今日の豎儒を如何とするや、

【評論】此の篇、正正堂堂、當面より攻向し、一步も假借する所なく喝破す、高祖三尺の劍、其の利、鋭なりと雖も、斷じて此の詩を斬る能はず、箕張翼舒の陣一甲一戈も容るる能はず、盛唐の諸公も此の詩の前には戈を戢め刃を柙にせざるべからず、謂つ可し一部の詩史と、

咸陽　韋莊

城邊人倚夕陽樓　樓上雲凝萬古愁　山色不知秦苑廢
水聲空傍漢宮流　李斯不向倉中悟　徐福應無物外游

莫恠楚吟偏斷骨　野煙蹤跡似「東周」

城邊の人は夕陽の樓に倚る、樓上の雲は萬古の愁を凝らす、山色は知らず秦苑の廢するを、水聲は空しく漢宮に傍うて流る、李斯倉中に向つて悟らずんば、徐福應に物外の游無かるべし、恠む莫れ楚吟偏に骨を斷つことを、野煙蹤跡東周に似たり、

【句釋】 咸陽は秦の宮、今長安城の亂後を咏ずるが目的、秦の咸陽の名を借る、實は長安の故宮を詠ずるなり、城邊咸陽城邊、人は韋莊自ら謂ふ、夕陽樓夕陽にあらざれば憑弔の念強く起らざればなり、樓上雲凝萬古愁雲の動かず固結する如き形を凝と云ふ、樓上より第一天上の愁雲を見る、山色不知秦苑廢依然として山色は蒼翠なり、秦苑の美なるときと同樣なり、知らば色を改める道理、其の改めざるを見れば知らざるなり、山は終南も東山も皆此の中に在り、水聲空傍漢宮流樊川や洛水も依然古の如く漢宮卽ち甘泉宮や長樂宮に傍うて混混流る、山も水も無情のもの故に故宮の廢荒を愁へず、李斯不向倉中悟秦の李斯は楚の上蔡の人、年少の時郡の小吏と爲り、吏舍の厠中の鼠、不潔を食ひ人犬に近づき、數しば之を驚恐するを見る、又

倉に入り倉中の鼠、積粟を食ひ大廡の下に居り、人犬の憂を見ざるを覩る、李斯歎じて曰く人の賢不肖、譬へば鼠の如し、自ら處する所に在るのみ、乃ち荀卿に從て帝王の術を學ぶ、若し李斯に此の悟が無きときは、徐福も亦悟り無きなりとの意、應無物外游徐福字は君房、始皇より童男女三千人を托せられ、藥を東海に求めて遂に還らざるなり、李斯が悟は惡なり、徐福の物外游は善なり、物外は國外の意、仙境に去る意、唐末朱全忠等が跋扈に堪へず、良臣義士は皆山中に遁逃するを云ふ、莫恠楚吟偏斷骨國を憂へて其の吟ずる事の痛意切なるを云ふ、吟の痛苦なること楚の屈原の如きは無し、我も亦屈原が離騷を作り、身を水に投じたる程の痛意あり、人は之を恠しむ莫かれ、野煙蹤跡似東周野火の煙の横はる寂趣を見ても唐の今の世は殆んど東周に似たり、又秦の滅亡したるも東周に似たり、詩人たる者斷骨せざるを得んや、秦は東周を亡ぼし其の周都へ都したる咸陽も亦亡びたり、成王は鎬京に都するも、幽王に至り犬戎の拔く所となり、平王乃ち洛邑に移る、是れを東周と爲す、

【評論】 此の篇、表面秦の亡滅を悲しみ、裏面唐の亡びんとするを慨して作る、雄渾悲壯、筆墨淋漓、盛唐の中に雜ふるも亦辨ずべからず、劉長卿の感懷より此に至る九首、落句に至り、別に新意を設けて前の六句を結びたるものなりと云ふ、

結句

周弼曰く其の說五言に在り、異なる所以のものは皆平妥婉順を取る、意盡きて止む、奇健にあらずとは此れなり、王貞白が末句は稍振作す」宋の嚴羽は結句の格を謂ひ、楊萬里は結句の趣を謂ふ、奇健なるものを求むるに尤も多からず、多からざるは作製に難ければなり、高山に石を轉ずるが如くと云ふ者、亦奇健の謂ひなり、周論は周論として知れば足る、

過九原飲馬泉　　李益

綠楊著水草如煙　舊是胡兒飲馬泉　幾處吹笳明月夜
何人倚劍白雲天　從來凍合關山道　今日分流漢使前

莫遣行人照客鬢　恐驚憔悴入新年

綠楊水に著いて草煙の如し、舊と是れ胡兒の飲馬泉、幾處か笳を吹く明月の夜、何人か劍に倚る白雲の天、從來凍合す關山の道、今日分流す漢使の前、行人をして客鬢を照さしむる莫れ、恐らくは驚かん憔悴して新年に入るに、

【略傳】李益字は君虞、長じて軍に從ふ二十年、籌を運し勝を決すること尤も其の長ずる所、鞍馬の間に在て文を作り詩を賦すと云ふ、七言絶句に至りては有唐三百年其の右に出る者寥寥とす、余嘗て李白と王昌齡と李益を以て唐七絶三賢と爲す、

【句釋】九原は漢の五原郡、今日の山西省忻州より吳喇忒及び鄂爾多斯方面一帶を云ふ、飲馬泉胡人此に於て馬に飲かはす處、綠楊著水草如煙柳枝の長き、草色の美なる知るべし、舊是胡兒飲馬泉胡兒の兒は男兒の兒と同じ、胡人を抑下したる語にはあらず、豐州城北に此の飲馬泉あるなり、幾處吹笳明月夜鐵笳又は蘆笳、戍樓にて夜警の爲め吹く、其の跡は幾箇處ぞや、何人倚劍白雲天何人は前の幾處に對する幾箇處と幾箇人となり、誰も彼もの意に當る、宋玉曰く長劍耿耿として天外に倚る、從來は「モトハ」なり、凍合關山道寒地にて氷の解け事なき關山の道が、珍らしや今日分流漢使前氷が融解して東流西流と分れて漢使卽ち我の前を流るる、胡と漢との講和結了後を云ふ、莫遣行人照客鬢氷結してあれば客鬢を照す憂は無きも融解しては我が客鬢を照す憂がある、是の故に照す莫れと云ふ、若し照さるれば、心配が起る、恐驚憔悴入新年新年は春なり、春は樂しむべきものなり、然るに憔悴の容を水にて見れば自ら驚き樂んで新

年を迎ふる意無からんとす、此の行人は自身も他人も共に合して云ふ、

【評論】此の篇、七律の神品として王維の下に在らず、高適岑參亦以て配すべきに足る、三四二句殊に敵あること無し、偉麗中に俊豪の處あり、老杜が「三年笛裏關山月、萬國兵前草木風」是れ軒輊すべし、趙嘏が「一千里の色中秋の月、十萬の軍聲半夜の潮、」麗と雖も粗豪、到底此の三四の上に出る能はず、人二字あるは小疵とす、

欲レ到二西陵一寄二王行周一　　李紳

西陵沙岸回流急　船底黏レ沙去レ岸遙　驛吏遞呼催レ下レ纜
棹郎閒立道レ齊橈　猶瞻伍相青山廟　未レ見雙童白鶴橋
欲レ責二舟人一無二次第一　自知貪レ酒過二春潮一

西陵の沙岸回流急なり、船底沙に黏して岸を去ること遙かなり、驛吏遞に呼んで纜を下せと催す、棹郎閒に立つて橈を齊へよと道ふ、猶ほ瞻る伍相青山の廟、未だ見ず雙童の白鶴橋、舟人の次第なきことを責めんと欲して、自ら知る酒を貪つて春潮を過ごせしことを、

【句釋】西陵は漢縣、荊州江夏郡、今湖北省黃州府黃岡縣西北、是れ縣としての西陵なり、此の西陵は一地方の名なるべし、沙岸回流急舊注に云ふ西陵渡は蕭山縣の西二十里に在り、錢王陵の吉語にあらざるを以て西興と改む、然らば今の浙江江蘇の間に屬す、船底黏沙去岸遙黏は「ネバル」沙多きを以て水來るときは舟岸に就き、水去るときは舟も亦岸を去る、岸上まで行きしも舟遠きに在つて如何ともする無し、驛吏遞呼催下纜津吏共が相遞に纜を解き帆を卸せと呼び叫ぶ、棹郎は水夫、閒立道齊橈水夫は習熟の功あり聊かも驚かす橈を齊へよと下知す、猶瞻伍相青山廟是れ舟中より後方を瞻る、伍相は伍員字は子胥、楚より吳に奔る、吳之を申の地に封す、吳の宰相と爲るに由て相と云ふ、杭州の青山に其の廟あり、民其の忠義を憐れんで立つる所、未見雙童白鶴橋是れ舟中より前方の景、我が行處は此の橋なり、桓闈、陶弘景に事へて辛勤年あり、一日二青童、白鶴あり空より下りて庭に集まる、弘景軒に臨んで之に接す、童の曰く太上桓のみを命ず、是に於て桓天衣を服し、白鶴に駕し天に昇り去、此の橋は蕭山縣より東方三十五里、餘姚より西方二里に在り、欲責舟人無次第此の句は俗語にて言へば船頭等の無責任を詰責せんとするなり、彼等が時刻を守らずして舟が沙に粘する如き失體を爲したるを言ふ、自知貪酒過春潮舟人を責めんと欲して更に考ふ是れ我の誤りでありしとを、我の誤りと

は何ぞ所謂舟中の無聊を慰する爲め酒を飲み過ごし春潮の滿ちて發船に都合よき時を忘却したり、故に此の時刻の齟齬を來せしなり、何ぞ舟人の罪ならんやと、遂に責めんと欲して責めざるなり、

【評論】　此の篇、專ら舟行なるが故、句句悉く水中の景を叙し、驛吏が叱斥する態、棹郎が沈著の狀、描寫し得て眞に逼る、以て水行詩の範と爲すべし、

洗竹　　王貞白

道院竹繁教㆓畧洗㆒　鳴㆑琴酌㆑酒看㆓扶疎㆒　不㆑圖結實來㆓雙鳳㆒
且要長竿釣㆓巨魚㆒　錦籜裁㆑冠添㆓散逸㆒　玉芽修㆑饌稱㆓淸虛㆒
有㆑時記得三天事　自向㆓琅玕節下㆒書

道院竹繁くして略ぼ洗かさしむ、琴を鳴らし酒を酌んで扶疎を看る、圖らざりき實を結んで雙鳳を來さんとは、且要す長竿巨魚を釣らんと、錦籜冠を裁して散逸を添へ、玉芽饌を修して淸虛に稱ふ、時あり記得す三天の事、自ら琅玕の節下に向つて書す、

【略傳】　王貞白字は有道、信州永豐の人、乾寧二年登第し、後天王の岐に狩するに値ひ迺ち退居書を著はす、復祿を干めず、當時大に芳譽を得、性恬和にして易象を明にす、手づから爲る所の詩三百篇及び賦文等を編で雲溪集と爲す、世に傳ふ、卒して家山に葬むる、

【句釋】　洗竹洗は麥なり密竹林を伐て疎竹林と爲す、洗は「スカス」意なり、道院は王が住する家、質素な家なるが故に道院と言ふ、竹繁教略洗繁は密なり、略は疎なり、鳴琴酌酒看扶疎竹林を童僕に命じて扶疎ならしめ、以て之に對し琴を鼓し酒を飮むなり、不圖結實來雙鳳竹林を設けし意は、實を結ばしめ以て雌雄の鳳凰來らしめんと圖りしにはあらず、黃帝の時、鳳凰が東園の梧桐に集まり、帝の竹實を食ひし事あるを以て其の反意を云ふ、且要長竿釣巨魚我が竹林を設けし意は巨竹を養ひ以て巨魚を釣るに適する竿を得んが爲めなり、錦籜は竹の皮、卽ち錦の如き紋を爲せばなり、裁冠添散逸竹の皮を以て冠を製し、之を被り以て閒散幽逸、道人の風彩を添へんと云ふ、玉芽は筍なり、修饌稱淸虛筍を以て羹にし我が饌を調すれば淸淡恬虛の食物たるを云ふ、漢の高祖が布衣たりし時、竹皮冠を製して被りし事あり、有時記得三天事道家にて三天なる貴き天ありと說く、佛敎の忉利天、都率天、夜摩天等の類、所謂淸微天、禹餘天大赤天是を三天と云ふ、平生道家を慕ふもの今此の洗竹に依て平生の記憶を引起したるなり、

自向琅玕節下書琅玕は竹の異名、三天の事を思ひ出したるが故に竹の節の下に於て詩を書するなり、古代紙の未だ無き時、字を書するに竹を截て火に炙り以て簡に作り之に書す、之を汗書又殺青と云ふ、今竹に關係なき三天の事を言表したるは首句に「道院」の二字のみればなり、

【評論】此の篇、一二の句は其の洗を叙し、三四以下竹と我との景情を叙し、七句意表天外より出て、以て八句を活躍せしむ、尋常咏物の造花的なるに比すれば實に生生の勢、玉笋の天を衝かんと欲するが如し、周弼の末句を賞する洵とに我が意を得たり、

惜花　韓偓

皺白離情高處切　臙紅愁態靜中深　眼隨片片沿流去
恨滿枝枝被雨淋　總得苔遮猶慰意　若敎泥汗更傷心
臨堦一盞悲春酒　明日池塘是綠陰

皺白の離情高處に切なり、臙紅の愁態靜中に深し、眼は片片に隨がひ流に沿ひ去る、恨は枝枝に滿ち雨に淋がる、總て苔の遮ることを得ば猶ほ意を慰めん、若し泥をして汚さしめば更に心を傷ましめん、堦に臨んで一盞春

酒を悲しむ、明日池塘是れ綠陰、

【句釋】惜花落花を惜んで作る、韓が朱全忠の爲め惡まれ濮州の司馬に貶せられし時の作、皺白は將に落ちんとする花、皺は音シウ訓「面ノシワ」殘花を人の衰老に譬ふ、解し易く言へば「白ヲ皺ム」なり、白は盛色、皺は衰色、色の衰へたるを形容せるにはあらず、落る時は皺で、開く時は白の意なり、離情高處切花が散つて高處より落るを花心あらば自ら其の情の切なるものあらん、臙紅は紅色の油ぎりたる如きを云ふ、愁態靜中深靜なるが故に愁態の特に深きを覺ゆ、眼隨片片沿流去落花が片片皆流水に沿うて去るを特と見る、恨滿枝枝被雨淋片片流るるは枝枝空しくなる所以、雨の淋ぐ色を殺ぐと甚し、恨の移らざる樹枝は一も無し、總得苔遮猶慰意苔蘚上に落ちて留まる花は水に隨て流るるとは異なる、聊か我が意を慰さむ、若敎泥汗更傷心泥は苔と反對、苔上は淨し、泥中は汚濁、其の泥中の汚濁と爲る花は一層の傷心ならずや、臨堦一盞悲春酒一盞の酒も愉快に飮むにはあらず、傷心を遣らん爲めなるを以て是を悲しむ所以、明日池塘是綠陰風物の變化するを傷む、綠陰亦愛すべきも箇は問題が別なり、今は綠陰と爲るを悲しんで花を惜しむ、

【評論】此の篇、表面花に在りて裏面は朱全忠の爲め時の王室が苦しめらるるを傷む、池塘綠

陰と爲るは朱全忠の天下と爲るなり、花の散ずるは唐室の衰滅を諷するなり、此の意を以て此の詩を讀む更に痛恨なるものあらん、「李益の過二九原一」より此に至る四首は結句の奇健なるものと爲す、周弼の意、詩の優劣は次第順なりと素隱云ふ、洵とに當れり、

詠物體

周弼曰く說は五言に在り、唐末に至りて忽ち一體を成す、詠する所の物に拘はらず別に外意を入て描寫の巧を失はず、喜ぶに足るものあり、然れども特に前聯に意を用ふ、頗る密にして後聯は未だ稱ふこと能はず、康熙帝云く孔子曰く之を邇うして父に事へ、之を遠くして君に事へ、多く鳥獸草木の名を識る、夫、父に事へ君に事ふるは忠孝大節なり、鳥獸草木は至微なり、吾夫子並に擧げて之を極言す、然らば則ち詩の道、其の名を稱するや小、其の類を取るや大、卽ち一物の情にして忠孝の旨に關す、繼ぎて騷賦より以來、未だ之れ易ふるあらず、此れ昔人詠物の詩、由て作る所なり、

黃宗羲曰く詩人は天地の淸氣を萃め、月露風雲花鳥を以て其の性情と爲す、月露風雲花鳥の天地間に在るや俄頃に滅沒す、唯詩人能く之を散せざらしむ、

崔少府池鷺　　雍陶

雙鷺應二憐水滿一池　風飄不レ動頂絲垂　立當二青草一人先見
行傍二白蓮一魚未レ知　一足獨拳寒雨裏　數聲相叫早秋時

林塘得ㇾ爾須ㇾ增ㇾ價　況與ニ詩家物色ㇾ宜

雙鷺應ニ憐むべし水の池に滿るを、風飄せども動かず頂絲垂る、立つて青草に當れば人先づ見る、行いて白蓮に傍へば魚未だ知らず、一足獨拳す寒雨の裏、數聲相叫ぶ早秋の時、林塘爾を得ば須らく價を增すべし、況んや詩家の物色と宜しきをや、

【句釋】崔は姓、少府は官名、池鷺は「サギ」一名、雪客、白鳥、春鋤、絲禽なり、雙鷺雌雄の二、應憐水滿池水の湛湛たる池に雙鷺の游戲する態を見れば甚だ可憐であるとの意、風飄不動頂絲垂風力が如何に強く吹くも身體は動かさず、水中の魚をネラフ爲めなり、頂絲の垂るるは鷺の特質なり、立當青草人先見池頭の青草に當つて立てば鷺は白く草は青し、人の眼に停まり易し、行傍白蓮魚未知池中の白蓮に沿て行くときは鷺も蓮も共に同色なるが故に魚は鷺の爲め食はれんことを知らず、一足獨拳寒雨裏步する時は雨足なれども立つて居る時は一足を拳ぐ、是れ亦鷺の特質なり、寒雨の裏殊に幽趣を添ふ、數聲相叫早秋時何の爲めに叫ぶやは動物學者と雖も容易に解し難きも、詩人は侶を喚ぶ爲めに相叫ぶと定むるなり、林塘得爾須增價崔が家の林

塘爾がある爲め風趣一段と價を增す、況與詩家物色宜少府は詩人なり、故に詩家の語を用ひて以て鷺の潔白と詩品の潔白と好對照なりと云ふ、今日の語で言へば頗る詩的なりと云ふなり、

【評論】此の篇、後世謝瞿輩の詠物に比すれば未だ全く形骸に屬せず、血肉清鮮なる所あり、『全唐詩話』に陶、簡州に在り、憑道明なる者刺を通じ謁を乞ふ、曰く員外官名と陶の舊識ありと、閽者取次の人道明の言を以て通ず、引見するに及んで知る者にあらず、陶呵して云ふ君と平生に味し、何の日に相識ぞ、道明曰く員外の詩を誦し、員外の德を仰ぐ、日に詩集中に相見る、何ぞ相生を隔つと云ふや、乃ち立當ニ青草一人先見、行傍ニ白蓮一魚未レ知を吟ず、陶之を聞き欣然之を優遇する舊知の如し、以て此の詩の一時に喧傳せられし事知るべし、亦詩壇の佳話と爲すべし、

鷓鴣　　鄭谷

暖戲煙蕪錦翼齊　品流應ニ得レ近ニ山雞一　雨昏青草湖邊過
華落黃陵廟裏啼　游子乍聞征袖濕　佳人纔唱翠眉低
相呼相喚湘江曲　苦竹叢深春日西
暖に煙蕪に戲れて錦翼齊し、品流應に山雞に近づくことを得べし、雨昏う

して青草湖邊に過ぎ、華落ちて黃陵廟裏に啼く、游子乍ち聞て征袖濕ひ、佳人纔に唱へて翠眉低る、相呼び相喚ぶ湘江の曲、苦竹叢深く春日西す、

【句釋】鷓鴣は形、母雞に似て、頭は鶉の如く、性霜露を畏れ、早晩には出ること稀なり、夜栖に木葉を以て身を蔽ふ、雌雄多く相對して啼く、越中殊に多し暖地なればなり、暖盛煙蕪錦翼齊暖日には煙の簇がる平蕪に於て相游戲す、而して其の錦の如き羽翼は整然として參差するもの無し、品流應得近山雞其の部類に屬する同形同種の物を求むれば山雞卽ち雉を以て比すべきなり、雨昏青草湖邊過湖北の鄂州府に青草湖あり、江南道中の者は此の湖邊を必ず通過する今鄭が過ぎるとき此の鳥の啼くを聞く、時恰かも雨昏昏たるなり、花落黃陵廟裏啼娥皇と女英二妃を祀る廟を黃陵と云ふ、青草湖を去る數里の地、游子は旅客なり、乍聞征袖濕旅人が此の鳥の啼くを聞き淚征衣を濕ほす所以は、鳥聲が悲哀を感ずるのみならず、場處が場處なればなり、佳人纔唱翠眉低支那古代の歌曲に「鷓鴣詞」と云ふあり、佳人が絃に合せて唱ふるとき、其の佳人の情緒が何とも言へぬ哀愁を表はすなり、翠眉低は佳人の此の詞を唱ふる時の態度を云ふ、相呼相喚湘江曲黃陵廟の在る所は湘江の曲なり、此の二妃は舜を慕うて此に至り死し

たる處なるを以て、今雌雄の鷓鴣が相呼び相喚ぶ、其の物情を滿足する態を見れば詩人豈一滴の淚なからんや、苦竹は竹の名詞、白あり紫あり、其の筍の苦味なるを以て名く、叢深春日西竹林の西に夕陽の傾むくも知らずして游戲すとなり、

【評論】此の篇、鷓鴣を咏ずるに鷓鴣其の物のみに就かず、專ら四邊の背景を叙し、而して其の背景が一一鷓鴣ならざるは無し、神韻縹緲、鷓鴣の詩として古今此の右に出るものなし、鄭鷓鴣の名、却て鄭都官を壓する所以、固に其の所なり、南國寂寥の地に在つて此の詩を讀む、良とに人腸を斷つものあらん、

緋桃　唐彦謙

短墻荒圃四無鄰　烈火緋桃照地春　坐久好風休掩袂
夜來微雨已沾巾　敢同俗態期青眼　似有微詞動絳脣
盡日更無鄉井念　此時何必見秦人
短墻の荒圃四に鄰なし、烈火の緋桃地を照して春なり、坐久しくして好風袂を掩ふことを休む、夜來の微雨已に巾を沾す、敢て俗態の青眼を期する

に同じからん、微詞の絳脣を動すことあるに似たり、盡日更に鄉井の念なし、此の時何ぞ必ずしも秦人を見ん、

【句釋】緋桃は紅色の桃花、短墻荒圃四無鄰桃は美なるも其の在る所、甚だ殺風景とす、墻は短かく、圃は荒涼、四邊には人家なし、烈火緋桃照地春惡地なるに關せず桃花は烈火の如き紅色を以て得意に春を潤色す、坐久好風休掩袂火の如き緋桃を見て好風に對す、好風なるが故に我が袂を飄すに到らざるなり、或人は「坐久しく見る中に好風吹き來れども、あまり見事なるゆゑに風の爲に袂を吹きまくられても掩ふことを休めて見とれたるなり」袂を吹きまくる風は暴風なり、好風にはあらず、此の解其の誤知り易し、素隱和尙は曰く「此の花があまりに見事なるを以て良や久しく坐して愛賞したぞ、しかれば其の好風光が、あらはに見えたぞ、短墻の中に在る花なれば、たとへば美人の袂を掩ふことを休めて、そのままにして面を現はしたる如くぞ」と此の說も曲解なり、袂は人に就く、花の譬へにはあらざるなり、夜來は黃昏や晩來とは異なる、昨夕の事なると知らざるべからず、昨夕の如きは非常に熟覽して微雨已沾巾微雨の巾を沾ほす事も知らざりし位なり、昨夕なるが故に已の字大に活躍す、其の熟覽したる證據には雨の爲め巾を沾したることも知らざりしを以て知れとなり、敢同俗態期青眼晉の阮籍は酒を持ち來る者は青眼に迎へ、酒を持ち來らざる者は白眼を以て之を迎ふ、是れ頗る卑しき事にて俗態と云ふの外無し、此の花は此の如き俗態は無しと云ふ、似有微詞動絳脣楚の宋玉が「好色賦」に曰く大夫登徒子、楚の襄王に侍して宋玉を短つて曰く玉の人と爲り體貌閒麗、口に微詞多し又性色を好めり、願くは王、與に後宮に出入せしむること勿れ、此の賦中の微詞は語同じく意同じからず、此の桃花は人を迎へて何事か絳脣を開いて言はんとするに似たりとなり、盡日更無鄉井念此の花を今日吟賞して鄉井卽ち鄉里の事は全く念頭に掛からぬとなり、此時何必見秦人武陵桃源の仙境に入て以て秦を避けし人を見ざるとも、此の閬州に在つて此の花を見る、此の外に何の願も無しとの意、

【評論】此の篇、四無鄰と更無と同字稍や疵なるも大體に於て佳構と謂つ可し、第二句と第八句は題を見ざるも桃なるを知る、其の餘の句は桃なるや李なるや題を缺くときは分明ならざる所、寧齋の評して不卽不離、傍敲側擊して之を出すと云ふは甚だ明解とす、然れども咏物此の如きは至るものにあらざることと知る可し、

牡丹　羅鄴

落盡春紅始見花　花時比屋事豪奢　買栽池館恐無地
看到子孫能幾家　門倚長衢攢繡轂　幄籠輕日護香霞
歌鐘滿坐爭歡賞　肯信流年鬢有華

春紅を落ち盡して始めて花を見る、花時比屋豪奢を事とす、買つて池館に栽ゑんとするも恐らくは地無からんことを、看て子孫に到るは能く幾家ぞ、門は長衢に倚つて繡轂を攢め、幄は輕日を籠めて香霞を護す、歌鐘滿坐爭つて歡賞す、肯て信ぜんや流年鬢に華あることを、

【句釋】牡丹は一名鹿韭、鼠姑、木芍藥、又花王の稱あり、唐以來花の富貴なるものと號して上下歡賞す、落盡春紅始見花百卉千花、零落の後、牡丹漸く花開く、卽ち春晩夏初なり、花時比屋事豪奢唐の武后、臘日後苑に遊び百花に宣詔して皆開かしむ、唯牡丹獨遲し、遂に洛陽に貶す、洛陽の盛んなる是れが爲めなり、比屋は家と云ふ意味、買栽池館恐無地豪奢を競ふが故に我は百種あり、我は千種ありなぞと稱して遂に栽うるに地無きまでに至る、買んと欲する

も栽うる地を所有せずと云ふ意にはあらず、石川鴻齋が「地狹隘ニシテ場所ノ無カランコトヲ思ヒ」と云ふは作者の意にあらず、看到子孫能幾家奢る者久しからず、彼の如き高價なる花を處狹きまで栽ゑ以て互に其の富貴を誇るも子に傳へ亦孫に傳へる者は果して幾家か存するや門倚長衢攢繡轂長衢は洛陽城中を云ふ、此の洛陽城中の第一至便の地位を占め、錦繡の轂卽ち貴人の乘る車を日日門前に停め置くなり、幄は「トバリ」籠輕日護香霞風の爲めには破らるる恐れあり、雨の爲めには色損する虞あり、是の故に幄を設けて適宜の溫度にて永く牡丹の香霞を持續せしむ、歌鐘滿坐爭歡賞甲家は歌唱し、乙家は鐘鼓し、珍膳佳肴雜れ日も足らざる有樣なり、肯信流年鬢有華鬢端に白毛を生ずるは久しからざるなり、年華流水、昨日は少年今は白頭、此等の事は肯て全く信せざるものの如しと悲しむなり、

【評論】此の篇、牡丹の名を借りて以て人の豪奢を諷するもの、而して一篇の骨子、豪奢の二字にあり、豪奢なるが故に花を栽ゑて餘地無く、豪奢なるが故に子孫を保つ能はず、而して繡轂、而して香霞、而して歌鐘、而して遂に直ちに白毛を生ずるを信ぜざるに至る、全く人を戒しめ、花は名を借るに過ぎず、唐賢詠物の眞理此の如し、後世寫生的詠物とは大に反す、以て法と爲すべし、

牡丹　　羅隱

似ㇾ共ニ東風ㇾ別有ㇾ因　絳羅高捲不ㇾ勝ㇾ春　若敎ㇾ解ㇾ語應ㇾ傾ㇾ國
任是無情也動ㇾ人　芍藥與ㇾ君爲ニ近侍ㇾ　芙蓉何處避ニ芳塵ㇾ
可ㇾ怜韓令功成後　辜負穠華ㇾ過ニ此身ㇾ

東風と共に別に因あるに似たり、絳羅高く捲いて春に勝へず、若し語を解せしめば應に國を傾くべし、任ひ是れ無情なるも也人を動かす、芍藥君が與めに近侍と爲り、芙蓉何れの處にか芳塵を避く、怜むべし韓令功成つて後、穠華に辜負して此の身を過ごすを、

【句釋】似共東風別有因百花が東風と因緣あるは尋常なり、然るに牡丹のみは特別に因緣ある如く思はる、絳羅は絳色の羅、花園を護る具、高捲不勝春羅を高く捲き揚げて賞觀する其の情に勝へず、若敎解語應傾國解語の花は已に天下國家を亡ぼす其の例多し、若し此の如き美麗なる花が解語のものなりせば必ず一國の帝王も之に惑うて國家を亡ぼすに至らん、任是は「タトヒコレ」と訓む、無情也動人無情ですら能く人の情に勝へざらしむ、蓋し無情は解語に勝る、

何故に勝るや之れが爲め天下國家を亡ぼすに至らざるなり、芍藥は牡丹に類する花、故に牡丹を木芍藥と云ふ、與君牡丹を指して君と云ふ、爲近侍君主に對して直に其の命を奉する者を近侍と云ふ、牡丹は君主なり、芍藥は侍臣なり、芙蓉何處避芳塵芙蓉花は稍や敵と爲すに足る、而かも何處に在るか形を見せず、定んで春の芳塵を避けて居るならん、可怜は俗語の可哀相に當る、韓令は韓弘なり、『蠹齋鉛黃』に曰く韓弘は元和中宣武の節制を罷め、始めて長安に至る、私第に花あり、命じて之を剗り去らしむ、曰く吾豈兒女の輩に倣はんやと、功成後功の成らざる時は賞花の暇無きも、功成りし後は牡丹を看て樂しむも可なり、然るに韓は之を爲さず、故に可怜と云ふ、辜負は「ソムク」孤負に作るを可とす、穠華此の奇麗な華、過此身到當一生涯、牡丹に背きて歡賞の日無し、

【評論】此の篇、句として三四の外擊節すべきもの無し、五六の句に至りては俗の俗なるもの此の如きもの宋人猶之を能くす、豈唐人を待んや、

梅花

吳王醉處十餘里　照ㇾ野拂ㇾ衣今正繁　經ㇾ雨不ㇾ隨ニ山鳥ㇾ散
倚ㇾ風如ㇾ共ニ路人ㇾ言　愁憐粉艷飄ニ歌席ㇾ　靜愛寒香撲ニ酒樽ㇾ

欲」寄所思」無好信」　爲」君惆悵又黃昏

吳王醉ふ處十餘里、野を照し衣を拂つて今正に繁し、雨を經れども山鳥に隨つて散ぜず、風に倚つて路人と共に言ふが如し、愁へて憐む粉艷の歌席に飄ることを、靜に愛す寒香の酒樽を撲つことを、所思を寄せんと欲するに好信なし、君が爲に惆悵すれば又黃昏、

【句釋】梅花と題するも單に梅花にあらず孤山の梅花を咏せしなり、杭州に在る時の作、吳王は夫差なり、醉處十餘里夫差が都の金陵に於て、金陵より一日程の西湖の周圍に梅花を栽て以て盛開の日、此の處に飲燕す、其の梅花の開廣きこと十有餘里なり、照野は梅の色、拂衣は梅の香、今正繁繼隱が今日其の梅を見る其の時花正に繁きなり、經雨不隨山鳥散一雨を經れば大抵の花は散落するも梅花のみは雨や鳥の羽にて打たるるも容易に散せぬなり、倚風如共路人言風の吹くに遇へば脣を動かし路上の人と言はんと欲する風情なり、愁憐我は愁ふ、而して彼を憐む、粉艷は白梅の奇麗なるを言ふ、飄歌席歌舞の席上へ花片が飄散するなり、經雨の句と意味が一貫せず、強て解する者は曰く「かく堅固の花なれど日數が立たば自ら散亂す」と此の如く

解すれば解せざるにはあらず、而かも曲解に近し、詩其のものは一氣が通せざるなり、靜愛寒香撲酒樽梅の香氣が酒樽を撲て來る、靜坐して益す其の愛すべきを覺ゆ、欲寄所思無好信我は今江南に在り、北方の人は今日梅花開くとは夢想もせざるべし、故に一枝を折て其の信を傳へんと欲するも、其の傳ふるの道無きを云ふ、昔し越の使者登つて梅枝を執て梁王に遺る、梁の臣韓子が曰く焉んぞ一枝の梅を以て列國の君に遺る者あらんや、梅花信を寄す此に起る、爲君北方に在る友人を君と云ふ、惆悵又黃昏此の如く思ひ、今日も又黃昏惆悵する所以なり、

【評論】此の篇、其の佳處を言へば、氷肌玉骨等の字を用ひず、但梅花の神を寫す處に在り、其の短處を言へば已に山鳥に隨つて散せずと言ひ而して第五句粉艷歌席に飄ると言ふ、相矛盾する處に在り、救ふ者は已に雨あり風あり故に飄の字切なりと、何ぞ必ず此の如くならん、風の字は言の字を以て已に其の意を表はす、飄の字にあらずんば風を承けずとは小兒の言なり寧齋曰く精力人に絕すと謂ふ可しと、昭諫知るあらば地下に大笑せんのみ、孟啓の『本事詩』に曰く唐の宰相鄭畋、深く隱を器とす、畋の一女、美にして才あり、常に隱の詩を愛誦して竊かに其の人を慕ふ、一日隱、鄭を訪ふ、女窗隙より之を窺ふ、隱の貌甚だ醜なるを以て遂に其の詩を燒き復誦せず、昏亦成らず、嗚呼昭諫不幸不運亦是れ愁憐すべき人ならずや、雍陶の池

鷺より此に至る六首是れ咏物の體なり、唐人の咏物、此の如く餘韻有つて盡きず、宋元人に至りては字と意と共に盡く、唐賢を以て正宗と爲す所以なり、素隱は曰く雍陶は鷺の字を犯すと、然らば唐彥謙も緋桃の字を犯したり、犯すと雖も自然なり、不自然の犯さざるより却て勝るものと謂ふ可し、

卷の三

五言律

四實

周弼曰く謂ふこころは中の四句皆景物にして實なり、開元大曆に此の體多し、華麗典重の間に雍容寬厚の態あり、此れ其の妙なり、稍變じて然して後、虛間に入るに情思を以てす、故に此の體當に衆體の首爲るべし、味者之を爲す則は堆積窒塞して意味寡なし、」總て客觀界の景を實と謂ひ、主觀界の情を虛と謂ふ、卽ち杜審言の雲霞以下二十字悉く客觀に屬するもの、周の意、此の四實四虛と體を分つ中で四實を以て賦するが開元大曆間名家の法と爲す所、四虛は此より降りし世の體と爲すものの如し、其の作法は華麗の間に雍容の態を爲す、詩法に精通する者にあらずんば構成し難く、又詩法に未熟練の者が爲す時は所謂堆積窒塞、徒らに字を塡むるのみにて流暢ならざるに至ると慨す、元の范德機曰く、雲霞梅柳、是れ早春を說く、六義に於て是れ賦、黃蝶綠蘋是れ早春の景物、六義に於て是れ興なり、司空曙が、「經二廢寶

慶寺」の詩、池晴龜出曝、松暝鶴飛廻、兩句景物を言ふ、六義に於て是れ興、古砌碑橫レ草、陰廊畫雜レ苔、兩句人事を說く、六義に於て是れ賦なり、此の說非なり、蓋し早春を賦するときは早春の景を言ふ、廢寺を賦するときは廢寺の景を言ふ、此れ詩中の四句皆早春未だ嘗て前を以て賦と爲し、後を興と爲さざるなり、龜出、鶴飛、則ち寺に僧なきと知る可し、碑橫草、畫雜苔則ち寺廢すること久し、亦未だ嘗つて前を以て興と爲し後を賦と爲さざるなり、大凡そ律詩、題指す所あらば、其の詩皆賦なり、題指す所無きは皆興なり、周伯弼、此の詩の中聯を以て四實と爲し、曙が詩の中聯を四虛と爲す固に之を疎に失す、」是れ四實四虛說に反對したる論なり、此の反對論は獨范ならず、明の李東陽なぞも反對す、蓋し伯弼の意、名詞に屬するものは實にて、動詞、又形容詞に屬するものを虛と定むるが如し、名詞動詞の區別上より之を言へば、伯弼の說亦成立せざるにあらず、然りと雖も法は正に入て奇に出るを貴ぶ、范說も一法なり、周說も一法なり、未だ遽かに彼此取舍すべからず、互に存して可なり、

律法、起二句を破題と爲し、次二句を頷聯と爲す、上を承くるを要す、次二句を景聯と爲す、下に轉ずるを要す、末二句を結句と爲す、起承轉合の四法、絕句と何ぞ異ならん、此の起承轉合の法の紊るを得ざることは猶ほ人に四肢五體を完備するが如し、頭は足下にあるべからず、足は頭上に置くべからず、若し誤つて之を爲さば所謂惟惟甚だ觀に堪へず、讀者仔細に察すべきなり、

早春游望

杜審言

獨有宦游人　偏驚物候新　雲霞出海曙　梅柳渡江春
淑氣催黃鳥　晴光轉綠蘋　忽聞歌古調　歸思欲沾巾

【略傳】杜審言、字は必簡、襄陽の人、進士に擢でらる、隰城の尉と爲る、又、天官侍郎より洛陽の丞に遷り、事に坐して嘉州司戶參軍に貶せらる、武后の時、著作佐郎を授けらる、膳部員外に遷る、神龍の初、張易之に交通するに坐し、峯州に流さる、入て國子監主簿修文館直學士と爲り大學士に卒す、子を閒と云ふ、閒が子則ち杜甫なり、

【句釋】●●●●早春游望は杜が晉陵に在つて作る所、本集に「和晉陵丞早春游望」と作る、或は云ふ

韋蘇州の作と、韋が體と頗る似たる所あれば編纂者の誤る所ならん、獨有宦游人游は藝に游び、文に游ぶの類、宦途の人となり、杜が官吏と爲つて晉陵に客と爲るを云ふ、偏驚物候新節物時候の變化に驚く、其の日月烏兎の匆匆と去るを惜む、雲霞出海曙晉陽游望の景、海面を出て曙る、其時の雲霞の燦然たるを云ふ、梅柳渡江春晉陵游望の景、江卽ち楊子江を渡る者、皆江南の春なるを知る、今日江蘇省常州は古の晉陵、一方は海、一方は江、江南の勝地として尤も記憶すべき所なり、淑氣は春の氣、淑の字義は善なり、乾の四德を以て四時に配す、春は元、夏は亨、秋は利、冬は貞、元は卽ち善催黃鳥俗に云ふ黃鳥の啼くことを淑氣が催促するとなり、晴光春晴の光景、轉綠蘋蘋は『爾雅』に萍の大なる者とあり、蘋が晴光と共に水面を轉廻するなり、鳥の轉ずるにはあらず、忽聞歌古調陸丞の早春游望詩を賞して古調と云ふ、古曲も同じ、歸思欲沾巾陸丞の古調を歌ふ、其の嘉音は如何にも我が歸國せんとする思に勝へざらしむるが故に覺えず淚が巾を沾ほすに至る、

【評論】此の篇、初唐の風格を失はず、筆氣警健、五律此を以て上乘と爲す、紀曉嵐は曰く起句警拔、且通套の病無し、虛谷曰く起句喝得響亮と、所謂起句は出門見山の四字を以て眞諦とす、此の詩其の眞諦を得たるものなり、

游少林寺

沉佺期

長歌游寶地　徙倚對珠林　雁塔風霜古　龍池歲月深
紺園澄夕霽　碧殿下秋陰　歸路煙霞晚　山蟬處處吟

長歌して寶地に游ぶ、徙倚として珠林に對す、雁塔風霜古、龍池歲月深、紺園夕霽を澄ましめ、碧殿秋陰を下す、歸路煙霞の晚、山蟬處處に吟ず、

【略傳】沉佺期字は雲卿、相州內黃の人、進士に第し、協律郎由り給事中考功郎に除せらる、賄賂を受る未だ究らず、張易之が敗るるに會ふ、長く驩州に流さる、稍や台州錄事參軍に遷さる、序で起居郎兼修文館直學士に拜せらる、宴に侍す、帝學士等に詔して回波を舞し、弄詞を爲り、帝意を悅ばす、牙緋を賜ふ、尋で中書舍人太子詹事を歷て開元の初卒す、

【句釋】少林寺は河南省河南府の嵩山に在り、山東を太室と曰ひ、山西を少室と曰ふ、此の寺は山西に屬す、梁武以前の寺なるが如し、達磨九年の面壁は此の寺とす、後人以て達磨洞を作る、長歌游寶地經典に寶地あり、寶土あり、今以て寺に借用す、佛寺の意味なり、佛寺では下の珠林に照對せざる故に寶を以て珠に對せしめしなり、徙倚徙は遷移、倚は立、和訓「タチモ

トホル」なり、對珠林寺中の開林を云ふ、摩尼珠を以て林と爲す、『阿彌陀經』の語を用ふ、雁塔は釋迦佛在世に一比丘あり、羣雁の飛ぶを見て乃ち曰く我が食に充つ可しと、雁即ち地に墮つ、佛の曰く此れ雁王なり、食ふべからず、乃ち雁塔を立つ、塔は譯して高顯と曰ふ、德を表し、人の仰いで以て瞻るべきもの、風霜古塔の時代古きを云ふ、龍池は別に故事なきも龍王は佛說法の席へは必ず連なる故、特に雁の字に對して用ふ、歲月深此れも時代古きを云ふ、池なるが故に深の字を用ふ、實は歲月久しきなり、紺園園林の樹、紺色なるが故、紺園は一種の名詞として寺に多く用ふ、他に用ひざるにもあらず、澄夕霽夕日雨後の霽景、澄清甚だし、碧殿は碧色の佛殿、下秋陰は秋陰を碧殿に下すと素隱は解するが然らず、秋日の昏陰ならんとする景色が先づ碧殿より其の氣分を知らるとなり、秋の陰氣が山中に滿つと云ふ鴻齋說も可ならず、歸路煙霞晚夕日歸路に就かんと、煙霞も亦晚色を表す、山蟬處處吟字の如く晚蟬が嘒嘒と啼く、素隱曰く煙霞は女色に比し、山蟬は小人の佞を構ふるに比す、豈作者の意ならん、但字の如く解して可なり、

【評論】此の篇、紀曉嵐の評に氣味自ら厚し、故に華にして靡ならず、方虛谷曰く、唐の律詩、初盛、少しく梁陳を變す、而して富麗の中稍や勁健を加ふ、此の篇の如き者是れなり、余をして評せしめば、單に寺を咏せしのみ、實地も珠林も共に徒勞の觀あり、實珠の二字、意二句に盡き、下の六句と沒交涉なり、七句は秋の景色にあらず、全く春を咏するものの如し、方紀の二家、精讀せずして稱す、余が言を知るあらば、定んで首肯すべきなり、

晚至華陰

皇甫曾

臘盡促歸心　行人及華陰　雲霞僊掌出　松柏古祠深
野渡氷生岸　寒川燒隔林　溫泉看漸近　宮樹晚沈沈

臘盡きて歸心を促がす、行人華陰に及ぶ、雲霞仙掌より出で、松柏古祠深し、野渡氷岸に生じ、寒川燒て林を隔つ、溫泉看て漸く近し、宮樹晚に沈沈、

【略傳】皇甫曾字は孝常、潤州丹陽の人、天寶中兄の冉と進士に登る、侍御史監察を歷、事に坐して貶せられて舒州司長陽翟の令に徙る、兄と名を齊うす、當時張氏の景陽、孟陽に比すと云ふ、

【句釋】華陰は縣名、今の陝西省同州府なり、臘盡促歸心將に正月に逼らんとして我の歸心を

促がすこと切、舒州に貶せられ赦に遇て歸るなり、行人は皇自身、行は歸なり、及華陰今日は華陰縣まで來り此に詩を作る、華は去聲、平聲にあらず、雲霞仙掌出此の華陰縣に五嶽の一たる華山あり、山の高五千仞、首峯に五崖あり、下より之を望めば仙掌の形の如し、乃ち此の仙掌より出る所の雲霞を望む、松柏古祠深華山に在る神祠は天子自ら祭る所のもの、其の古祠を望まんとするに、松柏は森森として茂盛す、千秋萬古鬱然たるを云ふ、野渡永生岸尙ほ是れ寒天なり、野渡の岸には氷が張る、寒川燒隔林寒塘に草を燒くものは林を隔てて看る、温泉看漸近驪山の温泉宮が漸く近く看らるるに至る、宮樹晩沈沈温泉宮畔の林樹、早已に沈沈たるを望むに至れり、

【評論】此の篇、歸人が心の忙がはしきと華陰の景色の陰深たるとを寫し出して、全く遺憾無し、兄の冉「歸渡洛水」の五律あり、暝色赴二春愁一歸人南渡頭、渚煙空翠合、灘月碎レ光流、澄浦無二芳草一、滄波有二釣舟一、誰知放歌客、此意正悠悠、以て此の詩と伯仲すべきなり、

經二廢寶慶寺一　　司空曙

黃葉前朝寺　無僧寒殿開　池晴龜出曝　松暝鶴飛回
古砌碑橫草　陰廊畫雜苔　禪宮亦消歇　塵世轉堪哀

黃葉前朝の寺、僧なくして寒殿開く、池晴れて龜出でて曝し、松暝うして鶴飛び回る、古砌碑草に横はり、陰廊畫苔に雜る、禪宮亦消歇、塵世轉た哀むに堪へたり、

【句釋】經は經過なり、廢は廢頽なり、寶慶寺は則天武后の建立せし寺、革命は總て前朝の事を滅却するを目的とす、寺亦然り、黃葉前朝寺玄宗の前、睿宗、中宗、高宗、則天の四朝あり、是れを前朝と云ふ、黃葉寺中に滿ち荒涼たる狀、無僧寒殿開佛殿の門扉は開きしままにて之を閉ぢる僧は住せざるなり、池晴龜出曝池水は尙ほ清澄にして、龜が池石に依り甲を日に曝らす、松暝鶴飛回松は翠色鬱鬱たる故に暝くして其の頂上はと見れば鶴が飛び回るのみ、古砌碑橫草古砌僧の洒掃する無し、草色のみ青青、其の間に斷碑が橫はるを見る、陰廊畫雜苔寺廊の壁間に種種の畫がある、其畫面は僧の洒掃する者なき故に苔が上るに一任す、禪宮は「テラ」亦消歇テラは方外なり世外なり、尋常人家の如きものにあらざるも亦消滅する此の如し、塵世轉堪哀寺以外の浮世の事は轉卽ち「イヨイヨ」哀むべきなり、常住不滅の物は曾て無し、

【評論】此の篇、廢寺の狀態を描きて正面裏面極めて明白なり、無僧の二字、廢の廢たる所以、皆此れより出づ、前朝は唐以前卽ち陳なり隋なりと云ふ説も立つ、是れ廣義の前朝にて、一天

子を一朝とする事は是れ狹義の前朝なり、

次北固山下　王灣

客路青山外　行舟綠水前　潮平兩岸闊　風正一帆懸
海日生殘夜　江春入舊年　鄉書何處達　歸雁洛陽邊

客路青山の外、行舟綠水の前、潮平らかにして兩岸闊く、風正しうして一帆懸る、海日殘夜に生じ、江春舊年に入る、鄉書何れの處にか達せん、歸雁洛陽の邊、

【略傳】王灣は先天の進士、開元の初め榮陽の主簿と爲り、馬懷素、羣籍を校正せしめんと欲す、灣其の選中に在り、後、洛陽尉と爲る、

【句釋】次は「ヤドル」再宿なり、北固山は江西省潤州の北一里に在り、週嶺の下、長江に臨んで、山勢北來、險固なり、客路青山外我が客と爲て赴く處は北固の青山の外なり、行舟綠水前今我が身の客と爲て置く處は長江の舟中なり、此の二句を『河岳英靈集』には南國多二新意一、東行伺二早天一に作る、恐くは初南國云云と作り、後、客路の句に改めしものならん、潮平兩

岸闊是れ滿潮なるを云ふ、風正一帆懸是れ順風なるを云ふ、海日生殘夜は日の出と夜の曉ける同時なるを云ふ、江春入舊年殘臘已に新年なるを云ふ、海日は遙ざるものなければなり、江春は南方氣暖たかきが故なり、鄉書何處達我が故鄉に信を寄せんと欲するも托するに人なきを云ふ、歸雁洛陽邊雁は北方洛陽の天に向つて歸る、我が無限の羨意は此に在り、

【評論】此の篇、盛唐の風格、高華雄亮、良とに神來の作なり、胡應麟曰く海日生二殘夜一、江春入二舊年一、景物を形容する千古に妙絶なり、沈歸愚曰く海日の句、本是れ常意一たび錘鍊を經て便ち奇絶を成す、少陵の無二風雲出一レ塞、不レ夜月臨レ關、と一種の筆墨なり、此の十字張燕公、進士堂に手書して以て楷式を示す、歸愚又曰く潮平兩岸失を正とす、兩岸を見ざるを謂ふ、別本闊に作る少味なり、沈說甚だ可に似たり、然れども流行本、闊に作るもの多し、『別裁』のみ失と爲すなり、『河岳英靈集』の、南國の十字は承句に應せず、客路云云の句に及ばざるなり、

岳陽晚景　張均

晚景寒鴉集　秋風旅雁歸　水光浮レ日去　霞彩映レ江飛
洲白蘆華吐　園紅柿葉稀　長沙卑暑地　九月未レ成レ衣

晩景寒鴉集まり、秋風旅雁歸る、水光日を浮べて去り、霞彩江に映じて飛ぶ、洲白くして蘆華吐き、園紅にして柿葉稀なり、長沙卑暑の地、九月未だ衣を成さず、

【略傳】張均丞相燕公張說が子なり、太子通事舍人より主爵郎中中書舍人に累遷し、燕國公を襲ぎ兵部侍郎に累遷し、事に坐して蘇儌二州に貶せらる、復、兵部侍郎と爲る、卒して太子少傅と贈す、

【句釋】岳陽は湖南の岳陽郡なり、地は長沙に屬す、晩景寒鴉集秋日と冬日とは鴉に寒字を付す、「寒キ鴉」なり「寒鴉」と云ふ名詞にあらず、夕暮各の宿樹に集まるなり、秋風旅雁歸「旅ノ雁」なり「旅雁」と云ふ名詞にあらず、天物各の其の歸處あり、我は獨、歸處を得ず、以て之を悲しむ、水光浮日去低き處の水光は高き處の日を浮べて流れ去る、霞彩映江飛高き處の霞彩は低き處の江に映じて飛ぶ、洲白蘆華吐洲は白きものにあらず而かも白きは蘆華が白きを吐けばなり、水中の景、園紅柿葉稀園は紅ゐなるものにあらず、而かも紅なるは秋樹が悉く紅なればなり、此の中柿葉は稀少即ち殘餘を留む、長沙卑暑地卑は「イヤシ」何となく睽たかき地なり、西、湘江より東來に至る萬里、故に長沙と曰ふ、九月未成衣『毛詩』の國風に九月授衣とあり、涼衣を脫ぎ綿服を著ける用意は未だ成さず、授衣は旅行中殊に感多きものなり、

【評論】此の篇、對を以て起り、層層法あり、古人之を交股格と云ふ、股は人の「モモ」右の股と左の股と互に交へるが如き法なれば名く、洲白の第五句、水光の第三句を承け、園紅の第六句、霞彩の第四句を承く、三四五六、交股にして、一二七八、初破り、後收む、宋の九僧が學ぶ五律多く此の交股法を取る、後生精讀せざるべからず、

晩發五溪

岑參

客厭巴南地　鄉鄰劍北天　江村片雨外　野寺夕陽邊
芋葉藏山徑　蘆華間渚田　舟行未可住　乘月且須牽

客は厭ふ巴南の地、鄉は鄰る劍北の天、江村片雨の外、野寺夕陽の邊、芋葉山徑を藏し、蘆華渚田に間はる、舟行未だ住まるべからず、月に乘じて且須らく牽くべし、

【句釋】晩發五溪舟にて五溪を晩日に出發する、五溪は今日湖南省辰州府に在り、漢の『馬援

傳』に劉尙武陵五溪の蠻夷を擊て深く入り軍沒す、援因て復行を請ふ、注に武陵に五溪あり、曰く雄溪、曰く橫溪、曰く酉溪、曰く潕溪、曰く辰溪、土俗雄を熊に作り橫を朗に作り、潕を武に作る、今に在つて卽ち辰州界と爲す、水脈は洞庭湖より出るものなり、客厥作者自ら客と云ふ、巴南地此の地は古の巴國、楚曾て巴を滅す、巴の子、五人流れて五溪に入り、以て一溪の長と爲る、中巴と巴西と巴東之を巴南の三巴と云ふ、五溪は卽ち巴南なり、我は此の巴南に厥く、鄉鄉劍北天唐代國を十道に分つ、河北、河東、關內、隴右、河南、江南、淮南、山南、劍南、嶺南、なり、此の劍南道の以北の鄉鄉は五溪なり、江村片雨外舟中より見れば一方の江村は一片過雨の外に明らかなり、野寺夕陽邊一方の野寺を見れば夕陽の寺林に挂るあり、芋葉藏山徑峽中の景狀を言ふ、イモの葉茂盛にして山徑を見る能はず、蘆花間渚田渚邊に在る田なるが故に自然と蘆花が間を侵して開く、舟行未可住素隱は解して曰く舟人どもが云ふ、今は潮が退いて水が淺き程に舟が沙に印すべきだ暫らく安らいで潮の滿つるを待つべしと、客はこれを聞て我は片時も路を急ぐぞ、若し左樣なことならば、乘月且須牽今夜は月明なり、宜しく舟を牽くべし、

【評論】 此の篇、嘉州が安西の幕府を辭し長安に歸る舟中の作、起句對を以て製し、第三、片雨

外と第七未可住と仄三字を二箇處に用ひ、語渾成なるが故毫も嫌ふべきなし、江村片雨外、野寺夕陽邊、嚴維の柳塘春水漫、花塢夕陽遲には及ばざるも皇甫冉の岸明殘雪在、潮滿夕陽多には勝るべし、

仲夏江陰官舍寄裴明府

李嘉祐

萬室邊江次　孤城對海安　朝霞晴作雨　濕氣晩生寒
苔色侵衣桁　潮痕上井欄　題詩招茂宰　思爾欲辭官

萬室江に邊して次し、孤城海に對して安し、朝霞晴れて雨を作し、濕氣晩に寒を生ず、苔色衣桁を侵し、潮痕井欄に上る、詩を題して茂宰を招く、思ふ爾が官を辭せんと欲するを、

【句釋】 仲夏は支那曆の五月なり、四、五、六、を三夏と云ふ、江陰は今日の江蘇省常州府江陰縣なり、唐代江南道常州、吳の季札の封ぜられ延陵の故地卽ち是れなり、官舍日本の縣廳なり、裴は姓、明府は縣令の敬稱語、法に嚴明なるを謂ふ、萬室は萬家なり、江陰は我が邦橫濱の如き處、邊江次江に邊うて次第して在る意味、官舍も亦此に在り、孤城は官舍を云ふ、對海安東

海に面して安全なりとの意、朝霞晴作雨右語に朝霞門を出でず、朝に霞が多き時は、其の日必ず雨なりと、濕氣晩生寒水邊なるが故に常に濕氣勝なり、晩來寒を生ずる早き所以、苔色侵衣桁●桁字音「カウ」字訓「ケタ」平仄兩用にして漾韵の時「衣架」なり、苔は「カビ」と見よ、衣桁にカビが侵略するなり、潮痕上井欄地が卑くければ潮が時ありて井戸の欄干まで上るに至る、題詩招茂宰茂宰は明府と同じ、茂は密、宰は令、知事にも郡長にも用ふべし、招は留の意に見よ、殷勤に留任を勸告するなり、思爾欲辭官裴は李に向つて辭職の意あるを告ぐ、故に李は國家の爲め身を勞して官を辭する莫かれと云ふ、

【評論】此の篇、對法を以て起り、一より六に至る、悉く江陰を離れず、水を離れず、七八の二句以て本題に歸宿す、語語倩氣なく正宗と謂つ可し、

山行　殷遙

寂歷青山曉　山行趣不稀　野花成子落　江燕引雛飛
暗草薰苔徑　晴陽拂石磯　俗人猶語此　余亦轉忘歸

寂歷たり青山の曉、山行趣き稀ならず、野花子を成して落ち、江燕雛を引

ゐて飛ぶ、暗草苔徑に薰じ、晴陽石磯を拂ふ、俗人だも猶ほ此を語る、余亦轉た歸るを忘る、

【略傳】殷遙は潤州句容の人、天寶間、忠王府倉曹參軍に終ふ、『才子傳』に曰く丹陽の人、天寶間、王維と交を結んで同じく禪寂を慕ふ、志趣高疎にして雲岫の思多し、而して家貧に苦しむ、死して葬むる能はず、一女あり纔かに十歲、日に親に哀號す、愛憐する者贈賄して骨を石樓山中に埋む、詩に工、詞彩不羣、而して警句多し、嗚呼薄倖の詩人なる哉、

【句釋】●山行山中に游涉して作る、寂歷は寂寞と同義、サミシキなり、青山曉曉天なる故、未だ一人も行かず、山行趣不稀山中を踏破して見ると趣味は少なからず、野華成子落靜中に動を見る、江燕引雛飛動中に靜を見る、暗草薰苔徑何と稱する草かは知らず故に暗と云ふ、草の香氣が苔徑に薰發する、晴楊拂石磯楊は高く秀づ、晴の字を以て暗に對す、水邊の石磯に枝が風に依て頻りに拂ふ、俗人猶語此詩趣も盡趣も解せざる者を俗人と云ふ、而かも俗人猶ほ此の山中の趣味を語る、余亦轉忘歸詩を解する余に至りては歸るを忘れて山中を徜徉するは怪しむに足らざるべしとなり、

【評論】此の篇趣不稀の三字より以下、非情の華、有情の燕、而して暗草、而して晴楊、山中

の寂味、幽味、總て此の中に在り、蕭散閒淡の作とす、

送陸明府之旰眙　崔峒

陶令之官去　離愁慘別魂　白煙連海戍　紅葉近淮村
遠浪搖山郭　平蕪到縣門　政成堪吏隱　免負府公恩

陶令官に之き去る、離愁別魂を慘ましむ、白煙海戍に連なり、紅葉淮村に近し、遠浪山郭を搖し、平蕪縣門に到る、政成つて吏隱するに堪へたり、府公の恩に負くことを免かる、

【略傳】崔峒は進士に登り、拾遺集賢學士と爲る、終州の刺史と爲り、元武の令に終ふ、

【句釋】送陸明府之旰眙旰音ヲ眙音イ、縣名なり、安徽省泗州とす、陶令之官去晉の陶淵明が彭澤令と爲て之くが如くなりと、以て陸明府の高人なるを表はす、離愁慘別魂離別に當りて我が心魂自ら愁へ且慘むなり、白煙連海戍海邊を警備する兵戍より時に白煙の連なるを見る、紅葉近淮村淮村に近づくに從つて紅葉が多しとなり、遠浪搖山郭黃海の方に見ゆる浪なれば遠と云ふ、山郭を搖がすかと疑ふ、浪の大なるを云ふ、平蕪到縣門旰眙は地形上、海には遠し、縣に

洪澤湖の大なるあるも海とは稱し難し、平原一路縣門まで通ずるを云ふ、政成堪吏隱能く政治を視、而かも官俗の味無く、吏と爲つても猶ほ隱者の高潔なる志を行なふべしとなり、免負府公恩府公とせられたる天子の恩に負くを免かるの意、所謂良二千石の職を全うせよと云ふなり、

【評論】此の篇、三四五六、道中の景を叙し、起二句、離恨を說き、結二句、友の爲め訓戒す、是れ歸題の格なり、起句、對せざる所、稍や正法を案すの端緒を開く、惜むべきなり、

溪南書齋　楊發

茅屋住來久　山深人閉門　草生垂井口　花落擁籬根
入院將雛鳥　攀蘿抱子猿　曾逢異人說　風景似桃源

茅屋住し來ること久し、山深くして人門を閉づ、草生じて井口に垂れ、花落ちて籬根を擁す、院に入る雛を將ゐる鳥、蘿を攀づ子を抱く猿、曾て異人の說に逢ふ、風景桃源に似たりと、

【略傳】楊發字は至之、楊收が兄なり、進士に登り、拔萃せられ左司郎中に至る、又都官郎中

と爲る、蘇州刺史、福建觀察使と爲り婺州刺史に貶せられて卒す、

【句釋】溪南は一本南溪に作る、季昌曰く戎州南溪郡に南溪縣あり、又簡州に南溪あり、壽昌寺の側に在り、寺側に小桃源あり、要するに大問題にはあらず、書齋は楊が讀書堂なり、茅屋住來久我も亦吾廬を愛すの意なり、山深人閉門人は主人なり、住の仄に人の平を以て承く、草生垂井口井戸の邊は草の生ずるに任す、掃除せざる事知るべし、花落擁籬根籬牆の邊は落花狼藉、而かも掃はざるなり、入院將雛鳥院は書院、齋の外別に院なるものあるにあらず、攀蘿抱子猿我が齋前の崖樹の蘿に攀ぢて游戲する猿は鳥と同じく其の子を伴なうて居る、曾逢異人說異人は漁人なり、逢は聞なり、風景似桃源此の地も武陵桃源の仙境と異ならずとなり、

【評論】此の篇、題目は書齋にして書齋中の事は全く叙せず、但書齋外の寂趣を叙す、三四は非情、五六は有情、有情も非情も皆其の所を得て、各の自然を養ふ意味を表はす、詩格は高からざるも詩趣は甚だ勝る、

泊楊子岸

祖詠

纔入維楊郡　鄉關北路遙　林藏初霽雨　風退欲歸潮
江火明沙岸　雲帆礙浦橋　客衣今日薄　寒氣近來饒

纔に維楊郡に入れば、鄉關北路遙かなり、林は初めて霽るる雨を藏し、風は歸らんと欲する潮を退く、江火沙岸に明かに、雲帆浦橋に礙へらる、客衣今日薄し、寒氣近來饒し、

【句釋】泊は舟泊なり、楊子は卽ち楊子江、支那の南方一帶を劃する大江、纔は初の意、入維楊郡今日江蘇省揚州府江都縣治卽ち古の維楊郡なり、鄉關北路遙洛陽が鄉關なれば維楊郡よりは北方千里を隔つ、林藏初霽雨是れ維楊郡にて見る所の景、林外雨初めて霽たれども林は尙ほ濕うてあることを形容す、風退欲歸潮水中の見る所は如何、潮が退かんとすれば、又風が暴らして再たび岸を打つて來る、江火明沙岸是れ夜に入りての景、漁人等が魚を捕る爲めの火が點點沙岸に明かなり、雲帆礙浦橋雲の如く大なる帆を揚げて來たる舟が浦橋の爲め礙へられ通過する能はず、依て帆を下して噪ぐ態を云ふ、客衣今日薄未だ我は單衣のままにて居るが、寒氣近來饒舟泊して其の寒氣の饒きに驚きしなり、饒は多と同義の字とす、

【評論】此の篇、舟泊の情景、十分に表はれず、『才子傳』に祖詠を評して剪刻省靜にして、用思尤も苦しめり、氣は高からずと雖も、調頗る俗を凌ぐ、稱して才子と稱するに足る、此の詩

第三句江上の景なるに第四句は江中の景、而して五六共に水中の景、剪刻省靜は他の詩に在て然り、此の詩之を缺く、

新秋寄二樂天一　劉禹錫

月露發二光彩一　此時方見レ秋　夜涼金氣應　天靜火星流
蟲響偏依レ井　螢飛直過レ樓　相知盡白首　清景復追游

月露光彩を發す、此の時方に秋を見る、夜涼うして金氣應じ、天靜にして火星流る、蟲響いて偏に井に依り、螢飛んで直ちに樓を過ぐ、相知盡な白首、清景復追游せんや、

【句釋】新秋は七月、樂天は白樂天なり、月露發光彩素月も白露も天地相應じて光彩を發す、此時方見秋別樣の光彩を發せしより方に是れ秋なりと氣が付きたるなり、發の仄を承るに方の平を以てす、夜涼金氣應火水木金土の五行を四時に配當すれば秋は金に應ず、金の氣たるや涼なり、冷なり、天靜火星流『毛詩』に七月流火とあり、六月は火星が午の方の離火の位に當る七月は午の位を過ぎ西に下る、蟲響偏依井井邊の草根に蟲鳴を聞く、螢飛直過樓樓頭を掠めて過ぎるものは螢火なり、蟲は鳴處に靜なり故に偏、螢は樓頭を過ぐ故に動なり直なり、相知は知友なり舊友なり、盡は皆なり、白首知友も我も共に白首、秋は感じ易し、故に非常に白首を傷む、而かも傷むとは言はず、清景復追游君も僕も老たり、此の新秋に逢ふも同賞同游する機會を得ずとなり、樂天は謫せられて杭州に在り、禹錫は謫せられて朗州に在ればなり、

【評論】此の篇、前六句は秋を叙し、七八二句寄示する所以の情を叙す、詩法分明なり、『淮南子』に一葉落而天下知レ秋と、此の葉落を言はずして月露を言ふ、作者の工夫此に在り、禹錫は眞に詩豪の名に背かざるなり、

秋日送レ客至二潛水驛一　劉禹錫

候吏立二沙際一　田家連二竹溪一　楓林社日鼓　茅屋午時雞
雀噪晩禾地　蝶飛秋草畦　驛樓宮樹近　疲馬再三嘶
候吏沙際に立ち、田家竹溪に連る、楓林社日の鼓、茅屋午時の雞、雀は噪ぐ晩禾の地、蝶は飛ぶ秋草の畦、驛樓宮樹近し、疲馬再三嘶く、

【句釋】潛水驛は浙江省杭州に在り、吳興と鄰接の地、客恐くは吳興へ赴くならん、候吏立沙

際上官の赴任を迎へる爲め驛亭長は部下の小吏をして沙際に立たしめ以て上官の來るを候す

田家連竹溪潛水驛は一寒驛に過ぎざるのみ、百姓家が竹溪に連なる以て想像すべし、楓林社日鼓春分と秋分の二季に土地神を祭りて以て農事を祈る是れを社日と云ふ、我邦の初午の祭禮の如きもの、乃ち今秋社の鼓の音を聞く、茅屋午時雞喔喔の雞聲は正に是れ午時に當る、雀噪晩禾地稻田に雀聲の噪がしきは正に是れ豐年、蝶飛秋草畦畦に蝶の飛ぶは正に是れ野菜秀づ、驛樓宮樹近吳興は古の吳都、故に吳都の樹を宮樹と云ふ、潛水驛樓は已に吳都に近きなり、疲馬再三嘶馬も長途に疲勞したらん、而かも吳都に近づきたるを喜ぶものの如し、

【評論】此の篇、潛水驛の狀態を叙して其の眞を見る如し、余最も其の詩法の嚴に服す、立の仄に連の平を以て承け、晩の仄に秋の平を以て承け、音調を諧せしむ、蓋し雞、雀、蝶、馬等の連續するは稍やウルサシ、動物は一聯にて止むを可とせんか、

得日觀東房

李　質

曾入桃源路　桃源信少雙　洞霞飄素練　壁蘚畫陰窗
古木疑撐月　危峰欲墮江　自吟空向寂　誰與倒秋缸

曾て桃源の路に入れば、桃源信に雙び少し、洞霞素練を飄し、壁蘚陰窗に畫く、古木月を撐ふかと疑ひ、危峰江に墮ちんと欲す、自吟じて空しく寂に向はんとす、誰と與にか秋缸を倒さん、

【略傳】李質字は公幹、襄陽の人、擧に應じて成る無し、親有り衡湘に在す、往て謁せんとす、流に泝て溢城の豫章に至る、軍に遂れ舟を捨て武寧よりして返る、會ま黃巢の寇、其の宰を殺す、蒼黃前んで去る、得日觀に宿す、酒數缸あり甚だ美、遂に一壺を携へ樓に上り之を酌む、因て詩を吟ず、東房の詩是れなり、後、登第して豫章に廉察たり、

【句釋】得日觀は道士の所住、觀は釋氏の寺と言ふが如し、曾入桃源路今自ら得日觀に入るは昔漁父が桃源に入りしが如し、比喩を以て言ふ、桃源信少雙得日觀の佳境天下無雙なり、洞霞飄素練得日觀洞の霞色は素き練を飄へすが如く、壁蘚畫陰窗得日觀壁の蘚態は恰かも畫紋の如く陰窗に描き出す、古木疑撐月古木は卽ち喬木、天に冲して宛かも月を撐へる如し、危峯欲墮江江に臨んで矗立する危峯は今にも江中に墮んかと思はるる狀なり、自吟空向寂自吟は和する者なく、知らず日の寂寞に向はんとするを、誰與倒秋缸缸同じ元來「カリモ」と稱して「アブ

ラツギ」なり、今酒盃に代用す、酒の相手は誰も居らずと獨酌を嘲けるなり、

【評論】此の篇、動もすれば危險に墮する韵を以て之を出すに易易掌を翻へすが如し、一句の妥當を缺くものなし、

北固晩眺　　竇常

水國芒種後　梅天風雨涼、露蠶開晩簇　江燕語危檣

山址北來固　潮頭西去長　年年此登眺　人事幾銷亡

水國芒種の後、梅天風雨涼し、露蠶晩簇を開き、江燕危檣に語る、山址北來固く、潮頭西去長し、年年此に登眺す、人事幾ばくか銷亡す、

【句釋】●●北固山は江西省京口に在り、●●晩眺晩日に眺望するなり、●●水國江西、江蘇、浙江等の南方の國は總て水國と云ふ、海に近きを以てなり、●●芒種は五月の節を云ふ、芒は稻麥の「ノ」●●梅天風雨涼梅天は五月炎ならざるべからず、而かも涼し、水國なるを以てなり、●●露蠶は蠶を育するに屋外に置いて爲す故に露と云ふ、●●開晩簇蠶の箔を簇と云ふ、所謂五眠後、上簇して之を屋外に乾す其の色雪の如し、●●江燕語危檣危檣の方に目を移せば江燕が喃喃と奮を語るものの如し、●●山址北來固此の山の形は勢ひ北方より南を襲ふが如く以て長江に臨む、●●●●潮頭西去長長江の潮は蜀の方に向つて流る、●●年年此登眺資は水部員外郎より閬、夔、江、撫、四州の刺史に連除せられ、此の地は自分の管轄下なるが爲め屢ば此の山に登るの機會ありしなり、●●人事幾銷亡安祿山の亂後種種と景狀が變化したるを云ふ、

【評論】此の篇、晩眺に因て感慨を寓し、景あり情あり一唱三嘆すべし、

送可久歸越中　　賈島

石頭城下泊　北固暝鐘初　汀鷺衝潮起　船窗過月虛

吳山侵越衆　隋柳入唐疎　日欲供調膳　辟來何府書

石頭城下に泊す、北固暝鐘の初、汀鷺潮を衝いて起ち、船窗月を過して虛し、吳山越を侵して衆く、隋柳唐に入て疎なり、日に調膳を供せんと欲す、辟し來るは何れの府の書ぞ、

【句釋】●●●●送可久朱慶餘字は可久、字を以て行はる、●●●●閩中の人、越中も卽ち閩、今日の浙江省紹興府山陰縣なり、●●●●石頭城下泊歸らんとして此に泊す、●●●●江蘇の江寧府石城城門なり、●●吳の孫權築く所北固

は山鄰國の江西に屬す、今日は江蘇、江西、二國なるも唐代は一なり、曉鐘初北固山の清涼寺より出る鐘聲は早已に夕陽に逼る、汀鷺衝潮起舟中の所見、船窗過月虛月の船窗に有る間は興もあらん、月落過なちし後は興も虛しからんとなり、吳山侵越衆江南は吳、江北は越、吳國の山は越地を侵す衆きなり、隋柳入唐疎此の長江沿岸は隋の煬帝が植し柳一千三百里の長きに渡る、今日に至りては蕭疎にして又煬帝の如き奢澤を爲す天子なしとの意を含む、日欲供調膳可久が歸國は老親に孝養するが本意なり、卽ち日日調膳を老親に供せんと欲す、辟來何府書孝子の名天聽に達して必ず辟し出さるる事あらん、蓋し宮内府なるか文部省なるか、其の辟さるる役所は何であるか判らずと云ふに在り、

【評論】此の篇、起句より六句に至る悉く道中の事を叙し、七八其の志を叙す、浪仙長江集中誦すべきものの中なり、吳越隋唐の四國を筆下に翻弄す、鳥佛の詩如來たる所以此に在り、

新安江行　章八元

江源南出永　野飯暫維梢　古戍懸魚網　空林露鳥巢
雪晴山脊現　沙淺浪痕交　自笑無媒者　逢人作解嘲

江源南より出でて永し、野飯暫く梢を維ぐ、古戍魚網を懸け、空林鳥巢を露はす、雪晴れて山脊現はれ、沙淺くして浪痕交はる、自から笑ふ無媒の者、人に逢うて解嘲を作ることを、

【略傳】章八元は睦州の人、大曆の進士、嘗て郵亭に詩を題す、蓋し楚の音に激するなり、會稽の嚴維、驛に到り問て曰く爾能く我に從つて詩を學ぶや、曰く能くせん、少頃あつて遂に發す、八元已に家を辭す、維之を賢なりとし遂に親しく指論す、」『才子傳』傳ふる所、曰く八元、大曆六年、王淑、第三人の進士に榜す、京に居る既に久し、床頭金盡き、江南に歸つて韋蘇州を訪ふ、持贈甚だ厚し、復都に來りて制科に應す、」孰れか是なるを知らず、

【句釋】新安は唐代江南道に屬す、今日の安徽省徽州府休寧縣治とす、江行其の江の歙縣自する者は黟山より出で、休寧自する者は率山より出で、績溪自する大彰山より出で、婺源自する者は浙山より出づ、浙江より休寧を泝る者を灘と爲す、三百六十あり、江源南出永浙江の源は南方徽州より出るを云ふ、先づ水の地理を說く、野飯暫維梢俗語で言はば一寸辨當を食ふ時間、梢卽ち帆綱「ホヅナ」を維ぐ、古戍懸魚網漁人が網を乾す爲め之を古戍に懸ける、空林露鳥

巢鳥が雛を育する巢なるか、或は已に去て空しき巢なるや、素隱は未だ巢を出でざる雛を養ふに空林の字を以てするは面白しと云ふ、實事は面白きではすます、恐くは鳥去つた後の空巢が見えるならん、古戍は魚網を懸るに宜し、空林は鳥の巢を構ふるものにあらず、雪晴山脊現是れ高處の景、沙殘浪痕交是れ低處の景、沙石の淺處は種種の浪が混交するを言ふ、自笑無媒者知己無きを無媒と云ふ、逢人作解嘲揚子雲の如き文豪は人の爲めに解嘲を作るも可なり、余が如きもの如何に無媒なるも解嘲を作りて子雲に擬するは他人の笑を待たず、我自ら笑ふのみ、

【評論】此の篇、道中に依て身世の感を寓す、其の人品卑しからず詩も亦卑しからざる所以なり、

三月五日汎長沙東湖

張又新

上巳餘風景　芳辰集遠坰　湖光迷翡翠　草色醉蜻蜓
鳥弄桐華日　魚翻穀雨萍　從今留勝會　誰看畫蘭亭

上巳風景を餘す、芳辰遠坰に集まる、湖光翡翠を迷はし、草色蜻蜓を醉はしむ、鳥は桐華の日を弄し、魚は穀雨の萍に翻る、今より勝會を留めば、

誰か看る畫蘭亭、

【略傳】張又新字は孔昭、工部侍郎薦が子なり、元和中に進士高第に及んで左右補闕を歷、李逢吉に附けり、汀州の刺史を罷らる、又李訓に附けり、訓死す、後坐して貶せらる、左司郎中に終る、

【句釋】三月五日●●●

て後世に留むれば、誰看書蘭亭晉の穆帝の永和九年三月三日に王羲之が太原孫統等四十一人と山陰の蘭亭に會し酒酣詩を賦し序を製す、好事の者、此の圖を畫き名けて蘭亭脩禊圖と曰ふ、此の蘭亭の勝會も、我東湖の勝會の爲め、人の語るもの無きに至らんか、

【評論】一二、對を以て起し、尙盛唐の作風、而して第三句第六句は共に水中の景、第四句第五句は地上の景、古來之を互鎖の變格と稱す、

○送二人入一蜀　李遠

蜀客本多愁　今君是勝游　碧藏雲外樹　紅露驛邊樓
杜宇呼レ名語　巴江學レ字流　不レ知煙雨夜　何處夢刀州

【句釋】送人入蜀蜀は今日の四川省成都府を以て中心と爲す、而して重慶、而して夔州、山益す深く、水益す清し、蜀客本多愁古、蜀の望帝は他鄉に在て死し、其の魂常に歸を思うて

遂に鳥と化し、以て不如歸去と呼ぶ、此の如き歷史を有する土地ゆゑ游ぶ者は懷鄉心起らざるを得ず、是に於てか愁多き所以なり、今君是の字は「ココニ」と訓む、前に蜀客とあり、此の蜀字を承けて是にと云ふ、勝游は景勝を探つて游ぶを云ふ、勝游の中必ず鄉愁を起さんとの意を含む、碧藏雲外樹天も山も雲も樹も悉く碧なるゆゑ特に樹の一種を認めがたしとの意、紅露驛邊樓碧に對する紅は特に目を牽く、其の紅色は何ぞ是れ驛邊卽ち旅館の閣樓なり、共に蜀に入る途中の景、杜宇呼名語張華の『博物志』に「杜宇啼て苦しむときは自ら名を呼んで謝豹と曰ふ、」叫と言はずして語と云ふ、味茲にあり、『寧宇記』なる書は未見の書なるが、季昌の註に此の書を引きて曰く、蜀の先は人皇の際に肇れり、黃帝の子、昌意に至りて蜀の女を娶り帝嚳を生む、後支庶を蜀に封す、夏殷周を歷て、始めて王者と稱す、蠶叢より拍濩、拍濩より魚鳧、魚鳧より杜宇に至る、杜宇を望帝と稱す、時に荊人の鱉靈と云ふあり、尸水に隨て上り、汶山に至り帝に見ゆ、帝立てて相と爲し開明と號す、會ま洪水あり、爲めに徑山を鑿ちて流を通じ功あり、禪るに位を以てす、又『成都記』に望帝死して魂鳥と化す杜鵑と名く、又子規と曰ふ、自ら謝豹と鳴く、又一說に杜宇位を禪りて西山に升る、隱る時適ま三月子規鳴故に蜀人悲しむ、巴江は古代の巴國、水に因て名と爲す、闇水白水、東南より合流して、漢中より始寧

城下に至る、涪陵に入て、曲折して巴字の如し、或は云ふ、江三流に分れ、中に小流あり、横貫して巴字を成すと、學字流即ち三流説是に近し、不知煙雨夜明月夜と言はずして煙雨夜と言ふ、人の愁思は或は明月、或は煙雨、境に因り、情に因りて異なると雖も、羈旅中に在りては、愁を喚起するの力、雨は月より強きことなり、何處夢刀州蜀中何處の寓に在て、刀州の夢を結び玉ふやと、晉の王濬、廣漢の太守と爲る、夜三刀を臥屋の梁に懸くと夢む、須臾にして、更に一刀を益す、意甚だ之を悪む、主簿李毅拜賀して曰く三刀は州の字と爲す、又一を益すは、明府其れ益州に臨むなり、果して益州の刺史に遷る、後再び刺たり、今君も王濬の如く刀州を夢み、以て益州の刺史と爲る、其の夢みるは何處に在てぞや、

【評論】 此篇中間の四句は蜀を叙し、一二七八の四句は人を叙す、蜀客本多レ愁の五字を本とし他の七句此の五字の注脚として見るべし、一氣貫通して誤まらず、後生以て規とすべし、紀曉嵐曰く中四句好、紅樓、碧樹、拆用を以て工夫を見る、杜宇一聯細切を以て思致を見る、然れども巴江實に字を學ぶ、杜宇未だ嘗て名を呼ばず、亦微瑕なり、

七里灘

許渾

天晩日沉沉　孤舟繫二柳陰一　江村平見レ寺　山郭遠聞レ砧

樹密猿聲響　波澄雁影深　榮華暫時事　誰識二子陵心一

天晩れて日沉沉、孤舟柳陰に繫ぐ、江村平にして寺を見、山郭遠くして砧を聞く、樹密にして猿聲響き、波澄んで雁影深し、榮華暫時の事、誰か識らん子陵の心、

【句釋】 七里灘は今日の浙江省嚴州に在り、後漢の嚴子陵が釣を垂れし處、天晩日沉沉風あれば七里、風なければ七十里と稱する、灘に於て黄昏此に來る、孤舟繫柳陰岸に沿うて柳あり、孤舟以て此れに繫ぎ、而して見る所の景は下句の如し、江村平見寺嚴子陵の菩提を弔する爲め建立せし寺を九隴寺と曰ふ、舟中望む所の寺は是れならんとの舊説なり、山郭遠聞砧村邊には寺を見、山郭には砧を聞く、寺は自然に靜寂なり、砧は自然に哀凄なり、古人を想ひ、又故郷を思ふの意を寓す、樹密猿聲響郭には砧聲、樹には猿聲、愈よ聞て、愈よ凄、波澄雁影深雁も亦人の愁を催す物、其の影波心に落つ、是れも情に堪へざるなり、榮華暫時事唐突此の語を出し、千斤の力あり、之を求むるは即ち之を失するなり、山の極處を窮むれば、遂に降るの一法あるのみ、榮華は一夢、何ぞ慕ふに足らん、誰識子陵心子陵本姓は莊、後漢明帝の諱を避て姓

を嚴と改たむ、名は光、字は子陵、少うして光武と同學なり、光武卽位に及んで、乃ち姓名を變じて羊裘を被、澤中に釣る、光武其の賢を思うて之を物色す、齊國に於て得たり、三たび召して至る、引て臥内に入り、舊を論じ日を累ね、因て共に起臥す、光足を以て帝の腹に加ふ、明日太史奏す、客星御座を犯すこと甚だ急と、帝笑つて曰く、朕故人の嚴光と共に臥るのみ、諫議に拜するに、受けず、歸隱して富春に畊す、世に高士と稱す、富貴は天子に至つて極まる、而かも達し盡くせば、目的は最早無し、目的無ければ樂も亦無し、樂しむと雖も亦暫時なるのみ、遂に子陵の高潔を我は學ばん、

【評論】此の篇、七里灘の所見を叙し、而して我が所思は子陵に在ることを示す、許渾其の人高官に登ると雖も、林泉を樂しむの意消せず、慷慨の氣亦在り、故に懷古詩に於て晩唐其の右に出るもの無しと稱せらる、詩を作りて意義然きときは何等の詮無し、諸子請ふ三讀せよ、

孤山寺

張祐

樓臺聳碧岑　一徑入湖心　不雨山長潤　無雲水自陰
斷橋荒蘚合　空院落花深　猶憶西窗夜　鐘聲出北林

樓臺碧岑に聳え、一徑湖心に入る、雨ならずして山長く潤ひ、雲無くして水自ら陰る、斷橋荒蘚合し、空院落花深し、猶ほ憶ふ西窗の夜、鐘聲北林より出でしことを、

【略傳】張祐字は承吉、南陽の人、或は云ふ清河、或は河東と、其眞を知らず、處士を以て蘇州に居、令狐楚其の詩を以て薦む、而かも用ひられず、用ひられずと雖も、其の人極めて高く、詩亦雅思誦すべし、

【句釋】●●寺は浙江省の杭州府城外に在り、清初の翟灝、翟翰兄弟の合輯なる『湖山便覽』卷二に孤山の廣化寺舊孤山に在り、唐宋人稱する所の孤山寺なり、陳の文帝天嘉元年建つ、永福と名く、唐の元和十二年、僧惠皎、法華經を寺の石壁に鐫る、宋僧方簡重建以て廣化と改む、●●●●樓臺聳碧岑梵樓禪臺碧色なる山岑に聳ゆ、●●●●一徑入湖心碧岑に上る徑は卽ち西湖の中心より、漸と通ずるなり、●●●●不雨山長潤湖に接する故に山上雨なくとも潤ふが如し、●●●●無雲水自陰山に接する故に湖上雲無くも水自から陰るが如し、●●●●斷橋は西湖に架せる橋、●●●●荒蘚合孤山寺へ往來する善男善女多きときは何ぞ荒涼たる蘚苔なぞあらん、今は武宗沙汰の厄に遭ひ、當年の寺容にあら

す、空院落花深僧が住せざる故に空院、人の賞する無く花も空しく落つ、人の掃ふ無し、深き所以、猶憶西窗夜孤山寺の全盛時代、我來つて一宿せし事を猶記憶する、西窗は寢室の異名なり、津阪東陽は婦人の寢室と云ふ、婦人に限るにあらず、夫も西窗を以て寢室とす、孤山寺に婦人の寢室ある道理なし、東陽先生考を失す、鐘聲出北林西字と北字と偶然に對を成す、曉天の鐘聲が北林中より出でしを記憶するなり、

【評論】此の篇、古師の評に第一句は道場の實景を言うて、以て佛敎の向上なるを美め、二句は山門の境致を言うて、宗旨の玄微を美め、三四は以て法雨慈雲の山河大地に遍きを美む、五六は寺の荒廢を謂ふ、風、雅、頌、賦、比、興の六義皆以て備ふと、此の如くにして解す、何の詩か此の如くならざらん、宋の方虛は曰く此の詩、細潤と謂つ可し、然れども太工太偶と、清の紀曉嵐は曰く太工太偶、自ら是れ病、然れども選中（瀛奎律髓）此の類極めて多し、獨此の一首を斥ふべからず、而かも此の一首亦尙未だ太工太偶に至らず、寒山子の「苔滑らかにして雨に關するにあらず、松鳴て風を假らず」は此の三四の句より轉化し來るものなり、胡應麟曰く張が子、小名冬瓜、或以て之を譏る、答て冬瓜瓠子を出すべしと、則ち張が名祐にあらず祐なること知るべし、

惠山寺

舊宅人何在　空門客自過　泉聲到池盡　山色上樓多
小洞穿斜竹　重堦夾細莎　慇懃望城市　雲外暮鐘和

【句釋】惠山寺は江蘇省常州府無錫縣の西七里に在り、寺の歷史は未詳、舊宅人何在武宗の厄後、僧徒は還俗し、今寺址あるも住する人無し、空門客自過寺を稱して普通に空門と稱するも、此の空門は「アケバナシ」の門を稱す、故に游客は自由自在に游ぶ、泉聲到池盡山上より落下する泉の聲は、此の寺の池に到りて聲が盡きるなり、陸羽の「水品」に惠山寺の水を第二と名け、楊子江を第一とし、第三は虎邱、第四は丹陽、第五は揚州大明寺、第六は松江、第七は淮水、七の內二に居す、佳泉たること知るべし、山色上樓多樓上より見れば山色多きなり、小洞穿斜竹小洞へ到らんとするには斜竹を穿ちて達するを云ふ、重堦夾細莎重なりたる「キザハシ」は細

涉卽ち「ミクリ」草の爲め路を夾まる、愍勲望城市常州城市を惠山より仔細に望めば、雲外暮鐘和雲外は遠方を指す、暮鐘は此寺より出ると舊注にあるが、住僧無くして鐘聲の出づべき無し、他方より起る鐘聲の和を聞くなり、

【評論】此の篇、對を以て起し、廢寺の荒涼を叙し、味言外に在り、三四特に妙と爲す、方虛谷曰く此詩、孤山寺詩と同じく三四尤も工、五六則ち工にして冗に窘しむ、前聯廢す可らざるを以て故に之を取る、紀曉嵐曰く五六單窘は則ち之れあり、工にあらず亦冗にあらず、余も亦紀評を取る、七八の二句は聊か俗陋なるを免れず、二家評せざるは何ぞや、

登蒲澗寺後二巖　李羣玉

五仙騎五羊　何代降玆鄉　澗有堯時韭　山餘禹日粮
樓臺籠海色　草樹發天香　浮溟與甚長
五仙五羊に騎つて、何の代か玆鄉に降る、澗には堯時の韭あり、山には禹日の粮を餘す、樓臺海色を籠め、草樹天香を發す、浩笑す煙波の裏、溟に浮んで興甚だ長し、

【句釋】蒲澗寺は菖蒲澗に在るを以て名くるか、後二巖は寺後に在る二巖に登りて作る、今日の廣東省廣州府番禺縣の東北に在り、晉の咸安中、姚成甫、澗側に於て丈人に遇ふ、曰く此の菖蒲は安期生の種うる所なりと、安期生は古の仙人なり、五仙騎五羊『寰宇記』幷に『列仙傳』に高固、楚の相と爲る、五仙人あり、五色の羊に騎て穀穗を持て州人に遺る、因て呼んで五羊仙と爲す、何代降玆鄉降下せしことは事實なり、而かも何代なるを知らず、玆鄉は廣州を指す、澗有堯時韭此の韭は普通の「ニラ」にあらず、卽ち菖蒲を云ふ、『呂氏春秋』に菖蒲一名堯韭とあり、時の字を夾んで、前句の何代を承ける、山餘禹日粮古注に『南越志』を引て曰く、大禹、藤の根を取つて、粮と爲し飢年人之を食ふ、禹餘粮と名くと、澗には菖蒲あり、山には藤樹ありとの意、樓臺籠海色廣州は一方海に接す、寺の樓臺海色を籠る所以は蓋し實況とす、草樹發天香寺門の周圍草樹多し、而かも皆天花の香を發し人に可なり、浩笑煙波裏寺は海中に在り、故に我は煙波裏に於て大笑する、浮溟與甚長滄溟に浮んで游ぶが如く、我が興は非常に長し、

【評論】此の篇、方虛谷の評に曰く、堯時韭、禹日糧、對工なり、詩は本工を忌む、工にして味無きは近人四六及小學答對の如し、則ち必ず此の式に拘るべからず、善く詩を爲る者は衆體を備ふ、亦此れ無かるべからず、老杜の如きを以て善の善と爲すもの、紀曉嵐曰く、此の評太善、

又曰く起太率易、結尤も語を成さず、五仙騎ニ五羊一何代降ニ玆鄉一を以て率易とし、浮レ溟興甚長を語を成さずと云ふ、要するに三四五六の四句を除き一二七八の句は未成品なりと斷ず、或は當る、

送僧還ニ南海一

李洞

春往ニ海南邊一秋聞ニ半夜蟬一鯨呑洗レ鉢水一犀觸點レ燈船一
島嶼分ニ諸國一星河共ニ一天一長安却回日松偃舊房前

春は海南の邊に往き、秋は半夜の蟬を聞かん、鯨は鉢を洗ふ水を呑み、犀は燈を點ずる船に觸る、島嶼諸國を分ち、星河一天を共にす、長安却回の日、松は偃す舊房の前、

【句釋】送僧還南海廣東の廣州は是れ南海郡なり、印度より最も早く佛教の入りし國とす、禪は特に此の地を推す、春往海南邊南海の人にして、長安に來錫せしが、今海南へ往く、往けば卽ち還るなり、秋聞半夜蟬前句は行道にて、此の句は禪止であるなり、所謂禪坐して夜半に眠らず、露降るに驚き、蟬が鳴く、其の一聲の微だも聞く、寂靜極まるなり、石川鴻齋は注して曰く、半夜ノ蟬ハ夜未ダ明ザルニ、蟬聲既ニ啼ヲ云フ、全ク夜半ニ鳴ニハアラズ、人ハ房ニ寢テ夜ガ明ケザレバ起ズ、蟬ハ樹上ニ在リテ夜ノ明ルヲ早ク知ル、故ニ人ヨリイヘバ夜半ニ鳴クカト覺ユルナリ、坐禪觀法シテ、夜モ寢ザルニヨリテ、夜半ノ蟬聲ヲ聞クト云ハ當ラザル解ナリ坐禪ハ兎モ角モ、夜半ニ蟬ノ鳴クコトハ有マジキコト也、此の如き解にては作者の苦辛を沒却して、奇句をして變じて陋句と爲らしむるものなり、山中に住したる者は、夜半に鳥聲や蟬聲を聞くこと常なり、蓋し永續的に鳴くと考ふるより、大抵な者所謂實驗の無きものは、皆疑ふ所なり、鳥聲も蟬聲も共に一聲を放つのみ、此の一聲が如何にも靜寂の境と相應じ、人の詩思をして玄妙の域に進ましむ、城中に棲む人の知るを得ざる所なり、鯨呑洗鉢水是れ海中の景、鐵鉢は僧食を入れる具、食後之を海水にて洗ふ、其の餘粮を鯨魚が呑む、慈悲相の前には、鯨魚も害せざるのみならず、却て柔和の物と爲る、犀觸點燈船犀は水犀、毛は豕の如く、頸は馬の如く、鼻上、頭上、額上に各の一角あり、其の性月を喜ぶ、今船中に點ずる燈を認めて月と爲し來りて之に觸る、以て僧の害心なく、慈悲を示すなり、島嶼分諸國是れ畫の景、舟中より東方の島は何、西方の嶼は何と、明白に分判することを得、星河共一天是れ夜の景、天上と海上と同一色にして、區別なきを云ふ、前句は差別、此の句は平等を意味す、長安却回日此の却

回は本へ回るの意、禪宗では「キャウイ」と發音する、詩語としては「キャククワイ」で妨げ無し、海南の化益終りて再たび長安に回るの日、●●●●松偃舊房前唐の玄奘三藏は西域に往く、其の房前に松あり、其の枝西偃す、忽ち一日枝東偃す、弟子曰く師歸らん果して然り、今師も長安に回るの日、定んで玄奘の如きことあらんとなり、

【評論】此の篇、平易に製したる觀ありて、其の實甚だ努力せしものなり、春秋二季は佛制として僧の行脚を許し、夏冬には行脚することを特種の事を除く外、許さず、此の春秋の佛家に切なる文字を以て起し、而して題目の海南を云ふに句句水上の景を以てし結末二句其の歸來を叙して我が敬慕する意を表はす、佛典を讀み其の理に通ずる人にあらざるより、決して此の詩無し、余深く其の努力の詩たるを讃す、句法は交股格なり、三句は五句と同じく畫景、四句は六句と同じく夜景、股を交へて對を爲す、方虛谷曰く、洞賈島を學んで詩を爲る、第五句佳、紀曉嵐曰く、五六是れ一氣、虛谷何を以て但上句を賞するや、

鄠北李生舍

圭峰秋後夜　亂葉落寒虛　四五百竿竹　二三千卷書
雲深猿盜栗　雨霽蟅沾蔬　只隔門前水　如同萬里餘

圭峰秋後の夜、亂葉寒虛より落つ、四五百竿の竹、二三千卷の書、雲深くして猿栗を盜み、雨霽れて蟅蔬に沾す、只門前の水を隔てて、萬里餘に如同す、

【句釋】鄠北鄠は縣の名、夏の時の扈、商の時の崇、漢代の右扶風郡、今日の陝西省漢中府南鄠縣の地、李生は未詳、舍は李生の宅か寓舍か判然せず、圭峯●●●●終南山の別峯を圭峯と云ふ、李生が舍の在る所、秋後夜方に冬に近からんとする時の夜、●●●●亂葉落寒虛虛は「ソラ」冬日なれば寒虛と云ふ、夜坐して風の爲めに落木の亂れる音が、颯颯と聞える、●●●●四五百竿竹是れ舍外の景、●●●●仄仄仄平仄の法、亦以て知るべし、●●●●二三千卷書是れ舍内の景、仄平平仄平の法、仄平仄仄平の句を爲す邦人は宜しく此等の法を見るべし、●●●●雲深猿盜栗是れ樹上の景、栗は舍主が愛護して賣らんと欲する物、之を取る猿は盜猿ならずや、●●●●雨霽蟅沾蔬是れ地上の景、雨後に蟅が營營と自活の道を講ずる狀、沾蔬を素隱和尚は解して曰く「雨後ニ蟅ガ蔬ノ上ニ登リタルヲ見レバ、蟅ガ蔬ヲウルホシタルヤウナリ」と、是れ謎を解きたる如し、唐賢は謎の如き詩は決して作らず、實景を其の儘叙し、細工を加へず、案ずるに沾は整頓、添也、益也、集也、雨後の氣を愛して

蝗が蔬上に集まるなり、何の爲めに集まると云ふことは、問題が別にて、詩の意は集まるものなり、蝗が登りたるを見れば、蔬の濕は雨の爲めにあらずして、蝗の爲めなりなぞと解するは謎と唐詩とを混同したる説、余は取らざるなり、只隔門前水門前の人家とは、一水を隔つるのみ、五歩十歩の間のみ、而かも其の雅俗の異なり、喧寂の別なるは、如同萬里餘遠く普通の人家と離れて棲むが如き感を爲すなり、

【評論】此の篇、幽居の狀を描き良とに人をして其の境を目前に彷彿せしむ、杜子美の「仰蜂粘二落絮一、行蝗上二枯梨一、と雲深猿盜レ栗、雨露蝗沾レ蔬と、殆んど軒輊無きものとす、

塞上　司空圖

萬里隋城在　三邊虜氣衰　沙塡孤障角　燒斷故關碑
馬色經レ寒慘　鵰聲帶レ晩悲　將軍正閒暇　留レ客換二歌辭一

【句釋】●●塞上塞は去聲讀卽ち「サイ」なり、入聲讀の「ソク」は今の要にあらず、要塞、邊界、夷狄を擁塞する所以、乃ち中國と邊土との界を戍る兵營を指すと見て可なり、軍の出發に際し、「塞上曲」あり、軍の凱旋に際し「塞下曲」あり、今の塞上は出發にあらざるなり、萬里隋城在隋の煬帝の大業三年に築きたる長城を萬里隋城と云ふ、始皇の築きたる城を再修したるものならん、三邊は南蠻、北狄、西戎の三土を云ふ、虜氣衰胡虜は常に中土を犯さんと欲する者、犯して勝てば必ず王と爲ればなり、元の鐵木眞、忽必烈、清の愛親覺羅の如き邊土より起りて、中原を征服せし人の例なり、沙塡孤障角障は元來山なれども、今は小城の注を取る、卽ち小城の角に沙土が充塡してある、戰時には沙は散じてあらざるなり、燒斷故關碑戰時には篝卽ち「カガリビ」を揚げて以て警戒す、今や太平其の事なく、故關の下には石碑が存立するのみ、馬色經寒慘寒を經るも慘ならしめざるが、愛馬の當然なり、然るに馬色が寒を經て慘なるは、馬を大事にする必要なければなり、鵰聲帶晩悲鵰は鷲の類、猛性の鳥なり、然るに晩色を帶びて悲むは、食ふ所の人屍肉も無く、馬屍も無ければなり、悲字一本に飢に作る、悲を可とす、將軍正閒暇塞上の司令官は戰時には多事なるも、太平の時には閒暇甚だしきものなり、留客換歌辭客は作者自身を指す、太平なれば將軍も詩人を留めて、歌辭を賦し以て武事に換ふとの意なり、

【評論】此の篇、對法を以て起し、而して塞上にして太平、太平にして塞上の景を叙し、句句塞上ならざるは無く、語語太平ならざるは無し、表聖集中の傑作に屬す、

寄二永嘉崔道融一

旅寓雖レ難レ定　乘閒是勝游　碧雲蕭寺霽　紅樹謝村秋
戍鼓和レ潮暗　船燈照レ島幽　詩家多滯レ此　風景似二相留一

旅寓定め難しと雖も、閒に乘じて是に勝游す、碧雲蕭寺霽る、紅樹謝村秋なり、戍鼓潮に和して暗く、船燈島を照して幽なり、詩家多く此に滯る、風景相留むるに似たり、

【句釋】寄は遠寄なり、永嘉は郡名、今日浙江省に屬す、崔は姓、道融は名、旅寓雖難定旅人の寓處は何處と定める譯にはゆかぬ、作者が河中に在て、永嘉に漫游する崔を指して云ふ、旅寓は崔の旅寓なり、乘閒是勝游何處と定めざるも是卽ち永嘉に游ぶは良とに勝游、我をして寄懷詩を作らしむるも、此の永嘉の游を爲し玉へばなり、碧雲蕭寺霽碧雲の字は宋僧慧休が日暮碧雲合の句を作り、名を一時に馳せしより、遂に僧に屬し、寺に關する文字に定められしなり、

蕭寺も亦然り、梁武の名を蕭と云ふ、此の天子非常に寺を多く造りしより、遂に寺を稱して一般に詩人は蕭寺と稱するに至れり、晴天なればこそ、寺邊は碧雲が懸る、紅樹謝村秋晉の謝靈運は永嘉郡の太守たりし事あり、其の遺跡として、謝公嶺を存す、謝村の名は無きも、用ひ得て亦妨げず、碧雲は霽、紅樹は秋、共に勝游に適す、戍鼓和潮暗永嘉郡は海に接す、其の海防の爲め兵營ありて之を戍る、其の兵營より起る鼓聲と、海上より起る潮聲と相和して來る、其の響を暗中に聞く、船燈照島幽燈の字を諸本「窗」に作る、今本集に依て改む、船中に點ずる燈火が島を照して、幽かに見えるなり、詩家は詩人と同じ、多滯此此の永嘉に滯留する者多し、風景似相留詩人の滯留する所以は、風景の爲め留められるるならんと云ふ、

【評論】此の篇、前後二聯稍佳なるが如きも、起句結句の如き淺陋極まる、表聖の至るものにあらず、

泊二靈溪館一　鄭巢

孤吟疎雨絕　荒館亂峯前　曉鶯棲二危石一　秋萍滿二敗船一
溜從二華頂一落　樹與二赤城一連　已有二求閒意一　相期在二暮年一

孤吟疎雨絶ゆ、荒館亂峯の前、曉鶯危石に棲み、秋萍敗船に滿つ、溜は華頂より落ち、樹は赤城と連る、已に閒を求むる意あり、相期暮年に在り、

【略傳】鄭巢は錢唐の人、大中間に進士に擧せらる、時に姚合詩宗と號す、杭州の刺史たり、巢所作の詩を獻じて、日に門館に游ぶ、大に奬重を得、又湖山の諸寺に游び、交を山僧に結ぶ、終身仕へず、詩一卷あり、

【句釋】泊は宿泊、靈溪は溪の名、館は旅館、杭州を去る日本里程六七十里にして台州府あり此の台州府に天台山在り、此の館は天台山中にあるなり、孤吟疎雨絶は獨坐以て詩を吟じ、雨之を和するかと思ひしに何ぞ忽ち絶ゆ、荒館亂峯前山中の旅館なれば、極めて荒涼寂寞たり、曉鶯棲危石是れは旅館にて所見の曉景、人の見て危ふしと思ふ石上に鶯は安全と棲む、秋萍滿敗船秋の浮萍が敗船に茂生す、溜は飛溜、碧溜、奔溜などと熟語して、飛泉即ち「タキ」と見て可なり、從華頂落天台縣の東北三十里に華頂峯あり、隋の智者大師が坐禪せし處と云ふ、此の華頂の飛泉は天下に有名なるものとす、樹與赤城連赤城は山名、一に燒山と名く、石壁霞の如し、故に名く、縣北六里にあり、已有求閒意此の地の幽邃なるを見て、隱棲の意を生ずるなり、

相期在暮年隱棲の意あるも只今直ぐと云ふにあらず、暮年即ち六十七十の後にせんとなり、

【評論】此の篇、題目は泊とありて、篇中夜趣を叙せず、唯晝景を叙す、前後二聯、靜中に動あり、動中に靜あり、曉鶯の一句、杜甫の黃鸝翅垂レ雨と其幽致を同うす、

甘露寺

孫魴

寒暄皆有レ景　孤絶畫難レ形　地拱二千尋嶮一　天垂二四面青一
畫燈籠二雁塔一　夜磬徹二漁汀一　最愛僧房好　波光滿二戸庭一

寒暄皆景あり、孤絶畫けども形どり難し、地は千尋の嶮を拱し、天は四面の青を垂る、畫燈雁塔に籠め、夜磬漁汀に徹す、最も愛す僧房の好きを、波光戸庭に滿つ、

【略傳】孫魴は唐末の處士、樂安の人、沈彬李建勛と同時なり、唱和亦多し、魴に夜坐の詩あり、世の爲めに稱玩せらる、建勛尤も之を器待す、日に與に談讌す、嘗て魴を齋幕中に匿す、沈彬が來るを待て、乃ち問て曰く、魴が夜坐の詩如何、彬が曰く、田舍翁の火爐頭の語、何ぞ道ふに足らんや、魴幕中より出で、彬を詰て曰く、何ぞ譏謗するの甚だしきや、彬が曰く、畫

多灰漸冷、坐久席成レ痕、此れ田舍翁の爐上にあらずんば、誰か此の況あらんや、一座大笑すと、『唐書』に傳を缺き、「才子傳」に傳ふる所上の如し、

【句釋】 甘露寺は浙江の潤州城東南に在り、大江に臨んで築く、唐の寶慶間に丞相李德裕建てて、穆宗の冥福を資く、建る時甘露降る、以て寺名と爲す、寒暄皆有景寒暄は四時と見て可、寒は秋冬、暄は春夏、四時共に賞すべき景あり、孤絶畫難形孤絶は、獨絶と同じ、勝景の獨絶なること如何に名畫師も其の眞相を描寫し難しとなり、地拱千尋險拱は環なり「メグル」と訓す、高層の形容は、千尋か萬尋を以て最とす、八尺を一尋と爲すなぞの注は無用なり、天垂四面青、峻險なる山峯が四面を環る故に天も亦其の青色を四面に垂れたるが如し、畫燈籠雁塔大なる雁塔の中に小なる燈火が籠る、晝夜消せざるゆゑに長明燈と稱す、夜罾徹漁汀僧が夜課に打つ磬が遙かなる漁汀に徹する如く響くなり、最愛僧房好『律髓』に更愛僧房外に作る、好は前句に已に叙す、外の字に如かず、僧房外の景色を更に愛するなり、波光滿戶庭海水の光が梵庭に逼る、日も波上より來り、月も亦波上より光を移して梵庭に來るなり、其の光が充滿する、

【評論】 此の篇の甘露寺を描寫して大乘の域に入るものなり、方虛谷曰く劒が金山寺詩に「驚

濤飛二佛身一」の句あり、佳なり、此の詩第四句最も好、尾句亦佳、五六は則ち套語なり、紀曉嵐曰く五句は是れ套、六句は套にあらず、夜罾徹二漁汀一は、紀評の如く清新にして腐套にあらざるなり、

江行

李咸用

瀟湘無事後　征棹復嘔啞　高岫留二殘照一　歸鴻背二落霞一
魚依二沙岸草一　蝶寄二泝流槎一　共說干戈苦　汀洲滅二釣家一

【略傳】 李咸用の傳は詳なるもの無し、宋の楊誠齋が李咸用集の序に於て曰く、唐末の人ならん、詩を以て考ふるに宣宗の大中十二年、湖南の軍亂れて、其の觀察使韓宗を逐ふ、六年に黃巢、潭澧二州を陷す、而して光啓・乾寧、光化に涉りて瀟湘の地亂る、其の亂後の詩が此に載る詩とす、或は云ふ隴西の人と、信を措きがたし、

【句釋】 江行は一本「湘江晚歸」に作る、此の四字を可とす、瀟湘瀟と湘とは其出る所異なるも、

二水合する永州の地を以て之を合唱す、無事後戰亂戢まりし後を云ふ、征棹復嘔啞舟游をする棹の聲が舊に復して嘔啞と響く、日本の如く竹棹にては響の發すべき事なし、械なるが故に聲を發するなり、高岫留殘照岫は山の極めて高處、歸鴻背落霞北歸の鴻雁は落霞に背き去る、背は「ウシロ」にすることなり、共に是れ高處の景、魚依沙岸草是れは水底の景、蝶寄洑流槎洑流は逆流なり、槎は浮木なり、是れ水上の景、共說干戈苦舟人等と共に戰爭の慘苦を說く、汀洲減釣家戰爭後の漁家は減じて、戰爭前の盛んは見ずとなり、

【評論】此の篇、所見を賦して感慨之に繫る、江中を中心として以て四方の景に及ぶ、細心の作とす、

春日野望　　李中

野外登臨望　蒼蒼煙景昏　暖風醫病草　甘雨洗荒村
雲散天邊影　潮回島上痕　故人不可見　倚杖役吟魂

野外登臨して望めば、蒼蒼として煙景昏し、暖風病草を醫し、甘雨荒村を洗ふ、雲は散ず天邊の影、潮は回る島上の痕、故人見るべからず、杖に倚つて吟魂を役す、

【略傳】李中字は有中、九江の人、唐末の進士、天祐四年を以て死す、

【句釋】春日野望戰後の野景を見て、感慨以て賦したるなり、野外登臨望野外の高丘へ登臨して以て東西南北を眺望す、蒼蒼煙景昏春は秋の如く天も地も澄むこと無し、所謂朦朧として分明ならず、此の句は其の氣味を云ふ、蒼蒼は草が茂りあふなぞと云ふは兒童の解なり、暖風醫病草嚴風の爲めには草木も病むが如し、暖風に遭へば必ず蘇へる、甘雨洗荒村甘雨は凍雨又冷雨の反對、佛敎で稱する慈雨と同じ、其の雨が降りて荒村も良村と變化したり、此の二句は、天軍勝ち、賊軍敗れしことを云ふ、雲散天邊影靑天白日人意に適するを云ふ、雲散は賊軍の散ずるなり、天邊は賊軍が遠く去るなり、潮回島上痕潮は回る處へ回らざるべからず、回る處へ回ればそれを順と云ふ、是れ卽ち島治も以前の如く、朝廷の役人が來り、舊の如く政治を執るを云ふ、故人不可見舊友は今何くに在るや、嘗て見る能はず、戰歿もあらん、逃去もあらん、倚杖役吟痕杖を卓して一慨一咏窮まり無きなり、役は驅役、吟心を頻りに驅役して名句を求めんと欲するなり、

【評論】此の篇、今日の良治を喜ぶと雖も、過去の紛亂を悲しむ、悲喜交至の狀字字句句彰彰

たり、

勝果寺　僧處默

路自二中峯一上　盤回出二薜蘿一　到レ江吳地盡　隔レ岸越山多
古木叢青靄　遙天浸二白波一　下方城郭近　鐘磬雜二笙歌一

路は中峯より上る、盤回して薜蘿を出づ、江に到つて吳地盡き、岸を隔てて越山多し、古木青靄を叢め、遙天白波に浸す、下方城郭近し、鐘磬笙歌を雜ふ、

【略傳】處默は越州の人、或は睦州の人と云ふ、羅隱同時の人、

【句釋】勝果寺は浙江省杭州の鳳凰山に在り、或は聖果と云ふ、吳越の錢氏建つ、或は云ふ唐の文喜建つと、宋の慶歷の初、塔に因て此の寺に崇額を崇聖寺と稱す、尋で勝果に改む、南渡後、其の地を以て殿司衙と爲し、寺を包家山に徙す、燒く、明の洪武間重建、今に尙存するなり、路自中峯上中峯は宋の宮城外、勝果寺の右に在り、絕頂平曠、逶起石峯屛の如し「湖山便覽」盤回出薜蘿メグリメグル事を盤回と云ふ、蔦などを漸くに出づ、到江吳地盡浙江を以て吳越の

境とす、吳が盡きれば直ちに越、理としては言ひ易し、詩としては容易に言ひ難し、隔岸越山多吳地盡も、越山多も、上方より望見して以て發する所の言なり、越は會稽山を指す古木叢青靄寺の周圍、又鳳凰山の實景、靄は叢まる物に依て色を爲す、樹木は青色なれば靄亦青たり、遙天浸白波鳳凰山より東南に大江を見る、天を浸して却て白し、下方城郭近杭州府城は鳳凰山下に在るなり、鐘磬雜笙歌寺鐘と城歌と響き合ふを云ふ、

【評論】此の篇、勝果寺に題する詩として尤も有名なるもの、それは地理を到江十字で言ひ盡すの妙あればなり、然れども其の長きを嫌ふ者あり、宋の陳后山曰く吳越隔江分、明の謝茂秦曰く吳越一江分以て各の得意とす、余を以て之を視るに一句としては言ひ得るも二句としては言ひ得ざるなり、律體は必ず律體ならざるべからず、縮字の法固より必要なり、而かも衍字の法も亦解せざるべからず、巧拙何ぞ必ず長短にあらん、明の華察の詩に、時聞雀鳥喧、因念禾黍熟、沈歸愚評して曰く、王摩詰云ふ雀喧禾黍熟、此の五字を衍して十字と爲す、古人に及ばず、一種の形に囚はれたる者の論、多く此の病に墮す、蓋し我邦人の長きを貴ぶ者の爲めには良藥たらずんばあらず、紀曉嵐曰く三四味有り、後四句味無し、

靜林寺　　僧靈一

靜林溪路遠　蕭帝有遺蹤　水擊羅浮磬　山鳴于闐鐘
燈傳三世火　樹老五株松　無數煙霞色　空聞昔臥龍

靜林溪路遠し、蕭帝遺蹤あり、水は羅浮の磬を擊ち、山は于闐の鐘を鳴らす、燈は傳ふ三世の火、樹は老ゆ五株の松、無數煙霞の色、空しく聞く昔の臥龍、

【略傳】靈一は越中雲門寺の人、持律甚だ嚴、清高を以て世の歸仰する所となる、詩を能くす、劉長卿、嚴維、郎士元、皇甫冉の諸子皆詩を以て相往來す、

【句釋】靜林寺は安吉州、卽ち今日の湖北省襄陽縣に在り、梁の晉安王、表奏して靈泉寺を造る、周に靜林と改む、隋に景雲と改む、唐に至り靜林の舊に復す、靜林溪路遠襄陽は四面皆山、靜林に赴かんと欲するには溪路を經るは是れ實況なり、蕭帝有遺蹤武帝と言はずして、蕭帝と言ふ所に作者の苦辛を見るべし、前朝の天子に對する詩人の意想察すべし、水擊羅浮磬羅浮山は廣州に在り、一名蓬萊山、增城博羅二縣の界、今日の廣東省、浙江省の靜林寺とは里數の隔

たること甚だしきが、此の寺に羅浮山より出たる石磬を藏せしならん、羅浮の石磬は雨に敲かるれば自ら音を發するなり、山鳴于闐鐘于闐と云ふ國は長安を去る九千六百七十里と稱せらる、此の寺を隔つる一萬里程とならん、此の于闐は一名瞿薩旦那國、是れは印度人の稱する名にして、漢人は譯して地乳國と云ふ、葱嶺山脈は于闐に出づるなり、支那と印度の通路に、天山北路と、天山南路とあり、其の天山南路を經て、印度に赴く者は、必ず此の于闐を通過するものとす、漢の明帝の永平六年に將軍班超、此の國を征せしことあり、漢代の人は「ユイテン」と稱す、今日の漢人は「ホーテン」と發音す、古來印度僧の漢土に來らんと欲する者、多く甘肅や、于闐に停まりて、長安や、洛陽に至らざる者なり、故に佛教の遺跡今日に至りて多きこと當然のことなり、法顯三藏、智猛法師等、皆此の于闐を通過して、渡天せしものとす、此の國に出る鐘は、風至れば自ら鳴るとの傳說なり、燈傳三世火過去も、現在も、未來も照す功能ありとの意、燈燈相繼ぎ滅せざるを云ふ、三世は佛教で貴ぶ所なれば用ひしなり、樹老五株松寺庭に松を五株植ゑると云ふ事は別に佛典に敎ふる所ならず、秦の始皇が巡狩して驟雨に遇ひ、五株の松を大夫の官に封せしことあり、其れを用ひて以て武帝と始皇とを比したるなりと素隱の說、甚だ當るを覺ゆ、無數煙霞色春色の寺庭に滿るを云ふ、煙霞は春の景色を表はす語な

り、空聞昔臥龍何の事を言ふや作者以外の者は分明に知れざるなり、諸葛孔明に類する僧が昔し住せしが、今日は啞羊僧のみ住して、但昔しの事を空しく聞くのみと云ふ意か、或は寺門深くして昔し玆に眞龍が伏臥せしなりと云ふ意か、前に燈傳三世火とあるより見れば、愚僧が今日は住すと此の句を解するは當らず、愚僧では傳燈は出來ざるなり、昔し眞龍が潭に棲みしと云ふが、其れは今日見ずと定めて可なり、杜審言の早春游望より此に至る三十四首是れを四實の體とす、華麗典重の間に雍容寬厚の態ありと稱せらるるものなり、

【評論】比の篇、方虛谷曰く第五句最奇而して下句亦稱すべしと、紀曉嵐曰く第五句事晉書に出づ、殊に奇處無し、紀又曰く三四五六句調一同三四亦太だ裝點、余曰く燈傳三世火是れ尋常の語にして奇語にあらず、紀は事晉書に出づと云ふ滑稽笑ふ可し、佛典に出る所にして晉書に出るものにあらず、詩人の佛典に暗きこと古今同一嘆すべし、三四裝點と云うて紀は尻ふが此の首として摘句すれば三四を以てす、五六以下は平平の語のみ、

秋夜同梁鍠文宴　錢起

客到衡門下　盃香蕙草時　好風能自至　明月不須期
秋水翻荷影　清霜脆柳枝　徵官是何物　計可廢吟詩

客は到る衡門の下、盃は香し蕙草の時、好風能く自ら至る、明月期することを須たず、秋水荷影を翻し、清霜柳枝を脆くす、徵官是れ何物ぞ、計可吟詩を廢せん、

【句釋】梁鍠文は錢起の友人ならん、傳は未詳、客到衡門下衡は木が三本で門を造るもの、左右二本と上に一本、以て貧家と自稱する意味、富豪を朱門と稱する反對の白門と同一義とす、梁が客と爲りて來る、盃香蕙草時但酒猶可なり、況んや秋風蕙草の香ばしき時に於て之を飮む、盃も亦香を覺ゆ、好風能自至求めざるも好風自然に室に入る、明月不復期招かざるも明月自然に來る、秋水翻荷影明月の爲め秋水が荷葉の影を翻がへすを知る、清霜脆柳枝柳枝は元來脆きものなり、秋霜に遇うて一層脆くなりたるを知る、共に池邊の景なり、徵官是何物小官吏と爲るも、官紀なぞと云ふものに束縛せられて自由に放言できざるが普通なり、何ぞ愚なることぞやと大悟すれば、是れ何物ぞと言はざるを得ず、錢起は考功郎中の官、日本今日の官制にては奏任三等位の所に當る、計可は「ドレホド」「イカホド」の意、廢吟詩官に居て詩文を弄するは、嚊嚇なぞと咎めらるるは俗吏の常態なり、我等は愚輩が何と云うても、詩を廢する如き陋を

爲さずとなり、

【評論】此の篇、淡にして自然、韋蘇州の趣致あり、胡元瑞曰く錢が製作富而して章法多く乖くと、此の篇是れ何の乖く所あらん、

望秦川

秦川朝望迥　日出正東峯　遠近山河淨　逶迤城闕重
秋聲萬戶竹　寒色五陵松　客有歸歟嘆　凄其霜露濃

秦川朝望迥なり、日は出づ正東の峯、遠近山河淨く、逶迤として城闕重なる、秋聲萬戶の竹、寒色五陵の松、客に歸歟の嘆あり、凄其として霜露濃かなり、

【句釋】望秦川秦川は今日の陝西省西安府興平縣を流るる川、卽ち長安城の西に當る、舊說に李頎未だ及第せざる時、此の題に依て不平を慰せしものならんと、朝望迥秦川の地を望むこと迥卽ち遙かなり、日出正東峯賦體としては旭日が東峯に出るなり、比體としては君主の恩光東より出るなり、雙方へ係けて見るべし、遠近山河淨賦としては、字の如く遠近の山河が秋晴に淨き色を呈するなり、比としては、天子の恩輝が平等に普遍するなり、逶迤城闕重『說文』に逶迤は斜に去る貌と、「マガル」「メグル」の意もある、城闕が地形に隨がつて重なり合ふなり、秋聲萬戶竹城中家每に竹を植う、秋聲を聞く爲めにはあらず、單に之を愛するなり、詩人を待て始めて其の秋聲を知る、寒色五陵松漢の高帝の長陵、惠帝の安陵、景帝の陽陵、武帝の茂陵、昭帝の平陵、長安城外數武の地に在り、客有歸歟嘆『論語』に孔子の曰く、吾道行なはれざれば、歸歟歸歟と、折角游行以て敎を說くも、功なければ歸るに如かずと嘆ず、李自ら客と云ふ、我も孔子の嘆を發せざるを得ず、凄其霜露濃凄として霜露濃かなり、其の字何等の義も有せず、秋の氣蕭條として愁思生じ易し、況や霜露降り人を戒しむ、悠游して他鄉に流連すべきにあらず、凄其以風は『詩經』の語にて、霜露既降は『禮記』の語なり、

【評論】此の篇、盛唐の氣格渾然見るべし、李頻が「秦原早望」の詩、一忝三鄉書薦、長安未レ得レ回、年光逐三渭水一、春色上三秦臺一、燕掠三平蕪一去、人銜三細雨一來、東風生故里、又過幾花開、此の篇と相伯仲するを覺ゆ、明の蔣一葵曰く秋聲を竹上に寘く便ち頓挫、

池上　白居易

嫋嫋涼風動　凄凄寒露零　蘭衰花始白　荷破葉猶青

獨立棲沙鶴　雙飛照水螢　若爲寥落境　仍値酒初醒

嫋嫋として涼風動き、凄凄として寒露零つ、蘭衰へて花始めて白く、荷破れて葉猶ほ青し、獨立つ沙に棲む鶴、雙飛す水を照す螢、若爲んぞ寥落の境、仍ほ酒の初めて醒むるに値ふ、

【句釋】池上は『才子傳』の注に香山の僧、如滿等と、淨社を結び、沼を疏し、樹を種ゑ、石樓を構て、八節灘を鑿て、游賞の樂を爲す、茶鐺酒杓相離れず、案ずるに此の淨社は東林の白蓮社の事に倣ひ、道を談じ、詩を賦し、念佛し、以て淨業を修習せん爲めの結社ならん、如何に淨業を修習しても、香山居士の如き俗詩にては、結社せざる杜甫を以て余は寧ろ貴しとせん、嫋嫋涼風動嫋嫋は長芀の形容、曳形容、風動の形容、而かも春風には用ひず、初秋乃至仲秋の風に形容す、凄凄寒露零凄凄はスズカゼの形容、『詩經』に秋日凄凄とあり、此の時寒露が零るなり、寒を一本霜に作る、霜では前句の涼に對せず、蘭衰花始白紫色の蘭が白色の蘭に變じたるは、秋遂に夏に代はればなり、荷破葉猶青秋風の爲め荷花は零落するも、葉猶ほ看に入るなり、獨立棲沙鶴雙飛照水螢此の句は有情、前句は非情、對法として律體の正格なり、若爲は

「イカンゾ」なり、寥落境は「サビシキ」境界なり、仍値酒初醒酒醒めずんば、寥落の境もそれほど感慨を生せざるが、酒も醒めたるに依て自ら寥落の凄感が生ずるなり、

【評論】此の篇、賦する所の景、晝なる如く、亦夜なる如く、而かも照水螢の字を除けば、他は悉皆晝景なり、蘭の白、荷の青、夜間何ぞ分明に見る事を得ん、鄙俚疎野惜むべし惜むべし、

西陵夜居

吳融

寒潮落遠汀　暝色入柴扃　漏永沈沈靜　燈孤的的青
林風移宿鳥　池雨定流螢　盡夕成愁絕　啼蟲莫近庭

寒潮遠汀に落ち、暝色柴扃に入る、漏永うして沈沈として靜に、燈孤にして的的として青し、林風宿鳥を移し、池雨流螢を定む、盡夕愁絕を成す、啼蟲庭に近づくこと莫れ、

【句釋】西陵は今日の湖北省黃州府黃岡縣の西北、舊注越州とあり、未詳、寒潮落遠汀俗に潮が退きしなり、潮が遠汀に落ちしは卽ち退きしなり、暝色入柴扃外面が暝くなれば漸漸に室内

も暝くなる、漏永沈沈靜夜靜かなる時は唯時計の音のみ永きを覺ゆ、沈沈は靜の形容、深也との注は取らず、燈孤的的青的的は明見の形容「青燈トハ光無キヲ言フ」と注したる本あり、何等の妄言ぞ、林風移宿鳥風の爲めに宿鳥が東林より西林へ飛移りたるなり、山中にては往往此の事を見る、池雨定流螢雨後には四方に流飛せる螢が、一處に聚まり來るを云ふ、林風の句は戰亂にて人民が離散したるに譬へ、池雨の句は戰後にて離散したる人民が本住處へ還りたるを云ふと、側面には此の意あらん、盡夕は夜通しの事、成愁絕種種の感想が起り、通宵愁絕する、啼螿「キリギリス」莫近庭キリギリスの聲を聞けば、一層愁を添ふるに依て、我が庭に近づき啼くことなかれと云ふ、

【評論】此の篇、夜居の情を寫して眞に逼る、方虛谷曰く五六絕妙、移定字眼用工、紀曉嵐曰く第四句尤も神味あり、余云ふ四句太佳なり、神味は稱に過ぐ、虛谷の字眼を說く笑ふ可し、

旅游傷春

李昌符

酒醒鄉關遠　迢迢聽漏終　曙分林影外　春盡雨聲中
鳥倦江村路　華殘野岸風　十年成底事　羸馬厭西東

酒醒めて鄉關遠し、迢迢として漏の終るを聽く、曙は分る林影の外、春は

盡く雨聲の中、鳥は倦む江村の路、華は殘る野岸の風、十年底事をか成す、羸馬西東を厭ふ、

【略傳】李昌符字は巖夢、咸通四年の進士、尙書郎に至る、

【句釋】旅游傷春旅行中春に感じて作る、酒醒鄉關遠酒醒めざる時は鄉愁も忘れ居るが、醒むれば忽ち鄉愁生ず、迢迢聽漏終「ハルカ」なるを迢迢と云ふ、要するに鄉もハルカ、夜もハルカ雙方へかかる、一夜眠らず夜漏を聽き終る、曙分林影外林巒夕麗を分つの類にて、曙色が林に依て各の分る、春盡雨聲中春を破るものは雨と風とを以てす、霏霏たる雨聲を聞く中に春は已に盡く、晴日少かりしことも意味す、鳥倦江村路鳥も人と同じく、游びに倦んで返る、花殘野岸風殘花は猶ほ開きて野岸に在り、十年成底事人は十年を經れば底事か成すを以て志しある者の常とす、然るに我は底事も成し得ずとなり、羸馬は瘦馬と同じ、イキヂの無きツカレ馬、厭西東十年間徒らに辛勞して、生命を旅途に送る、今日では其の旅行を厭ふに至る、鳥の飛ぶに倦むと同一なり、

【評論】此の篇、一二夜情を叙し、三四以下書情と景とを叙す、脈路整正たり、方虛谷曰く第四句最佳と、紀曉嵐曰く起句過夢歸一層を藏す用筆超妙、五句稍晦し、鳥倦江村路の五字を晦

しと云ふなり、人倦江村路なれば可なり、鳥にしては可ならず、晦なる所以見るべし、嗚乎難い哉詩や、

春山　　僧貫休

重疊太古色　濛濛華雨時　好山行恐盡　流水語相隨
黑壤生紅朮　黃猿領白兒　因思石橋日　曾與道人期

重疊たり太古の色、濛濛たり華雨の時、好山行く盡きんことを恐る、流水語つて相隨ふ、黑壤紅朮を生じ、黃猿白兒を領す、因つて思ふ石橋の日、曾て道人と期せしことを、

【略傳】貫休字は德隱、婺州蘭溪和安寺にして紫衣を賜ふ、吳越の錢氏歸向して禪月大師と賜ふ、又得待來和尚と稱す、皓然、齊己と三高僧と稱せらる、晩唐の人、其の詩、其の畫と共に一代の大宗、課餘の業竟に千秋と爲る、

【句釋】春山山は四季異なる、春の景色を叙す、重疊は山の重なり疊むなり、太古色幾千年前より現出せしやを知らず、太古の色は變せず、濛濛華雨時春は卽ち色として、濛濛たり、澹澹

たり、好山行恐盡好山は路の長く興の盡きざるを欲す、然るに生憎、苦は短かくて長く、樂は長くて短の如く、行が盡き易し、流水語相隨水聲が袞袞と流るるは、其の言語を發して我が行を助くるものの如し、黑壤生紅朮黑色の土の肥たる處、藥艸たる紅色の朮を生ず、黃猿領白兒親猿が兒猿を領じて、林中を游行す、因思石橋日種種の景を見聞するに因て昔し天台の石橋に游びしことを思ひ出すなり、曾與道人期天台山の道人卽ち世外の人と再游を約したることを、」錢起の秋夜より此に至る六首、前三十四首と略同樣の體製とす、

【評論】此の篇、春山の狀を描寫して、一家の面目見るべし、論者云ふ休公詩俗氣野氣多しと、覇氣の人、遂に俗氣あるを免れず、休公は方外の身を以て覇氣稜稜、覇氣一轉して道氣となれば可なりしも、惜哉人は道氣を存ずるも詩としては覇氣に富む、蓋し此の篇、覇氣を見ず誦すべきものなり、黑紅黃白の四色を用ふるの類、俗氣の致す所か、第一句の平仄法の如き、論ずる所にあらず、

送懷州吳別駕　　岑參

灞上柳枝黃　壚頭酒正香　春流飲去馬　暮雨濕行裝
驛路通函谷　州城接太行　覃懷人總喜　別駕得王祥

灞上柳枝黃なり、壚頭酒正に香し、春流去馬に飲ひ、暮雨行裝を濕す、驛路函谷に通じ、州城太行に接す、覃懷人總べて喜ぶ、別駕王祥を得たりと、

【句釋】●吳は姓、●別駕は官名、●懷州の別駕と爲つて行くを送る、●灞上柳枝黃長安城の東に滋水あり、滋水に架する橋を霸橋と云ふ、秦の穆公が覇功を表する爲め、滋水を覇水と改めしなりと云ふ、柳色の新らしきときは黃色とす、春柳なること知るべし、●壚頭酒正香●文君壚頭は何人も知る所、卽ち酒店と見て可なり、今日のバアー是れなり、酒器を置く所を一段高くする是を壚と云ふ、柳枝は黃にて、酒氣は香、人を送る厚し、春流飲去馬馬夫が春流に入て、別駕が騎る所の馬に飲かはし、征人の爲め用意を爲す、●暮雨濕行裳天上より一過の雨もあらん、又送別者が淚雨も此の句中に在ると見るべし、●驛路通函谷函谷を通過せずんば、長安より何處へも赴むく能はざるなり、函谷關には現に老子說經臺なるものあり、老聃が令尹喜の爲め道德經を說きし地と云ふ、州城接太行太行山は山西省の絳州に屬す、王屋山、龍門山と共に奇秀を爭ふ、●覃懷人總喜覃州と懷州との二國の人、皆懽迎することならん、●別駕得王祥人が喜ぶ所以は、別駕其の人、人格の高きこと晉の王祥にも讓らざる人なりと爲せばなり、王祥は魏より晉に來り、

太保に拜せられ、德望一世に冠たりしなり、

【評論】此の篇、雄偉盛唐の面目彰彰たり、唐人送別の詩に於る、無名子と雖も誦すべきものあり、況や岑嘉州の如き大家に於てをや、方虛谷曰く壯浪宏闊、晩唐の手望むべきにあらず、紀曉嵐曰く嘉州此の鮮華の韻を得難し、前半特に秀絕、

高官谷贈鄭鄠

谷口來相訪　空齋不見君　澗花然暮雨　潭樹暖春雲
門徑稀人迹　簷峯下鹿羣　衣裳與枕席　山靄碧氛氳

【句釋】高官谷は未だ驗尋、山西省の王官谷とは別なり、●鄭鄠が隱棲の在る所ならん、鄭を以て古の鄭子眞に比す、谷口來相訪空齋不見君特に君を訪問したるも、生憎不在にて晤語する能はざるなり、●澗花然暮雨主人を見ずして、反つて澗中の花が然んと欲する如く、赤色を呈して暮雨中に開く、●潭樹暖春雲潭上の樹、春雲の爲め、其の暖なる狀を呈す、●門徑稀人跡人跡稀なるは

門徑の深きを知る、簷峯下鹿羣鹿羣の下るは、捕獲する者無きを知る、衣裳與枕席室中に有する所の物、衣裳と枕席とを見るに、山靄碧氛氳靄氣が氛氳として、衣裳と枕席とを掩うて、洵に塵中の棲家にあらず、神仙中の感を生ずるなり、

【評論】此の篇、嘉州の本領たる雄宏の氣を以て出し、而して隱棲の俗界を離れたる風致視る若し、

山居卽事　王維

寂寞掩柴扉　蒼茫對夕暉　鶴巢松樹遍　人訪藥門稀
綠竹含新粉　紅蓮落故衣　渡頭燈火起　處處採菱歸

寂寞として柴扉を掩ひ、蒼茫として夕暉に對す、鶴は松樹に巢うて遍く、人は藥門を訪ふこと稀なり、綠竹新粉を含み、紅蓮故衣を落す、渡頭燈火起る、處處菱を採て歸る、

【句釋】山居卽事藍田縣の輞川に在つて作る所、輞川は山中の別墅なり、寂寞掩柴扉寂寞が柴扉を掩ふにあらず、寂寞たる柴扉を掩ふなり、掩の字、寂の上頭にある意味、蒼茫對夕暉蒼茫

が夕暉に對するにはあらず、蒼茫たる夕暉に對するなり、寂寞は「サビシ」蒼茫は「ヒロキ」形容なり、鶴巢松樹遍松として鶴巢の無きは無し、人訪藥門稀曾て人の訪ひ來るものあるあらず、簷は「シバノアミド」荊を以て戶と爲す之を簷と謂ふ、綠竹含新粉新竹の節節に白粉を著けたる事を云ふ、紅蓮落故衣新陳代謝するを言ふ、渡頭燈火起輞川より下方の渡頭を望めば、日暮れ燈火の起るあり、處處採菱歸其の燈火は何ぞ、是れ人人が菱卽ち「ヒシ」を採つて歸り來るなり、

【評論】此の篇、山居の情景を叙して、自然の致を極む、右丞の詩、詩中に畫あり、畫中に詩ありと東坡評したるは千古の定論斷じて動かすべからず、工を求むれば諸家あり、高を求むるに有唐三百年實に一人のみ、此の外「終南別業」「歸嵩山」「韋給事山居」「輞川閒居」の五律悉く神に入る、

題薦福寺衡岳禪師房　韓翃

春城乞食還　高論此中閒　僧臘堦前樹　禪心江上山
疎簾看雪捲　深戶映花關　晩送門人去　鐘聲杳靄間

春城食を乞うて還る、高論此の中に閒なり、僧臘堦前の樹、禪心江上の山、
疎簾雪を看て捲き、深戸花に映じて關す、晩に門人を送り去る、鐘聲杳靄
の間、

【句釋】題は題詠なり、薦福寺、大薦福寺の二寺あるも、恐くは饒州の薦福寺ならん、素隱は衡岳を人名とせず、山名と見る、誤る、衡岳と稱する禪師の名なり、春城乞食還乞食は托鉢のこと、印度傳來佛陀の弟子に命じたる修行とす、鉢に滿つれば乃ち還る、餘分を乞ふは禁制なり、高論此中閒佛法を論ず、論ずと雖も意境淸閒なり、僧臘堦前樹臘は壽又年と同じ、出家せし以前を俗臘と稱し、出家後の年を僧臘と云ふ、例せば、俗臘八十、僧臘四十とあるは、此の人四十歲の時、具足戒を受けしこととなる、今の意堦前の老樹の如く、禪師の僧臘も太だ高きなり、禪心江上山禪に依て修習したる心は端然不動山の如しと云ふ、疎簾看雪捲雪を看んが爲め疎簾を捲くなり、冬に屬す、深戸映花關人の禪坐を妨げんとを恐れ固く關す、春に屬す、晩送門人去門人とは參禪の徒を云ふ、鐘聲杳靄間晩鐘の聲は是れ客の歸を送る、杳「ハルカ」靄卽ち「クモ」の間を渡るなり、

【評論】此の篇、禪師を主にして咏じ、寺は賓たり、方虛谷曰く第三句最佳、五六套に近し、尾句味ひ有り、紀曉嵐曰く三四微しく俗韻あり五六に及ばず、余今謂ふ五六套に近しとの言は不當なり、又三四俗韻ありとの紀評も不當なり、要するに王孟二家の間に其の姿致を見る、

送史澤之長沙

司空曙

謝朓懷西府　單車觸火雲　野蕉依戍客　廟竹映湘君
夢渚巴山斷　長沙楚路分　一盃從別後　風月不相聞

【句釋】送史澤之長沙司空曙が長安に在つて、史澤が人の讒に遇うて、長沙に謫せらるるを送るなり、長沙は湖南省長沙府長沙縣、謝朓懷西府齊書に謝朓、齊王の文學と爲つて、前州に在り、世祖勅して都へ還らしむ、道中詩を爲り以て西府に寄す、今史澤を以て謝朓に比し、西府の同僚を懷ふは、自らを云ふ、單車觸火雲單車は一輛の車、急赴の者の爲め驛路に用意しある、史澤は此の夏日火の如き雲の盛んなる時に際し、讒に遇うて謫せらるるは、殆んど謝玄暉が讒

言に依て、都へ還されしと同一なりと、同情の言を吐くなり、野蕉依戍客長沙は芭蕉が到る處に在りとの意、戍客に依るとは史澤の寓處に依るなり、長沙を戍る客は卽ち太守、太守は史澤なり、廟竹映湘君湘君廟に在る竹は曾て湘君が湫下りて竹に揮ぐ、竹盡く斑を爲す、其の竹が今日廟内に祀る湘君の木像に映ずるなり、夢渚は雲夢澤のこと、湖南の岳州府に屬す、巴山斷巴山は湖北の荆州、雲夢澤邊に至れば巴山は斷えて見えざるを云ふ、長沙楚路分長沙にては楚路が分るならん、長沙は湖南、楚路は湖北なり、一盃從別後今日離別の宴後、風月不相聞春風秋月互に相聞知せず、

【評論】此の篇、對法を以て起し、讒に對する故事を用ふること太だ工、強て之を評すれば七八平凡たるを免れず、方虛谷曰く永嘉長沙風土各の新麗を極む、取る所二聯又皆下句勝る、凡そ詩、下句を以て、上句に勝る者、作家と爲す、先の一句好、而後の一句弱なるもの或は稱せず、虛谷の意、廟竹映湘君、長沙楚路分の十字を以て好と爲すなり、或は當る、

送裴侍御歸上都　張謂

楚地勞行役　秦城罷鼓鼙　舟移洞庭岸　路入武陵溪
江月隨人影　山華逐馬蹄　離魂捋別夢　先爾到關西

(534)

楚地行役に勞す、秦城鼓鼙を罷む、舟は移る洞庭の岸、路は入る武陵の溪、江月人影に隨ひ、山花馬蹄を逐ふ、離魂別夢を捋て、爾に先つて關西に到らん、

【句釋】裴は姓、侍御は官名、上都は長安を云ふ、楚地勞行役楚地に行役して疲勞し玉ふらん、湖北荆州府江陵が楚地なり、秦城は歸らんとする長安なり、罷鼓鼙安祿山の戰亂戢まりしこと を云ふ、舟移洞庭岸裴が歸路の景、舟路を云ふ、路入武陵溪是れ陸路の景、江月隨人影是れ舟中の景、第三句に應ず、山花逐馬蹄是れ武陵の景、第四句に應ず、離魂捋別夢侍御が上都に著せざる前に我が魂は別時の恨みを「モテ」夢と成り、先爾到關西爾は「ナンヂ」と訓めども、日本語の「アナタ」「ソナタ」の意に當る、關西は卽ち長安、

【評論】此の篇、是れも對法を以て作る、語語沈著、交股對として太だ工なるものに屬す、

過蕭關　張蠙

得出蕭關北　儒衣不稱身　隴狐來試客　沙鴈下欺人
曉戍殘烽火　晴原起獵塵　邊戎莫相忌　非是霍家親

(535)

蕭關の北に出るを得たり、儒衣身に稱はず、隴狐來つて客を試み、沙鴈下りて人を欺く、曉戍烽火殘り、晴原獵塵起る、邊戎相忌むこと莫れ、是れ霍家の親にあらず、

【略傳】張蠙字は象文、乾寧の進士、櫟陽に尉たり、亂を避けて蜀に入る、蜀王に依て、金堂令と爲る、詩二百首を進む、召して知制誥と爲さんと欲す、朱光嗣、蠙が輕忽物に傲るを以て之を止む、官に卒す、

【句釋】蕭關は甘肅省平涼府固原州なり、『漢書』の匈奴傳に孝文十四年、匈奴單于十四萬騎、朝那蕭關に入ると、漢代の蕭關は朝那縣に在りしなり、得出蕭關北長安に返らんとする路は必ず蕭關の北に出るものとす、儒衣不稱身日本で言へば羽織袴にては道中不都合なりとの意、人の目にも立ち、步行も迅速ならざるなり、隴狐來試客儒衣が不都合なりとあるが、然らば變裝したるか如何と云ふに、詩の上では分らざるなり、隴狐は家の穴に棲む狐、旅客を試むるは魅し易ければ魅し、魅し難ければ逃る意を持つ、沙鶻沙際の鶻なり、和名「クマダカ」鷹の强猛なるもの、下欺人人なぞを畏れて居らぬのみならず、却て欺むかんと欲するなり、曉戍殘烽火

防邊の爲め戍營より時時烽火を揚ぐ、曉行の時、昨夜の烽火が猶殘れるを見しなり、晴原起獵塵鶻や狐を獵せんと欲する者馬塵を揚げ來る、邊戎莫相忌七言にすれば直ちに分る、「言ヲ寄ス邊戎相忌ム莫レ」なり、我は人種が別なりと云うて忌むこと莫れ、非是霍家親漢の將軍衞青は乃ち霍去病の勇なり、嘗て匈奴を征して大に克つ、武帝幕に就て大將軍に拜す、衞青は卽ち衞皇后の弟、去病は后の姉が子、匈奴の憎む所の者は乃ち霍家の親類にあり、然るに我は霍家と緣なきのみならず、實は儒家にして、武人にあらず、幸に我を忌み我を畏るること勿れとなり、

【評論】此の篇、極めて邊土荒原の狀を描寫して雄偉、起特に突兀、開レ門見レ山の概あり、

秋夜宿二僧院一　劉得仁

禪寂無塵地　焚レ香話二所歸一　樹搖幽鳥夢　螢入二定僧衣一
破月斜二天半一　高河下レ露微　翻令レ嫌二白日一　動卽與レ心違

禪寂無塵の地、香を焚いて所歸を話す、樹は幽鳥の夢を搖かし、螢は定僧の衣に入る、破月天半に斜に、高河露を下して微なり、翻つて白日を嫌は

しむ、動もすれば卽ち心と違ふ、

【句釋】秋夜宿僧院テラに宿泊して山房の幽趣を寫す、禪寂の寂は「セキ」と發音せず「ジャク」と發音すべし、無塵地清淨は佛寺の專有、焚香話所歸所歸とは自分の道に於て心の歸著するを云ふ、卽ち佛法の玄理に歸向して其の旨を山僧と話す、樹搖幽鳥夢林が時に風の爲め搖かさるるあり、幽鳥も聲を發するを聞く、此れ等の趣致を云ふ、螢入定僧衣僧伽は慈悲を主とす、其の殺意なきを知るが故に、微微たる螢も坐禪せる僧衣に入る、破月斜天半破月は片月なり、片月なれば中天半と言はずして、斜天半と言ふ、高河下露微銀漢アマノガハを高河と云ふ、曉天に近づき露氣微しく下る、翻はカヘッテ卽ち却と同義、令嫌白日白日は人皆營營として心地定まらず、靜夜の心慮全く無きに及かず、動卽與心違白日は外境の爲め內心が動かされて、兎角塵念が生じ易し、自身の本心で無きことを知るも、靜に道を思惟する能はず、動もすれば、惡念が起る、動は往往にして、同意義なり、

【評論】此の篇、本集に宿棲白院とあり、棲白は劉が方外の友なり、僧院の幽趣を寫して目前に彷髣せしむ、方虛谷曰く螢入定僧衣此の一句古今之れ無し、他に坐學白塔骨、坐石鳥疑死の句あり、刻苦太甚し、此の閒雅に如かず、尾句尤も高し、紀曉嵐曰く五六對偶本工、又十四字

(七言二句)の句法にあらず、太草草を嫌ふ、尾句は晩唐の習逕、高しと言ふに足らず、余云ふ、第四句、本『大論』の倘闍梨の鵠頂上に巢ふより其の意來る、詩としては前人に此の句なし、尾句は高にあらず、工にあらず、平平の語のみ、

宿宣義池亭

暮色遶柯亭　南山出竹青　夜深斜舫月　風定一池星
島嶼無人迹　菰蒲有鶴翎　此中休便得　何必泛滄溟

【句釋】宣義は里名、會稽の山陰縣に在り、池亭は旅館にあらざるべし、宿すと云ふも、普通の池亭に一夜を明かしたと云ふに過ぎず、「タビヤ」と解する者は過ぎて及ばず、暮色遶柯亭池邊に在るを以て、題に池亭としたるも、亭の名は柯亭なるべし、柯は枝、小亭の意、南山出竹青柯亭前面の景を叙す、夜深斜舫月舫は枋なり竹木を以て之を爲り、水上に浮ぶ、是れを本

義とす、「モヤヒブネ」と訓して兩船並也と注するは轉訛後の說なり、池中に浮ぶ素人製の「イカダブネ」に月影斜なるを云ふ、風定一池星風靜かならざれば、池に落ちし星影を見る能はず、星影を見るからには風は已に定まりたるなり、島嶼無人跡會稽の地たる東西に大小の島あり、或は多人の處もあり、或は無人の處もあり、況や深夜、人の行く者無し、菰蒲「マコモ」と「ガマ」有鶴翎鶴の此の地へ來るともあらん、其の證は翎の落ちたるものあり、此中休便得此の如き好處に、此の身の休するを得れば、人生の願足るなり、何必泛滄溟桴に乘じて海に浮ばんは孔子の言、今借りて以て、我が意の此に在りて、彼に在らざることを叙す、

【評論】此の篇、柯亭の夜景を叙し、尋常の平語なるも、其の見るべき所、句法の整正たるにあるのみ、

送殷堯藩游南山　　姚合

詩境西南遠　秋聲晝夜蛩　人家連水影　驛路在山峯
溪靜雲生石　天晴雪覆松　我爲公府繫　不得此相從

詩境西南遠し、秋聲晝夜の蛩、人家水影に連り、驛路山峯に在り、溪靜にして雲石に生じ、天晴て雪松を覆ふ、我は公府の繫がれ爲り、此に相從ふことを得ず、

【句釋】殷堯藩は元和九年の進士、李翺に長沙の幕府に從ふ、游山南乃ち李翺の幕下、湖南の長沙へ赴むくを送るなり、詩境西南遠長安より陝西、湖北の二國を經て長沙に至る、其の途中の詩境の地理を云ふ、秋聲晝夜蛩詩趣に豐富なる境、日夜に詩を吟じて定んで蛩聲を爲すならん、人家連水影長沙卽ち古の楚地は水國にて、家の水に沿はざる無く、水の家に沿はざるは無し、驛路在山峯今日の陝西湖北二省の地理は日本の甲斐信濃の如く、所謂山系に屬す、溪靜雲生石途中の景、雲の石より生ずること、石は雲の根なりと云ふにて知るべし、天晴雪覆松雪後の天、松上に雪の尙覆ふを見るべきを云ふ、是れも途中の景、我爲公府繫我は役人にて、私人にあらず、職の爲め自由意志を行なふ能はざるなり、爲を「タメ」と訓むべからず、「タリ」と訓んで平聲たり、「タメ」は仄聲とす、不得此相從君の赴く地、幷びに其の途中の風景なぞ稱すべく見るべきもの多きも、惜哉我は君と共に此の行を爲す能はずと嘆するなり、

題李疑幽居　　賈島

閒步少鄰並　草徑入荒園　鳥宿池中樹　僧敲月下門
過橋分野色　移石動雲根　暫去還來此　幽期不負言

開居鄰並少なし、草徑荒園に入る、鳥は宿す池中の樹、僧は敲く月下の門、橋を過ぎて野色を分ち、石を移して雲根を動かす、暫く去つて還つて此に來らん、幽期言に負かず、

【句釋】●●●

龍象雲聚は佛家の套語なればなり、樹影中流見寺中の樹影は中流より見るを得べし、鐘聲兩岸聞彼岸の人も此岸の人も差別すること無く、鐘聲を聞き得るなり、因悲在城市此の如き塵外の事を見聞するに因て我が身の長く紅塵堆裏に在るを悲しむ、終日醉醺醺醺醺は酒氣の臭きを云ふ、

商山早行

溫庭筠

晨起動征鐸　客行悲故鄉　雞聲茅店月　人迹板橋霜
槲葉落山路　枳華明驛墻　因思杜陵夢　鳧雁滿回塘

晨に起つて征鐸を動す、客行故鄉を悲む、雞聲茅店の月、人跡板橋の霜、槲葉山路に落ち、枳花驛墻に明かなり、因つて思ふ杜陵の夢かと、鳧雁回塘に滿つ、

【句釋】商山は一名楚山、又商顏、又商於山と云ふ、商州に在り、長安を去て襄陽へ赴むかんとする時、此の商山を經て作る、晨起動征鐸鐸は字の如く金にて製する鳴具、鈴と同物なり、車の四偶に付けてあるもの、客行悲故鄉客と爲つて他鄉へ行く者はイザ去ると云ふときは、言

ふべからざる悲哀を感ず、故鄉の好きを思へばなり、雞聲茅店月一番雞か二番雞か分明ならざるが、月が茅店の屋上に明らかなる時なれば、未だ曉天に到らず、人跡板橋霜我は隨分早く出立せしと思ひしに、何ぞ料らん板橋の霜に屐痕あるを見れば、我より前に出立せし人ありしなり、槲葉落山路槲は和名カシハ、一本に檞に作る、檞は「コエマツ」なり、カシハの葉が山路に滿つ、枳花明驛墻枳は「カラタチ」の花、驛亭の墻邊に明かに開く、因思杜陵夢此の如き道中の諸景を見るに因て、曾て長安の杜陵即ち故鄉に在つて、夢見し事を思ひ出すなり、鳧雁滿回塘杜陵の回塘には鳧雁が無數に居る、其の事を想ひ出さざるを得んや、今此の道中に鳧雁が多く住すると言ふにはあらず、景色の具合を見て鄉と同一の感想ありと言ふなり、

秋日送方千游上元

曹松

天高淮泗白　料子趣脩程　汲水疑山動　揚帆覺岸行
雲離京口樹　雁入石頭城　後夜分遙念　諸峯霧露生

天高うして淮泗白し、料る子が脩程に趣くことを、水を汲めば山の動くかと疑ひ、帆を揚げて岸の行くかと覺ゆ、雲は離る京口の樹、雁は入る石頭

城、後夜遙念を分たば、諸峯霧露生ぜん、

【句釋】方干は詩友なり、上元は縣名、今日の江蘇省江寧府なり、天高淮泗白淮水と泗水、長安を流るる川、泗水は濟陰より出て臨淮に至り、以て淮水と合す、今や秋日、水色正に白し、料子趣脩程料は思料想像、曹松が方干が趣く道中の景物を想像する、脩は修に同義にあらざるも、同義に用ふるもの多し、「トトノヘル」と云ふ意味より道程と用ふるものの如し、汲水疑山動舟中にて水を汲めば水に墮する山影が動搖すること實事なり、其の事を言ふ、揚帆覺岸行舟中や車中は、舟も車も動かずして却て岸や樹木が走るかと覺ゆ、是れも詩家の妄語にあらずして、普通旅行者の實驗する所なり、雲離京口樹京口は古吳の都せし處、雁入石頭城石頭城は吳の城、京口も石頭も共に方干が目的地として行く上元即ち建康なり、雲離、雁入、一方は離れて、一方は入ると云ふ意義のみ、雲も雁も字を借りしのみ、其の實方干其の人を言ふ、後夜今別れて後の夜なり、初夜中夜後夜と一夜を三に分つ意味の後夜にはあらざるべし、分遙念曹松が方干を思ふ念を分つ「ドウシテ居ルカナ」と云ふ念、遙は遠方なれば云ふ、諸峯霧露生吳天を望むも諸峯霧露生じて決して居ることを得ずと嘆す、

寄陸睦州

許棠

下國多高趣　終年半是吟　汐潮通越分　部伍雜蠻音
曉郭雲藏市　春山鳥護林　東游雖未遂　日日至中心

【略傳】許棠字は文化、宣州涇縣の人、咸通十二年の進士、

【句釋】陸睦州陸は姓、名は肱、棠嘗て其の從事たり、睦州は今の河南省河南府なり、下國は日本で昔し上方だの關東だのと分ちしが如きなり、長安を上國とするより睦州なぞは下濕の國と稱するものの如し、多高趣好景多しと云ふが如し、終年半是吟一年の中、半年は恐くは詩賦の爲め忙殺せらるるならん、汐潮通越分夕の「ウシホ」を汐、朝の「ウシホ」を潮、分は國の界を云ふ、越の國境に通ず、部伍雜蠻音種種の部類の人種が接伍する故に其の言語も南蠻の音を雜用する、曉郭雲藏市曉天に城中を見し景色、春山鳥護林三月に春山を見し景色、東游雖未遂許棠自らを云ふ、我は東游即ち睦州方面の游に志はあるが、荏苒未だ遂げざるなり、日日至中心中心は心中の倒用、睦州の事を日日忘るる能はずとなり、」岑參の「送二懷州吳別駕一」の詩より

此に至る十五首、共に其の作法、同一なり、

與崔員外秋直　王維

建禮高秋夜　承明候曉過　九門寒漏徹　萬井曙鐘多
月迴藏珠斗　雲銷出絳河　更慚衰朽質　南陌共鳴珂

建禮高秋の夜、承明曉の過ぐるを候つ、九門寒漏徹し、萬井曙鐘多し、月迴にして珠斗を藏し、雲銷して絳河を出す、更に慚づ衰朽の質、南陌共に珂を鳴すことを、

【句釋】崔は姓、員外は尚書員外郎、秋直は秋夜に宿直するなり、今日日本の宮內省の如きものに屬す、建禮高秋夜建禮は宮廷の門の名、尚書郎は晝夜交代して一週に一回宿直す、此の門頭正に高秋の夜に當る、宿直する處は門にあらず、承明は石渠閣の中に在り、日本今日の宮廷祇候間とか、伺候間とか云ふものに當る、候曉過天明を候つ、九門は九重門、天上の門、以て天子の門と爲す、寒漏徹寒なるが故に時計の響きも透徹するなり、萬井曙鐘多長安城中、時計の音を聞くと同時に、又曙鐘鳴る、井の字義、戶と同じ、月迴藏珠斗月は迴かに見ゆれども、

珠斗卽ち北斗は藏れて見えぬと云ふ意味、斗の光形珠の如きを以て北斗に譬ふ、承明廬より見る所、雲銷出絳河絳河は天河なり、雲影消滅せしが故に天河は中天に橫はるを見る、更慚衰朽質維は此の時、尚書右丞の職に在り、崔と同宿直して自身を顧みるに崔は年小にあらざるも、自身に比較すれば年較や下る、是の故に衰朽の身を以て官祿を食むを慙づとの意なり、南陌共鳴珂靜坐香を焚き地を掃ふが維の本心なり、騎馬鳴珂は其の本心にあらざるなり、天子は位南面に居す、臣僚は皆北面なり、故に天子に朝する者、皆南陌より、珂は禮服に著ける具と、馬勒の飾具とあり、鳴るは馬勒に屬すると知るべし、

送東川李使君

萬壑樹參天　千山響杜鵑　山中一夜雨　樹杪百重泉
漢女輸賓布　巴人訟芋田　文翁翻敎授　不敢倚先賢

萬壑樹天に參し、千山杜鵑響く、山中一夜の雨、樹杪百重の泉、漢女賓布を輸し、巴人芋田を訟ふ、文翁翻つて敎授す、敢て先賢に倚らざらんや、

【句釋】東川は地名、四川省潼川府東川郡なり、蜀漢の梓潼郡、隋に梓州と改む、李氏此の郡

の太守卽ち知事と爲つて行く、之を送る、萬壑樹參天長安より東川へ赴く道中の景、壑は溪壑と熟語して「タニ」の事、故に深きなり、兒童は之を嶺の如く解す、大に誤まりなり、壑底の樹木が森森と聳えて天を衝かんとする樣を云ふ、千山響杜鵑四川の道中、杜鵑に就ては屢ば辨ずる如く、他州に比して特に多きこと再辨の要なし、千山に響くは其の數の多なると、且聲の大なるを云ふ、山中一夜雨蜀の山中一夜雨あらんか、樹杪百重泉雨の樹杪卽ち樹の「コズエ」より落下する泉は百重の多きを爲す、漢女輸賓布漢女が織る布は、公稅として納むるものを云ふ、蜀に漢水あり、『毛詩』に漢有二游女一とある所より漢の字を用ひしなり、輸は「オクル」意なれば、以て納に代用す、魏晉の時、邊郡の夷人布を輸る戸ごとに一匹、之を賓と云ふ、賓は總なり、其の有する所を率て、切に之を貴ばざるなり、賓は賦と稅の意、巴人訟芋田巴人等が明府の裁決を仰がんとて、訴訟などを提出するならん、巴は郡名、蜀の東隅、芋魁は蜀に多く作るを以てなり、文翁翻教授前漢の文翁が蜀の刺史と爲るや、郡吏をして長安に游學せしめ、又自身出行ごとに學官の諸生を從がふ、吏民之に化し、蜀中の學、齊魯に比す、今李君が刺史と爲つて赴き、郡民がツマラヌ芋田の訴訟なぞ起すは、畢竟無學の致す所、是の故に之を善導して、以て訟へつたへこと訟の如き愚事なからしむ、翻は「カヘッテ」と訓む、訴訟事なぞ奬勵せず、反對に敎授すると云

ふ意味、不敢倚先賢古の文翁の如き賢人に倚りて民を治めんとなり、

【評論】此の篇、人を送る詩として千古の絕調とす、萬千一百等の數字層出するも曾て其の自然を害せず、方虛谷曰く、風土詩多く人の官に之き、及び遠行を送るに因て其の方所を指言す、習俗の異、淸新、雋永、唐人此の如き者極めて多し、許棠云ふ王租只貢金、周繇云ふ官俸請二丹砂一、皆是れ、紀曉嵐云ふ、此の論五六句然り、此の詩の佳處、五六に在らず、起四句二十字、高調雲を摩す、結二句解すべからず、今云ふ紀の解すべからずと云ふは、深く考へざるの失なり、此の平易の語、兒童猶解す、大人豈解せざることあらんや、漢書循吏傳を讀めば文翁の事明白なり、豈解すべからざることあらんや、

送二楊長史赴一果州一

褒斜不レ容レ幰　之子去何之　鳥道一千里　猿聲十二時
官橋祭酒客　山木女郎祠　別後同二明月一　君應聽二子規一

褒斜幰を容れず、之の子去つて何にか之く、鳥道一千里、猿聲十二時、官橋祭酒の客、山木女郎の祠、別後明月を同じうせば、君應に子規を聽くべ

し、

【句釋】楊は姓、名は濟、長史は官名、漢代、邊郡中土に長史あり、文官にして兵馬の權も握る、隋の長史司馬、唐の治中、是れなり、果州は四川省卽ち蜀に在り、宋明清時代の順慶府なり、前詩の東川李使君の東川の地是れ、元代は東川と言ふ、李は使君と爲り、楊は長史と爲り之に赴く、時は同時なるや、別時なるやは分明ならず、褒斜不容嶮徑の嶮難岨隘、通行困苦なるを云ふ、長安卽ち陝西より蜀卽ち四川に入るに、南北二谷あり、南の谷を斜と曰ふ、興元府に在り、北の谷を褒と曰ふ、利州に在り、長安を去る二百里、諸葛武侯が魏を伐たんとして兵を此の谷より出しし處なり、櫜は「ホロ」車網を云ふ、之子去何之何に之くやと云ふ疑問の辭を以て出し、而して以下の句に之を自ら解く、之子は吾友はと云ふが如し、鳥道一千里長安より褒斜州卽ち四川の國境に至る五百里、褒斜より以て順慶に至る五百里と打算しても、詩意を害せず、此の間所謂、鳥道、人道とは言ひ難きなり、猿聲十二時一千里の間、晝の旅行も、夜の旅行も唯猿聲を聞くのみなり、官橋祭酒客長安には灞橋、三橋、第五橋此の中、灞橋を以て客を送る場處とす、官橋卽ち是れ、漢の法、上客を祭酒と曰ふ、祖道を祭るに酒を行ふ人を云ふ意味、送者の行者を稱する語、山木女郎祠果州の金華山中に「觀」あり、卽ち神女謝自然を祠る、行者が

送者に答ふる語、只今は諸兄の厚意にて官橋祭酒の客であるが、蜀へ入らば山木女郎祠で、良とに寂寞の者と爲る、別後同明月長安にて見る月も、蜀で見る月も、天に二月なし、天の一月を見るは同じけれど、人は一千里を隔て、同賞する能はず、君應聽子規送者は住者にて長安に住する者、子規を聽くも感は薄し、行者は蜀客と爲るなり、豈故郷を想はざることあらん、子規を聽かざるも感あらん、況や子規を聽くに於てをや、

【評論】此の篇、前作に優るも劣るなし、徹頭徹尾、塗せず、澤せず、直ちに叙し、小逕に入らず、方虛谷曰く右丞の詩、宋の梅聖俞と互に看るべし、紀曉嵐曰く、梅は右丞と同日に語るべからず、此の詩一片の神骨、凡馬空しく多肉なるに比せず、今云ふ虛谷の肉眼、何ぞ慧眼、法眼の人を窺ふを得ん、

赴京途中遇雪　孟浩然

迢遞秦京道　蒼茫歲暮天　窮陰連晦朔　積雪遍山川
落雁迷沙渚　飢烏噪野田　客愁空佇立　不見有人煙

迢遞たり秦京の道、蒼茫たり歲暮の天、窮陰晦朔に連なり、積雪山川に遍

し、落雁沙渚に迷ひ、飢烏野田に噪ぐ、客愁ひて空しく佇立す、人煙有るを見ず、

【句釋】京は長安、襄陽より京師に赴く時の作とす、亂後の作たること明白なり、迢遞は遠方と見て可なり、迢は「ハルカ」遞は「トホシ」秦京道長安は本秦の都、湖北と陝西は鄰國なれど、此の間、支那里七百里あるべし、蒼茫歲暮天廣く且大の形容を蒼茫と云ふ、十二月の天、自然の氣已に陰、況や蒼茫として雪ならんと欲する天に遇ふをや、窮陰連晦朔是れ途中の事を叙す、十二月の末を窮陰と云ふ、晦は「クラシ」又「ツゴモリ」月の盡るなり、朔は「ツイタチ」又「ハジメ」又盡に用ふ、今は「ハジメ」の義を取る、三十日と一日と連屬したりとの詩意、積雪遍山川正しく題目の雪を叙す、落雁迷沙渚四面皆白し、雁が其の降らんと欲する沙渚の見分け難きに迷ふなり、飢烏噪野田カラスは野田に下るも、粟の有る沒し、唯徒らに噪ぐのみ、外界の實事以て自身の境遇をも此の中に籠る、客愁空佇立客は自身なり、サテ何處に宿を定めんかなと思うて道上に空しく佇立して、四方を望む、不見有人煙人煙を見るときは、客愁も亦有らざるなり、人煙を見ざるに依て、客愁乃ち在り、

【評論】此の篇、襄陽の詩としては至るものにあらず、然れども他人に在りては上乘の作とす、

方虛谷曰く規模好と、紀曉嵐曰く此れ所謂唐人の矩度古格存す、廢すべからざるなり、然れども之に傚ふ則は空腔に入り易し、虛谷評の三字最も斟酌す、

早行

郭良

早行星尙在　數里未天明　不辨雲林色　空聞流水聲
月從山上落　河入斗間橫　漸至重門外　依稀見洛城

早行星尙ほ在り、數里未だ天明ならず、雲林の色を辨ぜず、空しく流水の聲を聞く、月は山上より落ち、河は斗間に入つて橫る、漸く至る重門の外、依稀として洛城を見る、

【句釋】郭良は『唐書』に傳を缺く、早行星尙在正しく門を出し時、數里未天明正しく旅途に就く時、不辨雲林色是れ頭上の景、四面糢糊として辨じ難し、空聞流水聲是れ脚下の景、目は用を爲さず、耳のみ暗中に用を爲す、月從山上落月と言ふも片月ならん、山上に挂りてありし月が落つ、天明に近きなり、河入斗間橫銀河が北斗の間に橫はる、漸至重門外重門は驛亭の門、依稀は猶ほ髣髴と言ふが如し、髣髴は似て居ること、見洛城驛亭に著したるとき、早洛城に來

りしと思ふ、已に都門に著したりと解する鴻齋の說は誤りなり、若し都に著いたとすれば、依稀の字全く活用せず、

宿荊溪館呈丘義興　　嚴維

失路荊溪上　依仁忽暝投　長橋今夜月　陽羨古時州
野燒明山郭　寒更出縣樓　先生能館我　何事五湖遊

路を失す荊溪の上、仁に依て忽ち暝投す、長橋今夜の月、陽羨古時の州、野燒山郭に明かに、寒更縣樓より出づ、先生能く我を館す、何ぞ五湖の游を事とせん、

【句釋】荊溪は今日の江蘇省常州府武進縣なり、嚴維は越州より常州に趣く途次、此に一宿す、丘義興は其の郡宰、維の舊友なり、失路荊溪上荊溪の地たる已に常州なり、目的地へ著して黃昏に逼り、遂に路を失せしものと見ゆ、依仁忽暝投「ナサケ」に依て幸に其の宿處を得たりと云ふ、「依仁」は『論語』の語、暝色に及んで投宿を請ふなり、長橋今夜月長橋は荊溪に架する橋、陽羨古時州古の楚國、漢代の陽羨、今日の宜興なり、新らしき月は卽ち古時の月、宜興の名

は新らしけれども其の州は古の州なり、月も地も今古異ならざるを云ふ、野燒明山郭野草を燒く火が、山の郭を照すを望む、寒更出縣樓更は夜の意味なれども、此の更は漏卽ち時計、又鼓と見るべし、縣樓卽ち役所より出る鼓の聲が、如何にも音が寒く聞える、先生能館我丘を指して先生と云ふ、我を嫌はず、慇懃に宿泊を許可せらる、何事五湖游越の軍師范蠡は昔し功成り名遂げて後、官を辭し去て五湖に遊ぶ、然るに我は范蠡の事を學ぶに及ばず、先生の我を館し玉ふ厚情にて、樂十分なりとの意、

漂母墓　　劉長卿

昔賢懷一飯　茲事已千秋　古墓樵人識　前朝楚水流
渚蘋行客薦　山木杜鵑愁　春草年年綠　王孫舊此游

音賢一飯を懷ふ、茲事已に千秋、古墓樵人識り、前朝楚水流る、渚蘋行客薦め、山木杜鵑愁ふ、春草年年綠なり、王孫舊し此に游ふ、

【句釋】漂母墓「史記淮陰侯傳」に曰く韓信城下に釣す、諸母漂す、水を以て絮を擊つを漂と曰ふ　一母あり信の飢るを見て、信に飯す、漂を終て數十日、信喜び、漂母に謂つて曰く、吾必ず以て重く母に報

するあらん、母怒つて曰く、大丈夫自ら食すること能はず、吾王孫を哀んで食を進む、豈報を望まんや、漢の五年、韓信楚王に封ぜられ下邳に都す、從て食する所の漂母を召し千金を賜ふ、其の墓、漢の臨淮郡、今日の江蘇省淮安府清河縣の東南五里の地に在り、昔賢は韓信なり、懷一飯漂母の事前の如し、茲事已千秋漢初より唐に至る已に千年、古墓樵人も能く其の墓の所在を識る、前朝楚水流信は楚王なれば　特に楚水の字を用ふるなり、前朝は現朝より以前は際限なく用ふ、是の故に此の前朝は漢代と知るべし、人は無し、水は依然たり、渚蘋行客鴈渚邊に生ずる蘋草を採て、路人が是を漂母の墓に薦める、山木杜鵑愁山中の樹に啼く杜鵑は漂母の爲めに愁ふるが如し、春草年年綠人生の短なるは、草木の冬枯るるも、春亦生ずるの長きに及かず、王孫舊此游韓信を指して王孫と云ふ、千年も以前なれば舊と云ふ、韓信が游ぶは食を乞ひし時なり、漢代の詩に王孫游兮不レ歸、春草生兮萋萋とある詩意より此の結末が案出せられしなり、

湖中閒夜　朱慶餘

釣艇同二琴酒一　良宵背二水濱一　風波不レ起處　星月盡隨レ身
浦迴湘雲卷　林香嶽氣春　誰知此中興　寧羨二五湖人一

釣艇琴酒を同じうす、良宵水濱に背く、風波起らざる處、星月盡く身に隨ふ、浦迴にして湘雲卷き、林香うして嶽氣春なり、誰か知らん此の中の興、寧ぞ五湖の人を羨まんや、

【略傳】朱慶餘、字は可久、又字慶緒、越州の人、寶曆二年の進士、

【句釋】湖中閒夜洞庭湖に船を浮べて夜游を賦す、釣艇同琴酒題に友人は記してあらざるも、同の字より見れば友人と釣艇にて琴酒を同じうする、艇は小舟、良宵背水濱良宵は多く中秋即ち八月十五夜に用ふる語なれども、此の句は晴宵の意味に用ふ、濱は岸邊を云ふ、背くとは岸を離れて遠く水心に艇を放ちしなり、風波不起處、星月盡隨身風波が起らざるを以て、星月が我が身に隨ふなり、浦迴湘雲卷浦は「水濱也」と注す、是の故に迴なり、瀟湘の雲が水濱に卷く、卷くは卽ち無きなり、林香嶽氣春洞庭の山嶽より送り來る香あるが爲め嶽上は花あることを知るなり、誰知此中興、寧羨五湖人今夜の如き興ある游を得れば、何ぞ范蠡が黃金十萬を載て五湖に游びしことを羨まんやとなり、五湖人は范蠡を云ふ、王維が與二崔員外秋直一の詩より此に至る八首、前の詩と略同等の格とす、

四虛

周弼曰く謂ゆる中の四句皆情思にして虛なり、虛を以て虛と爲さず、實を以て虛と爲す、首より尾に至る、行雲流水の如し、此れ其の難きなり、元和より已後、此の體を用ふる者は、骨格存すと雖も、氣象頗る殊なり、向後は則ち枯瘠に偏にして、輕俗に流せり、採るに足らず、

今曰く周弼の中の四句と云ふは、三四五六の二十字なり、所謂前聯後聯なり、虛と云ふは外形に表はれざるもの、卽ち我が主觀を指す、實は其の反對、外形に表はれたる客觀的事物を指す、詩家は虛と實景客觀と情主觀と稱す、今「虛を以て虛と爲さず」と云ふは、主觀の中に客觀が籠るなり、「實を以て虛と爲す」と云ふは、客觀を以て直に主觀と爲すの謂ひなり、首より尾に至るは卽ち四十字一律全體を指す、「行雲流水の如し」とは、有法の極、無法に歸したるの謂ひなり、此は虛、彼は實、此は景、彼は情と判然區別あるものと異なるを云ふ、「此れ其の難きなり、」大家にあらざれば、容易此の境に至り難きなり、「元和より已後、」順宗の子、憲宗の年號を元和とす、十五年にして穆宗の長慶と爲る、詩家の稱して中唐時代と做すもの

なり、此の體を用ふる者、「骨格存すと雖も、氣象頗る殊なり、」周弼の此の言を吐くは、元和以前卽ち玄宗の開元、天寶、肅宗の至德、乾元、代宗の永泰、大曆間に出でし卽ち盛唐の諸家を稱讚するの意明明たり、然らば其の盛唐諸公の詩を多く採つて、中晩唐の人を除外すべきなるに、何ぞ料らん採る所の詩、中晩唐に多くして、盛唐に少なきは自語相違の謗を免れざるべし、然れども箇は是れ問題を改めて論ず、茲に論ずるの煩を許さず、周弼曰く「骨格存すと雖も、氣象頗る殊なり」四虛と稱する格法の名は存するも、實を以て虛と爲すの氣象は缺如すとなり、「向後は則ち枯瘠に偏にして、輕俗に流せり、採るに足らず」晩唐以後宋に至るまでを通じて「向後」と稱したるものの如し、此の論は實に然り、晩唐より宋に及ぶ詩は生命を亡ぼしたるもの、溫厚の旨を失し、理路を貴び、野狐外道、天下に跋扈するに至る、不レ足レ採也の四字は、實に天下の公論、伯弼の私言にはあらざるなり、是れ亦問題を改めての論、茲に贅せず、

陸渾山莊　宋之問

歸來物外情　負レ杖閱二巖耕一　源水看レ花入　幽林採レ藥行
野人相二問姓一　山鳥自呼レ名　去去獨吾樂　無能愧二此生一

歸り來る物外の情、杖を負うて巖耕を閲ぶ、源水花を看て入り、幽林藥を採つて行く、野人姓を相問ふ、山鳥自ら名を呼ぶ、去去獨吾樂んで、無能此の生を愧づ、

【句釋】陸渾は地名、河南省河南府に在り、山莊は卽ち作者宋之問の隱居所とす、諸注に「之問不遇にして此の山に隱る」とあるが、正人の不遇は同情すべきも、邪人の不遇は同情すべき點なし、之問の不遇は寧ろ當然のみ、歸來物外情權勢に阿附する力盡きて、此に歸り來るなり、萬物の外に情を養ふ、負杖閲巖耕手を背にして杖を持つを負杖と云ふ、農人が巖石の間の田を耕やすを閲る、源水看花入、幽林採藥行昔し漁父が花の流れ來るを看て、舟を其の流れ來る方面に棹さし行けば、遂に洞源に達し、又昔し龐德公が鹿門山に隱居して藥を採り身を修む、我も亦此の如くに類するやと、實事にあらざることを叙す、是れ卽ち實を以て虛と爲すの格、之問の如きものに較べられては、漁父も龐德公も驚くことなるべし、野人相問姓、山鳥自呼名野人に遇へば、見慣れぬ人間ゆゑ之問に其の姓を問ふ、又山鳥は自分で自分の名を呼ぶ、自分で自分の名を呼ぶに就て議論がある、鷓鴣は鷓鴣と呼び、子規は謝豹と呼び、鳩は

布穀と呼び、皆自ら名を呼ぶなり、或說に鳥自ら呼ぶにあらず、其の聲に依て、古人が名を附せるなり、鴉は「カア」と聞えるより名け、鳩は「キウ」と聞えるより名けると、此の二說異なるに似て一致する、自ら呼ぶに依て、古人が名を付せしも、古人が名を付せしに依て、自ら呼ぶも何等の別なし、自ら呼ぶが主たるべきなり、去去獨吾樂去去の文字は普通字義の如く、「去る」にはあらず、他に頓著せざるの謂なり、古來の注者皆解せず、野人の姓を問ひ、山鳥の名を呼ぶ、共に是れ應酬するは免倒なり、左樣なことに頓著せず、我は吾獨樂しまんとなり、無能愧此生無能の我、他賢者に追隨する能はず、畢竟自ら樂しんで生を終らん、此の生を愧づる念は之れなしとなり、

新年作

鄉心新歲切　天畔獨潛然　老至居人下　春歸在客先
嶺猿同旦暮　江柳共風煙　已似長沙傅　從今又幾年

鄉心新歲切なり、天畔獨潛然たり、老至つて人の下に居し、春歸つて客の先に在り、嶺猿旦暮を同じくし、江柳風煙を共にす、已に長沙の傅に似た

り、今より又幾年ぞ、

【句釋】新年作之間、初め太平公主に媚び、其の寵遇を得、後安樂公主に侫するに及んで、太平公主の意を失し、越州長史に貶せらる、之間、剡溪山に酒を置き詩を賦し、行を修めず、且其の詩人人傳唱す、睿宗之を憎み、詔して欽州に流す、此の詩卽ち欽州に在つて作る、鄉心新歲切鄉とは其の生地汾州を云ふ、故鄉を思ふの心、新歲に遇うて愈よ切、天畔は天涯と同意獨潸然淚を流して潸然、邪人なれども淚あるものと見ゆ、老至居人下素隱此の句を解して曰く、「元三の祝の座敷の次第は、幼き者を上座になほし、年の老いたる者を下座になほす、なぜと云ふに人生は百年が限りぞ、五十までは、年を得る道理ぢやとて、少き者を先づ祝するぞ、五十より一年づつ失せて、百年には死するほどに、後に祝せんとて下座に置くぞ、盃をも幼き者が始むるぞ、此の如き式も漢土に無きにはあらず、然れども此の句の意にあらず、此の句の意は少年の官等が己れの上に在るを云ふ、己れは奏任なるに、少年は勅任の地位に居るとの意なり、春歸在客先春歸の字は二義あり、三春の盡きて初夏ならんと欲する時と、冬盡きて新春正に之れに代る時となり、今は春來るを云ふ、春は歸るも我は未だ客と爲て此の欽州に在りと嗟するなり、嶺猿同旦暮嶺に啼く猿は終日止むとき無きなり、江柳共風煙江に沿ふ柳は風光と煙景を共

にする、已似長沙傅漢の賈誼は年少にして、才奇一世に冠絕す、讒者の爲めに長沙に謫せられ、長沙王の傅卽ち親王の師傅として、邊地に在住せし事あり、己亦之に似たり、從今又幾年幾年を經て、欽州より汾州へ歸るを得るや、知るべからず、と嘆嗟するなり、何ぞ料らん三四年を超えずして、死を賜ふに至る、其の自業自得を知らずして詩を賦し、世を憤る、憫むべきなり、

喜鮑禪師自龍山至

劉長卿

故居何日下　春草欲芊芊　猶對山中月　誰聽石上泉
猿聲知後夜　花發見流年　杖錫閒來往　無心到處禪
故居何れの日か下る、春草芊芊たらんと欲す、猶ほ山中の月に對して、誰か石上の泉を聽かん、猿聲いて後夜を知り、花發いて流年を見る、錫を杖いて閒に來往す、無心到處に禪す、

【句釋】鮑禪師僧は二字の名を略して一字で稱する例多し、貫休は休上人齊己は己上人の類、何鮑なるならんが、傳は未詳、禪師は僧に對する敬語、龍山は澤州にも福州にも在り、いづれなりと定め難し、劉が家を訪問せられしなり、故居何日下禪師を見て劉が質問する、禪師は何

日に故居の龍山を下山せしぞ、春草欲芊芊東西南北共に草色芊芊たり、禪師下山すれば、龍山の草芊芊、何人か之を掃除せん、芊芊は音「セン」草の茂盛なる形容、猶對山中月禪師不在となれば、猶は龍山の月を賞する者ありや、誰聽石上泉仰いで月、俯して泉、之を見、之を聽く者は誰ぞや、猿聲知後夜、花發見流年此の二句は禪師が長卿の問に答へしなりとの説と、然るにあらず龍山の實景を叙せしのみとの説とあり、余は姑らく後説を取る、禪師の答ふる要無ければなり、答へざるを以て禪の妙味の存する所とす、長卿が質問を發して見て、後考ふイヤ左樣にはあらず、月を見るも泉を聽くも無い、自然は自然なり、禪師不在なればとて、山猿は必ず後夜に啼き、山花は春風に發きて、南風に落つ、是れが山中の自然なり、何ぞ禪師の在不在に關せんや、初夜、中夜、後夜の三時に一夜を分けて僧が坐禪する法あり、後夜は午前二時頃なり、杖錫閒來往、無心到處禪禪師の下山を何故ぞと初めは疑ひしも、遂に悟るを得たり、僧伽は隨緣を貴んで、執著を賤しむ、山中と雖も、是と定めて執著するは、畢竟解脫の道に背く、佛陀も遂に山中を出し人なり、禪師が錫を杖いて、山中市中、到處に禪す、雲の嶺を出て又嶺に歸ると同じく無心なり、

酬秦系

鶴書猶未至　那出白雲來　舊路經年別　寒潮每日回
家空歸海燕　人去發江梅　最憶門前柳　閒居手自栽

【句釋】酬は彼に對する我の返事なり、秦系字は公緒、會稽の人、天寶の末亂を剡溪に避け、自ら東海釣客と稱す、北都の留守薛兼訓、奏して倉曹參軍と爲す、就かず、泉州の南安に客たり、九日山中に大松あり、系廬を其の下に結んで、石を穴て硏と爲し、老子を注す、年を彌て出でず、年八十餘にして卒す、南安の人之を思うて、其の山を號して、高士峯と爲す、鶴書猶未至此の句は長卿の手に、君が行くと云ふ報知の書未だ至らざるにと解しても通ずるが、諸注多く天子の召書未だ至らざるにと解す、仙人の書も鶴書なり、天子の書も亦鶴書なり、姑らく諸注に隨がつて置く、那出白雲來天子未だ召さざるに何ぞ白雲に背きて出で來るや、舊路經年別南安の舊路を出で年已に久しきを云ふ、劉が秦の意を忖度して云ふなり、南安は四川にもあ

り、河南にもあり、福建にもあり、秦の住廬は福建省の泉州南安なり、寒潮毎日回泉州は臺灣海峽に臨んで、我が邦横濱の如き地なり、寒潮の滿滅は知り易きなり、回と云ふは素隱は「潮ノ引クナリ」と注したるが、然らず、日日回るも又來る、其の往返を云ふ、家空歸海燕秦系なる主人は不在ゆゑ、家空しきなり、然れども海燕は去年の巢くひし家なるを知るが故に又歸り來る、人去發江梅主人の秦系は不在なるも、其の庭梅は自ら花ひらく、最憶門前柳前に種種の事を叙して置く、其の中で最もなり、閒居手自栽今や春風に遇うて、手栽の門前の柳さぞや青青たるならんと憶はるゝ、柳の字あらば淵明に比すなぞと云ふが普通の注なり、此の詩は何等淵明に關係なし、

送朱放賊退後往山陰

越中初罷戰　江上送歸橈　南渡無來客　西陵自落潮
空城垂故柳　舊業廢春苗　閭里稀相見　鶯花共寂寥

越中初めて戰を罷む、江上歸橈を送る、南渡來客なし、西陵自ら潮を落す、空城故柳垂れ、舊業春苗廢せん、閭里相見ること稀に、鶯花共に寂寥

たらん、

【句釋】朱放は襄陽の人、越の山中に隱居す、賊退後の賊は永王璘を指す、永王璘は玄宗三十子の中の尤も末子にて、其の母早く死し、肅宗玄宗の之を養育せり、長ずるに及んで叛を謀り、至德年中、祿山が亂後、間も無く、漢中再び擾亂す、淮江浙右吳越の間、盜賊之に乘じて起る、永王璘は矢に中つて竟に死す、其の戰後を言ふなり、山陰は越の會稽郡、越中初罷戰、江上送歸橈越の山陰、賊軍の爲め亂れしが、今や戰罷む、其の亂を避けて長安に在りし朱放が今舟に乘じて舊居に還る、其の歸橈を此に送る、橈音「ダウ」小楫「サヲ」を云ふ、南渡無來客長安より吳越を指して南渡と云ふ、來游の客が無きを想像して云ふ、亂後なればなり、西陵自落潮自然界の狀は變せず、其の寂寞を表はす、空城垂故柳山陰の空城は賊亂の後なれば、唯故柳のみ垂垂たらん、舊業廢春苗朱放が曾て栽培せし藥草野菜の類なぞも定んで鋤を容れしものなからん、人事と自然とは反對なるを云ふ、閭里稀相見閭里の人、東逃西竄して、相見る者果して幾人か存する、鶯花共寂寥折角時節は鶯花の佳期に遇ふも、同賞する友も稀なれば寂寥のものならんと云ふ、

尋南溪常道人隱居

一路經行處　莓苔見履痕　白雲依靜渚　春草閉閒門
過雨看松色　隨山到水源　溪花與禪意　相對亦忘言

一路經行の處、莓苔履痕を見る、白雲靜渚に依り、春草閒門を閉づ、雨を過ぎて松色を看、山に隨つて水源に到る、溪花と禪意と、相對して亦言を忘る、

【句釋】南溪は未詳、常道人常は名、道人は詩人にも、方外の法侶にも用ふ、此の道人は僧ならん、一路經行處キンヒンは佛家の修行の一、路を周廻して咒念するなり、此の二字あるを以て余は常道人を釋氏と判じたるなり、莓苔見履痕日本の如く齒のある下駄は浙江江蘇の間に於て、余は見聞せしことなきが、天台の寒山が木履を穿ちし事より見れば、漢土の南方にも有るなり、道人以外に莓苔即ち「コケ」を破るもの無く、道人が經行するに依つて苔が破れ、履痕が見はる、寂寞の境知るべし、白雲依靜渚往訪者が漸漸行くに隨がつて、白雲が幽靜なる渚邊に片片依るを見る、春草閉開門白雲は天上より落るもの、春草は地上に生ずるもの、高低の對を

爲すこと知るべし、開門の前に到れば、門閉づは人無きなり、春草萋萋たるは、人の踏破るもの無ければなり、過雨看松色サッと通過する雨を過雨と云ふ、非常に人意を快にするもの、此の雨後に門前に立て松を看る、塵念消せざるを得んや、隨山到水源山路の屈曲して行くに隨がつて漸漸水源に到る、心の萬境に隨がつて轉ずと云ふ素隱の注は何等の曲解ぞ、溪花與禪意、相對亦忘言是れ色是れ空、是れ空是れ色、花を看て相言ふ所如何、眞理を體得すれば言の發すべきなし、畢竟色も忘れ、空も忘れ、亦言も忘る、忘れずんば眞の禪を得たりと言ふべからず、

題元錄事所居

幽居蘿薜情　高臥紀綱行　鳥散秋鷹下　人閒春草生
冒嵐歸野寺　收印出山城　今日新安郡　因君水更淸

幽居蘿薜の情、高臥紀綱行はる、鳥散じて秋鷹下り、人閒にして春草生ず、嵐を冒して野寺より歸り、印を收めて山城を出づ、今日新安郡、君に因つて水更に淸し、

【句釋】元は姓、錄事は官名、日本今日の書記官に類する役、所居は元が官を罷めて後にはあ

らず、在官中其の別墅に幽居するなり、●●●

たる語、自他の覺道を開く力ある士の義なり、是れ以て靈一を例す、一去春山裏一去千里と云ふ語が佛典にある、卽ち開士の德名が餘りに高くなりて、多勢の者が聚まり來りたるときは、乃ち一夜の中に、千里も走り去るべしとなり、律文の制戒の一とす、今春山の裏に一去し、千峯不可尋此の多くの峯の中、何處に向つて之を尋ねんや、新年芳草遍定んで山中の新年、芳草が處處に遍ねからん、終日白雲深白雲は終日盡る時なし、終日盡る無きは終年盡さざるなり、欲徇微官去徇は天子の命に應じて官吏と爲つて京城に赴く事、長卿自身を云ふ、懸知は上人が長卿が心を遙かに知り玉はん、訝此心何故に山中に入つて道を修する念を起さず、官吏なぞと云ふ俗物に成るやと訝かり玉はんと、謙遜して言ふなり、已前共に八首、

除夜宿石頭驛　戴叔倫

旅館誰相問　寒燈獨可親　一年將盡夜　萬里未歸人
寥落悲前事　支離笑此身　愁顏與衰鬢　明日又逢春

旅館誰か相問はん、寒燈獨親しむべし、一年將に盡きんとする夜、萬里未歸の人、寥落前事を悲み、支離此の身を笑ふ、愁顏と衰鬢と、明日又春に

逢はん、

【句釋】除夜十二月三十日を除夜と云ふ、一年を送るを以て、是の夜は眠を廢するが式なり、石頭驛は洪州に在り、旅館誰相問、寒燈獨可親除夜の客中、人の問ふ者無く、唯寒燈と親しむ、寂寞の狀を極む、一年將盡夜、萬里未歸人一年は今夜盡き、我は萬里未歸の人、感慨の情を極む、寥落悲前事、支離笑此身「オチブレ」は寥落、「ハナレバナレ」は支離、前年の寥落を悲しんで、今日の支離を笑ふなり、親戚や知己と支離するなり、愁顏與衰鬢愉快なる顏を爲さんと欲するも能はず、新年は總て面目を改めざるべからず、然るに此の如き憫然なる狀を以て、明日又逢春春風に逢ふを愧づ、男兒たる能はざるの意を寓するものと見るべし、

汝南別董校書

擾擾倦行役　相逢陳蔡間　如何百年內　不見一人閒
對酒惜餘景　問程愁亂山　秋風萬里路　又出穆陵關

擾擾として行役に倦む、相逢ふ陳蔡の間、如何ぞ百年の內、一人の閒なるを見ず、酒に對して餘景を惜み、程を問うて亂山を愁ふ、秋風萬里の路、

又穆陵關を出づ、

【句釋】●汝南は地名、今日の河南省汝寧府汝陽縣東南六十里の地とす、別に南汝南と西汝南と東汝南とあり、董は姓、校書は官名、漢代初めて置く、藏書の室、文學の士をして、其の中に讎校せしむ、文字を刊正する職、秘書省に屬して、極めて小官なり、擾擾倦●行役德宗の建中中に戴は撫州の刺史と爲り、後還らんと欲して道に卒す、是等の事よりして行役の語あり、擾擾は悠悠の反對、「ミダレル」なり、相逢陳蔡間董は陳より京師へ赴き、我は陳へ行かんとす、其の中途の汝南にて相逢ふなり、如何百年內百年は一生の代名詞、一生涯此の如く、擾擾として行役に惱むは如何ぞと嘆ず、不見一人閒君も行役、我も行役、一人として閒なる者を見ず、同病相憐の意なり、對酒惜餘景此の如き行途に相逢ふ、一杯を共にして、光陰の過ぐる速きを惜む、餘景は殘歲と言ふが如し、自分の殘年を惜しむなり、戴は五十八にして卒せしゆゑ、此の詩は五十六の時なり、問程愁亂山問ふ者は戴なり問はるる者は董なり、蔡州より京師への程、山又山、地理益す高し、亂山高下商州に入る、亂山を高下せざるべからず、秋風萬里道、又出穆陵關此の二句は戴の赴く方を云ふ、汝南より南の方、卽ち今日の河南と河北の界なる穆陵關を出でて、以て古の陳、今の江蘇省淮安府の地へ赴くなり、董が汝南より遙かの穆陵關を出

て遠方へ行くを想ひやる、とある注釋は大に誤る、汝南より京師への路は開封、河南、蒲州の三府を經て赴く、穆陵を出でては迂回するも甚だし、

江上別張勸

年年五湖上　厭見五湖春　長醉非關酒　多愁不爲貧
山川迷道路　伊洛暗風塵　今日扁舟別　俱爲滄海人

年年五湖の上、厭ひ見る五湖の春、長醉酒に關するに非ず、多愁貧の爲にあらず、山川道路に迷ひ、伊洛風塵暗し、今日扁舟の別、俱に滄海の人と爲る、

【句釋】●江上は詩中にある五湖上の事なり、本義は江と湖と別なれども、一義に用ふる場合も多し、張勸は傳未詳、此の江上に相逢ひ、互に亂を避けて他方へ赴かんとして相別るるなり、●年年五湖上五湖は江蘇省の鎭江府にあり、安祿山や史思明の爲め羣盜往來して、此の處安からず、而かも年年此の事繼ぐ、厭見五湖春厭ふも見ざる能はず、見るも樂しまず、煙花相好きも、生命に關する危險あり、春何の賞する所かあらん、此の五湖の上は、唐代縣江南道潤州にて、

戴の故郷なり、長醉非關酒を飲んで長醉するは尋常なり、我が長醉は決して飲酒の爲めにあらず、世亂の爲め、心身定まらず、宛かも醉人の態の如し、多愁不爲貧人の苦痛心配、貧より甚はだしきは莫し、然れども我の愁は衣食缺乏の爲めにはあらず、山川迷道路迷は未知の道を通過する故に迷ふと、已知の道と雖も、愁の爲めに迷ふとの二意を含むと知れ、互に道途に就くを云ふ、伊洛暗風塵伊水と洛水は河南省の河南府を流るる水なり、風塵の字義種種の解釋あるが、今は兵馬の塵が暗しと見るべし、今日扁舟別互に水路を取つて、旅途に就くの別なり、俱爲滄海人水上の人と爲るとの意にはあらず、定まらざる人と爲るとの意なり、

送丘爲落第歸江東

王維

憐君不得意　況復柳條春　爲客黃金盡　還家白髮新
五湖三畝宅　萬里一歸人　知爾不能薦　羞稱獻納臣

憐む君が意を得ず、況や復柳條の春、客と爲つて黃金盡き、家に歸らば白髮新ならん、五湖三畝の宅、萬里一歸人、爾を知つて薦むること能はず、獻納の臣と稱せらるるを羞づ、

【句釋】丘爲は未詳、落第は進士及第せざるなり、江東は今日の江蘇蘇州を云ふ、丘爲は繼母に事へて至孝の人と稱せらる、右丞の交はる人物、其の人品知るべし、憐君不得意及第者は得意なり、落第者は失意なり、憐まざるを得んや、況復柳條春別るる人には柳條を折りて餞す、其の餞する物の柳條は青青と得意なるが如きも、餞せらるる人は棲棲として不得意なり、爲客黃金盡故郷を出でし時は及第を想像して、金を多く用意して來れるも、落第して長安を去る時は、囊底已に一物無し、還家白髮新白髮は愁に緣つて生ずるもの、愁に緣らざれば衰老に赴く故なり、此の句此の兩意を含む、五湖三畝宅畝は畝と同じ、極めて微微たる宅が五湖の上に在る、還るも亦可、萬里一歸人長安より蘇州へ還る、實際の里程二千里もあらん、萬里は遠方の極を云ふ、知爾不能薦爾の人物を能く知りつつ、而かも推薦する事を得ず、羞稱獻納臣古注に則天武后、銅匭を置き、四方事を告ぐるの書を置く、而して理匭使の役を置く、玄宗改めて獻使と爲す、王維が職嘗て尚書右丞たり、實は納言官なり、此の納言官に居り乍ら爾を推薦せざりしは、良とに我が不明を羞づとなり、

岳州逢司空曙

李端

共有鬢年故　相逢萬里餘　新春兩行淚　故國一封書

夏口帆初落　湲陽雁正疎　唯應執二盃酒一　暫食漢江魚

共に髫年の故あり、相逢ふ萬里の餘、新春兩行の淚、故國一封の書、夏口帆初めて落ち、湲陽雁正に疎なり、唯應に盃酒を執つて、暫く漢江の魚を食ふべし、

【略傳】李端は字なし、趙州の人、嘉祐の姪なり、少時廬山に居し、高僧浩然に依て書を讀む、意況淸虛にして、酷だ禪侶を慕ふ、大曆五年李搏、進士及第に榜す、祕書省校書郎を授けらる、多病を以て官を辭し、終南草堂寺に居す、未だ幾ならず起て杭州の司馬と爲る、牒訴敝朴、心甚だ之を厭ふ、田園を買うて、虎丘の下に在り、耽深の癖を爲せり、泉石幽を少く、家を衡山に移す、自ら衡嶽幽人と號す、琴を彈じ易を讀み、高に登り遠きを望み、神意泊然たり、初めより官情無く、箕潁人の名、淸淨に身を修めし人、の志しあり、大曆十才子の一人とす、

附　詩藪の說左の如し、

計氏紀事に云ふ大曆十才子、唐書に人數を見ず、誤なり『唐書』、盧綸、吉中孚、夏侯審、錢起、李端、苗發、司空曙、韓翃、耿湋、崔峒、唯、中孚と審、制作聞くこと無し、疑ふべし、

而して綸、中孚、峒、發、曙、端、湋を懷ひ、兼て夏侯審に寄する詩あり、則ち中孚と審と實に才子の列に在り、韓翃、錢起は與からず、恐くは此の間、章句脫落す、否らずんば別に故あらん、或は中孚と審と翃と峒の四人を去て、皇甫曾、李嘉祐、郎士元、李益を益す、其の人才前に視べて勝ると雖も、而かも實錄にあらず、余曾て古今一時並稱する者を歷考するに多く游從習熟、倡和頻仍を以て、好事之に因つて、以て標目を成す、中間或は品格差肩する、蹤跡離るるを以て、而かも合することを能はず、或は才情迥絕する、聲氣合を以て、而して離るることを得ず、槩論し難きなり、詩藪外篇三上

【句釋】岳州逢司空曙岳州は湖南なり、司空の傳は前に出せり、司空曙が長沙に流貶せらるる途次、此の岳州にて逢ひしなり、李端は官を去て、岳州の衡岳へ歸る、共有髫年故は我と君と竹馬以來の故友なり、髫は童子の垂れ髮を云ふ、結髮せざる時の稱、故は「フルキ」なり、「ユヱ」にあらず、相逢萬里餘非常に故き友に、非常の遠地にて相逢ふ、新春兩行淚新春は相逢ふ今日の期節、覺えず悲喜交も至り、淚を流す、故國一封書李の家人が司空曙に托して、李に一封書を渡されしなり、夏口は岳州の西端、帆初落卽ち洞庭湖に帆が卸したるなり、司空曙の帆とのみ見るは誤まる、一般の帆舟を云ふ、湲陽は浦の名、楚部に屬す、是れも湖に沿ふ、雁正

疎雁は疎なる筌なるに我は故郷の雁信を得たり、唯應執盃酒、暫食漢江魚相逢ふも又別る、人生無常なり、請ふ漢江の魚を食ひ以て共に旨酒を飲んで情を遣らん、漢江には鯿魚を産す、味甚だ美、鯿は鰱と同じ、魴魚是れなり、江東に鯿と呼ぶ、漢江は或時期を定めて捕ふるを禁ず、和語に「ナヨシ」と稱す、

洛陽早春　　顧況

何地避二春愁一　終年憶二舊游一　一家千里外　百舌五更頭
客路偏逢雨　鄉山不レ入レ樓　故園桃李月　伊水向レ東流

何れの地にか春愁を避けん、終年舊游を憶ふ、一家千里の外、百舌五更の頭、客路偏に雨に逢ふ、鄉山樓に入らず、故園桃李の月、伊水東に向つて流る、

【句釋】洛陽は今日の河南省河南府なり、何地避春愁春に對する見聞皆愁ならざるは無し、何れの地にか之を避けん、表面の解此の如し、裏面の解は滿朝の小人共、我を忌むこと甚だし、何處に之を避けんやなり、顧況は宰相李泌が爲め高官と爲る、泌が卒するに及んで、權貴を嘲

誚する詩を作り、官を去て、茅山に隱る、終年憶舊游終年は一年中と言ふこと、李泌との舊游を憶ふのみにて、他には知游を憶はず、一家千里外蘇州に在る我が家は此の洛陽と千里を隔つ、百舌五更頭百舌は「モズ」と云ふ鳥、其の囀づること他鳥に比するに忙がはしき鳥なり、五更の頭に鳴かれては、愁人眠らざる上、更に眠る能はざるなり、此の鳥も朝廷の小人に比す、客路偏逢雨、鄉山不入樓鄉山の樓に入らざるは、雨偏に多ければなり、春愁多き所以見るべし、故園桃李月此の洛陽の客中雨の多きに苦しむが、蘇州の故園は桃李開き、且月も美からん、伊水向東流我は東を望むのみなるが、水は東に向つて流るるを得、東は蘇州の方面なり、伊水は洛陽を流るる川、我は遂に水たるを得ざるを恨む、

送二陸羽一　　皇甫曾

千峯待二逋客一　香茗復叢生　採摘知二深處一　煙霞羨二獨行一
幽期山寺遠　野飯石泉清　寂寂然燈夜　相思磬一聲
千峯逋客を待つ、香茗復叢生す、採摘深處を知り、煙霞獨行を羨む、幽期山寺遠く、野飯石泉清し、寂寂たる然燈の夜、相思ふ磬一聲ならんことを

【句釋】　陸羽が吳興の妙喜寺に歸るを送る詩なり、妙喜寺は高僧皎然の住坊、羽が草亭は寺畔に在るなり、三癸亭と名く、住する者は陸羽、詩を賦する者は皎然、字を書する者は顏眞卿時に三絕と稱す、千峯待通客是れ陸羽の居る所を云ふ、逋は亡なり、逃なり、「ニグル」なり、官を罷めし客の義なり、羽は大常寺大祝の官に任せらるるも就かずして、吳興に隱遁せり、香茗復叢生吳興の顧渚山は日本山城の宇治の如く、香茗を產する天下第一と稱せらる、二番茶が出來るを叢生と云ふ素隱の解は滑稽極まる、唯茶が善產すと見て可なり、採摘知深處願渚の山溪深處に羽が自ら新芽を採摘する、煙霞羨獨行春風煙霞の中を、自由に獨行す、羨まざるを得んや、幽期山寺遠再會の時を約するを幽期と云ふ、然れども今山寺卽ち妙喜寺の三癸亭へ歸り玉はば、何れの時に會ふやは定めがたし、山寺は遠ければなり、野飯石泉淸羽が道中、山間の旅舍にて野飯を喫す、石泉の淸きを以て炊ぎたるもの肉食者流の解する所にあらず、陸羽人と期するときは、虎狼を阻すと雖も避けざるなり、扁舟にして山寺に往く、唯紗巾、藤鞋、短褐噴鼻のみ、林木を擊ち、流水を弄し、或は曠野の中を行き、古詩を誦し、棲回月黑きに至つて慟哭して返る、當時以て接輿に比す、『才子傳』寂寂然燈夜是れは妙喜寺へ返りて後、然は「モヤス」なり、然燈佛と稱する佛があるがそれには關係せず、相思聲一聲相思ふ者は皇甫曾なり、思はる

る者は陸羽なり、妙喜寺の夜課靜坐の狀を思ふなり、靜夜に聲を聞く、其の幽趣は到底俗人の解する所にあらず、唯耳根のみ淸淨なるにあらず、六根悉く淸淨となるなり、

贈喬尊師　張鴻

長忌時人識　有家雲澗深　性唯耽嗜酒　貧不破除琴
靜鼓三通齒　頻湯一味參　知師最知我　相引坐樫陰

長く忌む時人の識らんことを、家あり雲澗深し、性は唯酒を耽嗜す、貧なるも琴を破除せず、靜に三通の齒を鼓し、頻に一味の參を湯にす、知んぬ師の最も我を知ることを、相引いて樫陰に坐せしむ、

【句釋】　喬尊師喬は姓、尊師は道士の敬稱語、道敎と稱する敎は、佛敎より出でて別に色を施せしもの、六朝時代は佛道混合せり、黃庭經を根本經典となし、以て天の星に事ふるものなり、長忌時人識俗人に多く識らるるは却て我が道の貴きを滅却するもの、故に時人の識を忌む、有家雲澗深雲の深き處は俗人尋ぬる能はず、性唯耽嗜酒天に酒星あり、道士は天を祭る者、豈酒を耽嗜せざるを得ん、貧不破除琴琴は身を修め性を理し、其の天眞に反るなり、豈琴を破除す

るを待ん、靜鼓三通齒「酉陽雜俎」に學道は須らく天鼓を鳴し以て衆神を召すべし、左齒相叩ㇾを天鐘と爲し、右齒相叩くを天磬と爲し、中央の上下相叩くを天鼓と爲す、是れ殆んど佛教の「彈指」と云ふものと同じ、天鼓や天磬は共に佛教より出でし語なり、頻湯一味參人參上品之を食すれば長年と、長年なるのみにあらず、修行者に益の無き、其の性を增大にするものなり、知師最知我喬尊師は最も能く我を知れり、我を知るは我が俗人にあらざればなり、相引坐槿陰我に坐を槿柳の陰に賜ふなり、槿は柳の屬、小楊なりと注したる本あるが、年を經れば長大と爲る質なり、

客中　于武陵

楚人歌竹枝　游子淚沾衣　異國久爲ㇾ客　寒宵頻夢ㇾ歸
一封書未ㇾ返　千樹葉皆飛　南過二洞庭水一　更應二消息稀一

楚人竹枝を歌ふ、游子淚衣を沾す、異國久しく客と爲る、寒宵頻りに歸るを夢む、一封書未だ返らず、千樹葉皆飛ぶ、南洞庭の水を過ぎば、更に消息稀なるべし、

【略傳】于武陵名は鄴、字を以て行はる、杜曲の人、大中の時、嘗て進士に擧らる、意に稱はず、書と琴とを攜て商洛巴蜀の間に往來す、或は卜中に隱れて、獨醒の意を存せり、地を避け嘿嘿として、語榮貴に及ばず、嵩陽の別墅に歸老せり、

【句釋】客中旅寓中の作、楚人歌竹枝俗に流行歌、其の土地の風俗に就てのハヤリ歌を竹枝と云ふ、楚國に於て之を聞く、游子淚沾衣竹枝を歌ふ聲惻惻、他鄉の游子眞に淚を流すなり、異國久爲客久の中に多年を意味す、寒宵頻夢歸鄉を思うて止まず、其の歸鄉夢に入る頻りなり、一封書未返我より通信す、而かも未だ返信なし、千樹葉皆飛返信未だ來らざるに、樹樹葉皆飛散し去る、南過洞庭水今楚を去つて、巴蜀の間に游ばんとす、乃ち南の方洞庭湖を渡る、更應消息稀愈よ遠方となる、消息益す遠くなる、

長安春日　曹松

浩浩看ㇾ華晨　六街揚二遠塵一　塵中一丈日　誰是晏眠人
御柳垂著ㇾ水　野鶯啼破ㇾ春　徒云多失ㇾ意　猶自惜ㇾ離ㇾ秦

浩浩たり華を看る晨、六街遠塵を揚ぐ、塵中一丈の日、誰か是れ晏眠の人、

御柳垂れて水に著き、野鶯啼いて春を破る、徒に云ふ多く意を失すと、猶ほ自ら秦を離るることを惜む、

【句釋】●●長安は唐の都、春日の風景を咏出す、●●浩浩は廣大なる形容詞、●●看花晨看花の晨に、看花の客なし、黃巢の兵亂に遭うて、都城も荒涼たるなり、六街●とは車を六輛雙べて通過に支障なき路を云ふ、長安の大道即ち是れなり、揚遠塵兵馬の塵の飛揚するなり、塵中●●一丈日一丈の日とは日の一丈程高きを云ふ、太平の時は一丈の日なるも、人皆晏眠するが、今日は決して此の如き晏眠を許さず、誰是晏眠人晏は「オソオキ」なり、早の反對、此の兵塵中に恐くは晏眠する者は一人もあらざるべし、御柳垂著水宮溝の柳は、其の枝垂垂として水に著く、野鶯啼破春長安の野外には啼鶯が唯春を破るのみ、春も已に暮れんとする、徒云は「ムダ」に云ふ、云ふも功無きなり、多失意長安に居りしとて、別に得意なるにあらず、得意にあらざるも、猶自惜離秦人情の自然、ドウも秦即ち長安を離るるは如何にも惜しき念が生ず、惜念の生ずるは畢竟久住したるが故なり、已前に共十首、

題破山寺後禪院

常建

清晨入古寺　初日照高林　曲徑通幽處　禪房花木深
山光悅鳥性　潭影空人心　萬籟此俱寂　唯聞鐘磬音

清晨古寺に入れば、初日高林を照す、曲徑幽處に通じ、禪房花木深し、山光鳥性を悅ばしめ、潭影人心を空しうす、萬籟此に俱に寂なり、唯聞く鐘磬の音、

【句釋】●●●●破山寺後禪院破山寺後にある禪院、破山寺の支院ならん、今日の江蘇省蘇州府常熟縣の地に在り、古注に靳州黃梅に破頭山あり、五祖六祖に傳衣の處と、破山寺と全く關係なき注除くべし、清晨入古寺天氣朗晴の晨、禪院に入る、●●●●初日照高林日上りて先づ大山を照すと云ふ佛語あり、此の語に依つて此の句を作す、曲徑通幽處徑は無きが如くにして而かも有るを云ふ、●●●●禪房花木深自然の境界、人の造作にあらざるを云ふ、山光悅鳥性鳥の性は鳥の性として、萬劫變せず、是も亦自愛を悅ぶを云ふ、潭影空人心潭水の清澄なるは、人心をして濁念を消せしむるを云ふ、萬籟此俱寂風の爲め種種の物が音を發するを萬籟と云ふ、唯今其の音無し、寂は「ジヤク」と訓むべし、「セキ」と訓むべからず、唯聞鐘磬音禪房花木深き處より出る鐘磬の音を聞く

のみにて、他に一微塵の音も無し、

暮過山村　　賈島

數里聞寒水　山家少四鄰　怪禽啼曠野　落日恐行人
初月未終夕　邊烽不過秦　蕭條桑柘外　煙火漸相親

數里寒水を聞く、山家四鄰少なし、怪禽曠野に啼き、落日行人を恐れしむ、初月未だ夕を終へず、邊烽秦を過ぎず、蕭條たる桑柘の外、煙火漸く相親し、

【句釋】暮過山村夕暮に山村を通過して其の寂寞の狀を咏す、數里聞寒水支那の一里は日本の六丁、卽ち日本の一里は、支那の六里なり、何里なるやを知らず、行過する地、唯寒水の音を聞く、山家少四鄰甲地に一戶、乙地に一軒なり、怪禽啼曠野目に慣れざる鳥が、曠野卽ち人の無き野に啼く、落日恐行人日は西山に入らんとして行人の膽を恐れしむ、初月未終夕弓張月は早く出でて、早く沒す、十四夜十五夜の如く、一夜中を照すとは殊なる、邊烽不過秦秦卽ち都城を過ぎ去つて後は、烽火も見る能はず、烽火を見れば人の所在の知れるなり、烽火を見ず、何

ぞ人家あらん、蕭條桑柘外桑柘は人の栽培する植物、此の桑柘を認むるからは稍や人意を強うする、蕭條とさびしき中、自ら強味あり、煙火漸相親夜中に人火を認む、此の間の客味言語の外に在り、

山中道士

頭髮梳千下　休糧帶瘦容　養雛成大鶴　種子作高松
白石通宵煮　寒泉盡日舂　不曾離隱處　那得世人逢

頭髮梳ること千下、糧を休めて瘦容を帶ぶ、雛を養うて大鶴となし、子を種ゑて高松となす、白石通宵煮、寒泉盡日舂つく、曾て隱處を離れず、那ぞ世人に逢ふことを得ん、

【句釋】山中道士古注に『道經』に云ふ人大道を行ふものを道士と號す、身心理に順ひ、道に從ふことを事と爲す故に道士と稱す、仙道と稱する者も此の道士の事なり、藥を賣り以て活を爲す、陽勢を增大にする藥を賣る如きは沙汰の限りなり、頭髮梳千下道士の祖の淸虛眞人なる者頭を梳り髮を理むること過多を得んと欲すと、千下は梳ること多きを云ふ、佛敎に僧と尼

とある如く、道士にも、男と女とあり、玉姜や靈香や麻姑の如き皆女道士なり、髮を梳るは男女共同じ、休粮帶瘦容人間煙火の食を爲さず、果を喫し、霞を餐し、沆瀣を飲み、身容の瘦んことを願ふ、養雛成大鶴周の靈王の太子晉好んで笙を吹く、鳳凰鳴を作す、道士浮丘公、接して以て嵩山に上る、後、緱山に見る、白鶴に乘り、手を擧げ時人に謝して去る、鶴の道士と關係深きこと知る可し、種子作高松松を生長させるは、其の長生の道と關係すればなり、鶴骨松貌は道士の本領なり、白石通宵裘道士の經典たる『眞誥』に谷を斷ち山に入つて、當に白石を煮るべし、昔し白石子、石を以て粮と爲す、寒泉盡日春一種の水車ありて、白石を細末にする爲め舂かすものならん、日本では實驗する能はず、不曾離隱處、那得世人逢己が居を清淨とし世人の居は塵濁とす、故に己が隱處を守りて、曾て世人と伍せず、得の字を欲に作らば猶ほ佳ならんと思ふ、

贈山中日南僧

張籍

獨向雙峯老　松門閉兩涯　翻經上蕉葉　掛衲落藤花
甃石新開井　穿林自種茶　時逢海南客　蠻語問誰家

獨雙峯に向つて老ゆ、松門兩涯を閉づ、經を翻して蕉葉を上せ、衲を挂けて藤花を落す、石を甃んで新に井を開き、林を穿つて自に茶を種う、時に海南の客に逢ふ、蠻語誰が家ぞと問ふ、

【句釋】山中●に修行して居る、日南僧に贈るなり、日南は舊注に『漢書』を引いて唐の驩州とす、今謂く唐の嶺南道愛州、今日の安南國交州府の地なり、此の安南の僧が、獨在雙峯●老雙峯は寺名、五祖山中に在る、此の五祖山の雙峯寺に挂錫したる僧なり、松門閉兩涯松が道の兩涯にありて以て門の如くなるを云ふ、翻經上蕉葉芭蕉の葉は字を書くによし、懷素の如きは蕉葉にて字を稽古せしものなり、此の師も亦、梵經を翻譯して、蕉葉に書するなり、挂衲落藤花衲衣を藤樹に挂くれば、花自ら落つ、共に山中に住する久しきを言ふ、甃石新開井、穿林日種茶甃は音「シウ」訓「イシタタミ」又「ヲサムル」なり、井を修めるなり、穿は林中を鋤くことと知るべし、時逢海南客、蠻語問誰家此の句を解するに二説あり、一は曰く張籍が山中へ行きて、彼の日南國の客僧に逢ひたれば、「エビス」の田舍音にて、「ワドノ」は何なる家種の人ぞ、何と云ふ人ぞやと尋ねしぞ、一は曰く此の地は交州郡に屬し、言語も都とは大に異なる、時に土人が來りて、

張籍を見て、何者なりやと訝りて、此の家に入る者は誰なりやと問ふなり、余は此の後説を取る、誰家の家は人と同意味なり、

田家　　章孝標

田家無二五行一　水旱卜二蛙聲一　牛犢乘レ春放　兒孫候レ暖畊
池塘煙未レ歇　桑柘雨初晴　歲晩香醪熟　村村自送迎

田家五行無し、水旱蛙聲を卜し、牛犢春に乘じて放ち、兒孫暖を候つて畊す、池塘煙未だ歇まず、桑柘雨初めて晴る、歲晩香醪熟す、村村自ら送迎す、

【句釋】●●田家は田舍の春日を詠ずるものなり、●●●無五行水火木金土を五行とす、田家は此の卜法を問はず、水旱卜蛙聲今年は水が出る、今年は旱なりと悉く蛙聲にて知る、多年熟練もあり、實驗する所なり、●●●牛犢乘春放牛や犢は野に放ちて、自然に牧養する、●●●兒孫候暖畊兒や孫は春暖を待つて畊作する、自然を頼む、五行など頼まざるなり、●●●池塘煙未歇、桑柘雨初晴桑は音「シヤ」訓「ツミツグ」なり櫨と同じ、五月雨も漸く晴る、●●●歲晩香醪熟十二月には稻は庫に藏む、香醪卽ち良酒は熟す、●●●村村自送迎人の集まる所、酒無かるべからず、食なかるべからず、食あり、酒あり、送迎忙はしき所以なり、

秦原早望

一忝二鄉書薦一　長安未レ得レ回　年光逐二渭水一　春色上二秦臺一
燕掠二平蕪一去　人衝二細雨一來　東風生二故里一　又過幾華開一

一たび鄉書の薦を忝うせられて、長安未だ回るを得ず、年光渭水を逐ひ、春色秦臺に上る、燕は平蕪を掠めて去り、人は細雨を衝て來る、東風故里に生ずるならん、又幾華の開くを過ぎん、

【句釋】●●秦原は長安の郊外を云ふ、早望は早晨に望むなり、●●●●一忝鄉書薦章は浙江錢唐の人、鄉貢生に推薦せられて、秦城に來れども未だ及第せず、●●●長安未得回長安を未だ去るを得ざるの意味なり、空しく滯留するを媿づるなり、●●●●年光逐渭水長安城中を流るる水を渭水と云ふ、光陰は流水と同じく逝て回らざるを云ふ、●●●●春色上秦臺春色は秦臺に上るも、我は榮冠を得ざるを嗟く意を含む、●●●●燕掠平蕪去平蕪は草の茂るを形容す、飛燕が迅速に飛び去るを云ふ、●●人衝細雨

來何人なるを知らず、細雨を衝いて來る、東風生故里東風は天下の公道、我が故里の蘇州も定んで吹かん、又過幾華開花の開く一番より二十四番に至る、其の番番の花開いて幾番に至るやと想像するなり、已前其に六首、輕重斤量大抵同じきものなり、

前虛後實

周弼曰く、前聯は情にして虛、後聯は景にして實、實なれば氣勢雄健に、虛なれば態度諧婉なり、前を輕うし、後を重うす、劑量適均にして、窒塞輕俗の患無し、太中より以後は此の體多し、今に至りて唐詩を宗とする者は之を尙ぶ、然れども終に未だ前の兩體の渾厚なるに及ばず、故に其の法を以て三に居く、善なる者は拘せざるなり、

今謂く、是れ宋之問の陸渾山莊より、章孝標の秦原早望に至る二十四首の、三四五六の四句、悉く是れ虛なるに反し、三四は虛にて、五六は實なる體を云ふ、作者が必ず周弼云ふ如きの意を以て作りしにはあらず、周弼が其の作品に就て其の名を設けしこと、今更言ふの要なし、而して此の體の詩は太中卽ち宣宗時代特に多しと爲す、太中は詩家の所謂晩唐にて、詩運の傾むくに近き時なり、大勢の上より言へば、日將に西山に入らんとする如く、態度諧婉は或は之れ有らん、氣勢雄健は求むるも多からざるが正當の論なり、然りと雖も程度問題にて、一概には斷じがたし、周弼は認めて以て、實卽ち景を叙する語は、氣勢雄健にして、虛卽ち情を叙する語は、態度諧婉なりと爲すなり、姑らく其の言を恕して、仔細は評論下に於て之

を斷ず可し、

雲陽館與二韓少卿一宿別　　司空曙

故人江海別　幾度隔二山川一　乍見翻疑レ夢　相悲各問レ年
孤燈寒照レ雨　深竹暗浮レ煙　更有二明朝恨一　離盃惜二共傳一

【句釋】雲陽館は長安城中の一酒樓なり、韓少卿は一に韓外卿に作る、宿別は一宿して東西に分離する、故人江海別、幾度隔山川故人は韓を云ふ、友人なり、今日に至るまで、交游の久しき、江海に別れ山川を隔て、相見て晤笑するを希ひ、其の離別を惜みしと幾度なるを知らず、乍見翻疑夢此の雲陽館にて偶然に見る、故に乍と云ふ、眞なるに夢かと疑ふゆゑ翻と云ふ、相悲各問年悲の中に喜あり、此の間の心事言ふべからず、第一互に年を問ふ、孤燈寒照雨館裏の孤燈、以て館外の雨を照す、深竹暗浮煙館庭の深竹、煙の爲めに暗し、更有明朝恨更は俗語の「其ノ上ニ」に當る、偶ま相遇ふも明朝は又東西分離するの恨みあり、離盃惜共傳一盃一盃毎に別れの時刻は逼るなり、二人共に之を傳ふるを惜しむ、

酬二暢當一　　耿　湋

同游二漆沮一後　已是十年餘　幾度曾相夢　何時定得レ書
月高城影盡　霜重柳條疎　且對二樽前酒一　千般想未レ如

【句釋】暢當は河東の人、暢の詩に和して酬ゆ、同游漆沮後『詩經』に漆沮之從と出づ、嚴粲曰く二水の名、禹貢に東會二漆沮一と、孔氏云ふ涇水の東に在り、一に洛と名く、乃ち今日の陝西省汾州の治、西漢、縣右扶風郡、東漢、縣司隷右扶風郡、是れ漆水なり、西漢、縣武都郡、東漢、縣涼州武都郡、今日の陝西省漢中府略陽縣東一百十里是れ沮水なり、此の漆水沮水の間に同游してより、已是十年餘屈指すれば十年の一昔と爲る、幾度曾相夢之を想うて息まず、幾度同游してより、已是十年餘屈指すれば十年の一昔と爲る、幾度曾相夢之を想うて息まず、幾度

も夢を見る所以、何時定得書夢は幾度見るも眞にあらず、其の眞なる信書は何れの時か得るや、月高城影壺城影の有るは月の低ければなり、月高ければ城影無し、半夜を云ふ、霜重柳條疎柳條の密なるは春夏なり、其の疎なるは秋冬なり、春夏より秋冬に至る、君を思はざる日無しとの意を含む、且對樽前酒酒は掃憂帚、又忘憂物の異名あり、之を飲んで君を思ふ情を忘れんと欲するも、千般想未如酒力を借るも要するに憂は增すのみにて、曾て君を思ふ千般の思は忘れず、嗚乎酒も意の如くならざるなり、

寄二友人一　張蠙

世道復何如　東西遠索居　長疑卽見面　翻致二久無書
甸麥深藏雉　淮苔淺露魚　相思不我會　明月幾盈虛

世道復何如、東西遠く索居す、長く疑ふ卽し面を見ると、翻つて久しく書無きことを致す、甸麥深うして雉を藏し、淮苔淺くして魚を露す、相思へども我と會せず、明月幾たびか盈虛す、

【略傳】張蠙字は象文、清河の人、乾寧二年進士と爲る、亂を避て蜀に入る、蜀王、時に金

堂令と爲す、王衍、徐后と大慈寺に游び、壁間の詩を見る、「墻頭の細雨は織草を垂れ、水面の回風は落花を聚む」愛誦すること久し、謂ふ誰が作ぞ、左右、蠙を以て答ふ、因て禮を給して詩を以て進めしむ、蠙二篇を上る、衍尤も待重す、將に召して制誥を掌らしめんとす、宋光嗣、其の輕傲なるを以て、駙馬宜しく之を疎んずべしと、止白金千兩を賜ふ、

【句釋】寄友人蜀に東川と西川とあり、張は西川に在り、友人は東川に在り、世道復何如乾寧は昭宗の年號、僖宗の光啓、文德、昭宗の大順、景福、乾寧の年間、黃巢の亂、朱全忠等の橫暴ありて、天下治まらず、世道復何如と嘆を發するなり、東西遠索居東川西川と地理遠し、索居卽ち寂寞として居す、長疑卽見面卽は「モシ」と訓す、卽しや面を見ることを得るやと長く疑ふに、何ぞ料らん、翻致久無書彼も得ず、此も得ず、甸麥深藏雉『夏書』に五百里は甸服とあり、『禮記』王制に千里の內を甸服と曰ふ、甸は治なり、田を治るの象なり、卽ち王田に麥を種ゑたるを云ふ、麥が生長繁茂して、其の中に雉子を藏くすを云ふ、淮苔淺露魚淮は淮水、揚州の北界を繞る、有名なる秦淮是れなり、淮水の頭苔の生じたる處、游魚が見える、水淺ければなり、相思不我會相思は片思の反對、兩兩思ふを云ふ成語なり、兩方にて思ふも相會する能はざるを云ふ、明月幾盆虛月は三五にして盈ち、三五にして缺く、此の明月の字を以て長年月會せざ

るを云ふ。

送喩坦之歸睦州　　李頻

歸心常共知　歸路不相隨　彼此無依倚　東西又別離
山雲含雨潤　江樹逆潮欹　莫戀漁樵興　人生各有爲

歸心常に共に知る、歸路相隨はず、彼此依り倚るなし、東西又別離す、山雲雨を含んで潤ひ、江樹潮に逆つて欹つ、漁樵の興を戀ふ莫れ、人生各の爲すことあり、

【句釋】喩坦之は李頻が同鄉、卽ち睦州の人、其の落第して歸るを送るなり、歸心常其知我が歸心の有るは君知る、君が歸心の有るは我知る、而かも我は在官の身、歸路不相隨喩は身心共に歸る、李は心歸るも、身歸る能はず、彼此無依倚彼は喩の歸る睦州、此は李の留まる長安、依は李、倚は喩、東西又別離睦州は東、長安は西、山雲含雨潤喩が睦州へ歸る途中の景、睦州は今の浙江省嚴州府建德縣に當る、雲も晴天の雲と雨を含む雲とは異なる、江樹逆潮欹樹も潮に順なるものは欹たず、逆なるが故に欹つ、樹の奇形此に在り、順なる凡樹何ぞ見るに耐へん、

是も途中の景、莫戀漁樵興折角歸國し玉ふも、漁父や樵夫の興を戀ふこと莫かれ、人生各有爲生計の異なる各の人生の分なり、君は道を修め經を治して生計と爲し玉へ、是れ天分の道なり、已前四首、前半と後半略作法同じきなり、

送李給事歸徐州覲省　　遜逖

列位登青瑣　還鄉服綵衣　共言晨省日　便是晝遊歸
春水經梁宋　晴山入海沂　莫愁東路遠　四牡正騑騑

列位を登青瑣に登る、鄉に還つて綵衣を服す、共に言ふ晨省の日、便ち是れ晝遊して歸る、春水梁宋を經、晴山海沂に入る、東路の遠きを愁ふる莫れ、四牡正に騑騑、

【句釋】李は姓、給事は官名、徐州は今日の江蘇省、覲省は二親の安否を問うて還る、列位登青瑣位に列すは給事の位に在る、朝廷に在りては宮禁の青瑣門に登る、還鄉服綵衣周の老萊子は父母を喜ばさん爲めに五色斑爛の衣を著け、小兒の風を爲して父母に事ふ、其の事を借り以て李に譬ふ、共言晨省日、便是晝遊歸李と孫とは共に常に言ふ、本是れ同鄉なれば親を省する

日には晝游の錦衣を着けて游ばんと約したるに、孫は歸る能はず、李は此の歸るを得、春水經梁宋唐の宋州は、本の梁郡なり、晴山入海沂海州の東海郡と沂州の琅邪郡なり、今日の湖北安徽の二省を經る途中の景、莫愁東路遠徐州は長安より東南に當る、然れども東が主なれば東路と用ひたるなり、四牡正騑騑四馬にて走れば亦何ぞ路の遠きを愁へん、騑騑は行不正也と注して其の疾を形容するなり、

送溧水唐明府　　韋應物

三爲百里宰　已過十餘年　祇嘆宦如舊　旋聞邑屢遷
魚鹽濱海利　桑柘傍湖田　到此安民俗　琴堂又晏然

三たび百里の宰と爲つて、已に十餘年を過ぐ、祇だ宦の舊の如きを嘆ず、旋つて邑の屢ば遷るを聞く、魚鹽海利に濱し、桑柘湖田に傍ふ、此に到つて民俗を安んぜば、琴堂又晏然たらん、

【句釋】溧水、漂水に作る本あり、漂水も栗水も共に地名、溧水は丹陽の溧陽縣に出で、漂水は『山海經』に隗山の南に漂水出づとあり、或說に漂水は建康に屬すと、未詳、今は丹陽を取る、

唐は姓、明府は一縣の令を云ふ、二千石なり、三爲百里宰宰の義たる主なり、一縣の主と爲る三度、已過十餘年大數を言ふ、一官十餘年移らざるは暗に其の不遇に同情す、祇歎宦如舊宦等の進級せざるを嘆ず、旋聞邑屢遷今年は溧水、去年は漂水と云ふ風に任地が遷るのみ、宦等は移らざるなり、魚鹽濱海利楊子江に沿ふ故に、縣民多くは魚鹽を賣買して以て生活する土地、桑柘傍湖田水には魚鹽の利あり、陸には桑柘の茂んなるあり、土地の富有なるを示す、到此安民俗此の土地に到りて良政良治を敷き、以て民俗を安んずるなり、琴堂又晏然『呂氏春秋』に宓子賤、單父を治む、琴を彈じ、身堂を下らずして治む、唐明府も亦此の如くならんのみ、晏は安と同じ、民治まれば、宰官は晏然たり、

送王錄事赴虢州　　岑參

早歲卽相知　嗟君最後時　青雲仍未達　黑髮欲成絲
小店關門樹　長河華嶽祠　弘農民吏待　莫遣馬行遲

早歲より卽ち相知る、嗟す君が最も時に後るることを、青雲仍未だ達せず、黑髮絲を成さんと欲す、小店關門の樹、長河華嶽の祠、弘農民吏待たん、

馬行をして遅からしむる莫れ、

【句釋】王は姓、錄事は官名、虢州は唐の河南道、今日の河南省陝州靈寶縣の南四十里、錄事の官は日本今日の奏任七等に當る、早歲卽相知李も岑も共に南陽の人、同鄉なるを以て少時より知友なり、嗟君最後時立身出世が他人に比較すれば、其の後れたるを云ふ、智識が時代に後れたりと云ふにあらず、青雲仍未達立身せんと欲する志、何ぞ奏任七等の小吏に留まらん、蓋し大志未だ達せざるなり、黑髮欲成絲青雲達せざる中に已に白髮ならんとす、小店關門樹函谷關門外の樹には小店あり以て憩ふ可し、長河華嶽祠長河は黃河なり、華嶽祠は華山の嶽帝を祀る祠なり、以て前途を祈る可し、弘農民吏待弘農縣は虢州に在り、人民と官吏と皆君が到るを待つ、莫遣馬行遲待つ者あり、君も早速進み玉へと云ふ、其の行を祝するなり、

別鄭蟻　　郎士元

暮蟬不可聽　落葉豈堪聞　共是悲秋客　那知此路分
荒城背流水　遠雁入寒雲　陶令門前菊　餘華可贈君
暮蟬聽くべからず、落葉豈聞くに堪へんや、共に是れ悲秋の客、那ぞ知らん此の路より分れんとは、荒城流水に背き、遠雁寒雲に入る、陶令門前の菊、餘華君に贈るべし、

【略傳】郎士元字は君胄、中山の人、天寶十五年の進士、寶應の初、京畿の縣官に選ばれて、詔して政事中書に試し、渭南の尉と爲る、左拾遺を歷、出て鄧州の刺史と爲る、員外郎錢起と名を齊うす、時に朝廷、丞相より以下、出で牧し使を奉するとき、兩君の詩文、祖餞する無ければ、人以て愧と爲す、其の珍重せらるること此の如し、

【句釋】別は共に別る、鄭蟻郎士元と同時に移されて、長安より相伴うて九江郡に至る、鄭蟻は此れより蜀國に赴く、士元は此れより鄧州に赴く、暮蟬不可聽、落葉豈堪聞有情の蟬も非情の落葉も其の音の凄切は同樣なり、何ぞ聽聞を喜まんや、共是悲秋客、那知此路分字を知り、情を解する人は共に悲秋の客なり、今鄭と郎と二人を共と云ふ、此の九江郡の路に於て一は蜀、一は鄧州と分るることとなる、荒城背流水江水を背にして九江郡城あり、而かも亂後、荒涼たる狀を爲す、遠雁入寒雲雁は遠く朔北より飛來するが、而かも此に留まらず遙かに寒色を爲す雲中に入る、陶令門前菊晉の陶淵明の故里は栗里と云ふ、此の九江郡中に在り、彭澤の令と爲

りしより、世之を陶令と云ふ、其の陶令門前の菊を採つて、餘花可贈君餘花は殘花と同じ、柳を贈らずして花を贈る、味此に存す、

送韓司直　　皇甫冉

遊吳還適越　來往任風波　復送王孫去　其如芳草何

山明殘雪在　潮滿夕陽多　季子留遺廟　停舟試一過

吳に游んで還越に適かん、來往風波に任す、復王孫を送り去る、其れ芳草を如何、山明かにして殘雪在り、潮滿ちて夕陽多し、季子遺廟を留む、舟を停めて試に一たび過ぎれ、

【句釋】韓は姓、司直は官名、裁判官なり、大理寺卿品從三の下に屬し、從六品上とす、素隱の注に、「韓氏は舊は大理司直の官たりしが、官を嫌ひて朝には仕へずして、乙地甲地へ旅游して名山秀水を見物して、一生涯の樂とするぞ」と、何等の依據も無き妄說なり、詩に依て此の案を下すものならんが、此の如き臆斷は信ずべからず、游吳還適越吳越の山水は論なし、其の懷古の遺物も亦多きなり、來往任風波吳越は今日の浙江江蘇の間ゆゑ、旅行は舟を用ふるもの

多し、風波に任す所以、復送王孫去王孫は草の名、一名不歸草、其如芳草何不歸と云ふ名がある位であるから之を奈何とする、此の事は前にも辨じて置きたり、王孫は韓を云ふ、山明殘雪在山の上に吳字を加へて見よ、吳山は明かに殘雪猶ほ在り、潮滿夕陽多杭州錢唐江の海潮は余も曾て見たり、實に天下に甲たり、潮の上に越字を加へて見よ、越の江潮は正に夕陽多きなり、季子留遺廟季子は吳の季札なり、天下の賢人なり、古の吳王餘昧の子、兄弟四人中第一の賢人なり、吳の人民季札を立てんとす、季札逃れ去つて、國を以て王僚に讓る、其の廟は江蘇の蘇州に在り、今に至り吏民祀事怠らず、停舟試一過廟の在る所、楊子江口に臨む、此の如き賢人豈弔せざるを得んや、

途中送權曙

淮海風濤起　江關幽思長　同悲鵲遶樹　獨作雁隨陽

山晚雲和雪　天寒月照霜　由來濯纓處　漁父愛滄浪

淮海風濤起る、江關幽思長し、同じく悲しむ鵲の樹を遶るを、獨作す雁の陽に隨ふを、山晚れて雲雪に和し、天寒くして月霜を照らす、由來纓を濯

ふ處、漁父滄浪を愛す、

【句釋】途中逐權曙皇甫曾、安祿山の亂を避けて揚州に客居したれば、揚州までに亂入したるほどに、揚州を去つて、權曙と同道して、淮南道を行き盡くし、江陵に至り、其の地より、權曙は漢陽へ行く、之を送るなり、一本に權曙二兄とあり、權と曙と二姓なるか、姓は權、名は曙なるや共に未詳、淮海風濤起單に淮州は今日の河南汝寧府正陽縣東南、西淮は河南南陽府唐縣東南、今謂ふ淮海は江蘇と安徽の間なり、風濤は海の風濤と、祿山の兵亂との兩意を含む、江關幽思長江淮の關門を通過する時は幽思頗る長からん、同悲鵠遠樹權と皇と二人同じく悲しむなり、魏の曹操の詩に月明星稀、烏鵲南飛、遠樹三匝、無二枝可一レ依、とあるに依つて其の依るべき人なきを悲しむ、獨作雁隨陽一人は鴻雁の陽に隨ふが如く、漢陽の方へ知る者ありて往かるるを羨むなり、『尚書』に云ふ鴻雁の屬は陽に隨ふと、山晩雲和雪漢陽道中の景色、山正に暮色ならんとして雲色も雪色も見分け難し、天寒月照霜夜に入りて天は寒し、月は皓皓として霜を照らす、由來濯纓處『楚詞』漁父の歌に滄浪の水清ば、我が纓を濯ふ可し、漢陽郡の沔口は古以て滄浪水と爲す、屈原が漁父に遇うて歌を作る處と是れなり、漁父愛滄浪愛する所以は濯纓清ければなり、

酬普選二上人　嚴維

本意宿東林　因聽子賤琴　遙知大小朗　已斷去來心
夜靜溪聲近　庭寒月色深　寧知塵外意　定後更成吟

本意ふ東林に宿せんことを、因つて子賤が琴を聽く、遙に知る大小の朗、已に斷つ去來の心、夜靜にして溪聲近く、庭寒うして月色深し、寧んぞ知らんや塵外の意、定後更に吟を成さんとは、

【句釋】酬普選二上人酬は詩に對する酬なり、普と選との二上人は廬山東林寺の上首ならんか、本意宿東林本は「モトカラ」意は「オモフ」なり、東林寺に宿泊を平生の志願とせり、晉の惠遠法師の開基にして、廬山三百六十寺の中の第一の勝境なり、因聽子賤琴『呂氏春秋』に宓子賤、鳴琴を彈じて、單父治まる、巫馬期、星を戴て出入して單父亦治まる、巫馬期、其の故を問ふ、宓が曰く、我の謂は人に任す、子の謂は力に任す、子賤は宰たりし時、人に一任して、自らは只琴を彈じてのみ居る、然して單父は自然に治る、嚴維は九江郡の太守崔渙が部下に屬し、常に崔渙は琴を彈じて悠悠たるも、下民能く治る、自身は東林に宿泊して上人の玄話を聞かんと

欲するが故に、此の子賤の琴を聽くなり、遙知大小朗晉の惠朗禪師を大朗と稱し、振朗禪師を小朗と稱す、普選二上人を此の二師に比するなり、遙知とは未だ身は東林に到らざるなり、已斷去來心過去の心も斷絶し、未來の心も斷絶し、始めて大悟の境界に達す、地水火風の四大合して緣相あるに似たるを假に名けて心と爲す、假りに名けたるものなれば、實體は本より無し、實體の無きものに執著するが凡夫の常とす、聖者は此の執著を離る、其の執著を離るる所を今の句は云ふなり、現在心は此の中に入れざるなり、若し現在心を入るれば、上の大小と對せず「大小ノ朗」二物「去來ノ心」二物の對なり、現在を入るれば三物となる、古人豈此の作法あらんや、斷ずる者は二上人なれば益す以て知り易し、夜靜溪聲近、庭寒月色深二上人の東林に在して耳に聞き、目に見るもの清淨ならざるはなし、幽趣ならざるはなし、寧知塵外意寧は「願ふ辭」なり、肯定と否定とを並べて一方へ歸する辭なり、上人は佛理を研磨するのみの人と思ひしに那ぞ知らんやコレコレの事を爲すとの意なり、人間日常の活計に關せざるものを塵外の念と云ふ、定後更成吟禪定三昧にして詩賦の如きは頓著せざる人と思ひしは寧ろ誤謬にして、所謂課餘の業亦見るべしとなり、

送鄭宥入蜀

寧親西陟險　君去異王陽　在世誰非客　還家卽是鄉
劍門千轉盡　巴水一支長　請語愁猿道　無煩促淚行

【句釋】鄭宥は未詳、入蜀鄭は蜀人にて今其の歸省を送る、寧親西陟險『詩經』に歸寧父母一の語あり、親を安心させることを寧と云ふ、長安より地理上蜀は西方に當る、山又山、險路ならざるは無し、君去異王陽前漢の王陽は益州蜀の刺史と爲り、車を驅つて九折阪に至り、阪の險阻なるを見て車を返し、益州へは行かず、父母猶ほ在せり、我が身體に誤のあるときは父母を養ふに人なし、返りて以て身の無事を圖る、君は是れと反對なり、在世誰非客人生は誰か客ならざらん、乍ち生れ、乍ち死し、光陰は百代の過客、天地は萬物の逆旅、去も住も、本來は客にあらざるはなし、還家卽是鄉險を陟りて返るも畢竟は故郷なればなり、客と爲つて行く王陽とは異なるなり、生きて鄉あり、死して鄉あり、永久に落著する所を鄉と云ふ、劍門千轉盡劍

門山の下に劍門關あり、千轉とは山路を遶り曲りて、其の極處まで行く、巴水一支長巴江の水、一支卽ち一「スヂ」流る、山の高と、水の卑と對すること常法例の如し、請語愁猿道、無煩促淚行此の二句古來の注に曰く、國に歸り著き、父母の前にて、巴蜀の道の險難なるを語つて、いたいたしく父母を泣かしむることなかれと、余が意は然らず、父母に語るにあらず、愁猿に語るなり、請は嚴維が鄭宥に請ふなり、劍門山中には愁猿殊に多し、蓋し君は其の愁猿に語つて道へ、尋常に猿の聲を聞く者は、大抵此の地にて斷腸に勝へざるなり、然るに我は父母を歸寧するにあれば、君猿も愁聲を出して我に淚を流さしむる無かれとなり、余が歸寧して此を通過する情を知つて、決して叫び玉ふなとなり、

杭州郡齋南亭　　姚合

符印懸腰下　東山不得歸　獨行南北近　漸老往還稀
迸笋侵窗長　驚蟬出樹飛　田田池上葉　長是使君衣

符印腰下に懸く、東山歸るを得ず、獨行けば南北近し、漸く老いて往還稀なり、迸笋窗を侵して長じ、驚蟬樹を出でて飛ぶ、田田池上の葉、長く是れ使君の衣、

【句釋】杭州は浙江省第一の都會、郡齋南亭實應中姚合此の杭州の刺史たり、郡中に小齋を構へて、以て燕息所と爲したるなり、符印懸腰下符は俗に「ワリフ」と云ふ、一箇の物を二箇に割れば、二箇は卽ち一箇、一箇は卽ち二箇、漢の文帝、初めて郡守に與ふるに銅虎符、竹使符を爲り、符を同じうして以て兵を發す、竹符は竹簡五枚を以て鐫刻して篆書す、今の句、唯在官の身なりと云ふ、東山不得歸昔し謝安石、妓を攜へて東山に游ぶ、其の悠悠たる狀態は我は在官の身なれば學ぶ能はずと云ふ、獨行南北近郡齋と南亭と南北と方角は異なるも甚だ近接する、漸老往還稀南北を往還頻りなりしが、今や老て疎慵となり、南北往還稀なり、迸笋侵窗長迸は「ホトバシル」勢氣强く出るを云ふ、笋は竹の子、侵は侵略、他の許さざるに來るを侵と云ふ、長は生長なり、短に對する長にあらず、生長の長は仄聲にて、短長の長は平聲なり、驚蟬出樹飛何の爲めに驚きしや蟬は突然樹を出で飛びたるなり、共に是れ南亭の實景、田田池上葉古訓に「田田タル池上ノ葉」とあり、「タル」は無用なり、俗語の「田ノ池」と見れば可なり、古注に「田田ハ葉ノ圓カナル貌」と、圓なる葉が衣と爲るは理に於て解すべからず、南亭より見る所、田田は蓮を作るなり、長是使君衣『楚詞』に芰荷を製して以て衣と爲すとあり、隱者の服裝にて、

官吏の服裝にはあらず、官を辭したる後、長く此の地に留まらんとの意、使君は知事のことなり、

日東病僧　　項斯

雲水絕歸路　來時風送船　不言身後事　猶坐病中禪
深壁藏燈影　空窗出艾煙　已無鄉土夢　起塔寺門前

雲水歸路を絕つ、來時風船を送る、身後の事を言はず、猶ほ病中の禪に坐す、深壁燈影を藏し、空窗艾煙を出す、已に鄉土の夢なく、塔を起つ寺門の前、

【句釋】日東は日本なり、病僧日本の留學僧が唐に在つて臥病せる者を見て作る、名も無き羊僧にはあらざるべきも、今は名を知る由なし、雲水絕歸路禪宗にて行脚僧を雲水と稱す、今の雲水は千雲萬水、路の遠きを意味す、此の時代の入唐は今日の洋行の如し、船を以て論ずれば洋行以上の辛苦とす、絕歸路日本と支那との海路を雲水が斷絕する、來時風送船順風の時を待つて發船する、逆風は航海者の尤も忌む所なり、風の船を送る、其の留學せんとする時を云ふ、

不言身後事、猶坐病中禪若し此の漢土で死んだら、ドウシロ、カウシロなどの事は言はず、猶ほ平生修する所の坐禪する、蓋し肉身なり、病は苦ならずと觀するにはあらず、病は苦なるも本幻より生ず、幻より生ずる所のもの、本來は空なりと觀じて病苦の爲め心を動せざるなり、深壁藏燈影、空窗出艾煙夜間病床の景色なり、燈影は深壁の外に露はれず、艾煙即ち灸を種うる煙のみ空窗を出づ、治療する狀、已無鄉土夢鄉土即ち日本へ還らんと欲する念は起さざる也、夢字念の意味で見よ、平等を說く者、何ぞ內外の國を區別せん、起塔寺門前入寂の地は此の處であるに依て、我が墓を寺門即ち病を養うて居る寺の門前に起てしなり、古注に阿育王の事を引く、此の詩意にはあらず、法師は墓と稱せず、皆塔と稱するなり、或人云ふ「自ら發起して塔を建てられたり」是れも誤謬なり、

送友人下第歸覲　　劉得仁

君此下行日　高堂應夢歸　莫將和氏淚　滴著老萊衣
嶽雨連河細　田禽出麥飛　到家調膳後　吟好送斜暉

君は此に行日を下す、高堂應に歸るを夢むべし、和氏が淚を將て、老萊が

衣に滴著すること莫れ、嶽雨河に連つて細く、田禽麥を出でて飛ぶ、家に到つて調膳の後、吟じて好し斜暉を送るに、

【句釋】友人下第歸覲進士試驗に落第したる友人が故郷に還り、父母を省するを送る、覲音は「キン」訓は「ミル」省と同じ、君此ト行日歸省出發の日を此卽ち長安に在つて定む、高堂は北堂、母を云ふ、應夢歸慈母豈兒を忘れんや、兒や歸り來ると夢みるならん、莫將和氏淚、滴著老萊衣此の十字は一讀法なり、卞和は昔し玉を獻じて厲王と武王は石なり玉にあらずとし左右の兩足を刖る、王を欺くと爲してなり、和氏尙死せず璞を抱きて荊山の下に泣く、其王人をして之を磨せしむるに果して玉なり、依て和氏玉と名く、『烈女傳』に老萊子親に奉じて身に五色斑爛の衣を著す、要するに此の詩意は才を抱くも不幸にして落第したるなり、其の落第したるを悲しんで、父母の前で泣くこと莫れと忠言するなり、落第者が己れは和氏の玉の如きものなれど試驗官の奴等が己れを見る眼が無きに依て落第したるなりと云ふにはあらず、嶽雨連河細嶽は五嶽以外多く用ひざる字ゆゑ、泰山か或は華山の下を過ぎて歸るならん、嶽より落つる雨は細流と爲つて江河に連なる、田禽出麥飛田中に居りし鳥が人の足音に驚き麥隴を出でて飛ぶなり、

到家調膳後、家に歸りて後は母氏の爲め奉養する、吟好送斜陣奉養の餘課我が好める吟詠を爲し、以て日月を消せば可なりと云ふ、

南游有感　于武陵

杜陵無厚業　不得駐車輪　重到曾游處　多非舊主人
東風千里樹　西日一洲蘋　又渡湘江去　湘江水復春

杜陵厚業無し、車輪を駐むることを得ず、重ねて曾游の處に到れば、多くは舊主人にあらず、東風千里の樹、西日一洲の蘋、又湘江を渡つて去れば、湘江水復春なり、

【略傳】于武陵、名は鄴、字を以て行はる、杜曲の人、太中の進士、意に稱はざるあり、琴書を攜へて商洛巴蜀の間に往來せり、湘が古の騷人の舊國なるを以てト居せんとして果さず、嵩陽の別墅に歸老す、

【句釋】南游有感南地の風光を愛して屢ば游ぶ、此の瀟湘に於て賦す、杜陵無厚業杜陵は自身の鄉里卽ち長安なり、其の鄉里に居らずんば能はざる底の大事業は無し、不得駐車輪鄉里の乙地

甲地へ往て事業を爲さんと欲するも、此の處永住すべきと云ふ程のもの無し、重到曾游處再游重游字義同じ、兩に去つて曾游の地、卽ち此の瀟湘の地に到れば、多非舊主人倏忽に古今と爲る、新人故人に代る、東風千里樹瀟湘に於て見し卽景、其の時節を云ふ、西日一洲蘋同じく所見、其の日を云ふ、西日は落日が一洲の蘋末を照すなり、又渡湘江去暫時湘江に卜居して、又湘江を去つて、他土へ往かんとす、湘江水復春別れんと欲して躊躇の色あり、別るるに忍びざるなり、而かも去つて、遂に嵩陽の別墅へ歸隱する、

早春寄華下同志　裴說

正是花時節　思君寢復興　市沽終不醉　春夢亦無憑　嶽面懸晴雨　河心走濁氷　東門一條路　離恨正相仍

正に是れ花の時節、君を思うて寢ねて復興く、市沽終に醉はず、春夢も亦憑るなし、嶽面晴雨を懸け、河心濁氷を走らす、東門一條の路、離恨正に相仍る、

【略傳】裴說は天祐二年の進士、仕て桂嶺の假官宰に終ふ、詳傳は知るに由しなし、

【句釋】早春は正月、華下は洛下、都下と同じ、京師の同志を云ふ、正是花時節詩中時節を言ふもの、悉く古曆卽ち陰曆と知るべし、思君寢復興身は他鄉に在つて、京師の春は定んで好からんと思ふ、花を思へば必ず同志を思ふ、思うて息まざること夜も晝も無しとの意、市沽終不醉沽は買「カフ」と賣「ウル」と反對の義を帶ぶる字なり、反對の義を帶ぶる字は他にもあるが、『論語』に沽酒市脯とあり、市店に於て酒を沽ひ來りて飮むも、心に思ふ所あると、酒の味も薄きと二の原因ありて終に醉はざるなり、春夢亦無憑眞とも幻とも付かず同志の事を夢みたが是れも憑るべき力のものは無し、嶽面懸清雨高處卽ち仰いで華嶽を見れば、清雨を懸けて其の秀色佳なり、河心走濁氷低處卽ち黃河を見れば、濁氷を走らして其の奔流急なり、東門一條路京師の東門、卽ち長安より去つて他鄉へ往く人を送り出る門なり、其の門前一條の路は良とに憶ひ出で多き路なり、何故なれば、離恨正相仍曾て離別せし恨は、此の東門の路に思ひ仍る、

途中別孫璐　方干

道路本無限　又應何處逢　流年莫虛擲　華髮不相容
野渡波搖月　寒城雨翳鐘　此心隨去馬　迢遞過重峯

道路本限りなし、又何れの處にか逢ふべき、流年虛しく擲つ莫れ、華髮相容さず、野渡波月を搖かし、寒城雨鐘を翳す、此の心去馬に隨つて、迢遞重峯を過ぎん、

【句釋】途中江蘇浙江の間を往來の途中相遇うたるもの、孫璿は剡溪の人方干の門人なるも、家を成すに及ばずして去る、道路本無限、又應何處逢今日相遇ふも偶然なり、後日相遇ふも亦偶然なり、何れの路、何れの處と定めざるが人生の常なり、流年莫虛擲訓示の言なり、庸人は流年の惜しむべきを知らず、寸心千古を知らず、虛しく年光を擲ち去つて、顧みず、之を爲す莫かれと云ふ、華髮不相容は容認にて「ユルサズ」と訓す、白髮は用捨なく、日に月に頭上に來る、野渡波搖月、寒城雨翳鐘途中の景色、水邊の方は波が金の如く月影を搖かす、山邊の方は雨が翳くして鐘聲を響かさず、月があるのに雨が翳しとは理に於て信じ難きも南方支那を旅行する者は此の實況を知らん、此心隨去馬我が心は子が馬に隨がつて往かんと思慕の情を叙す、迢遞は遙遠「ハルカ」なり、過重峯千萬里の峯を過ぎんとまで慕ふなり、

送友及第歸渑東

南行無俗侶　秋雁與寒雲　野趣自多愜　名香人共聞
吳山中路斷　渑水半江分　此地登臨慣　攄情一送君

南行俗侶無し、秋雁と寒雲とのみあり、野趣自ら多くは愜ふ、名香人共に聞く、吳山中路より斷え、渑水半江より分る、此の地登臨して慣る、情を攄べて一に君を送る、

【句釋】友人が進士及第して歸るを送るなり、渑東は浙東なり、渑と浙とは同じ、浙江省の杭州に歸る、南行無俗侶浙江から言へば杭州は東なり、長安より言へば南方なり、此の南行するに當つて旅の友は俗物ならず、甚だ雅友あり、其れは秋雁與寒雲寒雲も南行し、秋雁も南行し、君に伴なふ者は此の二雅友なり、野趣自多愜野趣は官趣の反對を云ふ形容なり、田臭味と心得る者は誤る、人生の俗事以外の物を皆野趣と云ふ、愜は愜適なり、名香人共聞名香は『本集』に鄉名に作る、鄉名が可なり、一鄉に其の人格の高きを稱揚せらるるなり、吳山中路斷、渑水半江分江に到りて吳地盡き、岸を隔てて越山多しと殆んど同意味の句なり、杭州は實に吳越の境とす、此地登臨慣方干が曾て屢しば此の杭州に游び、其の山水に慣れる、攄情一送君我が眞情

を據べて他意なく一に君を送らんとなり、

春宮　　杜荀鶴

早被ニ嬋娟一誤　欲レ粧臨レ鏡慵　承レ恩不レ在レ貌　教ニ妾若爲一容
風暖鳥聲碎　日高花影重　年年越溪女　相憶採ニ芙蓉一

早く嬋娟に誤まられて、粧はんと欲して鏡に臨めば慵し、恩を承くるは貌にあらず、妾をして若爲か容つくらしむる、風暖にして鳥聲碎け、日高くして花影重る、年年越溪の女、相憶ふ芙蓉を採りしことを、

【句釋】春宮は宮中の事を詠ず、古注に曰く、周禮の注に皇后正寢一、燕寢五、是れを六宮と爲す、夫人已下を分けて居く、帝王は適后、三夫人、九嬪、二十七世婦、八十一女御を立つ、職林に載す漢の武元二帝の後より、世淫費を增し、乃ち掖庭三千に至る、級十四を增す、昭儀、婕妤、嬌娥、容華、美人、八子、充依、七子、良人、長使、少使、玉宮、順常、無娟、共和、娛靈、保林、良使、夜者是れなり、魏に貴嬪、淑華、修媛、修儀を置く、宋に貴妃、貴嬪、貴人、昭儀、昭容、昭華、中才、齊貴、淑妃を置く、唐に惠妃、麗妃、華妃、淑儀、德儀、順儀、

賢儀、婉儀、美人、才人を置く、之を要するに此の如き名目を設けて、以て宮庭の懽樂を恣ままにせしものなり、早被嬋娟誤宮女が自ら嗟する語なり、妾は普通に勝れて容顏の好き處より此の宮庭に入りしも、是れ却つて身を誤まりしなり、嬋娟なりしを以て宮に入りしも、宮に入るに過ぎずして君王の愛は決して蒙むらず、嬋娟を徒らに自護するのみ、欲粧臨鏡慵粧を凝らすは己を愛する者の爲めなり、別に愛する者なし、鏡に臨んで粉黛を凝らす意遂に慵きなり、承恩不在貌君王の恩寵を承くるは畢竟貌に在らず、其の人の運命なるべし、强て自ら遣るの語なり、教妾若爲容承恩は貌に因るに在らざることを悟つて見れば、徒らに粧を凝らすの要なし、妾をして鏡に臨ましめたるは何と爲たることぞ、風暖鳥聲碎宮庭春日の景、鳥聲が宮樹に響き、多くに聞ゆるを云ふと、素隱は解したるが、響くにはあらず、細なるを云ふなり、日高花影重日の高きに隨がつて漸漸と花影が重なる、年年越溪女越溪は昔し西施が吳王に寵せられし前に居りし處、今以て裏面に西施を叙し、表面に越溪の居女を叙す、相憶採芙蓉越溪に在つて、芙蓉を採り、我が意の儘に游ばば却つて此の宮中に居て、恩寵を得ざるに勝ると、其の怨を云ふ、昔し越溪に此の芙蓉を採つて游びし事を憶ひ出すと見ても可なり、

辭崔尙書　　李　頻

一飯仍難受　淹留已半年　終期身可報　不擬骨空鐫
城晩風高角　江春浪起船　曾同棲止地　獨去塞鴻前

一飯仍受け難し、淹留已に半年、終に身の報ずべきを期す、骨空しく鐫るを擬せず、城晩れて風角を高うし、江春にして浪船を起す、曾て同じく棲止せし地、獨去る塞鴻の前、

【句釋】辭は辭去、崔尙書の家を去る、一飯仍難受、淹留已半年自身は一國を受るも辭せず、他には一飯をも惜むが常人の情なり、崔は然らず、李をして半年も食客たらしめしなり、終期身可報一飯の恩必ず報ずとは韓信が漂母に叙せし語なり、不擬骨空鐫恩を記すを鐫ると云ふ、骨に記したりとて、眞に報せずんば、記すも詮なし、我は必ず報ずべしとなり、城晩風高角正しく崔が家を出でんとして城中は日も漸く晩れ、角聲は風に依て其の音高く聞える、江春浪起船已に城中に風起る、江中も浪の船を揚げる固より其の所なり、辭して向はんと欲する方面を云ふ、曾同棲止地、獨去塞鴻前今日まで崔が家に寄食するものと別れて獨北方に向つて去る、

塞は北邊を戍る塞、其の塞上を過ぎる雁と自身と殆んど境遇を同じうすとなり、

下方　　司空圖

三十年來往　中間京洛塵　倦行今白首　歸臥已清神
坡暖冬生笋　松涼夏健人　更慚徵詔起　避世迹非眞

三十年來往す、中間京洛の塵、倦行今白首、歸臥已に清神、坡暖にして冬笋を生じ、松涼しうして夏人を健にす、更に慚づ徵詔せられて起つて、世を避くれども迹眞にあらず、

【句釋】下方は題として類の尤も少なきもの、本來佛語にて詩語にあらず、上方世界、下方世界の語諸大乘經に散在してあり、上方は淨土、下方は穢土、今借りて以て中條山の麓を云ふ、中條山の王官谷は司空圖の住居、三十年來往世と競うて奔走せし間を云ふ、素隱の曰く懿宗の咸通十年に及第してより、昭宗の景福年中に至る凡そ二十四五年、及第せざる以前も鄕貢として京に在り、中間京洛塵京洛の風塵中に奔走せしなり、倦行今白髮倦は「イヤ」になると、營營たる人事に倦むころは已に白髮と成る、歸臥已清神人事を罷めて此の中條山下に歸臥す、精神

の清淨たるを覺ゆるなり、坡暖冬生筍坡は「ツツミ」なり、筍は夏日にあらざれば生せず、此の處暖なれば冬も筍を生ず、松涼夏健人夏日は人の身體を倦み易からしむるもの熱氣然らしむるなり、幸に此の處松樹あり、常に風濤を起し、人をして健ならしむ、更慚徵詔起、避世迹非眞此の句に就て二說あり、一は曰く、黃巢の亂に司空圖は河中に還る、王徽表して副使と爲す起たず、召して知制誥と爲す乃ち起つ、此の詩起つて召に赴く時の作か、一は曰く、此の說否なり、僖宗の時召されて、知制誥中書舍人と爲りたる事あり、今世を避けて、中條山の三休亭に引き籠り居れども自ら省るに吾が行迹は、眞實の隱者にはなきぞ、自ら我が身を戒しめたるなり、自ら耐辱居士と號したるは、更慚の字に相對すと、眞の隱者にあらずとすることは二說一致するも、役に付きし年代を異にす、余は前說を以て正と爲す、何ぞ煩はしく昔日の事を言はんや、廬を出でんとして作りたるものなり、

華下送文涓

郊居謝名利　何事最相親　漸與論詩久　皆知得句新
川明虹照雨　樹密鳥衝人　應念從今去　還來嶽下頻

郊居名利を謝す、何事ぞ最も相親しむ、漸く與に詩を論ずること久し、皆知る句を得ること新なるを、川明らかにして虹雨を照らし、樹密にして鳥人を衝く、念ふべし今より去つて、還嶽下に來ること頻ならん、

【句釋】華下は華陰縣を云ふ、今日の陝西省同州府なり、司空圖、河北の亂を避て此に來り寓す、文涓は未詳、涓を浦に作る本あり、郊居謝名利、何事最相親我は人間の名利共に謝絕して居る中に、君と特別に親しきは何等の因緣ぞや、漸與論詩久漸は親しくなるに隨つて、與は共なり、古人の詩に就て二人にて其の佳惡を論ず、皆知得句新古人の詩は皆清新なるを知ると解しても、又文涓の詩は陳腐ならずして、清新所謂古人の糟粕を嘗めざる佳詩なりと爲すも、二意共に通ず、川明虹照雨郊外の景色、虹の雨を照らすとは、虹の影が水に移るのみならず、一方雨なるに一方は晴れて居るなり、樹密鳥衝人人が樹の密なる林へ入れば、鳥は逃げ出んと欲して、路に迷ひ、却て人の居る方へ向つて飛來るを衝と云ふ、應念從今去、還來嶽下頻念ふ者は文涓なり、今日此の嶽下を去ると雖も、後還此に來る應しばせんとなり、

游東林寺　　黃滔

平生愛山水　下馬虎溪時　已到終嫌晚　重游預作期
寺寒三伏雨　松偃數朝枝　翻譯如曾見　白蓮開滿池

平生山水を愛す、馬を虎溪に下る時、已に到つて終に晩きことを嫌ひ、重游預め期を作す、寺は寒し三伏の雨、松は偃す數朝の枝、翻譯曾て見るが如し、白蓮開いて池に滿つ、

【句釋】東林寺は前に辨せり、平生愛山水東林の山水を愛するが當面の意にて、側面の意は何處の山水も愛する性質を持つとなり、下馬虎溪時東林寺を訪ふ者は虎溪にて馬を下る、先づ是に於て其の風景を愛賞す、已到終嫌晚今日到りて其の風景は聞きしに勝つて甚だ善なり、終に其の見るの晚きを嫌ふなり、嫌ふは悔ゆる意にて見よ、重游預作期今日去るも再游の期は約せざるべからず、一度にて足れるものならず、寺寒三伏雨夏至より秋初に至る間、初伏、中伏、末伏の三時あり、之を三伏と云ふ、極めて炎暑の酷だしき日なり、其の土用中にも、少し雨が下れば寒を覺ゆ、松偃數朝枝數朝とは晉齊梁陳隋唐の歷朝を云ふ、要するに老松即ち年を經

し松なりと云ふにあり、偃は偃臥なり、地に横たふなり、翻譯如曾見南宋の慧嚴、慧觀の二高僧が謝靈運と共に『大般涅槃經』三十六卷二十五品を譯す、即ち此の東林中の翻經臺とす、今日も尙其の狀を見るが如きを云ふ、ナゼ見るが如しと云ふに、白蓮開滿池其の翻經當時の狀を見るは即ち白蓮が其の當時植ゑしものなればなり、滿池に開く、今昔不變の清淨世界なりと爲す、以前二十首、

送僧還南嶽　　周賀

辭僧下水棚　因聽嶽鐘聲　遠路獨歸寺　幾時重到城
風高寒木落　雨絕夜堂清　自說深居後　鄰州亦不行

僧に辭して水棚を下る、因つて嶽鐘の聲を聽く、遠路獨寺に歸る、幾時か重ねて城に到らん、風高うして寒木落ち、雨絕えて夜堂清し、自ら說く深居の後、鄰州にも亦行かじと、

【略傳】周賀初め僧たり、淸塞と曰ふ、周賀曾て二僧を悼む、詩に曰く凍鬚亡夜に剃る、遺偈病中に書す、姚合此の詩を聞て曰く、惜い哉僧中に此の人あらんとは、竟に歸俗せしむ、

【句釋】南嶽卽ち衡山へ還る僧を送るなり、辭僧下水棚、因聽嶽鐘聲周賀が昔し南嶽に在つて佛道修習せしが一旦姚合に勸められ歸俗せんとて、山僧に辭して水棚卽ち橋を下る、其の時嶽鐘も我を送るものの如きなり、遠路獨歸寺周賀を今日尋ねて吳れ而して獨行寺に歸る、幾時重到城今日南嶽へ歸り去らば、幾時か此の長安城中へ再游するや、風高寒木落、雨絕夜堂淸衡山は七十二峯あり、三峯極めて秀づるもの芙蓉、紫蓋、石廩と曰ふ、風も高き所以知るべし、夜堂淸き所以も亦知るべし、自說深居後、鄰州亦不行南嶽へ還る僧が說くなり、南嶽へ還りたる後は、鄰州にも行かず、況んや遠游をや、唯坐禪修習するのみなり、

送人歸蜀　　馬戴

別離楊柳陌　迢遞蜀門行　若聽淸猿後　應多白髮生

虹蜺侵棧道　雨雪雜江聲　過盡愁人處　煙花是錦城

別離楊柳の陌、迢遞たり蜀門の行、若しくは淸猿を聽いて後、應に多くは白髮生ずべし、虹蜺棧道を侵し、雨雪江聲を雜ふ、人を愁へしむる處を過ぎ盡さば、煙花是れ錦城、

【句釋】蜀の事は前に辨せり、別離楊柳陌陌は市の事なり、長安城東門外の陌頭正に此の處まで送る、迢遞は「ハルカ」「トホク」なり、蜀門行蜀門に向つて行く、若聽淸猿後淸は聲の「サエ」て聞へること、其のサエた聲を發する猿を聞て後、應多白髮生白髮は愁に緣つて生ずること、古今同一なり、虹蜺侵棧道蜀の棧道は天下の險を極む、利州より三泉橋に至る棧閣實に一萬九千三百十八間、護險の偏欄實に四萬七千七百三十四間、此の棧道に於て虹蜺が侵生ずるを見る、雨雪雜江聲「雨雪の時は虹蜺あるべからず」と說く者あり、此の詩意は雨雪の時、虹蜺ありと言ふにあらず、或時は虹蜺、或時は雨雪となり、一時に虹蜺と雨雪と來るにはあらず、天に雨雪の聲あり、脚下に江水の聲あり、以て相雜はるを云ふ、過盡愁人處愁の字は奇險なる處を云ふ、三峽や棧道や蜀江等の人をして其の險に愁へしむる邊を過ぎ盡くせば、煙華是錦城蜀の成都府、江山明媚、錯華して錦の如し、故に錦城と曰ふ、苦境を通過して始めて樂境に達するを云ふ、

經周處士故園　　方干

愁吟與獨行　何事不關情　久立釣魚處　唯聞啼鳥聲

山蔬和雨歇　海樹入籬生　吾在玆溪上　懷君恨不平

愁吟と獨行と、何事か情に關らざらん、久しく釣魚の處に立てば、唯啼鳥の聲を聞く、山蔬雨に和して歠み、海樹籬に入つて生ず、吾玆の溪上に在つて、君を懷うて恨平らかならず、

【句釋】經は經過、周は姓、處士は終身官に仕へざる人の自稱、故居とあれば周が死んだ後、此を經しならん、愁吟與獨行愁吟する者も方干なり、獨行する者も方干なり、何事不關情見聞する物、情に關せざるものなし、久立釣魚處水頭に立て見れば是れ故人が釣魚の處でありしなり、唯聞啼鳥聲林中に向つて聞けば啼鳥の聲のみあり、故人が吟聲は聞くなし、山蔬和雨歠雨の爲めに打ち敲かれた山蔬は誰も今日培ふ人なし、海樹入籬生海邊の樹枝が伐截する者なきを以て籬の中まで侵略する、共に是れ荒廢の狀を云ふ、吾在玆溪上玆とは故居を云ふ、此の故居の溪上に在つてなり、懷君恨不平君を懷ふも君在らず、恨平らかならざる所以なり、

送二人歸山　石召

相逢唯道在　誰不二共知貧　歸路分二殘雨一　停二舟別一故人一
霜明松嶺曉　花暗竹房春　亦有二棲閒意一　何年可レ寄レ身

相逢うて唯道のみ在り、誰か共に貧しきことを知らざらん、歸路殘雨を分ち、舟を停めて故人に別る、霜は明かなり松嶺の曉、花は暗し竹房の春、亦棲閒の意あり、何れの年か身を寄すべき、

【句釋】石召は傳未詳、人の歸山を送る詩なり、相逢唯道在此の道は人の修習すべき大道を云ふ、步行の道にはあらず、相逢ふも金錢の友にはあらず、道の爲めの友なり、誰不共知貧我が輩の貧は他人も能く知つて居る、貧など恥づる必要はなし、歸路分殘雨雙方共に同じ殘雨を見るから分と云ふ、『古注』は意を得ず、停舟別故人別れんと欲して舟を停む、離別の際、然るべきものあり、霜明松嶺曉、花暗竹房春冬日は松嶺清く、春日は竹房美なり、人の歸隱する所の景、亦有棲閒意我も亦閒處に棲息せんとする意あり、何年可寄身何れの年にか此の宿志を遂げて山人の處に身を寄するを得ん、

送友人歸宜春　張喬

落花兼二柳絮一　無處不二紛紛一　遠道空歸去　流鶯獨自聞
野橋喧レ碓水　山郭入レ樓雲　故里南陵曲　秋期更送君

落花と柳絮と、處として紛紛ならざるは無し、遠道空しく歸り去る、流鶯獨自ら聞かん、野橋碓に喧しき水、山郭樓に入る雲、故里南陵の曲、秋期更に君を送らん、

【句釋】宜春は漢代縣豫章郡、唐代江南道袁州、今日の江西省袁州府なり、落花兼柳絮、無處不紛紛正に是れ晩春、絮も紛紛、花も紛紛、遠道空歸去、流鶯獨自聞及第せしなれば得得として歸らんも、下第の身、戚戚として歸らざるを得ず、流鶯即ち殘鶯を聞くに就ても、感慨の情に堪へず、空の字意を著けて見よ、野橋喧碓水碓は音「タイ」訓「カラウス」なり水碓の一名、碡車、水を下へ落す機械なり、途中所見の景、山郭入樓雲此の句は友人が家に歸りし後の景と解するも、途中所見と解しても、二義共に通ずるなり、野橋の句は世人の機巧を爲して世を渡るに譬へ、山郭の句は友人の家に歸りて安閒無事なるに譬ふと、此の意も亦通ず、故里南陵曲南陵は張喬の故里と爲す、袁州の鄰國宣州に南陵あり、張今は長安城門外に在るも、後には此の故里に返る、秋期更送君試驗は春と秋と二期にあり、春の今日は下第して君は故里に歸る、我は長安城に在つて之を送る、秋の考期には我故里に在りて、君が更に考試に京へ上るを送らんとなり、諸注此の意を得ず云云す、笑ふべし、已前五首、

秋日別王長史　　王勃

別路千餘里　深恩重百年　正悲西候日　更動北梁篇
野色籠寒霧　山光斂暮煙　終知難再報　懷德自潛然

別路千餘里、深恩百年に重し、正に西候の日を悲んで、更に北梁の篇を動かす、野色寒霧を籠め、山光暮煙を斂む、終に知る再び奉じ難からんことを、德を懷うて自ら潛然、

【句釋】王長史は王勃の叔父なり、父の王福時を覲省せんとして暇を乞うて、交趾國へ行く時の作なり、別路千餘里長安より交趾へ赴く、今日我邦人が洋行するより以上の辛苦なり、死を以て行くなり、深恩重百年終身其の恩の重きを荷ふとの意なり、百年は終身の語と同一なり、叔父の爲め養はれて其の恩極めて重し、正悲西候日候は期候の候、西候は秋日の意味に當る、秋日は何事無くとも悲し、況や離別に際してをや、更動北梁篇梁の江淹が「別賦」に「喬木ヲ故里ニ視テ、北梁ニ訣レテ永ク辭ス」とあるに依て、其の別れに就て感動することを云ふ、手を

分つの地を北梁と云ふ、野色籠寒霧黄昏近くなりて野田の色、寒霧が籠めて暗く見ゆ、山光斂●●暮煙暮煙散じ斂まり山光自ら顯はる、前句は平地、後句は高地、對法知るべし、終知難再奉千里の別、生きて再遇は期し難し、懷德自潛然叔父の恩德を懷ふと、雙涙の潛然たらざるを得ず、侍養に奉ずるを得ず、悲しむ所以、交趾へ行く途次、水に溺れて死す、年二十九と傳に見ゆ、此の詩遂に讖を爲すもの、

汝墳別業　　祖詠

失ㇾ路農爲ㇾ業　移ㇾ家到ㇾ汝墳　獨愁常廢ㇾ卷　多病久離ㇾ羣
鳥雀垂ㇾ窗柳　虹蜺出ㇾ澗雲　山中無ㇾ外事　樵唱有ㇾ時聞

【略傳】祖詠は洛陽の人、開元十二年に杜綰、進士と爲る、少より王維と交游し、吟侶と爲る、後、流落不偶、家を汝墳の間に移し、漁樵を以て身を終ふ、

路を失して農を業と爲す、家を移して汝墳に到る、獨愁ふ常に卷を廢するを、多病久しく羣を離る、鳥雀窗に垂るるの柳、虹蜺澗を出るの雲、山中外事無し、樵唱時あつて聞く、

【句釋】汝墳は隋に縣豫州潁川郡、今日の河南省南陽府葉縣治なり、別業は別莊なり、業は人の攻め治める所のもの悉く業なり、別莊は游樂處にあらず、是の故に業の字を以て稱す、失路農爲業失路は卽ち失志なり、進士と爲り、天下に名を揚げん志なりしも、事は志しと違ひ農を以て業と爲すの止むを得ざるに至れり、移家到汝墳移家とは一家を擧げての意、妻子眷屬悉くなり、京都を離れて汝墳の田間に到る、獨愁常廢卷書籍を竹卷と云ふ、古代は竹にて製し一一卷くが爲め、後世も尙是れ書卷と云ふ、愁多きが故に讀書する心無きなり、多病久離羣單に病とあるは大抵貧病なり、富貴なれば他人集まり、貧賤なれば親戚離る、今の離羣も是れ貧病なるが爲めなり、鳥雀垂窗柳鳥雀は我の貧病を知るや知らざるや、窗前に垂るる柳に止まり啾啾たり、虹蜺出澗雲虹蜺は非常の勢力を示して、澗を出でて橫はる、是も我の貧病を知るものにあらず、山中無外事山中は市中の如く、種種の見聞あるにあらず、樵唱有時聞樵夫が樵歌を唱へて過ぎる聲を偶ま聞く、是も往來に聞くのみ、時ありて聞くは、偶ま聞くことなり、

宣州使院別韋應物　　劉長卿

白雲乖ㇾ始願　滄海有ㇾ微波　戀舊爭趍ㇾ府　臨危欲負ㇾ才
春歸ニ花殿暗　秋傍ニ竹房多　耐ㇾ可ニ機心息ㇾ　其如ニ羽檄ㇾ何

白雲始願に乖く、滄海微波あり、舊を戀うて爭つて府に趁り、危に臨んで才を負はんと欲す、春は花殿に歸つて暗く、秋は竹房に傍うて多し、機心の息むべきに耐へたり、其れ羽檄を如何、

【句釋】宣州は西漢には縣丹陽郡、隋に宣州と改む、宣城郡是れなり、今日の安徽省寧國府南陵縣の東四十里なり、使院は今日の領事館の如きもの、韋應物は劉長卿の友人にて、蘇州の刺史と爲りし人、古注に韋應物が宣州の守護、卽ち刺史たりし時、劉長卿は其の幕賓たり、天寶の亂の時、王命を以て陣に行く、正に途に上らんとする時、韋應物が留別の燕を張る、其の座中に寂上人なる高僧あり、送詩を作りて應物に別る、劉長卿も作るもの卽ち此の詩なり、白雲乖始願白雲が始願に乖くにはあらず、白雲の始願に乖くなり、字句構成法此の如く用ふるなり、白雲の中に於て人間と別に悠悠とせんことは我の始願でありしなり、其の始願遂げずして小役人と爲る、乃ち始願に乖くなり、滄海有微波我が人間としての煩惱海に微波あるが爲め、蘇州の如く、又寂上人の如く、佛道を淸淨に修すること能はざるなり、而して韋も劉も共に奉佛家なり、戀舊爭趁府作者卽ち劉長卿が舊友なる韋應物を戀うて、何人よりも先きに宣州の使院に

訪問する、趁は字音「スウ」訓「ハシル」走なり、臨危欲負戈國家の危急に臨んでは筆を捨て、戈を負うて起つ、卽ち祿山の亂に向つて自ら赴くを云ふ、春歸花殿暗天下春風なれど、此の使院は特に春の歸收するを覺ゆ、花が殿閣を圍繞して暗し、暗きは花の多きを形容する、秋傍竹房多秋を淸爽にするものは竹なり、其の房を圍繞して竹あり、秋の氣特に多きを覺ゆ、共に使院の景色、耐可機心息心を動らかすものを機と云ふ、其の心を何處に向つて動らかすと云ふに、人間の名利榮達等に對してなり、其の機心も息むべき筈なるも、其如羽檄何人間外に徜徉せんと欲するも、帝王の命軍に赴がざるを得ず、如何は「ドウシヤウモナシ」なり、羽檄は軍中の簡書、卽ち命令書なり、主としては寂上人に對して叙べ、客としては韋應物に對して云ふなり、魏の曹丕の奏事に若し急あらば則ち羽を以て檄に加へよと、檄文に雞の羽を添へ加ふるなり、

送陸潛夫延陵尋友　皇甫冉

登山自補屐　訪友不齎粮　坐歇靑松晩　行吟白日長
人煙隔水見　草氣入林香　誰作招尋侶　淸齋宿紫陽

山に登つて自ら屐を補ふ、友を訪うて粮を齎さず、坐に歇ふ靑松の晩、行

吟すれば白日長し、人煙水を隔てて見え、草氣林に入つて香し、誰か招尋の侶と作つて、清齋して紫陽に宿せん、

【句釋】陸潛夫は傳未詳、延陵は西漢に縣右北平郡、李兆洛云ふ今日の直隸境ならんと、陸が其の友人を尋ねて延陵に赴むくを送る詩なり、登山自補屐音の謝靈運が木屐を著けて山に登る、其の事を後世、山水の游を爲す者に應用する、屐齒折るれば、他を煩はさず、自ら之を補ふなり、訪友不齎粮無錢旅行を云ふ、粮は食物なれど詩の意は、友を訪ふに金錢を攜帶せずして行くとなり、坐歇青松晩其の途中疲勞を感じたる時は青松に倚りて日暮に休歇する、行吟白日長疲勞を醫すれば直ちに行吟して白日の長きを忘る、人煙隔水見人煙なき處を通過して、人煙ある處に至る、旅行者の喜雀する態、此に在る、水を隔つは近距離なるを云ふ、草氣入林香林に入れば草氣香ばしの意、已に友人の居に近づき、藥草の氣、人衣に逼るを知る、誰作招尋侶は複數、二人以上を指す、友を尋ぬる人を招きて以て作者卽ち皇甫冉も共に行かんとなり、清齋宿紫陽清齋は肉食せざること、惡食せざること、野菜の類を食ひ、清泉を飮む之を清齋と云ふ、紫陽觀は延陵に在り、道士の住する處、其の道士名は侯尊師、一時尊崇せられし人

なり、誰の字に依て案ずれば、必ず招尋侶ありと云ふにあらず、誰かがあるやと疑問に屬す、陸潛夫に知己なきを表はす、

夏夜西亭卽事　　耿緯

高亭賓客散　暑夜最相和　細汗凝衣集　微涼待扇過
風還池色定　月晩樹陰多　遙想隨行者　珊珊動曉珂

高亭賓客散ず、暑夜最も相和す、細汗衣に凝つて集まり、微涼扇を待つて過ぐ、風還つて池色定まり、月晩うして樹陰多し、遙に想ふ行に隨ふ者、珊珊として曉珂を動ぜんことを、

【略傳】耿緯は『唐書』に傳なし、『才子傳』に耿湋に作る、寶應中肅宗の時進士に登り、左拾遺と爲り、後、江淮の間に謫せらる、

【句釋】西亭は江淮に謫せられて、其の官衙に亭を立て常に居す、之を西亭と云ふ、卽事は所見と同じ、眼前の景を叙す、高亭賓客散高處に在るを以て西亭と言はず高亭と言ふ、賓客は同時の詩人錢起を云ふ、『全唐詩』には「夏夜江淮西亭會二錢員外一」とあるに依て其の客の誰たるを

知るなり、散は去なり、歸去なり、暑夜最相和此夜客と最も和したと言ふにあらず、夜に入るも涼氣無く、暑氣の酷だしきを云ふ、細汗凝衣集汗が細く流れ衣にシミテ集まる、微涼待扇過涼が微しく扇の爲めに過ぐ、風還は風が何處へか還り去る、此の夜風なきなり、風吹かざるなり、池色定は水面に浪が起らざるを云ふ、浪起れば池色定まらざるなり、月晩は月の出る晩きなり、樹陰多は明明と月が照さざるゆゑ、唯暗くして樹陰が多きを知るのみ、遙想隨行者江淮より長安の事を想ふが故に遙なり、曉來其の宮禁に行く者を隨行者と云ふ、必ずしも大官の行に隨從する者と見るにあらず、珊珊亜曉珂官人が佩玉の聲を形容して珊珊と云ふ、邊地に在るも中土を忘れざるなり、

庭春　　姚合

塵中主印吏　誰遣有高情　趁暖簷前坐　尋芳樹底行
土融凝野色　氷敗滿池聲　漸覺春相泥　朝來睡不輕

塵中主印の吏、誰か高情あらしむ、暖を趁うて簷前に坐し、芳を尋ねて樹底に行く、土融けて野色を凝らし、氷敗れて池聲滿つ、漸く覺ゆ春の相泥むことを、朝來睡輕からず、

【句釋】●春は素隱の說に曰く、本集の題には游春と出し、蓋し詩十五首あり、此の詩其の一なり、余今『全唐詩』の姚合集を檢するに十五首は十二首の誤なるを知る、塵中主印吏は印判を主る吏官、武功縣の主簿たりし時の作とす、「武功縣中作三十首」の中にも主印三年坐、山居百事休の句あり、政治なぞ執る者は塵中の事なればなり、誰遣有高情主簿なぞの役人は大抵俗吏にて、上官とか、下官とかの名を求むるに汲汲として劣情はある、高情は有る無し、高情とは何ぞ、世事を離れて自然を樂しむ底の人なり、暗に自ら任ずるが如し、趁暖簷前坐是れ高情の一端なり、簷前に坐するが何故に高情ぞと尋ぬれば畢竟默坐して詩を推敲するなり、尋芳樹底行是れも高情の一端なり、世に求むる少なきもの、花を尋ねて樹底に行くのみ、土融凝野色冬日は土凍るも、春日は土融す、融は柔融、暖氣の爲め百艸が芽を出し、野の色自ら凝結する、凝は成也と注するゆゑ、俗語の「野ハ野ラシク成ッタ」なり、氷敗滿池聲氷が融解して流るる故に池水に衮衮と聲あるなり、漸覺春相泥春と自然界と我と相泥むを覺ゆ、朝來睡不輕輕の反對は重、不輕は卽ち重となる、春眠曉きを覺えざるの意、

新春

官卑長少事　縣僻又無城　未曉衝寒起　迎春忍病行
樹枝風掉軟　菜甲土浮輕　最好林間鶴　今朝足喜聲

官卑うして長く事少し、縣僻にして又城なし、未だ曉けざるに寒を衝いて起き、春を迎へて病を忍んで行く、樹枝風掉ひて軟に、菜甲土浮んで輕し、最も好し林間の鶴、今朝喜聲足し、

【句釋】新春は立春なり、萬年縣の尉たりし時の作、官卑長少事尉官は日本今日の奏任八等の地位に當る、卑と稱する所以、大事に關與する資格なき故に少事なり、縣僻又無城僻は陋、縣廳は畢竟名のみ、其の建築なぞ見る影も無し、未曉衝寒起新春を祝せん爲め、未明に寒を衝きて起る、迎春忍病行天子春を東郊に迎ふは『月令』に出る所、天子も庶人も春は迎へざるべからず、今春を迎へんと欲して其の縣衙に病を忍んで行くなり、樹枝風掉軟春風は嚴風と異なる、樹枝を吹くも軟なり、菜甲土浮輕野菜の新たに生ずる實の形は、恰かも人の甲を著けたるが如きを以て菜甲と云ふ、土を出ること甚だ輕し、物の時に遇うて、本能を發揮するを羨やむ、最好林間鶴、今朝の鳴聲は昨朝に異なりて非常に喜ぶが如し、足は多なり、滿足なり、已前七首、

晩春答嚴少尹諸公見過　王維

松菊荒三徑　圖書共五車　烹葵邀上客　看竹到貧家
雀乳先春草　鶯啼過落花　自憐黃髮暮　一倍惜年華

松菊三徑に荒る、圖書共に五車、葵を烹て上客を邀へ、竹を看て貧家に到る、雀乳春草に先ち、鶯啼いて落花を過ぐ、自ら憐む黃髮の暮、一倍年華を惜むことを、

【句釋】晩春は三月、嚴少尹諸公見過嚴少尹が家へ諸公が訪問する、其の厚意を謝したる詩を少尹が作り、王維に示したり、王は此の詩を作り以て少尹に答へしなり、松菊荒三徑三徑荒に就き、松菊猶存す、は陶淵明の語、今借用して以て少尹に譬ふ、少尹其の人の清廉なるを示す、松菊の外に物無しとの意、日本の我輩如き詩人は住屋すら無し、況や、松菊をや、漢土の人は住屋や松菊位を所有するのみにては富人の中に入らざるなり、圖書共五車學者の本分、金に貧

なるも書籍に富む、一車二千卷を積むと見ても、一萬卷を藏するなり、烹葵邀上客●●●●は「アフヒ」葉の一種、露葵あり、綠葵あり、共に貧者の食物にて、富人の食物にあらず、而かも少尹は上客を招待するに此の疎物を以てす、物疎にして、志は疎ならず、邀は「ムカヘル」なるが、迎とは異なる、招待する意義を帶ぶ、看竹到貧家少尹●●●●●●●●が時ありて貧家に到るあり、何の爲めぞやと言へば、竹を看ん爲めなり、王子猷の故事なり●●●●●●●●雀乳先春草●●●●雀の子を乳するの期は春草の未だ生せざる先きなり、鶯啼過落花●●●●●●是れは正しく晩春の景、雀乳を見しは昨日なる如くの感を爲ししが、今日は早や花は落ち、鶯は殘し、時方に初夏に入らんとす、自憐黃髮暮●●●●●自とは王が自身、白髮が一變すれば黃髮と爲ることもあり、又白髮と爲らず、綠髮が直ちに黃髮と化する人もあり、老人に爲りし意、一倍惜年華少壯●●●●●の間は未來を長しと觀ず、故に年華を惜むの情に乏し、老境に及んでは、未來が短かし、年華を惜むの情、人に一倍するなり、

送二王正字山寺讀書一　李嘉祐

欲レ究二先儒教一　還過二支遁居一　篠堦閒聽法　竹寺獨看レ書
向レ日荷新卷　迎レ秋柳半疎　風流有二佳句一　不レ似二帶レ經鋤一

先儒の教を究めんと欲し、還つて支遁の居を過ぐ、篠堦閒に法を聽き、竹寺獨書を看る、日に向つて荷新たに卷き、秋を迎へて柳半ば疎なり、風流佳句あり、經を帶びて鋤くには似ず、

【句釋】●●●王正字舊說に王は鄉貢生卽ち今日の留學生●●●●●●●●として、長安に在りしが、春期考試に下第して、秋の考試を待つ間、山寺に寓して書を讀まんと欲し、李が家に暇を乞ふ爲め來る、李は卽ち此の詩を以て其の行を送る、欲究先儒教●●●●●●●●●●●●儒は學者の代名詞、先儒の意味極めて廣きも、此の句は孔夫子の道を究めんと欲すと見るべし、還●●●●●●●●は「カヘッテ」と訓む、過支遁居支遁居の三字にて梵寺と解釋す、梵寺は釋迦教を究むる所にて、儒教とは關係なし、其の關係なき寺へ來て却つて儒教を讀むなり、晉の支道林名は遁、名高きを以て借用す、篠堦聞聽法篠●●●●●●●●●●●●は「ササ」其の篠の密生したる堦下に於て、山僧の法を說くを聞く、竹寺獨看書●●●●●●●●●●●●

ば、餘裕はあるまじと思ひしに何ぞ料らん、其の人風流にして佳句あり、不似帶經鋤鋤として百姓するにはあらず、書を鋤くなり、書を多讀する人の病癖として、偶ま詩を賦するも、頭巾氣紛紛として讀むに堪へず、此の人は然らずと嘆ずるなり、

秋日過徐氏園林　包佶

回塘分越水　古樹積吳煙　掃竹催鋪席　垂蘿待繫船
鳥窺新罅栗　龜上半欹蓮　屢入忘歸地　長嗟俗事牽

回塘越水を分ち、古樹吳煙を積む、掃竹席を鋪くを催し、垂蘿船を繫ぐを待つ、鳥は窺ふ新罅の栗、龜は上る半欹の蓮、屢ば忘歸の地に入る、長く嗟す俗事に牽かるることを、

【略傳】包佶字は幼正、潤州延陵の人、天寶六年の進士、後、丹陽侯に封せらる、

【句釋】徐氏は友人ならん、回塘分越水塘は堤なり、回は「メグル」なり、此の潤州の延陵は古への越地、故に越水を分つと云ふ、東西の塘に越水が分流する、古樹積吳煙樹に挂る煙を見て是れは古時吳の煙なりと想像する、吳と越との間に當る地位なればなり、掃竹催鋪席掃竹は

名詞にあらず、塵氣を掃ふの竹を云ふ、竹が得意に爽爽として誰か來つて此君の處に席を鋪いて看よと催促するが如くなり、垂羅蘿藤の條枝が長く垂れて、待繫船誰か來つて此の處に船を繫げよと是れ亦催促する如く、又待つものの如し、鳥窺新罅栗是れ眼前所見の景、鳥は栗を食ふものにあらず、窺ふも用なきなれど、實見するものとすれば止むを得ず、猿の誤ならんと思へども、余の臆斷は許さざる所なり、罅は「サケル」なり「破ル」なり、栗皮サケテ實が見えるなり、龜上半欹蓮鳥は高處、龜は低處、蓮葉の欹つ邊に龜は悠悠と甲を曝らす、屢入忘歸地再再此の如き好園林に入る、歸るを忘れざらんとするも能はず、忘歸地とは好園林なれば云ふ、長嗟俗事牽眞に嗟するにあらず、詩語として言ふのみ、眞に嗟するなれば、俗事を謝して隱居すれば可なり、漢人の常語と見るべきなり、

灞東司馬郊園　許渾

楚翁秦塞住　昔事李輕車　白社貧思橘　青門老種瓜
讀書三徑草　沽酒一籬花　更欲尋芝朮　商山便寄家

楚翁秦塞に住す、昔し事ふ李輕車、白社貧うして橘を思ひ　青門老て瓜を

種う、書を讀む三徑の草、酒を沽ふ一籬の花、更に芝朮を尋ねんと欲す、商山便ち家を寄せん、

【句釋】灞東は地名、長安に在り、司馬は官名、許渾は武宗の代に行軍司馬の官と爲りしが、今は灞東に歸隱したりと、此の注者は郊園を以て許渾の自家と爲すなり、又一說は何人かは知らず司馬の職に在る人の郊園なりと爲す、詩に由て之を見るに、自家の如くも思へる、又他家の如くにも思へる、余は許渾自身の事を云ふにあらずして、別に司馬なる人あり、此の人の郊園を咏ずるものと爲す、楚翁秦塞住、昔事李輕車楚翁は司馬を云ふ、司馬は楚國の產なるを以て翁の敬稱語を以てす、灞東を指して秦塞と云ふ、李廣の弟に李蔡あり、此の人大將軍衞青に從がつて左賢王を擊つて功あり、輕車將軍と爲る、其の漢代の故事を借りて、今此の司馬が楚國より來りて、行軍司馬となり、大將軍に從つて、長安の東なる秦塞に住するに譬ふ、白社貧思●●古注に曰く、白社地名は洪州の西に在り、武陽縣の龍陽洲に接す、周廻三十里、其の地白將軍の圃を築くに因て遂に以て社に名く、按ずるに白公勝の族を以て、楚の將と爲す、白公其の國を亂さんと欲して乃ち之を召す、將軍曰く子に從つて其の國を亂すは則ち君に不義なり、

子に背いて其の私を發す、則ち族に不仁なり、遂に其の祿を棄て、圃を築き、園に灌ぎ、以て其の身を終ふ、楚人之を名て白善將軍樂圃と曰ふ、今其の地は濃州の東、藥圃寺に在り、『唐書』に白公勝は魯の哀公の時の人、又『荆州記』に李衞字は叔平、丹陽の太守と爲り、每に家を治めんと欲す、妻輒ち聽さず、後、密かに人をして武陵の龍陽洲の沅川上に於て宅を作り、柑橘千樹を種ゑしむ、死に臨み兒に謂つて曰く汝の母、我の家を治むを惡む、故に窮すること是の如し、然れども吾淵里に千頭の木奴あり、汝に衣食を責めず、每歲一疋の絹を上まつて亦用ふべし、青門は咸陽の第三門なり、今以て司馬に譬ふ、司馬は官を罷め、白社に歸り橘を種ゑんと思ひしが、其の事は止め、邵平卽ち秦の東陵侯が青門に瓜を種ゑし事を倣ふ、東陵侯は淸士なれば以て比するなり、讀書三徑草晉の隱者蔣詡は竹下に於て三徑を開き、其の徑を往來して讀書す、司馬も此の如し、沽酒一籬花酒を沽うて來り一籬の菊花に對し之を飮む、司馬を以て淵明に比す、更欲尋芝朮讀書、沽酒の興ある上、更に餘樂を求むるなり、芝は靈芝、朮は白朮、一名山連と云ふ、久しく服すれば、身を輕くし、年を延べ飢ゑずと、卽ち藥物なり、商山便寄家●漢初に隱者四人あり、四皓と稱す、世人は帝王以上に尊崇して居りしなり、其の四皓は身を此の商山に置く、是を以て司馬も此の四皓の如く芝朮を采つて、此の商山に家を寄すとなり、

下第寓居崇聖寺

懷玉泣京華　舊山歸路賒　靜依禪客院　幽學野人家
林晩烏爭樹　園春蝶護花　東門有閒地　誰種邵平瓜

玉を懷いて京華に泣く、舊山歸路賒なり、靜に禪客の院に依つて、幽に野人の家を學ぶ、林晩れて烏樹を爭ひ、園春にして蝶花を護す、東門に閒地あり、誰か邵平の瓜を種ゑん、

【句釋】下第は落第なり、寓居は假住を云ふ、崇聖寺は長安の崇德坊に在り、『長安志』に云ふ進士櫻桃の宴、此の寺の佛閣上に在り、懷玉泣京華己が才を玉に比す、玉の如き貴き才を有するも下第とは何事ぞと、憤慨して以て泣く、京華は都城即ち長安なり、昔し卞和が玉を抱きて荊山の下に泣いて居たるが如し、舊山歸路賒潤州の舊山は我が故郷なるも路賒にして歸るを得ず、京華の崇聖寺に寓して秋期を待つなり、靜依禪客院崇聖寺を指して禪客院と云ふ、寺の外に禪客院と指したるにはあらず、幽學野人家幽は靜と殆んど意義同じ、禪客院は坐禪する人、又香火を供する人の依る處なり、然るに我は香火も供せず坐禪もせず、自由に起居す、野人の

家を學ぶ所以、野人は禮に嫻はざる意なり、林晩烏爭樹夕陽に歸宿を爭ふ烏が林樹に集まる、烏を一本烏に作る、烏の爪、蝶の爪に對する法は下劣なり、烏の平聲を以て蝶の爪聲と對するが當然、本集も亦烏なり、園春蝶護花春風は公道、禪院も亦春なり、花開く蝶は此の花を護る、人は烏の如く聲名を爭ふ、我は蝶の如く自身の業とする所を護る、東門有閒地崇聖寺は長安城の東門に當る、其の寺の東門外に閒地即ち畔作せざる荒地がある、誰種邵平瓜邵平は召平が正しきなり、史記五十三蕭相國世家に附す、秦の東陵侯、秦破れし後、布衣平民と爲り、瓜を作りて東門外に種ゑ之を賣りて以て活す、我も召平の如く隱逃して瓜を種ゑんと欲するも能はず、寺に寓して讀書する所以は、秋期の試驗を待つて及第せんが爲めなり、

寄山中高逸人

孟貫

煙霞多放曠　吟嘯是尋常　猿共摘山果　僧鄰住石房
躡雲雙屐冷　採藥一身香　我憶相逢夜　松潭月色涼

煙霞多くは放曠、吟嘯是れ尋常、猿と共に山果を摘み、僧に鄰りて石房に住す、雲を躡んで雙屐冷に、藥を採つて一身香し、我は憶ふ相逢ふ夜、松

潭月色の涼しかりしことを、

【略傳】孟貫は閩中の人、人と爲り疎野、榮官を以て意と爲さず、篇章を喜ぶ、周の世宗、廣陵に幸す、貫大に詩價あり、世宗亦之を聞く、因て一卷を繕錄して獻ず、曰く、巢あるの樹を伐らず、多くは無主の花を移す、世宗悅ばずして曰く、朕、叛を伐て民を弔す、何ぞ有巢無主の說を得んや、朕に獻ぜば則ち可、他人ならば則ち卿必ず免さず、復卷を終へずして、釋褐進士することを賜ふ、其の終りを知らず、

【句釋】山中は字の如く山の中、高は姓、逸人は自稱する語、又他人より稱する語、隱逸の人なり、煙霞多放曠山水を稱して煙霞と云ふ、自由氣儘に獨往獨還することを放曠と云ふ、山水の游を自由にする、吟嘯是尋常逸人の逸人たる所以見るべし、凡人俗人は吟嘯是れ尋常ならざるなり、猿共摘山菓人間と游ばず猿と游ぶ、逸人の本領此に在り、僧鄰住石房我が住居の石房即ち洞穴は僧寺に鄰る、又凡俗と異なるなり、躡雲雙屐冷、採藥一身香雲を躡むは山の深きに入るなり、藥を採るは身を修するなり、雲の爲め雙屐は冷と爲る、藥の爲め一身は香氣を發す、我憶相逢夜憶は記憶なり、過去に屬す、想と異なる、今此の詩を賦し寄呈するに因つて憶ひ起すことは曾て相逢ひし夜の事なり、松潭月色涼松潭は潭の名ならん、其の潭中に月色の涼かり

もを見て非常に道味を感せしが、今日も其の事を憶ひ起すとなり、

廬嶽隱者　　杜荀鶴

見說來居此　未嘗離洞門　結茅遮雨露　採藥給晨昏
古樹藤纏殺　春泉鹿過渾　悠悠無一事　不似屬乾坤

見るならく來つて此に居り、未だ嘗て洞門を離れず、茅を結んで雨露を遮り、藥を採つて晨昏に給す、古樹藤纏うて殺し、春泉鹿過ぎて渾る、悠悠として一事無し、乾坤に屬するに似ず、

【句釋】廬嶽は廬山なり、周の威王の時、匡裕、生れながらにして神靈なり、此の山に廬りす、世に廬君と稱す、故に名く、佛敎徒は晉の惠遠法師を以て此の山を崇拜するものなり、隱者此の山中に隱れて道を修習する者、見說來居此說は語助なり、見說の二字で「ミル」なり、「ミルナラク」と訓むも、「ミル」の意味なり、未嘗離洞門洞門は隱者の住居、其の住居を離れて人間に出しことなし、諸注に此の十字を解して「隱者が杜荀鶴ニ語ル意ナリ」と云ふ、誤謬なり、隱者が語るにあらず、杜荀鶴が隱者の實事を知つて、自ら叙べるなり、結茅遮雨露隱者と雖も、石

にあらず、木にあらず、此の一身は血あり肉あり、雨露の害を蒙むる能はず、茅を結んで僅かに之を防ぐ、採藥給晨昏晨昏に給すと云ふは昕夕の食と爲すとの意なり、隱者も食無くんば生きず、然りと雖も肉食するの俗人を學ばず、靈藥を採つて以て食と爲すなり、古樹藤纏殺山中の實景、藤が樹皮の精分を食ひ盡すゆゑ、樹は遂に殺さる、春泉鹿過渾鹿が泉を超ゆるゆゑ水が偶ま渾る、殺と渾とは隱者の方から言へば可ならざるもの、然れども自然は如何ともすべからず、悠悠は物に動せずと見て可なり、無一事自然に一任して、強て累を求むるなし、一事無き所以、不似屬乾坤隱者も亦人なり、人は人としての事なかるべからず、然るに隱者には人は人としての事なし、此の天地間に住するに似ず、讃しての言なるか、諷しての言なるか分明ならざるが、余は多少の諷意あるかと思はるるなり、抑も詩を人に寄す、字を擇ぶを以て第一と爲し、次ぎに句、次ぎに章と爲るなり、其の第一の字を擇ぶに例せば此の詩の中にある、殺や渾等の字は避けざるべからず、避けざる字を避けざるは、作者の意の存する所なり、是を以て知る作者の意諷諭にあることを、隱者は畢竟仙人の類なり、仙人は長生不死の藥を服し、自他共に長壽を欲するも、千年も萬年も死せざることに至らず、亦清白なりと云ふと雖も、外物の爲め其の清白を汚さるること無しとせず、渾らざること無しとせず、千年の古樹も藤の爲め殺

され、晨昏清潔なる泉水も時ありて亦渾る、是の故に隱者と雖も、高く自ら頼むべからず、是の故に乾坤の間に住する者は、乾坤の間に住する人間として可なりとの諷諭を寓したるものなり、杜荀鶴は道士や山僧や隱者と交游多き人なること、其の詩にて知るべし、記し畢りて本集を閲す、見說の二字自見に作り、露の字雪に作る、余の見の誤まらず、隱者が語るにあらずして、杜が見る所なることを、

寄司空圖

僧虛中

逍遙短褐成　一劍動精靈　白晝夢仙島　清晨禮道經
黍苗侵野徑　桑槿汚閒庭　肯要爲鄰者　西南太華青

逍遙短褐成る、一劍精靈を動かす、白晝仙島を夢み、清晨道經を禮す、黍苗野徑を侵し、桑槿閒庭を汚す、肯て鄰を爲す者を要せんや、西南太華青し、

【略傳】虛中は宣春の人、馬氏に客爲り、湘西の栗城寺に住す、齊己、尙顏、棲蟾と詩友たり、碧雲集一卷あり、

【句釋】寄司空圖虛中は『全唐詩』に詩十四首あり、其の中司空圖に寄する詩二首あり、是れ其の一首、又鄭谷とも交游して贈答の詩あり、『全唐詩』寄の下に「華山」の二字あり、逍遙短褐●成短褐を著けて逍遙するの業なるとなり、褐は毛布、裘と同じ、賤者の服する所、道士の服する所、要するに平民服の代名詞、司空圖が輕裝成るとなり、一劍動精靈司空圖が傳に初め風雨の夜を以て、古の寶劍を得、慘澹として精靈なり、虛中在時に司空圖の傳は未だあらざるも、司空圖が直接に談話せしことを詩中に叙べしなり、劍は士の魂、獨日本のみならず、漢人も亦然り、之を著けて一刻も離さず、短褐と一劍とにて出游するなり、中條山は司空圖の住處、此の山中を逍遙する、白晝夢仙島白晝に眠る如きは世事に營營たる人の爲さざる所、然るに司空圖は白晝に眠り、眠りて以て夢みるものは仙島卽ち海中の神山のみなり、清晨禮道經經は誦すべきものなるに禮と云ふ、禮拜するは誦と其の信を同じうするものなり、道經は道士の經、猶ほ佛經と云ふが如し、道德經とすれば『老子』五千言なり、黍苗侵野徑黍は字音「ショ」字訓「キビ」大暑を以て之を種う、故に「ショ」の音を出す、稻の屬、人の食物とす、其のキビの苗が生長して野徑を侵略するなり、桑梣汚閒庭梣は音「シン」桑の子なり、其の桑の子が落ちて閒庭を汚す、侵と謂ひ、汚と謂ひ、前首と同じく諷諭の意を寓すること知るべし、眞に道を修するの

士ならば、桑梣なぞ庭に栽ゑざるなり、黍苗も無用に屬す、然るに司空圖は眞に道を修する人にあらずとは言はざるも、世外の道を修する人にあらざること分明なり、虛中は方外の觀察良とに能く當る、肯要爲鄰者爲鄰の二字では兒童には解し難し、善鄰を爲すものなり、肯は可なり、善鄰を爲す者は無要なりとの意なり、ナゼ善鄰を爲す者は無要なりやと云ふに、西南太華●青西南の方角に當つて、太華山色の青くして秀づるを見るが故に、此の外にクダラヌ鄰を爲す者はイラヌことなり、中條山より太華山を日日望むを得る、太華山は五岳の第一なること論ずる要なし、已前共に八首、

送成州程使君

岑參

程侯新出守　好日發行軍　拜命時人羨　能官聖主聞
江樓暗寒雨　山郭冷秋雲　竹馬諸童子　朝朝待使君

程侯新たに出でて守たり、好日行軍を發す、命を拜して時人羨み、官を能くして聖主聞く、江樓寒雨暗く、山郭秋雲冷なり、竹馬の諸童子、朝朝使君を待たん、

【句釋】 成州は同慶府なり、程は姓、使君は日本の知事なり、知事と爲つて行くを送るなり、程侯新出守知事に新任せられ行くなり、侯は侯爵の侯と同じけれど、爵と限らず、卿とか君とか云ふの類なり、好日發行車誤謬無けんことを欲して好日を擇び、都城より成州へ向ふ、拜命時人羨此の使君と爲るは官人の榮譽、人の皆羨む所と爲る、能官聖主聞人に有能卽ち用ふるに足る人と、無能卽ち用ふるに足らざる人とあり、官と爲るの才能を程は有するを以て聖主も其の名を能く聞き知らるるなり、江樓暗寒雨、山郭冷秋雲二句十字其の赴任する途上の所見を叙す、竹馬諸童子程が赴任する成州は卽ち程が故郷にて其の竹馬の友多きなり、童子と云ふと雖も、昔しの童子にて今の童子にはあらざるなり、朝朝待使君達官名士を出すは、鄉里の詫りと爲す所、今其の鄉里の友が大官と爲つて此に來る、何ぞ待たざるを得ん、古注に曰く後漢の郭伋、嘗て幷州の牧と爲る、素より恩德を結ぶ、復幷州の牧と爲る、始めて至るとき、兒童數百あり、各の竹馬に騎つて、道次に於て拜迎すと、今程使君も亦郭伋の如きなり、

漢陽卽事　　儲光羲

楚國千里遠　孰知方寸違　春游歡有客　夕寢賦無衣

江水帶氷綠　桃花隨雨飛　九歌有深意　捐珮乃言歸

楚國千里遠し、孰か知らん方寸の違ふことを、春游有客を歡び、夕寢無衣を賦す、江水氷を帶びて綠に、桃花雨に隨つて飛ぶ、九歌深意あり、珮を捐てて乃ち言に歸らん、

【句釋】 漢陽は今日の湖北省なり、儲光羲は山東省兗州の人、開元の進士、中書より監察御史と爲り、祿山が亂に捕へられ其の僞官を授けらる、肅宗の祿山を平らぐるに及んで、其の僞官を受けたる罪に依つて漢陽に流さる、此の詩卽ち漢陽謫居中の作とす、卽事の二字漢陽の題目の大に適せずと思はるるも、今日改めがたし、楚國千里遠長安と漢陽とは遠きこと千有餘里、孰知方寸違方寸卽ち胸中の思ひ違ふ、思ひの違ふは我が本志にあらざるを云ふ、祿山の膝下に拜して、其の僞官を受くる如きは固より我が本志にはあらず、勢の止むを得ず此に至る、然るに今誦居して此に住す、方寸悉く違ふ、其の本志は孰か之を知らん、春游歡有客俗語に「世ノ中ハ客ノ來ル程ウルサキハ無シ」などの語あるも、一方に又「客遠方ヨリ來ル亦樂シカラズヤ」の語もあり、孤獨の寂寞を慰むる者、客に如かず、春日客來る豈歡ばざるを得ん、夕寢賦無衣

『毛詩』に無ㇾ衣無ㇾ褐の語あり、春は春の衣、秋は秋の衣ありて、人生は始めて安し、然るに春に春衣なく、秋に秋衣なく、冬に冬衣無きときは、我の悲しみ畢竟如何ぞや、夕寢の文字に依て知る、滿足の臥具なきなり、無衣の哀詩を賦せざるを得ず、●●●

云ふ、窗吟絶妙詞窗を以て藥の字に對す、窗に憑つて口吟する詞は皆絶妙なり、長卿の詩は眞に絶妙なり、柳塘春水漫、花塢夕陽遲嚴維が自分の住する桐廬の實景を叙せしなりとの說を爲すものあり、或は長卿が住處の景を云ふものなりとの說を爲す、嚴維が眼前の景を見て、以て長卿の嚴州も亦同じからんと想像するなり、漫は水の多く滿ちたるなり、遲は日の長きなり、欲識懷君意我が君を懷ふの意は自分以外に誰か知るぞと言はば、他にあらず、朝朝訪樵師我は日日水邊に出でて君の住する嚴州の方を望む、そは樵師卽ち船頭の知る所、君が船頭に問ひ玉はば必ず我が君を懷ふの深き心を知らん、訪は問と同じ、

別至弘上人

最稱弘偃少　早歲草茅居　年老從僧律　生知解佛書
衲衣求壞帛　野飯拾春蔬　章句無求斷　時中學餘

最も稱す弘偃少しと、早歲より草茅に居る、年老いて僧律に從ひ、生まれながらにして佛書を解す、衲衣壞帛を求め、野飯春蔬を拾ふ、章句求斷なし、時中學餘りあり、

【句釋】別は離別、至弘は傳未詳、上人は『維摩經』に出で、僧に對する敬語、猶ほ先生と云ふが如し、最稱弘偃少僧は行と住と坐と臥とを四威儀と稱す、此の四威儀は僧家には非常に大事の法とす、偃は卽ち臥なり、至弘は偃すること少なきを以て、人が弘偃少と異名を付せしなり、早歲草茅居早歲より大伽藍に住する如き俗僧にあらずして、眞の佛法を修習して草茅に居住する、住も亦正しきなり、年老從僧律僧には戒律あり持せざるべからず、比丘の二百五十戒、比丘尼の五百戒、沙彌の八戒、在家の五戒等、老に及ぶも破るを得ず、僧律に從ふとは是れなり、『僧祇律』と云ふ大部の書物もあり、生知は二字にて「生レナガラ」と訓む、解佛書佛書と云ても意義廣大なり、華嚴も天台も法相も皆佛書なり、何と指さず泛く大藏經の理を解釋する才ありと見るべし、衲衣求壞帛布の衣を衲衣と云ふ、絹布と反對、絹布は律の禁ずる所、壞は壞色と熟字して、純なる白や紫や紅と反對、種種の色を壞し盡くして、土の如き色に染むるを云ふ純紫、純綵は官僧の事にて、持律の僧の著衣にあらず、又佛陀世尊も著け玉はざりしものなり、產婦が用ひし惡衣の類を雜碎して以て製せし袈裟を僧の最第一の貴重品とす、此の上人、此の袈裟を著用す、野飯拾春蔬食物も美味なるを食へば、食慾が出でて修道者の害と爲る、是を以て野飯卽ち疎末なる食物を取つて僅かに生命を支ふ、百姓などが捨てたる春蔬を拾うて以て食

す、持律の高僧の所業なり、章句無求斷斷は斷案、是は是なり、非は非なりと決するを斷と云ふ、別に他に向つて其の斷を求むる無く、佛經の一章片句の義理を自ら解通する、時中學有餘時中は儒書に出る語、佛書の方から之を言へば、隨時に當る、隨時隨意にして、學問の力餘りあるなり、他人の孜孜兀兀として勉力するもの、到底上人には及ばざるなり、

送王牧往吉州謁史君叔　　李嘉祐

細草綠汀洲　王孫耐薄游　年華初冠帶　文彩舊弓裘
野渡花爭發　春塘水亂流　史君憐小阮　應念倚門愁

細草汀洲に綠なり、王孫薄游するに耐へたり、年華初めて冠帶す、文彩舊弓裘、野渡花爭ひ發き、春塘水亂れ流る、史君小阮を憐むとも、應に倚門の愁を念ふべし、

【句釋】吉州は春秋には吳に屬し、戰國には楚に屬す、今日の湖南省長沙府なり、史君叔は王牧が叔父なり、史君は使君と同じ、吉州の牧民なり、細草綠汀州春に逢うて汀州卽ち水國も細草の爲め色綠なり、王孫耐薄游王姓なるを以て王孫艸に譬ふ、素隱は薄游を解して薄官にして

游ぶと叙したるが然らず、薄は「コヽニ」と訓む、此の吉州卽ち古の楚地に游ぶとなり、年華初冠帶は日本に當れば元服と云ふ事なり、今日は元服の禮廢したるも余が幼童時代は猶ほあり、今王の年正に少年なり、文彩舊弓裘『莊子』に弓人の子は先づ裘を爲ることを學ぶ、文彩は俗語の「立派」と云ふ意味に見よ、王牧は立派に父や叔の業を襲ぐ人なりとなり、野渡花爭發道中所見の景、春塘水亂流道中所見の景、野花を小人の榮華を記るに譬へ、氷が融けて春水の亂れ流るるを君の恩もかくべしと譬ふと素隱は云ふ、一時流行の解釋法、今用ひざるなり、史君憐小阮吾の阮咸は叔父の阮籍に對して世に小阮と云ふ、史君叔が其の姪の王牧を憐むは猶ほ阮籍が阮咸を憐む如くに思ふなるべし、應念倚門愁『戰國策』に王孫賈の母賈に謂て曰く、汝朝に出で晩に來る、吾は門に倚りて汝を望むと、其の子の還りを待つなり、途中無事なりや否やを愁ふるが親の情なり、今は叔父の情なり、此の叔父の愁を念ふべしとなり、

送章彝下第　　綦毋潛

長安渭橋路　行客別時心　獻賦溫泉畢　無媒魏闕深
黃鶯啼就馬　白日暗歸林　三十名未立　君還惜寸陰

長安渭橋の路、行客別時の心、賦を溫泉に獻じ畢つて、魏闕の深きに媒す

るなし、黃鶯啼いて馬に就き、白日暗に林に歸る、三十にして名未だ立たず、君還寸陰を惜め、

【略傳】綦毋潛は荊南の人、字は孝通、開元中に宜壽の尉より集賢院待制に入る、右拾遺に遷さる、著作郎に終ふ、

【句釋】進士試驗に落下して歸る人を送る、●●●●●古注に秦、漢、唐共に渭水に架せり、凡そ三橋咸陽縣の西十里を便橋と名け、漢武帝の造る所、咸陽の東南二十里の中渭橋は、始皇の造る所、萬年縣の東四十里を、東渭橋と名く、何れの造る所を知らずと、行客別時心行客が此の渭橋を渡る時の心情は如何となり、今行客は章彝其の人を指す、獻賦●●●●開元傳信記』に玄宗溫泉宮に在りしとき、劉明霞なる者あり、「溫泉賦」を獻ず、帝覽て之を奇とし、命じて五角の文字を六張と改めしむ、對て曰く、臣此の賦を草する時、神助あり改むるを願はず、上願みて曰く眞の窮薄なりと、遂に及第せず、章彝の及第せざるを以て此の事を引用す、無媒魏闕深鄭可農が曰く象魏闕なり、天門を魏闕と云ふ、此の天門に登る媒介者は章彝に於て人無しとなり、●●●●●

年の前、印度に在つて佛陀が入滅し玉へる事を以て上人に比するにはあらず、雙樹の字を借用せしのみ、素隱は曰く、此の句は不都合なりと、肯て不都合にあらざるなり、垂涙遠公房晉の惠遠法師を以て比す、是れは曾て異議なし、燈續生前火素隱曰く上人の常住せる房を見るに、影前に燈火を點す、此の上人存生の時に、不斷燈を點せられた、其の燈火は其の儘に續けらる、然れどもこは表面の解釋にて裏面の解にあらず、裏面の解は上人入寂すると雖も、其の法燈を傳ふる者は猶ほ在りとなり、此の裏面の解を以て上乘とす、嬾瓚沒後香表面の解は沒後弟子輩が香を焚き、影前に供するなるが、裏面の解は寂後に愈よ其の德香の高きを云ふ、陰堦明片雪片雪又雪片、片に意義なし、一箇と云ふが如し、寒竹響空廊風に依て竹響を聞く、寂滅應爲樂『涅槃經』の偈に生滅滅已、寂滅爲樂の語あり、或人曰く、死して樂土へ生るるを樂しと爲すと、大に誤る、涅槃那を證すれば、亦苦無きを云ふ、煩惱の永く滅して、復妄想せざるを云ふ、塵心徒自傷聖者は應に寂滅を以て樂と爲すべきも、一切の凡人は上人の寂滅して再び其の敎を受る能はざるを悲しむ、大悟せざるが故に傷む所以なり、

送曹椅　　司空曙

青春三十餘　衆藝盡無如　中散詩傳晉　將軍扇賣書

楚田晴下雁　江日暖多魚　惆悵空相送　歡游自此疎

青春三十餘、衆藝盡く如くなし、中散詩畫に傳へ、將軍扇書を賣る、楚田晴れて雁を下し、江日暖にして魚多し、惆悵空しく相送る、歡游これより疎ならん、

【句釋】曹椅が吳興に赴くを送る詩なり、青春三十餘少年を青春と云ふ、人を以て期節に比すれば、三十以前は春なり、三十以後五十に至るまでは夏なり、五十以後七十に至るまでは秋なり、七十以後は冬なり、衆藝盡無如多能なること誰も及ぶもの無きなり、中散詩傳晉の嵇中散は四言五言詩共に巧なり、顧愷之なる一代の名畫師あり、中散の詩を愛誦して、詩意に因て其の圖を畫く、曹椅も亦顧愷之の如き人に遇はんとなり、將軍扇賣書晉の王羲之即ち右軍は會稽の山陰に在りし時、老嫗扇を持し來りて書を乞ふ、右軍乃ち筆を執つて清風來ニ故人一の五字を書す、老嫗此の扇を以て高價に賣る、後乞ふ右軍與へず、將軍は王右軍の事なり、曹椅が詩書雙絕なるを謂ふ、楚田晴下雁、江日暖多魚晴と謂ひ、暖と謂ひ、雁も魚も共に得意なるを云ふ、楚田も江日も共に吳興の地なり、楚と吳と地理相接す、江は吳江なり、惆悵は悲しみ痛むなり、

空相送悲痛するも留まる能はず、悲痛の功無きが故に空しきなり、歡游自此疎君去つて後は吾と歡游する者少なしとの意なるか、或は君と今後歡游することは疎くならんかと、前說を以て可とすべし、

送金華王明府　韓翃

懸舍江雲裏　心閒境自偏　家資陶令菊　月俸沈郎錢
黃蘗香山路　青楓暮雨天　時聞引車騎　竹外有銅泉

懸舍江雲の裏、心閒にして境自ら偏ならん、家資陶令の菊、月俸沈郎の錢、黃蘗香山の路、青楓暮雨の天、時に車騎を引くを聞かん、竹外に銅泉あり、

【句釋】金華は隋の縣揚州東陽郡、唐江南道婺州、今日の浙江省金華府なり、王は姓、明府は知事なり、懸舍江雲裏金華は浙江省としては海に遠く山に近き地、然れども小江は有り、故に江雲の裏に懸舍在りと云ふ、心閒境自偏金華の地たる、嘉興府や杭州府や台州府と異なる、聊か偏境たるを免れず、然れども此の句は其の偏境なりと指したるにはあらず、心が閒なる故に境も自然と偏境に在る如く閒なるを云ふ、淵明の五字を閒と遠と易へしのみ、家資陶令菊家の

財產を家資と云ふ、其の財產は何であるかと問へば陶令が如く菊を種うるのみ、月俸沈郎錢古注に曰く梁の沈約、嘗て婺州に官たり、故に云ふ月俸は沈郎錢と、按ずるに晉の元帝初めて吳を過ぐ、吳興の沈充、小錢を鑄る、之を沈郎錢と謂ふ、此れ豈誤まつて沈郎を以て沈東陽と爲すか、作者は沈充を以て王に比したるや、又沈約を以て比したるやと云ふに、沈姓同じきを以て二意を含むものならん、誤にはあらざるなり、黃蘗香山路是れ途中の景、黃蘗は樹の名黃色に染め藥に入る、一名を黃柏と云ふ、僧に黃蘗禪師あり、此の句と關係無し、香山は楚地に在り、青楓は字の如く青き楓葉なり、地名にはあらず、或は云ふ暮雨は地名にあらず、香山も地名ならず、地名と暮雨と何ぞ對するを得ん、「香バシキ山路」なりと、此の說是ならん、蓋し香山なる山無きにあらず、是も途中の景、時聞引車騎、竹外有銅泉古注に『異苑』を引て曰く、婺州の五百人湖は吳の時、軍出でて土を破り銅釜を得たり、之を發すれば水便ち瀑出す、王明府が金華にて淸間の時、車騎に乘りし人の來るやと始め思ひしも、靜かに考ふれば是れ車騎にあらずして、銅泉の流るる聲ならんとは、竹外は字の如く竹林外なり、

和張侍郎酧馬尙書　韓愈

來朝當路日　承詔改轅時　出領須句國　仍兼少昊司

暖風抽宿麥　清雨捲歸旗　賴寄新珠玉　長吟慰我思

來朝當路の日、詔を承けて轅を改むる時、出でて須句の國を領じ、仍つて少昊の司を兼ぬ、暖風宿麥を抽んで、清雨歸旗を捲く、賴に新珠玉を寄す、長吟我が思を慰む、

【略傳】韓愈字は退之、鄧州南陽の人、其の先は蓋し河東の人、年二十五にして進士と爲る、貞元八年壬申なり、張建封、府の推官に辟し監察御史に遷さる、貞元中に山陽の令に貶せらる、元和の初、權りに國子博士を知す、河南の令に拜せらる、職方員外郎に遷さる、再び封溪の尉に貶せらる、復博士と爲る、刑部侍郎に遷さる、潮州の刺史に貶せらる、又袁州の刺史に改めらる、召して國子祭酒に拜す、穆宗、吏部侍郎に轉ず、又京兆尹兼御史大夫と爲る、復吏部侍郎と爲る、長慶四年に卒す、年五十七、禮部尚書と贈す、謚して文と曰ふ、或は云ふ元和十四年卒す、年四十七、

【句釋】張は姓、侍郎は官名、馬は姓、尚書は官名、馬尚書が始め詩を作り以て張に寄す、張は詩を作りて馬に和す、韓は更に張に和せしなり、來朝當路日來朝とは天子の命に應じ參內するを云ふ、其の參內の時を指して當路日と云ふ、馬尚書が鄆州の守護たりしが、朝命に依つて尚書に移りたるなり、承詔改轅時詔書を賜うて來朝の當日、改めて復鄆州の守護と無り來轅を囘して行くなり、轅は車なり、出領須句國出の字、本集再に作る、須句城は鄆州須城縣の西北に在り、地志に所謂句城は壽昌の西北に在り、國名記に曰く京相璠が云ふ須句一國三城兩名のものは誤なり、蓋し句城は須句の故地と爲す、而して須城は乃ち秦の置く所、須昌は須句城の北に在り、後唐、諱を以て改めて須城と曰ふのみ、句は音侯なり　仍兼少昊司少昊は秋官、今日日本の司法官なり、尚書が本官にして、少昊卽ち刑部尚書が兼官なり、暖風抽宿麥是れ任に赴く期節を云ふ、麥は大小の二あり、冬種ゑ夏收むるを以て宿と云ふ、青青たるを抽と云ふ、清雨捲歸旗暖日の風を以て清明の雨に對す、清明の節雨俄かに降る、歸旗を捲く所以なり、賴寄新珠玉尚書を寄せられたる詩を賞して新珠玉と云ふ、咳唾珠玉を成すの江淹が語に依て云ふ、長吟慰我思尚書の詩を長吟して以て我が所思を慰むるなり、

送董卿赴台州　張蠙

九陌除書出　尋僧問海城　家從中路挈　吏隔數州迎

夜蚌侵燈影　春禽雜櫓聲」開圖知異迹」　思想石橋行

九陌除書出づ、僧を尋ねて海城を問ふ、家は中路より挈へ、吏は數州を隔てて迎ふ、夜蚌燈影を侵し、春禽櫓聲を雜ふ、圖を開いて異迹を知る、思想す石橋の行、

【句釋】●台州は唐代江南道に屬す、今日浙江省に屬す、●●●

も、寺を見ざるゆゑ、何處の鐘と云ふ、泉聲咽危石泉聲が咽ぶとは何ぞ、泉が潺湲と流るる反對、卽ち危石に當るが故に聲が「フサガル」塞るなり、又呑むなり、聲の外部に發せざるを云ふ、日色冷青松日影が青松に當れば、其の光冷然たるを覺ゆ、薄暮空潭曲、安禪制毒龍寺を認めて寺に入るも僧衆を見ず、是に於て薄暮に至りて空潭卽ち水頭に歩して見れば、此の潭曲にて果して僧衆卽ち安禪が毒龍を制伏して居りしなり、安禪は坐禪にあらず、高僧を稱して云ふ老僧を老禪と稱するが如し、

送友人尉蜀中

徐　晶

故友漢中尉　請爲西蜀吟　人家多種橘　風土愛彈琴
水向昆明闊　山通大夏深　理閒無別事　時寄一登臨

故友漢中の尉、請ふ西蜀の吟を爲さん、人家多くは橘を種ゑ、風土愛して琴を彈ず、水は昆明に向つて闊く、山は大夏に通じて深し、閒を理して別事なくんば、時に一登臨を寄せよ、

【句釋】徐晶は開元十年の進士、其の傳は詳ならず、尉は武官の稱、蜀中は成都府の役人と

爲りて赴くなり、故友は舊友、漢中尉漢中は卽ち成都なり、請爲西蜀吟蜀へ行く故友を送るなれば蜀中の事を吟じて以て其の行を壯にせんとなり、人家多種橘橘は橙「ダイダイ」柚「ユヅ」の類にして蜜柑も亦同類なり、蜀中多く種う、風土愛彈琴風土は猶ほ風俗と言ふが如し、漢の司馬相如は蜀の人、善く琴を彈ず、之を彈じて卓氏の女を動かしし事あり、今相如を以て友人に比せしにはあらず、唯蜀の風習之れありと云ふなり、水向昆明闊昆明は西南夷に屬す、此の昆明に滇池あり、又「異物志」に滇池は建寧の界に在り、水の周廻二百餘里、漢の武帝は之に倣うて長安に池を鑿り以て舟游す、蜀の水は昆明に通ずと云ふ詩意なり、山通大夏深大夏とは印度を云ふ、雪山山脈は以て此の蜀へ通ずるなり、理閒無別事清閒無事なるを理閒と云ふ、何の用事も無きときは、時寄一登臨昆明にも臨むべし、大夏にも登るべし、以て見聞を廣め玉ふべしとなり、

與諸子登峴山

孟浩然

人事有代謝　往來成古今　江山留勝迹　我輩復登臨
水落魚梁淺　天寒夢澤深　羊公碑尙在　讀罷一沾襟

人事代謝あり、往來古今と成る、江山勝迹を留む、我輩復登臨す、水落ち

て魚梁淺く、天寒うして夢澤深し、羊公碑尚在り、讀み罷んで一たび襟を沾す、

【句釋】峴山は湖北省襄陽府に在り、作者孟浩然も此の襄陽の産、是を以て諸友と同じく登臨して羊祜を弔せしなり、晉の羊祜は賢者なり、嘗て從事鄒湛と峴山に登つて泣を垂れて曰く、宇宙有つてより便ち此の山あり、由來賢達勝士此に登つて遠望する者多し、皆湮沒して聞ゆる無し、湛が曰く公は德四海に冠たり、道前哲に嗣たり、令聞令望、當に此の山と俱に傳ふべし、湛の輩の若きに至りては乃ち公が言の如き耳と、人事有代謝代謝あるは生死ありと言ふが如し、往來成古今往く者は古と成り、來る者は今と成る、幾千萬年の前も後も此の死生代謝を運轉するのみ、而して其の運轉の瞬息なること電の如し、江山留勝迹此の山江漢の間に在るを以て江山と云ふ、人事は代謝あるも、江山の勝迹は依然として變せず、變せざるを普通なりと云ふにはあらず、羊公の舊迹を保存に志す人多ければなり、我輩復登臨古は羊公登臨す、今日は我輩登臨す故に復なり、水落魚梁淺山上より臨み見るの景、秋水落ちたる處、水淺ければ魚梁卽ち「ヤナ」と云ふ魚を捕ふる道具が見ゆるなりと素隱は解したるが、非常に誤まる、襄陽には魚梁洲あり汚水中に魚梁あり、龐德公の居る所、一名白沙曲、士元は漢の陰、南白沙に在り、

司馬德操が宅は洲の陽に在り、天寒夢澤深雲夢澤は荊州府に屬す、而かも襄陽の峴山より之を望むを得、華容も枝江も江夏も安陸も皆此の地なり、羊公碑尚在襄陽の百姓羊公の德を慕うて碑を建て廟を立つ、讀罷一沾襟其の碑を望む者流涕せざるは莫きを以て杜預、因て墮淚碑と名く、孟も亦此の意を云ふ、一の字、一本に淚に作る　附羊祜詳傳

羊祜字は叔子、泰山南城の人、世吏二千石なり、祜に至る九世、並に清德を以て聞ゆ、祜年五歲の時、乳母をして弄する所の金環を取らしむ、乳母の曰く、汝先より此の物なし、祜卽ち鄰人李氏の東垣桑樹の中に詣り、之を探り得たり、主人驚て曰く、此れ吾が亡兒の失する所の物、云何ぞ持去す、乳母具さに之を言ふ、李氏悲惋す、時人之を異として、李氏の子は、卽ち祜が前身なりと謂ふ、祜博學にして能く文を屬す、魏の高貴鄕公の時、公車に徵され、中書侍郎に拜す、晉の武帝吳を滅さんとする志あり、祜を以て都督とし軍事を掌らしむ、出て南夏を鎭す、征南大將軍南城侯に累進す、卒して大傅を贈る、初め善く墓を相する者あり、言ふ祜が祖の墓所、帝王の氣あり、若し之を鑿たば則ち後無けん、祜遂に之を鑿つ、相する者見て曰く、猶折臂の三公を出さん、祜竟に馬より墮ち臂を折る、仕へて公に至るも子無し、祜山水を樂しみ、風景毎に必ず峴山に造り、置酒言詠して終日倦まず、

寄二邢逸人一　　鄭　常

淡君無二外事一　日與二世情一違　地僻人難レ到　溪深鳥自飛
儒衣荷葉老　野飯藥苗肥　若問二湖邊意一　而今憶二共歸一

淡む君が外事なくして、日に世情と違ふことを、地僻にして人到り難く、溪深くして鳥自ら飛ぶ、儒衣荷葉老い、野飯藥苗肥たり、若し湖邊の意を問はば、而今共に歸らんことを憶ふ、

【句釋】鄭常は傳未詳、肅宗の時の人なり、邢は氏、逸人は自稱語なり、羨君無外事、日與世情違と云ふ二字の中には、人間の千態萬狀悉く網羅す、何の代何の世も多數は愚民なり、此の愚民と伍し和するは逸人の爲さざる所、是を以て世情とは日に日に疎遠と爲る、背違と爲る、地僻人難到、溪深鳥自飛逸人が住する土地の實況を云ふ、不便の地は人が到らず、幽溪の深きは鳥自ら飛ぶ、鳥は害を避くる故、人は利と爲らざる故、儒衣荷葉老、野飯藥苗肥逸人なりと雖も赤裸にて生を送る能はず、食はずして身を保つ能はず、是を以て衣るには芰荷を以て製したる服あり、食するには藥苗の肥たるものを以てす、尋常世人の衣食には慾あり、逸人の

衣食には慾なきなり、若問湖邊意唐人の詩を集めたる本に『又玄集』一卷あり、其の集に依て見ると此の五字を疇昔江湖意とあり、逸人より鄭常に問ふの語なり、君も僕と同じく世情と違うて、江湖散人たらんと言はれたるが、若し其の事を實行し玉ふならば、而今憶共歸我と同じく故山に歸隱し玉ふべしと憶ふなり、歸隱を欲せざるは其の意世中に在ればなり、

吳明徹故壘　　劉長卿

古臺搖落後　秋日望鄉心　古寺人來少　雲峯水隔レ深
夕陽依二舊壘一　寒磬滿二空林一　惆悵南朝事　長江獨至レ今

古臺搖落の後、秋日望鄉の心、古寺人の來ること少なり、雲峯水深きを隔つ、夕陽舊壘に依り、寒磬空林に滿つ、惆悵す南朝の事、長江獨今に至る、

【句釋】吳明徹故壘の五字、『全唐詩』には秋日登二吳公臺上寺一遠眺寺卽陳將吳明徹戰地に作る、今の題五字簡を以て勝る、揚州江都縣の西北四里、陳將吳明徹字は通紹、秦郡の人、陳の鎭前將軍と爲る、宣帝五年に衆十萬を統て齊を伐つ、大に齊軍を破る、王琳を擒にし之を斬る、十年に周人齊を滅さんとす、明徹に詔して軍を督せしめ之を伐つ、周の將王軌、兵を引て夏口に

據る、長圍を結び、鐵鎖を以て車を貫ぬきて水に沈む、明徹の舟潰え、周の爲めに執へられ、憂憤して卒す、古臺搖落後明徹が昔し據りし臺なれば古臺と云ふ、秋日なれば木葉搖落す、秋日望鄉心劉長卿は河間の人、今淮西の觀察使と爲つて此に來る、豈懷鄉の心無からんや、古寺人來少本集に古を野に作る、野を以て宜しとす、野は田野の野にあらず、荒寺の意味なり、雲峯水隔深水を隔てて雲峯はあり、人の來る少なる所以、必ず弔古の心ある人のみ來る、俗人の特に來る處にあらず、夕陽依舊曇、寒磬滿空林曉日と雖も舊曇は寂寥たり、況や夕陽に於てをや、磬は寺僧の鳴らす物、其の響きが空林に滿つるなり、寒色に作るを可とする素隱の說は今取らざるなり、磬聲なるを以て一層の寂寥を感ずる、惆悵は「イタム」なり、南朝事揚州の地は宋齊梁陳隋悉く都したる處、此に都したる天子は罪業消滅の爲め大抵寺を造立したるもの、南朝の四百八十寺、何人も知らざるものあらんや、其の寺が南朝亡びて唐の世に移るや、忽ち衰態を呈して今や見るに忍びざるなり、長江獨至今吳公臺下を流るる長江のみ依然として其の變せざるを見る、

送樊兵曹謁潭州韋大夫　李嘉祐

寒鴻歸欲盡　北客始辭秦　零桂雖逢竹　瀟湘少見人

江花鋪淺水　山木暗殘春　脩刺轅門裏　多憐爾爲親

寒鴻歸つて盡きんと欲す、北客始めて秦を辭す、零桂竹に逢ふと雖も、瀟湘人を見ること少なり、江花淺水に鋪き、山水殘春に暗し、刺を脩す轅門の裏、多くは憐む爾が親の爲めにすることを、

【句釋】樊は姓、兵曹は官名、謁は上長に會見するに用ふるの語、潭州は河南省に屬す、韋は姓、大夫は官名、樊が韋の部下と爲つて潭州に赴くを送るなり、寒鴻歸欲盡春將に盡んとするの候、鴻も亦歸り盡きんとす、北客始辭秦北客は樊を指す、樊は本北人なるも鄉貫生として長安に在り、然るに今潭州に赴く爲め長安即ち秦を辭す、雁は北歸し、人は南行す、零桂雖逢竹零は零陵、桂は桂陽、此の二地江南に屬して竹多し、北地には竹少なし、寒地を嫌うて暖地を愛するが竹の性なればなり、瀟湘少見人瀟と湘との間に於ては知己に逢ふことは少れなり、瀟湘は人多く住せず、寂寞の地なりと解する勿れ、江花鋪淺水瀟湘淺水の邊には水に浮ぶ花錦を鋪くが如くならん、山木暗殘春山木の暗きは樹木が鬱蒼たればなり、脩刺轅門裏名刺を呈出するを脩と云ふ、古代は紙なく竹木を削りて其れに姓名を書き、以て謁見する、軍門を轅門と云ふ、

名刺を韋大夫の軍門に脩めて以て謁見を求むるなり、多●●爲●●親を養ふ爲め祿仕するなり、自己の安泰を求むる爲ならず、多くの人は之を憐むも決して卑しめずとなり、後漢の毛義字は少節、廬江の人、家貧うして孝行を以て稱せらる、南陽の張奉其の名を慕うて往て之を候す、坐定まつて府檄適に至る、義を以て守令と爲す、義檄を奉じて入り、喜顏色に動く、奉は志尚の士、心に之を賤しむ、自ら來るを恨み固辭して去る、義が母死するに及んで、官を去て服を行ふ、數ば公府に辟せども至らず、張奉歎じて曰く、賢者固とに測るべからず、往日の喜は乃ち親の爲めに屈するなり、所謂家貧親老ゆれば官を擇ばずして仕るものなり、焚兵曹の心事、亦此の毛義に異ならずとの意を含むなり、

西郊蘭若　羊士諤

雲天宜二北戸一　塔廟似二西方一　林下僧無事　江清日正長
石泉盈レ掬冷　山實滿レ枝香　寂寞傳二心印一　無言亦已忘

雲天北戸に宜し、塔廟西方に似たり、林下僧無事、江清うして日正に長し、石泉掬に盈ちて冷に、山實枝に滿ちて香し、寂寞として心印を傳ふ、無言亦已に忘る、

【句釋】西郊蘭若は四字寺名なるや、又西郊の蘭若なるや分明ならず、西郊に游んで看し蘭若の意ならん、蘭若の事は前に辨せり、雲天宜北戸寺の位置が宜しきを云ふ、日本の比叡山が王城の鎭護に當つて立てたりと云ふ如く、北向きに位置を取つて、長安城に向ふ、其の建築の宜しきを云ふ、塔廟似西方寺中に立てたる佛塔も祖廟も其の建築樣法は西域に法を取りたるもの、西域の建築方法に依ると見るべし、林下僧無事僧は林下に於て坐禪外無事なるを言ふ、僧の無事なるは眞僧にて、僧の有事なるは俗僧なり、江清日正長無事なるが故に日長きなり、有事なれば日は短かきなり、石泉盈掬冷掬とは掌にて水を汲むことなり、巖石の間より出る水を掬すれば盈卽ち「ミッ」掌中に一杯と爲つて冷を覺ゆ、山實滿枝香山樹の實所謂栗や柿の類が熟して枝に滿ち香氣の逼るを覺ゆ、寂寞傳心印寂寞は下の無言に對す、無言なるが故に寂寞なり、寂寞なるが故に無言なり、心印を傳ふと云ふは眞實の法を傳ふと云ふことなり、心を以て心に傳ふ、而して其の誤まらざるを以て印の字を付す、印は認可證明するなり、僧も之を傳へ今我も之を傳ふ、無言亦已忘無言を以て無言に答ふるが最上乘にて、無言を以て有言に答ふるは尙ほ未だ至るものにあらず、而して無言も亦忘れざるべからず、無言の文字に執する者は、

亦有言と同じ、簡中の妙理容易に知り難し、

送普門上人　皇甫冉

華宮難久別　道者憶千燈　殘雪入林路　深山歸寺僧
日光依嫩草　泉響滴春氷　何用求方便　看心是一乘

華宮久しく別れ難し、道者千燈を憶ふ、殘雪林に入るの路、深山寺に歸るの僧、日光嫩草に依り、泉響春氷を滴す、何ぞ方便を求むるを用ひん、心を看る是れ一乘、

【句釋】普門上人が自分の住房に歸るを送るなり、華宮難久別上人の意を云ふ、上人は華宮即ち寺と久しく別れて他國に在るは許さざる所、是の故に寺には歸らざるべからず、道者憶千燈道者とは求道者の事にて即ち上人なり、上人の常に憶ふ所は千燈に在りて他にあらず、一燈も千燈も其の光は蓋し同じ、是を以て千燈を憶ふとは其の道即ち佛法の明らかなるを憶ふ事なり、佛に千燈を供養するにはあらざるなり、殘雪入林路、深山歸寺僧時正に初春にて、其の歸路には殘雪あり、其の行路を愼しめよとの意なり、日光依嫩草依は即ち照すなり、嫩草は萌え出でたる草、佛敎にては草座を貴む、是を以て之を出す、泉響滴春氷泉の響きは春氷を解きて流るるを知る、何用求方便方便は佛敎で「テダテ」と云ふ、「テダテ」を用ひて以て法に入らしむる者は畢竟鈍根の機類なり、利根の者は何ぞ方便を借らん、始めより一乘の道に入るなり、『法華經』に「正直ニ方便ヲ捨テ」とある、看心是一乘佛敎は總て心外無別法なり、心の外に別に一物もあるなし、是の故に佛道を修學せんと欲する者は、此の無形の心を觀ずるを以て第一とす、達磨の慧可に敎へて心を將ち來れと命じたるも是れ大乘の通法なればなり、是一乘とは俗語の第一番と云ふが如し、一乘の法と見ても亦通ず、

送耿處士　賈島

一瓶離別酒　未盡卽言行　萬水千山路　孤舟幾日程
川原秋色盡　蘆葦晩風鳴　迢遞不歸客　人傳虛隱名

一瓶離別の酒、未だ盡さざるに卽ち行かんと言ふ、萬水千山の路、孤舟幾日の程、川原秋色盡き、蘆葦晩風鳴る、迢遞として不歸の客、人は虛隱の名を傳へん、

【句釋】　耿は姓、處士は朝に仕へざる人の稱、一瓶離別酒、未盡卽言行賈島は今長安に在つて此の處士が行を送る、送別の燕を設けて、一日の懽を盡くさんとす、而かも其の一瓶の酒も懽も十分盡さざるに處士は早出立せんと言ふなり、萬水千山路、孤舟幾日程前路の遠きを云ふのみ、川原秋色盡本集には盡を靜に作る、盡は二字重なるを以て、靜の字遙かに好、蘆葦晩風鳴讀んで字の如し、迢遞不歸客一たび去つて復城中へ來らざる人、不歸は長安城中へ歸らざる客なり、人傳虛隱名凡俗は耿處士が人間に未練なく、今日去て後復來らざることを知らずして、却て言ふ、是れ一時歸る人にて、必ず城中を慕うて來るべしと、所謂虛隱の人、眞隱の人にあらずと思ふもの多し、島は其の眞隱たる事を知るなり、

春喜友人至山舍

周賀

鳥鳴春日晩　喜見竹門開　路自高巖出　人騎瘦馬來
折花林影動　移石澗聲回　更欲留深語　重城暮色催

鳥は鳴く春日の晩、喜び見る竹門の開くを、路は高巖より出て、人は瘦馬に騎つて來る、花を折れば林影動き、石を移せば澗聲回る、更に深語を留めんと欲すれば、重城暮色催す、

【句釋】　周賀初め僧たり、後歸俗す、此の詩僧たりし時の作とす、春日友人が山房を訪ふを喜んで作りしもの、鳥鳴春日晩、喜見竹門開山舍の春日靜かなる晩に、悠然と竹門の開くを見る、開く者は友人なり、竹門ゆゑ客が來りて外より開くなり、路自高巖出、人騎瘦馬來客の來る狀態を云ふ、瘦馬なるが故に來る者は道人なり、肥馬の客にはあらず、以て迎ふべきなり、折花林影動、移石澗聲回友人と共に游戲する、山中に住する者は必ず此の實況を知らん、石を移すは必ず溪水を渡らん意味ならず、溪谷に於ては此の游戲を爲す、水が東より西に移り、西より東に移り、興味の盡きざるものあり、更欲留深語折花移石の游畢りし上、更に留めて深語卽ち詩なり法なりの玄話を爲さんと欲するも、重城暮色催山又山の重なりて城の如く固めたるを重城と云ふ、重城は名詞にあらざるなり、暮色の已に催すを如何ともする無し、

龍翔喜胡權訪宿　　喩鳧

林棲無異歡　羨君就花欄　雀啄北窗晩　僧開西閣寒
衝橋二水急　扣月一鐘殘　明發還分手　徒悲行路難

林棲異歡なし、茗を煮て花欄に就く、雀は啄む北窗の晩、僧は開く西閣の寒、橋を衝きて二水急なり、月を扣いて一鐘殘る、明發還手を分つ、徒に悲む行路の難、

【略傳】喩鳧字は坦之、毘陵の人、開成の進士、烏程の令に卒す、

【句釋】●龍翔は寺號なり、唐河南道虢州、今日の河南省陝州靈寶縣南四十里に在り、建立の年月未詳なるも、大本山にして古今住する者は悉く名僧とす、特に元代蒲室大訴の住せしを以て名を馳す、道園の『學古錄』雁門の『雁門集』等に龍翔寺の名多く見ゆ、喩鳧が此の寺に寓せし時、胡權が來訪を喜んで作るものなり、林棲●無異歡折角來訪せられたるも、馳走する物は何にも無しとの意、煮茗就花欄●茶を烹て以て花園の欄干に就て座を設くるなり、雀啄北窗晩●僧開西閣●寒正に宿せんとする晩日に雀が食を求む、客を過せんと欲して僧は西閣の窗を開くも寒し、衝橋二水急、扣月一鐘殘●素隱の說に依れば、龍翔寺に十境ありて、此の二句は卽ち其の二なりと、二條の水が橋を衝くこと甚だ急、一鐘の響きが月を扣き出して其の聲に餘韻あり以て殘と云ふ、明發還分手●此の夜は語り明したるも明發には分手する、分手する以後は、徒悲行路

難●此の夜は世事を忘れて愉快に談話したるも、分手後は還人生の行路難を悲しまざるべからず、心中甚だ悲しむ所ありしものの如し、

秋晩郊居　任蕃

遠聲霜後樹　秋色水邊村　野徑無來客　寒風自動門
海山藏日影　江石落潮痕　惆悵高飛晩　年年別故園

【句釋】●秋晩郊居●野外郊居の作、遠聲霜後樹●霜を經たる樹は落葉の爲め其の聲を遠く聞く、秋色水邊村●耳に入る聲と、眼に入る色と、共に是れ秋聲なり秋色なり、共に是れ寂寞なり、野徑無來客●寒風自動門●郊居隱遯の人訪ふ者無き筈なるに、門を動かすものあり、氣が付きて知る是れ寒風なることを、海山藏日影●江石落潮痕●住居する處海に近し、而かも前面に山あり、常に日影を藏くす、而して潮の退くときは江石より潮水の落つるあるのみ、惆悵高飛晩●此の郊居に棲住するの晩かりし事を惆悵するなり、卓茂曰く「寧ロ能ク高ク飛ビ遠ク擧リ人間ニ在ラザ

ランヤ」と、年年別故園隱棲の好きを平常に說き乍ら、其の實行を爲さずして今日に至るまで故園に別れしを悔ゆるなり、

友人南游不レ還　于武陵

相思春樹綠　千里各依依　鄠杜月頻滿　瀟湘人未レ歸
桂花風半落　煙草蝶雙飛　一別無二消息一　水南蹤跡稀

【句釋】友人南游不還此の詩は于武陵が妻の作とす、武陵が集に此の詩ありしを以て錯つて武陵の作とす、武陵が商洛巴蜀の間に往來して久しく還らず、妻之を戀うて作る、是の故に友人とあるも良人の意味に見るべし、相思春樹綠相思樹と稱する樹あり、和名を「タウアヅキ」と稱す、傳說に昔し人あり邊地に死す、其の妻之を思うて樹下に哭死す、因て以て名くと、嶺南に多くあり、高さ丈餘白色、其の葉槐に似たり、春に及んで葉正に綠なり、千里各依依千里を隔たり情に耐へざるを依依と云ふ、鄠杜月頻滿鄠縣と杜縣となり、共に今日の陝西省に屬す、

妻の住する方、歲月流水の如く、早や已に中秋と爲る、瀟湘人未歸瀟湘は今日の湖北省に屬す、良人の客と爲る地、桂花風半落相思樹の綠なる時別れて今は早や秋日の桂花正に落つ、而かも良人は猶未だ還らず、煙草蝶雙飛草の上に煙生ず、此の邊を蝶が雌雄雙び飛ぶ、妾の獨棲の感良人は知るや知らずや、一別無消息、水南蹤跡稀水南は瀟湘を云ふ、瀟湘が旅行先きなるに消息も來らず、其の蹤跡も判然として瀟湘に在るや否やを知らざるなり、

夜泊淮陰　項斯

夜入二楚家一煙　煙中人未レ眠　望來淮岸盡　坐到酒樓前
燈影半臨レ水　箏聲多在レ船　乘レ流向レ東去　別レ此易レ經レ年

夜楚家の煙に入れば、煙中人未だ眠らず、望み來れば淮岸盡き、坐ながら到る酒樓の前、燈影半ば水に臨み、箏聲多く船に在り、流に乘じて東に向ひ去らば、此を別れて年を經易からん、

【句釋】淮陰は唐の淮南道楚州、今日の江蘇省淮安府淸河縣東南五里とす、今日黃海の射陽港口に夜泊せしなり、夜入楚家煙、煙中人未眠古の楚國卽ち淮陰なり、楚國の人家の煙を認めて

船を入る、其の時人家は猶未だ眠らず、望來淮岸盡、坐到酒樓前舟を下らず直ちに料亭の前に達するなり、燈影半臨水、箏聲多在船夜泊して船中より見る所の景、海岸の實況知るべし、乘流向東去潤州の丹徒縣は項斯の赴任する所、此の潤州に向ふ途中此に夜泊するなれば、明日は去て此に向はざるべからず、別此易經年此の地と離別して再泊するは復何年なるやを知らず、感慨深きなり、

秋夜宿淮口　　景池

露白草猶青　淮舟倚岸停　風帆幾處客　天地兩河星
樹靜禽眠草　沙寒鹿過汀　明朝誰結伴　直去泛滄溟

露白うして草猶青し、淮舟岸に倚つて停まる、風帆幾處の客ぞ、天地兩河の星、樹靜にして禽草に眠り、沙寒うして鹿汀を過ぐ、明朝誰か伴を結んで、直ちに去つて滄溟に泛ばん、

【句釋】景池は傳未詳、南國の人にして鄉貢生として長安に來るも下第して故鄉へ還る時、此の詩を作るならんと云ふ、淮口は江蘇省の揚州なり、露白草猶青草の青さは露の白きが爲め一

層明かに見える、淮舟倚岸停岸に倚らざれば舟停る所なし、露は君に譬へ、草は小人に譬へ、淮舟は自身の漂泊、僅かに岸に倚つて身を繫ぐに譬ふとの裏面の解も要するに誤まらず、風帆幾處客東西南北より舟にて集まる客、何の用なるや、何人なるやを知らず、天地兩河星天の銀河と、地の河海と、擧目俯目悉く星光なり、樹靜禽眠草、沙寒鹿過汀岸上の樹には禽眠るなり、沙汀の邊には鹿が食を求むる爲め來るなり、明朝誰結伴旅は道連れ古今東西別なし、明日此を去て他に向ふ伴を爲す者は誰ぞや、直去泛滄溟滄溟の廣き、一人の行は甚だ寂し、伴を求めんと欲する所以なり、

村行　　姚揆

天淡雨初晴　游人恨不勝　亂山啼蜀魄　孤棹宿巴陵
影暗村橋柳　光寒水寺燈　罷吟思故國　窗外有漁罾

天淡くして雨初めて晴る、游人恨勝へず、亂山蜀魄啼き、孤棹巴陵に宿す、影は暗し村橋の柳、光は寒し水寺の燈、吟を罷めて故國を思ふ、窗外に漁罾あり、

【句釋】 姚揆は傳未詳、村行の題目では單に叙景に過ぎざる如く見ゆれども、詩に依て案するに感慨深きものの如し、下第して故國へ歸り、又京へ上るとき、巴陵に旅泊して此の詩を作ると前人の解あり、或は信ならん、天淡雨初晴天の濃かなるは雨の爲め、天の淡なるは晴れたるが故なり、游人恨不勝恨の一字に無限の味あり、恨の恨たる所以は以下の句を生ず、亂山啼蜀魄「ホトトギス」の不如歸去と啼く聲を聞く、其の聲亂山の中より出づ、之を聞く何を以て勝へん、孤棹宿巴陵蜀魄は畢竟自ら啼くのみならんも、我は孤舟一棹の身、今巴陵に宿泊し旅寓の感に勝へざるなり、影暗村橋柳、光寒水寺燈巴陵宿泊中見る所の景、村橋に在る柳は枝繁ければ影暗く、水寺に在る燈は水に映ずる故光寒し、罷吟思故國、窗外有漁罾此の詩を作り自ら吟じ罷めて其の心は故國に移る、而してフト窗外を見れば漁罾が掛けてある、鄉國の狀愈よ目に彷彿たり、

題甘露寺

曹松

香門接巨壘　畫角間清鐘　北固一何峭　西僧多此逢
天垂無際海　雲白久晴峯　旦暮然燈外　潮頭振蟄龍

香門巨壘に接し、畫角清鐘に間はる、北固一に何ぞ峭なる、西僧多くは此に逢ふ、天は垂る無際の海、雲は白し久晴の峯、旦暮然燈の外、潮頭蟄龍を振す、

【句釋】 甘露寺は夏口に在り、香門接巨壘香門は寺門と同じ、寺門と巨壘卽ち石頭城址と接するなり、畫角間清鐘清鐘は寺中より出るもの、畫角は巨壘より出るもの、其の聲が混じて聞えるなり、北固一何峭北固山は他に勝れて一山峭絶なり、寺は此の北固山に在るなり、西僧多此逢西竺の僧は漢土に來り多くは此の寺に寓す、天垂無際海寺門より望む所の景色、今日の黃海卽ち是れ寺門より望む所、雲白久晴峯峯上は雨少なきを以て久しく晴る、雲掛りて常に白し、旦暮然燈外佛敎に然燈佛と稱する佛あり、今此の句は佛名を言ふにはあらず、字の如く寺にて旦暮燈を然すなり、蓋し佛陀の事も全く關せずとは言ふべからず、潮頭振蟄龍潮の滿る時は龍神が蟄龍を振して寺門に向つて龍燈を獻せんとなり、此の燈を獻ずるは寺に安ずる佛陀に供養せんとするに在り、已前十七首

前實後虛

周弼曰く前聯は景にして實、後聯は情にして虛、前聯重くして後聯輕きは多く弱に流る、唐人此の體最も少なし、必ず妙句の易ふべからざるを得て、乃ち其の格に就けり、蓋し發興盡るときは、則ち繼ぐに難し、後聯稍や間ふるに實を以てせば、其れ庶からん乎、今周弼の此の言に對し、一一批評せず、實と謂ひ、虛と謂ひ、前論に已に盡くせり、

秋夜獨坐　　王維

獨坐悲雙鬢　空堂欲二更　雨中山菓落　燈下草蟲鳴
白髮終難變　黃金不可成　欲知除老病　唯有覺無生

獨坐雙鬢を悲む、空堂二更ならんと欲す、雨中山菓落ち、燈下草蟲鳴く、白髮終に變じ難し、黃金成すべからず、老病を除くを知らんと欲せば、唯無生を覺るに在り、

【句釋】秋夜獨坐他人に在つては凡題なり、輞川に在つては好題なりと知れ、獨坐悲雙鬢獨と雙と字を對す、鬢を左右に分つ故雙なり、其の雙鬢の白くなるを悲しむ、空堂欲二更空と二と字を對す、自身以外に人無し、空堂なる所以、一夜を五更に分てば二更は今日の午後十時なり、雨中山菓落、燈下草蟲鳴此の二句は所謂景にして實なるもの、獨坐寂寥として冥目する、時雨は蕭蕭と灑ぎ其の中に於て山菓の落る聲あり、又青燈の下を見れば何處より來るや知らず草蟲が啾啾と鳴く、白髮終難變、黃金不可成此の二句は所謂情にして虛なるもの、一旦黑髮が白髮と成つた後は遂に復變化すべからず、「白髮ハ終ニ黑髮ト變ジ難ク」の意なり、土は土なり、土を以て黃金と成すべからず、「土石ハ遂ニ黃金ト成ス可ラズ」の意、土を握つて金と化し、白髮を變じて黑髮と成す類の事、印度の外道にも漢土の仙術にも其の法は傳ふ、而かも眞の法にあらずして、俗を欺く惡法なり、以て天子の仙術を喜ぶものを諷す、欲知除老病、唯有覺無生生とは、老と病と死とを佛家に四苦と稱す、今其の二苦を出す、此の老病を除くことは人間としても又生物としても、絕對に能はざる所、而かも是を除くの法あり、他にあらず、佛道の精髓を領得するにあり、精髓とは何ぞ、曰く唯無生法忍を覺るにあり、『仁王經』に伏忍、順忍、信忍、無生法忍、寂滅法忍の五忍を出す、其の第四の忍を證得すれば、老も苦にあらず、病も苦にあらず、皆是れ因緣所生の法と知るが故に、病の當相本來空なりと觀ず、本來空なれば卽ち苦もあるべ

き筈なし、是の玄理を證得する者は始めて無生を覺る人と言ふなり、

秋夜汎舟

劉方平

林塘夜汎舟　蟲響荻颼颼　萬影皆因月　千聲各爲秋
歲華空復晩　鄉思不堪愁　西北浮雲外　伊川何處流

【句釋】秋夜汎舟汎は泛と同じ、林塘夜汎舟林塘に舟を汎ぶ、大河にあらざるなり、蟲響荻颼颼有情の蟲も鳴き、非情の荻も風の爲め颼颼と音を爲す、共に林塘の景、萬影皆因月、千聲各爲秋目に入る種種の影は皆天の一月に因る、耳に入る種種の聲は皆時の秋なるが爲めなり、歲華空復晩、鄉思不堪愁春夏秋冬四季の中、秋晩は已に歲華の盡きるに近きなり、異鄉に寓泊するもの其の鄉愁に堪へざるなり、西北浮雲外長安城より方角を定むれば鄉里の河南は西北に當る、其の西北も浮雲が重なるなり、伊川何處流河南を流るる川を伊川と稱す、之を望むも見る

べからず益す愁ふる所以なり、

春日臥病書懷

劉商

楚客經年病　孤舟人事稀　晩晴江柳變　春夢塞鴻歸
今日方知命　前年自覺非　不能憂歲計　無限故山薇

楚客年を經て病む、孤舟人事稀なり、晩晴江柳變じ、春夢塞鴻歸る、今日方に命を知る、前年自ら非なるを覺る、歲計を憂ふること能はず、限り無し故山の薇、

【略傳】劉商字は子夏、徐州彭城の人、進士と爲り、貞元中、比部員外郎に累官す、後出でて汴州觀察判官と爲る、疾を辭して印を掛けて歸り鄉に老ゆ、

【句釋】楚客經年病楚國の産ゆる楚客と云ふ、徐州は古の楚國なり、他鄉に在つて多年病む、孤舟人事稀一身を孤舟に比す、東西南北定處なければなり、尋常人の爲す事は我が如き病者には稀なり、晩晴江柳變此の變は衰ふる變ならず、盛んなる方の變なり、春夢塞鴻歸夢を一本暮に作る、春の暮と見るも、春は一夢と過ぎてと見るも共に支障なし、塞鴻の歸るを見て愈よ我

が臥病の身を悲しむ、今日方知命、前年自覺非年が今日五十に成つたと言ふにはあらず、五十の今日漸く天命を知りしと言ふなり、遼伯玉は五十にして四十九年の非を知る、今借用して我が事に用ふ「方ニ今日ノ命ヲ知リ、自ラ前年ノ非ヲ覺ル」の義なり、不能憂歳計故園へ還るも生活は憂ふるに足らずとの意なり、何故に憂へざるやと云ふに無限故山薇故郷の山には薇が無限に生ず、何ぞ活計の道を憂へん、伯夷叔齊の二人は首陽山に隱れ薇を採つて食ふ、此の二人は周の粟を食ふを嫌ふ爲めなり、我は官祿を食むを嫌ふ爲めなり、

林館避暑　羊士諤

池島清陰裏　無人泛酒船　山蜩金奏響　華露水精圓
靜勝朝還暮　幽觀白已玄　家山正如此　何不賦歸田

池島清陰の裏、人の酒船を泛ぶるなし、山蜩金奏響き、華露水精圓なり、靜勝朝還暮、幽觀白已に玄、家山正に此の如し、何ぞ歸田を賦せざる、

【略傳】羊士諤は貞元元年の進士、順宗の時、宣歙巡官に至る、王叔文に惡まれて汀州寧化縣尉に貶せらる、

【句釋】林館避暑寧化に在つて作る所、池島清陰裏、無人泛酒船風景佳なりと雖も、僻地は人の游ぶなし、自分以外に此の池島に於て酒船を泛べる者一人も無し、山蜩金奏響蜩は「セミ」の如き聲を發して鳴く、花露水精圓花に湛ふる露は水晶の如く圓かなり、靜勝朝還暮『老子』に以レ靜勝レ熱の語あり、今の句玄理を說くにあらず、字の如く靜かに勝を看て朝還暮を送るなり、幽觀白已玄幽地に居て四方を遊觀して樂しむを幽觀と云ふと解したる說は淺し、昔し漢の揚子雲は、玄尙ほ白しと稱したるが、我は反對に白が玄と爲ると解する方深し、幽觀卽ち世事と競爭の念なき故に白髮が却つて黑髮と變するを覺ゆと見るべし、家山正如此我が故郷の山の景色も、風情も此の林館の如くなるべし、何不賦歸田張衡は昔し歸田賦を作りて故山へ歸りたり、我も早く歸田賦を作らんとなり、

柏梯寺懷舊僧　司空圖

雲根禪客居　皆說舊吾廬　松日明金像　苔龕響木魚
依棲應不阻　名利本來疎　縱有人相問　林間懶拆書

雲根禪客の居、皆說く舊吾が廬と、松日金像に明かに、苔龕木魚響く、依

棲應に阻てざるべし、名利本來疎なり、縱ひ人の相問ふあるも、林間書を拆くに懶からん、

【句釋】 柏梯寺は華州に在り、昔し道士あり華州の山谷間に於て登仙せんと欲す、遂に柏樹を以て輪材と爲し、登り去る、華州に車箱谷あり此の寺此に在り、司空圖は再游して舊時會ふ所の僧を懷うて此の詩を作る、雲根禪客居石の異名を雲根と云ふ、石邊は禪客卽ち僧の居房がある、皆說舊吾廬寺中の僧が皆司空圖の爲め說く是れ君が嘗て寓せし房なりと、松日明金像松間の日光は佛殿中の金像卽ち佛陀の身形を明かに照して見ゆ、而かも舊時の僧は在らざるなり、苔龕磬木魚龕は石の竅穴なれば中に於て木魚を叩く、其の音が響くなり、木魚は六朝以後漢土にて始めて製せし佛具の一種、印度傳來にはあらず、依棲應不阻此の句は字の如く當面より解すれば義理分明を缺く、裏面より解すれば玄理を含む、裏面の解とは何ぞ、古來の注太だ善、曰く佛家の上にては不生不滅が眞の法門なれば、今日は影堂に其の身を置くが、昔し法を說きて此の寺に依棲せられしも、生死に於て一如、決して生死に阻せられず、過去も未來も自由の境界ならんとなり、生死解脫の高僧なりと言ふなり、名利本來疎名を求むる欲も、利を欲する念も此の僧はモトヨリ薄疎なりしなり、縱有人相問、林間懶拆書此の二句は容易に解し難し、素

隱曰く、我が舊知の僧は此の苔龕の中に儼然として居る、然らば此を去つて後、文を進上して互に相問ふべけれども本より名利を嫌ひたる人なれば、今は林間の龕塔の中にて、書を拆きて見ることむづかしく思しめさん」書簡の往復が何ぞ名利の事と關せん、愚注に近し、又人の說に結句は起句を結べるもの、起句の舊吾廬と答へし僧は司空圖の尋たる禪師の弟子なるべし、是亦師の僧と同じく悟道に入りしものと見なし、名利本來疎にして世に求むる事のなきものなれば、人と交はる事も、累しと思ふなるべし、縱ひ人より文通などありて相訪問することあるも、昔の如く高堂に棲むわけにはあらず、林間に僅かの小廬を結んで居る者なれば、他より來る書を拆き見るも甚だ懶きことならんと司空圖より察して云へるなり、此の說愈よ拙、一一の文字に拘泥したる結果此の如く錯誤の說を爲すものなり、要するに僧に問ふにあらず、人が司空圖に問ふなり、君が柏梯寺に入つて舊僧を懷ふ情は如何と司空圖は答へてソンナツマラン事は、尋ぬるに及ばず、尋ぬる者の愚なり、我はソンナ愚問を爲すものに答ふるに懶しとなり、結句は作者自身にかかり、他に係るものにあらず、

早春

傷懷仍客處　病眼却華朝　草嫩侵沙短　氷輕著雨消

風光知レ可レ愛　客鬢不二相饒一　早晩丹丘伴　飛書肯見レ招

懷を傷めて仍ほ客處す、病眼却つて華朝、草嫩くして沙を侵して短く、氷輕くして雨を著けて消ゆ、風光愛すべきを知る、客鬢相饒さず、早晩丹丘の伴、書を飛ばして肯て招かれん、

【句釋】●●●●●●傷懷仍客處懷を傷ましむる所以は自己の爲めならず、古注にある如く黃巢の亂後、昭宗は華州に在り、司空圖を召して兵部侍郎と爲す、足疾を以て自ら乞ひ聽されて還る、還ると雖も一念君を懷ひ國を憂へざるは無し、是を以て客寓中、一念天下の事に及べば、傷懷何ぞ堪へんや、病眼却●●●●●●華朝聽されて還らんと欲する時の作なれば、天子も自身も今華州に在るなり、此の華州に客寓中、病眼と爲る、生憎や此の病眼の時、一年中第一好期の早春に出會したり、惜い哉病眼にて分明に見る能はざるなり、佛敎に病眼空華の語あり、眼が病ある故に華なきに華を認むるの事、今は是と異なる、草嫩侵沙短●●●●●●庭前の實景を叙す、嫩は俗語の「若キ」なり、沙を侵して出でたるも其の芽は猶ほ短なり、氷輕著雨消●●●●●●池中の實景を叙す、氷も已に融解して池中に浮で而かも雨の爲めに消流する、風光知可愛●●●●●●早春の景色は人間に譬ふれば正に少年少女なり、正に愛すべきを知る、而かも客鬢不相饒●●●●●●は多なり、風光の少女は愛すべしと雖も、我が白髮の多きを如何せんと悲しむなり、早晩丹丘伴●●●●●●早晩は「イツカ」と訓む、仙人の住處を丹丘と云ふ、以て朝廷に譬ふ、朝廷に仕ふる舊友を指して伴と云ふ、飛書肯見招●●●●●●司空圖に書を寄せて君も朝廷へ再仕して天下の爲め盡くし玉へと招くなり、

江行

地闊分二吳塞一　楓高映二楚天一　曲塘春盡雨　方響夜深船
行紀添二新夢一　羇愁甚二往年一　何時京洛路　馬上見二人煙一

【句釋】江行●●此の詩は素隱禪師の解に曰く、王凝が宣歙觀察使爲りしとき、辟して幕府に置く、召して殿中侍御史に拜せらる、凝の府臺を去るに忍びずして、勅せられ左遷す、主簿盧相攜朝に還るとき、陝虢を過ぎ、司空圖を訪ふ、深く愛重して詩を留めて曰く、氏族司空貴し、官班御

地闊うして吳塞を分ち、楓高うして楚天に映ず、曲塘春の盡くる雨、方響夜の深くる船、行紀新夢を添へ、羇愁往年より甚し、何れの時か京洛の路、馬上に人煙を見ん、

史雄なり、老夫如し且つ在らば、未だ途窮を嘆ずべからず、就て觀察使盧渥に屬して曰く、司空御史は高士なり、渥遂に表して僚佐と爲す、攜執政たり、召して禮部員外に拜して、尋で郎中に遷さる、是に由りて之を觀れば、宣歙の間より陝虢の方へ左遷せらるる時に、吳楚の間を通るとて此の詩を作りたるものならん、地闊分吳塞古吳の土地廣闊にして、其の塞を設けし處多きなり、楓高映楚天楚と吳とは所謂一江を隔つのみ、今見る楓樹の高くして楚天に映ずるを、曲塘春盡雨塘の曲りし處花落ちるを以て春の盡きる雨の爲めなるを知る、方響夜深船方響は樂器の名、鐵を以て之を爲くる、長さ九寸、廣さ三寸、上を圓にして下を方にす、船に在る役人輩が夜警を爲す爲めに之を吹く、行紀添新夢行紀は紀行なり、紀行文なり、我が紀行文には外の事は書かず、唯每夜善夢を見る、今夜は昨夜より尙ほ善夢を見る、卽ち添ふる所以なり、羈愁甚往年羈は旅なり、旅中の愁は往年より今年は一層甚だしとなり、其の故は榮轉にあらずして左遷なればなり、何時京洛路、馬上見人煙今日左遷せられて江行の詩を作るが如きも、是ぞ止むを得ず、然れどもイツカ京洛卽ち長安城中の人と爲つて、馬上に於て京の人家の炊煙の盛んなる狀を見ることができるやらとなり、感慨の深き尤も結句にあり、

春日

李咸用

浩蕩春風裏　徘徊無所親　危城三面水　古木一邊春
衰世難行道　花時不稱貧　滔滔天下者　何處問通津

浩蕩たる春風の裏、徘徊親む所なし、危城三面の水、古木一邊の春、衰世道を行ひ難し、花時貧に稱はず、滔滔たり天下の者、何れの處か通津を問ん、

【句釋】李咸用は隴西の人、傳未詳、浩蕩春風裏春風は私無く、東西南北悉く春風裏に在るを云ふ、浩蕩は廣大を形容するなり、徘徊無所親此の廣き春風の裏を徘徊するも、一人も自分の知己には逢はずとなり、危城三面水是れ隴西の實況とす、危は孤危傍らに物無きを云ふ、而して城外見る所は何ぞ、三面皆水のみ、要害堅固なると知る可し、古木一邊春首を回らして一方を見れば唯古木あるのみ、衰世難行道人慾の私が衰世に降るに隨つて多くなる、上代聖人の盛世とは異なる、道行ひ難き所以、花時不稱貧花時に花を賞するは所謂「花ヨリ團子」にて、花は價を要せざるも、團子は價を要す、其の團子を購ふ遂に貧には及ばざる所、故に花時は高貴の人に稱うて、貧賤の者には稱はず、滔滔は多數の形容、天下者、何處問通津『論語』に曰く、

長沮と桀溺と耦して耕す、孔子之を過ぎ子路をして津を問はしむ、桀溺曰く子は誰と爲す、曰く仲由と爲す、曰く是れ魯の孔丘の徒か、對て曰く然り、曰く滔滔たる者天下皆是なり、而して誰とともに之を易へんや、天下の者皆惡事を謀りて善事を修せず、果して孔子の如く道の通津を問ふ者はあるまじとなり、

雲居長老　　王貞白

嶽路躡雲上　來參出世僧　松敲半巖雪　竹覆一溪氷
不レ說二有爲法一　非レ傳二無盡燈一　了然方寸內　應祇見二南能一

嶽路雲を躡んで上り、來つて參ず出世の僧、松は敲つ半巖の雪、竹は覆ふ一溪の氷、有爲の法を說かず、無盡の燈を傳ふるにあらず、了然たる方寸の內、應に祇だ南能を見るべし、

【略傳】王貞白字は有道、乾寧二年の進士、後校書郎と爲る、

【句釋】雲居は寺名、江州に在り、長老は僧に對する敬語、雲居寺の首座長老なり、嶽路は山路なり、躡雲上、來參出世僧出世僧とは高僧と云ふが如し、山路を躡み來りて以て參謁するもの

のは世間を超出する高僧なり、松敲半巖雪半巖の雪積む處、孤松獨敲つ、竹覆一溪氷一溪氷りて水流れず、而して其の溪上を竹が覆ふ、共に嚴冬の景なり、不說有爲法世間の法は何事に依らず、總べて有爲の法なり、有爲の法は夢幻泡影、頼むに足らざるものなり、高僧は其の頼むに足らざる法は說かず、非傳無盡燈無盡燈は元來其の法の永く傳ふるを意味するもの、然るに今其の永く傳ふる法を傳ふるにあらずと云ふは、口を以て口に傳ふる法を傳ふるにはあらず、心を以て心に傳ふる法を傳ふるなり、自悟の法を傳ふる意味裏面にありと知る可し、了然は「ハツキリ」卽ち分明の事なり、方寸內胸を指して方寸と云ふ、長老の方寸何物をか存ずるや、應祇見南能南宗の惠能禪師を指して南能と云ふ、禪の第六祖にて達磨の眞法を傳ふる人、今此の長老は他のものを見ず、唯南能を見るのみ、見るは卽ち其の人を仰ぎ其の人を貴ぶ故なり、

送二許棠一　　張喬

離レ鄉積二歲年一　歸路遠依然　夜火山頭市　春江樹杪船
干戈愁二鬢改一　瘴癘喜二身全一　何處營二甘旨一　波濤浸二薄田一

鄉を離れて歲年を積む、歸路遠くして依然、夜火山頭の市、春江樹杪の船、
干戈鬢の改まるを愁へ、瘴癘身の全きを喜ぶ、何れの處か甘旨を營まん、
波濤薄田を浸す、

【句釋】張喬は池州の人、後、九華山に隱る、許棠は宣州の人、許棠南國に往て、池州を過て張喬を訪ふ、此の詩を作り以て送る、離鄉積歲年故國を離れ他國に在る年月の久しきを云ふ、歸路遠依然今日漸く歸路に就く、而かも遠きこと依然たり、夜火山頭市道中所見の景山頭に當つて夜火を見るは卽ち山城の街市を知る、春江樹杪船山城より望めば船が樹杪に在る如く見ゆと解するは誤る、江水に遡るとき、船は漸漸と高くなり恰も樹杪を行く如く見ゆるを云ふ、蜀へ行きし人は皆其の實況を知るなり、干戈愁鬢改、瘴癘喜身全戰亂に際會して種種心痛するが故に鬢毛は次第に改まりて黑が白と成る、是を愁ふるも、幸に瘴癘卽ち風土病に出會するも自身は此の惡疫に罹らず是を免かる、喜ぶ所は此に在り、一憂一喜相互なるを云ふ、何處營甘旨甘旨は美味を云ふ、單に美味にはあらず父母に供する物を云ふ、歸來父母に獻せんと欲する物も戰亂後なれば是を營むに容易ならざるべしと解するが普通なるも、然るときは結句の意味

が全く消滅する、故に或人は許棠が父母を養ふことにあらずして、張喬が自身の事を叙するなり、折角君が歸りて我が鄉里の家を訪問されても、所謂、波濤浸薄田で少しばかりの我所有の田も波濤の浸す所となつて稻の收穫も有るまじ、然らば何の馳走することも出來ずと、薄田の文字は他人に向つて言ふ語にあらざることは普通なり、人の所有する田を薄田と云ふは例の無きこと、然れども案ずるに許棠が自ら云ふ所を張喬が代つて云うたと見れば、又通せざるにあらず、此の種種の辛苦、卽ち往も歸も許棠が不遇なることに逢ふ運命の人なりと解せば可ならずや、已前共に十首、

穆陵關北逢人歸漁陽　劉長卿

逢ㇾ君穆陵路　匹馬向ニ桑乾一　楚國蒼山古　幽州白日寒
城池百戰後　耆舊幾家殘　處處蓬蒿遍　歸人掩ㇾ淚看
君に逢ふ穆陵の路、匹馬桑乾に向ふ、楚國蒼山古り、幽州白日寒し、城池百戰の後、耆舊幾家か殘る、處處蓬蒿遍し、歸人淚を掩うて看ん、

【句釋】穆陵關は今日の河南湖北二省の境に屬す、沂州沂水龍山の北、漁陽は今日の直隸省

順天府密雲縣の西南三十里、劉長卿は吳仲孺の誣奏する所と爲つて姑蘇の獄に繫がれ、久うして潘州南中の尉に貶せらる、劉が爲め之を辯ずる者あり、睦州の司馬に移さる、此の詩、人は漁陽に歸り、自身は睦州へ赴く時の作なりと古注に見ゆ、眞に近し、逢君穆陵路、匹馬向桑乾我は睦州に行かんとし、君は漁陽へ歸らんとし、匹馬に鞭つて、桑乾に向ふ、突然として此に相逢ふなり、楚國蒼山古、幽州白日寒今二人相逢ふ處は古の楚國なり、四面皆山にして平處あるなし、人の歸る處の漁陽は是幽州なり、楚山は千年蒼蒼たるも、幽州は白日の氣寒きなり、白日の寒きは亂後の氣凄凄たるの謂なり、城池百戰後、耆舊幾家殘安祿山が戰亂の中心地は此の漁陽に在れば、城池百戰を經たること知るべし、或は戰歿、或は遁逃、漁陽の耆舊存する者果して幾家なる、處處蓬蒿遍此の地荒涼として眼に映ずるものは「ヨモギ」の遍く繁るのみ、歸人掩淚看肥地も瘦地と化す、淚を掩うて看るのみ、袂を面に當てて泣くことを掩と云ふ、

早行寄二朱放一　戴叔倫

山曉旅人去　天高秋氣悲　明河川上沒　芳草露中衰
此別又千里　少年能幾時　心知剡溪路　聊且寄二前期一

山曉けて旅人去る、天高うして秋氣悲む、明河川上に沒し、芳草露中に衰ふ、此の別又千里、少年能く幾時ぞ、心知剡溪の路、聊か且つ前期を寄す、

【句釋】●●早行は曉來早起して旅途に就くなり、此の時、朱放に此の詩を寄す、朱放は傳未詳、早行する者は戴叔倫なり、山曉旅人去旅人は戴自身を云ふ、越山の早曉に出發する、天高秋氣●悲秋天は特別に高きものにあらず、秋は晴日特に高きを覺ゆるなり、秋氣は凄凄依て悲しきが如し、明河川上沒明河は銀河なり、銀河の影が川の水面に沒するなり、芳草露中衰芳草の文字多く春に用ふるものの如し、此の詩秋に用ふ以て例と爲すべし、秋の芳草も露の爲め衰るを看る、二句共に曉景なり、此別又千里、少年能幾時此の別離が千里を隔つる事となる、千里を隔つるは再會の期し難きを意味す、縱令ひ再會するも共に少壯の年にあらずして白首の人と爲るならん、心知剡溪路友人の事を心知と云ふ、心を許して知る所の者なればなり、心知卽ち朱放は今剡溪に居るなり、其の朱放が居る所を挨拶せずして通過する能はず、是の故に聊且寄前期前に我が行くことを報知するを寄二前期一と云ふ、聊且は日本語の先以てと云ふが如し、

陝州河亭陪韋大夫二眺望　劉禹錫

雪霽太陽津　城池表裏春　河流添馬頰　原色動龍鱗

萬里思歸客　一盃逢故人　因高向西望　關路正飛塵

雪は霽る太陽津、城池表裏春なり、河流馬頰を添へ、原色龍鱗を動かす、萬里歸を思ふ客、一盃故人に逢ふ、高きに因つて西に向つて望めば、關路正に塵を飛ばす、

【句釋】陝州は今日の河南省河南府に屬す、靈寶、閿鄉、盧氏の三縣之に屬す、河亭は古注の如く河口に在る亭ならん、韋大夫は傳未詳、此の河亭に在つて二人が四方を眺望して此の詩を作る、雪霽太陽津陝州に太陽津あり、太陽關あり陝津とも茅津とも云ふ、此の津に於て雪の霽たる景を見る、城池表裏春見る所の景色、東西南北上下皆春ならざるは無し、河流添馬頰眺望する所の實景なり、馬頰は河の名、九河の一、德州安德縣の西南より出づ、句の意は氷結が融解したるを以て河の流れが增水すと云ふなり、原色動龍鱗而して一方、原野の面を見れば、雪解たる所、解けざる所あるを以て形容すれば龍鱗の如しとなり、萬里思歸客、一盃逢故人心唯歸を思ふのみ他事は思はず、何ぞ料らん故人卽ち舊友に逢うて途中の慰安を得たるや、一盃を

酌み交す中に萬里故鄉の遠きを聊か忘れたるなり、因高向西望、關路正飛塵酒を飲みながら高處に因て西天を望めば、正に是れ賊黨の姚令言や朱泚などが長安を犯す爲め馬塵を揚げて亂るなり、就て記す此の篇は本集の題目は下の如く長し、陝州河亭陪韋大夫、雪後眺望、因以留別、與韋有布衣之舊、一別二紀、經遷貶而歸、陝州の河亭韋大夫に陪して雪後眺望す、因て以て留別す、韋と布衣の舊あり、一別二紀、遷貶を經て歸る、本集に色は野　思は獨　因は登に作る、

巴南道中

岑參

渡口欲黃昏　歸人爭渡喧　近鐘淸野寺　遠火點江村

見雁思鄉信　聞猿積淚痕　孤舟萬里夜　秋月不堪論

渡口黃昏ならんと欲す、歸人渡を爭つて喧し、近鐘野寺に淸く、遠火江村に點ず、雁を見て鄉信を思ひ、猿を聞て淚痕を積む、孤舟萬里の夜、秋月論ずるに堪へず、

【句釋】巴南は四川省卽ち蜀に赴く途中なり、岑參は南陽の人、而して卒する所は蜀中なり、道中は一本舟中に作る、孰れにても可、渡口欲黃昏、歸人爭渡喧正に是れ渡口の實況、意味は

字の如し、歸人の二字を能く味ふべし、近鐘清野寺、遠火點江村渡口の喧爭に似ず野寺より出る鐘聲は良とに清閒なる如し、江村に見ゆる燈火は亦幽趣あり、見雁思鄉信、聞猿積淚痕天邊を過ぐる雁を見ては故鄉の音信を思はざるを得ず、樹上に啼く猿を聞ては淚痕を積まざるを得ず、火と雁は眼に入るもの、鐘と猿とは耳に入るもの、孤舟萬里夜、秋月不堪論普通の舟游とすれば秋夜舟中月に逢ふ、古を談じ、今を論せざるを得ず、然るに今の身は使して蜀に赴くの客、思鄉の心強くして他意なし、何ぞ月を評論するに堪へんや、所謂沒風流の人と爲るなり、記し畢りて本集を閲す、「巴南舟夜市」とあり、本集に從うて改む可し、

宿關西客舍寄嚴許二山人

雲送關西雨　風傳渭北秋　孤燈燃客夢　寒杵搗鄉愁
灘上思嚴子　山中憶許由　蒼生今有望　飛詔下林丘

雲は送る關西の雨、風は傳ふ渭北の秋、孤燈客夢を燃し、寒杵鄉愁を搗つ、灘上嚴子を思ひ、山中許由を憶ふ、蒼生今望あり、詔を飛ばして林丘に下さんことを、

【句釋】宿關西客舍寄嚴許二山人十一字の題なるが、本集には宿二關西客舍一寄二東山嚴許二山人一時天寶初七月初三日在二內學一見レ有二高道舉徵一の三十一字なり、今の題却て分明なり、雲送關西雨長安の西は悉く關西と云ふ、黑雲が一片起ると見る間に關西は早雨と爲る、風傳渭北秋長安を流るる川に渭水あり其の渭水の北より吹き來る風は已に秋氣を帶ぶるなり、蜀へ赴かんとして旅舍にて作るものなればなり、孤燈燃客夢夢の字を我邦人は所謂夢と正直に解すと雖も、元來睡や眠と殆んど同義に用ふる字なり、客眠を孤燈が照すことなり、夢となく醒むるとなくなぞと注するは眞に是れ夢中の解釋なり、寒杵搗鄉愁寒杵は元來衣を搗つ響きなれども、我より言はしむれば衣を搗つにあらずして一一我が愁を搗つが如し、鄉を思ふ心切なればなり、灘上思嚴子、山中憶許由嚴山人と許山人とを以て古の嚴子陵と許由との二人に比す、姓を同うし、其の高格を同うすればなり、嚴子陵は漢の光武帝の舊友にして、光武が天下を取り之を召せど至らず、漸くにして官を授くるも遁れ去つて灘上に釣を垂れ、人世の榮華を眼中に置かず、許由は堯帝が天下を讓らんと欲したるも辭して承けず、箕山に隱る、是亦天下の賢人なり、蒼生今有望蒼生とは百姓、卽ち天下の人民を謂ふ、天下の人民が今此の二山人をして良政を執らしめんと希望するなり、飛詔下林丘天下人民の希望する所なれば、天子亦之を用ひざるべからず、

遂に詔書を下して此の二山人をして相位に就かしめんとなり、林丘より下して廟堂の上に坐せしめんとなり、季昌曰く、按ずるに天寶六年、上天子廣く天下の士を求めんと欲す、一藝に通ずる者をして皆京師に至らしむ、李林甫、草野の士の對策論文なり其の姦惡を斥言せんことを恐れて乃ち郡縣に試練せしめ、名實相副ふ者を取て聞奏す、既に至るとき、皆試に詩賦論を以てす遂に一人も及第する者無し、林甫乃ち上表して賀す、野に遺賢無しと、此の結句暗に此の意を含むとの解或は信に近し、

夜宿龍吼灘思峨嵋隱者

官舍臨江口　灘聲已慣聞　水煙晴吐月　山火夜燒雲

且欲求方士　無心戀使君　異鄉何可住　況復久離羣

官舍江口に臨む、灘聲已に聞くに慣ふ、水煙晴れて月を吐き、山火夜雲を燒く、且つ方士を求めんと欲す、使君を戀ふに心なし、異鄉何ぞ住まるべきや、況んや復久しく羣を離るるをや、

【句釋】龍吼灘は今日の四川省嘉定府、卽ち當時の嘉州に在り、今日の地志に龍吟灘と謂ふ、

岑參は此嘉州の刺史たりし事あり、思峨嵋隱者成都府を去る千里にして此の嘉定府に峨嵋山あり、兩山相對して峨眉の如し、高さ日本里にして一里強と云ふ、此の隱るる人を思うて作る、

官舍臨江口峨眉縣令の官舍は江口に臨んで起つ、灘聲已聞灘聲を始めて聞く者は耳熟せざるが故に夜眠る能はざるも聞くに慣れたる者は何の喧噪も感せざるなり、月日久しく此に來つて住すればなり、水煙晴吐月龍吼灘の實況ならん、水煙も暗ければ月を吐く能はず、晴なるが故に月を吐く、山火夜燒雲峨嵋山の實況ならん、山家の火は高處にあれば雲を燒くかと疑はるるなり、且欲求方士方術卽ち仙術を學ぶ士を方士又道士と云ふ、火も恐れず、水も怖れざる人なり、而かも人世の榮華には希望を抱かず、我も其の方士を學ばんとの意を有す、無心戀使君止むを得ず今刺史卽ち縣令と爲るも、本心にはあらず、故に使君を戀ふの心無しと云ふ、使君は縣令なり、異鄉何可住美游は惡歸に及かざる意、他鄉好しと雖も住まるべからず、況復久離羣故鄉の南陽を去てより已に他鄉此の嘉州の刺史と爲つて三年を經過せり、親戚知己に離れ孤獨の生活を自ら憐むなり、嘉州の本領此に在り、毫髮も虛僞の言にあらざること其の傳にても知るべきなり、

南亭送鄭侍御還東臺

江亭酒甕香　白面繡衣郎　砌冷蟲喧」坐　簾疎月到」床
鐘催」離興急　絃緩」醉歌長　關樹應」先落」　隨」君滿路霜

江亭酒甕の香、白面繡衣郎、砌冷にして蟲坐に喧しく、簾疎にして月床に到る、鐘は離興を催して急に、絃は醉歌を緩うして長し、關樹應に先づ落つべし、君に隨ふ滿路の霜

【句釋】南亭送鄭侍御還東臺の九字、本集には南亭の上に趙少尹の三字を加ふ、素隱の解に曰く、岑參が蜀に在りし時、鄭氏が始め侍御の官たりしが、蜀へ貶せられ、今復本官に復し都へ還らんとす、時に趙少尹が此の人の爲め別離の燕を設く、參も此の時、別燕の席、卽ち此の南亭に來り此の詩を作つて送りしものならんと、江亭酒甕香南亭は江水に臨んであり、離別の酒甕非常に美酒なり、故に香氣多きなり、白面繡衣郎白面諸生の語は輕蔑したる語なるが、今此の白面は風貌の美なるを云ふ、繡衣郎俗に言ふ「オシヤレ」なるもの、俗に言ふ貴公子の風采あるを云ふ、砌冷蟲喧坐亭の砌下は冷冷として蟲鳴が坐に喧しく聞えるなり、簾疎月到床窗前の簾は疎なるを以て月影が漏れて床上に到る、別に簾を掲げざるなり、鐘催離興急夜深に至るまで酒を酌み、遂に曉鐘に近づき、最早や燕を撤するの場合に遑る、絃緩醉歌長鐘は無情なるを以て我の惜意を解せず、絃は有情なるを以て一刻も時を長うせんと緩緩と彈じて以て歌を長うす、關樹應先落季昌曰く前漢の侍御史綉衣直指あり、出るときは豸猶を討じ、大獄を理む、武帝の制する所なりと、卽ち御史は刑官なり秋官なり、君が此の秋官の役を以て歸らる、未だ冬ならざるも關門の樹は落葉すべし、樹の落葉は豸猶の沒落するに譬ふるなり、隨君滿路霜君が行くに隨がつて豸猶が衰滅する、是君が霜の如き役、霜の如き清嚴を以てなればなり、本集に路を鬢に作る、路を以て可とす、

南溪別業

結」宇依」青嶂」　開」軒對」翠嚋」　樹交華兩色　溪合水重流
竹塢春來掃　蘭樽夜不」收　逍遙自得意　鼓」腹醉中游

宇を結んで靑嶂に依り、軒を開いて翠嚋に對す、樹交つて華兩色、溪合して水重流、竹塢春來つて掃ふ、蘭樽夜收めず、逍遙自得の意、腹を鼓して醉中に游ぶ、

【句釋】南溪別業『三體詩講義』に劉良が別業別居也とある、誤讀の結果此の滑稽を演ぜるなり、岑參の別業と見るべし、結宇依青嶂宇は字義に於て非常に大小の意義を異にす、四方上下を指して宇と云ふ場合は大ならずや、屋宇と指す場合は極めて小ならずや、今の句は屋宇にて極めて小庵を指す、嶂は山なり、山に依つて宇を結ぶ、開軒對翠畴軒は長廊の窗あるもの之を開いて見れば、前方は翠色を呈する田疇ある、前句は高處、後句は低處、樹交華兩色紅樹と紫樹と接近してあれば、其の花色も二種ある道理なり、溪合水重流南溪と北溪とが相合して流るれば卽ち是れ重流の道理なり、竹塢春來掃塢を一本徑に作る、孰れなるも妨げず、春に至りて洒掃する情性の致す所にあらず、春は道路の掃除手を下し易ければなり、實際を知る者にあらざれば知るを得ず、蘭橈夜不收蘭の字は竹に對して用ふ、酒の香氣の烈なるを以て譬ふ、收めざるは深夜に到るも尙酒を飲むと云ふ意味なり、逍遙自得意自ら得意とする所は此の間の逍遙卽ち徘徊にあり、鼓腹醉中游此の句は太平を樂む極度を云ふ、飽くまで食ひ、心中愁全く無きなり、

泊舟盱眙

常建

泊舟淮水次　霜降夕流清　夜久潮侵岸　天寒月近城

平沙依雁宿　旅館聽雞鳴　鄉國雲霄外　誰堪羈旅情

舟を泊す淮水の次、霜降つて夕流清し、夜久しうして潮岸を侵し、天寒うして月城に近し、平沙雁の宿するに依り、旅館雞鳴を聽く、鄉國雲霄の外、誰か羈旅の情に堪へん、

【句釋】泊舟盱眙盱眙は縣名、唐代は淮南道に屬す、今日の安徽省泗州なり、盱眙縣の令と爲つて赴く時、舟中に夜泊したる事を賦す、泊舟淮水次安徽泗州の盱眙縣に屬する淮水は「臨淮」と稱す、單に淮と言へば河南省汝寧府正陽縣の東南、而して西淮は河南の南陽府唐縣の東南、北淮は江蘇省に屬す、淮の區域は頗る廣し、泗州の淮は洪澤湖に近づき、川口の尤も廣き處とす、次は「ヤドル」「ホトリ」の義あり、今「ホトリ」の義を取る、霜降夕流清秋晩初冬の景なり、夕ならざれば宿せず、夕字を眼を著けて見よ、夜久潮侵岸夜坐久しうして潮の滿ち以て岸まで水の泓泓たるに至るを見る、天寒月近城月が皓皓と盱眙城に近きは卽ち天が寒苦なればなり、俗に「サエル」を寒と見るべし、平沙依雁宿舟は中流に泊せず平沙に依て雁の宿する處に接近して居るを云ふ、旅館聽雞鳴一夜睡る能はずして遂に曉鷄を聽くに至る、本集に旅を候に

作る、候が正しきなり、旅は誤なり、鄉國雲霄外天外卽ち遠方を雲霄外と云ふ、故鄉は遠きなり、誰堪羈旅情羈旅の情を奈何ともする無きなり、

江南旅懐　　祖詠

楚山不」可」極　歸客自蕭條　海色晴看」雨　江聲夜聽」潮
劍留二南斗一近　書寄二北風一遙　爲報空潭橘　無」媒」寄二洛橋一

楚山極む可らず、歸客自ら蕭條、海色晴れて雨を看、江聲夜潮を聽く、劍は南斗に留まつて近く、書は北風に寄せて遙かなり、爲に報ず空潭の橘、洛橋に寄するに媒無し、

【句釋】江南は楊子江南なり、旅懐は汝潁に歸隱せんとして江南を道中し、其の愁懐を叙す、詩人不遇の悲み言外に在るを見る、楚山不可極江南は古の楚國、楚國の山は廣大にして極むべからず、亦愁の極むべからざると同じ、歸客自蕭條山の極むべからざるのみを以て歸客の意蕭條なるにあらず、愁の盡きざるが故に蕭條たり、卽ち自然に蕭條たり、海色晴看雨今日の黃海を云ふ、黃海の色晴天なるも雨の降る如くなるを覺ゆ、江聲夜聽潮江は楊子江なり、潮聲を聽

くには夜に在つて晝にあらず、晝は響大なるも感傷を起すこと大ならず、旅客夜半に之を聞く、響き大ならずとも、旅客の感傷を起すこと大なり、劍留南斗近豐城の劍氣斗牛を衝きし故事を用ふ、己が慷慨の志氣ある尙未だ消磨せざるを云ふ、書寄北風遙洛陽は江南より北方に當る、歸隱の汝潁には近づきつつある程に、別るる洛陽には益す遠きなり、爲報空潭橘橘は江南に多く生じて北方には多くあらず、江南は人家到處に之れ有り、空潭の曲に至るまで之れ有り、而かも無媒寄洛橋洛陽の人へ之を贈らんと思へども、其の贈るべき媒介者無きを恨む、本集に贈洛橋とあり贈を以て可とす、上に潭字を用ふ、此に橋と云ふ所以、洛陽に贈るの意味は損せず、

冬日野望　　于良史

地際朝陽滿　天邊宿霧收　風兼二殘雪一起　河帶二斷氷一流
北闕馳二心極一　南圖尙旅游　登臨思不」已　何處可」消」憂

地際朝陽滿ち、天邊宿霧收まる、風は殘雪を兼ねて起り、河は斷氷を帶びて流る、北闕心極に馳せ、南圖尙旅游す、登臨すれども思已まず、何れの處にか憂を消すべき、

【略傳】于良史は至德中に侍御史と爲り、又張徐州建封が從事と爲る、蕭宗の朝の人たること疑ひ無し、傳の詳なるは無し、

【句釋】冬日野望題は平平たり、而して意は平平たらず、野望に托して感慨を叙す、地際朝陽滿普通に字の使用法としては天を前に用ひ、地を後に用ふ今は平仄法として、地を上に用ひたるものの如し、大地の際限なきまで朝陽の氣が充滿する、朝陽は旭日にも義が通ず、一陽來復の事にも通ず、今此の兩義を合一して見るべし、天邊宿霧收昨夜は四面を籠めたる霧が今朝は全く晴れ收まる、朝陽を以て蕭宗の威光に比し、宿霧を以て祿山が賊黨に比したるなりとの古注あり、一時流行の解釋法今は取らず、風兼殘雪起一陽來復するも氣候は尙寒し、殘雪起る所以、河帶斷氷流氷が融解し流れつつある形容を云ふ、殘雪は祿山が殘黨を指し、斷氷も亦其の餘黨を指すと解す、是も古注の說、北闕馳心極漢初に蕭何が高祖の命を以て未央宮を治す、而して東闕と北闕とを分ち、北闕を以て正門とす、卽ち天子出入の門、侍臣出入の門なり、心を此の北闕に馳するは心天子を忘れざるなり、南圖尙旅游『莊子』の逍遙游に北冥に魚あり、其の名を鯤と爲す、鯤の大其の幾千里なるを知らず、化して鳥と爲る、其の名を鵬と爲す、鵬の背其の幾千里なるを知らず、怒つて飛ぶ其の翼は垂天の雲の若し、是の鳥や海運れば運は荒則ち

將に南冥に徙らんとす、南冥は天池なり、齊諧は怪を志せる者なり、諧の言に曰く、鵬の南冥に徙るや、水に擊つこと三千里、扶搖に搏て上るもの九萬里、去るに六月の息を以てするものなり、中略、雲氣を絶ち、青天を負ひ、然して後南を圖る以上莊子要するに丈夫大志を發するを以て圖南と云ふ、旅游するも汗漫の游にあらず、念念國を忘れず、我が志を遂げんと欲するなり、登臨思不已高邱より野を望んで我が種種の思は已まざるなり、何處可消憂憂思は已ます、如何する處に向つてか此の憂思を消滅するを得るや、

早行

劉洵伯

鐘靜人猶寢　天高景自涼　一星深戍火　殘月半橋霜
客老愁城下　蟬寒怨路傍　青山依舊色　宛是馬卿鄉

【句釋】劉洵伯は成都の人とのみ、傳は未詳、早行古注に劉久しく長安に在つて今成都へ歸ら

んと欲して以て早朝に發するなりと、鐘靜人猶寢曉鐘の響きが靜かに聞ゆる、路傍の人家は人猶未だ起きざるなり、或は解す鐘靜は未だ鐘を打たざるなりと、鐘を打たざる說を可とす、天高景自涼秋天正に高くして秋景正に涼しきなり、一星深戍火星は天上の星か、又戍火一點ある を星と認めしや、下の殘月の語に對すとなれば、曉天の明星と見るが可、戍は戍卒が篝を焚き警備する其の篝火が僅かに天上の星と共に一點殘るを云ふ、殘月半橋霜板橋には半分ばかり霜が積りたる也と解するは愚解なり、一橋にては一星に妨げあるを以て半と爲したるのみ、其の義は一橋即ち一箇の橋に殘月が霜を照しありと云ふなり、半庭や半江と字法同じ、一江月を半江月と改め以て佳なりと稱せられたる唐の詩人ありしを以て知るべきなり、客老愁城下城下ニ愁ふと訓したる本あり、○は○ニはヲに改むべし、城下は種種紛雜の事多く、老の身は畢竟此の紛雜なる事を愁ふるなり、城下は卽ち長安城下なり、蟬寒怨路傍蟬は仲夏より晩秋に至るまで出るもの、晩秋初冬には最早や衰ふ、氣候も寒く聲も亦寒し、路傍の樹に鳴くも身將に死せんとするの時、怨まざるを得ず、暖地の無きを怨むと解するは誤る、寒地暖氣を叙したるにはあらず、青山依舊色古も今も無く唯青青たるは山色あるのみ、宛是馬卿鄉蜀の成都は漢の司馬長卿が生地なり、早く羈舍を出で其の行を忙ぎし甲斐あつて前面に青山を認め得たり、サナガラ

是れ司馬長卿が故鄉卽ち蜀の成都たらんとは、非常の喜を此の句に表はすなり、

逢二皤公一　周賀

帶レ病稀二相見一　西城早晩來　山衣風壞レ帛　香印雨沾レ灰
坐久鐘聲盡　禪餘岳影回　却思同宿夜　高レ枕說二天台一

病を帶びて相見ること稀なり、西城早晩か來らん、山衣風帛を壞り、香印雨灰を沾す、坐久しくして鐘聲盡き、禪餘岳影回る、却つて思ふ同宿の夜、枕を高うして天台を說くことを、

【略傳】周賀は初め佛徒たり、名を淸塞と云ふ、廬嶽に居る、南徐に客たること亦久し、後少室終南に來る、姚合が錢唐太守たりし時、淸塞の詩を讀み其の才に感じ、還俗せしむ、時に夏蒲已に高し、榮望落落、竟に往て名山の諸老に依つて自ら終ふ、

【句釋】皤公は未詳、佛徒は二字名を一字用ふ、例せば晉の惠遠は遠公又遠師、隋の智顗は顗公又顗師、梁の達磨は磨公又磨師、總て下の字を取る、今皤公も此の例を以て知るべし、逢とあるからには舊知己ならん、帶病稀相見帶の字頗る奇なり、是れ平生病多き身なればなり、俗

に云ふ持病の有る人なり、其れが爲め相見ること稀なり、西城早晩來西城即ち長安より公は早晩此の地へ來るやと相逢うて第一に問を發するなり、山衣風壞帛皤公の風采を云ふ、皤公の著けたる山衣が風の爲め飄飄と翻るを云ふ、壞は破の意味に見るは惡し、元來僧の衣の色は壞色と稱して、純の白、純の紫、純の黃と反對に、何の色とも區別し難き色に染むるなり、純色を壞したる色なれば壞色衣と稱す、破れたる衣と云ふにはあらず、今壞帛も此の意にて破の意味にはあらざるなり、風の字あるを以て破と見たるは淺見なり、唯山衣即ち純色ならざる色、俗眼の喜ばざる色、「山野の僧の著けたる布衲」と見るは不可なり、香印雨沾灰香爐の中の灰を奇麗にして、而して其の灰中に卍字形の印を押し、其の印の中へ香を入れ、而して火を點す、火は字形なりに燒けて以て長時間を保つ、是を香印と云ふ、軒窗の下に之を置く、其の時雨降りたるが故に灰が沾うて香遂に燒けず、何等の寂寥ぞや、坐久鐘聲盡（是れは深夜を云ふ）鐘聲は短きにあらず、而かも對坐久しきを以ての故に盡きるなり、禪餘岳影回（是れは曉天を云ふ）對談後即ち禪に入る既にして岳影が回る、月西に傾くと知るべし、却思同宿夜我が昔日の事を思ひ出すなり、昔し公と共に禪を修習せし時は恰も今夜の如くなりしと昔を思ふを「却思」と云ふ、同宿は天台山に同宿せしなり、高枕說天台天台の敎理を說くにあらずして、天台山の風景を談說せしなり、

暮過山寺　　賈島

衆岫聳寒色　精廬向此分　流星透疎木　走月逆行雲
絕頂人來少　高松鶴不羣　一僧年八十　世事未曾聞

衆岫寒色聳え、精廬此に向つて分る、流星疎木を透り、走月行雲に逆ふ、絕頂人來ること少なり、高松鶴羣ならず、一僧年八十、世事未だ曾て聞かず、

【句釋】衆岫聳寒色夕暮に山寺に過ぎる而して眼に入るもの第一に衆岫なり、岫の色悉く寒し、精廬向此分精廬は佛徒が道を修し精進して懈怠せざる意に依て、其の住處、即ち寺を指す、精舍と同じ、儒佛共用する文字とす、此の山寺に向ふ路が衆岫の間に分るとなり、流星透疎木寺に入らんとする途中の所見、流星は疎木の間を透りて見え、走月逆行雲月の走る方と、雲の行く方と、各の其の方向を異にするを以て逆ふと云ふ、此の二句十字は千古の名句とす、兩句三年に得しものなり、絕頂人來少人の來る少なる處に己れ一人は來るなり、高松鶴不羣鶴の羣すべきと思ふ處に鶴は羣せず、一僧年八十山僧に出會す年已に八十、釋尊は七十九で入滅せり、

此の僧は佛陀に超ゆること一歲なり、世事未曾聞出世の眞僧固より世事を聞くの要無し、要なきを以て之を聞かざるなり、

懷二永樂殷侍御一　　馬戴

石田虞芮接　種レ柳白雲陰　穴閉神蹤古　河流禹鑿深
樵人應レ滿レ郭　仙鳥幾巢レ林　此會偏相憶　曾供二雪夜吟一

石田虞芮に接す、柳を種う白雲の陰、穴閉ぢて神蹤古り、河流れて禹鑿深し、樵人應に郭に滿つべし、仙鳥幾か林に巢ふ、此の會偏に相憶ふ、曾て雪夜の吟に供せしことを、

【略傳】馬戴字は虞臣、會昌中の進士、大學博士たり、後朗州龍陽の尉に貶せらる、集一卷あり、

【句釋】永樂は縣名、河中府古の魏國なり、殷は姓、名は堯藩、侍御は官名、永樂縣令と爲り、後侍御を以て江南に官す、『唐人衆妙集』に此の題を「集宿二姚侍御宅一懷二永樂宰殷侍御一」に作る、長きに失するも此の題にて詩意分明と爲る、石田虞芮接沙石多く畊作に適せざる田を石田と

云ふ、虞芮は地名、古注に云ふ「尚書傳」に虞芮、田を爭うて文王に質さんとす、境に入つて、其の士大夫の相讓ることを見て、乃ち爭ふ所を讓り以て閒田と爲す、虞芮讓る所の田、今の平陸縣の西六十里閒原是なりと、石田と閒田と接するは無用のものと無用のものと接す、畢竟清廉の士爭はざるなり、種柳白雲陰稻に代ふるに柳を以てす、利を爭ふの因とならざればなり、穴閉神蹤古此の永樂縣には銅穴十二處あり、古神人來り以て銅を發掘すと、今は神人無く、唯其の神蹤の古たるのみ、河流禹鑿深河中府の龍門縣は昔し夏の禹王が鑿せし處、此を鑿して以て黃河に通せしめしなり、共に永樂に關係の地なるを以て之を言ふ、樵人應滿郭樵人は賈人と異なり、利を爭ふこと急ならず、郭に滿つと雖も喧譁ならず、仙鳥幾巢林鶴を仙鳥と云ふ、林に巢ふ、人の害心無きを知ればなり、此會偏相憶此の會は即ち姚侍御が宅の會なり、此の會に列なりて乃ち殷侍御を憶ひ出す、眞に是れ友情然るべきなり、曾供雪夜吟昔日晉の王徽之が雪夜に酒を酌んで左太仲の詩を吟じ、以て戴逵を憶ひ、舟に棹して戴を訪ふ事あり、我は王徽之にあらざるも、君は當年の戴逵の淸骨を具す、我豈君を憶ひ詩を吟せざるを得ん、

韋處士山居　　許渾

劚レ藥去還歸　家人半掩レ扉　山風藤子落　溪雨豆花肥

寺遠僧來少　橋危客過稀　不」聞二砧杵動一　應」解二製荷衣一

藥を劚つて去つて還た歸る、家人半ば扉を掩ふ、山風藤子落ち、溪雨豆花肥たり、寺遠くして僧の來ること少なり、橋危くして客の過ぐること稀なり、砧杵の動くを聞かず、應に荷衣を製することを解すべし、

【句釋】韋處士傳未詳、處士は官途に仕へざる人の稱、劚は「キル」なり、劚藥去還歸藥草を劚つて山中に去り還た歸、家人半掩扉所見の實況ならん、主人家に歸るも、客來らざるとも定め難し、家人は半ば扉を掩ふ所以、山風藤子落、溪雨豆花肥一句は高處の景、一句は低處の景、共に是れ自然、一方は正に謝し、一方は正に盛ん、寺遠僧來少、橋危客過稀禪僧の來る少なるは寺遠ければなり、騷客の過ぎる稀なるは橋危ふければなり、獨木橋は如何に騷客なるも渡るに危險なり、不聞砧杵動此の山居に於て未だ砧の響きを聞かぬ、此の響きを聞かぬは他に之に代るものあればなり、何ぞ應解製荷衣荷葉を以て衣を製するは、隱者の業務とす、自ら製し自ら服す、肯て人を煩はさざるなり、

瀑布寺貞上人院

鄭巢

林疎多暮蟬　師去宿山煙　古壁燈熏畫　秋琴雨慢弦

竹間窺遠鶴　巖上取寒泉　西岳莎房在　歸期更幾年

林疎にして暮蟬多し、師去つて山煙に宿す、古壁燈畫を熏し、秋琴雨弦を慢す、竹間遠鶴を窺ひ、巖上寒泉を取る、西岳に莎房在り、歸期更に幾年ぞ、

【句釋】貞上人二字の名を一字用ふること前に辨ぜり、林疎多暮蟬林の疎なるは秋なればなり、暮蟬の多きは頑童の之を捕ふること無ければなり、師去宿山煙山中の煙寺に入つて宿するなり、瀑布寺は大寺にて、院は其の支院と知るべし、古壁燈熏畫上人に逢はんと欲するも上人は去つて在らず、是を以て院内を見るに燈光が畫に熏じて古壁を照す、所謂壁畫にて畫幅にはあらず、秋琴雨慢弦床に懸けたる秋琴は雨の爲めに自然と弦を慢めらる、素隱は何人か琴を彈じて靜かに聞くと解したるが、そは誤なるべし、竹間窺遠鶴竹間より窺ひ見るところの物は唯遠鶴あり、上人にはあらず、巖上取寒泉素隱の注に云ふ上人の巖上に行きて寒泉を汲み取らるるかと思うたぞ、是れ誤解なり、上人の事を言ふにあらず、上人を訪ふ者の爲す所なり、巖上より寒泉を

汲み取ることが出來ると云ふに過ぎず、鑿して注するの要なきなり、西岳莎房在上人が院の西岳を見れば、此に一宇の莎艸にて結ぶ房あり、棲身の房として頗る吾意に滿つ、歸期更幾年我も官を罷め、此の莎房に來つて佛陀の禪法を修習せんと欲する念は存するも、幾年後に其の志を遂げるやは明かならずと叙す、歸期とは許渾自身が事を云ふ、巴南道中より此に至る共に十四首、

送龍州樊史君　　許棠

曾見邛人說　龍州地未深　碧溪飛白鳥　紅旆映青林
土產唯宜藥　王租只貢金　政成閒宴日　誰伴使君吟

曾て邛人の說くを見る、龍州地未だ深からず、碧溪白鳥飛び、紅旆青林に映ず、土產唯藥に宜しく、王租只金を貢ぐ、政成つて閒宴の日、誰か伴ふ使君の吟、

【句釋】龍州は唐代劍南道の應靈郡、今日四川省嘉定府樂縣の西南一百五十里の地なり、樊使君は傳未詳、曾見邛人說邛人は邛州の人、邛州は龍州の鄰州にて秦漢に臨邛と稱し、梁に邛州

と號し、西魏に蒲原と號し、唐宋元の三朝共に邛州と號す、其の邛州人の說を曾て聞きし事がある、見は聞と同じ、龍州地未深龍州は邛州に比すれば尙邊境ならずと云ふにあり、邛州は打箭爐卽ち今日の西藏に已に近き地、龍州より深きこと知るべし、邊境ならざるゆゑ憂へ玉ふなと云ふに在り、碧溪飛白鳥蘆葉溪の如き、百枝溪の如き名高き溪あり、此等を稱して碧溪と號したるならん、紅旆映青林使君が使君の威嚴を表する紅旆は青林に映じて奇麗なり、繁盛なり、碧と白と紅と青との色を以て對を取る、土產唯宜藥、王租只貢金此の二句は此の龍州の地は非常に富裕なるを言ふ、藥草を多く產す、藥草は價が貴ければ土產として州の詑りとする所、又金は採掘すれば際限なく出づ、米を公租とせずも、金を以て王租に充つ、銅官山なぞの山は卓王孫が錢を鑄し地とし、古石山は石鑛を出し、大蒜子の如しと「史記貨殖傳」にあり、政成閒宴日使君の使君たる職務は良政を執り、州民を善治するに在り、而かも俗吏にあらざれば、餘閒の時は宴を設け騷客を會し、以て詩を賦し文を屬す、誰伴使君吟然るに使君は政治家にして詩人たり、政治の餘暇、詩を賦し之を吟ず、使君に相和して吟ずる者は誰ぞや、暗に龍州は詩人に乏しきを云ふなり、

送人尉黔中　　周　繇

盤山行幾驛　水路復通巴　峽漲三川雪　園開四季花
公庭飛白鳥　官俸請丹砂　知尉黔人後　高吟採物華

盤山行くこと幾驛ぞ、水路復巴に通ず、峽には三川の雪を漲らし、園には四季の花を開く、公庭白鳥を飛ばし、官俸丹砂を請けん、知んぬ黔人に尉として後、高吟して物華を採らんことを、

【略傳】周繇字は爲憲、池州の人、咸通の進士、明皇夢三鍾馗一賦を以て名を知らる、後池州至德縣の令と爲る、

【句釋】送人尉黔中友人が黔中の屬官と爲つて行くを送るなり、黔中は唐代江南道に屬す、今日四川省西陽州彭水縣治なり、盤山は山又山を云ふ、行幾驛水驛と山驛と數限り無きなり、東西南北或は峽中へ赴くにも、湖南の洞庭へ行くにも、湖北の宜昌へ行くにも、貴州の大定へ赴くにも、路は容易ならず、水路復通巴巴は今日の重慶府なり、西陽州より重慶に到る舟路として支那里程三百里あるべし、峽漲三川雪、園開四季花是れ黔中の實景なり、峽中より出る三川

の水は雪浪を揚げて舟行は困難ならん、が公園には春夏秋冬花が開きて美麗眼を慰むるに足らん、前句は巨景、後句は細景、公庭飛白鳥白鳥は元來公庭に飛ぶべきものにあらず、其の飛ぶべきものにあらざる鳥が飛ぶ、其の人の慈心微物にまで及ぶを云ふ、白鳥は白鷗なり、官俸請丹砂今日は四川と湖南と省を別にするも古は一國なり、乃ち湖南省の辰州府の辰溪は多く丹砂を出す、醫藥に用ふるもの、尉官たる友人は定めし月俸を割き、此の丹砂を請ふなるべし、請ふに容易なるを言ふ、此の丹砂は仙藥とし、長生藥として服せらるるものなり、知尉黔人後黔人に尉たるは卽ち黔中を治むるなり、治むるが友人の職務とす、高吟採物華公事閒あらば私事に移る、私事も俗事にあらず、黔中の物華を賞して高吟するなり、

道院　　王　周

白日人稀到　簾垂道院深　雨苔生古壁　雪鶴聚寒林
忘慮憑三藥　消閒信五禽　誰知是官府　煙縷滿爐沈

白日人の到ること稀なり、簾垂れて道院深し、雨苔古壁に生じ、雪鶴寒林に聚まる、慮を忘るるは三藥に憑り、閒を消するは五禽に信す、誰か知ら

ん是れ官府なるを、煙縷滿爐の沈、

【句釋】●●王周は傳未詳、●●道院は官府の治所、『澠水燕談錄』に江陰の軍、北大江を距ぐ、地僻にして過客鮮なし、將の之を迎ふる無し、通州の南江に阻し、東北海に濱す、士大夫至ると罕、二州に仕官する者最も優逸を爲す、故に士大夫江陰を以て兩浙道院と爲し、通州を淮南道院と爲す、役人の休息所と見れば可なり、白日人稀到、簾垂●●●●道院深無事清閒、●●●●幽趣見るべし、雨苔生古壁雨の爲め苔が青青と古壁に生ずるなり、雪鸛聚寒林鸛は小雀、鶴に似て水を好む、將に陰雨ならんとすれば則ち鳴く、其の巢の傍に池を爲り、水を含んで之に滿つ、魚を取つて中に置き、以て其の雛に食ましむ、此の鳥は仰ぎ鳴けば晴、俯して鳴けば陰と、羽の色雪の如く白きを以て云ふ、諸本多く鶴に作る誤りなり、忘慮憑●●●●三樂孟子の三樂と榮啓期の三樂とあり、孟子曰く父母俱に存し、兄弟故なし一樂なり、仰いで天に愧ぢず、俯して人に怍れず二樂なり、天下の英才を得て而して之を敎育す三樂なり、此の三樂說は今の詩意にはあらず、『列子』に說く榮啓期、鹿裘にして帶索、琴を鼓して歌ふ、孔子問うて曰く先生の樂しみは何ぞ、期曰く天萬物を生じ、唯人を貴しと爲す、吾既に人と爲るを得たり、是れ一樂なり、男女の別あり、男は貴く女は卑し、吾男と爲るを得たり、是れ二樂なり、人生襁褓を免れざるものあり、天死を言ふ吾年

九十なり、是れ三樂なり、貧は士の常、死は人の終り、吾何をか憂へんや、今忘慮と云ふは何の念も起らざるを云ふ、『韓詩外傳』に曾子の三樂を說く、親あり畏る可し、君あり事ふ可し、子あり遺す可し、此れ一樂なり、親あり諫む可し、君あり去る可し、子あり怒る可し、此れ二樂なり、君あり論ず可し、友あり助く可し、此れ三樂なり、今の詩は孟子と曾子との意を舍て而して列子の意を取るなり、消閒信五禽『魏志』に華佗曰く吾に一術あり、五禽戲と名く、一に曰く虎、二に曰く鹿、三に曰く熊、四に曰く猿、五に曰く鳥、每に體中佳ならざるあらば、起つて一禽の戲を爲す、亦以て疾を除く可し、消閒の游戲として上乘のものなりと爲す、今日の所謂體操なるものに當る、李文正が後園に五禽を育し、皆客名を以て之を稱す、鶴は仙客、孔雀は南客、鸚鵡は隴客、白鷳は閒客、鷺鷥は雪客、是れは今の詩と關係無し、誰知是官府淸閒無事此の如きは誰か是れ官府なりと言ふことを知らんや、煙縷滿爐沈滿爐の沈水香、其の煙、縷の如く揚がり一室に香氣溶溶たり、是れ仙境、是れ人境に似ざるなり、已前共に三首、白鳥、丹砂、雨苔、雪鸛等の字面同じきものなり、

一意

周弼曰く唯格律を守り、聲病を揣摩するは詩家の常なり、若し時として度外に出で、縱橫放肆にして、外整はざるが如くにして、中實に節に應ずる、唯又造次にして能くする所にあらず、

格は法則なり、律は律の格あり、絕は絕の格あり、聲とは平聲、去聲等の四聲、病とは蜂腰病、鶴膝病等の病なり、揣摩するとは卽ち思量するなり、定合するなり、此等の事を離れては別に詩無きが故に此の格律聲病を揣摩するを詩家の常と爲す、而かも其の正法外、時として海に波瀾ある如く、法度を離れて作る、是れを縱橫放肆と云ふ、而かも外形は整正ならざる如くに見ゆるも、中心は節に應じ之を打てば金石の聲を發す、是れ詩家の大切なる所とす、俄かに能くする所にあらざれば、古人の力量ある所を見るべしとなり、一意とは初めの句に寒と言へば、其の寒の意味にて全首を表現するか、暖と言へば、篇末まで暖の意味を布演して、毫髪も他の意味を加へざるを云ふ、余を以て之を言はしめば、古人の詩一意ならざるものなし、竹に梅を接ぐが如く、又紅白等の色を雜然と陳列する如きは斷じて之れあらず、周

弼に向つて論せんと欲する所なれども、暫らく周弼の說は說として之を尊重す、而かも余の說は別に在る有り、周弼に從ふことは能はざるなり、

終南別業　王維

中歲頗好道　晩家南山陲　興來每獨往　勝事空自知
行到水窮處　坐看雲起時　偶然値林叟　談笑滯還期

中歲より頗る道を好む、晩に南山の陲りに家す、興來つて毎に獨往し、勝事空しく自ら知る、行くゆく到る水の窮まる處、坐して看る雲の起る時、偶然林叟に値ひ、談笑還期を滯す、

【句釋】●●●終南別業終南山に右丞は別業あり、此に於て道を修し、僧と談じ、樵夫と話し、身心を清淨にして生を終へしなり、南山一名は太乙、「太乙近二天都一」是れなり、橫に關中の南面に亙り、西秦隴より起り、東藍田山に徹す、周八百里と、中歲頗好道人の年を上中下に分てば、中歲は三十歲後を指すべし、右丞は早く妻を失し、後娶らず、梵行淸淨、釋氏と異ならず、而かも中歲は道を好むの志あるも、之を行なふに至らず、「道は道士の道なり」と解したる人あ

り、大に誤る、但善道と見るべし、儒釋道の三教を共に修習せし人なること明白なり、道士を好んで仙道を喜びし事は右丞の一生を通じて斷じて之れあらず、晩は晩歲四十以後なり、右丞は六十を以て死せしなれば、四十妻を失して後を晩歲と見て可なり、家南山陲曾て宋之問が別業を右丞後に之を購ひ、以て佛を奉じ、僧を招き、詩を賦し、法を談ずる外、事を計らず、清涼寺は右丞歿後、其の別莊を改めしものなりと云ふ、輿來每獨往是れ一人悠悠自適したる時の事を叙す、輿の生ずる時は他人を要せず、獨自ら往く、勝事空自知山水の勝事は自ら見て、其の勝事たる趣味は自ら知るのみ、空の字右丞の語より出づ實に千斤の量あり、他人の空疎とは大に異なる、勝事なるも空しく自ら知るなり、人に知らせ度き心は十分なれども如何せん他人は自分と道を馳背す、是に於てか不本意ながら空しく自分一人知るのみ、行到水窮處、坐看雲起時水の窮まるは溪の盡る處なり、其の溪の盡きる處に到れば、湧然として雲起る、一窮し一起る、變化縱横、妙言外に在り、偶然値林叟偶然は「フト」なり期せずして値ふなり、素隱は適然と解す、箇は第二義なり、適然には相違なきも、第一義としては「料ラザリキ」を以てす、料らざらきは「フト」なり、期約なくして林中の叟に値ふ、林中の叟は是れ亦物外の人、世に求め無き人、我と同調の人なり、談笑滯還期雲の起る處を看て悠然と坐して居りたるに何處とも

知れず林叟の來るに會ふ、値ふからには山を談じ水を語り、談笑盡きる時無し、遂に還期を滯凝する所以、意を以て解す可し、口を以て言ふべからず、

晩泊潯陽望廬峯　孟浩然

掛席幾千里　名山都未逢　泊舟潯陽郭　始見香爐峯
嘗讀遠公傳　永懷塵外蹤　東林精舍近　日暮坐聞鐘

席を掛く幾千里、名山都て未だ逢はず、舟を潯陽の郭に泊し、始めて見る香爐峯、嘗て遠公の傳を讀んで、永く懷ふ塵外の蹤、東林精舍近し、日暮坐ながら鐘を聞く、

【句釋】潯陽は今日の江西省九江府德化縣西南二十里の處とす、浩然は湖北の襄陽の人、長安より鄉へ還る途次此に夜泊せるなり、泊する江は大江即ち楊子江なり、爐峯は九江府の南に當る廬山の一峯なり、『廬山記』に香爐山孤峯秀起し、游氣其の上を籠め、烟氳煙の若しとあり、掛席幾千里席は布帆と見るべし、陝西省の長安より此に降る數千里なるも、名山都未逢黃牛山荊門山等は途次必ず見る、而かも此の如き奇秀なる名山は未だ見ずとなり、泊舟潯陽郭今日舟

を此の九江府城の下に泊して、●●●

むには雨後を宜しとす、葉柔なればなり、雲間幽路危北山に來る雲間は路が危きなり、唯應報春鳥願洛山に鳥あり、報春鳥と名く、其の鳴くや二月にして、其の止むは三月とす、茶を製する者は此の鳥聲を聞いて以て時を知るなり、得共斯人知斯人は斯の茶人即ち自身を指す、自身より外多くの人は此の茶に對する觀念の薄きを云ふ、

尋陸羽不遇　　釋皎然

移家雖帶郭　野徑入桑麻　近種籬邊菊　秋來未著花
扣門無犬吠　欲去問西家　報道山中出　歸來每日斜

家を移して郭を帶ぶと雖も、野徑桑麻に入る、近ごろ種う籬邊の菊、秋來未だ花を著けず、門を扣けども犬の吠ゆる無し、去らんと欲して西家に問ふ、報じて道ふ山中より出でて、歸り來ること每に日斜、

【略傳】皎然名は晝、姓は謝氏、長城の人、靈運が十世の孫なり、杼山に居す、文章儁麗、顏眞卿、韋應物、竝に之を重んず、之と酬唱す、貞元中敕して其の文集を寫さしめ、祕閣に入る、詩七卷あり、後世貫休と齊己と皎然と合して唐の三高僧と云ふ、

【句釋】陸羽字は鴻漸、茶を嗜んで妙理に造る、茶經三卷を著はす、天下仰いで以て茶神と爲す、『梁谿漫志』に曰く人は偏に好む所あるべからず、往往嗜好する所の爲め、其の他の長を捨はる、陸鴻漸の如き、本唐の文人達士、其の著書、君臣契三卷、源解三十卷、江表四姓譜十卷南北人物志十卷、吳興歷官記三卷、潮州刺史記一卷、占夢三卷、茶經三卷、然れども世傳ふる所のもの特に茶經のみ、他は傳はらず、蓋し茶經の捨ふ所なり、韋縣に瓷偶人あり陸鴻漸と號す、十茶器を買うて一鴻漸を得、市人茗を沽る、利あらざるときは之に灌注す、鴻漸茶を嗜んで終に困辱に遭ふ、嗜好の弊、此に至る、獨笑ふ可らずや、後世の學者之を惜む此の如し、皎然は蓋し詩友なり、今訪問して過はざる事を叙す、陸羽の傳に智積禪師なる高僧あり、一日途上に羣雁の小兒を覆ふを見る、之を得て之を育す、且篋するに、鴻陸に漸む、其の羽用つて儀と爲すべしと、乃ち陸を氏、羽を名、鴻漸を字とすと、而かも此の人僧たるを嫌うて暇を禪師に乞ひ、去つて苕溪に家を移したるなり、移家雖帶郭郭は町の事、市中に家を移すと雖も、野徑入桑麻羽を尋ねんと欲する者は是非此の野徑を過ぎて桑麻の中を行かずんば其の家に到る能はず、便利にして且閒靜に屬する地なるべし、近種籬邊菊、秋來未著花人無きが故に强て庭園を見る、然るに近來種るたる菊は、秋期なるも未だ花を著けず、扣門無犬吠、欲去問西家犬は

相伴うて去る故に吠ゆる無し、西鄰の家人に向つて、羽が行處は如何と問ふ、報道山中出西鄰の家人が我が爲めに報じて道ふ、羽は日日山中に入つて、歸來每日斜家に歸り來るは每日日斜に及ぶと、出の字一本去に作る、山中に去るが、山中より出るより勝る、已前四首、

起句

周弼曰く發首の兩句平穩なる者は多し、奇健なる者は余が見る所唯兩篇のみ、然れども聲太だ重くして、後聯稱し難し、後の兩篇の發句も亦佳なり、聲稍輕し、終篇均停なり、然れども奇健なること、前の兩篇に及ばざること遠し、故に此に著はして法と無し、識者をして自ら擇ばしむ、

發首の兩句とは一二の句を云ふ、平穩とは事實を事實の儘に叙して別に他奇なきを云ふ、奇健とは想と字と意表外に出で、事實以外に景を描くを云ふ、古詩としては「大江流ニ日夜一」の類律としては「酒渇愛ニ江清一」の類、而かも聲調重くして、五六の二句と斤量が稱はず、周賀と栖蟾とは暢當と司空曙の二人に及ばざること遠し、唯周と蟾とは起句已に佳にして、終篇卽ち全首の結構も整正すと爲す、周弼の起句奇健なるもの稀なりと爲すは、初盛唐の人に就て言ふにはあらざるべし、若し初盛の人に於て奇健なるもの無しと斷ずとせば、そは非常に誤りなり、老杜にせよ王右丞にせよ、起句奇健なるもの非常に多し、此に一一擧示するの遑なきを以て出さざるが、其の集を閲する者は必ず余が言の妄ならざるを知るべし、他は深く議す

べきもの無し、

軍中醉飲寄沈八劉叟　　暢當

酒渴愛江淸　餘酣漱晩汀　軟莎欹坐穩　冷石醉眠醒
野膳隨行帳　華音發從伶　數杯君不見　都已遣沈冥

酒渴江の淸きを愛す、餘酣晩汀に漱ぐ、軟莎欹坐穩に、冷石醉眠醒む、野膳行帳に隨ひ、華音從伶を發す、數杯君見えず、都已に沈冥を遣る、

【略傳】暢當は河東の人、貞元の初大常博士と爲る、後果州刺史と爲つて卒す、

【句釋】軍中醉歌寄沈八劉叟暢當が果州の刺史たりしとき、軍中に於て醉歌し、沈八と劉叟との二人に寄せたるもの、沈劉叟に尊稱の八字を加へたるなりとの說あるも、余は沈と劉との二人と思ふなり、酒渴愛江淸、餘酣漱晩汀酒を多量に飮み、爲めに咽喉乾く、依つて江水の淸流を愛す、愛すは卽ち飮むなり、餘酣とは俗語の酒に中るなり、依つて晩汀に臨んで口を漱ぐ、軟莎欹坐穩柔軟なる莎草の上に欹坐卽ち膝を揚げて坐す、醉後の常態として正坐は能はざるなり、冷石醉眠醒冷やかなる石上に一睡したれば醉も漸く醒む、野膳隨行帳廳食を指して野膳と

云ふ、天幕を指して行帳と云ふ、天幕中に於て游宴するなり、華音發從伶華夏の音樂を從者の伶人が奏す、伶人は樂を奏し、庖人は膳を調す、數杯君不見君とは沈八と劉叟なり、都已遣沈冥都已は二字にて「スデニ」なり、沈冥とは前後の事なんにも分別せざるを云ふ、醉ひ倒れるなり、第四句に於て已に醒めたりと言ひ、此に至りて沈冥せりと言ふ、意味一貫せざるに似たるも、前後轉換の法なりと解する人あり、是れ或は然らんか、

題江陵臨沙驛樓　　司空曙

江天淸更愁　風柳入江樓　雁識楚山晩　蟬知秦樹秋
凄涼多獨醉　零落半同游　豈復平生意　蒼然蘭杜洲

江天淸くして更に愁ふ、風柳江樓に入る、雁は楚山の晩を識り、蟬は秦樹の秋を知る、凄涼多くは獨醉、零落半は同游、豈復平生の意ならんや、蒼然たり蘭杜の洲、

【句釋】江陵東漢に縣荊州南郡、唐に山南道、今日湖北の荊州府江陵縣治なり、江右に遷謫せられたる時、江陵を過ぎ此の驛樓に題せしなり、江天淸更愁楊子江上の天、淸朗なる愛すべき

なるに愁と云ふは、遷客なればなり、風柳入江樓江上の柳枝は風の爲め吹かれて以て江樓中に入る、雁識楚山晩、蟬知秦樹秋雁や蟬の類其の生得として、時節を能く知る、江陵は古の楚なり、亦秦の南郡なり、凄涼多獨醉客中の身友無し、酒を飲み獨醉ふ、而かも凄涼たるを免れず、零落半同游同游は知己なり、知己半は零落せるなり、零落の語の中に死もあり貧もあり、獨醉して凄涼、同游は零落、今倒語法を用ひて作るなり、豈復平生意、蒼然蘭杜洲豈は否定の辭、平生は未だ必ず愁を以て本領と爲さず、今日相愁ふるは平生の意にあらざるなり、況んや蒼然たる蘭杜洲に對す、楚の屈原が落魄して此に彷徨せし事を思ひ出すなり、已前二首、

酒渴愛江清、餘酣漱晩汀、江天清更愁、風柳入江樓、此の句を奇健と稱するも中唐以後の句として奇健なり、老杜の國破山河在、城春草木深、」剩水滄江破、殘山碣石開、」孤月當レ樓滿、寒江動二夜扉一」水色含二羣動一、朝光切二太虛一」四更山吐レ月、殘夜水明レ樓」江漢思レ歸客、乾坤一腐儒」昔聞洞庭水、今上岳陽樓、」何ぞ曾て奇ならざらん、健ならざらん、盛唐大家の詩を選ばざるが故に周弼の說は兒童の爲めに示すものと知る可し、

送耿山人游湖南　周賀

南行隨二越僧一　舊業一池菱　兩鬢已垂レ雪　五湖歸掛レ罾

夜濤鳴二柵鎖一　寒葦露二船燈一　此去更無事　却來猶未レ能

南行越僧に隨ふ、舊業一池の菱、兩鬢已に雪を垂る、五湖歸つて罾を掛く、夜濤柵鎖を鳴らし、寒葦船燈を露す、此を去つて更に無事ならば、却來すること猶ほ未だ能はず、

【句釋】耿山人は傳未詳、湖南は長沙府を以て其の中心地と爲す、長沙に游ぶ人ならん、南行隨越僧湖南は楚地、越は今の江蘇浙江の地方なり、山人が湖南へ游ぶに越國の僧が案内するものと見ゆ、舊業一池菱舊の別業即ち別莊が今は荒涼と化して、只一池に菱あるのみならん、兩鬢已垂雪頭髮の二方に鬢を結ぶは男子の普通なり、其の兩鬢も已に垂垂として雪の如く白し、五湖歸掛罾越の范蠡は宰相の印綬を解き、五湖に歸りて商賈と爲りし事あり、今山人も此の五湖に游んで罾を掛くるの意思あり、今日は游ぶなれど他時は必ず歸りて漁人とならんとなり、罾は「アミ」なり、夜濤鳴柵鎖柵鎖は魚を捕ふる爲め湖中に立てし「ヤナ」と云ふもの、此ヤナに夜の波濤が是れに當り音を爲す、寒葦露船燈寒葦の間より夜中は船燈の光が漏れて見ゆ、此去更無事此の長安城を去つて、湖南に行けば今も無事なるが、更に安閒無事、所謂賊亂の爲め

危害せらるる憾無きなり、祿山や史思明の賊徒が長安の近方を荒しし時なればなり、却來は自分の本住地へ歸り來る意味の語、猶未能無事の地を喜んで歸り來るの意思は生せざるべしと想像して云ふ、

宿巴江　　釋栖蟾

江聲五千里　瀉碧急於紵　不覺日又夜　爭教人少年
一汀巫峽月　兩岸子規天　山影似相伴　濃遮到客船

江聲五千里、碧を瀉いで紵よりも急なり、覺えず日又夜、いかでか人をして少年ならしめん、一汀巫峽の月、兩岸子規の天、山影相伴ふに似たり、濃に遮ぎつて客船に到る、

【句釋】栖蟾は大順中の人、屏風巖に居すとのみ傳未詳、『全唐詩』に詩十二首あり、巴江は蜀中、江聲五千里巴江は四川省重慶府巴縣の東北を流る、一名内江、東南に流れて漢中より始寧城下を經て涪陵に入り、曲折する三回巴字を爲す、故に曰ふ、五千里は巴江の長大なるを云ふ、流は降つて楊子江に入る、此の間五千里あるべし、瀉碧急於紵四川の地たる最も高し、此を出る水なれば其の勢の迅きこと紵よりも急なる道理なり、不覺日又夜水流袞袞として日夜息まず、爭教人少年爭は「ドウシテ」と云ふ意味、奔流日夜息まず、乃ち人をして光陰の速かなるを嘆せしむ、人は嘆息し憂愁する遂に白頭なり易し、長く少年たるを免さず、孔夫子の嘆を寓す、一汀巫峽月巫峽、巴峽、明月峽皆蜀中の風景絶佳の地とす、巫峽は夔州に屬して三峽の一、西陵峽、歸峽、巫峽となり、巫山の東、『水經注』に巫峽は山に因て名と爲す、三峽より七百里中兩岸連山、停午夜分に非ざるより、曦月を見ず、晴初霜旦に至る毎に、林寒く澗肅、常に高猿の長嘯するあり、此に於て一汀に月影を印するを見る、兩岸子規天猿を言はずして子規を言ふ、不如歸去と喚び、旅人に切なればなり、山影似相伴山影が江中に映じて我と日日離れず、濃遮は樹陰が濃かに遮るなり、到客船本集に客を曉に作る、客でも曉でも妨げず、句として佳惡なし、樹影が我が宿泊する船に到るとなり、已前二首、隱公曰く按ずるに伯羽此を分つて其の說を著けず、惟ふに此の卷只四首分けて二と爲す者は、以前の兩首起句太だ重きを一例と爲す、後の兩首は起句稍輕く、終篇均停なることを一例と爲す、具なること卷首評する所の如し、其の意最も明白と爲す、是を以て之を觀れば、他は類に觸れて知るべし、江聲五千里、瀉碧急於紵、「南行隨越僧、舊業一池菱」是れ稍や輕しと爲すものの如し、南行の十字は輕きに似たるも

江聲の十字何ぞ輕きことあらん、江天清更愁、風柳入二江樓一、是れ何の重きことかあらん、南行の十字を輕しとせば、江天の十字も輕しと爲すべし、江天の十字重しとせば、南行の十字も亦重しとせざるを得ず、輕重の分ち、讀者の自覺に在り、孰れを重しとし、孰れを輕しと定む、余は此の詩に於て判斷する能はず、伯弓の見は創見たるに相違なきも、全然服從する能はざるなり、

結句

周弼曰く結句は意を以て盡くせり、而して寬緩に能く拘攣の外に躍出する、前輩謂ふ奔馬を截るが如しと、余が得る所は獨此の四首足れり、四十字を見るに、字字放過すべからず、意を以て盡くすとは、全篇に對する肝要なる處なるを以て、意を盡さずんば佛を造りて魂を入れざるが如きなり、而かも其の體度は拘攣卽ち法度の外に躍出して、縱橫の氣無かるべからず、縱橫の氣之を奔馬を截るか如しと云ふ、而して其の作法を兒輩に示すは、此に選べる四首にして足る、是を以て輕輕に看過すること莫かれと訓戒するなり、四十字とは遍禮南朝寺、焚レ香古像前、秋日平原路、蟲鳴桑葉飛、坐喜無二雲物一、分明見二北辰一、道人星月下、相次禮二茅君一の四十字なり、此の論は別に批難すべき點を認めず、

送二陳法師赴一上元一　　皇甫冉

延陵初罷レ講　建業去隨レ緣　翻譯推二多學一　擅場最少年
浣レ衣逢二野水一　乞レ食向二人煙一　遍禮二南朝寺一　焚レ香古像前

延陵初めて講を罷む、建業に去つて緣に隨ふ、翻譯多學を推す、擅場最も
少年、衣を浣つて野水に逢ひ、食を乞うて人煙に向ふ、遍く南朝の寺を禮
して、香を焚く古像の前、

【句釋】陳法師は傳未詳、上元は唐代縣江南道昇州、今日の江蘇省江寧府上元縣治なり、延陵初罷講延陵は唐代縣江南道潤州、今日の江蘇省鎭江府丹陽縣南三十五里の地、此の延陵に在つて經を講せしを罷めて、建業去隨緣建業は建康なり、金陵なり、上元縣是れなり、此の上元に向つて去るは卽ち隨緣なり、隨緣の文字、元來佛語にて詩語にあらず、故に釋門に關する詩の外は用ひず、六朝の天子此に都し、所謂南朝四百八十寺にて、佛敎繁昌の地とす、延陵と建業とは日本里程とすれば二三十里を隔たるのみ、翻譯推多學梵語を譯して漢語と爲す、博覽强記の學者にあらざるよりは、難事業とす、法師乃ち多學と推さる、依て謂ふ陳法師は玄奘三藏ならんかと、奘公の俗氏は陳氏なればなり、翻譯の事を叙するより見れば玄奘或は當らん、擅場最少年擅場は多人數の中で第一の事譯師中に在つて最も少年にして而かも譯主と推さるる名僧なり、玄奘を言はずして果して誰なる、浣衣逢野水、乞食向人煙此の二句は延陵より上元に赴

く途上の事、野水に衣を洗ひ、人家に食を乞ふ、佛道を修する人の本業とす、清淨の活命なり、遍禮南朝寺上元には佛寺多し、一一之を禮すべし、焚香古像前古佛像の前に向つて焚香誦經するなり、

送從弟歸河朔　李嘉祐

故鄉何可到　令弟獨能歸　諸將旌節旌節　何人重布衣
空城流水在　荒澤舊林稀　秋日平原路　蟲鳴桑葉飛

【句釋】從弟は『爾雅』の釋親に兄弟の子、從父昆弟と謂ふ、「イトコ」是れなり、河朔は河北、今日の直隸山東の二省は唐代の河北道なり、故鄉何可到長安より河朔に到る數百里を隔つ、到著の日を定むべからず、令弟自身の從弟を稱するに令の字を以てす、弟と雖も卑しめざるの意なり、獨能歸遠方を獨能く歸る、賞する意と羨む意とを含む、諸將旌節是れは他人の事を出して以て從弟と反對なることを云ふ、諸將が他國へ往く時は旌節を旌はして以て威勢を示す、

旌は表なり、旌は「ハタ」『周禮』に氂牛の尾を以て之を作る、節は毛を以て之を作る、命を將ふ者以て信と爲す、武士は往來此の如くにして勢威を示すも、從弟は然らず、旌は本集矜に作る、何人重布衣官に仕へざる者は一生布衣なり、世上の俗人旌節を重んずるも、布衣を重んせず、何人か其れ之を重んずる者ぞ、恐くは重んずる者無けん、其の重んせざる所の人を我は寧ろ稱讚すとなり、空城流水在河朔の舊城へ歸著するも、城は空城と爲り、人多く在らず、祿山が亂後なればなり、唯依然たる者は流水のみ、荒澤舊林稀林の字本集村に作る、荒澤の邊は舊村家も兵火の爲め燒失して多くあらず、歸路中の所見、秋日平原路、蟲鳴桑葉飛平原を過ぐる時は耳に入るものは蟲聲、眼に入るものは桑葉の飛ぶあるのみ、秋日の寂寥と亂後の寂寥と相一致して來るなり、

喜晴

李敬方

到」台十二旬　一片雨中春　林果黃梅盡　山苗半夏新
陽烏朝展」翅　陰魄夜飛」輪　坐喜無二雲物一　分明見二北辰一

【句釋】喜晴字の如し、到台十二旬台は浙江省の台州府なり、一旬は十日間なり、然らば百二十日、卽ち四ケ月を經、一片雨中春百二十日の間只雨中に春を迎へ、亦春を送るのみ、一片は他の物を雜へざるの意味、林果黃梅盡漸く雨の霽れたる頃、黃梅は已に熟して落つ、山苗半夏新草の苗なぞが發生して半夏生も來るなり、陽烏朝展翅陽烏は日の異名、人は始めて日を見るを得たり、烏の字を用ひしより翅を展ぶと云ふ、晴色を云ふに過ぎず、日中に烏が在る說は支那の古代史已に之を言ふ、陰魄は月なり、夜飛輪今夜は定めし明月が鏡輪を飛ばすを見るべし、坐喜無雲物雲物は事の障礙と爲るものを云ふ、今夜は天の障礙物なし、必ず分明見北辰北極星の晶晶たるを見んと喜ぶ、朝廷に惡人去て、聖朝と爲るを比して云ふ、台に到るは左遷なれば、其の寃の雪がるべき近きに在るを云ふ、

朝に翅を展べ、陰魄夜輪を飛ばす、坐ながら喜ぶ雲物無きことを、分明に北辰を見る、

【略傳】李敬方字は中虔、穆宗の長慶中の進士、敬宗の朝を歷て、文宗の太和中台州の刺史と爲る、

茅山

杜荀鶴

步步入山門　仙家鳥徑分　漁樵不到處　麋鹿自爲羣
石面迸出水　松頭穿破雲　道人星月下　相次禮茅君

步步山門に入れば、仙家鳥徑分る、漁樵到らざる處、麋鹿自ら羣を爲す、
石面水を迸出し、松頭雲を穿破す、道人星月の下、相次いで茅君を禮す、

【句釋】茅山は今日の江蘇省潤州に在る山、大茅と小茅の二山あり、相傳ふ古茅濛字は初成華陽の人、華山に在つて仙道を修し、後、白日に昇天す、其の孫茅盈、茅固、茅衷、皆道を此に修す、步步入山門、仙家鳥徑分一步一步に山門に入る、仙人の住する家只一道の小徑が分るのみ、漁樵不到處、麋鹿自爲羣仙人は佛者と同じく殺を禁ず、漁人も樵夫も到らざらしむ、故に麋鹿の類、羣を爲して悠游する、石面迸出水、松頭穿破雲低處の石面は水が迸り出で、高處の松頭は雲を穿ち破つて聳ゆ、道人星月下道人は仙道を修習する道士なり、星と月とを拜するを以て第一の要道とす、相次禮茅君上席の道人と下席の道人と順次に茅君卽ち仙の祖を禮拜する、大茅君、次茅君、小茅君、是を三茅君と云ふ、已前四首、

詠物

周弼曰く寓に隨つて興を感じ、而して詩を爲るは易し、物を驗し切近にして詩を爲るは難し、太だ近きときは陋、太だ遠きときは疎、此れは皆和易寬緩の中に於て精切なるものなり、今謂く寓に隨つて興を感ずとは、例せば畫に於ける寫意なり、物を驗して爲るとは卽ち寫生なり、意は無形なり、生は有形なり、無形は易く、有形は難し、而して有形を有形そのままに寫すとせば恰かも寫影の如く眞に逼ると雖も、氣魄なし、精神なし、是を以て拙工の寫生は太陋亦太疎、尋常詩人の容易に其の極處に至らざるもの多きを以て知るべし、畫に於ける、吳道子の如く、詩に於ける杜子美の如きに至りて始めて其の寫生の極處に達すと謂ふべし、面目あり精神あり、詠せし其の物をして、微物を微物とせず、天下の巨觀と化せしむ、是の故に杜子美の詠物に至りては、古今上下を通じて其の壘を麾するものなし、然るに周弼は杜を取らずして其の餘の人を取る、周の見處此に存して、其の見處の淺良とに惜しむべきなり、蓋し其の敎科書として兒輩に示すにあれば、深く責むるの要も亦無し、而かも此の集に依て略詠物の何たる一端を知らば、杜の法門に向つて進むを要す、永く此に留まる者は、畢竟周

弼の意にあらず、

山中流泉

儲光羲

山中有流水　借問不知名　映地爲天色　飛空作雨聲
轉來深澗滿　分出小池平　恬澹無人見　年年長自清

山中に流水あり、借問すれども名を知らず、地に映じて天色を爲し、空に飛んで雨聲を作す、轉じ來つて深澗に滿ち、分れ出づれば小池平なり、恬澹人の見るなし、年年長しへに自ら清し、

【略傳】儲光羲は兗州の人、一說に潤州延陵の人、開元中に進士に登第し、又中書に詔して文章を試む、監察御史を歷て、祿山亂後、連坐して貶せらる、集七十卷あり、

【句釋】山中流泉是れ山中の流泉を咏ず、所謂山中流泉を咏ずるものにして、我が興感は極めて寓すると微微たり、山中有流水題目を先づ出す、咏ずる物の本體、借問不知名借問は問ふなり、借は語助、泉に問ふのであるか、人に問ふのであるか、其の點は分明ならず、問ふも流水の名は知らざるなり、水自ら答へざるが故ならん、映地爲天色地上の草色と天上の碧色と相映じて以て清し、飛空作雨聲石に當る處、餘勢空に飛ぶ、之を聞く淙淙として雨聲の如きなり、素隱は云ふ此の流泉は瀑布なりと、瀑布なりとせば、起句を山中有懸瀑と爲さざるべからず、斷じて瀑布にはあらず、高處より落下する泉即ち瀧の類と見るべし、日本人は瀑と瀧との區別を混ず、決して混ずべからず、瀑と瀧とは大に異なるものなればなり、轉來深澗滿右曲し左曲し廻轉し來つて以て深澗の中に滿つ、分出小池平其の支派が四方に出分して小さな池と作る、小池なるが故に波起らず平なり、恬澹は安靜の意味、多く人の事に用ふ、水に用ふる例は此の詩を以て嚆矢とす、無人見山中深く人が到らざる故に此の如き流泉の奇も人は見ず、年年長自清佛敎に自受用法樂と云ふことあり、自分で自分を覺る、他人は預からず、水を咏じて以て我が身の清きに比す、恬澹の十字我が寫意を寫生に寓するなり、

冷井

孫欣

仙闈初鑿井　雲液沁成泉　色湛青苔裏　寒凝紫綆邊
銅瓶向影落　玉甃抱虛圓　永賴調神像　堯時奉萬年

仙闈初めて井を鑿つ、雲液沁して泉を成す、色は湛ふ青苔の裏、寒は凝る

紫綆の邊、銅瓶影に向つて落ち、玉甃虛を抱いて圓なり、永く賴つて神像を調ふ、堯時萬年を奉ず、

【句釋】孫欣は傳未詳、冷井は宮庭内に在る井水を咏じたるもの、仙闈は宮中を云ふ、初鑿井鑿は掘と同じ、初めて井を掘る而して清水出づ、人人喜ぶ所、宮廷と雖も亦然り、雲液は天上の露を云ふ、今以て天の甘露の如く冷にして潔なるを指す、沁成泉沁は音「シン」訓「ヒタス」「ノム」此の泉は天上の雲液が化して成るものと見て可なり、色湛青苔裏湛は音「タン」訓「タタフ」「ヤスシ」「シヅム」なり、今「ヒタス」漬の訓を取る、初めて鑿りし井戸に青苔の字を以てするは、意義通せざるに似たり、而かも事實なりとせば別に議するに及ばず、寒凝紫綆邊綆は瓶の索なり、紫色の絲にて製したる綆が如何にも寒が凝るかと思はる、銅瓶向影落銅瓶が上に吊してあるときは影が井水に落つ、之を汲むときは其の影に向つて落つるなり、奇警なる句と謂つ可し、玉甃抱虛圓甃は「イシダタミ」石疊を云ふ、玉の如き白石にて井戸の周圍を修するなり、抱虛とは上に露はれたる處なれば云ふ、永賴調神像佛敎に水天あり、龍王あり、共に水を守るの神とす、此等の神像、龍王なりや水神なるや分明ならざるが、要するに水を守る神像を傍

に置くなり、石像とも銅像とも解すべからず、亦解する要も無きなり、堯時奉萬年此の如くに冷井出づ、以て神像を調し、此に向つて祈る所は何ぞ、堯の如く天下泰平にして、天子は萬歲と唱ふるなり、堯時の歌に鑿レ井飮、耕レ田食、帝何ニ力於我一哉に由る、「帝力於レ我何有哉は典公に依つて今取らず、

僧舍小池　張鼎

引出二白雲根一　潺潺漲二蘚痕一　冷光搖二砌錫一　疎影露二枝猿一
淨帶二凋レ霜葉一　香通二洗レ藥源一　貝多文字古　宜向此中翻

引いて白雲の根より出で、潺潺として蘚痕に漲る、冷光砌錫を搖かし、疎影枝猿を露はす、淨は霜に凋む葉を帶び、香は藥を洗ふ源に通ず、貝多文字古りたり、宜しく此の中に向つて翻すべし、

【句釋】張鼎は傳未詳、僧舍は寺、寺中の小池を咏するなり、引出白雲根石を白雲根と云ふ、此の小池の水の出る源は石隙より引き出すものなり、潺潺漲蘚痕水の流るる音を潺潺と云ふ、蘚は「コケ」なり、其の蘚の生ずる處に漲る、漲は水の滿ち溢るるなり、冷光搖砌錫此の小池は

寺の砌に接近してあるならん、故に砌下に掛けてある錫杖が波の動搖に隨がつて搖くなり、疎影露枝猿樹枝が密なるときは猿の影も水に映らず、樹枝が疎なるゆゑ、猿の影が水に露はるるなり、奇警言ふべからず、淨帶凋霜葉霜の爲め凋みし樹葉が水面に落ちて、池水は猶ほ清淨なり、香通洗藥源藥を洗ふ源と水が通ずるゆゑ、其の藥香が此の池水にもあるを覺ゆ、貝多文字古西天即ち印度にては經文を貝多羅樹の葉に寫す、此の樹は冬を經て凋まざる樹なり、文字が古なりと云ふは、寺に藏する貝多葉の文字が隨分と古色を帶びたりとの意なり、宜向此中翻此の翻を貝多葉を翻かへせば、鮮かに見えて能く朗讀すべしと解したる人あり、又素隱は此の池中に於て貝多を漢字に翻譯したら宜しかるべしと解せり、單に翻かへすと見たるは淺し、素隱の如く、此の池中に於て翻譯する可なりと解すべきなり、晉の謝靈運が涅槃經を白蓮池の上に於て譯したる事あり、此の意味を以て此の句を讀むべきなり、

聞笛　戎昱

入夜思歸切　笛聲寒更哀　愁人不願聽　自到枕邊來
風起塞雲斷　夜深關月開　平明獨惆悵　落盡一庭梅

夜に入つて歸を思ふ切なり、笛聲寒更に哀し、愁人聽くを願はず、自ら枕邊に到り來る、風起つて塞雲斷え、夜深くして關月開く、平明獨惆悵す、落盡す一庭の梅、

【略傳】戎昱は荊南の人、進士第に登る、衞伯玉、荊南を鎭す、辟して從事と爲す、建中中辰虔二州の刺史と爲る、集五卷あり、

【句釋】聞笛此の詩は一本に李益の作と爲す、題目も「夜登受降城聞笛」とあり、李益は武人なれば、受降城に登り笛を聞きし事もあらん、且詩調も頗る李益に類す、然れども今遽かに斷案を下し難し、姑らく戎昱の作と爲す、入夜思歸切人の感傷は晝にあらずして夜に在り、天地靜寂なる故に感の生ずるは自然の情とす、故里を思ふの情切なるなり、笛聲寒更哀塞の字一本清に作る、清は「スム」なり寒に勝ると思はる、愁人不願聽居人は聽くを願ふ可し、旅人は卽ち愁人なり、何ぞ哀聲を聽くを願はん、自分を指して愁人と云ふ、自到枕邊來邊の字一本前に作る、枕前でも枕邊でも巧拙の異なり無し、笛聲が聽くを願はざる愁人の枕前へ自然と到來する、風起塞雲斷塞上の雲は風の爲めに斷ゆ、夜深關月開笛の曲に「關山月」と稱するものあり、征人が

故郷を思ふの情を歌ふもの、夜深けて此の愁人の枕前に此の曲を奏する音が響く、平明獨惆悵惆悵は「イタム」なり、曉天に到るまで獨「イタム」のみなり、落盡一庭梅落の字本集に飛に作る、曲に「落梅花」と名くるものあり、笛聲の爲めなるか、或は風起の爲めなるか、一庭の梅が飛び盡すと云ふならん、古人も已に戎昱の誤謬を辨せり、今玆に深く論ずるの要なし、

感秋林

姚　倫

試向東林望　方知節候殊　亂聲千葉下　寒影一巢孤
不蔽秋天雁　驚飛夜月烏　霜風與春日　幾度遣榮枯

試みに東林に向つて望む、方に知る節候の殊なるを、亂聲千葉下り、寒影一巢孤なり、秋天の雁を蔽はず、夜月の烏を驚飛す、霜風と春日と、幾度か榮枯を遣る、

【略傳】姚倫は肅宗代宗の時の人、揚州大都督と爲り、參軍に終ふ、

【句釋】感秋林秋林蕭條の狀に感じて作る、感ずと雖も、秋林其の物を咏ずるが主意なり、試向東林望秋なれば西林と爲すが可ならんと思へども、東林が事實とすれば止むを得ず、方知節候殊春夏とは節候の殊異なるを知る、亂聲千葉下風の爲め千葉が亂下するなり、寒影一巢孤僅かに殘るものは烏の巢の孤あるのみ、不蔽秋天雁樹が如何に高きも葉が無きゆゑ、雁の空を行くを蔽うて見えざること無し、驚飛夜月烏樹葉が疎なるゆゑ、月光が入り易く、爲めに宿烏を驚飛する、霜風與春日、幾度遣榮枯此の二句を素隱は解して曰く秋の末の霜風は此の林の榮を與へ、春日は此の林の枯を與ふと、何等の誤謬ぞ、霜風の時は木葉が落盡する故に枯なり、春日の時は嫩葉生ず、故に榮なり、年年歲歲此の如くにして榮枯を遣る、林に托して人の一生を嘆ずるものなり、

杏華

溫　憲

團雪上晴梢　紅明映碧寥　店香風起夜　村白雨休朝
靜落猶連蒂　繁開正滿條　澹然閒賞久　無奈似嬌嬈

團雪晴梢に上り、紅明碧寥に映ず、店は香し風起るの夜、村は白し雨休むの朝、靜に落ちて猶ほ蒂に連り、繁く開いて正に條に滿つ、澹然として閒に賞する久し、嬌嬈に似たるを奈んともする無し、

【略傳】 溫憲は庭筠が子なり、僖昭の間試に就く、有司、庭筠が文、時を刺し、朝士を毀つを以て、抑へて錄せず、後榮陽公、大に之を用ふ、

【句釋】 杏華「アンズ」艷客、及簇花の異名あり、團雪上晴梢樹梢に團團たる白雪が上るを見る、晴れたる日に何ぞやと訝る、紅明映碧寥是れは紅色の花を云ふ、碧寥は天を云ふ、二句共に花の色を咏出す、店香風起夜店は酒店と茶店となり、香氣が風の爲め酒店に滿つ、酒店は必ず杏を栽ゑて其の識と爲す、村白雨休朝曉日に村を望む、村は一白なり、靜落猶連蒂蒂は和訓「ホゾ」「ヘタ」草木が實の本を綴るを云ふ、花は靜かに落つるも猶「ホゾ」を連ねるなり、繁開正滿條是れは盛んに開く態を云ふ、澹然閒賞久餘念なきを澹然と云ふ、之を賞するの久しき、無奈似嬌嬈古の董嬌嬈と云ふ美人も此の花の如くならんと思ふと、我が賞情を奈んともする無きなり、

孤雁

崔塗

幾行歸塞盡　念爾獨何之　暮雨相呼疾　寒塘欲下遲
渚雲低暗度　關月冷相隨　未必逢繒繳　孤飛自可疑

幾行か塞に歸り盡く、念ふ爾が獨何くに之く、暮雨相呼ぶこと疾し、寒塘

下らんと欲すること遲し、渚雲低くして暗に度り、關月冷にして相隨ふ、未だ必ずしも繒繳に逢はず、孤飛自ら疑ふべし、

【句釋】 孤雁雁は羣行すべきもの然るに孤行するは侶を失すればなり、幾行歸塞盡春も過ぎたるが故に、羣雁は陣行を爲し、北塞に歸り盡く、念爾獨何之我は念ふ爾は獨何くに向つて之くぞや、暮雨相呼疾日將に暮れんとする時雨霏霏裏に相呼ぶこと迅疾なり、寒塘欲下遲雁のみならず渾て鳥は處を擇んで下る、是を以て今此の孤雁も何となく躊躇して下らんと欲する遲きなり、渚雲低暗度渚は「ナギサ」「ミギハ」洲なり、此の渚雲が低れて居る邊を暗卽ち靜かに度る、關月冷相隨關山を過ぎるときは唯月影のみ相隨がふ、未必逢繒繳繒繳音「ソウシャク」訓「イグルミ」箭の端に網を付けて鳥を「イグルミ」以て捕ふるものなり、古注に『淮南子』を引て曰く雁蘆を銜んで以て矰繳を避くと、增注に箭に綸あるを矰繳と云ふ、絲を以て矢に系けて射て之を捕ふる具とす、此の如き危き事に逢はざるに、孤飛自可疑羣行して走るなれば或は繒繳に逢はんも、孤飛するには決して此の憂なし、然るに下るの遲く、呼ぶの疾なるは其の意甚だ疑ふべしとなり、石川鴻齋曰く、第三句相呼の字恐くは轉寫の誤ならん、相呼相喚は羣雁の叫ぶを

云ふ、孤雁にして相呼の字穩ならずと、余本集を閲するに相呼失、獨下遲に作る、相呼ぶは唯だ鳴くと見よ、侶あらずんば呼ばずと云ふは、小兒の見論するに足らず、余が知人中にも此の如き見解を抱く人あり、拘泥の限りと謂ふ可し、崔塗は字は禮山、江南の人、光啓四年の進士なり、集一卷あり、

雨

片雨拂簷楹　煩襟四坐清　霏微過麥隴　蕭瑟傍莎城
靜愛和華落　幽聞入竹聲　朝觀興無盡　高詠寄閒情

片雨簷楹を拂ふ、煩襟四坐清し、霏微として麥隴を過ぎ、蕭瑟として莎城に傍ふ、靜に愛す華に和して落つるを、幽に聞く竹に入る聲、朝に觀て興盡ることなし、高く詠じて閒情を寄す、

【句釋】片雨拂簷楹、煩襟四坐清一片雨降り來る、第一我が家の簷楹卽ち「ノキ」を拂ふ、然らば今日まで煩襟なりしも忽ちにして四坐悉く清涼なり、霏微過麥隴、蕭瑟傍莎城霏微と蕭瑟は共に細雨の形容詞なり、麥隴と莎城とは自身行きて見るなるか、或は坐して以て之を想像するのであるか分明ならず、一二の句は我が家に於て見る所の景、而して三四は此の如きの外景其の得失は評家の判斷に任すのみ、靜愛和花落、幽聞入竹聲靜と幽とは意味に於て殆んど同じ、花の落つるは靜に對し、竹の聲は幽に屬す、朝觀興無盡朝來相見て相厭はず、幽興は無盡なり、無盡なる所以は我が主觀の力あればなり、高詠寄閒情俗人雨を見て何の閒情かあらん、詩人なるが故に詠じて以て閒情を寄するなり、已前共に八首、

國譯三體詩終

著作權所有

大正十年三月七日印刷
大正十年三月十日發行

國譯漢文大成 文學部 第六卷 【非賣品】

編輯兼發行者 國民文庫刊行會 東京市神田區小川町一番地
右代表者 鶴田久作 東京市本鄉區西片町十番地
印刷者 中島藤太郎 東京市神田區錦町三丁目一番地
印刷所 神田印刷所 東京市神田區錦町三丁目一番地

發行所 電話神田三二六〇番 振替東京一八五七二番 國民文庫刊行會

